

風見幽香の殺し方【完結】

びゃん丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

四人での夕食。

父と、妹と、そして風見幽香。彼女はもう、当たり前のようにこの家に居着いていた。妹は彼女を「お姉ちゃん」と呼び、父は表情こそ変えないが、毎晩彼女の料理を心待ちにしていた。布団はここ数年で一番ふかふかで、家に帰ってくると温かい食事が待っていて。それを留意してくれるのはかわいい女の子（彼女はこの呼び方を嫌うけど）で。

ただ、俺は彼女を半年以内に殺さなければいけない。さもなければ彼女は一族郎党とことん苦しめて皆殺しにした上で世界を滅ぼし、シメに俺の腸で縄跳びをする。

そういう約束だ。

目次

蝸牛の12月

1 『風見幽香と火遊びとはじまりの一夜(上)』	1
2 『風見幽香と火遊びとはじまりの一夜(下)』	10
3 『あなたのことが知りたいの(上)』	20
4 『あなたのことが知りたいの(下)』	30
5 『2・5者面談(上)』	39
6 『2・5者面談(下)』	49
7 『右巻きの迷宮(上)』	58
8 『右巻きの迷宮(下)』	68
9 『遅咲きの歓迎会(上)』	82
10 『遅咲きの歓迎会(下)』	91

1月の訪問者

1 『そろそろ喧嘩をしましょうか(上)』	102
2 『そろそろ喧嘩をしましょうか(下)』	112
3 『ひとりぼっちの向日葵(上)』	123
4 『ひとりぼっちの向日葵(下)』	134
5 『雪之丞17歳、恋を知る(上)』	149
6 『雪之丞17歳、恋を知る(下)』	160
7 『水面の鶴と花と(上)』	170
8 『水面の鶴と花と(下)』	181
9 『向日葵の産声(上)』	190
10 『向日葵の産声(下)』	202
11 『俺とあんたの長い午後』	211

風見幽香と鶴見ハジメのブチ切れお家騒動。そして2月

1 『最悪の敵 (上)』 222

2 『最悪の敵 (下)』 232

3 『14日 (上)』 242

4 『14日 (下)』 254

5 『錆びた鯨のはなし (上)』 264

6 『錆びた鯨のはなし (下)』 276

7 『鶴見家、最後の晚餐 (上)』 297

8 『鶴見家、最後の晚餐 (下)』 309

9 『太陽の花 (上)』 321

10 『太陽の花 (下)』 334

11 『気分のいい日はいつも雨』 350

3月の吸血鬼失踪事件

1 『燃やす者／焦がす者 (上)』 359

2 『燃やす者／焦がす者 (下)』 375

3 『コーラとドクペと水割り吸血鬼 (上)』 389

4 『コーラとドクペと水割り吸血鬼 (下)』 401

5 『あなたは私とどうなりたいの? (上)』 417

6 『あなたは私とどうなりたいの? (下)』 433

7 『鶴見千晃、(もしくは)TK◆tsuru. c78a(世界)とネット』の片隅で (上)』 451

8 『鶴見千晃、(もしくは)TK◆tsuru. c78a(世界)とネット』の片隅で (下)』 464

9 『歩み続ける限り (上)』 478

10 『歩み続ける限り (下)』 494

11 『朝の町で』 513

ズタボロツギハギ4月馬鹿

- 1 『幻葬（上）』 522
- 2 『幻葬（下）』 532
- 3 『ハジまりをゼロに（上）』 544
- 4 『ハジまりをゼロに（下）』 555
- 5 『紅霧異変（上）』 566
- 6 『紅霧異変（下）』 580
- 7 『ダイ・ハード 0 ⇒ 1（上）』 595
- 8 『ダイ・ハード 0 ⇒ 1（下）』 605
- 9 『産子這う子に至るまで（上）』 621
- 10 『産子這う子に至るまで（下）』 634
- 11 『大きな、大きなひまわりのはなし』 648

『風見幽香の殺し方 日輪の物語』

- 1 『日輪の物語（上—1）』 655
- 2 『日輪の物語（上—2）』 666
- 3 『日輪の物語（中—1）』 679
- 4 『日輪の物語（中—2）』 691
- 5 『日輪の物語（下—1）』 706
- 6 『日輪の物語（下—2）』 721

エピソード

- 『季節は廻って』 741

蝸牛の12月

1 『風見幽香と火遊びとはじまりの一夜（上）』

今日も鶴見家の夕食は四人だ。

メインは器いっぱいブリ大根で、味のよく染みた大根はもろい。利き腕をギプスに包んだ青年が四苦八苦しているうちに妹の箸がそろりと伸びてきて、あえて残していたブリを誘拐していく。

「あ、おい！」

「とろいなあ。あにきは実にとろい。お姉ちゃんの言うとおりだね」

「ケガ人なんだから。少しくらい手加減してあげなさい。沢山おかわりもあるんだし」

「はいはい」

青年の妹はあろうことか実の兄を差し置いて、この家に居着いた『お姉ちゃん』に従順だ。

「そっか。もう冬だもんな」

兄妹間で勃発しつつある冷戦には我関せずを決め込むと、窓の外を静かに滑っていく雪を見つめて父が呟いた。つい数日前までは朝晩コンビニ弁当が立ち並ぶディスプレイの食卓にいたのだ。献立ごときで季節を感じるというのも、無理はない。

「お父さん、今日の味付けはいかがですか？」

「うん。美味しいよ」

「よかった。実は魚を調理するのは初めてだったんです」

顔を輝かせる『お姉ちゃん』に、照れたように顔を背ける父。正直そんなものを見せつけられたところで、兄妹にとっては食欲減退以外の効果はない。それでもとりあえずふたりの喧嘩は中断される。これまでのやり取りがそれを狙ったことなら、彼女は相当なやり手だ。

「ハジメ。あなたはと思うっ？」

「え」

不意に彼女に見つめられて、青年は思わず言葉を詰まらせていた。

家事上手で、妹の面倒を見てくれて、おまけにかわいい。三拍子揃った女の子がいきなり家に居候を始めるなど、未だに信じられない気持ちだ。

「ああ」

うまいよ、と言いかけて彼は押し黙った。目の前には箸で持ち上げられた鱈の切り身がぶらぶらと揺れている。不思議そうに、『お姉ちゃん』は首をかしげる。

彼女にわずかでも心を許しそうになる度に、青年は彼女との間に交わしたとある約束を思い出すことにしている。どれだけのことがあろうと、彼女に心を許してはいけない。

「あーきょう」

彼女は敵だ。

青年は彼女を殺さなくてはいけない。殺せるほど強くならなくてはいけない。

猶予はたったの半年。

さもなくば。



そこは息苦しい場所だった。

炎が立ち込め、あちらこちらで嫌な音を立てて柱が倒れ、立ち並ぶ建材が、ガラスが爆風に吹き荒れる。その中を這いずり回る青年は、まるでハリウッド映画のクライマックスシーンにでもぶち込まれたような錯覚を覚える。

ただしこの場の主役たる青年は至って真人間であって、この場をタフに切り抜けて『仕事でもこんなビルは二度と登らねえ』と抜かすことはできない。彼は決して刑事マクレーンではなく、一介の高校生ではない。少なくとも、この瞬間までは。

爆風で割れたガラスまみれの床に転がった彼の体は、ミキサーにでも切り刻まれたようだった。全身に入り込んだ鋭片。その痛みと異物感に絶えず苛まれる。炎に包まれた高層ビルの中をかれこれ数階分這ってきた。それでも、まだまだ出口は下だ。

なるべく危ない場所には立ち入らないようにして、ヤバそうな付き

合いは極力断つて。そうしていても危ない時は危ない。ヤバい時はヤバいし、もちろん死ぬときは死ぬ。

おまけに人生シメというのに気の利いたセリフも湧いてこない。新たな火の手が上がった。今や彼の全身を支配するのは死の実感と、ひどい息苦しきさだ。息をするだけで喉を焼かれる。肺が焦げる。

「助けて、くれ」

手を伸ばした先の天井ですら、炎の舌に舐められている。

べりりと無慈悲な音を立てて安っぽい作りの薄板が剥がれ、青年の腕を叩き潰した。燃える瓦礫に埋まり、そのまま炎に飲まれていく青年の目に映ったものは。

「いいわ」

場違いに美しい、何かだった。

「あなたを助けてあげる。とりあえず、この場はね」

それをよく見れば、女だった。瓦礫の山を難なく押し分けた彼女の腕に、青年は抱き抱えられる。女の白い指は傷の一つもない。青年はむしろ、助かったことへの喜びよりも焦りを感じていた。

こんな場所に、こんな人物がありうるハズはない。きつと本当に死が近づいていて、これは俗に言うアレだ。ヤバい幻覚かなにかなのだろう、と。

「あ、折れちゃってるから戻しておくわね」

まるで肩についたホコリを払ってくれるようにさりげなく、むしろ一片の優しきすら見せて彼女は折れ曲がった青年の腕を正しい位置に戻した。ぽきんという情けない音は、なぜか業火の中にあっても確かに響いた。

「おおおっ!?!」

脳天を貫くような痛みだった。

「——て、てめえ、何しやる!」

「だってこのままにしておいたら、後々もっと大変なことになるわよ?」

「がああ、いたたたた!　せめて言えよ、痛いってさ!」

「痛いわよ」

「今じゃねえよ！」

だがその痛みが涙に滲んだ視界を正常に戻してくれた。

あたりに敷き詰められたガラスのカーペットと、炎の渦。そして女。何の冗談のつもりか、日傘を携えて、女は確かにこの場にいる。

興奮の中で当たり前のように怒鳴っていたが、それはまさしく奇跡だった。

「もう。助けろって言ったから助けたのに」

どこのどんな神様が遣わしたのかはわからない。

ただ、青年にとって彼女はまさに、地獄の淵に投げ入れられた蜘蛛の糸にも等しいものだった。

「あなた、名前は？」

「俺は………ハジメ。鶴見一だ」

「そう。ハジメ、ひとつ言っておくけれど、ここからはあなたの力ではとかなさい」

さっそく蜘蛛の糸はぶつりと音を立てて切られた。他でもない蜘蛛自身の手によって。

彼女は幻よりもタチの悪い何者なのかもしれない。

「それ、どういうことだよ」

「助けは差し伸べた。ここから逃げ出せるかどうかは、あなた次第」

彼女はハジメに、壁の一つを指し示した。

「サービスで教えてあげるけど、あそこの壁が一番薄いし脆い。もう普通の出口は炎に飲まれた。もちろんわたしが入ってきた場所もね」

つまりは、あの壁をぶち破らないことには決して助からない。女はそう言っているのであった。信じられない気持ちでハジメは壁まで体を引きずっていく。膝に突き刺さったガラス片が体の奥深く押し込まれ、彼は情けない悲鳴を上げた。

力なく、折れていない左腕で壁を叩く。もちろん、コンクリートをむき出しにした壁はこゆるぎもしない。比較的薄いというだけで、满身創痕の人間がぶち破るには手にあまる代物だ。己の血が描いた手形を、青年は呆然と見つめる。

女を振り返ったとき、青年はほとんど泣いていた。

「無理だ！」

「なら死ぬしかないわね」

とことん無慈悲だ。ハジメはありったけの罵声をかすれた声でつぶやきながら、壁に手をつく。もはや腕を振るう力がないので頭突きをかます。一度。二度。結局三度と数えず目眩を起こして仰向けに倒れ込んだ。配管をむき出しにした天井から火の粉が降り注ぐ。この部屋の限界も近い。

ぜいぜいと息を荒げて、ハジメは女を睨んだ。

「なあ、意地悪しないで助けてくれよ。もう一度くらい、いいだろ」

女は積み上げられた鉄パイプの山に指を当てて温度を確かめているようだった。その悠々とした動作により一層焦燥を募らせる。

「おい、アンタも死んじまうんだぞ！」

パイプの山に腰掛けて彼女はうつつすらと微笑んだ。こんな状況でも見る青年の心を揺らすような、蠱惑的な笑顔だった。

「それが？」

「それが……って……」

「少なくともあなたは死ぬけれど。わたしはきつと大丈夫よ。」

もはや彼女は何もする気がないのだ。たとえば、この場で青年ともども火葬されようとも。そのどこまでも超然とした態度に、ハジメは言い知れぬ怖気を感じた。だが、この場は焦りが競り勝つ。

「ふざけん、なよ」

血まみれの体を動かす。右腕が壊れたポンプのように痛みだけを送り込んでくる。

それでもなんとか立って、威勢を張ることだけはできそうだった。

「まだ十七歳なんだぞ」

「そう」

いつものクセで青年はポケットに指を突っ込んでいた。そこにはいつもどおりの硬い感触。そいつをキツく握り締めて体を起こす。目の前には依然として分厚い壁が立ちふさがっている。

もちろん勢いづけて立ち上がったところで、拳を振るうような余裕はない。まるで向こうに聞き耳を立てるように頭ごともたれかかり、

たった一本の指を壁へと突きつける。

「彼女なんかいた試しがない」

「そう」

「勉強はからつきしでそんなに顔がいいワケでもなくて」

「そう」

「家族はほとんどバラバラで妹はひきこもり。母さんは俺たちに愛想を尽かして、俺は毎朝親父が焼いたクソ不味いトーストをかじってる」

「へえ」

壁から体を離し、よろめきつつもその向こうを見据える。それから彼が取った行動について説明するのは、ひどく難しいことだ。意識朦朧とした中で、彼は自分を最強の殺戮マシンか何かと勘違いしたのかも知れない。

「こんだけツイてないのに。どうして俺が死ななくちゃならないんだ。どうしてこんな苦しいままで。一山いくらのモブみたいに死んでいかなきゃいけないんだ」

まるで銃を構えるように人差し指を壁へ突きつける。その爪先に宿るのは炎だ。直径一センチにも満たない、炎の輪が浮いている。輪は二つ。もう一つは彼の左目の中に。

それが一体何を意味するのか、青年には理解できない。だが、その使い方だけはわかった。

「それはあなたがどうでもいい人間だから？」

「違う。断じて俺はそんなんじゃない」

悔しい。ただそれだけの想念が第二の奇跡を起こそうとしていた。

「なら証明して見せて。惚れてあげるわ」

「ナメやがって」

二つの炎の輪が重なる。炎の中に像が結ばれる。壁の像が。

青年の頭の中で見えない撃鉄が引き起こされる。見えない弾倉が回転し、たった一発の透明な弾丸がトリガーを誘う。

「見てろよ。生きて帰れたらお前、ぶっ殺してやる！」

ただ一つ、その誓約だけが。

ただ一つ、その覚悟だけが見える形で成された瞬間。

「——ッ!!」

雷光がハジメの左目から迸った。

二つの炎の輪を通り抜けた圧倒的な破壊のエネルギーが壁を直撃する！

女は穏やかに笑んだ。

「そう。楽しみにしてるわね」

壁に激しく火花が飛んだ。衝撃波が室内をぶん殴り、青年はその勢いで頭から床に倒れこんだ。今や部屋中を覆った炎がそよぎ、ウエーブのかかった女の髪が揺れる。

そして、再び業火の熱と唸りが戻ってきた。

「やったぞ。はは、見たかよ。やったんだぜー!」

なんだかよくわからないが、とにかくよし。

床の上でガッツポーズを作る青年に向かって、微笑みを浮かべた女は壁を顎でしゃくった。自らの勝利を確信しつつ、青年は上体を起す。そして、

「え?」

そこには壁。

何も変わらず、分厚いコンクリートがあざ笑うように佇んでいる。

何も変わらずとは言葉を違えたかもしれない。青年の『ちから』は間違いなく作用していた。彼の指先に浮いていた直径一センチにも満たない輪。それを忠実になぞるように、小さな小さな穴がそこには刻まれていたのだから。

「そんな」

むろん、そんな細道を人体がすり抜けるようなことはない。

壁にすがりついて穴を覗き込む。夜景が遠くに見える。だが、ここでいい眺めが手に入ったところで何の意味があるというのか。奇跡がいつも、自分に都合のいい形で起こってくれるとは限らない。

「畜生、畜生。もう一度だ。もういちど——あああ!」

こんな小さな穴をぶち開け続けたところで何が変わるといえるのか。青年の落胆を表すように指先の輪は収縮し、消えた。

まるで壁の小穴に残りの生気を吸い取られていくようだった。がつくりと膝をついた青年の後ろで女が腰を上げる。火照りに照らされた頬が、わずかに上気しているようにも見えた。

「面白いわ」

もはや抵抗もしない青年を無理やり立たせると、彼女は小さな穴の前に瞳を輝かせた。まるで長らく待ちわびたクリスマスに、最高のおもちやを手に入れた子供のようだった。

「ああ、最悪のジョークだな」

「そうね。でもあなたは本当に面白い。だから、わたしはあなたに決めたわ」

女は片手を穴へと向ける。わずかに上体を反らせると、青年を壁から隠すように下がらせる。

彼女の手のひらから熱く、眩いものが迸る。

先とは比べ物にならない威力の衝撃が部屋は愚か、建築中のビル全体を揺るがした。破片も爆風も不思議と女を避けて飛ぶ。そうすると現れるのは炎の掻き消えた部屋と、大きく広がる夜景だ。

「一体、どうやったんだ？」

ひんやりと冷え切った冬の風が焼かれた体を冷やしていく。

「ハジメのマネをしてみただけよ」

大きな月の浮いた夜空を背負って、彼女は心底嬉しそうに笑った。広げられた両腕が、ハジメを抱き寄せる。そのまま彼女はビルの外へと身を投げ出していた。

「うふふ。やっと見つけた。わたしの」

胃袋を浮かせるような落下感だった一瞬のこと。

気付けば花の香りに抱かれて空を舞っていた。あたりを真っ白な椿の花びらが飛び交っている。それに見とれていると、何の前触れもなく女が手を離れた。

「わあああつ——あ？」

青年は支えなしで空を飛んでいた。どうやら女の浮かせた花びら

自体がどうかかして浮力を保っているらしい。女は慌てふためいた青年の様子がよほどおかしかったのか、くすくすと笑っていた。彼女は青年の無事な腕を引く。

ふわり。まるでテレビでみた宇宙飛行士のように頼りなく青年の体が漂った。女はあくまで優雅に無重力の中を舞う。女になされるがままの青年でさえ、束の間彼女とダンスを踊っているような気分になる。遥か下を流れる夜の町並み、高所の恐怖は消えつつあった。

「なあ、アンタ何者なんだ？」

ふと、疑問を口にする。女は笑った。

「わたしの名前は風見幽香。空を飛べる。ちよつとだけ強い。自己紹介はそれだけよ」

ありえないような言の葉を次々浮かべるのは、ただただひたすらに美しい女。おおよそ常人では持ち得ない美貌を彩る、不可思議な髪色と真紅の瞳。そして幽かな花の香り。

「約束、ちゃんと守りなさいよね。じゃないと暴れちゃうんだから」

2 『風見幽香と火遊びとはじまりの一夜（下）』

「——ですから、何度も言っているじゃないですか。俺は夜遅くにあそこに忍び込んでヤッホーしてただけなんですって。そしてたらの爆発ですよ——いや、疑うのもわかりませんが。火元、完全に潰れたってテレビでやってたじゃないですか。こんなケガで逃げ出せるはずないでしょ」

新庁舎建築現場での謎の爆発と火災。そして唯一の証人であり容疑者であり犠牲者の青年。

彼は眠たげに尋問をやり過ぎつつ、病室の窓から焼け落ちたビルを見つめる。遠くに見える残骸にはシートがかけられ、取材なのか調査なのか、事件から四日経った今でもひっきりなしにヘリが周りを飛んでいる。

「鶴見さん」

「ああ、スンマセン。どうも麻酔のせいかぼんやりしちゃって」

飽きたというのが正直なところである。

「申し訳ない。ですが、これも仕事なので。分かってくれますかね？」

ハジメは無言で刑事の顔を見つめた。それをどう受け取ったのか、彼は鷹揚に頷くと付き添いの若い男に頷いてみせる。壮年の刑事に比べて幾分落ち着きのない彼が慌ただしく書類カバンを漁ると、数枚の写真がベッドの上に振り落ちた。

「あああ」

「何やってんだ、寺田」

顔を覆う刑事を尻目に、手元に落ちたもののうちの一枚をハジメは手に取ってみる。何の気なしそれを見つめて、思わず目を疑った。若手の刑事は泡食ってそれを仕舞い込む。ぼさぼさの寝癖頭。そして、フレームの傾いたメガネ。

頼りない、というのが素直な印象だった。

「そ、それは別件のものにして。失礼失礼」

寺田、と呼ばれた男を白髪 of 刑事が肘で小突いた。代わりに手渡されたものは焼け跡の写真だ。崩れ落ちた外壁を、外側から撮ったもの

らしい。背景に映り込んだ町の俯瞰図を見る限り、かなり高い位置のようだ。

「この場所に、見覚えは？」

「いいえ。あのビルだろうとは思いますが」

「何かピンとくるものでもいいんです。ありませんか？」

こればかりは偽りではない。力になりたいが何も思うところが無い、と言いたげな小市民を出来る限り繕って首を振る。刑事はすんなりと納得した。

「そうですか。分かりました。お疲れのところ我々の調査にご協力頂き、ありがとうございます。おい」

「あ、はい」

「はいじゃないだろ。アレ、持ってきたらうな」

「はいはい」

本当に分かっているのかどうか怪しい寺田が持ち出したものは、カゴに詰め込まれたリングゴだった。どれもつやつやとして、見るだけに甘そうだ。

「ウチの実家が農園をやっています。時々送ってくるんですが最近はやかんのせいかわとも持て余しちゃいましたね。よければ、食べてみてくださいください」

安いパイプ椅子を鳴らして立ち上がると、ふたりの刑事は頭を下げて出て行った。ハジメはその一つを手に取り、見つめる。真っ赤な色を見ていると反射的に思い出すものは炎に包まれた部屋。そして、鮮やかな血のような色をした幽香の瞳だった。

「あいつ、どうしたんだろうな」

もう一度窓の外へと視線を馳せる。不意に手にしたあの写真が、目に焼き付いて離れなかった。



「まんまと食いつきましたね。今井さん」

歩を進めながらも器用にクシを使って寺田は髪を整えていく。壮年の刑事が振り返ると、既にいつもどおりの姿に戻った寺田がそこにいた。バリツと決まった紺のスーツと、キツさを滲み出すような目

つき。オールバックの髪は、岩を粉砕できそうなほどに固められている。

『ろ号飛行物体』か」

今井は件の写真を取り出した。

それは正確には写真などではなく、動画の一部をトリミングしたような、ひどく不鮮明な画像の引き伸ばしでしかなかったのだが。それでもそこに映ったものたちの異様さは十分に見て取れる。

暗い空に輝く無数の光弾と、そこに浮かび上がる、はつきりと人とわかるシルエット。

「寺田、お前本当に鶴見ハジメはこの件に深く関わってると思うか？」
「その可能性だけは十分あると思いますがね。実際、彼が保護された同じ時間に近辺で『ろ号』が目撃されているわけですし」

実際、すべては「もし鶴見ハジメが何かの方法で空を飛べたのなら」という仮定に基づくものでしかない。だが、海千山千の刑事は確かにそれまで平静を保っていたハジメの顔に浮かんだ一瞬の動揺を読み取っていた。

「おい」

「分かっていますよ。もう一度鶴見ハジメについて洗いざらい調べてみます」

昨今市内で目撃され、謎の行動と無作為な破壊を引き起こしては消えていく飛行物体『たち』。これを公安は認識していたが、未だ正式に調査の辞令が下ってはいない。まるで出来の悪いSFのような存在を表立って追い回したくはないのか。それとも、何か別の意図があるのか。

「すまん。こんな捜査ごっこに巻き込まれて」

しかし今井には、この事件にどこか引つかかるものがあつたのだ。そして鶴見ハジメの存在にも。

「昼飯おごってやるから」

「マジっすか!? やった。実は今月ピンチで——」

ようやく捜査に手馴れ、それなりの風格がついてきた若き相棒。しかし寺田がこんな時にみせる表情はガチガチの新人時代に気が緩ん

だ時に見せていたものと何ら変わり無い。今井はふつと笑って病院のロビーを抜けていく。

「お、べっぴんさん」

寺田の視線を追って、今井は怪訝の表情をありありと浮かべた。そこでは。

「ういーんういーん。うふふ。ういーん。うふふふふ」

どこから見ても非の打ち所のない美人が周りの視線そっちのけで自動ドアで遊んでいた。人種不明の赤い瞳を純粋な好奇心に輝かせて、彼女はひたすらういんういんと不気味に呟いている。

「寺田、お前アレを見てなんとも思わないのか」

「え、何がツスか？」

「……なんでもない。そういう患者さんかも知れんから、あんまり見てやるな」

ロビーに居合わせたものたちも、彼女のあまりの異様に恐れをなして声をかけようとはしない。刑事たちもかわり合いにならないようにそろそろと横を抜けていく。

「ういー……あつ」

彼らを感じして自動ドアの開閉が止まり、女が残念そうに声を上げた。じとつと、不平を浮かべた瞳が二人に向いている。

「えっ」

思わず立ち止まった寺田の脇腹を思い切り小突いて、今井は足を止めずに歩み去った。よろめきながら寺田がその後を追う。女は恨めしげにふたりの背中を見つめていたが、やがて本来の目的を思い出したようだった。

「あーあ。さて、と」

不審者の歩みに合わせて、ロビーの人ごみがモーセの十戒のように退いていく。受付に堂々と割り込んだ彼女は、何ら臆面なく微笑むのだった。

「鶴見ハジメに会いたいのだけど」



階下で起こった騒ぎなど露知らず、ハジメはそれをじつと見つめて

いた。

彼の手のひらには五円玉が乗っていた。ただの五円玉ではない。それには穴がなかった。製造過程で起こったミスが原因の、いわゆるエラーコインだ。

「よかった」

彼の宝物が返却されてきた時の安堵といったらなかった。あの火事のさなかで握り締め、そして得体の知れない力に目覚めた時もずっと手の中にあつた硬貨は、手に入れた時とまったく変わらない姿でそこにある。

この五円玉を見ていると不思議な息苦しさが胸を満たす。あるいはその穴が無いというだけでここまで違った物に見えるとは、なんとも不思議だった。

文字通り穴が開くほどに五円玉を見つめる。そうしてどれだけの時間が経ったのか分からなくなり始めた頃、まるで小鳥のつぶみのような控えめなノックが室内に響いた。

ハジメは顔を上げて、ドアへと視線を馳せる。

「どうぞ?」

「お邪魔するわね」

ここまでの穏やかさは一体なんであったのか。スパンとドアが勢いよく開け放たれた。あまりの力に金属製の引き戸が大きくひしやげる。くもりガラスが粉々に割れて散る。

その光景がやけにスローモーションで美しく、青年の瞳に焼きついた。

散らばるガラスもなんのその。お構いなしに病室に乗り込んできたものは。

「お、お、お、おまえは——!」

「久しぶりね、ハジメ。だいぶ具合が良くなったみたいで安心したわ」
「風見、幽香!」

名前を呼ばれて、幽香はくすぐったそうに笑った。

「嬉しい。ちゃんと覚えていてくれたのね」

火中にどうやってか忽然と現れ、壁をたやすく吹き飛ばし、当たり

前のように空を飛んでみせた女のことを忘れる方がどうかしている。彼女が建設現場の近くにハジメを下ろして姿を消してからたった数日のことだったが、それでも青年は奇妙なほどの懐かしさを覚えていた。

「それじゃあ、あの約束も覚えているかしら」

「約束？」

『生きて帰れたら、お前をぶっ殺してやる』

「あ、ああ」

死地で目覚めた超能力。体を奮い起こさせるために叫んだ言葉の中には、確かにそれも含まれていた。だからと言って、命の恩人を殺そうなんて気は起きない。

「忘れてくれよ。あれは、悪かった」

「だめよ」

当たり前でしょ、といった風で女はハジメのベッドの上に腰掛けた。傍らのリングゴを一つ手に取り、くるくると指先で器用に弄ぶ。

「私、あの日からずっと楽しみにしていたんだから。そうでなければあなたなんか残してさっさと帰っていたわ」

きよろきよろ見渡して手近な広告を一枚手に取ると、彼女はリングゴを乗せて軽くつついた。果実にみるみる間に切れ込みが走り、音もなく花卉のように開く。たった一瞬でどうやったのか。おまけにかわいらしいうさぎちゃんカットであった。

「はい、あーん」

幽香の差し出すリングゴを、おずおずと手で受け取る。

「そうじゃないんだけど」

興が覚めたように彼女はリングゴの一口に含んだ。ハジメもそれにならう。

「おいしい？」

「あ、うん」

「じゃあはい、もうひとつ」

またも手でそれを受け取るハジメ。幽香は今度は何も言おうとはせずに、天井の蛍光灯をしばしばと眺めていた。片手ではくりくりと

別のリンゴを回している。細かな切れ込みが縦横に走っていた。

「べつに今すぐつてわけじゃないの。半年。そう、半年あげるわ。あなたが期間内にわたしをぶっ殺してくれればそれでいい」

「だから俺はあんたを殺したりは」

「あーん」

有無を言わず、幽香はハジメの口にリンゴを詰め込んだ。

「お、おい。やめろっ——」

不平も最後まで形にはならない。ベッドの上に体を乗り出した幽香がさらに口にリンゴを押し込んでくる。自由な左腕は彼女の肘の下。幽香は背が高いとはいえ細身である。それでも、彼女の下敷きになったハジメは身動きひとつ取れなかった。

「私ね、下で自動ドアつてもものを見たのよ。何かが通りかかると自分から開くっていうスグレモノでね。ハジメたちには当たり前のもでも、私にとってはまるで魔法」

さいごの反抗に口を閉ざしたハジメの顔の前を幽香の細い指が彷徨う。あろうことか、彼女の指はハジメの鼻をつまむと、息の通り道を完全に閉じてしまった。

「むぐぐ」

「そうそう、ちょうどこんな感じだったわね」

たまらず開いた口の中にどんどん詰め込まれていくりんご津波。病室にくぐもった悲鳴が虚しく響いた。

「やらないって言うならここはあの火事場の延長になるんだけど。どう、やるの。やらないの？」

ハジメが苦しむ様を見つつ、幽香は恍惚の表情を浮かべていた。彼女は楽しんでた。DSである。まごうことなきDSである。青年としてもこんな悪魔にされるがまま、リンゴで溺れ死ぬなんて間拔けな死に方だけはゴメンである。

降参しよう、と意識する前に体が首を縦に振らせていた。

「そう。いい子ね」

気道を返してやる代わりに、彼女は青年の口を手のひらで塞いだ。「食べ物粗末にしちゃダメよ」

屈辱に顔を真っ赤にしてアホみたいにリンゴを噛み砕き続ける青年。その数センチ前で女はうつとりと微笑んだ。

「もちろんタダで殺してもらおうなんてムシのいいことは言わないわ。ハジメが強くなるために力を貸すし、手伝えることならなんだってするわ」

「……今、なんでもするって言ったよな」

心身衰弱したハジメは半ばヤケクソで口を開いた。りんごの汁が飛ぶ。

「じゃあ俺の家庭だ。アレをなんとかしてくれよ。あのバカ妹を部屋から引っ張り出して、オヤジに上手いメシの作り方を教えてやって、俺には——俺は、なんか、イイ感じにしてくれ」

どうせ殺されるのなら、こんなムチャを言ったところでバチは当たらないだろう。

「いいわよ」

だから、幽香があっさりとその願いを聞き届けるなんて展開は想像し得なかった。

「い、いいわよって、どうするんだよ」

「そのうちわかるわ」

満足げに頷いて、さっさと出て行く女を、必死でハジメは呼び止めた。

「なあ待てよ。最後に」

「なあに？」

「もし俺がアンタを殺せなかったら、どうなるんだ？」

「そうね」

幽香はつぶさに考える素振りを見せた。そして、まったく表情を消して顔を上げた。その美貌は変わり無い。だが、まるで彼女は一片のなさけも持たない蛇のような瞳をしていた。

「まずはあなたの家族を苦しめ抜いて殺すわ。次はこの町。次はこの世界。あなたは最後に残しておいてあげる。そのときはいっぱい楽しんでしまおう」

全身の毛穴に針を突き立てられたような錯覚を覚えた。くすりと

笑う幽香は、またいつもの穏やかな笑みを形作っている。

「だから、早く戻ってきてね。こうしている間にもあなたの時間は過ぎていくのだから」

潰れた扉が無理やり閉められてからも、しばらくハジメは緊張を解くことができなかつた。なまじ遊び半分で水責めならぬリング責めをくらうよりも、あのひと睨みには説得力があつた。風見幽香と名乗る謎の女。あいつはやると言つたらやるし、できると言つたらできる。

その本領は、ビルの壁を吹き飛ばす程度では済まないものなのかもしれない。

「マジで何者なんだよ、アンタ」

もはや答えはない。

そして、唐突にのしかかつた重すぎる責任を受け止めるには疲れすぎていく。嵐が過ぎ去つたのだ、とりあえずこの場合はヨシとしようではないか。病人に頭まで使えなんてスパルタが行きすぎやしないかい。うんうん。

「ま、何とかするさ」

とさっさと思考放棄して、ベッドに体を沈めるのだった。



「おかえりなさい、ハジメ」

それからさらに数日を病院で過ごし、家に帰ってくると、風見幽香は当たり前のようにそこにいた。家庭内カーズト最上位、つまりはオカンとしての立場を確固たるものとして。

「あにき、おかえり」

「あ、ああ」

そして、とりあえず自室警備員から自宅警備員にランクアップした妹。

「家がないって言つたらね、すぐに泊めてくれたの」

幽香に耳打ちされる。我が事とは知らずに新聞を読みふける実父の姿を、ハジメは信じられない面持ちで見つめる。まさか彼も自ら死神を家に引き入れたとは思ひもすまい。

もはやハジメにできることは、それが父のスケベ心が起こした行動ではないと祈ることくらいだ。

「あにき？」

そうして風見幽香との奇妙な生活が始まって数日後のこと。ハジメは切り身を前にしている。彼の反応が気になるのか、ちらちらと視線を送ってくる幽香に「うまい」と素直に褒めてやりたくはある。

しかし彼女は敵だ。殺さなければ家族と世界と自分がヤバイ。

「……まづいだろ」

実際置かれた状況は、非常にまづい。

「ちよつと、あにき」

「そ——そう。研究の余地アリ、かしら」

父が眉をひそめ、妹が何か言いたげにしているが、ハジメとしては構ったものではない。幽香は少しだけ残念そうではある。

「もう。あにきなんて放っておいていいよ。マズいならいらねえね。もらっちゃうから」

頬を膨らませてぶんすかど、凄まじいペースで箸を口に運ぶ。器用な怒り方を見せる妹。テレビの野球中継に見入っている父。さつそく台所に立ち、片付けを始める幽香。

「激マズ。ゲロマズ」

残された白米を執拗に噛み締めながら、ハジメは世界でまともな人間が自分ひとりになってしまったような錯覚に捕らわれるのだった。

第一話 『風見幽香と火遊びとはじまりの一夜』 おわり

3 『あなたのことが知りたいの（上）』

宛先：ハジメ

差出人：ちあき

件名：

本文

あにきのガツコー知りたいうて言うからさ、教えといたよ（ニツコ
リマーク）

宛先：ちあき

差出人：ハジメ

件名：Re：

本文

誰に？お前のメールすげーイラつく。主語がお留守。

宛先：ハジメ

差出人：ちあき

件名：Re：Re：

本文

ばかあにきお姉ちゃんにきまつてるじゃん（怒りマーク）

宛先：ちあき

差出人：ハジメ

件名：Re：Re：Re：

本文

授業中に押しかけられたらこま

宛先：ちあき

差出人：ハジメ

件名：クソ

本文

お前なんか大嫌いだ



携帯を握る手に嫌な汗がにじみ出てきた。とりあえず妹には辛辣な言葉を送りつけて、ハジメはグラウンドへと視線を戻す。言わずもがなそこに佇むのは『お姉ちゃん』こと風見幽香だ。

突如としてグラウンドに現れた風変わりな女の存在に、静かなどよめきが昼前のクラスに広がっていた。

「あれ、誰だろ」

「フシンシヤ？」

「でもさ、ちよつとキレーめじゃない？」

少し途方にくれたように彼女が校舎を見渡しているのを確認して、ハジメは安堵に胸をなでおろす。彼の妹は、クラスの位置までは教えられていなかったのだろう。

良くも悪くも目立つ女を見ようと、大勢の生徒が窓際に詰めかけている。いかに彼女の視力がバケモノじみていようとも、見物の生徒に混じって様子を伺うハジメに気付けるはずもない。

そして悲しいことに、ハジメは完全に風見幽香の行動力を見誤っていた。

「……おい、それでどうする気だよ」

幽香が手にとったものを見て嫌な予感があった。今まで当たり前の日常の中に溶け込んでいた物品が、今やまるでジエイソンが持ったナタのごときヤバい代物に見える。

それは何を隠そう、数限前の授業で使われ、どこかのうっかり屋が放置していった通称「白線ひくやつ」であった。

「♪〜」

幽香の鼻歌が聞こえてくるようだった。

彼女はライン引きの蓋を開けると、中に何かを仕込んでいたようだった。やがて一直線に歩き始める。しばらくしてUターンすると、一度線を引くことをやめて間隔をあけ、次の何かを描き始めるのだった。

「文字？」

「うお、すげえぞ」

誰かの発した推測は当たっていた。『つ』『る』という不吉な二字が出来上がるにつれ、白線はやがて緑色の何かに包まれ始める。何かの植物が真冬の乾ききったグラウンドに力強く芽吹いているのだった。先ほど彼女が白墨の中に混ぜ込んでいたのは、植物の種だったのだろう。

いち早くその目論見を察してぞっとした。そして、ハジメはほとんど反射的に大声を上げていた。

「うわあああああ！」

とりあえずはクラス全員の注目を集める。誰も彼も、まるで狂人でも見るような視線を浴びせてくるが気にしてはいられない。今の彼はグラウンドから一人でも多くのクラスメートの目を逸らすことで頭がいつぱいだった。

「ダメだ、みんな！ マジメにやろうぜ。時にはおかしな女が生まれるものだが、べつにいいじゃないか。こんな息が詰まるようなクソ授業中に一人くらい校庭で踊り狂う奴がいたついでいい。それが自由つてやつなんだ。俺たちも俺たちで、自由を勝ち取るためにマジメに勉強」

「つ、る、み、は？」

無情にも文字は出来上がっていく。

身を呈した作戦も失敗に終わった。もはやクラスメートたちはハジメの存在など忘れてグラウンドに出来上がりつつある大文字に見入っている。

もはやここまでか。慌ただしく机を蹴散らしながらハジメは教室を後にする。長い廊下を駆け抜ける彼の全身で、ようやく塞がりかけた傷がシクシクと痛んでいた。退院後の登校初日からなんたる試練を与えられてしまったのか。

横目に見えるすべての教室では彼のクラスと同じ光景が繰り広げられていた。

誰も彼も授業を中断して窓にかじりついている。当然だろう。誰だって窮屈な教室に押し込まれて眠気と戦うよりも、窓の外の非日常

を見つめる方が楽しいに決まっている。

たった一人の青年を除いては。

「クソ、あの女、絶対泣かす!」

家ではイヤでも顔を合わせることになる幽香の存在に青年は辟易していた。

学園生活の中にまで彼女が踏み込んでくるというなら、もはや避難場所は一つ残らず潰されたことになる。何としてでも彼女を阻止して、級友たちに彼女との関係を知られることだけは避けたかった。

下駄箱にたどり着くも利き腕はギプスの中である。靴を履く暇も惜しんで上履きのサンダルをつっかけたまま校舎の影から出れば、寒々とした空の下に見慣れたグラウンドが広がっているはずだった。

だったのだが。

「な」

絶句する。

せつせと線を引き続ける幽香を追うように緑が生い茂る。グラウンドの端に植えられた桜が、紫陽花が、ツツジが緑を取り戻していく。冬だというのに穏やかな日差しの中にいるような暖かさがあたりを満たしていた。まるで風見幽香という一人の女の登場を、その場に存在するすべての草木が歓迎しているようだった。

「効果てきめんね。でもちよつとだけ遅かったかしら?」

振り向いた彼女は実に満足げで、実に意地悪な笑みを浮かべていた。

「て、てめえ、風見幽香ア!」

こみ上げる怒りに青年が我に返って叫ぶ。しかし悲しいかな、そこには情け容赦なく完成した白墨の文字。打って変わって全生徒の注目を浴びるのは、立ち尽くす青年の方だった。

「はい、仕上げ」

ダメ押しとばかりに彼女がぱんぱんと拍手を打つと、膨らんでいた無数のつぼみが一齐に弾けた。嵐のように飛び交う花びらの中、極彩色の花文字が形作るものはもちろん「つるみはじめ」の花文字である。

その中心で、幽香自身も花開くように両手を広げた。

「産子うぶこ這う子に至るまで。とくとどろう覧じろ、風見幽香の花遊び！」
やがて校舎からまばらな拍手が起こり始めた。彼らを煽るように、さらに大量の花吹雪が舞う。今や拍手は全生徒を巻き込む大喝采へと変貌しつつかつた。

舞台女優のようにやり遂げた顔で花たちと一緒に喝采を受ける幽香、とその傍らで騒々しいのはハジメの携帯だ。

ポケットに押し込んでいた携帯がひっきりなしに着信するのは級友たちからコトの種明かしと校庭の女が何者なのかを問いただされたメールである。その一つ一つに返信する言い訳を考えるだけで頭がかち割れそうだった。

「俺が何をした」

謎の熱気に浮かされた校舎からの歓声と着信音がどこか遠くに感じる。そんな青年の襟首をひよいと掴むと、幽香はようやくグラウンドという大舞台から退場したのだった。

彼女たちが去って暫くするうちにすべての花々は幻のように消え去り、グラウンドはまた紙やすりのような荒々しい地肌をむき出しにした。だがしかし、生徒たちの熱気は時計の針が正午を過ぎても醒めることがない。

「そういえば鶴見、どこ行つたんだろね」

そして、渦中の人物があつさり誘拐されたことに皆が気づくまでには、彼らの興奮が収まるよりも更に長い時間を要するのだった。



「はい、お弁当」

幽香が掲げた包みを力なく受け取って、ハジメはするりと紐解き始める。

はじめに目に付いたものはれんこんの肉詰めだった。バランスよく織り込まれた上品な構成。そして、学生のハジメを思つて分量も申し分ない。その上作りたてのお弁当を届けてくれるのは正直嬉しい。だが。

「お気に召さなかったかしら？」

「それ以前の問題だろ。学校であんな大騒ぎ起こしやがって！」

幽香も思うところがあつたのか、口を尖らせて反撃に転じる。

「あなたが意地悪して出てこないのがいけないのよ」

「こちとら授業中だぞ。ホイホイ出ていけるかよ！」

「お弁当、ダメになっちゃうわ」

「知ったことかよ。お前が来たせいで学校まで」

あ、と幽香が声を上げた。

少し離れたベンチの近くに止められたベビーカーの中で子供が泣いていた。この季節でも昼時の公園にはまばらに人がいる。彼らから注がれる視線が、どこか冷ややかな気がしないでもなかった。

「大声出すから」

「ぐう」

子供を持ち出されては勝ち目がない。とりあえずこの場は鉾を収めて、ハジメは幽香に向き直った。正しくは彼女の膝の上の弁当箱に。

「とりあえずこれ、もらっていいか」

「好きにすれば」

口論の尾を引いてか、そつぽを向いてつつけんどんに返す幽香。しかしその視線だけが、落ち着きなくハジメに向いている。感想を求められていることは明白だった。

「……何か、言ったらどう？」

どれもこれも、素直に言えばウマイ。ハジメがこれまで口にした彼女の料理で、そうでないものなど何一つ無かった。幽香は家事全般をそつなくこなすし、おしとやかな居候を完璧に演じている。

それに、彼女のおかげで少しだけ家の状態は良くなっている。

彼の妹の千晃は部屋から出るようになったし、朝食と夕飯には毎回家族が揃うようになった。

雰囲気と言えば、前とは比べ物にならないくらい改善された。

それでも、ハジメは気に食わない。破天荒で、とても人間とは思えない力と思考を持った女が家に帰れば家族の一員として溶け込んでいる。おまけに彼女は来年の5月には大爆発を起こそうという時限爆弾だ。

その異物感とはとても同居できそうになかった。

「まあまあ、だな。不味くないってだけ」

「そう」

こうして彼女の料理にケチをつけることが、ハジメにとってのささやかな反抗なのだろう。

「なら、もうちよつと頑張ってみようかしら」

しかし芳しくない返事にも、なぜか幽香は楽しげだ。

その心理がやはり掴めない。機嫌を取り戻した幽香に見つめられたまま食べる弁当は味がしなかった。

「お粗末さま。さてハジメ」

さつさと食事を終え、学校へと踵を返した青年の頭を幽香は鷲掴みにして、無理やり後ろを向かせる。彼はあからさまにイヤそうな顔をするが、おかまいなしと彼女は続ける。

「さつきの全力疾走を見る限り、体はだいぶ良さそうね」

「いやまだ」

「というわけで今日から本格的に私をブチ殺すために特訓してもらおうわ」

「おい俺の話」

「といつてもはじめからキツイことをしてもらおうってワケじゃないの。まずは毎日」

「はいはいはい、ちよつと待ちやがれよ」

そこでようやく幽香は話を中断した。不満そうに鼻を鳴らしながらも、視線でハジメに二の句を促してくれる。

「俺は学生で日中は授業がある。その次はダチだ。だからどう頑張っても日暮れまでは忙しいんだ。それに毎日こんな堂々と連れ出されたんじゃ、落第しちまう」

「いいじゃない。れつつ落第」

「よかねえよ。あのな、高校生の分際で留年するのがどれだけ恥ずかしいか、お前でもわかるだろ」

幽香は首をかしげる。腕組みする。考え込む。

うんうんと唸る彼女を見てみると、だんだんハジメの威勢もくじけ

はじめる。

「もしかしてお前、学校ってモノを知らないのか？」

「知ってるわよ。新型の寺子屋でしょ」

それは何も知りません、と同意義ではないのか。

そういえば、と。ハジメはこちらで生活を始めてからの幽香がちよつとした電化製品ひとつにもいちいち感動していたことを思い出す。彼女はこの町に現れるまでどんな場所でどんな生活をしていったのか。

「色々違う。つーか寺子屋って」

「寺子屋も学校も、行ったことないから。ほとんど一人だったし」

ハジメが動きを止めた。

「そ、そういう重いこと、さらつと言うなよな」

寒風に髪をかきあげる幽香を見るうちに、だんだんとハジメは居心地の悪さを感じてくる。ひよつとしたら思わず地雷を踏んでしまったかもしれない、という罪悪感から、ちよつとだけ彼女に負い目を感じてしまう。

それが本日二度目の大間違いだった。

「——仕方ない。今日のところは、いいぜ。特訓」

「いいのねっ！　ありがとう!!」

たったそれだけのことが、そんなに嬉しいのだろうか。

彼女はベンチを軋ませて勢いよく立ち上がると、さっそく体をほぐし始める。つられて立ち上がったハジメも、かじかんだ指先を揉んでみた。

「で、何するんだ」

「まずはあなたの実力がどれほどかを見極めたいの。できればあの力を使って欲しいんだけど、今出来るかしら？」

あの力。まさしく火事場で見せた馬鹿力を思い出す。

しかし青年の気力を振り絞って発揮できた能力はコンクリートの塊に小さな穴を穿つくくらいが関の山。馬鹿力も、超能力も、いささか名前負けだ。

ハジメは業火の記憶を思い出しながら指を構えてみる。子供がふ

ぎけてそうするように、銃の形をとった左腕。指先の炎と、燃えるように熱い左目の感覚を引き出そうとする。

「いや、ダメだ」

しかし、今の彼にあの力は再現できそうになかった。頭の中から伸びた糸が、伸ばした指先に繋がっている感覚はある。しかし決定的な何かがこの彼には欠けているような気がしてならない。

彼がいくら集中しても、指先からは煙の一筋も上がらなかった。

いささか残念そうに、幽香は肩をすくめる。

「となれば実地でああなたの力を見るしかないわね」

「とうとうっ」

「肉弾戦ってことよ」

それまで羽織っていたハジメの妹——千晃ちあきのコートを脱いで、幽香は手招きした。

「いらっしやい。とりあえず、実力の千分の一くらいで相手してあげる」

「バカにしてんのかよ」

「まさか。あなたにこれ以上ケガしてほしくないだけよ」

呆れてハジメは幽香の様子を観察した。

千分の一なんてものが厳密な数字なのかどうかはさておき、彼女は相当力を抜いているように見えた。それは、構えることなくだらりと垂らされたままの両腕が証明している。

いくら悪魔のような女だからとはいえ、無抵抗の幽香を殴ってもいいものかと青年は考える。だが彼女に申し訳なく思うより先に、リングの思い出が、グラウンドの花文字が、拳を固めさせていた。

「何があっても文句言うなよな」

「いいわ。殺す気でかかってらっしやい」

せつかくの恨みを晴らすチャンス。ここで逃さしておくべきか、と拳を振りかぶったハジメが突撃する。やはり幽香は構えない。殴られるというのに、むしろ彼女はハジメを慮っているようにも見える。その様子がますますハジメに勢いをつけた。

「その余裕もここまっつ」

空気が破裂した。

ハジメの目に見えたものは幽香の周囲の空間が衝撃で歪む瞬間。そして、直後に自分の顔面をぶん殴った重い一撃。

青年が放物線を描いて飛んでいく。美しい鼻血のアーチを描きつつ落ちる先はぎゆう詰めのゴミかごだ。

呆れ顔の幽香がそれを見送る。

「次は一万分の一かしらねえ」

見事なロングシュートが決まった瞬間、それまで泣いていた子供が上機嫌に笑い始めたのだった。

4 『あなたのことが知りたいの（下）』

「俺の能力があればだな、一発でどかーんとだな」

「そうねそうね。ハジメは何も悪くないわね。私が強すぎたわね」

あれから三時間にわたって繰り広げられたすったもんだの結果は惨憺たるものだった。ちなみにハジメが実際に戦っていたのは僅か半刻のことで、残りの時間は呆然としているか痛みに悶えているかのどちらかだった。

そんなこんなで時間だけが過ぎ、二人は夕暮れのアーケードを歩く。

この時間の小腹にはたまらない揚げ物の匂いに何度も足を止めつつ、ハジメは幽香の後を追う。

「はい、ハジメ。いっこあげるわ」

「どうしたんだよ、これ」

「さっきお肉屋さんでもらったの。サービスだった」

毎日の献立に凝る彼女が足繁く通ったおかげで、すでにこのあたりで幽香はちよつとした有名人だった。そうしている間にも彼女は何件かの店の軒先に人のいい笑顔で手を振り返している。

そうしていると、見る見るうちに彼女の抱える惣菜の山が大きくなっていくのだった。

『鶴見さんちの綺麗なお嬢さん』の数歩後ろでハムカツサンドをかじりながら、ハジメは自分がどう見えるのかと考えてみる。下僕か、追っかけか、それとも単なるオプシヨンに過ぎないのか。

「男なんだから、少しくらい持ってよね」

言われるがままに買い物袋と貰い物を引き受けていると、青年自身でも小間使いになってしまったような気がしてならない。そんな傍目の力関係が嫌で、ハジメは幽香に歩調を合わせる。

「お前どこから来たんだ。どうして半年なんだ。どうして俺があんたを殺さなきゃならないんだ」

ちらりと横目にハジメを見て、幽香は自らの唇に指を這わせた。

「それはご褒美にしましょうよ」

「なんだって?」

「ハジメがすっかり成長してくれたら、答えてあげるわ」

ミステリアスな方が、女って素敵でしょ。嘯いて幽香は上品に笑ったが、自分の命がかかっているハジメとしては全く笑えたものではない。憤然としてついてくる彼を見て、幽香はまた何が嬉しいのか足取りを軽くする。

「でも最後の一つについて答えるなら、嬉しかったからよ」

「わからん。おまえの神経が理解できん」

「だって私の故郷にはふざけても『お前を殺してやる』なんて言ってくる人はいないのだから。期待したくなっちゃうじゃない」

うっとりとはく幽香を見つめて、ハジメはげんなりと肩を落としました。やはり、彼女の思考は常人のそれとはいささかズレた場所にあるような気がしてならない。

言葉は通じているはずなのに、時々異国の人間と話しているような錯覚を覚える。

「うわ」

ぼんやりと思考に浸って歩いていると横からぬうつと犬の顔が現れたので、思わずハジメは飛び退いていた。

「くうん」

ふと気を抜いてしまえば見過ごしてしまいそうなほどの細道から、骨と皮ばかりに細った犬が上半身だけを覗かせているのだった。

「な、なんだ、お前。野良か」

飢えた視線はハジメの持つ惣菜に向いていた。ねだるような視線に耐え切れなくなり、つつい食べかけのサンドイッチを放つてしまふ。よほど腹が減っていたと見えて、野良犬は一心不乱に食いつきはじめた。

「よしよし。よっぽどハラ減ってたんだな」

その言葉をどう受け取ったのか、犬はぺろりと舌を出して首をもたげた。犬がハジメの手に触れる寸前、幽香が鋭くローファアのかかとを鳴らした。

犬も、ハジメも、身を震わせて彼女を見上げる。

「ねえ、どうせならもつともつと弱い相手と戦ってみるのはどう？」
彼女の双眸はただ静かに、痩せ犬を見据えている。怯えたように鼻を鳴らして、犬は再び暗がり消えていく。

それだけで、ハジメには彼女が何を考えているのかは察しがついた。

「マジで言ってるのか、お前」

ひたすらに、女は無言だった。

まるで視線が吸引力をもっているように、うつかりと目を合わせてしまったハジメはそこから視線を逸らすことができなくなる。

どれくらいの時間が経ったのか。つい足が竦みそうになった頃、幽香はふっと口元を緩めると、冗談めかして笑った。途端に薄ら寒い空気がゆっくりと解けていくのが分かる。

「なんてね。ちよつと町のゴミ掃除でもしようと思っただけよ」

「ゴミ掃除って」

路地の奥にはうつすらと輪郭が見える。犬は地面にぺったりと腹を付け、小刻みに震え。まるで嵐が過ぎ去るのを待っているかのようだった。

「にしてもエサだなんて、褒められたものじゃないわね」

「野良犬を叩き殺すのは立派なことだったのか？」

トゲのあるハジメの物言いにも幽香は眉一つ動かさない。

「そうは言わないけれどね。でも、変な情けは控えておいたほうがいいわ。こういうのが家までついてきたら、きつと大変なことになるわよ」

「厄介者なら一人で十分だもんな」

今度はハジメが先に立つと、家を目指してさっさと歩き始めるのだった。

「ねえ、ちよつと」

とにかく彼女の話を聞いていると気分が悪くなりそうだった。さっさとその場を後にする青年の後を追う幽香の背後で、あの犬はまた路地から顔を出してハジメを見つめていた。

「くうん」



「おかえりー」

荷物を抱えてリビングに入ると、すでに風呂に入った千晃がタオルを被って雑誌に目を落としていた。

「あにき、あのメール何かあったの？」

「何も。学校から電話とか、ないか」

「ううん。あ、そういうえばお父さん遅くなるって」

「どうやら無断下校はまんまと見過ごされてしまったらしい。」

台所に立ったハジメが冷蔵庫を開けてドカドカと無秩序に買い物をつ突っ込んでいくと、隣から手を伸ばした幽香が、器用に欲しいモノだけを抜き出していくのだった。

「今日の晩メシ、何」

「そうねえ。寒いしお肉あるしで、煮込みハンバーグなんてどうかしら？」

返事の代わりにハジメは幽香に買ったばかりの挽き肉のパックをぶつきらぼうに渡してやる。幽香はそれを受け取って鼻歌混じりに仕度をはじめめる。

「すぐ作っちゃうから、待っててね」

と、彼女にぴったりくっついて離れないのは千晃だ。

「危ないわよ」

まとわりつかれて、幽香は包丁を置いた。千晃はそんなのお構いなしとマイペースに甘え続ける。迷惑そうな顔をしつつも決して振り払わないのは幽香の優しさなのか、それともやはり演技なのか。ハジメには判別がつかなかった。

「お姉ちゃん、いい匂いする。花の匂いだ」

背中に鼻面を押し付けられて、幽香は困ったように笑ってハジメを振り返った。その背後から威張るような笑顔で覗き込んでくる千晃。

「あにき、羨ましいい？」

「何がだよ」

どこことなく居場所の無さを感じて、ハジメはリビングへと戻ってくる。ソファの上に置かれた千晃の携帯やら雑誌やらを邪険に床へと

蹴落とすと、テレビのチャンネル廻りを始めるのだった。

「お、やってるやってる」

地方の局では未だに例の建設現場での爆発事故について取り上げていた。必死の原因究明は難航。事故か、はたまたテロなのか。不安を煽るようなテロップとアナウンサーの必死ぶりも、どうしてか今はハジメの心を上滑りしていく。

そうして焦点を合わせずに画面を見つめていると、湯気の立つ皿が次々とテーブルに運ばれてくるのだった。

「む」

一口食べて、ハジメは思わず声を漏らしていた。まるで魔法でも使ったように短時間で出来上がったハンバーグは、信じられないくらい美味かった。

気付けば皿は綺麗になっていて、代わりに向かいから期待の目で見つめてくる幽香がいた。

「どうっ？」

今までにないハジメのリアクションに、幽香が隠しきれない興奮を滲ませている。答えあぐねる兄へと千晃がちらりと視線を送ると、噛み付くように吐き捨てた。

「ほんとさ、こんな意地っ張りの相手なんてしなくていいんだよ」

「だって悔しいもの。それに、ハジメみたいな意固地を『うん』って言わせたら気持ちいいでしょ？」

「お姉ちゃんって変わってるよね——あ、いいよ、今日はアタシが片付けるからさ」

椅子から腰を浮かせた幽香から、千晃はお盆を奪い取った。

「そうっ？」

普段の千晃が手伝いを自ら申し出ることは少ない。

それだけに幽香は一瞬不思議がる素振りを見せたが、素直に後始末を任せるとリビングを後にした。

「お姉ちゃんに何か恨みがあるワケ？」

実の妹である。彼女の振る舞いから、こうした話が来るのだろうか。ハジメは予想していた。

「ある」

だからこそ即答する。大げさに呆れてみせる妹のリアクションもとつくの昔に頭の中で再現済みだ。続く言葉も用意してある。

「あの女のどこがいい？」

どうせきれいだから、とか。飯がウマイから、とか。そんな答えが飛び出してくるのだろうと踏んでいた。

「部屋から連れ出してくれたから」

それだけに、やけに真剣ぶった面持ちで妹が口を開いた瞬間、ハジメは驚きを隠せなかった。そして、その言葉にも。

「お姉ちゃんを好きになった理由なんて、それだけだよ」

馬鹿にした笑いを繕って、テーブルを立つのが精一杯だった。千晃は逃げるようにリビングを後にするハジメを罵倒するでもなく静かに片付けを始めるのだった。

「まいったな」

脱衣所のドアを閉めて、ハジメは思わぬ反撃に跳ねた心臓を落ち着かせていた。もちろん千晃が引きこもった後、彼が手を出さなかったわけではない。

「あいつ、一体何をしたんだか」

父とハジメで手を尽くしてそれでも部屋にこもったままの千晃を、幽香はたった数日のうちに引っぱり出してしまったのだ。

とにかく波乱の一日をなんとかやり過ごしたという安堵感が警戒心を完全にオフにしていた。ろくに脱衣所のカゴも確認せずですっぽんぽんになると、風呂場の扉を開け放つ。

「お」

「あ」

それが三度目の間違いだった。



「反省なさい」

リビングにて。ソファの上、ぽんぽんに頬を腫らしたハジメに、寝巻きに着替えた幽香が氷のうをあてがっている。彼女が咄嗟に繰り

出した一撃の威力は尋常ではない。唇の端は切れて、固まりかけた血がこびりついている。

「首がすつとんでないだけありがたく思うことね」

「悪いのは俺じゃない。お前が無用心だからだ」

敢えて言うなら湯けむりが邪魔だった。そうでなければせめて地獄から鬼の首一つ持って帰れたものを。今回ハジメはただの見せ損であり、殴られ損であった。

「あなたが悪い」

「お前が悪い」

「あなた」

「お前」

「……ふん、だ」

ぐいと氷のうを押し付けられて、ハジメは呻いた。

肩をいからせてリビングから去っていく幽香の後を追いかけていくのは千晃だ。実兄よりも義理の姉にべつたりの彼女は、こここのころよく幽香と同じベッドで寝起きしている。

「ばかあにき」

言い返そうにも、ハジメが風呂覗き犯であり、露出魔であることに変わり無い。

「けだもの」

ここぞとばかりに追い打ちをかけると、彼女は騒々しくドアを閉めて出て行ってしまふ。リビングにはしんとした静寂が訪れた。

「お前が、悪い、間違い、なくー！」

足音が遠ざかるのを確認してからドアに向かって無意味に凄んでみるが、当然答えなど期待できない。

すぐさま二階の自室へ向かおうにも途中で幽香と千晃に出くわすのはどうにも具合が悪いように思えて、仕方なしにソファに体を沈めた。妹が使ってそのままだったひざ掛けを引き寄せ、布団がわりに被る。

「死ね」

天井を見つめ、そこに殺すべき相手の姿を描き、指を伸べる。

やはり『能力』が現れることは無い。幽香の前では強がつてみせていたが、正直なところ、ハジメの心は早々に折れそうだった。彼の能力は眠ったままで、おまけに風見幽香には指一本触れることができない。

仮に何かの奇跡がもう一度起きて例の指鉄砲が使えたとしても、風見幽香を打ち倒す想像すらできなかった。

「あんなバケモノ、俺に殺せるのか？」

壁にかけられたカレンダーへ視線を移す。

数日後についた大きな赤マルに、三者面談の文字。今までのハジメは父の仕事が忙しいことを理由にこうしたイベントからは逃げてこられたが、今度ばかりはそうもいくまい。

担任の老教師からは『例え一人でもいいから来い』と、言われていた。

進学か就職か。それ以前に、翌年五月に立ちはだかる巨大すぎる壁。その影に隠れて、将来像なんて、とてもじゃないが見通しがない。

「あいつを連れてって『コレが俺の進路です』って言ったら、センサー笑うかな」

やけっぱちな笑いを漏らして、ハジメは目を閉じた。幽香たちが寝静まるまで少し休むだけ。そう決めて呼吸を落ち着けるうち、すとんと眠りの中に落ちてしまうのだった。

深い寝息を青年が立てはじめた頃合を待って、リビングに現れたのは幽香だった。

「風邪引くわよ」

彼女は持ってきた毛布を広げると、ハジメを起こさないようにそつと掛ける。首元まで毛布を引き上げた瞬間、ハジメは小さく呻いて寝返りを打つ。肩を震わせた幽香はしばらく動きを止めると、彼の様子を伺った。

ハジメはやがて、元通りの寝息を立て始める。

「び、びっくりさせないでよね、もう」

ほっと一息ついて、幽香はハジメの枕元に腰を下ろした。

まじまじと、その顔を見つめる。

彼女の面持ちからではまったくその意図を読み取ることにはできない。ハジメが思うように、やはり彼女は血も涙もない、人の皮をかぶっただけの怪物なのかもしれない。ただ、

「おやすみなさい」

リビングの明かりを消して去ろうとして、彼女は一度振り返った。

その目はどこまでも優しい。



それは長らく鶴見家の前で、すべての部屋の明かりが消えるのを辛抱強く待っていた。そして、ようやく訪れた沈黙の中でゆらりと立ち上がる。

「くうん」

街灯の下に現れた、まるで骨と皮しか無いようにやせ細った犬。その体がふわりと不自然に浮いた。ぶらぶらと揺れる前足の向こうには何も無い。まるで、下半身をまるごとどこかに置き忘れてきてしまったように。

「くうん」

結局、この日一番の間違いは何だったのだろうか。

それを知る者はこの場にはいない。どこまでも犬のようで、決定的に犬とは言えないソレが去った後には黒々とした闇が立ち込めていくのみであった。

第二話 『あなたのことが知りたいの』 おわり

5 『2. 5者面談（上）』

窓の外には灰色の寒空。

暖房から吹き出すホコリとチョークの匂い。

手狭な部屋にはど真ん中に仕切りのように長机が置かれ、飾り気のないパイプ椅子が進路相談室の設えの寒々しさを一層引き立てている。

嫌々の三者面談がついに開始されたのだった。

「自慢じゃないですけど、将来の展望なんて真っ白です」

進路指導の教師が正直が一番いいと言うので思いのままをぶちかましてみたところ、壮絶な説教が開始されたのであった。

「やりたいこととか入りたい会社は無いのかね。今すぐ始めないと、間に合わないものは間に合わない。それが無いなら、早々に就職したほうが安定する」

「とりあえず進学してみればいいじゃないですか。夢とか希望とかはその過程で見つかれば」

「もうちょっと成績について考えてから言え。その、鶴見さん。家族で話し合ったりはしないのですか？」

そしてなぜか、ハジメのすぐ隣には幽香が控えているのだった。

時と場合をわきまえていますよ、と言いたげな黒いフォーマルなスーツを嫌味なく着こなしているのが、かえってハジメの鼻につく。

『お父さん、よろしければ私が保護者役ということ。いかがでしょうか』

『うん』

そんな馬鹿げた幽香の申し出を二つ返事で許した父に対する怒りを、彼はポケットの中の五円硬貨にぶつける。穴のない、のつぺりとした表面に親指の爪をぎりぎりどねじ込む。

「彼はどうしてか、ずっとこうした場から——言葉を悪くすれば逃げていますね。今日有意義な話できたのは、鶴見さんがわざわざ出席いただけたおかげです。いやあ、それにしてもお若い」

「あらあらうふふ」

今ハジメにできることはたった一つ。

隣に座った爆弾がいつものように突拍子のないことをしでかさな
いようにと全身全霊で祈ることくらいだ。

「最近のコはどうも就職、と言われると選択肢が狭められるようで抵
抗があるようですねえ」

どうした魂胆があるやら、面談が開始されてから幽香はニコニコと
愛想のいい笑顔を浮かべたまま相槌を打ち続けていた。

「そうかもしれませんわね」

しかし彼女が何かコトを起こすようなこともなく、ただただ、押し
付けな面談は続く。

あまり学業で伸びの見込みがない不良物件を、彼はなんとかしてど
こかの会社に片付けたいようだった。

先の分かり切った無為なやり取りが果てしなく繰り返されると思
うとハジメは窒息感に襲われる。

適当に話を聞き流して、ポケットのなかでコインを回し続ける。変
わらず穴のない五円に親指を突きつける。押し当てる。

幽香が一層優しく微笑んだ。

「確におっしゃるとおりですわ。将来のことは分からない。だけ
ど、筋道は決めておかないと。そこはとて同意できます」

「でしょう。そもそも、進学といっても」

これまでの面談がよほど手応えにかけるものだったようで、小気味
よく頷く幽香に、彼は一層機嫌をよくしたようだった。脱線しつつあ
る彼の熱弁を遮ったのは、ばしやりと椅子が倒れた音だった。

「そのう、何か？」

幽香は立ち上がって遠慮のない伸びをひとつ。スーツ越しに、彼女
の恵まれた体の線が浮き出る。たっぷりと間をおいて、彼女は口を開
いた。

「いえ。にしても数十年生きてただけの青二才がよく喋るなあ、と思っ
ただけですわ」

「はっ。」

呆氣にとられる二人を見つめる彼女は、スイッチを切り替えたよう

な真顔だ。それからふつと笑って、ハジメの手を引く。

「あなたがどう思うかは勝手だけれど。将来はハジメが自分で決めることよね」



「あ、こないだの。あれスゴかったね」

見知らぬ下級生の言葉を聞き捨てつつ、今や全校生徒に名前と顔が知られるところとなったハジメは廊下を進む。擦り切れ、あちこち剥がれかけたサンダルが立てるのは、ぺんぺん、と。どこか間の抜けた音だ。

「余計なお世話だったかしら?」

隣を歩く幽香が目配せした。

「いや」

青年をあの息詰まりする空間から助け出してくれたのは幽香に他ならない。

「おーす」

線の細い美青年と、その影に隠れるようにしてやってくる、ひどく小柄な女子生徒。

「なんだ、ユキにエリカじゃないか」

親しげに手を振って歩いていくハジメを見て、幽香は意外そうに片眉を持ち上げた。

片方の青年、ハザマユキノジョウ狭間雪之丞は通称を吸血鬼といった。

それは決して肌の白い美青年をやっかみ混じりに呼んだものではなく、彼がテスト前になると夜な夜なノートを写させると友人の家をはしごすることから付けられたあだ名である。勉強ができないもの同士、ハジメとは仲良くやっている。

「なあ、その——こないだの子だろ?」

この場に来てから彼の視線は、幽香に釘付けだ。

「ハジメ、後生だ。俺にその女性を紹介してくれ」

女性と言われて、それが幽香であることに気づくまでハジメは幾ばくかの時間を要した。彼のなかで幽香は幽香でしかなく、女性というよりはあれとかそれとか死神と言われた方がしっくりくる。

「こいつは俺のおばさあっちちち」

サンダルからむき出しのつま先に、幽香のかかどが容赦なく叩き込まれた。目尻に涙を、ソックス越しにうつすらと赤いものを滲ませて、ハジメは幽香に何事か耳打ちする。

「認める」

腕組みした幽香が、こくりと頷く。

「お、おばさんってことにして付き合ってもらったんだ、面談。実際はイトコなんだけどさ。名前は幽香。風見、幽香」

「だよなあ。歳が近すぎるぜ。あ、俺は雪之丞っていいいます。こいつは江梨花」

「ハジメ、足、それ」

江梨花^{エリカ}の視線とじくじく痛む足の親指。じろりと幽香を睨みつけるハジメだったが、彼女はどこ吹く風だ。

「つうか今年の進路指導って平田だろ？ お前、よくこんな早いうちに戻ってこれたよなー」

ハジメが手に持ったファイルの中身は成績表や模試の結果が雑多に詰め込まれている。その意味するところをいち早く察した雪之丞が感心した様子で顎をなげた。

「ああ。こいつがやつつけてくれたからな」

「マジで？ じゃ、じゃあ幽香さん、俺の面談も引き受けてくれませんかね」

「いいわよ？」

「いや、ダメだし」

だよなあ、と雪之丞が肩を落としたのは一瞬のこと。すぐさまいつもどおりのお気楽な問題児の顔を取り戻すと、幽香に掴みかからんばかりの勢いで詰め寄った。

「それよりどうですこの後、お食事でも」

「あら。積極的ね」

「あ、そうだ。それがいいな。それでいこう」

ハジメがぽんと手を叩いた。幽香と雪之丞は顔を見合わせる。

「面談の礼に、最高にウマイラーメンをおごってやるよ」

「おいおい、デートにラーメンかよ。しかもおまえの言ってる店、『ス
ケキヨ』だろ?」

「へえ」

料理の話を持ち出されて、幽香が興味を示した。

「そのお店の味、ハジメをうならせるヒントくらいにはなるのかしら」
「じゃあ決定な。千晃のヤツには連絡しとくからさ」

メールを打ち始めるハジメの背後、おずおずと身を乗り出すように
して幽香の様子を伺っているのは江梨花だ。彼女に気づいて幽香が
愛想よく手を振ると、彼女は小さく悲鳴を上げて隠れてしまう。

「あら、さっそく嫌われちゃったかしら」

そういうことじゃないですけど、と。江梨花は消え入りそうな声で
呟いた。それからはごしよごしよと形にならない言葉を口の中で転
がすだけだった。

「おごりって、俺たちもタダでいいんだよな?」

「ぎげんな乞食。おごって欲しけりや平田ぶん殴ってきやがれ」

と、仲良く四人並んで校門を出る。

しばらく歩けば、いつも鶴見家唯一の料理上手である幽香が通う
アーケード街が、うらびれ、錆びれたゲートを開けて待ち構えている。
そこを過ぎれば天窓から夕日の差し込む、居心地のいい田舎商店街が
広がっているのだった。

「幽香さんってすごいね」

江梨花が驚嘆の声を漏らす。

相も変わらず幽香は人気者だ。こうしていても夕飯の献立は頭の
片隅にあるようで、世間話をうまく盛り上げつつも買い物を着々と進
めていく。今日も今日とでサービス品がもりもりと彼女の買い物袋
に突っ込まれていくのであった。

「外ヅラだけはいいいからな」

中身はとんだバケモノだけどよ、と心の中で叫ぶ。幽香はそれを察
してか、とてもいい笑顔で振り返る。

「いいなあ、幽香さん」

何も知らない雪之丞が、惚けきった顔で指をわきわきさせた。

「あの人さ、一体どっから来たんだ？」

「俺も知りたい」

答えたハジメに、雪之丞は首をかしげる。しかし彼の怪訝も、大きな買い物袋を手に戻ってきた幽香によって打ち消されてしまうのであった。

「持ちますよ」

「ありがとう。ユキ」

わずかに上がった幽香の語尾に、彼は俄然張り切って先陣を切る。それをニコニコと見つめる幽香の瞳の奥底に底知れぬ恐ろしいものを感じるハジメだった。

「女って怖い」

「うん」

隣で頷く江梨花にツツコミを入れるべきかと青年が迷っていると、幽香が歩調を合わせてくる。

「うひゃ」

江梨花がハジメの背後に隠れた。

「ところで、ラーメンってどういう食べ物なの？」

幽香がなかなか難しいことを聞いてくる。ラーメンと一口に言っても多種多様で、その中でも、これから行く先である『スケキヨ』の出すものは異色のしろものであった。

「そもそもスケキヨのってラーメンじゃねえだろ」

すかさず雪之丞が口を挟んでくる。

「なにそれ。別物なのにラーメンの説明でわかるはずないじゃない」

「だいじょうぶ、ラーメンです。ユキが言いたいのは、ただそれがラーメンとかけ離れているからちよっと他の料理なんじゃないのってだけの話で。でも厳密に言えばスケキヨはスケキヨであってラーメンではなくて」

それまで隠れるばかりだった江梨花が熱のこもった口調で説いてくれるのだが、当の幽香は一層当惑するばかりだ。

「待て待てこんがらがってきたぞ」

頭を抱えたところで、ハジメはふと一本の細路地に目を惹かれた。

「どした？」

雪之丞の問いかける声がやけに遠い。

その黒々とした壁と、張り出した室外機やらゴミ箱の列。なぜか、薄汚く湿った小路がどうしようもなく居心地良いものに見えた。足は素直なもので、すでにふらりと一步目を踏み出している。

「ハジメ」

彼が奥に見覚えのある小さな影を見た瞬間だった。

幽香に肩を掴まれて、途端に町の喧騒が戻ってくる。彼女の背後には、怪訝な面持ちでハジメを見つめるふたりの級友の姿。

「だめよ」

路地へと目を戻す。そこはやはりというか、なんの変哲もない、ビルとビルの隙間でしかない。半ば脅迫的に奥へと誘っていた違和感も、今ではすっかり退いている。

非日常が当たり前のような顔をして日常へと踏み入ってくる。はじめて幽香の力を目にした時の様だった。それも、今回はひどくイヤな感じがする。

「俺、なにを」

「いいから」

軽くハジメを背後に回して、幽香は路地の奥へと目を向ける。

「幽香さん、そっちになんかあるンすか？」

「いえ。ただの野良犬か何かだったみたい」

変わらぬ様子で三人のもとへと戻ってくる幽香であったが、その表情はハジメに一刻も早くこの場を後にするよう告げていた。ハジメとしても長居はしたくない。

故は後で彼女に問うことにして、足早に目当ての店へと足を運ぶのだった。

「来たぜ。スケキヨだ」

アーケード街の中程に差し掛かって、雪之丞が呟いた。

まるで戦に赴く戦士の面持ちである。江梨花も彼の隣で不敵に笑っている。こう見えて、彼女はとてつもなく大食いで、おまけに舌が肥えている。

江梨花は市内のジャンクフードをあらかた味わい尽くしていた。血が騒いで仕方がないのだろう。

「来たのは俺たちの方だがな」

シャッター続きの商店の端に、ひっそりと黒いのれんを掲げる『スケキヨ』。その一角だけ、異様な香りが漂っていた。心なしか、空気が粘っているように感じられる。

幽香はラーメンを知らない。だが、それが麺をスープにつけた料理である、という前知識を彼女に教え込んだところですのでは徒労に終わったことだろう。

「これが？」

長い待ち時間を経て運ばれた丼を前にして、幽香の口元が引きつった。

うどんのような太麺の上にどっかりと乗ったもやしと野菜の山。そして山頂の雪のように積もったおろしにんにくと、隙間にこれでもかとぶち込まれた焼豚のかたまり。

「これが、あなたの言う最高の料理なの？」

「そうだけど？」

要するにスケキヨは二郎系であった。

「きたきた」

「いただきます」

得体の知れない料理に喜び勇んで取り掛かる雪之丞と江梨花とを信じられない面持ちで見つめる幽香。救いを求めるような視線でハジメを探すと、彼は面白がるように目を細めている。

「あのね、ハジメ。あんまり食べ物についてどうこう言いたくはないけれど、どんな料理もある程度の美意識ってものが必要なのよ。これは、どう見ても」

「つべこべ言わねえで食ってみろって」

ざくざくと野菜の山を崩していくハジメを見守る幽香の落胆具合は半端なものではなかった。減多なことでは余裕の表情を崩さない彼女が派手に困惑しているのを脇目に見て、ハジメは久しぶりに気分がいい。

「うん、ウマイ」

自分が手を尽くした料理には頑として褒める言葉を漏らさないハジメが、率直な感想を口にする。幽香は憎々しげに丼を睨み、そして意を決したように箸を取る。

「こんなの、食を冒瀆してるわ」

思わず三人が手を止めるほど神妙な面持ちで麺を口に運び、その動きが止まる。

「え……やだ、おいしい」

しかし、その顔は腑に落ちない彼女の心境がありありと現れていた。

「でも、どうしてこんな醜いものが……脂。このブヨブヨした不気味なアブラなの？ ……いえ、もしかすると私も知らない化学調味料が……ハジメを納得させるには、まだまだ研究が必要ってことか……」

ぶつぶつと呟く幽香。

「その、幽香さん、面白い人だよね」

「もつと素直に言っただいいんだぞ」



「ええー、お姉ちゃん遅くなるのかあ」

携帯を放り出して、千晃はベッドの上に大の字に広がった。当のメールの送り主については完全にその存在を忘れてしまっている。「くっそお。出前とってやる」

腹いせに我が家の経済事情を悪化させてやろうとはね起きたところで、彼女はその異音に気づいた。かりかりという、何かをひつかくような音だ。音の出処は下の階。もちろん、家には彼女ひとりだ。

鶴見千晃はひきこもりだが、臆病ということではない。

こういう時になると、むしろ好奇心が勝って仕方がない。抜け目なく護身のために新聞紙の束をくるくると丸めながら階段を降りていく。

「トイレ、リビングはクリア、と」

そうして残る場所は玄関だ。ことさら警戒して彼女はリビングの

ドアを開ける。その途端、それまで鳴り続けた音が止んでいた。「なんだろ」

千晃はてつきりそれがイタズラで、彼女の気配を察して犯人が逃げたものだと考えていた。だが、その音の主はいた。彼女がやってくるのを、待っていた。

すりガラス越しに見える茶色の小さな姿。それはおそらく犬だった。だが、どうにも妙だ。

千晃は、ぱつとそれを見てどこがどうおかしい、とは言い切れない。「くうん」

人懐っこい犬、のようであった。

胸をなでおろして、千晃はドアのロックを外す。途端、勢いよく開かれる扉。その向こうで待ち構えていたもの。

「え」

その、ひどく形容しがたいものは。

「くううううううん」

湿った音と、落ちる新聞紙。

千晃も異形の訪問者も姿を消し、そこにはただ開け放たれた戸が寒風に揺れているだけだった。

6 『2. 5者面談（下）』

全員がにんにくのおいをぶんぶんときせていた。

色々な意味で危険な香りのする四人を自然と雑踏が避けていく。ふとハジメが首を巡らせると、駅前のバスターミナルにはイルミネーションが飾り付けられ、広告にはやたらと赤と緑色が目につく。

「なんか、騒がしくね？」

率直に感想を漏らしてみると、雪之丞がガムを差し出してくる。

「もう年末間近だからな。その前にクリスマスだろうけどよ」

すでに十二月も中頃である。時間が経つのは早いなと思いつつ、どうにも彼が意識せざるを得ないのは幽香の存在である。

六ヶ月の猶予。早くも最初のひと月を消費しようというこの時に至って、ハジメの能力は眠ったままだ。このまま永眠してしまうのでは、と不安にもなる。

「おいしいのはわかるの。でもね、もつと量が少なくなっちゃっていいじゃない。もつときれいに盛りつけたっていいじゃない」

「だーかーら、違うんですって。あれがいいんじゃないですか。こぎれいなお店で上品なお料理を食べる時代は終わったのです」

当の幽香は未だに腑に落ちない様子で、江梨花の語る次郎系ラーメンの魅力について耳を傾けていた。数歩分遅れて男たちは続く。もちろん彼らは江梨花の誇る鉄の胃袋をよく知っていた。しかし幽香も幽香で、あの後研究と称して丼二杯を平らげている。

「ユキ、俺たちが少食なのかな」

それは見ているだけで胸焼けを起こしそうな光景だった。

目の前でペロペロと消費されていく大盛りのラーメンと、ハジメのお小遣い。すらりとした幽香と小柄な江梨花。その体のどこに、あれだけの量を収容するスペースがあるのか。

「女ってすごいな」

「ああ。女体は神秘に満ちている」

雪之丞は張り詰めた腹をさすった。もはや汗腺の先まで例のアブラが詰まっているような錯覚を二人は覚えていた。息がミントの香

りになったところで、焼け石に水だ。

「そーいや千晃ちゃん、元氣？」

「最近部屋から出てくるようになったよ。家に来たあいつが上手くやって」

幽香を一瞥して、へえ、と雪之丞は声を上げる。

「やつぱりすごい人なんだなあ。俺はわかってたよ。なんたってオーラがあるもんな、オーラが。あと色気ムンムンだし」

色気。

ハジメの記憶にある中で、彼女が放ったものは殺気くらいだ。

確かに彼女はきれいだと思うが、それは女性に対して持つ感情というよりは、美術館でよくわからないが色使いだけはいい絵を見て抱く感想に似ている。

「それにしても、どうしてお前なんか幽香さんと一緒に暮らせるのかねえ」

平気で失礼なことを言う。無然としつつも、確かにそうだとハジメは思った。それは雪之丞が意図したところとはだいぶ違うのだが。

今更だが、これから殺し合うことになる相手と、ハジメはなぜか同居しているのだった。

「今度千晃ちゃんの顔見に行ってもいいか？」

「ああ。あいつも喜ぶ」

なまじ俺がそばにいるよりもな、と続けてハジメは白い息を吐いた。

町明かりの中でもオリオンが見える。それだけ清冽に寒く張り詰めた空気のなかで、学ランの下にパーカーを着込んだだけではいささか寒さが堪える。

「今日は解散としとくか？」

雪之丞が頷いた。そして、ぽんと手を打つ。

「そうだ。歓迎会やろうぜ、幽香さんの」

その突拍子もない思いつきに、ハジメは要領を得ない顔をするほかない。

「だからさ、俺らがフツーに千晃ちゃんところに遊びに行くんじや

ちよつとばかりワザとらしすぎるじゃねえか。そこでお前が歓迎会開いて、俺たちを成り行きで誘ったカンジにすればさ」

建前とはいえ、何が悲しくて自分を殺しにきた女を歓迎しなければいけないのか。

しかし、ハジメが現実離れた事情をクソ真面目に説明したところで理解を得られるとは思えない。

「考えとく」

正直、ハジメとしては考えるだけにしておきたかった。

とくに別れの挨拶もないまま、三方向へとそれぞれが散っていく。

ハジメの家までは駅前から一キロと少し。しかし、にんにく臭を漂わせてバスに乗ることがどうにも気が引けて、歩くことにする。

「ちよつと臭うわよ」

「うるせえ」

地下道を通り、シャッターが締め切られたアーケードを通過し、ようやく住宅街に入る。

二人は頼りない街灯の灯りの下を歩む。隣に並んだ幽香はちやつかりと、いつもどおりの清々しい花の香りを漂わせていた。

「どうしたの、そんな顔して」

梅干のようなしかめつつらをしていたことに、ようやくハジメは気づいた。

雪之丞との会話の中で抱いた疑問が未だ胸のうちに渦巻いていた。どうして自分は幽香と同じ屋根の下で寝起きをしているのか、と。

「だってハジメが言ったじゃない。俺の家をなんとかしてくれって」

疑問をそのままぶつけてみると、幽香はきよとんとした。

「それだけ？」

「そうよ。あなたが憂いなく力を磨けるなら、私はそれでいいの」

自分を殺しにきた相手の作った料理を食べ、説教から助け出され、命までも拾われ。よくわからない同居が始まってから、そろそろ半月が経とうとしている。

猶予は半年。これはその、何分の一なのか。

「もちろん、ここままでしてあなたが役立たずだったらあたまから真つ

二つに引き裂いてあげるけどね」

不意に、冷たい手を背中につつまれたようだった。

幽香はちらりとハジメをかえりみて、歩調を早める。見えない鎖で繋がれた子犬のように、ハジメが後を追った。

あるアパートの前で幽香は曲がる。小さな公園に入っ、彼女はようやく止まった。

「さて、そろそろ進路指導の続きを始めましょうか」

見慣れた公園に立ち並ぶブランコが、鉄棒が、まるで拷問器具のようハジメの目には映った。幽香の黒いスーツの背中は、ともすれば闇に紛れてしまいそうだった。

「確認しておきたいの。あなたが半年後、どうなりたいのか」

ハジメは言葉に詰まったが、お構いなしに幽香は続ける。

「死にたい？」

「いいや」

「じゃあ殺したい？」

目の前の女を殺す。生意気で傲岸不遜で、何を考えているかよくわからない、風見幽香と名乗る女。彼女を圧倒し、容赦なく自由を奪い、息の根を止める。

出来る出来ないの話ではない。恐ろしい想像が、無意識にハジメの顔に答えを浮かべていた。

「そう。じゃあ死になさい」

幽香の背中が霞んだ瞬間、彼女はハジメの文字通り目の前にいた。

小刻みに震えるハジメの、その両まぶたに彼女の指が触れている。堪えようのない圧迫感を眼球に感じながら、制限された青年の視界は幽香の顔の下半分を捉えている。

酷薄な口元を。

「もう一度だけ聞いわよ。生きたいの、死にたいの」

歯が鳴っているのは寒さのせいではない。

「生きたいに、決まってるだろっ！」

それでもなんとか小さく頷くと、幽香はゆっくりと一步踏み出した。痛みに喘いでハジメが後ずさりする。

「よし。これで半年後のあなたが私をぐしゃぐしゃに叩き潰した。そのあとは？」

「は、はあ？」

「大事なことよ。それからどうするのか、考えなさい。今」

答えなければすぐさま両目がお陀仏だ。

ハジメは回らない頭を必死に動かす。この進路指導の担当はとことん優秀だ。あの眠たい部屋では出てこなかった言葉が次々と吐き出されていく。

「そ、そうだな。まずは勉強だ。あだだ、俺は言いたかないが、頭は良くないけれど。大学、入りたいんだっ、や、やめろ、おい！」

「そこで夢や希望を見つけるとか、のぼせたことはもう言わないわよね」

鼻先が触れるほどの距離に幽香が顔を近づける。

青年にはまぶたの下からでも、その赤い瞳が見えるようだった。彼女に嘘偽りは通用しない。あの進路指導の平田に語ったような恥じらい混じりのそらごとは。

「違う」

幽香は息を整える暇くらいは与えてくれた。

「俺には」

「うん」

「俺には、野望がある。からだ」

そのまま長い時間が経った。

「野望か」

言葉の真贋を吟味するように彼女は呟く。

緊張でおかしくなりそうになった頃合に幽香が唐突に足を踏み出したので、ハジメは泡食って一歩下がる。そして、体勢を大きく崩した。倒れ込んで頭が地面に触れることはなく、足をぶらぶらとさせながら夜空を仰ぐ。

「あ、ああ？」

やじろべえのようにガードレールにもたれかかったまま、呆然と幽香を見上げるハジメ。幽香は声を上げて笑っていた。

「ごめんなさい。ちょっと面白かったから長引いちゃった」

幽香はハジメを助け起こす。

返事もできずに、ハジメはその場にへたりこんでいた。

「冗談よ」

ハジメがその言葉をそのまま受け取ることはできない。

ここまでの一部始終はまさしく綱渡りに等しいものだった。半端なことを口走っていれば、幽香は命までとは言わずとも、両目ぐらいは挟り取っていたのではないか。

「あら、おもしろいでもしちやった？」

「してねえよー」

ちよつと嘘だった。

「でも、言ったことはちゃんと覚えているのよ。この先何かあって迷いそうになったとき、それが理由になる」

一体何の理由になるというのか。幽香がハジメの言うところの野望を聞き出そうとしなかったように、それを問いただす気力は彼には残されていない。

ただ舌打ちを返すのが、青年には精一杯だった。

それからは会話もなく、ふたりは家を目指して歩き続けた。

気まずさは幽香も感じているようで、彼女はちらちらと視線を送ってくる。ハジメはあえてそれを無視した。

「ねえ、謝ったでしょ？」

それである仕打ちを水に流せる人間のほうが稀有だ。

ようやくハジメがなにか言ってやろうと思った頃にはすでに家の前。

しかし渾身の皮肉は結局不発に終わる。幽香が家を睨みつけている。ハジメも、その異状をすぐに感じ取ることができた。

「千晃？」

開けっ放しのドアと、落ちた新聞紙の束。

灯りのない家の中は薄暗く、月明かりの下で新品同然の千晃のスピーカーがきれいに揃えて置いてある。

駆け出したハジメを幽香は止めようとしなかった。

かわりに彼女は足元に視線を向ける。ぬらぬらとした透明な粘液が水たまりのようにわだかまっていた。

目を細めて、幽香は粘液が伸びていく先を追う。

鶴見家の敷地を出て、アスファルトの上を更にどこかへ向けて這っている。背後から息を切らせてハジメがやってくる。

「いないんだ、あいつ」

引きこもりが家にいない。とてつもない異常事態だ。

「でしようね」

粘液の筋と、幽香の視線の先にあるものを見て、ハジメは立ち尽くす。重い蓋を持ち上げられた下水溝がぽっかりと口を開けていた。

「なんだよ。なんだよ、これ……！」

「あの子は何かに魅入られてしまった。そういうことでしょうね」

その『何か』が警察の手に負えないようなものであることは、ハジメの目にも明らかだ。落ち着きなくうろうろと歩き回るだけの彼には目もくれず、幽香は下水溝の中に何かを放っていく。

やがて場違いにかぐわしい花の香りがさつと暗がりから立ち上った。頷いて、幽香は住宅街のより奥へと視線を馳せた。

彼女は何らかの手段で襲撃者の居場所を特定することができたようだった。

「あなたの妹はきつと生きてる。安心しなさい」

「ああ」

力が抜けたようになったハジメには目もくれず、幽香はずんずん歩き始める。慌てて追いかけてようとした青年を、彼女は睨みで制した。

「な、なんだよ」

「あなたには危険すぎる」

そう言われてじゃあお願いしますと引き下がれるような状況じゃない。

「俺も行くさ。俺の妹なんだ！」

「で、役に立てるの？」

戦力になるかどうかもわからないものを、お荷物という。

幽香が千晁を探しに行くのはつまるところ、ハジメのためだ。ハジ

メとの約束があるから、彼女は彼の妹のために戦う。

「そんなのって」

しかし、本人が自ら危険に飛び込んで元の木阿弥。

無理にでも彼がついてくるのなら、幽香はそもそも行かないという選択をするのだろう。

青年の心の有様を察して、幽香はいつもの優しい笑みを浮かべる。

「いい子ね。お留守番は頼むわ。千晃は任せて」

まるで子供扱いだ。

ハジメが顔を上げると、すでに彼女は姿を消していた。

「そんなのって、ないだろ」

よろよろと歩いて、ハジメは家の中に戻った。リビングに入り、暖房も入れずにソファに体を持たせる。これでいいのだろうか、なんて聞くまでもない。

千晃に関して、結局は幽香に任せっぱなしである。

未だかつて彼がこれほど非力さを実感させられたことはなかった。愚妹愚兄と罵り合いつつも、やはり彼女は妹だ。

「ああ、クソ」

そこでようやくやく履きっぱなしの靴に気付く。カーペットにうつすらとついた足跡を靴下で蹴散らしながら玄関へ向かう。

タイミングを見計らったように、郵便受けがガタリと音を立てたので青年は思わず飛び跳ねていた。

だが、恐る恐る投函されたものを確認した瞬間、彼の中を真っ赤な怒りが覆い尽くしていった。

「……おい、何のマネだ」

片方だけの、女性物の、黒い靴下。

その持ち主が誰であるかなど、愚問でしかない。

「おいー」

蹴破るようにドアを開けて、犯人の姿を探す。

真冬の静けさが漂う中、見つけたものは真新しい一筋の粘液だった。アスファルトの上に残されたそれは、まるで青年を誘うように駅の方角へと向かっていた。

「いい度胸じゃねえか。後悔させてやるよ」

相手が何者か。それは人であるのか、それ以外のものであるのか。もはやハジメにとっては微々たる問題でしかない。下足入れに立かけてあつた金属バットを手に、猛烈な勢いで跡を追う。

ちらつきはじめた雪も、彼の怒りを冷ますことはできなかつた。

怒りで鈍りきつた彼は自分が向かう先が、幽香の目指した場所と正反対の方向であることに思い至らない。

長い夜が、始まろうとしていた。

第三話『2・5者面談』おわり

7 『右巻きの迷宮（上）』

真冬にも関わらず、その一角には耐え難いほどの熱が立ち込めていた。季節外れの陽炎の中に佇む女。ビルとビルの間、人気のない空き地には所々に炎がちらついている。静かで、そして激しい戦いを制したのは言わずもがな風見幽香である。

「そう」

敵の本丸と思つて攻め込んだ直後から彼女は違和感を抱いていた。

ここまで周到にハジメと幽香の留守を狙い千晃を拐かした相手のすることにしては、あまりにも場当たりで無計画な総攻撃だった。

結果として幽香は圧勝し、そして千晃はこの場にいない。

無表情に彼女が指を鳴らすと、燃え盛る炎は一瞬にして消え失せた。あたりに散らばったものはおびただしい量の粘液と、無数の毛皮の切れ端。

『襲撃者』はこの場から逃げおおせていた。もともとこの場で待ち構えていたのは、トカゲの尻尾のようなものでしかなかったのかもしれない。

「あなたのご所望はあの子の方、つてこと」

残骸を踏みにじつて幽香は踵を返す。細い裏路地を縫つて出ると、そこは夜の街だ。寒空に浮いた真っ白な月と粉雪に彼女が目を見奪われたのは一瞬のことで、すぐさま歩き出すと雑踏に紛れ込む。

通りの向かい。濃茶のダツフルコートを翻して、男が歩き始める。

「いたいた」

若い刑事は絶えず雑踏の中に幽香を探す。

あれだけ目立つ容姿をしていながら、こういう時にはまるで擬態するように周囲に同調してしまう。

「やっぱ、アンタは普通じゃないつてことなんだな」

鶴見ハジメについては調査に一段落がついていた。

見ているだけで眠たくなるような量産型高校生の経歴。今回の爆発事故の他に目を引いたものはたった一度の補導歴であったが、それ自体も取り立てて騒ぐようなものではない。

問題はむしろあの女。

器用で美人で人のいい風見幽香さん、と。尋ねられた誰も右をならった様に誉めそやす女の存在がずっと頭に引っかかっていた。

風見幽香という名前に関するいかなる経歴も、彼らの手元には存在しない。偽名を使ったといえばそこまでだが、むしろ、彼女がまったく別の世界——海外や、またこの世ならざる場所から来た、と考えるほうが寺田にはしっくりとくる。

寺田は現実主義者だ。

『ろ号飛行物体』なんて馬鹿げたものについても、実際は観測気球だとか、鳥だとか。大方、一昔話題になったスカイフィッシュのようなひどく夢のないオチがあるんだろうなあ、と考えている。

だがそれでも、あの青年と幽香が行動を共にしていることにはなにかトンデモない理由があるような気がしてならない。

「残業代も出ないのに、俺らは何を必死になってるんスカね」
メガネを押し上げて自嘲気味に呟く。

答えてくれるはずの年老いた相棒は今、この場にはいない。
信号を待っていた彼女が歩き出した頃合に、寺田は携帯を取り出した。

「今井さん、ばっちりです。今夜こそ連中の化けの皮をはがしてやりましょう」



打って変わって、今井は喧騒とは無関係の場所にいた。

「分かった。ヤバそうだったらすぐ引き上げろ。何度も言ったが、これは公式の捜査じゃないんだからな」

慣れない手つきでスマートホンを操作して、老刑事はハジメの姿を視界に捉える。左腕一本でバットを引きずるようにして歩くさまはどこことなく痛々しい。

家から金属バットを手に走り去った彼を追いかけるうちに住宅街を抜け、彼はアーケード街付近の裏通りへと入り込んでいた。

「いっしょ」

いつそう人気のない通りを選ぶように進んでいくハジメの背中か

ら一度目を離して、足元を調べる。そこには謎めいた粘液が筋を描いていた。

「お前、何に巻き込まれたんだ？」

ハジメの足取りを追う限り、彼はこの粘液に気づいている。それどころか、これを追っているようだ。彼は時折立ち止まり、苛立たしげにバットを担いでは前後を警戒する。

そのたびに今井は息を殺して物陰に隠れなければいけなかった。

ビルの隙間から隙間へ。いつしかこの地区に詳しい今井ですら見覚えのない、奇妙な路地へと入り込む。

古錆びた蚊取り線香の看板が視界の端をよぎっていく。倒壊しかけたあばら家の前を通り、なぜか通りのど真ん中に突き立った不気味な丸ポストに目を奪われる。そこはまるで、町から忘れられたものを雑多に取り込んだパッチワークのような場所だった。

これほど大きな空間にも関わらず、人の気配は皆無だ。やたらと生活感だけは強いのに、明かりもなく、月の輝きを受ける雪のおかげでなんとか歩いていける。たちの悪い怪談話の世界がどこまでも広がり続ける。

「こんな場所が、この町に？」

ハジメの後を追って角を曲がり、フェンスを乗り越え、そうして三叉路を右に抜け——今井は、足を止めた。

壁があった。

真新しい粘液の筋を途切るように、年季の入った、ススだらけの、苔むしたブロック塀が待ち構えていた。

そこに青年の姿はない。今井がいくら押しても引いても壁はびくともしない。まるで望まぬ侵入者を拒むため、この壁がわずか数秒の間にこの場所に生えてきたようだった。

「なん、なんだ。ここは」

背後にただならぬ気配を感じた。

振り返ると、嘲笑うように『行き止まり』の標識が真後ろに佇んでいる。場数を踏んできた今井とはいえ、流石に背筋に冷たいものを感じずにはいられない。

「やめておきなさい」

恐る恐る標識に手を触れようとしたとき、鋭い声が今井を制した。「ここは常を超えた場所。へ夕にいじくりまわすと、取り込まれちゃうかもよ」

それは年端も行かぬ少女だった。

湿った壁と壁の間を吹きすさぶ雪混じりの風に、彼女の黒髪が炎のように揺らめいている。明かり一つ無いこの場所で、彼女の容姿はなぜかはつきりと見て取ることができる。

見目麗しい黒髪の乙女は、まるで自らぼんやりとした光を放っているかのようだった。

「君は。いや、お前はなんだ？」

こんな時間のこんな場所に、こんな美しい少女が？

それを幸運が巡ってきたと喜ぶか、思わぬ奇縁を持つてしまったと警戒してかかるか。今井は後者で、少女はそれを彼の口調と表情から読み取ったらしい。

「信頼しろなんて言える状況じゃないのは承知だけどね。でも巫女のお告げは神のお告げ、わたしの言うことは素直に聞いておいたら？」

標識に背をもたせて少女が切れ長の目を細めた。布がいくつにも連なった、和服とも洋服とも判別つかない装い。黒髪と整った容姿も合わせて、まるで人形のように見える。

それでも口をつぐんだまま動こうとしない今井に、彼女はため息ついて耳元の髪を払う。

「ま、いーけど。警告はしたからね、おじさん」

少女の足が地面を離れた。

「あ」の形に口を開けたまま固まる今井を見下ろして、空飛ぶ少女は機嫌を取り戻したようだった。

「ふふん。人が空を飛ぶのを見るのは初めてだったかしら？」

どこか得意げに重力を感じさせない動きで細い路地に体を翻す紅白の少女に、今井はしばし目を奪われていた。この世の存在ではない。

優雅に着物をはためかせる姿はまるで、楽園から現れた天女のように

でもある。

「お前が『ろ号』、なのか？」

それだけをなんとか今井が搾り出すと、天女は露骨に顔をしかめた。

「はあ？ やめてよね、そんなダサイ呼び方。私は——もういいや。ひとまず今日のところはここまでって感じで」

「今日のところは？ な、なあ、待ってくれ。この先に行つちまったヤツがいるんだ。手を貸してくれないか」

なぜこの場で彼女を頼ろうと思ったのか。

それは言葉を発した今井自身も不思議でしかたない。だが、『彼女を頼れば大抵の物事は解決する』という、根拠のない確信めいたものがあつたのだ。

「それは風見幽香と一緒にいた男の子のことかしら」
「どうしてそれを？」

目を見開く今井に、少女は肩をすくめるだけだ。

「残念、あなたの助けにはなれないわね。あの子に恨みはないけれど、敵の味方は敵つてことで」

「待て」

ゆっくりと遠ざかりつつある少女は、もはや今井の言葉に振り返ることは無かつた。

そのまま彼女が小さな小さな点になるまで見送り続けた頃、ようやく今井は携帯の着信に気付いた。

寺田の名前が履歴に数件並んでいる。かなりの時間空を見上げていたようだった。

『よかつた。連絡つかないもんで、心配しましたよ』

スピーカーを通して寺田の乱れた呼吸音が伝わってくる。

彼の言葉の切れ間切れ間に聞こえてくるものはオリエンタルな音楽だったり、聞きなれない言葉だったり。いったいお前はどこに居るのかと今井が問う前に寺田は息を整えていた。

『すみません。あの女、タダモンじゃありません。こつちの尾行なんて、とつくの昔にお見通しだったみたいで。ああ、まったく、マズっ

たな』

「どうした。何かあったのか」

『あいつがバスに乗り込んだんで着いていたら入れ違いにされたんです。こつち指差して笑ってやがりましたよ』

すっかり女を見失ってしまった、と寺田は続けた。

「こつちもこつちで色々あった。直接会って話がしたい」

空へと目を戻すと、あの少女の姿は消えていた。今井はこめかみを指で叩きながらつい今しがたの出来事を整理しようとする。

謎の女と爆発事故の青年。二人の正体を暴いてやろうという目論見はかえって多くの謎を掘り起こす結果に終わってしまった。

「タクシー代、出してやるからすぐ戻れ」

『ええ……でも、ここ、ドコなんスカね』



なれない左腕一本で金属バットを支え続けるのは骨が折れる。とはいえ実際に折れているのは右腕で、唐突に降って湧いた皮肉にハジメは乾いた笑いを漏らした。

「千晃、どこだ」

幽香の言うとおりに、家で待っていたほうがよかったのかもしれない。ここに来て彼は半ば確信している。自分はこの場所に誘われているのだと。

異様な通りを進みつつ振り返ると、すでに退路は絶たれている。千晃をさらったものの狙いは、おそらくそれを追ってくるものにあつたのだろう。

「くうん」

聞き覚えのある鳴き声に顔を上げると、L字型の曲がり角から痩せ衰えた犬が顔を出していた。雪の降りしきる中、その姿はなぜ凍えなのかと不思議に思うほど寒々しい。

「お前か。お前が、千晃を」

歩調を早めるハジメを嘲笑うように、犬は退いていく。まるで後ろから引つ張られるように、一切体を上下させないままに曲がり角に消える。

恐る恐る角に張り付いてハジメは息を整える。ポケットの中で硬貨を握る。肉にくい込む感触で、あの火中で抱いた恐怖を思い出す。

降り注ぐ瓦礫と燃える体、そして風見幽香という異常な存在との出会い。それらを乗り越えてきたことを考えれば、この先で何が待っているようにも平静を保てるような気がしていた。

バットを構えて一步目を踏み出す。

「千晃ー」

それまでの窮屈な空間からは一転、大きく開けた広場がそこにはあった。

広場の片隅にはガラクタが雑多に積み上げられている。その上を覆うのは真っ白な雪だ。思わず駆け出した足を不快な粘液が絡め取るが、それはもはや、ハジメの関心事ではない。

中央、ぽつんと立ち尽くす街灯の明滅する照明の下に横たえられた少女。

彼の妹がそこにいた。

「よかった」

全身を不気味な粘液に覆われている以外、目立った異常はない。薄い胸は確かに上下しており、ハジメが彼女を担ぎ上げると体温もある。意識を失っているだけのようだった。

「あとは、ここからどうやって出るか、か」

なんとか背負い上げた千晃の手足を縛って固定すると、重みに呻いてハジメはあたりを見渡した。今しがた入ってきた通りはおびただしい数の自転車が詰め込まれ、塞がれている。

そして、背後から響く物音。

「くうん」

鳴き声。

バットを手に振り返ったハジメの目の前で、今までビルの壁であったものが音もなく、パズルのピースのように取り外され、無数の黒い触手によって脇に几帳面に積み上げられていく。

そうしてビルを被っていたそれが姿をあらわにする。

あまりにも大きかった。

「くうづうん、くうづうん」

その姿は蝸牛に似ている。

真つ黒な滑り皮の一部が持ち上がり、一對の目を形作る。地面に接している部分からは無数の触手が這い出し、そのすべてが指人形のようになぶりを被っていた。

正しくは、上半身だけの犬の生皮を。

哀れみに飢えた目で、すべての犬がハジメへとにじり寄ってくる。しかしてその口から滴るものは粘ついた液体で、カミソリのような牙を隠そうともしない。

ハジメが足元へと目を向ける。

今まで降り積もった雪だと思っていたものは実際、細かく砕かれた大小の骨であった。

「こんなのが『もつともつと弱い相手』かよ」

かつて幽香を冷酷だと罵り、その言葉に耳を貸さなかった自身を責める。その結果として千晷を餌に、まんまと誘い出されたというわけだ。

この犬は。都市の影に潜み、弱者の皮を殻として被り、差し伸べられた手を食いちぎる、卑劣にして恐るべき怪異だ。

幽香はこの怪物の正体をひと目で見破っていたのだろう。

「くっ」

いつしか足元ににじり寄っていた一匹の犬に向けてバットを振るう。大きく体をひしやげさせてバウンドした痩せ犬は、痛みをまったく感じさせない動きでぬるうりと立ち上がってくる。

その間も犬の群れが次々と迫る。

千晷を背にバットを叩きつけ続けながら、ハジメは悟る。この蝸牛の怪物は楽しんでいる。大方、ここに誘われてきたモノたちも同じようになぶり殺しにされていたのだろう。

こいつは人を殺し、食らう。

言葉にするとあまりに単純で、あまりに恐ろしい事実。

だが、ハジメはある程度冷静に迫り来る死の群れを見つめていた。ここ数日にわたって幽香に脅され続けたせいで、やはり恐怖のハ-

ドルが上がってしまったのかもしれない。

「くうん」

いつもと様子の違う獲物に苛立ったのか、巨大な蝸牛が上体をもたげた。ぱっくりと開いた口から何かが勢いよく射出される。

次に鼻についたのは不快な匂いだ。

青年の唯一の武器に巻き付いたものは怪物の舌のような器官だった。強力な酸か毒か、みるみるうちに金属のバットが焼けただけ、ひしゃげ、折れ曲がっていく。

やがてはグリップすらも溶け始め、ハジメはバットを手放す他ない。

「任せとけよ。守ってやるから、安心しろ」

隅に向かつて後退しながら千晃に、そして自分自身に喝を入れるように声をかける。

彼女をかばったまま食いちぎられ続けるのはさぞ痛いだろう。焦りと恐怖をぶち込まれた鍋が、ハジメの心の中でぐるぐるとかき混ぜられていく。

こいつらは楽に殺してくれはしない。

一ミリずつ肉を剥がれるのかもしれない。最も痛く、最も死に遠い場所から牙をつき立て、最後の瞬間まで踊らされる。

悪趣味な想像が、ようやく一筋の冷や汗をハジメの頬に伝わせた。それでも虚勢だけは張ろうとするが、余裕のないかすれ声を漏らすに終わる。

「お、俺——」

月の明かりを受けて、そのシルエットが輝く。

頭上から雨あられと降り注いだ光の筋。

ついにハジメの口について出た泣き言を、爆音と閃光がかき消していった。

「鎖につないでおけばよかったかしら？」

眩んだ視界と、聾された耳。

余裕を含んだ一言を漏らした女が肩で息をしていることに、ハジメは気づけない。

「でも、よく耐えたわね」

その労いの言葉にも。

唯一正常な嗅覚が、舞い降りたかぐわしい花の香りを捉える。息をするだけで、死のにおいに侵されきった肺の内側が洗われるようだった。

「さて」

物理的な圧力を伴った赤い眼光に、蝸牛がたじろぐ。

「ゴミ掃除、始めましょうか」

8 『右巻きの迷宮（下）』

割って入った幽香が群がる犬たちを打ち払う。ズタズタに引き裂かれた毛皮の下から現れたものはおぞましく発光する、ぬめりをもった無数の触手だ。引きちぎられて尚不気味にのたうち回る触手を幽香が無慈悲に踏み潰す。

「怪我は？」

蝸牛とにらみ合ったままの幽香から掛けられた声は、その動きの冷酷さが信じられないほどに優しいものだった。

「な、ない」

「よかった。しばらくどこかに隠れていてちょうだい。お説教はその後ね」

ハジメは千晃を再び抱き上げて、ゆっくりと後退する。

これから何が始まるにせよ、それは決して穏やかな結果には収束しないだろう。

怪物とにらみ合いを続ける幽香が何倍にも大きくなったような錯覚を覚える。殺し合いの練習というじゃれあいとは比べ物にならない、彼女の實力の一端がここで発揮されようとしているのだ。

蝸牛の怪物は正直なところかなり戸惑っていた。

町でイヌの亡骸を使って『釣り』をしていて最高のエモノを見つけたときは久方ぶりに人間の肉が食べられると喜んだものだったが。その時から彼の隣にいたマズそうな女は確かに警戒していた。

「せつかく見逃してあげたのにねえ？」

こうして敵として向き合ってはつきりと分かる。

これまで食らってきたどんなエモノとも違う。燃える炎がそのまま意思を持ったような生き物。抱いた感情を畏怖という二文字で認識するだけの知恵が蝸牛にはなかったが。

女の華奢は刺を隠すための大きな花卉のようなもので、一度風雨に晒されればたちまち華やかさはなりを潜め、凶悪な一面を覗かせるのだろう。まさにこの瞬間のように。

「くうん」

だが、蝸牛は無数の触手を振り上げて威嚇する。

この町で生まれ、人間たちが無意識に忌避する空間で育ち、やがてはヒトを喰らうようになったこの瞬間に至るまで、蝸牛は彼の世界で最強の存在だった。

それが未来永劫覆ることはない。覆ることはない、はずだ。少なくとも彼はそう思い込んでいる。

一方、あくまでやる気を見せる蝸牛に幽香は醒めた目を向けるだけだ。

「ちよつと力を持っただけで舞い上がっちゃうなんて」

真面目な保護者を取り繕う時間は終わった。これからは風見幽香としていかななくその力を振るうべき時なのだ。髪留めを外し、スーツの上着を脱ぎ捨てると髪を払う。

「あなたみたいのが一番不愉快なの。消えてちょうだい」

鋭い眼光とともに叩きつけられた殺気が開戦の合図となった。

千晃を担いで物陰へと移動しつつ、ハジメには幽香の姿がぼやけた残像と、真赤に輝く瞳の残光でしか認識できない。

ふつと彼女の姿が現れたときは大抵拳か脚を繰り出した直後の姿勢で、蝸牛の体が面白いように削り取られている。反撃に晒される前に再びその姿が煙のように消え失せると、もはや蝸牛の触手で幽香を捉えることはできない。

ハジメにとっては絶望の権化でしかなかった蝸牛の怪物を表情一つ変えずに圧倒する幽香。思わず足を止めたハジメはその底知れぬ実力を改めて思い知らされるような気持ちだった。

「いいぞ、やっちまえ」

思わず小さく拳を振り上げていた。

妹を家から無理やり引きずり出し、あまつさえ彼女をエサに自分までもおびき出した怪物がボコボコにされていく様を見てみると、正直胸がスツとする。

だが、同時に心臓の底を熱湯に浸されたような焦りも感じていた。

この場に至って彼は何も役に立てていない。待つようにと言われたことすら忘れて家を抜け出し、まんまと窮地に陥ったと思えば結局

幽香におんぶ抱つこの状態だ。このままお荷物のままでもいいのか。

触覚の一本を消し飛ばされて大きく身を仰け反らせた蝸牛へと指を突きつける。ウンともスンともいわない自らの能力に舌打ちして、再びがれきの山をめざして歩き始める。

「くうん」

しかし蝸牛は獲物の逃走を許そうとはしなかった。粘液と青紫の血をぶちまけながらも彼が顔をそらした瞬間、幽香は機敏に反応した。

「ハジメ」

それは真後ろから聞こえた。

やはり優しい幽香の声に振り返って、ハジメは絶句した。

「お前、それ——」

彼女が掲げた左腕を触手が差し貫いていた。

音もなくハジメの背後に迫った致命的な攻撃。それを身を呈して受けた幽香が何か言葉を発する前に、耳障りなブツブツという泡の立つような音がハジメの耳に触れた。

遅れて、肉の焼ける嫌な臭いが漂う。

「まずは身の護り方よ」

金属のバットを溶かすような酸を分泌する触手である。生身で触れて、無事でいられるはずがない。たちまちシミ一つない白い腕が酸におかされ、ボロ切れのように皮膚をちぢれさせながら真赤な肉をむき出しにしていく。

白い雪が舞い散る中で、その色彩は一層異様に映えた。

「体や心の死角。防ぐのか、逸らすのか、受けるのか。あなたが一手間違えれば、すぐにこうなるわ」

幽香はそれだけの怪我を負っても悲鳴の一つ上げない。

目を背けたいののに、彼女に視線が吸い付いて離れない。あまつさえ彼女は、ハジメに微笑みさえ浮かべて見せるのだ。

「さて、こうしてとろい攻め手をわざわざ受けてやったとき、こいつの場合は——」

その笑顔が霞んだ。

ようやく幽香を捕らえた蝸牛は酸で焼いただけでは飽き足らず、力任せに強靱な触手で彼女を振り回したのである。焼け強ばった片腕ではろくに防御もできず、幽香の体は宙高く舞った後にビルの壁面へと叩きつけられた。

「くうん」

満足げにうなると、蝸牛はもうもうと立ち込める土埃の中で悠々と振り向いた。

見ればあれほどの損傷を被った蝸牛の肉体が瞬く間に蘇っていくではないか。一手。たった一手の誤り。鶴見ハジメという異物を庇ったばかりに。

「くうん？」

顔も口もないそいつは笑っているのだ。

どうだ、白馬の王子様なんていなかっただろう、と。

ハジメは千晃を傍らに横たえたまま、呆然と膝をついていた。嫌な女だというのが幽香に対する彼のすべての思いだったにも関わらず、胸が痛んでいた。

「どうせ、元からアンタ、俺にや期待してなかったんだろ」

なのに、どうして身を呈してまで自分を守ったのだ。

「俺をさんざんズタボロにして、さんざん笑いものにして、そうやって苦しめてからあつさり殺すつもりだったんだろ？」

返事はない。蝸牛の怪物も『助けて』『痛い』以外に人間の言葉を知らない。とりあえずは青年がビビっているのだと踏んで、全身から触手をぶわりと広げた。しかしそこから滴る強酸も、突きつけられた死も、ハジメの心を揺らすことはできない。

「そうじゃないならなんだって言うんだよ」

拳を地面について、ハジメは立ち上がる。

ちろちろと指先を焦がす炎。そして、絶望が渦巻くはずの瞳の奥には金色の輪が廻っている。彼の心の中にある大きな堰は、もはやほんの一突きで崩れてしまいそうだった。その瞬間を今か今かと待つのは、強大な、正体不明の力の奔流。

「おーい」

叫んでいた。

全身を駆け巡る力の衝動にかられたその声には、もはや雄叫びに近いものがある。

「おい——おい、答えてみせろよ、風見幽香アツ!!」

「それはね」

耳をくすぐったものは全てが始まった日、炎の中にも透った声と同じもの。

瓦解したビルの壁面が吹き飛ぶと散弾のように岩屑を吹き飛ばす。柔らかい肉に深々と突き刺さった破片に、蝸牛が身をよじる。

「ハジメなら本当にできるって、思ったからよ」

その声が発せられた場所には未だもうもうと土煙が立ち込めていた。そこへと向けて未だ伸びたままの触手がぴんと張り詰めた。みちみちと音を立てて——信じられないことに、蝸牛の巨体が海老反りになっていく。

「だから私はあなたに教えるの。拳や足、そして触手を軽率に攻め手に使った者の末路を。得体の知れない相手に手を差し伸べることの招く結果を。効率的で容赦ない、私の殺し方を」

煙幕の中から殺気が解き放たれた瞬間、光の帯が仰け反った蝸牛の柔肉を通り抜けていった。蝸牛はそれをきっかけにぴたりと動きを止める。その首。まるでファスナーをゆっくりと開けるように肉が切り開かれていく。

「悲鳴は上げられないのかしら。残念ね」

遅れて、スプリングラーのように紫色の血液が迸った。

どうと巨体が倒れる中、現れた幽香は無傷だ。彼女の身にまとう紺のスーツにはほころび一つとして見えない。

この瞬間まで触手を手綱のように握り締めていた彼女の体の周りを、血液が避けていく。そうして浮かび上がるドーム状の輪郭が、彼女を衝撃から守ったものの正体だった。

「……やったのか?」

「いいえ、まだよ」

切り落とされた蝸牛の頭が真っ二つに割れた。そこから現れたモ

ノの醜悪さに、思わずハジメは口元を覆う。幽香も隣で険しい目つきを浮かべていた。

「…………ギ。ヒイ」

その、何たる異形か。

しよせんは使い回しの腐肉の寄せ集めである蝸牛の肉体が解け、溶けていくのを尻目に、そいつはびちびちと跳ね回りながら地を掻いた。

真つ黒に焼けただれた人間の上半身と、腹から下に無様にくつついた犬の片足。これこそが、長らく市中の空白に巢食い、いくつもの命を平らげてきた蝸牛の妖怪の正体であった。

「どうする？」

二人を尻目に怪物はあうあうと喘ぎながら這い、逃げていく。

その姿があまりにもちっぽけで、あまりにも情けなくて、ハジメはつい、先程までの怒りを忘れてしまっていた。

「いっや」

怪物はかぶりを振ったハジメを、遠くから見つめていた。その哀れっぽい目がますます情を誘う。

「こんだけ痛めつけたんだ。もう、おいそれと人間様なんて襲うことはできないだろ」

幽香はますます表情を険しくするだけだ。

「甘い」

「ゲロ甘で結構。こいつだって見た目は悪いけど、しよせんはノライヌと変わらねえよ。腹が減れば人を襲うだろうし」

「あなた、妖怪を甘く見すぎているわ」

目の前に、真つ黒な笑顔が迫っていた。

「え」

ぎっくりと切れた口。ぎよろりと見開かれた目。青紫の血液をハジメの顔面にぶちまけて通り過ぎていったそれは、掠め取ったエモノの首筋に邪悪な舌を這わせた。

「千晃ー」

飛び退いて、そいつは壁際へ。ぬるぬらと光る涎が千晃の額を伝

い、閉ざされたまぶたをくすぐり、細い顎先から骨の敷き詰められた地面へと滴る。ハジメが恐れたような変化は起きない。

「ぎ、ギフフフ」

あれえ、おつかしいなあ。

とでも言いたげに怪物は次から次に涎を垂らしていく。強烈な酸がほんの一滴でもそこに混じったときに、何が起るのか。

顔面を真っ赤に染め上げた千晃がどんな叫び声をあげるのか。

そんな想像だけで、ハジメはその場に縫い付けられたように動くことができなくなっていた。

「これで分かったでしょう」

この怪物。その凄まじい邪悪さ。

幽香が肩の力を抜いたのが、ハジメには分かった。手詰まりだ。いかに幽香が早いとはいえど、ここで無策に攻撃を仕掛けるのは危険すぎる。

ハジメには幽香を責めることがお門違いであることくらい知っている。

「俺のせいだな」

自分を肩で押しつけて怪物へと歩いていくハジメに、幽香は目を見張った。

「ちよ、ちよつと、ハジメ」

「責任は俺が取る。見てろよ」

待つてましたと千晃を投げ出して、丸焼けの怪物はハジメに手招きした。あくまでも彼が今晚のメインディッシュとして選んだものは目の前のヒトの男だ。めっぼう強い女は胃もたれを起こしそうだし、今回のエサは肉付きが悪くて食べられたもんじゃない。

「とかなんとか思ってたのかね、お前——はがっ」

伸ばされた黒い腕が喉笛を締め上げたので、後半は言葉にならなかつた。地面に押し倒され、腰の下でどこかの誰かの骨であったものが碎けるのを感じながら、ハジメはさっそく霞がかかりはじめた意識の中に手を彷徨わせる。

「ねえったらー！」

幽香の声が遠い。

「そんなつまらない終わり方で、あなたいいの!？」

彼女がどんな顔をしているのか知る由はない。ぼやけた視界にはただただ、まばらに毛の生えるだけの、醜悪な怪物の顔がでかどかと映りこんでいる。

「よかないさ」

いいわけがない。だが、何ができるといえるのか。

つくづく彼女の忠告を無視したツケが千晁に降りかかってしまった。

それを後悔するには遅すぎる。ならば、バカあにきなりに最後の意地を見せてやるのが、今の彼にできる全ではないのか。

そもそも一か月前に死んでいたはずの命。なぜあの火事場で抗おうと思ったのか。

「それ、は」

その答えは既に出ている。いつぞや、公園で幽香にぶちまけたではないか。鶴見ハジメはこんなところで立ち止まる物語ではない。風見幽香という巨大すぎる壁であっても、乗り越えられないはずがない。

来年の五月を突破して、勉強をするのだ。そして大学へ行く。なぜならば。

なぜならば、俺には。

穴のない五円玉。穴の空いた五円玉。あるものと、ないもの。取り戻せるものと、取り戻せないもの。終わったものと、続くもの。

脳裏に描いたそいつの輪郭を炎が伝っていく。炎が意識を飛び出さる。まるで脳みそに直接丸い輪郭が焼印されていくようだ。ハジメはいよいよ気を失いかけながら、その音を聞いた。

がちり。

幻聴だろうかと考える。

しかしそれは、まるで耳のすぐそばで実際に何かの機構が作動したように思えるほど、はつきりとした音だった。がちん。

填る音。引き起こされる音。それらがハジメの意識にかける揺さぶりは途方もなく大きい。ハンマーで骨の髄でもぶつ叩くような衝撃が遠のいた意識を引き摺り下ろしてくる。そうして感じたものは、今まさに首を粉碎せんとする湿った指の感触だ。

「!!!」

押し潰れた喉で絶叫していた。痛みではない。恐怖でもない。再び胸の内に荒れ狂いはじめた、爆発するような力の衝動にだ。

「ぎっ」

怪物の顔面を炎が焼いた。ハジメの左目から吹き上がった爆炎はプロミネンスじみてぐるぐると彼の体を取り巻くと、目の前の敵を打ち払ったのだ。

悲鳴をあげて怪物が退散していくのを見ながらも、ハジメは自らの体に起こった異変に気づけずにいる。なかば本能的に持ち上げた左手。彼の脳裏から湧き上がった炎が、そこに形を作る。

鶴見一的能力を。

「逃がすかよ」

それは弾丸だ。つらぬく、などと上品なものではない。ゆくさきに立ちはだかるすべてをぶちのめし、力づくで屈服させる荒々しい力だ。

本腰をあげて逃げにかかった怪物は蛇行し、先程までの緩慢さが嘘のような速度で這っていく。その度に空中で幾度も弾丸は自ら爆発し、軌道を変える。

恐れおののいた怪物が空高く飛び上がった瞬間。爆炎の弾丸も垂直に軌道を折った。

「ヒ」

今まで数え切れぬほど恐怖を与えてきた怪物は。

「くたばりやがれ」

その何倍もの恐怖を背負わされ、胴体に風穴をぶち空けられることとなった。

ほくそ笑みながら、ハジメの耳に聞こえるのはぎゆるぎゆると何か空回りする音だ。怒りが引きずり出した莫大な能力のツケが襲つ

てきている。オーバーヒートだ。

「困った子ね」

その体が後ろに崩れる前に、背後から幽香が抱きとめていた。

「は、はは。今度の穴は、なかなか大きいだろう？」

くすりと笑う幽香の顔が、なぜかこの瞬間はいつもよりずっとずつと魅力的で、身近なものに感じた。

「そうね。とつても素敵だったわ」

息を落ち着けて、ハジメはよろめきながらも立ち上がった。まだ全てが終わったわけではない。幽香に肩を借りて歩みを進めていくと、そこには苦しい呼吸を繰り返すだけとなった怪物の姿があった。

「さあ、仕上げよ」

さすがは妖怪。人体なら間違いなく即死する部分に風穴を開けられてなお、その体は生きようとあがいていた。

ゆつくりと風穴がふさがりつつある胴体から、ハジメの指が怪物の頭へと向く。いかに強い生命力を誇ろうと、ここを吹き飛ばされて無事でいられるはずがない。

「なんだよ、お前」

そいつは泣いていた。学ばない怪物はまたしてもハジメの情にすがろうとしていた。それが演技であることなど明白だ。だが。

「そう。分かったわ」

ハジメの指先に残りカスのようにくすぶっていた炎が消えて、幽香は呆れて見せた。

「やつぱり俺にはムリっばいわ」

「いいんじゃないの、そういうのも。ハジメの意思は尊重するわ」

てつきりケチヨンケチヨンに責められることを覚悟していただけに、幽香の言葉は意外だった。彼女はスーツの上着を拾い上げると、内ポケットをごっそりかき出す。

「でもあなたを野放しにするわけにはいかないのよねえ。困った困った、と」

そうして取り出したものは楯円の種だ。縞模様の入ったそいつを

見て、ハジメは首をかしげる。

「季節外れもいいところだ」

「冬に咲く姿も悪くないものよ、案外」

屈託なく笑うと、幽香は乱暴に怪物の眼窩に指を突っ込んだ。絶叫が鼓膜をつんざく。鼻歌を奏でながら目ン玉をえぐり出していく幽香を見るに、ハジメは戦慄を隠せない。

思う存分怪物を虐め抜くと、なぜか息を荒くした幽香がこれまた一片の優しさもなく種を奥深くに埋め込んだ。

「離れましょうか」

ハジメのジャケットで青紫の血を拭って、幽香は焼けたままの手でハジメの手を引いた。二人の背後ですっかり怯え切った怪物が静かに立ち上がる。

「逃げていいわよ、できるものなら」

打って変わって優しく笑う幽香。プライドも意地も粉々に砕かれた怪物は泣き声とも笑い声ともつかぬ叫びを上げて走り去っていく。その姿が、唐突に爆裂した。

穴という穴から飛び出したものは瑞々しい新芽だ。怪物の並外れた生命力が、意識を失うことすら許さない。豊富な養分を糧にすくすくと成長していく巨大な植物に怪物の姿が飲まれた頃、巨大な花卉が一斉に花開く。

怪物は死ねない。ほぼ無尽蔵の栄養源を、みすみす手放すほど植物の世界は甘くない。咲き誇る巨大ひまわりの中からは、未だにくぐもった叫び声が響いていた。

「産子這う子に至るまで」

思わず聞き覚えのあるフレーズをハジメが呟くと、くすぐったそうに幽香は身をよじる。

「御覧じろ、ってね」



どうかかこうにか家に戻った頃には日付を跨ぎかけていた。

ハジメの力、怪物、路地裏。考えるべきことは山積みだったが、それよりも先にいつもの鶴見家を取り繕わなければいけなかった。

「やるわよ」

「よしきた」

粘液まみれの千晁を幽香がどうにかする間にハジメは玄関先にぶちまけられた粘液を洗い流す。服もスーツも汚れたものはさっさと処分して疲れきったハジメが食卓についたころには、手際よいものできちんと夕食が湯気を立てている。

「ごめんなさい、今日は簡単で」

といっても温め直した朝食だったりする。

さすがの幽香もいくぶん疲れたようで、額に浮いた汗を拭ってみせた。

「お前ー」

唐突に椅子を跳ね飛ばしてハジメが詰め寄る間、幽香は目を白黒とさせていた。恐る恐る彼が手を取った段になって、幽香はようやくその行動の意味を知る。

「ああ、これ」

こともなげに言う彼女の手は手当もされないままだった。いつもハジメの治療に使われてばかりの薬箱を青年が引き出すのを止めようとして、幽香はふっと笑った。

「まったくよね。私をキズモノにした責任、とってもらおうかしら」

「冗談言ってる場合かよっ」

不器用に治療しようとして、ハジメはふと手を止めた。手のひらに空いていたはずの大穴はいつの間にかふさがっている。むき出しの肉も、引き裂かれた肌も、記憶にあるよりずっとマシだ。

「手を取って、そのまま？　よければ踊る？」

「わ、悪い」

修羅場で見れば何もかも一回りはひどく見えたはず。そう片付けてハジメが包帯を巻き終えた頃に、ようやく千晁が起き出してきた。

「おっはよー」

慌てて席に着いたハジメにも、出しっぱなしの薬箱にも気づかぬ様子で彼女はリビングを横切ると、椅子を引きずって幽香の隣に座る。自分の髪に差された一輪の花にも気づいてはいないようだ。

『悪いことは全て忘れさせてくれるわ』

名前は忘れた。ただ、幽香の語った効果は間違いなく発揮されている。千晃がこれ以上外を恐れるようになったところでもいいことはない。すべてを一夜の悪夢と片付けられるなら、それに越したことはないのである。

「あにき」

そんなことは露知らず、意地悪に笑った千晃はさっそく命の恩人に喧嘩をふっかけてくる。

「今日のおねえちゃんのご飯も、おいしいよね」

隣で幽香が顔を曇らせた。彼女が後悔の面持ちで見つめるのは、今日の朝食である。どうして普段は傍若無人な彼女がそんな顔をするのか、ハジメには分からない。だが、そこにはなにか大きな意味があるように思えてならない。

そんな幽香と目の前の味噌汁とを交互に見つめて、ハジメはおもむろに箸をとった。

温め直したものはあるが、それは。

「ああ」

冷え切った体も、怒りに縮れた心も。

「悪くないな」

「へ」

ことりと空になった椀が置かれる傍ら、小さく声を漏らしたのは幽香である。予想外の反応に呆気にとられる千晃の隣でわずかに頬を染めて、強ばった表情が花開くような笑みにとって変わられる。

「よかった」

「ちよ、ちよまつ、ええええええええっ!?!」

食卓をつんぎくのは、半ば悲鳴と化した千晃の大声だ。

「千晃、はしたないわよ」

「だだだだだ。あにき褒めてないし！ あんな言葉で納得しちやっ
ていいのちよっという雰囲気醸し出しちやっていいの!?!」

「いいわ」

「いいんだ!?!」

千晃が騒いでいると、残業で疲れきった様子の父が帰ってくる。それでもソファにカバンを投げ出すと、食卓を取り巻く一同の様子を見て表情を明るくする。

「なんだなんだ、おれも混ぜてくれよ」

「き、聞いてよ。お姉ちゃんがあにきに籠絡されて」

そうしていつもどおり騒がしい夕食を済ませていると、疲れも、辛い出来事も、綺麗さっぱり忘れてしまうのだった。

第四話 『右巻きの迷宮』 おわり

9 『遅咲きの歓迎会（上）』

トドメは目に見えない衝撃波だった。

そいつにぶん殴られるのが何度目なのか、すでにハジメは数えることをやめている。とにかく数メートル上空に舞った体はくるくると無様に回転して、そのまま薄く積もった雪の上で二度バウンドした。

今日の彼女はおそらく、実力の五千分の一くらいで相手をしてくれたのではないだろうか。どれだけ手加減したところで痛い目をみるのはいつもハジメであった。

ボロ雑巾と化した青年の視界で、逆さまの幽香が何かを言っていることはわかる。しかし頭を打ったようで、あいにくと山彦のように声が遠く曖昧だ。

いちいち聞いているのも億劫で、かわりに空を見上げる。朝方。ところどころを茜に染めた曇り空からはボタ雪がじゃんじゃん降り注いでいた。

「……いってえ。バケモノ女め」

毒を吐いて目を瞑る。火照った首筋に触れる雪が心地よい。

四日前。

ハジメは路地裏の不気味な世界を攻略し、幽香の力を借りながらも蝸牛の怪物を見事に撃退してのけた。そのときに啖呵を切つて放つた一発。その反動で、彼の能力に掛かっていた安全装置のようなものは完全に壊れてしまったようだった。

幽香は『すみれ草のようにかわいらしい威力ね』と評してはいたが、人間と同サイズの怪物に風穴をブチあけるくらいの威力はある。それを、半ば衝動的にどこでも発射することができるようになったのだ。

今のハジメは誰の目にも見えない小型拳銃を携帯しているようなものだった。

「ハジメ、そろそろごはんにしない？」

冬空を仰ぐ視界に、真っ赤なコートを着込んだ幽香がひよこつと現れた。

ハジメの持つ能力は確かに現代の社会では危険なものだが、目の前の女ほど奔放に破壊を振りまくようなものではない。

「ねえったら。もう、聞いているの?」

「今さ、ちよつとノーシントー起こしてるところなんだけど」

「へえ。それじゃあもつたいないけれど、一人で食べちゃうんだから」
「いたずらっぽく笑って去っていく幽香。ハジメとしても空腹には逆らえないので体をむくりと起こす。ここ数日の『訓練』で液晶のひび割れた腕時計の表示は日曜の午前七時。

学生としては眠っていたい時間だ。

『年末は学校がお休みになるのね!』

お前にはもともと休みなんて関係ないだろうが、と学生特有の世間知らずさで答えてから数時間後。ハジメは心の底から後悔するハメになった。たとえウソでも学校へ行くフリをしておくべきだったと。

『あのね、ハジメ』

それは昨日の夕食が終わった時のことだ。

千晃が定位置のソファに戻っていき、父がテレビの野球中継にいつもどおりかじりつき始めた頃合に幽香がハジメに向かって席を寄せ
る。

『な、なんだよ。そんな改まって』

『明日デートしない?』

その上目遣いの物言いに束の間言葉を忘れた。

『ダメ、かしら』

『な……………何時から』

神に誓って、断じて、絶対に嬉しくなかったとハジメは頑として言い張る。しかし朝早くだというのにお弁当を持った幽香に起こされて文句を言いながらも準備をするのだった。

やはりというか、それはモテない男子高校生のサガなのだろうか。
そうして人気のない早朝の公園にまんまと連れ出されると、地獄の訓練が始まったのであった。

これから約二週間に渡って冬休みというものが存在することを考えるだけにハジメは気が重くなる。毎日こうして幽香のおもちゃにさ

れて、五体満足で新学期に登校できるのだろうか。

彼が体の上に積もった雪を払いながら立ち上がると、屋根付きの休憩所で幽香がポットから味噌汁を注いで待っていてくれた。

「まだまだチカラはへっぽこだけれど、立ち直りは早くなったわね」「そうかよ」

左腕での生活にも慣れてきた。

頬にできたアザをさするのやめて暖かいコップを受け取ったところで、ハジメは休憩所の周りだけがほんのり暖かいことに気づく。彼の視線の意味に気づいて幽香は得意げに胸を張るのだった。

「寒いのが苦手でしょう?」

冷静に考えてみると奇跡のようなことを起こしながら、まるで出がけに母親がコートをあてがってくれるような優しさと気軽さだ。いちいちツツコミを入れていたら神経が持たないので、

「得意なヤツなんていないだろ」

と、ぱっとしない憎まれ口を叩いて味噌汁をすする。幽香はいつものように微笑むだけだ。

実際ハジメが一緒にいるときの彼女は笑ってばかりいる。何が楽しいのか、そもそも本当に笑っているのか。むしろ彼女がもとからそういう顔で生まれてきたと言われたほうが、ハジメとしては素直に納得できる。

「失礼よ」

「何が」

「人の顔ジロジロ見て、ため息ついたり勝手に頭痛を抱えることが。それで、今日はどうかしら?」

ハジメはううむと唸った。

幽香が弁当の感想を求めていることは明白だが、何度聞かれても慣れないもので、その度にハジメはコメントをひねり出す必要があった。未だ彼女に対して『悪くない』以上の感想を与えていない。

「お口に合わなかったかしら?」

「いや」

絶対絶命のピンチを何度も救われた今となって、彼女を邪険に扱う

理由は特にない。確かに彼女は半年後の殺害宣言をしているし、こうしてハジメをボコボコにすることが半ば日課となりかけているもの。

それでも面と向かって感想を求められると、どうしても素直になれない。

「あー、不満はない、な」

要するに照れくさいのだった。

「……もう」

対する幽香はどこか不機嫌にハジメを睨みつけて箸を取る。

ハジメに振舞う料理に関して彼女は真剣だ。ヘタに頭をひねるよりも、マズいと言い張っていた頃の方が、彼女は張り合いを感じているようだった。

「うん。不満はない」

気の利いたことを言おうとして、もう一度言わんでもいい事を口走る。じろりとハジメを睨むと、幽香は身を乗り出して大きなからあげを一つ差し出す。それが何かと口を開いて、いつかの病院の記憶が脳裏をよぎった。

「ぐおっ」

しかし時すでに遅し。

子供のげんこつほどもあろうかという肉の塊が喉奥に滑り落ちていく。激しくむせて手をさまよわせるハジメの前から熱々の味噌汁を取り上げて幽香は一気に飲み干すのだった。

「うふふ。こういう時のハジメは相変わらずいい顔するわねえ」

「げっ……がッ……ちよっ、これ、マジ……」

マジでヤバイ。

それでも幽香はギリギリのラインを心得ているので、ハジメが窒息する寸前まで、あくまで上機嫌にニコニコと見守るだけだ。

「この、サディスト、が」

彼女が未だ本気を封印していることは明らかだが、本領はいかなく発揮されているような気がしてならない。

片や穏やかに微笑み、片や顔を真っ青に咳き込み。

いずれも気づかぬまま、ホワイトクリスマス朝はこうして明けていくのであった。

◆◆◆
「どうして主賓が買い出しするんだろうな」

午後は戦わなくてもよくなった。

幽香の歓迎会兼千晃のお見舞い会を開催するという雪之丞の提案はいつの間にか確定事項となっており、おまけに彼はあろうことかクリスマス当日に開催日をぶつけてきたのであった。

「おまけに料理の準備もよ。今回は流石にハジメや江梨花にも手伝ってもらうけれどね」

ド田舎町の商店街には珍しく人通りが多い。

年末商戦とクリスマスのセールに湧くアーケードを、重い買い物袋をぶら下げて二人は歩く。折角だから正月の準備もしちやいまいしよと幽香が言い出した結果、ハジメは無事な腕で耐えうるギリギリの荷物を任されていた。

ショーウィンドーに映る青年の姿は、すっかり彼女の荷物持ちが板についている。

「にしてもヘンな話だよなあ」

「ヘンな話よねえ」

青年はふと足を止めて商店と商店の隙間へと目を凝らす。蝸牛の怪物が片付いてなお、そこには未だ異様な雰囲気か漂っていた。奥へと踏み入れば、あの不気味な世界はまだそこに広がっているようだ。

「あんな雑魚がここまで大掛かりなものを用意できるはずがない。あそこは誰かが別の目的のために作った場所かもしれないわ」

赤いコートの襟を正す幽香の手には包帯が巻かれている。

「それを私たちが気にしたところで何の意味もないのだけれどね。さあ、行きましょ」

「そりゃあ、そうだけど」

いつも帰り道にブラブラ立ち寄るアーケードの裏側に非日常が横たわっていると考えると落ち着かないものがある。そうした怪異を路傍の石のように見過ごせるほど、幽香のいた場所は奇妙なものに満

ち溢れていたのだろうか。

花屋でクリスマスリースをしげしげと見つめる幽香の背中に、ハジメは疑問を放る。

「お前ってさ、どこから来たの？」

「幻想郷」

「何郷、だって」

「げんそうきよう、よ。妖精とか悪魔とか妖怪とか神様とか。そんな連中がお手々つないで仲良く——はないかもしれないけれど、それなりに上手くやっている場所よ」

軽い気持ちでした質問に、とんでもない答えがぽんと飛び出てきた。

ぽつかりと口を開いたまま立ち尽くすハジメがよほど面白かったのか、幽香は声をあげて笑った。

「マジ？」

「マジよ。ハジメも一度来てみればいい」

手を振って花屋に背を向けた彼女を見送るように軒先の花が一斉に揺れたので、ハジメは目を剥く。

「来てみればって。アンタの話が本当なら、そんな簡単にいけそうな場所じゃない気がするんだが」

未だ熱烈な歓迎の気配を幽香に送り続ける花々を何度も振り返りながら、ハジメは彼女の後を追う。

「そうね。あそこは常識と非常識を分離する壁、というか結界のようなもので守られているのだけれど。こっちに来るとき邪魔だからぶっ壊してきちやったわ」

見えもしないだろうものを力づくで破壊して外の世界へ。

「それ、マズいんじゃないか？」

「知らないわ。誰も文句言わないから、きつと許されたのよ」

文句を言えるようなヤツがいなかった、の間違いだろう。

相変わらず幽香のむちゃくちゃぶりは気持ちがいいくらいだが、依然としてその力と対抗しなければいけない青年は乾いた笑いを漏らすことしかできない。それでも、彼は前ほど絶望しなくなっていた。

彼は力を抜くようにふつと息を吐いて、ほくそ笑んだ。

「俺もあんたみたいに強くなれるのかな」

「難しいでしょうね」

ハジメはがくりと肩を落とす。

ちよつとやる気を出した途端にコレである。もしかすると目の前の女は命のかかった分の悪すぎる勝負にひいこら言う青年の姿を見て遊んでいるだけなのではないか。

そう思うだけでも次第にハジメの表情は曇っていくのだった。

「そんなに気落ちしないでってば」

焦ったように幽香が宥める。

「別に私を殺すのに、あなたが同じくらい強くなる必要はないのよ」

「言ってる意味がわかんねー」

「はいはい。少なくとも会った時よりはずっと強くなったわね。えらいえらい」

そう言つて、彼女は完全にヘソを曲げた青年の頭を唐突に撫で始めるのだった。

「ばっ、やめろつたら！」

振り回す手は紙一重で幽香に当たらない。あくまで自然な動きでハジメの反撃をいなしながら、尚も幽香のよしよし攻撃は続く。ハタから見れば、出来の悪い弟と、その扱いを心得た姉のようにはか見えない。

今まで兄として君臨してきただけに、ハジメはどうしていいか分からなくなる。

「さて。これでハジメのご褒美は終了よ」

心ゆくまでハジメを恥ずかしがらせて、幽香は頷いた。

「はア？」

「あなたが強くなつたら質問に答えてあげる。言つたでしょ？」

まったくすぐに約束を忘れるんだから、と幽香は軽く唇を尖らせる。

ハジメとしては聞きたいことがまだまだある。どうして俺だけじゃなく家族や世界まで巻き込む必要があるんだよ、とか。アンタは

結局何者なんだ、とか。

しかしそれに答えるのはハジメがもつともつと成長しなければいけない、ということなのだろう。

「前途多難だな」

未だ自分の能力の全容すら把握していないというのに、ついに十二月もおしまいだ。来年になるとハジメはついに高校三年生で、進級だ模試だ進路だと騒いでいるうちに桜の季節がやってくる。彼にとって、それは決戦の季節だ。

「ま、急ぎはしないさ」

それでも彼は、ゆっくりやっていこうと思う。

蝸牛の怪物と戦って、束の間幽香と心を通じ合わせることができたようにハジメは感じた。それならば来年の五月までに彼女の心を変えてやればいいだけのことだと考える。

骨は折れそうだが決して無理なことではない。

「そうよ。焦ってもいいことないわ」

幽香は朗らかに微笑んだ。彼女がハジメの考えを見抜いたとしたら、甘いと断じるのだろうか。出来るんならそれもいいんじゃないのと頷いてくれるのだろうか。

良くも悪くも、お互いにお互いの心中を察しきることはできていない。

「その通りだな。まあ、お前が言うなよってカンジなだけだよ」

呆れたハジメは雑踏に視線を彷徨わせる。

大賑わいの中での買い出しは長引き、時刻はすでに正午を過ぎようとしている。アーケード街の出口から見える駅前は真っ白だった。雪は降り止むどころか、いつそう勢いを増している。

「おっ」

駅前を早足に歩いていく人ごみの中にハジメが目凝らす。

「どうしたの？」

「巫女さんみたいのがいてさ。なんていうか、こんなところで珍しいなって思ってた」

「そう」

幽香もハジメの視線を追いかけるが、その姿はとつくの昔に人波に紛れて消えていた。

「文句を言いに来たのはアナタ。ってことね」

意味深な幽香の呟きにも、その口元がわずかに鋭い笑みを形作っていることにも気づかないままに、ハジメは家路を急ぐ。雪はまだまだ降り続けるようだった。

10 『遅咲きの歓迎会（下）』

オーブンの丸鳥を入れて、江梨花は満足げに額の汗をぬぐった。歓迎会の準備を進めるうちにすっかり暗くなった窓の外。台所の明かりに照らされて白雪が舞っている。

台所を所狭しと動き回っていれば、オーブンの余熱だけでも十分暖房がわりになる。

「ねーねー」

幽香の背中にべったりくっついたままの千晃が、幽香の肩に顎を乗せた。もう幽香も慣れたもので、別段動きを緩めずに一枚ローストビーフをスライスすると、千晃の口に運んでやるのだった。

「お姉ちゃんってさ、どうしてこの町に来たの？」

「そうねえ」

千晃がうまいうまいと口を動かしている間に、幽香はわずかに考え込む仕草を見せた。代わりに包丁を引き受けた江梨花も思うところがあつたのか、首をかしげる。

「幽香さん、ハジメの従姉さんなんですよね」

「そうだったわねえ」

今度は千晃が首をかしげる番だった。

「そうだったっけ？」

「そうだったことにしましょうよ」

「うん。いいよー」

しかしそこは流石の千晃だ。あまり深く考えず、とりあえず良さげな方へと突き進むあたりは兄によく似ている。

一方、掴みどころのない会話を繰り広げる二人に江梨花の頭上を疑問符が覆い尽くしていく。そんなことはおかまいなしと、千晃は幽香に頬ずりしながら次の一切れに手を伸ばすのだった。

「お腹いっぱいになっちゃうわよ。それで、なんの話だったかしら」

口いっぱいに肉を詰め込んで、千晃は体を揺すった。彼女に振り回されるようにして、幽香は微笑む。

「こっち来た理由」

「ああ」

それはまるで、本当の姉妹のようで。

微笑ましい光景を前に、江梨花はいいなあ、と呟いて包丁を手に取り、幽香が手入れしているのか、切れ味は抜群だ。そう力を入れずとも肉が切れていく。

江梨花は食べるのと同じくらい料理が好きだ。その腕をみんなに振るえるというのなら、もう言うことはない。だが。

「簡単に言うとは故郷に居場所がなくなった。みたいなどころかしら」

次の瞬間に幽香の口から転がり出てきたものは、江梨花の上機嫌を根元からへし折るような言葉だった。

思わず手を止めた江梨花がぎこちなく幽香に首を向ける。真顔の幽香と視線が交錯する。束の間、換気扇とオーブンのうなりだけがその場の音となる。

「あちゃあー」

相変わらずマイペースに、千晃は空気が読んでいるのに絶望的に読めていないリアクションを見せると次の肉をぱくぱくと食べていくのであった。幽香はただただ笑って肩をすくめて見せた。

「ほーんと、あちゃあ、よねえ」

「お姉ちゃん何しちゃったの？」

「その、千晃ちゃん」

おいおいお前はそこまで聞くのかよ、と江梨花の表情が物語っている。

「何も。ある日いきなり地元を仕切ってるヤツに『お前はこの土地の負債だ』って言われて殺されそうになって。いちいち相手するのになんざりしたからひと暴れして、出てきたの」

「ふうん。大変だったんだねえ」

大変なんてものじゃない。

もし幽香の言が本当なら、とてつもない修羅場である。

別に気分を悪くするでもなく、まるで昨日の天気のことのようにあつけらかんとして答える幽香と相槌を打つ千晃を見ると、江梨花は逆に自分がおかしいんじゃないかと思えてくる。

「いっ」

気もそぞろに包丁を動かしていると、さつそく刃先を指の上に滑らせてしまうのであった。

「あらあら。見せてみなさい」

「あ、あはは。大丈夫ですよ。大丈夫。こんなの、スグ治りますから」とつきに指先を押さえたままの江梨花がごまかすような笑いを浮かべた。彼女の手を取ろうとした幽香を遮ったのは、やはりというか空気の読めていない千晃であった。

「お姉ちゃん。ウチにいたければいつまでだっついていいんだからね」

「ハジメが許すかどうかよね。ねえ、江梨花、本当に平気？」

江梨花はただ、指を握り締めたままぼんやりと立ち尽くしていた。

「江梨花？」

「——えっ？ ああ、ああ、ええと、ちよつとバンソーコーもらってもいいですか？」

幽香が場所を教えると、江梨花は慌ただしく駆けていくのだった。怪訝そうに彼女の後ろ姿を眺めていた幽香だったが、軽く首を振って千晃に向き直る。

「千晃、さっきの話、ハジメには内緒よ」

「おっけー、女の子同士のヒミツってやつだね」

曖昧に笑って見せて、幽香は調理に戻るのだった。



ハジメと雪之丞と父は、リビングでダラダラとしながらテレビを見つめていた。

「邪魔だっつの」

ちやつかりとストーブの前を占領した雪之丞に、ハジメはみかんを投げつける。ぽこんと軽い音を立てたのはみかんか、それとも彼の頭の方か。じろりとハジメを睨みつつ、それでも彼はその場を独占しつづける気らしい。

「風こねえだろうが」

二発目のみかんが直撃するのだが、雪之丞はあくまでどかないつも

りだ。最高のポジションに陣取ってから雪之丞がラツパ飲みするウイスキーが、彼をより一層意固地に行っているようだ。

「やだ」

幼馴染の姿にどこかいつもと違うものを感じて、ハジメはその隣に腰を降ろす。酒のおいがふんと立ちこめている。

「どした？」

「くっそお、どうしてお前が幽香さんとひとつ屋根の下でイチャコラサツサでkindだよ。常識的に考えておかしいだろ。俺を見て。ホラ、ホラホラ。舐め回すように」

いろいろと弁解したいことはあるが、酔っぱらい相手に何を言ってもムダである。とりあえず言われるがまま、ハジメは雪のように白い美青年をげんなりと見つめる。

「で、何」

「どこから見てもスキのない美形だろ!? なのにどうしてもモテない。どうしても女が寄り付かない。いつも隣にいるお前や江梨花が俺のツキをぜんぶ吸い取つ、クソ、くっそお!」

後半はほとんど嗚咽にとって代わっていた。

未成年のくせにすっかり泣き上戸が癖になってしまった雪之丞にハジメは呆れて見せつつ、それでも笑って酒の瓶をひとつ引き寄せる。

「そうだな。いつも一緒にいるからな」

ぐしゅぐしゅと鼻をすすりながら、雪之丞も大半空になったボトルを持ち上げる。

「俺たち、友達だもんな」

「わたしも混ぜたっていいんだよね、それ」

江梨花がオレンジジュースを片手に立っていた。

「当たり前だろ」

誰からともなくかちんとボトルを打ち鳴らし、笑い合う。思い返せばいつでも三人だった。小学校の頃に知り合って、雪之丞はずっとモテない美形で、江梨花は何年たってもチビのまま。

「メシ、そろそろできるっ。」

「あとは焼きあがりを待つだけってかんじ。それにしてもユキとハジメ、とうとう働かなかったよね」

平和すぎる日常はずっと続いてきた。これからもずっとずっと、それが変わらなければいいとハジメは願う。願ってはいるが、その雲行きがどうにも最近怪しい。

「おい、ちゃんと俺は買い出しとかしたぞ」

「でも幽香さんが大半やったんでしょ」

答える代わりにちびりとウイスキーを流し込んで、ハジメは黙りこくる。

風見幽香。彼の平凡で平和な生活を守るためには彼女を殺さなくてはならない。でなければハジメは死ぬ。家族や二人の友人も無事では済まない。少なくとも、彼女からはそう伝えられている。

果たしてそれは本当のことなのだろうか。

ハジメは幽香によって何度も命を救われている。しかし、実際のところ何度か死の恐怖を顔面に叩きつけられてもいる。

彼女の性格を考えるのなら、ただ単に遊ばれているだけ、とも知れず。

「は、ハジメ?」

ぐるぐると思考の袋小路をめぐらうちに、いつしかハジメのペースは恐ろしく上がっていた。目を白黒させる江梨花を見て、ようやく自分が水のように飲んでいたものが酒であることを思い出す。

「ほんと、一体誰が主賓なのやら」

彼の悩みの種は、今まさに大量の料理をテーブルに並べていくところだった。

「ですよねえ」

ちやつかりとその隣に回って頷く雪之丞に静かな殺意を燃やしつつも、ハジメはやおら立ち上がり、ボトルを掲げる。げっぷを一発。

「風見幽香さんのゴケンコウとゴタコーに乾杯」

さっそくウイスキーをあおった青年を見つめて、幽香はやれやれと肩をすくめる。

「あんまり、飲み過ぎないようにね」

◆◆◆
「かんぱーい！」

半数以上が未成年にも関わらず、その歓迎会は一時間と待たずしてタガの外れた酒の酌み交わし合いと化していた。すっかり酔いつぶれてダウンしたハジメは床に伸びている。この場で平然としているのは真横に座った幽香くらいのものであった。

しかし彼女のニコニコ顔からはその余裕を察することができない。よく見れば、彼女の体はメトロノームのように左右に揺れていたし、数本の空いたボトルが彼女の膝の上に転がっていた。

「お前、だいじょ」

「皆さんー！」

幽香はハジメの言葉を遮り、高々と手を挙げる。全員の期待と不安の視線を集めて、彼女は焦点の合わない瞳を満足げに細めた。

「ウフフ、脱ぎます」

しかし、立ち上がってブラウスのボタンに指をかけるなり彼女はピタリと動きを止める。

彼女の顔色が一瞬にして紙のように真っ白になり、そのままぎこちなく崩れ落ちる。彼女の体が着地点して選んだものはハジメだ。

「うぐえっ」

彼の腹に猛烈なヘッドバットを決めたまま、ついに幽香は潰れたのだった。

「お、おい。あーもう」

その場に放つていくのも気が引けたので、ハジメは幽香に肩を貸して立ち上がる。主賓が退場する段になっても、この宴会は静まるどころかより暴走の度合いを増しているようだった。

「じゃあ俺が代わりに」

と、脱ぎ始めた雪之丞を捨て置いてリビングを横切っていくと、幽香が足元をもつれさせてふらりと体勢を崩す。とつさに受け止めようと差し出したのはギプスに包まれたままの右腕。

ハジメは痺れるような痛み悲鳴を上げ、幽香は床にごろりと投げ出されて不機嫌に唸った。

「お前、弱いならこんな風に飲むなよ」

「なによお」

その瞳でさえ、今はいささか迫力に欠ける。

もはやへろへろの幽香は立ち上がることを拒否していたため、なんとか千晃の巣窟であるソファまで引きずっていつて横たえるのだった。

ハジメが片腕一本で難儀している間ずっと、彼女は『埋めてごめん』だの『本当にやるとは思わなかった』だのと、ここではないどこかにいる何者かに謝まり倒していた。

あまりにも謝罪の文言が恐ろしすぎるので、ハジメはこの際深く掘り下げないことにする。ソファに彼女を横たえてやって、ハジメは改めてリビングを見渡した。

「一番。ウミガメの産卵」

「ぶっ——ぶははははは！ ユキちゃん超ウケる。ねえ撮っていい！いいよね！」

あられもない姿でほく前進する雪之丞と、爆笑しながら携帯のシャッターを切る千晃。そしていかに自分が不甲斐ない亭主であったかと滔々と語る父に真面目に付き合う振りをしながら、まきびしのようにビールの王冠を雪之丞の進行ルートに撒いていく江梨花。

「明日、大丈夫かな」

そして、今しがた全裸の雪之丞が上を這っていったのは紛れもなくハジメの学ランである。夜が明けたら一番でクリーニングに出そうと決めて、冷蔵庫にミネラルウォーターがあつたことを思い出す。

「水、持ってくるから……？」

そんなハジメのシャツの裾を掴んで離さないのは幽香の白い指だ。もちろんいつもの万力のような力はすっかり失せている。振り払うのは簡単だが、掌に巻かれた包帯を見るだに邪険にすることがためらわれる。

「ハジメ。あなたはずるい」

ずるい。何がだろうか。

言われた当の本人としては、ありえない力と美貌を理不尽に振りま

く幽香の方が、あまりにずるいと感じる。

そんなことはお構いなしに幽香はとろんとした目でハジメを見上げるのだった。

「私だつてご褒美が欲しいのに」

ハジメには、とつきに彼女の言うところが理解ができなかった。

「悪くないって、言ってくれたじゃない。それじゃ私も成長したってことでしょ。なら、私にだつてご褒美があってもいいとは思わない？」

蓋を開けてみれば何でもないようなことだ。幽香とハジメの間に交わされた約束。お前ばっかりいい目を見やがって、と。要するに彼女が言いたいのはそういうことらしい。

「俺がなにか話してやればいいのか」

こんな化物みたいな女にも多少の可愛げはあるんだな、と。苦笑してハジメは彼女の枕元に腰を下ろした。

「違う。私のお願いを聞きなさい。一つでいいから」

幽香の命令を聞く。あまりにぞつとしない話だ。いったいどんな地獄に飛び込まされることになるのかと慄きつつも、ハジメは視線で先を促した。幽香はほんの少しだけ口ごもって、ぽつりと

「……ちゃんと、名前で呼んでよ」

派手な肩透かしをくらった気分だった。そんなハジメとは正反対に、これは幽香にとってひどく深刻な問題なのだった。

「私の名前はアンタでも、お前でもない。ましてや風見幽香なんてふざけた呼び方も気に食わない」

何かが決定的にこじれているような気がしてならない。ハジメは、頭の中で問題をシンプルに整理していく。風見幽香と鶴見ハジメの関係。

乱痴気騒ぎを一瞥して、幽香に囁く。

「俺とあんたは殺し合う。かもしれないんだろ」

そうならない余地だけは残しておきたかった。

「かもじゃない。絶対に命の駆け引きになるわ」

にべもない。むしろそれ以外の可能性の存在を彼女は認めたくな

いようでもある。

「だからこそ、殺し合う時くらい名前で呼んでほしいの」

長い沈黙。

「かざみさん。じゃあ、ダメ？」

「馬鹿」

それきりシャツを手放し、幽香は腕をだらしなく投げ出した。それを取って彼女の腹に乗せてやる間、一瞬ハジメの動きが止まる。今、ハジメは幽香の体に触れている。

電撃的なヒラメキだった。

「なあ、おい」

返事は深い寝息だった。

しばらく迷って、ハジメは思い切り幽香の額を弾いた。彼女は唸って表情を歪めたが、起き出す気配はない。完全に酔い潰れている。

それを確かめた瞬間、ハジメの瞳と指先に小さな炎が迸った。

彼女の理不尽なまでに強力な防御は、今この瞬間仕事を放棄している。

「らしくないな」

爪先を幽香のこめかみにつきつけて、ハジメは自分の声が遠いところから聴こえてくるように感じる。さんざんハジメを不運のどん底に突き落としてきた神は、この瞬間に最大のチャンスを与えてきたのである。

「隙だらけだぜ、あんた」

ふとりビングを振り返る。そこにあるのは日常だ。これから起こることを彼らは知らない。ハジメは幽香の頭に風穴をあける。彼らに気づかれる前に幽香を運び出し、そしてどこか、人の目のない場所で彼女の死体を能力で完全に破壊して殺人の証拠を隠滅する。

できる。

今の好機なら、今の能力ならできる。

ハジメの息は小刻みだった。

震える指先を見つめて、今この瞬間決断しなければいけないと思う。これはルール違反ではない。意識の中のトリガーに指をかける。瞳を燃やす炎が光量を増す。

そこで終わりだった。彼はいつまで経っても最後の一步が出せない。

「だけど、俺はまだまだアンタを知りたいんだ。俺を助けたアンタのことを」

それは結局のところ、誰かの命を奪うという決断に踏み切れない意気地なしの言い訳に過ぎないのかもしれない。

「これから先、いくらだって機会はある。強くなって、お前をあつと言わせて、それでも分かり合えないなら、またこうして一緒に酒を飲むさ」

腰を上げてハジメは肩をぐるぐると回す。どうしようもない凝りがほぐれていくようだった。

「こないだはかっこよかったよ。千晁をありがとう」

毛布を取りにいくハジメの後ろ姿を、薄目を開いて幽香は見つめていた。

「楽しいうちに死ぬるのなら、それに越したことはないのにね」

究極の盾と究極の矛。

それを持ち合わせるのが風見幽香の肉体だ。彼女が自分の意志で滅びを受け入れようとしれない限り、究極の矛盾が崩れることはない。ハジメは、今しがた看過したものが千載一遇のチャンスであるとも知らずにいる。

ただ、チャンスを逃したのがハジメだけとは限らない。幽香はほう息をついて、ハジメの背を視線で撫ぜた。

「もうちよつとだけ、私は夢を見ていてもいいのかしら」

「ああ、そうだ。それと」

ドアノブに手をかけたハジメが唐突に振り返ったので、幽香は慌てて目を瞑る。とたんに酒のしみた頭にぐわんぐわんと響くような大騒ぎの声。

「その」

それらを縫ってなお、ハジメの声ははつきりと聞こえた。

「幽香、ようこそ我が家へ。言い忘れていたけれどさ」

それは誰が聞くともしれないままに転がりてた、何気ない一言だったのだろう。だが、寝たフリを決め込む外ない幽香にとってあまりにずるい一言でもあった。

「ずるい」

水と毛布を手にハジメが戻るまで、幽香はずるいずるいなとぼやき続けるのであった。

第一章『蝸牛の十二月』おわり

1月の訪問者

1 『そろそろ喧嘩をしましょうか（上）』

薄暗く湿った路地の壁に反響するのは、ふたり分の悲鳴のような喘ぎだった。

その片割れである鶴見ハジメがこの裏路地の世界に踏み入ったのは忌々しい蝸牛の怪物の件が一度目であり、今回もその例に漏れず絶体絶命のピンチであった。

「ユキ、避けるー！」

幼馴染の背を突き飛ばして、ハジメも体を伏せる。

路地の暗がりから迸った青白い閃光が二人の頭上三寸を駆け抜けていった。彼らを追い越し、曲がり角で爆裂したそれが電撃を撒き散らす。距離を置いて髪が逆立つのを感じながら、ハジメは雪之丞の手を引いて駆け出した。

「くそおおお、一体全体なんなんだよ。あいつ、なんなんだよ！」

「うるさい、さっさと走れよー！」

男二人で足をもつれさせながら振り返ると更に数発の閃光が放たれる瞬間だ。

何の変哲もない紙切れが物騒な電撃に変化する寸前、淡い光がそれを放つものの姿をおぼろに浮かび上がらせる。

まるで人形じみた、凜と整いすぎたきらいのある風貌。そして、洋服とも和服ともつかない不可思議な装束。裾の翻る様は天女にも似て。

「やべえぞ、おい」

そして曲がり角の先には行き止まり。

どうあがいても絶望の状況にさっさと膝を折った雪之丞を背に、ハジメはそいつと向き合う。無数の札を手に、余裕に満ちた足取りで近づきつつある少女は、まるでダメな飼い犬に手を焼く主人のような、呆れの混じった微笑みを浮かべている。

「俺が何をしたー！」

壁にすがって雪之丞が叫ぶ。

「普通に学生して、さつきまでだつて普通に遊んでただけだ。なあ、そうだろ?」

「ああ。お前は悪くない」

苦りきつた顔を少女に向けて、ハジメは頷いた。むしろ悪いと言うなら、それは彼を巻き込んだハジメだ。それなら彼を救い出す責任もまた、ハジメにあるはずだ。

もはや電撃の塊となりつつあるお札を構えた少女に対峙するハジメの左腕を炎が伝う。折れた腕をかばうように半身になって燃える指先を突きつける姿は、まるで銃を構えているようだ。

「うわわっ」

唐突に吹き上がった炎と級友の変貌に、雪之丞が悲鳴を上げて飛び上がった。一方の少女は落ち着き払った様子で軽く目を細めたただだ。

「なあアンタ、逃げたいんなら逃げたつていいんだぜ」

すみれ草のような可愛らしい力を手に、それでも一度指先と瞳を燃やすと奇妙な自信が湧いてくる。明らかに少女は強い。だが、流石に幽香のような規格外とは思えなかったこともある。

「お前、それ!」

「チビるなよ、ユキ。俺の超絶パワーを見せてやる」

大物ぶつて不敵な笑いを浮かべると、ハジメは得意げに吠えた。

背後の雪之丞が一か月前の自分の姿に重なって見えていた。炎に包まれ、ただただ怯えて逃げ回ることしか出来なかった自分に。だが今は違う。

逃げ回るのはもう終わりだ。汚名はここで返上する。

度重なる攻撃でズタボロに引き裂かれたジャケットさえ、心の中ではヒーローのマントだ。誇らしげに片腕をかざして少女へと歩いていくハジメは色々なものを見落としてしまっていた。

「ふ、ふざけんなよ。どいつもこいつもワケわっかんねえコトしやがって!」

恐怖と困惑と、そしてまた別の感情がないまぜになった友人の顔、

そして数秒後に待ち受ける非情すぎる結末にも気づかぬままに、擦り切れたスニーカーでハジメは一步目を踏み出していく。

助けは期待していない。来て欲しくもない。あんなことを言われた後で泣きべそでもかこうものならそれこそ一生の恥だ。敵は強ければ強いほどいい。あの女のハナを明かしてやるのだ。



その言葉をハジメは咀嚼していたようだったが、数秒と待たずに汗と埃にまみれた顔を真っ赤にした。下唇をぐつと噛んで、幽香を睨みつける。

「な、なによ」

予想以上の反応に幽香も多少面食らったようだった。

何気ない幽香の一言は十分すぎる効果を奏したのである。それまで地面に伸びていたハジメはさっさと起き上がると脱いだジャージの上着を手に、蹴りつけるような足取りで公園を後にする。

「だってハジメが悪いんじゃない。私が良かれと思って教えたことを聞かないから！」

追いかけてどんな言葉を聞かせても、ハジメは一層歩調を強めるだけだ。

「待ちなさいよ。まだまだ時間はあるわよ」

「もう終わりだ。終わり。俺はもう帰るから、お前は好きに腕立てなりジョギングなりしてろよ」

あまりにも捨てばちな言い方に幽香も頭に來るものがあった。彼女が足を止めると、ハジメも自然、それにならって振り返る。

「ならいいわ。やっぱりハジメはその程度なのね。残念だけど見込み違いだったかしら」

「ああそう」

「そういうの、どう言うんだっつけ。この——」

言い終わる前に、激昂したハジメが燃え上がる指を突きつける。すかさず幽香の迎撃が飛ぶ。両者の攻撃の余波が降り積もったばかりの雪を巻き上げ、驚いた小鳥が黎明の朝に飛び散った。

無数の鳥のシルエットに混じってやけに大きな影が煙の尾を引い

て空に舞う。言わずもがな、それは鶴見ハジメであった。空中で絶叫し、手足をばたつかせて、それでも彼の怒りは冷めることがないようである。



「めつずらしい」

朝食の卓にて、千晃が目を丸くした。

「悪いけれどお醤油取ってくれるかしら」

「う、うん」

気圧されるままに、千晃はハジメの前から瓶を取って幽香に手渡す。テーブルに片肘をついた彼の兄はまったくのノーリアクションを貫いてテーブルの上に視線を彷徨わせる。幽香の手元に置かれたリモコンに目が留まる。

「ちっ」

舌打ちして向かった先にはテレビ。

わざわざ本体のスイッチを入れて目当ての新年お笑い番組を見つけ出したところで、唐突にドキュメンタリーチャンネルへと画面が切り替わる。

「あら素敵」

リモコンを手に嬉しそうに食虫植物特集を見つめる幽香とハジメの視線が空中で激しく火花を散らした。

「そんなに鼻息荒くしちゃってどうしたの？」

嫌味ない笑顔で小馬鹿にする幽香と、

「リモコン、そんなところにあつたのか」

心底煮えたぎりつつ、あくまで平静を繕うハジメ。

「ずいぶんと視野狭窄ね。心配になっちゃうわ」

「見たくないものはないことにしてるだけだ」

幽香の手による豪華なおせちの上を飛び交うのは言葉の弾丸だ。

紛争地帯にいきなり放り込まれてしまった子供のように椅子の上で身を縮こまらせながら、千晃はそれでも珍しそうに応酬を見守っていた。

早朝、二人が家を出て公園へと向かったところを千晃は目にしてい

る。しかしそこで何が行われているのか確かめたくとも、一流の自宅警備員は家を離れるわけにはいかない。

大抵は実兄がボロクソの姿で不機嫌な顔を引っさげて帰ってくるので、なにか危険な事情とか、お姉ちゃんが実は男にだらしない人間なんじゃないかとか心配をすることはなかった。

今日も今日とで同じような朝の光景が繰り広げられると思っていたのだが。

「その、あにき、何かあったの？」

「何が」

兄は確かに生傷だらけの不機嫌であるが、この日はどちらとも通常の度合いを超えていた。擦り傷に絆創膏をあてがうでもなく黙々と箸を進めていく。

かたや幽香は一見して通常運転のニコニコ顔。だが、にこやかすぎる。千晃の頭を撫でる手は猫を可愛がるようであったし、言葉の端々から蜂蜜が滴るように感じられる程に声色が甘い。

「なあ千晃」

「ひゃいっ」

それこそ食虫植物のようだなあ、と失礼なことを考えていた矢先だったので、静まりきった食卓に響いた千晃の声は不自然に上ずっていた。兄は手をつけた料理にそれ以上箸を進めることなく、携帯をポケットにねじ込むところであった。

「ユキたちと口直ししてくる。今日は遅くなるから、夕飯はいらん」

「——そ、そうなんだ」

どうして直接お姉ちゃんに言わないんだよと思いつつ頷く千晃が感じるのは無言の圧力。その出処が誰かなどと言うまでもない。それはハジメがパジャマを脱ぎ散らかして着替え、何も言わずに家を後にするまで続いていた。

「やれやれ。お子様なんだから」

幽香が溜めに溜めたような深く長い息を吐いたときになって、ようやく家中に張り詰めていた緊張の糸がほぐれていく。

すっかり冷めてしまったお茶で唇を湿らせて、千晃は口を開く。開

いたが、すぐには言葉が出てこなかった。義理の妹があうあうと困る間、幽香は辛抱強く待った。

「その、お姉ちゃんたちはさ」

「ええ」

「毎朝毎朝出て行って、一体何をしてるの?」

「端的に言おうと、殺し合いの練習をしているわ」

テーブルの上につ伏して、千晃は頭を抱えた。

彼女はお姉ちゃんが好きだ。どうせドアを出たところで兄のようなちやらんぽらん男か雪之丞のように残念な男しかいないのだから、できることなら幽香と一生一緒にいたいとさえ思う。

「それ、インユとかアンユってやつ?」

だが、兄や雪之丞に彼女の爪垢を煎じて飲ませたいとまでは思わない。不意打ちのようなタイミングで彼女の口から飛び出る言葉はまるでナゾカケで、四六時中こんなものを浴びせられたのでは兄と同容量の脳みそが爆発四散しかねない。

「ま、そういう謎めいたところも好きなんだケド」

幽香が語る紛れもない真実を何かの例え話と思ひ込むと、千晃はほうと息をついた。

「どういうこと?」

「ううん、何でもない。でも、ええと、いつもどおり殺し合いの練習だっけ。それにしてもお姉ちゃんもあにきもへんじゃなかった?」

首をかしげた幽香は、しばらく朝の行動をなぞっていたようだった。

「そんなにあからさまに出ていたかしら」

「出た。あにきは分かりやすいし、お姉ちゃんってフキゲンだとよく笑うから」

「参ったわね」

と、取り繕うように苦笑しながら二つの湯呑に熱いお茶を注ぐ幽香は、多少なりとも千晃の観察眼に舌を巻いているようでもあった。差し出された湯呑で手を温めながら千晃が窓の外へと視線を馳せれば灰色の空と雪。また寒くなりそうだ。

「大したことじゃあないわ。私の小言にハジメがかんしゃくを起こしただけ。それが言い合いになって、收拾つかなくなつて」

「小言つて？」

「だから大したことじゃ」

「ある。あります。じゃないとまた部屋に立て籠つてやる」

しばらく黙つて千晃を見つめていた幽香は、やがて観念したように目を伏せる。思い出すのは朝方の公園での一部始終だ。

今までぶちのめされすぎたハジメは警戒のあまり攻撃を洩るようになってきた。慎重になるのはいいが、行き過ぎは臆病と同義である。

『攻めなきや勝てないわよ』

『出方を伺つてる』

『ふうん。それじゃあ遠慮なくいくわね』

まず、その戦法が幽香のような強力な相手に対する最悪手であることを体に教え込んでやった。

しかし、起き上がったハジメは不服そうではかない。やれ手加減しろだのおまえの教え方がヘタなんだのと言われるうちに幽香の頭に一言が浮かぶ。それをそのまま口にして、話がこじれ始めたのだ。その言葉とは。

「……………ヘタレつて言った。ような気がするわ」

あからさまに顔をしかめてみせた千晃を、幽香はためらいがちに見つめ返した。

「まずかつたかしら」

「ヘタレにヘタレつて言つたらさ、そりや怒るよね」



「いいなあ、ハジメたちは」

愚痴を聞いていた江梨花がぼつりと呟いた。ハジメは鼻を鳴らす。「どこが。お前俺の話聞いてたか？」

「だって今時殴り合いの大ゲンカなんて、親兄弟でもなかなか出来たもんじゃないよ」

ムカつくだけだったの。

そう漏らしてハジメは井を傾ける。遊ぼうぜとメッセージを送っただけで、誰からとなく『スケキヨ』に集結する。江梨花を連れていくだけで、当たり前のように大盛りが運ばれてくるのであった。

「殺し合いってのが何のことは分からないけれどさ、要するにハジメは幽香さんの前でカッコいいところを見せたかったんでしょ。で、それが認められなくてイライラして、あの人にぶつけちゃった、みたいな?。」

「はん。見当違いもいいところだぜ」

ぷいと顔を逸らしてお冷を飲むハジメを見るに、結構凶星だったんじゃないかなと江梨花は思う。

「そういうお互い少しづつ悪いのってさ、先に謝る勇氣出さないとうやむやになるやつだよ。いつまでも引きずる」

ハジメは聞いていないフリが絶望的にヘタだ。なんだかんだで三人の中で一番大人びている江梨花の言葉である。

「私もちよつと前に似たようなことが」

「お前ら、黙って聞いてりやさ」

それまで沈黙を保っていた雪之丞が重々しく口を開いたのはその時だった。

ただならぬ敵意を秘めた声色に振り返った二人は思わず言葉を失う。

「ケンカがどうだのと深刻だと思ってさ、心配して来てみた何だよ。ただのノロケじゃねえか。年始から犬も食わねえような夫婦喧嘩の話はどうもありがとよ!。」

こめかみに青筋を浮かべ、刃物のように鋭い目つきでハジメたちを睨みつける雪之丞はもはや氷の美青年などではない。嫉妬に燃える非モテの鬼である。怒りにこわばった指で抱える大盛りのスケキヨの井が、異様なテイストを足している。

「お、おいおい。どんな耳で聞きやそうなるんだよ。俺とあいつは」「むおんどどうむようおあッ!。」

もはや何を言っているのかさっぱりだが、その気迫だけは伝わってきた。残像が残るほどのスピードでカウンターを仰いだ雪之丞がそ

の注文を口にする。

「おっさん、大盛りふたつ。チヨイ増しで！」

店内を稲妻が貫いたような衝撃が走った。チヨイ増しなんて言葉だけだ。実際に運ばれてきたものはすり鉢いっぱい盛られた麺と野菜の塊であり、自殺級の注文をした吸血鬼はにやりと笑ってハジメを睨んだ。

「早食いで俺が勝ったら幽香さんをもろう。お前が勝ったら俺の体を好きにしてい」

「いやいやいやいや、色々おかしいだろその条件」

「うるせえっ、お前は黙って馬鹿みたいに勝負を受けやがればいいんだよ。それとも何だ、ヘタレのハジメ君はあっさり負けちゃうのが怖いのかな？」

「ユ、ユキ、それは」

「おい、お前」

禁句を放った雪之丞をたしなめようとした江梨花の背後で、割り箸を割る音が不気味に響く。

「今なんつった」

「ヘタレって言った。ヘタレって」

すっかり戦闘態勢をとったハジメが奇妙な構えで箸を手にする。野獣のような好戦的な笑みで迎え撃つ雪之丞。おかしい緊張感に店の全員が視線を注ぐ中、江梨花の隣に座った見知らぬ少女も興味深そうに決闘の始まりを待っていた。

「こいつら、面白いわねえ」

「私と代わってみればお気楽なこととも言えなくなるよ」

思わず口をついて出た毒に江梨花が焦っていると、少女は構わん構わんとも言うように手を払った。妙に場数を踏んだというか、外見以上に多くの経験を経てきたような所作だった。

「あなた、このあたりの人？」

「いいえ」

里帰りだろうか。彼女の手元の小鉢はすっかり平らげられている。厚手のコートの下には目にも鮮やかな紅白の装束を着込んでいた。

「あのなまっちょろいハリガネみたいな男に私は賭ける」

百円玉を弾いて、雪之丞を少女は指さした。

未だヘタレだのぶさいくだのとしようもない挑発を続ける雪之丞を前に、ハジメは背後から途方もない怒気を含んだオーラを立ち登らせていた。

「じゃあ野良犬みたいな目つきをした方に賭けるわ。ハジメはあれでよく食べるからね」

「でもハリガネの嫉妬心は大したものよ。あれを正しく引き出してあげれば、野良犬なんて秒殺で倒せる」

初対面のくせに、彼女はずいぶんと雪之丞を買っているようだった。江梨花は肩をすぼめて百円玉をカウンターに置くと、にらみ合いを続けるバカ学生たちの間に掌を差し入れる。

「それじゃ、ギャラリィを焦らすのもそろそろ終わりにしましょうか」
両雄は静かに頷く。

こいつらのバカ犬のような素直さが江梨花は好きだ。本気でバカな勝負にすべてを賭けるようなところが。口にはしないが、このメンツでいる時が一番居心地良い。ただ、そのバカ正直さが何かの拍子に三人の関係を粉々に砕いてしまうような気もしている。

「いくわよ。よーい——」

そんな根拠のない不安を断ち切るように、江梨花は手を振り下ろすのだった。

2 『そろそろ喧嘩をしましうか（下）』

年明けの次郎リスペクト店、スケキヨで戦争が勃発した。

飛び交うものは油つけの強いスープのしぶきと野菜と油、それとニンクの破片だ。それらを頭からかぶってもものともせず、壮絶にしのぎを削り合うのは二人の青年であった。

片方はスケキヨのすり鉢ラーメンが果てしなく似合わない、まるで雪のように白い肌の美青年だ。彼の切り裂くような鋭い視線を真っ向から受けるのは、美青年と比べるとパツとしない風体の三白眼である。

胃袋にものを言わせることになった場合、どちらが有利に見えるかなど問うまでもない。

しよせんあの美青年は勢いだけの若造よ、と同席したラーメンの鬼たちはささやきあったものだったが。

二人の連れである少女が開戦を告げた瞬間から、その認識は覆されることとなった。

「よつく食べるわねえ」

故も知らぬ少女は感心と呆れ半々の表情というところか。

近くにいたのではせつかくの服が流れ弾で台無しである。少し離れた場所に陣取って、江梨花と少女は戦いの行く末を見守っていた。

正しくは雪之丞の奮戦つづりを、である。

嫉妬のパワーとは斯くも人を変えるものか。まるで掃除機のような勢いで麺とスープを吸い込んでいく雪之丞。彼がじゆるじゆるると麺をすすりきる度に、小さな歓声が巻き起こる。

「ねえねえ、あのハリガネ、何をあんなに必死になってるのかしら？」

「それはねえ」

身内以外にそうそう言いふらすものでもないよ。

と、口にしかけて江梨花はかぶりを振った。確かに本人にとってはデリケートな話題ではあるのだろうが、あまりにもバカバカしすぎて口をつぐむ気にもなれない。

「ハリガネ、ってかユキのやつはね、あんな見た目して昔からモテない

の

「へえ。それじゃあよっぽど中身に問題があるんでしょね」

「そうよね。当然そう思うわよね」

腐っても雪之丞は美形である。

そして、何故かは分からないが、生まれて以来非モテの呪いに苛まれてきた。たとえどれだけ好青年を演じて、いつも肝心要で意中の女にフラれてしまうのだ。

「で、この喧嘩はモテなさすぎてついに男に手を出したとか、そんな感じ?」

「……………ぜんぜん違う。ユキはね、ハジメが羨ましいんじゃないかな。きつとね」

おおお、と声が上がった。

視線を集めるのはハジメだ。彼はまったくの無表情を崩さないままに、カウンターに置かれていた銀色の容器をひっくり返したところだった。

ラーメンの上に乗せられたものは大量のんにくである。味をプラスすることでマンネリした舌を洗ってペースを巻き返そうという魂胆なのだろう。

一方の雪之丞も落ち着き払った様子で一瞬だけそれを見守って、再び凄まじいペースで箸を運び始める。

「最近ハジメのところに従姉さんが来てさ。それがものつすごい美人なの。料理はできるし、優しいし。こないだは学校にまで弁当持ってきてくれてさー」

と、我がことのように誇らしげに語る江梨花。最初こそは幽香の完璧さに得体のしれないものを感じて距離を置いていたものの、いまだは彼女に惹かれ始めていた。

幽香はまるで花だ。そこにあるというだけで、何者かを引きつけてやまない。

「ずいぶん、嬉しそうに話すじゃない」

微笑ましげに少女が見つめていることに気づいて、江梨花は赤面した。

またまた見ず知らずの相手に熱弁をふるってしまった。ここ最近で覚えている限り、二回目。それは目の前の少女がどこか幽香に似た雰囲気纏っていたからなのかもしれない。

「ユ、ユキのやつ、ハジメが幽香さん——ああ、従姉さんの名前なんだけれど。幽香さんとオトナの関係なんじゃないかな、とか。そんな風に勘ぐっちゃってさ」

矢継ぎ早な言葉に、少女はただ、ふふふと笑う。

「ふうん。あんなやつがねえ」

「そう、あんなやつが。ハジメもハジメで、女の子に縁がないのは一緒なのね」

少女の視線はハジメになど向いてはいなかったが。うつむき加減の江梨花には、それを知る由はなかった。

熱気にうかされた店内は熱い。傷だらけのカウンターに置かれたコップはすっかり汗をかいている。少女は一気に中身を飲み干して、氷を噛み砕く音を響かせる。

「あなたはそこのところ、実際どう思う？」

「ハジメと幽香さんがどうのこうの、ってこと？」

二人の言葉を遮ったものは、勢いよく二つの丼が叩きつけられる音だった。

しずかなどよめきが狭い店内所狭しと押しかけた観戦者に波及する。うなつて、にらみ合う二人の青年。カウンターに仲良く並んだすり鉢は、二つともスプーン一滴麺一本残さず平らげられている。

「ど、同着……」

江梨花のつぶやきをかき消す勢いで椅子が引かれ、ハジメと雪之丞はお互いの胸ぐらを掴み上げた。

「なかなか骨があるじゃねえかよ、ヘタレボーイ」

「いい準備運動だったよな。走るぜ、コラ」

胃袋の中には大量の麺と油。そして、どう考えても走りにくいこと極まりない格好にも関わらず、ふたりは疾風のように店から駆け出していた。

「さあさ、ここからが本番よね！」

愉快そうにその後を追って出て行く少女。とつきのことに反応しきれなかった江梨花が、明らかに運動慣れしない足取りで続く。

店を出ると、天窓ごしの日差しはすっかり黄色味を帯びている。年始のおめでたいムードに包まれたアーケード街にはいつも通りの放置自転車の山。更に所狭しと門松やらのぼり旗やらに埋め尽くされた通りには買い出しの人々がひしめき合う。

「ちよ、あんたら、早っ」

器用にその隙間を縫っていくハジメたちに大きく遅れを取りながら、江梨花は少女の言葉を反芻していた。

あの二人になにかあるだろうかと問われれば、それはないよと言い切ってしまいたい。

幽香と名乗る女性とハジメはあくまでイトコであって、それ以外の何者でもない。恋とか、花とか。そんなものはないのだと。

時が経てば幽香もこの町を後にする。そして万事は変わらず回り続ける。

あくまでそう思い込みたい気持ちに気づく前に、彼女の足は少女に追いついていた。

奇しくもそこはいつもハジメが幽香との『殺し合いの練習』に通っている公園である。

「は、ハジメたちは……!?!」

ベンチに腰を下ろして、少女はおかしそうに指さした。そこから聞こえてくる水しぶきと罵声。

「この野郎、いつもそう、お前ばっかり結局いい目を見やがる!」

「ふざけんじゃねえよ。おまえが情けない恋愛ばかりしてるのは、俺じゃなくてお前の中身のせいだろうが!」

「クソが。あつたま来たぜ!」

「なんだよ、凶星か。凶星なのか!?!」

怒り心頭の二人はばしゃばしゃと池の浅瀬で殴り合いを繰り広げていた。

買い物帰りの夫婦が、犬の散歩に訪れた老人が、イチヤついた男女が、足を止めてバカ二人の戦いを観戦している。

一月となれば池に氷が張るほどには寒くなる。それでも、膝まで水に浸かった二人は意に介する様子もなく拳を振りかざしていた。

「おぶう」

ハジメの拳が雪之丞の顔面に叩き込まれた。それから猫のケンカのようによくわからない叫び声をあげながら両者の取っ組み合いが始まる。

「あ、あれは効いたね」

「あいつ、顔面ばかり狙って卑怯ねえ」

相手が片腕だからといって、雪之丞も手加減はしない。ぽこぽこと殴り続ける彼に、ハジメも掟破りの噛み付き攻撃で応戦する。

それは激しくも、どこか可笑しな死闘。池のフェンスに寄りかかる江梨花は笑っている。

「止めなくていいの?」

「心配いらないわ。いつものことよ」

そう、いつものこと。

たった一人二人見慣れぬ人物が入り込んだところで、これまでの生活がどうこう変わることはない。今までの平穏が、今まで通りに続いていくだけ。

なら、彼女への答えも決まったようなものだ。

「さっきの質問だけだよ」

これまでのものはすべて杞憂に違いない。大声をあげて笑うと、江梨花は見返る。

「あれ?」

だがそこに、答えを聞き届けるはずの少女はいない。忽然と、スケキヨで出会ったときのように姿を消していた。

その奔放さにやはり呆れながらも、江梨花の背後から聞こえる水しぶきと大声が遠のいていくようだった。代わりに聞こえはじめた胸騒ぎの足音をかき消すように、江梨花は引きつった声でもう一度笑うのだった。



「もうすぐ学校なんだからさ」

冬の夕暮れは釣瓶落とし。

またまた粉雪がちらつきはじめた空の下、幾分おとなしくなった男たちを背にして、江梨花は後ろ手を振った。

「新学期までに、ちゃあんと仲直りしておいてよね」

ふんとそれぞれに鼻を鳴らしながらも、ハジメと雪之丞は手を振ってくれる。満足げに見届けて江梨花が路地の隙間に姿を消すと、男たちはそのまま佇んだ。

「全部が全部俺のせいってワケじゃねえけどさ」

雪之丞が唇を開いたのはしばらくして指先が冷え始めた頃。その隣で大口を空けて、ハジメは空を見上げている。

「悪かったよ」

「そうだな。お前が悪い」

未だ冷めやらぬ怒りからか、雪之丞は白い息を盛大に吐き散らしたが、それでもハジメにはわかる。これはこれで落着だ。お互いがお互いを信じているからこそ、本気で喧嘩ができるのだ。

そうしてハジメの頭に浮かぶのは幽香のことだ。彼女はすくなくとも雪之丞ほど簡単にはいかないだろう。

今朝まではうまくやっていた。今繰り広げている不和でさえ、一日二日眠れば解決するようなものなのかもしれない。それでも、今後ハジメの一挙手一投足で六月までの平和が崩れ去ってしまう可能性は十二分にある。危うい関係だ。

ヘマをすれば、まっさきに被害が及ぶのは周りの人間だ。

「んだよ。ジロジロ見やがって」

そんなことはつゆとも知らぬ雪之丞の不機嫌な顔を見つめて、ハジメは重々しい口を開いた。

「ユキ、例えばなんだけどさ。おまえの命が知らないあいだに誰かに握られていたとするじゃん」

「お、おう」

唐突に湧いて出た例え話に、雪之丞は曖昧に相槌を打つことしかできな

「その誰かっるのが本気を出さなきゃ、お前は巻き添えをくらって死

ぬ。そうだとしたらさ、お前はどう思う？」

「そうだなあ。まずは、感謝かな」

その予想だにし得ぬ言葉。いたずらっぽく笑って、雪之丞は近くの自販機に向かって歩み寄る。ハジメもその後が続く。宵闇に煌々に光を放つ自販機に硬貨を放り込んでいく間、雪之丞は自分の言葉を確かめるように何度も頷いていた。

「だって、少なくとも退屈はしなさそうじゃなか。俺、平凡ってのが嫌いでさ。あ、こういう考えも結構平凡なかもな」

手渡された暖かいコーヒーの缶と友人の顔とを、ハジメの視線は何度も往復した。コンクリートの塀に背中をあずけて、彼は缶で手のひらを温める。

「でもマジつまんねえ学校とかさ、最近やんなつちやって。だからお前たちが楽しそうに見えるちまったのかもしれねえわ」

「なんだよ、やっぱりお前が全面的に悪いじゃねえか」

「はは。そうかもな」

大したやつである。

「羨ましい」

ハジメには自分と家族の命を背負って立つのは、あまりに荷が勝ちすぎるように思えた。幽香と戦う気持ちはまだ萎えていない。

だが、己より遥かに豪胆でいいかげんで、理不尽の荒波をいとも容易く乗りこなしてしまいそうな男が目前にいる。

雪之丞を見ていると、どうして幽香が選んだのが自分なのか、能力というひどくわけのわからないものを託されたのが自分なのか、理解できなくなる。

褒めても何も出ないんだぜと笑う親友に、何もかもぶちまけてしまおうか。

そう心が揺らいだ刹那に、背後から鈴を転がすような、澄んだ声が響いた。

「あなたが鶴見ハジメよね」

「えっ？」

その姿を捉えることもままならなかった。

ただ、瞬間に感じたものは幽香との特訓で幾度も経験した浮遊感。そして、血管に針を流し込まれたような、前代未聞の痛みだった。

「はじめまして」

痛みも衝撃も、爆心地の脇腹からすぐさま全身を貫くように広がっていく。

どさりと地面に転がってハジメは悶絶した。激痛が引き起こす吐き気に息をつまらせながらも、その少女の姿をようやく認める。雪風にたなびく、紅白の装束も。

「お、おいおいおい、なんだよ、アンター！」

両者の間には、状況を飲み込めない雪之丞。

「私は霊夢。博麗霊夢。そして用事があるのはただひとり。そこに転がってるやつ」

霊夢の歩みに合わせて雪之丞は後ずさる。

ハジメは必死に立ち上がろうとしていたが、雷に打たれたように体は麻痺していた。脇腹に張り付いていたものがぼろぼろと崩れ、地面に落ちる。それは焼けた札である。

たった一枚の紙切れが、ここまでの威力を秘めるとは。

「悪いことは言わないわ。ハリガネはそこを退いて、さっさとお帰りなさい」

「は、ハリガネ？」

「そう。あんた、細くてなまっちょろいから」

霊夢は装束の袖から数枚の札を取り出す。それがすぐさま青白い電光でもってあたりを染め上げた。その激しさはトリツクなんてちやちなものではない。どれほど察しの悪いものにもこれが現実なのだと思ひ知らせるほどの迫力があつた。

それを前に、ちらりと雪之丞はハジメを振り返る。

「い、け」

喉笛から絞り出す声が焦げ臭い。それでも何度となくハジメは雪之丞に繰り返した。俺を置いて行けよ、と。

「行けつたらー！」

「くっ！」

だが、結局雪之丞がハジメの意に沿うことはなかった。

持っていたスチール缶を力任せに霊夢へと叩きつけると、その行く末も見守らずにハジメを担ぎ上げる。

耳障りな金属音と、雪之丞のうめき。

なかば朦朧とした意識で必死に足を動かしつつも、ハジメにはそれだけが聞き取れた。

ぜびぜひという苦しげな呼吸音が自分のものなの友のものなのかもわからぬままに走り続けて、前も後ろも曖昧になった頃、冷たく固い地面にハジメは投げ出された。

「いってええ」

うつ伏せに倒れたまま首を動かすと、雪之丞の右膝から細い金属片が生えていた。よくよく目を凝らすと、それは針だ。菜箸ほどもあろうかという太さと長さの針を引き抜いて、雪之丞は荒い息をおさめにかかる。

「頭おかしいだろ。こんなもんをバカスカ投げてるんだぜ」

「あいつは？」

ハジメがしばらく目を閉じていると、口を開くだけの活力が戻ってきた。

「わかんねえ。たぶん、撒いたんじゃないか」

寝かさされている場所にはハジメも見覚えがある。あの蝸牛の怪物を追ううちに入り込んでしまった裏路地の世界だ。湿った壁と湿った路面。そして、静かすぎるくらいに静かな雪の夜道。

「ここ、どうやって来たんだ？」

ハジメの言葉に、雪之丞はようやくやくあたりの異常に気づいたらしい。わからん、と肩を竦めて見せる。

「でも、あの女に追いかけられるよか迷子の方がマシだろ」

ハジメはそのポジティブ思考が、ますます羨ましい。

雪之丞の膝は見かけよりは傷が浅いようで、彼はよろめきながらも立ち上がるとハジメに手を差し伸べた。

「もうちよつと走つとこうぜ」

体のしびれは収まりつつある。

電撃じみた一撃を加えられた脇腹の具合はひどいものだが、それでも動けないほどではない。

「お前一人で逃げるよ」

ならば、これ以上雪之丞を危険にさらす道理はない。

博麗霊夢と名乗った少女が何者であるにせよ、鶴見ハジメの名を知っているのなら、狙いが二人のどちらかなど明白なことだ。

「な、何言ってるんだよ。死んじまうぜ」

「どうにかするさ。行け。お前だけならなんとかなるだろう」

無関係の雪之丞をこれ以上巻き込むことだけは避けたかった。これ以上、日常をぶち壊しにしたくない。それにはいささか遅すぎるのかもしれないが。

「できるワケねえだろ。ずっと一緒だったし、これからだってそうだ」

だが、雪之丞は強引にハジメを立たせると、肩をもたせて歩みを進める。有無を言わさぬ様子に、ハジメはますます苦い顔で呻いた。

「お前は大事な友達だ」

「……………分かった」

正直その言葉は涙が出るほどありがたい。

それだけに、ハジメはますます彼を危険にさらすことが忍びなかった。

ふと思いついて、懐の携帯を取り出してみる。路地裏の異世界といっても、電波を拾うことはできるようで、千晃から「さっさと仲直りしろ」という旨のメールがちょうど着信したところである。

「行こうぜ」

それを仕舞いこんで、立つ。

電話をかけてハジメが『助けて』と言えば、幽香は手を差し伸べてくれるのだろう。霊夢という謎めいた強敵にも、幽香をぶつければ対処できることは間違いない。

間違いないが、絶対にそれだけはしたくない。

その意固地こそが親友を危険にさらしている最たるものであるという矛盾もハジメは気づいている。

それでも嫌だ。それでもできない。

「とりあえず大通りに出よう。で、朝まで人通りの多いところで時間を潰す。あいつだって、そんなに表立ってこつちを襲ったりはしないはずさ」

どちらかといえば願望に近い言葉。あれほどデタラメな相手が目をはばかることなどするのだろうか。しかし、今は藁にでもすがりたい。雪之丞の言葉に頷いて、ハジメは土埃まみれの服の裾を払う。

友人の肩ごしに青白い光が迸ったのは、ちょうどその時だった。

「ユキ、避けるー！」

第六話 『そろそろ喧嘩をしましょうか』 おわり

3 『ひとりぼっちの向日葵（上）』

指先から迸った爆炎が突き進む先、迫る針はすべてへし折られ、溶かされ。

雪の降り積もる路面にそれらが突き刺さるそばから新しい針と札がハジメへと殺到する。防戦で精一杯だ。じりじりと壁際に後退しつつ、彼の首筋を粘つく汗が這った。

博麗霊夢と名乗る少女が何者であるにせよ、彼女が恐ろしく強いということとは確かだ。

そして、手加減されているということも。

「くうっ」

頬を太針が掠めた。

明らかに押し負けしている。一撃一撃の威力で言えばハジメの弾丸は少女の針と札を焼き払うほどに上回ってはいても、あまりに連射力が違いすぎる。

解き放たれた針と呪符が少女のまわりを乱舞する。攻撃に直接体を動かす必要は殆どないらしい。一方のハジメは神経をすり減らしつつ一つ一つ丁寧に狙って、頭の中で撃鉄を起こし、そして撃つ。

無尽蔵に乱撃の防風を吹かせる相手に対して、それはなんと手間のかかる切り札であろうか。

時代遅れのリボルバーで機関銃と真つ向勝負をするような、笑ってしまうほどの差がそこにはあった。

「だ、ただ、大丈夫なのかよ」

ハジメの背後で腰を抜かしたままの雪之丞にも、悲しいくらいの実力差は伝わっているようだ。ギプスの下で右掌を爪が肉に食い込むくらいに握り締めて、ハジメは声を張る。

「うるさい、お前は黙って守られてろ！」

「なっ——なんだよ、お前」

「黙れって言ったんだよ、非モテ！」

力が足りないことくらいは言われなくても理解している。そこまでするバカではない。気づけば怒鳴っていた。

苛立ちが照準を鈍らせた。代償は右肩から先をまるごとむしり取るような衝撃だった。針と弾の間隙を縫うように飛んだ札が静かに右胸に張り付いた瞬間、ハジメは少女を睨めて、敗北の味に目を歪めていた。

電撃が胸を貫いた。

恐怖はさほどでもない。それでもやはり体はピンチを認識しているようで、願ってもいないプチ走馬灯がぐるぐるりと脳裏を駆け巡っていく。

「うわああ、ハジメ!？」

大砲の弾のような勢いで吹き飛ばされたハジメが古びた家屋の板塀をぶち抜く一瞬間前、ユキの視線が交錯した。こんな無様を友人には見せたくなかったとまぶたを閉じると、ありありと浮かぶのはこれまた見たくもない不幸のハイライトである。

炎とガラスの中に転がされ、ダイ・ハードごっここの末にタイムリミット半年の時限爆弾を背負わされたこと。

病院。喉の奥まで詰め込まれたりんご。目と鼻の先の幽香。綺麗なのにムカつく顔。

惰眠を邪魔する携帯のバイブ。妹からのメールと、校庭にはつきりと描かれた自分の名前。

目潰し。

蝸牛の怪物にさんざん弄ばれた挙句、謎の粘液でべしよべしよの妹を背負って帰ったこと。

公園、弁当、感想と窒息。あと頭突きと二日酔いと湿った学ラン。

『名前と呼んでよ』

その映像のほとんど全てが幽香に関係していることに気づいて、ハジメは無性に腹が立って仕方が無い。

彼を揺り動かすように、体があぐんと揺れる。あたりを飛び交うものは無数の木片だ。眼前にばらまかれた板塀であった木切れの向こうから、ガラス戸が迫る。

ガラスは痛い。ハジメは身をもって思い知っている。

どうしてここのところ、新聞でも届けるような気軽さで毎日不幸が

舞い込んでくるのか。

「そうだ。そもそもあいつと出会っていないければ俺は」

そこでゆるやかな飛行は終わりを告げ、扉を突き破ったままの勢いで無人の民家の縁側のガラスを破ったハジメは降り注いだガラクタと土埃のカーテンの中に沈んだ。とどめとばかりに年代物の重苦しい作りのタンスがぎしいと音を立ててその上へと倒れこむ。

最後にまぶたの裏に残ったものは真赤な、大きな円。

その輝きに触れようとして、ようやく投げ出されたハジメの指先に灯っていた炎が掻き消えたのだった。

「おい、嘘だろ!？」

もうもうと立ち込める煙幕にむせながら、雪之丞は這いつくばり、瓦礫のなかにハジメの姿を探す。背後に立つはずの女の放つ圧力を感じながらガラスと木片に容赦なく指先を切り刻まれるうちに、ようやく生暖かいものを掴む。

「は、ハジメ」

安堵の表情を浮かべた瞬間、雷のように殺気が頭上に降り注いだ。「なに、触ってん、の、よー!」

即座に後頭部へと靴のかかたが叩き込まれる。

雪之丞が「ぐおおお」と声を漏らして悶絶するのを尻目に、するりと足首を彼の手から引き抜くと、霊夢は廃屋の中へと視線を馳せる。

「さて、ヘンタイは片付いた。あなたの火遊びはもうおしまい?」

返事はない。

「そうやって居眠り決め込むんなら、あなたのお友達、ハリネズミにしちやうけど?」

首筋に針を突きつけられ、雪之丞が表情を引きつらせた。待ちに待って、それでも瓦礫の山が微動だにしないのを見ると、霊夢は興が覚めたと言わんばかりに針を仕舞う。

恐る恐る雪之丞が顔を上げたころには、彼女は既に縁側に片足をかかけていた。

「あいつの手下っていうからどんなに愉快的なヤツが飛び出てくるかと身構えていたけれど、案外大したことないのねえ」

「待て！」

瓦礫の傍らにしゃがみこんでいた霊夢が意外そうな面持ちで顔を上げた。

通りから霊夢と対峙する雪之丞。その手には塀から剥がれ落ちた木片が握られている。巫女服の汚れを払って立ち上がると、霊夢は青年を見つめた。

「それで、どうするの?」

「ハジメから離れやがれ」

遠いところから轟いてくる町の喧騒以外、音はなくなった。一向に動きを見せない少女を前に、雪之丞は何度か木切れを握り直す。手が汗ばんでいる。

ハジメの振るった力がなんなのか、目の前の少女と彼の間にいかなる因縁があるのか。それは雪之丞の知るところではない。

だが、彼は羨ましかった。

雷に打たれるのはさぞかし痛いだろうし、辛いだろう。ハジメが人形のように吹き飛ばされた時、心の底から自分でなくてよかったと思ってもした。それでも、本当に相手を羨んでいたのは雪之丞である。

これまで一緒にいたはずのハジメが、遠く遠く離れた場所にいつてしまったような感覚に囚われる。気づけば彼の隣には絶世の美女と謎めいた超能力、そして可憐な襲撃者。圧倒的なリアリティをもって叩きつけられたものは、今時口に出すのも恥ずかしいくらいファンタジックな非日常。

そんな面白いものだらけの生活に身を置いていた友人が羨ましくて羨ましくて仕方がない。

蚊帳の外だけはゴメンだ。

ここで立たなければ、唾棄すべき日常というモノのなかに頭からぶちこまれ、今度こそ戻っては来られなくなりそうな気がしていた。だから立つ。俺も舞台に立ちたい。

オモシロおかしい非日常の幻想は、ハジメには余りある。そこに肩を並べるくらいの権利は自分にもあるはずだと信じて。

「おいで、ハリガネくん」

呆れた様子で手招きした霊夢。その顔が驚愕に彩られる瞬間が楽しみでたまらない。

とてつもない強敵にも臆さず雪之丞は木片を振りかぶる。靴底が地面に牙を立てる。かつてないほどの充実感に満ち溢れた疾走。

ずっとこんな展開を待っていた。きつと、人生にはなにか起爆点のようなものがいつか来ると信じていた。それが今で、この瞬間から狭間雪之丞は別の存在に変貌するのだと。

「吠え面かかせてやるぜ！」

気合一発。スウィングした獲物は音速より早い。早さのあまり、大気摩擦でマツチでもこするのように先端が爆裂する。後に残ったものは炎の軌跡のみ。それは奇しくもハリガネのように細く鋭い！

「恨むなよ、お嬢ちゃん」

背後、ゆっくり崩れ落ちる少女のシルエットに告げる声には勝利の喜びはない。ただ、能力とやらを発動した達成感と疲弊、そして僅かな後悔が滲んでいた。

後の世、人は彼をこう呼ぶ。真紅の――

「もういいかしら？」

という馬鹿げた幻想は木片ごと粉々に打ち砕かれて、興奮に鼻穴を膨らませた雪之丞の背後にばらまかれていた。

「え？」

「だから、おしまいなの。あなたの負け。悪いことは言わないから、さっさと帰りなさい。次はないからね」

少女が動いた様子は微塵もない。

子供でも扱うように霊夢がぽんと頭を叩いて再び座敷へと上がっていく間、雪之丞は動くことができなかった。木片が弾けとんだ感覚すらなかったのだ。あれがもし、手や足だったら？

熱狂は醒めた。今や頭から冷水をぶっかけられたように、雪之丞はただ、がたがたと震えていた。



「お目覚めかしら？」

最悪の展開だ。

瓦礫の下敷きになったまま、ハジメは唸り声を漏らした。荒れ放題の縁側から差し込む月光のおかげで、真正面にしやがみこんだ霊夢は黒い塊にしか見えない。

「あなたのお友達の心配はしなくても大丈夫よ」
でも。

そう付け加えて来るような気はしていた。ふわりと揺れた、彼女の衣装。振袖から抜き放たれた一本の針がハジメの目の前に構えられる。

「あなたは別。見たところただの人間のようにだけれど、手加減はできない」

「俺が何をした」

ハジメにとつて、その問いかけは腐るほどしてきたものだ。これまで理不尽な目に逢うたびに何度も何度も。今度は一体どんな運命のいたずらがこの瓦礫の下に導いたのやら、と霊夢の言葉を待つ。

「どうもこうも風見幽香が」

「原因はあいつかよ、畜生！」

転がり出た名前に思わず霊夢の言葉を遮って叫んでいた。眉をひそめる霊夢などお構いなしに、ようやく瓦礫の山から抜き出した手で頭を抱えた。

針につつき回され、札に全身を焼かれ。それだけボロクソの今となって、ハジメの体で一番痛む部分は何を隠そう脳みそである。全ての面倒事は幽香に通ず。一か月にわたって苦しめてくれた女難が今回も絶好調のようで、ハジメはむしろ安堵すら覚えつつある。

からからに乾いた笑いを絞ってハジメはうなだれた。

「なんだかよく分からないけれど、あんたはその手下ってことでいいのよね」

「よくねえ。俺はただ、巻き込まれただけだ」

「苦労してるのねえ。ま、信じないけど。邪魔されても困るから、二度と悪さできないくらいに痛めつけておくわね」

にこやかだが、彼女の言葉には凄みがある。抜かれたものは無数の針と札。

「悪魔だ」

「このところハジメに寄ってくる女性は見た目ばかりである。中身は言うまでもない。サンドバッグか何かと勘違いしているのではないかと思える程に、ハジメに対する仕打ちがひどい。」

「マジでひどすぎる。人間じゃねえ」

「失礼ね、れっきとした人間よ。というよりもむしろそれは、」

「言い切るのを待たずに、霊夢の体がべしやりと前のめりに倒れた。」

「な、なによ、アンタ!?!」

「やつちまえー!」

その背中に飛び乗ったのは、とうの昔に逃げ帰ったはずの雪之丞であった。

実のところ虎視眈々と絶好のチャンスを伺っていた彼の不意打ちに、さすがの霊夢もとっさの反応を忘れてしまう。もちろんハジメだって同様だ。

「ユキー!」

「こいつ、力は大了ことないぜ」

霊夢を組み伏せたまま雪之丞は叫ぶ。当然、心中は穏やかではない。

結局お前は凡々人で、何もできないんだぜと突きつけられたばかりだ。それでも彼がここで特攻をかましたのは、自分を裏切ってくれた現実への最後っ屁のようなものであったのだろうか。

「お前の力ならこいつ倒せるんだろ」

つまるところ、これは能力を持つに至らなかった雪之丞の、最後の妥協だった。

ハジメが燃える指先を伸ばす。だが、現実はとことん無情である。「まったく」

実際に雪之丞が霊夢の背中に乗っていたのはわずか十秒もない。

彼の胸元で電光が瞬いた。ストロボの明滅じみた光の中、真っ白に照らされた雪之丞の顔が勝ち誇った笑みから何とも言えない表情へと変わるさまがコマ送りでハジメの目に映る。

やがて微動だにしなくなった雪之丞をどかして、霊夢は立ち上が

る。

間髪入れずに巻き起こった小規模な爆発が部屋を揺るがした。ハジメの指先から迸った爆炎が霊夢を包み込む。

「そんなに怒らなくてもいいわよ。殺してないから」

炎のペールを引き剥がして現れた霊夢は無傷だ。

今度という今度こそ、打つ手なしの万事休す。

鋭い視線をぶつけ合う霊夢とハジメの間にそれが舞い降りたのは、ちようど霊夢が札の束を広げた時だった。

真冬の夜中に現れたそれは、まったく季節も時間もはばからぬ花のものだ。橙の花びらがはらはらと舞い散る様に、ハジメはとある女の姿を重ねていた。歯噛みする。霊夢はただ、笑う。

「あらら。さつそく本命なんて、今回はずいぶんと親切な異変なのね」
一切の嫌味なく、あたかも知己に再会したような喜びのみがそこにはある。

その笑みも、廃屋を取り巻くひんやりとした空気も、直後に降り注いだ太陽のように眩しく熱い光のなかに溶けて、消えた。



真つ黒な夜空に、いくつもの極彩色の光が放たれる。

いつしかの病室で刑事が取り落とした写真で見たものと全く同じであることに、ハジメは気づいていた。

光のグラデーション。それはオーロラめいてのんびりと空にたゆたうこともあれば、爆発のように激しく空に散らばり覆い尽くすこともある。その模様や形には何かの意味があるのかもしれないが、ハジメはさしたる関心を抱かなかった。

真夜中の公園には何事かと怪現象を見物に人が押しかけていた。望遠鏡やカメラのレンズを皆一様に空に向け、そこで起こっているなにかスゴいものをつぶさも見逃すまいとしていた。

目が覚めたベンチに座ったまま、ハジメも呆けたように高空で繰り広げられる激戦を見つめている。

そこに人がいるんですと言われなければ気づかないほどに二体の人影は小さい。

激しく動き回るせいでどちらが幽香で霊夢なのかは既に見失っていたものの、ハジメには時折大気を揺るがす轟きとともに放たれる『攻撃』の質で判別できる。

空間を囲い、切り離し、まるで水飴のように組み替えて使うものが霊夢。

お前のルールなんか知るかよとばかりに遮断されたはずの空間をぶち破り、力押しに押しまくる派手な光が幽香の放つもの。

少なくとも近くの子供の集団がきれいキレイとウケているのは幽香の放つ光の渦であった。そんなことはハジメにとってはいつでもいいことだ。

今はただ、ただただ圧倒されている。霊夢と戦う幽香がいかほどの力を出しているにせよ、いつもの特訓でセコセコ数千分の一刻みで戦っているときは次元が違うことだけは確かであった。

やがて激戦の輝きは徐々に町の空を離れていく。

興奮にうかされるままに語り合うものたちや不安げな顔で足早に去っていくものたちが消えた後、その場に残されたのはハジメと、依然として気を失ったままの雪之丞。

「……俺一人でやれたさ。ヘタレなんかじゃあない」

公園を包み込む静寂に、その声はよく通った。

いつしか手のひらに紛れこんでいた花びら。そして、肩に掛けられていた赤いコートからほのかに立ち上る、あの女の香り。

『危ないところだったわね』

とでも言いたげな花びらが憎たらしくなって、ハジメはそれを無意識に握りつぶしていた。

「お前の助けなんて、死んでも要るかよ」

戦いの余波でぽっかりと穴があいた雲間にそろそろと薄絹のような雲がかかりだした頃になって、雪之丞は白い瞼を持ち上げた。

「こっ、どっよ」

「おれんちの近くの公園。お前、気を失ってたんだよ」

「あの女はっ..」

精一杯笑みをつくろって、ハジメは腕まくりして見せた。

「倒してやったよ。俺がさー」

つまらない嘘にも気付いた様子なく、雪之丞は頷く。

「そうか」

「いやあ何がヤバかったってさ、あの女びゆんびゆん空を飛びやがるんだよ。でもしつかり必殺技当ててたからどうにかできたんだ。お前が足止めしてくれたおかげだよ」

「そうかい」

新品だったのによ、と胸元の焼け焦げたコートに毒づいて雪之丞が立ち上がる間、親友同士の間には漂うものは気まずい沈黙でしかなかった。

「おいおい。もっと嬉しそうにしろって。お前の手柄なんだぜ」

どんな言葉でも吐き損になることはわかっていた。それでも沈黙に耐え切れずぽんぽんと調子のいいことを続けるほかないハジメを後に残して雪之丞はずんずんと歩き去っていく。公園の出口でぴたりとその足が止まる。

「お前、ずいぶん楽しそうなことしてたんだな」

最後にぞつとするほど虚無的な視線を一度だけ投げかけると、彼は貫かれた足を引きずるようにして暗闇のなかに消えていった。

「なんだよ、それ」

ベンチにすくとんと腰を下ろす。脳から全ての血が退いてしまったように、鼻の奥と頭が冷たい。

「なん……だよ……」

心もとない外灯の灯りの下に見える膝には既にうつすらと雪が被さり始めている。一月の夜は信じられないくらいに寒い。

それでもモヤモヤを抱えたまま家に帰る気が起きずに、手持ち無沙汰に掴んだ雪を力任せに握り固める。塞がりかけた傷口が疼き始めた。

いったい何が雪之丞のへそを曲げてしまったのか。ハジメは苛立ちの赴くまま、見当もつけずに雪玉をぶん投げる。

「そこで礼の、ひとつとか……さっ！」

地面で一度跳ね、わずかに欠けた雪玉はころころと転がって、品よ

く揃えられたブーツの爪先で止まった。

4 『ひとりぼっちの向日葵（下）』

歩いてくる幽香に気づきつつ、ハジメは顔を上げなかった。

考えが足りなかった。他でもない彼女自身の口から語られた、故郷を脱するまでの一部始終。ハジメたちの住む世界と、幽香のいた世界を隔てる『常識と非常識の壁』をぶち壊したという事実を、甘く見すぎていた。

そんなものがなくなつたとあれば、今頃彼女の世界は大混乱だろう。

もとより恨みつらみには事欠かなそうな幽香のことである。目の上のたんこぶ女をこの期に潰してしまおうとする者が現れたとしても、何ら不思議はない。

「霊夢にはお帰り願ったわ」

あくまでマイペースに足元の雪玉を拾い上げて、幽香は空高く放つた。

無数の針、まるで雷をそのまま封じたような威力を誇る札を操る霊夢という巫女。そんな相手との激戦の直後にあつて傷の一つ負っていない幽香は、やはりただものではない。

「お前のせいだ」

「どうしたの？」

「何もかも、お前のせいだ。お前が来てからこっち、腕は折れるしダチは離れていくし、よく分からない女にはよくわからない理由で襲われるし!!」

そもそも幽香と遭わなければ一月前にお陀仏だったという事実はこの際棚上げだ。雪之丞にぶつけられた理不尽な憤りを、ハジメも誰かに押し付けなければ気が済まなかった。

「おまけにさんざんへタレ呼ばわりしといて、いざやる気を出してみれば邪魔しに来やがって! ——ぐっ」

体をベンチに押さえつけたのは、背中を真つ二つに引き裂かれるような痛みだった。その激痛すら怒りにくべる薪にして、ハジメは幽香を睨みつける。

「隣、座るわね」

突き返されたコートを受け取って、幽香はそつとハジメの肩に触れた。

「触るんじゃねえよ」

ハジメが体をよじると、隣に座った幽香が距離を詰める。ハジメはまた、距離を離す。

やがてベンチの端で半身になってそつぽを向いたハジメにぴったりに肩を寄せるようにして、幽香はその横顔をじっと見つめてくる。不平は腐るほどある。だが、なにか叩きつけたらいいのかが分からない。

「ね。仲直り、しまししょう?」

背後からハジメの前に差し出されたものは、左手である。そこから目を逸らしたくても逸らせない。

「ひきょうだ」

ひらりと手を振ってみせる幽香にその言葉は聞こえたのかどうか。ハジメはまつさらな包帯を見つめる。今尚その下に眠るはずの醜いケロイドのことも。それはある意味では鎖で、ある意味では絆だ。蝸牛の妖怪。そいつが操る強烈な酸を彼女が身を呈してかばったこと。自分を殺してしまうかもしれない女が何故にそんな行動に出たのかがハジメには理解できないが、大きすぎる借りには違いないのだ。

これ以上憎まれ口を叩く気にもなれず、ハジメは重い体を引きずるようにして振り向いた。

「とりあえず、今は仲直りしておいてやる。今だけは」

「ふふ。ありがと」

イヤミの無い笑顔で笑ってみせる幽香を、なぜか直視することができない。再び顔を逸らしたハジメの背後からは楽しそうなくすくす笑いも聞こえていた。今更何が楽しいんだよと食らいつく気にもなれず、彼は白い息を一つ浮かべてヒザの雪を払う。

「帰ろうぜ」

「その格好で?」

言われてようやく気づく。

明滅する外灯の明かりの下で見える彼の体たるや、ひどいものであった。

一張羅のジャケットはほとんどボロ切れ。白いシャツは引き裂けている上にまだら模様の赤いシミが浮かぶ。何より痛々しいことに、今尚彼の体には夥しい針や破片が突き刺さり、その頭をわずかに覗かせているのだ。

「なんだよ、このくらい」

精一杯に強がって針の一本を力任せに引き抜こうとして、ハジメは悲鳴を上げてうずくまった。どうやら中でもひどくねじれ曲がっているらしい。怪我に対して映画やマンガのようにタフに立ち向かうのは、やはりハジメには難しいことだった。

「とにかく場所を変えましょう。ここはあなたには寒すぎるわ」

「家に。家に連れて行ってくれ。そうすれば」

そうして青年が見たものは幽香にしては珍しく、難しい顔だった。静かにかぶりを振ると、改めてコートをハジメにかけてやる。引き際、なだめすかすように頭を撫でていく手。それに抗うだけの体力も、彼には残されていない。

「よく聞いて、ハジメ。家には帰れない」

幽香のポケットから取り出され、吹きすさぶ雪混じりの風にそよぐものは焼け焦げた一枚の札であった。さっきの今でそれが何者の手によるものなのか等と問うほど、ハジメも察しの悪い男ではない。

「いつもの公園にコレがいくつも仕込まれていた。次に学校、いつものアーケード、そしてあなたの家の玄関先」

「霊夢の、札——」

「札と札の間に渡されたまじないが糸のように伸びていたわ。クモの巣みたいにね」

もはや家ですら霊夢によって網が張られている。

幽香が言わんとすることはハジメにもよく理解できる。また、あなたの家族に危険が及んでもいいの？ と。つまりはそういうことだ。「来て」

やはり身の回りの不幸は彼女のせいではないか。

再びふつつつと怒りが湧き出した矢先に幽香が踵を返したので咄嗟に立ち上がったハジメは、そのままの勢いで真正面に倒れ込んでいた。思ったよりも体の状態が酷い。片膝をついたままぜいぜいと息を荒げるだけとなったハジメの体が、ふわりと浮いた。

「仕方ないわね」

凶悪で無慈悲。

ハジメの知る所ではないが、幻想郷と呼ばれる地で語られる、風見幽香に関する放言はそのようなものだ。その一片についてでも耳にしたことのある者なら、きつとこの光景を前に腰を抜かすに違いない。

「やめっ……ろよー」

見事にお姫様抱っこされたハジメが力なく左腕を振り回すのだが、幽香は涼しげな顔に微かな悦びを浮かべて歩き出す。それはある意味では凶悪で、ある意味では無慈悲な行動であったものの。

「必死になっちゃって。かわいいわね」

またまたある意味では純粹な優しさではないのだろうか。

青年の醜態を晒すように、わざわざ人の多い通りを選ぶように歩いていくあたりも彼女らしいのだが。

男一人抱えても淀むことのない幽香の足取りは駅前からアーケードへ、そして繁華街へと踏み入る。近くのコンビニの中、雑誌を前に駄弁っていた女子高生が呆気にとられた様子で尋常ならざる美人と、彼女の腕の中の青年を見ていた。

「見てろよ、お前。見てろよ」

「うふふ。これ以上どんなに面白いものを見せてくれるのかしら」

ハジメの言葉はうわごとめいている。そこにうつすらと滲む感情に、幽香は目を細めた。

「ぜったい、ぜったいブチのめしてやる。覚えてろ」

「ダメよ。そこはぶっ殺す、でしょ？」

わざわざ耳元で甘く囁くと、幽香は赤ん坊をあやすようにハジメを

揺り始めるのだ。

やがて容赦なく浴びせられる奇異の目も、鼻先で微かに沈丁花の香りを振りまく幽香の髪も嫌になってハジメは瞼を閉じる。荒れ狂う心中に反して、眠りは即座に訪れた。



天井に設えられた安っぽいステンドグラスがぼんやりした明かりを投げかけている。

目を瞬かせるうちに寝ぼけた頭が目覚めてきた。そうして舞い戻ってきた全身の痛みと言ったら酷いもので、ハジメは思わず悲鳴を上げていたほどだ。

「お目覚めね。具合はどう？」

「どうもこうもねえよ。良くないことくらい、見たら分かるだろ」

幽香を睨んでハジメは呻いた。

「で、ここは？」

「適当に泊まれる場所を探して、部屋を取らせてもらったわ。悪いのだけれど、財布からお小遣いを拝借したわ」

「勝手なことしやがって。つーか、それよりも」

うつぶせのまま背中を調べることは苦労したが、到底立ち上がることも寝返り打つこともできないくらい痛みである。軽く首を曲げて肩口に突き刺さったままへし折れた木片を見つけて、ハジメは嫌な汗を流す。

それよりもどうして肩が、背中が、そして尻がむき出しなのだろうか。

「覚悟してね」

物言いたげなハジメの視線に気づいて、幽香はいつものように不必要なまでに柔らかい笑みを浮かべてみせる。妹を、父を、そしてご近所の皆さんをまるごと懐柔したそれが、今の青年にはどこまでも恐ろしい物に見えて仕方がない。

「覚悟って、何をですか」

思わず敬語になっていた。幽香のため息が耳にかかった。

「そこまでヘタレだとは思わなかったのだけれど。まだ私に恥をかか

せたいなら………ふう、いいわ。仕方のない子ね」

「お、おい、やめろ！」

幽香が指先でくるくると回してみせるものは何を隠そうハジメのパンツである。気を遠くしている間に脱がされたことを考えると悶死のものであるが、まずは全裸を何とかしたい。

痛みを押して飛び出したハジメであったが、幽香は造作もなくベッドに押し倒すと、その背中につうつと指を這わせたのだった。

「うふふふ、観念なさい」

もはやまな板の上の鯉となったハジメは生娘のようにがたがた怯える他ない。肌を探られるうち、いよいよ脳内では危険信号がけたたましく鳴り始める。

「だあつ、待てよ。いくらなんでもお前とそんな関係になんかなりたくないっつーの！ あ、やめて、ほんと、ほんとにやめて！」

「えっ？」

明らかに様子のおかしいハジメに、幽香の指が止まった。

「……えっ、て、違うのか？」

目の前のハジメと、指につまんだトランクスを交互に見て。その往復を何度か繰り返すうちに幽香の口元が次第に緩んでいく。

「あはっ」

とうとう堪えきれなくなったと見えて、幽香は体をくの字に折って口元を抑えた。目尻に涙すら浮かべて笑う彼女を、やはりハジメは見守るほかない。

「な、なるほどね。確かに思わせぶりだったわよね。ごめんなさい」

ベッドから離れて、幽香は既に持ち込まれた荷物の山をごそごそと漁った。そうして取り出したものは、ハジメがもはや見慣れた薬箱である。

「手当て、しなきゃでしょうっ？」

やがてハジメの顔が真っ赤になる。幽香はそんなことを知らんぷりで薬箱からピンセットやら消毒液やらを取り出していくのだが、その横顔に、しばしばこらえきれなくなった笑いが浮かんでは消える。

「じゃあ始めましょうか。け、健全なお医者さんごっこを、ね」

「うるせえー！」

最後の慈悲なのか、ハジメの青い尻にタオルをかけてやると、幽香はハジメの背中に消毒液をぶちまけた。途端に恐ろしい痛みがありとあらゆる場所から押し寄せてくる。

歯を食いしばって耐えるハジメの傍らに幽香は腰を下ろす。ベッドはわずかに沈んで、安いマットレスが軋んだ。

「痛い?」

「すぐく」

目を閉じると、背中の痛点が星図のように浮かんでくる。

「これで終わったのか?」

「そんなわけないでしょ」

「いったいこれ以上どうやって痛めつけられるというのか。」

「まずは針とガラスを引き抜いてあげなくちゃ。それでね、ハジメ」

幽香の指が再び背中を滑る。鳥肌だらけの尻の横つ面に幽香が示したものは、途方もなく大きな異物であった。そいつを認識した直後に激痛が走る。まるでどこかの家の大黒柱を引っこ抜いて、そのまま埋め込んだような違和感である。

ハジメはごくりと唾を飲み込んだ。

「い………いったいコレ………何が刺さって」

「不安になるだろうから、あんまり言いたくはないのだけれど」

そんな言い方をされては気になって仕方がない。精一杯強がって構うかよ、とハジメが呟くと幽香はしげしげとそれを観察した。

「たぶんね、お魚じゃないかしら」

「さかなっ!?!」

「ええ。私も信じられないのだけれど。これが、尾ひれで………うろこが………これ」

麻酔なしで体中に埋まった異物を取り出す。おまけにそれがどういう訳か、ナマモノであるらしい。想像するだけで気が遠くなりそうだった。むしろ気を失うことができたらどれだけ幸運か。

「な、なあ。病院、行かないか。やっぱり」

「入院して、それを知ったお父さんが着替えやらお金やらを持ってき

て。そうして霊夢の網に引つかかるのでしようね。それでもいいなら、連れて行ってあげるわ」

そうだった。

差し出された札を前に、眉間に皺を寄せてハジメが思い出すのはちょうど一月前のこと。蝸牛の怪物との一件である。千晃や家族をそう何度も危険に晒しては兄の沽券に関わる。

「ええい、好きにしろー!」

「えらいわね」

深呼吸して、幽香から受け取った札をグシャグシャにするとゴミ箱に放り込む。しかしうつ伏せになって幽香の準備が整うのを待っていると、にわかには沸いた勇気が音を立てて萎んでいくのが分かるようだった。

「気が紛れるなら、おしやべりでもしましょうか」

悪くない提案だ。青年が頷きを返そうとしていると、唐突に湿った音を立てて背中から何かは抜き取られていくのであった。

「だっ!? ……っ……前に、言ったよな。こういうことをやる時には」
「前もって教えろって? でも、おかげで度胸がついたでしょう?」

ピンセットをかちかちと鳴らしながら、幽香が枕元に置いたものはフックのように折れ曲がった針である。それが体の中でどんな状態にあったのだろうかと考える矢先、またまた不意打ち気味に背中からガラスの小片が引っこ抜かれ、「あひい」と情けなく鳴っていた。

「うふふ」

「お前、今笑ったろ」

「なんのことかしら」

もう一度走った鋭痛にハジメが喘いでいる間、幽香はくすくすと笑い続けていた。それで確信がいく。間違いなく彼女は誰かを痛めつけることに悦びを覚えているのであった。

「前々からそうなんじゃないかなとは思っていたさ。やつぱりお前はサディストだ。間違いない」

「その何が悪いのかしら。大の男や普段気丈な子がひんひん泣いてる姿って、結構ときめいちやうでしょ?」

「でしよ、じゃねえよ。どっちにしろ大したヘンタイだな——あつただだだだ！」

恍惚の表情を浮かべた幽香が操るピンセットの先端が一番痛いところをえぐっていく。やけにそれは長く続いて、あちこちぐちぐちと弄り回されるあいだ、ハジメは死にかけの海老のような動きで幽香の笑いを誘っていた。

激戦の果て、からりと音を立てて薬箱の上に置かれたのは血まみれの鮭である。

「そ、そういうことかよ」

とはいえ、もちろん本物ではない。

正確には古い家の居間には必ず置いてあるような木彫り熊の一部である。霊夢に廃屋へと叩き込まれた拍子に突き刺さったはずのそれにはもげた熊の首だけがくつついていて、恨めしげな視線をハジメへと送っている。

「ともかくお疲れ様。よく頑張ったわね」

うずたかく積み上がった針とガラスと木片を見ると、我ながら丈夫なもんだと関心するばかりだ。とにかくラスボスは無事に摘出された。ハジメは枕に顎を埋めて、激痛を堪えきった自分を慰めてやる。

「こ、これで、流石に終わりだよな」

「いいえ。今度は縫わなきゃ。もういちど傷を洗うわね」

とんだ折り返し地点である。

ハジメは嗚咽を噛み締めて、ふたたび押し寄せた激痛の荒波に耐える。

そんな調子で幽香の様子を伺う余裕などない。彼女がとんでもないDＳであることはこの際忘れて、念入りな処置も決して彼女の欲望を満足させるためのものではなく、必要なことなのだと自分に言い聞かせ続けた。

「なんとか郷の話、してくれよ」

拷問めいた消毒もやがては終わる。次いでやってきた疼痛と、縫合の痛みをごまかせるようなものが、ハジメは欲しかった。

「幻想郷だつてば。それに、それはこの前にしたでしょう?」

「もつと詳しく。あんたがどんな暮らしをしていたのか、とかさ」

「それは構わないけれど」

針と糸のお世話になるのはこれが最初ではない。もちろん事故の直後には麻酔を効かされて縫われたワケだが。身構えたハジメが片寿司を食らったことに、ここまでの激痛ですっかり痺れきった神経が伝えてくるのは、ずっと糸が肉を通っていく感触だけであった。

「外れにあるひまわり畑に私のおうちがあつてね」

どこことなく、幽香の言葉は歯切れが悪い。

「ほとんどの時間はそこで過ごしていたわ。妖怪たちのもとへ出向いたり、人里に遊びに行くこともあつたけど、あまり歓迎はされなかつた」

「はは、そりやそうだろうな」

話の間も糸と針は滞りなく動いていた。長らくうつぶせの上に疲労困憊である。その一定で短調なリズムが、むしろ眠気を誘つてくる。

「なによ、そうだろうなつて」

「ずっと、ずっと。糸は動き続ける。」

「そんなデタラメな力を持つてたら、近づくやつなんていないだろ」

実際、雪之丞もそうだった。ハジメがいくら考えても彼の怒りが理解できないが、その原因の一つに能力があるのは間違いない。ハジメですらその有様なのだ。幽香ほどの力を持った時、いったいどれだけの知人が傍に残るのだろうか。

「ひどいわ」

「お前にだけは言われたくない。で、実際のところ、ぼっちだったのか?」

「失礼しちゃう。友達くらい」

もう一度、失礼しちゃう、と呟いたきり幽香は静かになった。ハジメからでは、幽香が不安げに指折り数える様など知りようもない。その沈黙を気まずいものと受け取って、ふとした疑問を口にしていった。

「それじゃ話、変わるけどさ………能力つて、一体なんなんだ」

「漠然としたことを聞くわね。自分で使っていても分からない?」

背中感覚で、木彫り熊がめり込んでいた傷口に幽香の手がかかったことが分かる。ようやく終わると安堵した瞬間、眠気が押し寄せた。まるで疲労がそのまま毛布にでもなったかのようなうだ。

「わかんね」

眠気に飲まれはじめたハジメの声はもはや途絶え途絶えだ。

「花は咲きたいから咲く。花であるから咲くんじやないわよね。咲こうとする意思こそが能力であって、開いた花びらは結果でしかない」
小難しい例え。

やや空白の時間を置いて、ハジメは同じことを繰り返す。

「飾り気のない言い方をするならば願望を叶えるための手段かしら。もしくは本質のあらわれ、よ」

「願望を……叶える……本質……」

光線で空を焼き払い、目にも止まらぬ速度で飛び回り、素手で怪物を叩き潰す。本人の性格は言わずもがな。そんな女がいて、そいつが能力を持っていたとすれば、それは。

「ならアンタの能力、よっぽど恐ろしいものなんだろう」

「ええ。口に出すのもはばかられるくらい、おぞましい力よ」

意味ありげな幽香の笑い声に、ハジメはふんと鼻を鳴らした。

こちらら弾を指先から発射するだけの単純極まりない能力である。それが一体どんな意味を持っていて、一体どんな願望の発現なのか、未だに手がかりもないのだ。

「俺のもきつとそうだろうな。誰にも言えないくらい、下らないとかでせよ」

目を瞑る。星はもうほとんど見えない。

「俺、こんなんで勝てるのかな。霊夢にも、あんたにも」

「あらあら、弱音?」

ハジメの語尾はほとんど消えかかっていた。

やがて顔と枕の隙間から穏やかな寝息が聞こえてきて、幽香はふふふと笑った。ぷちんと最後の糸を切って、彼女はおもむろに服を脱いでいく。その白絹のような肌には傷一つない。

唯一の例外は左腕に巻いた包帯。それをいとおしげに眺めたあと、幽香はハジメの頭を撫ぜた。

「あなたが私を殺してくれるかはまだ分からないけれど、楽しみにはしているのよ。あなたが殺してやるって言うってくれたとき、本当に嬉しかったんだから」

そのままタオル一枚手に鼻歌を歌いつつ、バスルームへと彼女は姿を消したのだった。



赤い円の夢を見る。

右を向いても左を向いても暗闇が広がる中、それはぼんやりと輝きを放って浮遊していた。

コインを手をそいつに手を伸ばす。

輝きが一層増して、息が詰まるような闇が煙のように揺らいだ。

赤い円。ハジメには見覚えがある。

コインはいつしか冷たく、大きな別のものになっていった。それは赤いスプレー缶で、遠い喧騒を聞きながら、ハジメは長いことコンクリートの壁と対峙していた。

缶を振るカラカラという音が建設現場の壁を打って反響した。

意を決したように壁を睨みつけ、スプレーを吹く。

絵心はないが、別に凝ったグラフィティをそこに残しにきたわけではないのだ。

何もかもにも息が詰まるような気がしていて、半ば夢遊病のようにその場所へと向かったというだけのこと。

出来上がったものも単純極まりない丸い大きな円で。

喉の奥のつかえは、そんなイタズラをかましたくらいで和らぐことはなかった。

そんなことはわかっていたさと踵を返そうとした時だ。

すべてを目にした彼ですら信じられないことに、壁に描いた円が『花開いた』のだ。

不思議と、その超常の光景は薄暗い中で目にしても恐怖に取って変わられることはない。

むしろハジメは快さを感じていた。

どうしようもない窒息感が薄らいでいった。

まるで隣に、彼の息苦しさを分かち合ってくれる誰かが居てくれるような気がしたのだ。

壁の大輪の花に手を伸ばす。コンクリートの壁が、不思議な温もりを帯びているように思えた。

やがてその輪郭が赤く輝き始め、再び暗闇の中にハジメは取り残される。

死にそうなほど苦しかった。



息苦しきは顔面に押し付けた枕のせいだった。

汗だくのハジメが時計を拾おうと腕を伸ばして、縫われたばかりの傷の痛みに顔をしかめる。外はまだ暗い。

丸一日寝たのかとも思いつつ、枕元には未だ血に濡れた鮭が転がっている。どうやら眠りは相当に浅かったようだ。なにか夢を見ていたような気もするが、寝起きのぼやけた頭ではどうあつても思い出すことはできない。

ただ、妙に快かったことと、物悲しかったことだけは覚えている。遠い雨の音に耳を傾ける。

幽香はどこかへ行ってしまったようで、痛む体を引きずってハジメは立ち上がった。ちよつとだけ顔を洗って、また寝よう。

バスルームの扉を開け放った瞬間雨音が一層強くなった。いや、それは雨などではない。単なるシャワーの水音だ。立ち込める湯気の前に、ハジメは強烈なデジャヴに襲われる。

「このっ、ば、ばかー！」

ここに来て疲労が味方した。ふつとよろめいたおかげで幽香の張り手は鼻先をかすめるに留まる。そのまま危なっかしくたたたらを踏んで体勢を立て直すと、ハジメは慌ててドアを閉めた。

「わざとじゃないー！」

「これ、二度目よ……っ！ 学ばないわね、ハジメー！」

戸板一枚越しに放たれる凄まじい殺気。

このまま部屋に居たのでは殺される。急いで財布とバスローブ一枚引つつかむと、ハジメはカビ臭い廊下へと躍り出た。

あの様子では当分部屋には戻らない方がいいだろう。

仕方なく自販機で馴染みのエネルギードリンクを一本買って、廊下の端にひっそりと佇む公衆電話に十円玉を放り込んだ。長い待ち時間。どこかの部屋で練り広げられる言い合いと、自販機のうなりを聞く。

『はい、鶴見です』

電話に出たのは聴き慣れた、甲高い声だ。

「千晃か」

げー。

とつさに電話口を覆ったのか、その声はやけに遠くから聞こえた。実妹に嫌われていることは百も承知なので、ハジメは気にせずローブの帯を巻き直しながら妹の返事を待つ。

『……………何の用さ、ばかあにき』

「しばらく家を空けることになりそうだから、一応連絡した」

『お姉ちゃんもいっしょ？』

「そう」

『いったい二人して、どこにいるワケ？』

「駅前のやつすいホテル。いろいろ事情があつて詳しい場所は言えないんだけどさ」

息を呑む音。次いでどがちゃあ、という騒音が響いた。おおかた受話器を取り落としたのだろう。わちゃわちゃと何事かまくし立てる妹が落ち着くまで時間を要する。彼女の暴走があまりにも長いので、小指で受話器のコードを巻いていたくらいだ。

『ばかあにき！ サイターー！』

「お、落ち着けたら」

『できるわけないでしょ。あたし、確かに仲直りしろってメールしたけどさー！』

散々な言われようである。

もちろん過去に江梨花や雪之丞とともに外泊したことは幾度とな

くある。しよせんは学生の貧乏旅行なので全員が同室、もしくは同じベッドに詰め込まれることもあった。

それでも何も言わなかった千晃がここまで取り乱すのは、やはり親愛なるお姉ちゃんのことだから、なのだろうか。

『そこまで仲良くなれ、なんて言っつてないっつーの!』

結局ロクに話もできず、乱暴に切られた通話。

受話器にため息を吹いて、ハジメは傷の具合を確かめるように肩口をぐるぐると回してみる。即座に突き刺すような痛みが背筋を這い上がり、思わずその場で飛び上がった。

「いってええええええええ」

ひいひいと息を荒げて、ハジメは廊下の椅子に尻を気遣いながら恐る恐る座り込む。夜中の廊下は薄暗く、ただ非常口を示す緑色の光が雨中の車のライトのようにおぼろな輝きを放っている。

中身を一気に飲み干して、缶を放る。ゴミ箱の縁にはじかれて、それはからからと乾いた音を立てて廊下を転がった。

数日前までは確かに見えていたはずのものが、急に見えなくなってしまうようだった。

第七話『ひとりぼっちの向日葵』おわり

5 『雪之丞17歳、恋を知る（上）』

『クソあにきなら今頃お姉ちゃんよろしくやってるんじゃないの』
新学期が始まってから三日も経つというのに現れないハジメに
びれを切らして家に乗り込むなり、その妹、千晃は怒りと呆れが入り
混じった声をインターホン越しに投げかけてきた。

『お姉ちゃん、と?』

『マジ意味わかんないよね。って、ユキちゃん? おーいおーい?』

見舞い花と見せかけたバラの花束が、がさりと音を立てて地面に落
ちる。本来それを贈られるはずだった彼の意中の女性は、どうやらズ
ル休みの友人と共にいるらしい。どこか、遠くに、二人きりで。腹立
たしいことに。

ぐぬぬと唸り続け、心配した千晃が恐る恐る玄関を開ける段になっ
て、ようやく彼は憎々しげに吐き捨てた。

『言っちゃあ悪いけど、千晃ちゃんの兄貴は死ぬべきだろう』

『それな』

異様にキレのいいサムズアップで千晃が同意した。

そんなわけで教室のロッカーの上では花瓶に挿されたバラたちが
ふわふわと揺れていて、雪之丞は不機嫌最高潮の様子で頬杖をついた
まま、温室のような暖気の中で午後の日差しに目を細めていた。

窓際の前から四列目の空席の主は言わずもがな。今の雪之丞に
とってそれはどこまでも目障りで、とはいえ授業に集中するほどの頭
も気力もない。彼だって微積分が決して将来役に立たないと言い切
りはしないが、そんなことよりも欲しいのは今の刺激であり、眼前の
非日常だ。

—— あーあ、幽香さん。いい女だよなあ。

最後に雪之丞が幽香を目にしたのは一週間ほど前のことだ。

もちろん霊夢の攻撃を縫った彼女ががれきの中からハジメと雪之
丞を拾い上げた時に会ってはいるのだが、抱き上げられた記憶は幸か
不幸か無い。

とにかく彼女のことを思うだけで恋しくて恋しくて仕方がない。

困ったことに人生初のピュアラヴであった。

雪之丞の妄想を飛び出した彼女が校庭で舞う。花びらの中で微笑む。彼女の後ろ姿を想像するだけでも溜息が出るようだ。

ぎらぎらとした剣呑さを全身から立ち上らせていたと思えば打つて変わってにへらと顔を崩してみたり。隣の席の江梨花が戦慄の面持ちで見つめている。

ある日いきなりグラウンドに幽香が現れた瞬間、雪之丞は背骨を引っこ抜かれたような衝撃を覚えたものだ。

生まれて十七年ともう少し。まだまだちつぽけな人生の中で雪之丞が抱いた『イイ女』の概念すべてを持ち合わせるような、素敵にすぎるオトナの女性は、同時に長らく待ちわびた非日常への誘い手のようにも見えた。

だが。だが何思うゆえに彼女は鶴見ハジメの傍にいるのだろうか。

机の上に雑多にぶちまけられた雑誌と菓子山の山から手鏡を取り出してみる。我ながら一部の隙もない美青年だ。モテないツイてなもの、それは変わらない。

「俺に比べればアイツなんて、じゃがいもみたいなもんだろ」

「じゃ、じゃがいも？」

口をついて出ていた不平に、江梨花が反応した。

彼女を一瞥するに留めて、雪之丞は広げられた雑誌の上に突っ伏す。鶴見ハジメが持っているないものは一通り備えてはいるつもりだ。しかし努力しようがどうしようが、決して手に入らないものがひとつだけ存在する。

指。

だらりと体を垂れたまま五指を揃えてしばらく見つめて、ハジメの能力が発動した光景を思い出して。そうして作った拳銃の形を隣の席に向けてみたりする。

ばーん。

「やっぱダメか」

ポーズを真似るだけで同じ力が使えるというワケではないらしい。独り言をぶちまけたかと思えば、つまらなそうにため息を吹いてく

る雪之丞にイライラを募らせていくのは江梨花だ。

こんな男が隣にいて、授業に集中できるはずがない。

「ちよつと。ケンカ売ってるの」

「お前にじゃねーよ」

ハジメの瞳から吹き上がった金色の炎。指先に輝く日輪。

能力。そう、どういう訳かハジメには常ならざる力が宿っていた。風見幽香がハジメの能力のことを知っているかどうかは雪之丞には定かではない——が、十中八九彼女はそこに惹かれている、と思う。

ハジメのようなじゃがいも野郎の取り柄なんて、そのくらいだ。そして、『そのくらい』が二人の間に狂おしいほどの差を広げてしまっている。

特別になりたいなら幽香に愛されなくちゃいけない。

特別じゃなきや幽香に愛されない。

「まいったなー」

別にハジメが敵だとか味方だとか、恋の鞘当てとか。

そんなことは下らないと彼自身気づいている。見せびらかすように超能力を使われてイライラしたまま帰って、それっきり謝るタイミングをグズグズと逃し続けたただけだ。

——いや、やっぱムカつくわ。

顔の下、枕がわりに敷いた週刊誌の表紙に踊る怪現象の文字。

読者による投稿だかなんだか、画素数が少ない上に暗視モードで取られた写真と記事の内容を思い出すうちに、彼の意識はあの日の夜へと飛んでいた。



雪降りしきる中、血まみれの膝を引きずる。彼の足跡はまるで轍のようだ。

元旦。下心からアホみたいな下級生の女の子に付き合ってたアホみたいな並び時間の末に買った新品のコートは逃走の一部始終ですっかりスリ切れたボロ布と化していた。

そいつを乱暴に近くのごみ箱へと突っ込んで、雪之丞は家路を急ぐ。

「なんて日だ」

あまりにもかわいい表現であった。

誰かに泣きつこうにも警察へ駆け込もうにも起こったことをそのまま話したところで一笑にふされるのがオチである。

彼自身痛みと恐怖と怒りがぐるぐると頭の中を回っていて、未だに整理つかない。勢いで霊夢の背中に飛び乗った瞬間、すべてはあまりにもクリアでシンプルに見えていたはずだったのだが。

それでも友情というものは偉大で頑丈なものだ。

人気のない住宅街を歩く雪之丞の足取りは徐々に、徐々に重くなつていった。

「ハジメのやつ、大丈夫かな」

彼の中にはどうしてハジメのやつばかりがと理不尽な怒りもある。

だが血を流して戦ってくれたのは彼に変わりなく、おまけに霊夢の攻撃を受け続けて無事だったはずがない。やっぱ、助けてやらなくちゃ。

立ち止まっていた雪之丞はしんしんと痛む膝を刺激しないように踵を返す。

「あ」

そして見てしまった。向こうも見ていた。

いつから、どこから現れたのか。通りのど真ん中を弛まぬ歩調で進む小柄な人影。立っているだけで周囲の空気が澄んだように感じる凜とした姿。見間違うはずがない。

「あ、あんた、ヤられたはずじゃ!?!」

返事はない。

どういう訳か、ハジメによって倒されたはずの霊夢はまっさきに雪之丞から消すことにしたらしい。

足元を埋める雪が急に粘土のように重くなったように感じる。急いで走ろうとした瞬間に痛めた膝を激痛が貫いた。

「わぶっ」

すってんころりんと頭から突っ込んだものは積み上げられた雪の山。

なんとかかして体を引き剥がすと、霊夢は既に目の前だ。

「うっ、うわわわわ」

悲鳴を上げて後ずされど腕は手応えなく雪をかくばかり。かえつてずぶずぶと深みにはまり込みながら、あやうく膀胱の中身をすべてぶちまけてしまうところである。

翌日の朝見つかるのは小便まみれの高校生の惨殺体（半解凍）。

それだけは何としてでも防ぎたいところであるが、体は正直であった。発射秒読みとなった大津波をなんとかせき止めよう、いや、そんなことより逃げなくては。ああでも人間の尊厳がとあたふたする雪之丞を前に、

「へんなの」

血の滲んだ唇でボソリと呟いて、霊夢は歩き去っていく。

「は？　——あああ」

それで気が抜けたのが運の尽きだった。何が起こったかなどと詳しくは語らない。だが、まあ、そういうことだ。完全にオフになってしまった雪之丞は、人間の体って本当にこういうことになるんだあ、と妙な感激を覚えながら暗い空とちらつく雪を見上げる。

一瞬でいろいろ失ったが、とにかく生きてるのでオツケーさ。

さんざんビビらせて去っていった霊夢をせめて最後に見てやろうと雪之丞は視線を下げて、そして急に胃がむかつくのを感じた。

「お、おい、待てよ。待てったら」

声を張り上げて、後悔した。

「なあに？」

てつきり無視していくものとはかり思っていた霊夢は足を止めると、血の雫が滴る指で乱れた髪を整える。彼女の装束も、彼女の体も、雪之丞とは比べ物にならないくらいにズタズタだった。

雪之丞は砕けたままの腰で立ち上がる。その間霊夢は辛抱強く待っていた。

「あんたを。あんたをそういう風にしたのは、ハジメのやつなのか」「ハジメが？」

傷だらけの巫女は考え込んだ。ややあつて、そうね、と頷く。

「ある意味では。なまじあいつの逆鱗に触れるより、酷い目に遭った」
「そんなになって戦うくらいあんたはハジメの奴が憎いのか」

「憎い？ いいえ。私は誰も憎んじやいない。ただ、こうするより他に手だてがないってだけよ」

困ったように笑ってみせる霊夢に、路地裏の世界で見せた鋭い雰囲気など微塵もない。

聞きたいことは山ほどあったが雪之丞はまず動いていた。不自然な歩き方をなるたけ隠して、霊夢の様子がよくわかる距離まで。やはり彼女の状態といったらひどいものだ。

「ケガしてる」

「そうね。おまけに相当弱ってるけど？」

硝子玉のような瞳が見上げてくる。

その深い輝きに吞まれる前に、雪之丞は霊夢の手を取る。咄嗟に引っ込めようとしたのだろう、血塗れた肌越しに彼女の指がこわばったのが分かった。

「ウチ、寄ってけよ。包帯くらいはやるから」

霊夢はしばらくきよとんとしていたが、次に浮かんだ表情には深い困惑がありありと浮かんでいた。いつそ仕返しにぶん殴ってくれた方がまだ腑に落ちるんだけど、と。シワを寄せた眉間が告げている。

「あんた、正気？」

「俺だってよく分からねえよ。でも」

「ちよつと待ってね。今結構、混乱してる」

彼女はぶつぶつと何事かつぶやいていた。しかし一向に彼女の中で状況はまとまらないらしく、いいかげん濡れた下半身が凍えそうになってきたので、雪之丞は再度口を開いた。

「だってそれ痛そうだし、ほうっておけないし」

自分と、そして親友をさんざんいたぶってくれた相手を助けるなんて、どこまでも矛盾に満ちた行動だと理解している。それでも雪之丞は傷ついた霊夢を無視することが出来ない。

「やめておきなさい」

霊夢の手が離れたことに気づいたのは、その言葉をしばらく頭の中

で咀嚼した後だった。

「私に手を差し伸べるなら、それはあなたがハジメを敵に回すということよ」

「今はそんなことを言ってる場合じゃないだろ！」

「それに」

「いたずらっぽく、霊夢は雪之丞の肩を小突いた。

「それにあんた、ばっちいいもの」

雪之丞の人生最大の不覚は彼女の目にしっかりと焼きついていたようだ。

汚いという言葉に反して愉快そうに笑って、霊夢は手傷を感じさせないきびきびとした歩調で遠ざかっていく。

「とにかくパンツは替えなさいよ。ハリガネくん」

その背中に一度手を搔いて、雪之丞はうなだれた。

彼の非日常は、またしても掌をすり抜けていってしまったのだ。



「ユキ——ユキったらー！」

江梨花につつき起こされて、雪之丞はクラスメートたちの視線が集中していることに気付いた。そして黒板のこまっしやくれた数列の一番最後、教師が指し示す空白を見てすべてを理解した。

「えーと」

慌ただしく立ち上がった彼の机に立てかけられていた松葉杖が騒々しく床に倒れる。ヨダレで張り付いた雑誌を頬から引き剥がして、美青年は困った笑いを繕った。

「まいったな。誰か教えてくれないか」

それまでひそひそと控えめだった笑いが、悪びれない彼の様子にどっと沸いた。隣の江梨花が呆れてハハハと一本調子に笑う。教師ですら口元を歪めている。

「ユキ、降参か？」

「まさか。いやいや、ちょっと待っててね」

笑い声を浴びながら雑誌をめくりかえし、ふくろとじをぶちまけ、そこに当然面積公式の答えなどあるはずもないことは知っている。

ただ、機を待つていた。笑いというものには必ず起爆点がある。

「ここかな。ここで、いいかな。」

「そのですね、先生。俺よく考えたんですがわからなくて」

痛む膝を押してびしっと姿勢を正して立ち上がり、開いたままのふくろとじをストロブの下に蹴り込む。

「アンタどういう教え方してるんですかねえ!？」

半ギレで叫んでみた雪之丞。そして間を置いて、教室は大爆笑の渦に沈んでいった。終業のチャイムをかき消すような笑い声。近くのクラスの連中も何事かと廊下から覗き込んでいる。

「あーあ、またユキのヤツじゃねえか」

そう、またまたオレだよと雪之丞は机にどっかと腰を降ろす。ただただ醒めている。こんなモノの何が面白いのか、彼が一番分からない。つまるところこれは、いつもの週末のいつものシメの儀式のようなものだ。

「こりゃ、なかなか」

息苦しいな、と。

◆◆

今日は一人だ。

正月ムードもとつくの昔に消え失せて、いささか閑散としたアーケードを歩く雪之丞はすぐに目当てのスケキヨにたどり着くことができた。

が、ハジメは失踪、江梨花は病院へ。来たはいいものの一人で大盛りをすすするのも虚しい。

「帰ろ」

ハジメたちと見ようと録り溜めした正月番組も未消化のままだったことを思い出す。仕方なくそれで本日の暇を潰すことにして、何気なく来た道に視線を送る。

そうしてまたもや彼女を見つけてしまうのであった。

アーケードの出口には大きな交差点があって、道路を挟んだところに立つそいつはあまりに小さく見えた。

あれが一張羅であったのだろうか、彼女が身に付けるものといった

ら服屋のマネキンをそっくりそのまま引つ被ったようなものであるが、その容貌は類まれなものである。そうそう見かけるようなものではない。

霊夢が雪之丞に気付いた様子はなかった。

ただ、その隣を歩く女。背の丈で言えば幽香に近い、長身の女。その魔性が一瞬だけ雪之丞を捉えると、うつすらと微笑んだ。

「紫、なにか」

「いいえ」

視線に気付いた霊夢の肩を抱いて、彼女は遠く離れた雪之丞にも聞こえるように高くヒールを鳴らした。

ノックされた、と感じた。

あの女は雪之丞を誘っていた。彼の前に立ちはだかる日常と非日常の境界。そびえ立つ門が、あろうことから非日常の側から叩かれてしまった。

女と霊夢の姿は曲がり角へと消える。

「ちよ、ごめん、ゴメンナサイ」

慌てて駆け出した雪之丞を嘲笑うようにスクランブル交差点の信号が青になる。人と人の間をどうにか縫ったり縫えなかったりしつつ、もみくちやの雪之丞はひたすらに必死だった。

次はない。これが真正正銘、最後のチャンスだとしたら。

それを逃がしてしまうことを考えれば、痛みなど気にはならない。もはや邪魔でしかない松葉杖を放り捨てて顔を上げると今度は歩道橋の上に二人がいる。

「ふふ」

「なによ、さつきからあんた、ヘンよ」

霊夢からは、ほとんど四つん這いで歩道橋を登ってくる雪之丞は見えない。女は愉快げに日傘をくるりと回す。

「頭でも打った？」

「ふふふ、ふふ」

「ま、あんたがおかしいのはいつものことか」

雪之丞は絶句する。

階段が目の前で段数を増やしたのだ。びろびろりと、折りたたまれていた蛇腹が伸びるように階段が天高く続いている。ふと真横に視線を馳せると、反対側の階段を降りていく霊夢たちが見える。

「クソー」

試されているのか、弄ばれているのか。これなら降りて横断歩道を渡った方が早い。

が、しかし。雪之丞は振り返ってあやうく眩暈を起こすところだ。下へと続く階段もまた、途方もなく伸びていた。人が米粒のように小さい。

逡巡して、雪之丞は降りることを選んだ。ごうごうと吹き付ける風。手すりを離せばそれが最後になる。それでも諦めずに霊夢を追いかけるのは、やはり、執念だ。

手汗がぬめる。風は冷たい。

「わっ」

地上に霊夢を探したとき、ついに不運が不意を突いてきた。

一段踏み外した雪之丞は果てしなく続く階段を転げ落ちていく。背中を打つ。息が詰まる。手を伸ばせど引つかかるものもなく、回り続けるうちに三半規管がバカになったのか、回転が止まったように感じる。

いや、止まっていた。

気づけば歩道橋の一番下。陸に打ち上げられた魚のようにもがいていた雪之丞を雑踏が避けていく。酸欠気味の脳みそで霊夢を追う。ずっとずっと遠くだが、追いかけて間に合わない距離ではない。

路地から路地へ。歩道橋のような意地悪を何度も受けながら、雪之丞はメゲない。

ゴミ箱を蹴散らす。水たまりに足をとられる。あやうく車に轢かれかける。

目の前をネコが横切る。しっぽが二つあったか。それは気のせい。か。すぱりと切れたような空間の裂け目。振り返って見ると消えている。青白い鬼火が佇む横道、獣の耳と尻尾のある美女が見下ろす窓。

少しずつ非日常に吞まれていくのを実感しつつ、雪之丞はむせび泣いていた。

「これが俺の非日常。俺が求めていたモノ！」

「ようこそ」

そうしていくつもの扉をくぐり抜けた先。

「いらっしやい。狭間雪之丞くん。私はユカリ。八雲紫^{やくもゆかり}」

女はいた。

窓のない四角い部屋の中、促されるまでもなく雪之丞はテーブルについた。向かいの女は見るものに警戒心を投げ捨てさせるような柔らかな微笑みを向けてくる。

ヒザは、いつの間にか痛みが退いていた。

6 『雪之丞』17歳、恋を知る（下）』

息を吸って、吐いて。そして八雲紫を名乗る女を見つめる。

「色男が台無し」

白いハンカチからは女の香水の匂いがした。

汗と涙でべしよべしよの顔を雪之丞が拭いて、やがて長い時間の末に口を開くまで、女はにこにここと笑いながらティーポットを傾けていた。

差し出されたカップには茶色の液体。だが、紅茶にしてもコーヒーにしても、いささか色味がおかしい。恐る恐る雪之丞が手に取って匂いを嗅ぐと、鼻腔に弾けた炭酸が舞い込んできた。

「……てつきり、紅茶でも出してくるんじゃないかと思ったんだがな」
「あなたにはこちらの方が口に合うんじゃないかしら」

年齢も人種も分からない。ただ、女の装いと振る舞いは世間一般のそれとは大きく異なる。どこか、過去の時代の貴人。青年が退屈しのにめくり続けてきた資料集に、似たような雰囲気の肖像画を見たことがあるような気がしないでもない。

「コーラよ」

「分かつとるわい」

だからこそカップの中身にはいささか意表を突かれた。

どこから取り出したのか、口元を扇子で覆って笑う彼女を見ていると、初対面で感じた親しみとは別の感想が湧き出してくる。

胡散臭い。

大人とは押し並べて多少は胡散臭いものであるが、女は群を抜いている。扇子に隠れた唇を舐めまわすものは、蛇蝎のような舌なのではないか。

雪之丞はテーブルの下で固く拳を握って、緩みかけた警戒心を新たにする。一度非日常に足を踏み入れてしまったが最後、何が命取りになるかも分からないのである。

「化物と疎まれてはきたけれど。流石に殿方の前ではしたないマネはしたくない。こう見えても乙女ですもの」

扇子をぱちんと閉じると、女は形のいい唇からバラの蕾のような舌を突き出してみせた。雪之丞は心を読まれた動揺をなるたけ隠してカップを戻すが、震える指先が最後の最後でへまをした。

指をすりぬけ、カップは乾いた音を立ててテーブルの上に伏せる。しかし、様子がおかしい。

「あなたの感じる胡散臭さは至極正しいものだと思うわ」

うつすら笑ってカップを拾い上げた紫が見せるものは、目を疑うような光景だった。

コーラは一滴としてこぼれずそこにある。ゼラチンでも入れて固めてしまったように、真つ逆さまのカップの中で、水面はふるふると揺れていた。

「境界を操る。それが私の能力」

女がカップの底に息を吹きかけると、見えない境界が消えたように液体がテーブルを打った。不必要なものを極限まで削いだ部屋の中にその音は大きく響く。大きすぎた。

思わず肩を震わせた雪之丞を見て、女はまた笑う。ほらね、やつぱり胡散臭いでしよう、と。

女の白いドレスに散った茶色の水滴も、テーブルの上の水たまりも、吸い込まれるように消えていく。やがてすべてが落ち着きを取り戻したとき、雪之丞は口元をわななかせていた。

名刺がわりの洒落た自己紹介のつもりだったが、どうやら現代を生きる高校生には女の予想以上に刺激が強いものだったらしい。流石の女も、ここまで静かになられると心配になってくる。

「ちよ、ちよつと？」

「すっ——げえええええ！」

両者が身を乗り出したのは同時だった。

短い悲鳴と野太い雄叫びが部屋をつんざき、主の慌てっぷりを示すように、胡乱な白い部屋はぐにやぐにやと揺れる。

ぶつけたおでこを抑えた紫が目を白黒させる暇もなく、雪之丞は椅子を蹴倒し、部屋の中を落ち着きなく歩き回った。その瞳が再びうるみ始めている。

「その、ええと。俺ずっと待ってたんだ。ある日突然あなたみたいのが来て、俺を——ああ、悪い。俺も何を言ってるのか。でもこれだけは分かってくれよ。今すげえ感動してる。イカしてるよ。そのドレスもいいよな、なんか大物っていうか、黒幕感っていうか、雰囲気出てる」

感動はわかるが、流石の紫もいちいち頭の先からつま先まで丁寧に褒められては恥ずかしくなってくる。

「わ、わかったから。とりあえず落ち着いて」

そんな言葉くらいで十七年も非日常に片想いを続けた雪之丞が我に返るのは難しい。未だ興奮冷めやらぬ様子の雪之丞が、優しい笑みを浮かべた紫に気づいたのはしばらくしてからのことだった。

「懐かしい」

コーラを注いだポットが再び傾けられる。女が特にポットを開けた様子はない。それでも同じ注ぎ口から流れ出てくるものは湯気を立ち上らせる暖かな液体だ。ふわりと甘い香りが漂う。

「霊夢だつて昔はもうちょっと可愛げがあつただけけどねえ」

と、遠い目をしてみせる紫。

紅白の巫女がもつともつと小さい頃は、紫が気まぐれに弄ぶ奇跡じみた所業の数々に目を輝かせていたものだ。それこそ雪之丞といふなんの変哲もない高校生と同じように。

育て方を間違ったのか、友人選びを間違ったのか。まるでグレた我が子に頭を痛める母のように、紫の微笑みが沈んだものへと変わっていく。

「そうだ、あいつは？」

紫の心中も知らずに我に返った雪之丞の問いに、紫は顔を上げた。

「霊夢を心配してくれるのかしら？」

「一日二日であんなケガが治るかよ。それなのにアンタ、町に連れ出したりして」

「治るわ。私には治せる。思い出して、この能力を」

境界を司る、と女は言った。境界とはつまるところ別々にものを分かつための壁のようなものだ。カップの中と外、穴と五円、燃える才

フェイスビルと雪降りしきる町。その境界は曖昧であるが、ちゃんと目に見えるものだ。

「元気の霊夢とそうでない霊夢。死んだ霊夢と死んでいない霊夢」

それだけ言われれば、能力というものを理解しきれなかった雪之丞にもその全容がなんとなく掴めてくる。紫の能力が及ぶ境界は無制限。有と無の間ですら操れるというのなら、その力は神に果てしなく近いものなのかもしれない。

「ならー」

あやうく口を飛び出しかけた言葉を押さえ込んだ雪之丞を見て、紫は促した「遠慮はいらないから、言ってごらんなさい」

「……例えば平凡太郎と特別太郎の狭間つても操れるのか？」

「できるわ」

即答である。

「色々とおの子から聞いたの。あなたのことを」

当然それには雪之丞ダム決壊事件も含まれているのだろう。突然紫の笑顔が意味深なものを秘めているように思われて、青年は赤くなった顔を伏せていた。

「別に、俺はなんもしてない」

「いいえ。傷ついたあの子に手を差し伸べてくれた。私にとって、それは十分すぎる恩なのよ」

あなたが特別になりたいなら、それを叶えてあげる準備はある。と、紫は付け加えた。

是も非もなく頷こうとして、雪之丞は目元を険しくする。人の心を読むような胡散臭い女。彼女の申し出は魅力的だ。あまりに魅力的。そして同時に、ムシが良すぎる。

「でも、手放しで叶えてやろうってワケじゃない。そういうことなんだろ」

「そうね。あなたの本質を目覚めさせる前にいくつか条件を呑んでもらいたい」

もう少しで能力つてやつが手に入って、ハジメと肩を並べることができる。そう思うだけで手が震えそうなほど興奮する自分を極力抑

えて、雪之丞は紫の次の言葉を待った。

「まず一つ。一度目覚めた力がなんであれ、私は戻すことをしない。無理やりリセットを掛けて、あなたの本質が永久的に損なわれても構わないなら話は別だけれどね」

「いいぜ」

「二つ目。私たち、実は今とっても困ったことになっているの。あなたの力が有用なら、是非助太刀を頼みたい」

「断る理由なんてない。相手は鬼か悪魔か、それとも凶悪犯罪か。この際、木から降りられなくなったネコの救出劇でも構わない。雪之丞が心の底から望んだのはそういうものだ。常人が持ち得ない能力をぶんまわし、正義を成す。」

「大歓迎だ」

「私たちの目的が風見幽香の抹殺でも？」
「か」

不意打ちで腹をぶん殴られたようだった。

「別にあなただが直接手を下す必要はない。あなたの仕事は私や霊夢が問題なくあの子を殺せるように障害を排除すること」

「排除。それもそれで剣呑な響きであるが、雪之丞の関心事はそこではない。」

「どうして八雲紫の口から最愛の女性の名前が転がり出てくるのか。抹殺？ なぜ？」

「——なら、あんた達は」

「あなたの敵つてことになるかもね。残念ながら」

「恋心もお見通し。身構えた雪之丞に対して、紫はカップを置いただけだ。」

「語ってもいい。聞かなかったことにしてもいい。ここから帰ってもいいし、私に立ち向かってもいい。もちろん抵抗はさせてもらうけれど」

「戦闘態勢をとって見たはいいものの、雪之丞にもそれが必要なものであるのか分からなくなってきた。紫ほどの存在である。何者かを殺す、なんて言葉を吐くのなら、そこには何かしらの理由がある」

のではないか。

雪之丞の苦悩は、その険しい面持ちが代弁している。

「知りたいなら教える。重ね重ねだけどあなたは恩人だもの」

もう一度紫は雪之丞を見据えた。やはり、彼の顔は雄弁だ。

「いいわ。全部教えてあげる。あなたが一体何を好きになったのか。

鶴見ハジメが知らない、風見幽香の秘密を」

紫は組んでいた腕を解くと、体を椅子の上に投げ出した。彼女にしては珍しく疲れたような表情を浮かべてから、白く細い喉を露わに天井を見上げる。

「後悔はしないことね」

「そっちこそ。例え幽香さんが正真正銘のバケモノだって俺は愛してみせる」

不敵に笑う雪之丞だったが、紫はあくまで哀切な視線を宙に彷徨わせたただけだ。

「でも覚えていて。あの子を本当に愛しているなら尚の事。あなたは風見幽香を殺さずにはいられなくなる」

あまりにも意味深な表現は、それまでの雪之丞の決意の根底を揺るがすような重みを持っていた。そして「鶴見ハジメが知らない」という言葉の、魔的な響き。



「キミは戦争でもしているのかい」

診療室。邪魔そうにギプスを引っ掛けながらシャツを着ていくハジメの背中を医者は目でなぞった。一か月前の事故の傷跡が生々しく残る彼の肌には、真新しい縫い跡がいくつか増えている。

体を覆う火傷の跡といい、確かに彼の言葉通り、ハジメの体は帰還兵めいて激しく痛めつけられていた。

「ええ、ここのとこの日課で」

うんざりと答えて真新しいジャケットを羽織ると廊下に出る。年末始がそうさせるのか、どこの待合も人でいっぱいだ。かくいうハジメも折れた腕の具合を見てもらうためだけに一時間近く待つハメになった。

その間幽香はいつもどおりにハジメにちよつかいをかけたり、点滴スタンドで遊んだり、人が乗ったままの車椅子を意味もなく押してみたり。気が休まるヒマのなかった一時間はあつという間であった。

待合にいない彼女の姿を探して廊下を歩くうちに、ハジメはとある病室の中にその姿を見つけた。なにかの病気が、ただの偶然なのか。その病室に詰め込まれていたのはいずれも十代に満たないような子供たちだ。

ベッドの一つに腰掛けた幽香の周りには彼らが興味津々といった様子で集っている。午後の日差しを背にした幽香の手元で静かに芽吹いていく花々が散りばめられたベッドは、さながら花畑のようだった。

優しく、穏やかな表情を浮かべた幽香。思わず声を掛けることがためらわれる。

廊下と病室を仕切るドアのレールが、結界じみて跨ぎ難い。ハジメの視線はただ、子供たちと言葉を交わしながら器用に花を編んでいく幽香の手元に吸い込まれていった。

「この子たちを可愛がってあげてね」

町一つ容易く燃やし尽くすような閃光を発射する手で作られた花冠を嬉しそうに掲げる子供たちの頭を撫でてやって、彼女はようやくハジメの存在に気づいたようだった。

「そんな所に立ってないで、いらっしやいよ」

「いや、いや」

ふわりとベッドから降りると、幽香は最後まで編んでいた花冠をハジメの頭に載せてやる。甘くはない、清冽な香り。やはり幽香の扱った花は通常のものとは違うのかもしれない。根を張る地面を持たずとも名も知れぬ白い花びらは瑞々しさを失わず、誇らしげに咲いていた。

「お前って実は子供に優しいとか、そういうタチ？」

「ふふ、今更ね。あなたに毎日お弁当を作っているのは誰？」

その意味を理解するためにハジメが頭をひねる時間をも与えず、幽香はリノリウムの床に上機嫌な靴音を高らかに響かせた。手を引か

れて歩くハジメは周囲の視線に居心地悪そうにしていたが、その大元が自分の頭の上にあるとは気付かない。

「腕の具合はどう?」

「もうちよつとだつて」

「あら。ついに本気のハジメが見られるのかしら」

幽香は至つて優雅で上品に笑つて見せるのだが、ハジメは気が重くて仕方がない。これからは本気の幽香を嫌というほど体に刻み込まれるのだろう。まさに戦争である。それも、一方的な。

他にも問題は山積みだ。喧嘩して別れたままの雪之丞、家族と学校への言いワケ、欠席日数計算——そして博麗霊夢。

まずは彼女をどうにかしなければ、家に帰ることもできない。負債だけが途方もなく積み上がつていくような現状にハジメが眩暈を覚えていると、トドメを刺すような一言を幽香が口走るのだった。

「ねえ、今一番の問題つて何かしら」

「そりや霊夢だろ」

幽香は首を横に振る。

「ええと、千晃?」

違う。

「わかつた。ユキのことだろ。オヤジ? 違うなら、次の期末テストの準備がまつたく出来ていないつてこととか?」

それも違う。

彼女がポケットから取り出したものは、てっきり霊夢との戦闘の最中に無くしたと思ひ込んでいたものだ。そしてそれがこの場に至つて一番出てきて欲しくない場所から出てくるとは。

「お金がそろそろ底をつくわ」

そういえば連日のホテル生活も、父が彼女に与えたおこづかいくらいで足りるものかと思ひ議に思つていた頃合である。ぽんぽん支払われていく札を見て、こんな奴にも多少の蓄えはあるんだな、と関心したものだ。

「お前、俺がそれ貯めるのにどんだけ頑張つたか」

一切の悪びれもなく見覚えのある預金通帳をひらひらと振つてみ

せる幽香を前に、ハジメは自然と己の膝が砕けるのを感じていた。高校最後の夏の予定。雪之丞たちと計画していた卒業旅行も、遠い対岸のこのように霞んでいく。



排ガスを吸った冷風が頬を撫でていく。

どこかのビルの給水塔の上に投げ出された雪之丞は西日に目を細めた。狂おしいほど美しい夕日が染める雲の影は青紫。町は炎の色。

「綺麗ね」

隣に降り立った紫に雪之丞は頷いた。

だが、どうにもその風景はちつぽけだ。スケキヨと学校、そして自分の家。その往復はもはや彼の世界ではない。今の雪之丞にとって、世界とはもつと不敵でもつと広大なものであった。

「にしても、少しばかり」

今日の太陽はかつてないほど眩しい。実際夕日に撫でられた肌は焼き付くようであったし、目はほとんど潰れそうだ。

尚も意固地に太陽をみつめる雪之丞に微笑んで、紫は日傘を差し出してやる。

「不思議な感じ?」

「まあな」

「あなたは変わったから。じきに慣れるわ」

薄暮の町がかえって輝きを増していくように思えるのは、ただの錯覚なのだろうか。ビルとビルの隙間の暗がり、灯りの灯らない空部屋に奇妙な居心地の良さを覚えているのも、やはり錯覚なのだろうか。胸が熱い。熱の塊を吐いてしまいそうだ。

「お別れを。きつと、もう直接太陽を拝むことなんてできないわ」

最後の太陽。その言葉の意味は分からずとも、何となく太陽の方も惜別を告げているように思えた。雪之丞は目を焼くような夕日に拳を突き出す。それは拳銃の形だ。

「あなたの形はそうじゃない」

背後からもたれかかった紫が手を握る。ひんやりとした指によって手のひらが閉じられる感触にも、耳元で囁かれた声にも、彼の心が

動くことはない。彼の心は一途に燃えている。風見幽香という、あこがれに。

「こう。指すんじゃないで、握るの」

心臓をノックするように、片手を胸に当てられる。

太陽が二度と見られないなんて気にならない。拳の下にもうひとつの太陽を埋め込まれたように胸が熱く、焦げていた。出処の知れぬ雄叫びがそろそろと忍び寄る宵闇をつんざいたとき、既に給水塔の上に雪之丞はいない。

第八話『雪之丞17歳、恋を知る』おわり

7 『水面の鶴と花と（上）』

【UMA?】 F市怪現象議論スレ 【UFO?】

1：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
お前らニユース見た？

あの映像ってガセ？四月にはまだ遠いよな

2：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>>2

マスコミはすぐ踊らされる

3：TK ◆tsuru. c78a

家から出ない俺にはよくわからん話。

4：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
クソコテ死ね。そして新聞くらい嫁

5：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

F市在住の俺が通りますよつと

6：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>>5

つーことは六日のあれをナマで見たって感じ？

ぶっちゃけネットの動画じゃボケボケでよくわかんなかったんだ
けど

7：TK ◆tsuru. c78a

俺もF市在住だけど、あんときは眠っててよく分からなかったわ。

8：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>>7

でかした。死ね

9：5

>>>6

見た見た。でも動画の方がなんつーか詳細だよ。

ニユースの人型飛行物体とか俺の目じやわかんなかったけど、とり
あえずきれいだった。

10：むらさき

うふふ

11：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>>9

オーロラって話もあるけどね。今年、特に寒いし

12：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>>9

F市って何もないド田舎だよな。ぶっちゃけ新型のまちおこしな
んじゃね？

13：5

>>>11

オーロラってカーテンみたいなやつじゃないの？俺が見たやつは
花火とかレーザーみたいなのだった

>>>12

確かに話題にはなったけどな。でもこれでオシマイだったら相当
ワケ分かんないよね

14：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

俺も転勤族で去年の暮れまでいたんだけどさ、ぶっちゃけあの町呪
われてんじゃないの。

最近聞かないけど連続失踪事件とかあったじゃん

ネタかもしれないがオーロラは寒いから出るわけじゃねーぞ

15：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

新しい庁舎建てたらすぐ燃えたしな（笑）

16： TK◆tsuru.c78a

ちよつとー

17：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

あのビル吹っ飛んでから何かと起きてるのは割とリアルにガチっ
ぽいよね

18： TK◆tsuru.c78a

構えったら

19：むらさき

どうしたの、おチビさん？

20： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
コテハン同士で絡むのやめーや
つか議論スレだぞここ

21：TK◆tsuru.c78a

家に誰もいなくてマジでヒマ。相手してよ相手

22： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

家から出ない：平日：あつ（察し

23： TK◆tsuru.c78a

urus

24： TK◆tsuru.c78a

うるせえ

25： TK◆tsuru.c78a

うるせえよ

25： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

凶星wwずぼしwww

27： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

以降ここはクソコテを慰めるスレになります

28：むらさき

いじめないであげて

◆◆

薄暗い中で画面を見つめていたせいで目がちかちかしてきた。ハ

ジメは眉間を揉んで、クツションに体を埋める。

どこもかしこも同じ調子。数日前に幽香と霊夢によって練り広げられた空中戦の一部始終が地方ニュースで取り上げられたことがきっかけだ。その映像中に人型の物体が見つかるなり、この『怪現象』はちよつとした騒ぎを引き起こした。

マウスカーソルを動画に合わせ、再生する。

幽香の放った攻撃は間違いなく命中していた。暗視モードのカメラで撮られた霊夢は光の点でしかないが、四方八方から殺到した破壊の旋風がその体を突き抜けていく瞬間ははつきりと見て取れる。それでも霊夢は動き続けていた。

まるで攻撃が命中したという事実を無視してしまっているかのよう
うに。

それが霊夢の持つ能力だというのなら、相手は触れず一方的に叩か
れるしかない。ズルもいいところだ。

同時にそれをどうやってか撃退してのける幽香は強さの天井に風
穴を開けてしまっている。

だが幽香がいくら強かったところで、ハジメの心は晴れない。

彼は負けた。ド惨敗だ。手も足も出ないままタンスに潰され、友人
に救われ、その身を危険に晒し、恥ずかしげもなく尻を丸出しにして
幽香に傷を縫われた。

プライドが高い方ではないが、流石にここまでやられ倒されては堪
えるものがある。

おまけに貯金は枯渇寸前。

なけなしのお金をすべて下ろして、シャワー付きネットカフェの一
室に体を押し込めることはできた。しかし、これからどうすればいい
のだろうか。

霊夢がいつ殴り込んでくるとも知れず、家に帰ることはできない。
とはいえ永遠に隠れ続けることもできない。

「困った」

キーボードを押しつけて、テーブルに頭を叩きつけた。

風見幽香をもっと知りたいだなんて、悠長なことを考えていた一か
月前の自分を張り倒してやりたくなる。その結果幽香を追って霊夢
が現れ、ハジメの尻は縦横に裂けた。

風見幽香は鶴見ハジメにとって死神であり、疫病神だ。

それでも今更彼女と距離を置くには、同じ時間を過ごしすぎしてい
た。おまけに鶴見家は彼女なしでは上手く回らないだろう。

「今頃ウチはガツタガタだろうなあ」

ハジメにとって。そして千晃や父にとって彼女がどんな存在にな
りつつあるか。既に表現する言葉は見つけてある。同時にそれを
はつきりと口にすれば、六月に致命的な結果を引き起こすような気が
してならない。

「そろそろ、のんびり湯船に浸かりたいものね」

葛藤にどつぷりと浸かっていると苦悩の原因がドアを開けて入ってきたので、ハジメは臥せっていた顔を持ち上げる。幽香はハジメに借り物の薄いブランケットを渡してやりつつ、小首をかしげた。

「どうかした？」

ずいと身を乗り出し、顔を覗き込む。

それはいつも通りの反応であるが、こう逃げ場のない空間で迫るようにされては刺激的にすぎる。

僅かに上気した肌だったり濡れた髪から漂う香りだったり、今あまりに近い。ガチガチに意識したハジメが反対側の壁に頭を預けると、それを怪訝に思った幽香が更に距離を詰める。

思春期には耐え難い状況である。

「なんでも、なくは、ないケド」

「言ってみて」

息が触れるような距離でこれ以上見つめられては頭がおかしくなりそうだった。ので、ハジメはブランケットを深く被って盾にする。と、幽香に逸れそうになる意識をモニターに注ぐ。

「……………霊夢のことなんだけれどさ」

「負けたこと、まだ気にしていたの？」

ぐうの音も出ないくらいのレストラン球であった。黙っていることがそのまま負けを認めるようで悔しかったので、とりあえず「ぐう」と唸ってみてからマウスを手取る。

幽香の目がモニターのカーソルを機敏に追う。まるで猫みたいだなと思いつつ、ハジメは例の動画を再生した。

連なる光の弾が空を飛び、縦横に走り、弾幕となって相手に殺到する。弾丸に貫かれて尚動きの鈍らない光球に、爆発的に加速して迫るもうひとつの光。張り巡らされた壁をぶちやぶつたそいつに弾き飛ばされて、もうひとつの光は燃え尽きる線香花火のように輝きを失いながら落ちていく。

「我ながら、必死すぎて可憐な戦いとは言い難いわねえ」

一見苛烈で美しい戦いは、幽香の目にはそう映るようだ。

今後の課題ねうんうんと頷く幽香を無視して、ハジメはソファに体を横たえた。

「ぶっちゃける」

はだけた幽香の胸元に一瞬目が吸い寄せられそうになって、ハジメは猛烈な自己嫌悪に襲われる。目がつぶれるほど強くまぶたを閉じたしかめっ面で、深く長く息を吐いた。

「むっちゃくちや悔しい」

幽香のように戦えないことも、霊夢のように空を舞うことができないことも。

結局は幽香と出会ったその日から変わらず、彼女に手を引かれて無様に阿波踊りをするしかないということに気づかされる。

だからこそ、強さのピラミッドの上に君臨するはずの幽香が吐いた言葉にハジメは耳を疑っていた。

「よく分かる。手ひどくやられたあとは、私もひまわりたちに慰めてもらったわ」

ボロクソにされた幽香がその上落ち込んでいる姿なんて、そう簡単に想像できるようなものではない。

「驚いた?」

「ああ。今年一番のびっくりだ」

「これでも弱い頃だってちゃんとあったんだから」

今は違うと仄めかすあたり、流石である。

「あなたなんかよりもずっとずっと弱かった。気まぐれに妖怪がやってきて私を痛めつけていくこともあったし、場合によってはもっと酷い目に遭うことだってあった」

「その……酷い目って?」

「遠い昔のことによく覚えてないわね。飲み物なしで大皿いっぱいのお菓子を食べさせられるとか、だったかしら?」

毎度毎度のことながら、幽香の言葉がどこまで真実に迫ったものなのかを判断することはできない。片手でハジメの食べ残したスナック菓子をぽりぽりとかじりながら、彼女は覚えたてのタイピングを器用にこなしていく。

「よく死ななかつたな」

「死ねなかつたのかもね。この子達のためにも」

問う前に答えが大写しにされたモニターにハジメは見入っていた。検索ボックスに入力された「ひまわり」の文字。鮮烈な青と黄色に彩られた画面を見ているだけで、少しだけ沈んだ心が軽くなっていく。「本物はもつとすごいのよー！」

いつしかマウスをひったくるようにして画面にスクロールしていたハジメは、隣から画面を覗き込む幽香の声に我に返る。興奮に頬を赤らめて、彼女はもつと見ましようと呼びかけてくる。

「毎日愛情を注いであげるの。可愛がってあげた分だけあの子達は応えてくれる。おかげで私のおうちの周りは太陽の畑って呼ばれて――」

地平線まで広がる向日葵の画像を開いて、幽香は不意に表情を曇らせた。

「まあ、もう無いんでしようけど、ね」

気落ちをそのまま引き受けたように、入れ替わりで幽香が体を倒す。ハジメは画像と幽香を交互に見比べる。とてもよい笑顔でぶつ殺すぶち壊すと不穏な予告を試みたかと思えば、頬を染めて花が好きだと言ってみたり。

「その太陽の畑ってのが、あんたが生きる理由だったのか」

「私が倒れたらこの子達はどうなるのか、私が守らなかつたらこの子達はどうか傷つけられるのか。少なくとも、強くなる理由ではあった」

モニターの端に掛けられた白い花冠が静かに揺れた。

物言わぬ花を守るためだけに命掛けになるなんて、とてもじゃないがハジメには共感できない。それでも理解はできる。あの日、雪の降りしきる空の下、燃える左手を構えて千晁を襲った怪物に引き金を引かせたものと同質のそれは。

「俺もあんたも、そういうことになるかと割と見境ないよな」

幽香は微かに声を漏らして笑った。

幾度の破壊を経てなおゾンビのようにハジメの手首にしがみつく腕時計の針はそろそろ十二時を回る。ハジメはモニターのスイッチ

に手を伸ばして、幽香の視線に気づいた。

「このままっ。」

「あなたがそれで寝られるのなら、お願いしたいわ」

ブランケットを頭から被って、ハジメは壁に向き合うように体を横たえる。やはり宿泊者向けとはいえ、ここは何日も泊まり続けるような場所ではない。おまけに幽香のような相手が一緒となれば、安眠のためにはひたすらその存在を無視し続けるしかない。

「ありがとう」

という暗闇に溶けるような眩きも、この際聞こえなかったことにした。

意識を一本調子なパソコンのファンが回る音に合わせる。そうしてどうにかこうにかうとうとし始める頃になって、幽香が身じろぎした。

「眠っちゃったかしら」

答えるべきか、嘘寝を決め込むべきか。迷った末にハジメはため息で応答した。

「もうちよつとだった」

幽香が体を起こす。ブランケットの隙間から入り込んだ外気に、ハジメは芋虫のように体を丸めることで不満を示す。

彼女があれほど気にしていたモニターをあつさりと消すあいだ、ハジメはその輝きの中に照り映える白い包帯を盗み見ていた。

「悪い」

「何が？」

「その腕。あんたの腕、傷、たぶんずっと残る」

ああ、と思い出したように幽香は腕を撫ぜた。

「大したことじゃないわ」

「どこがだよ。あんただって人だろ、痛みくらい」

パソコンの電源は切られ、狭い部屋は闇で仕切られた。ハジメの目には明かりが消える寸前、どうしてか嬉しそうに微笑んだ幽香の残像がちらついていた。長い長い沈黙の中で、衣擦れだけが聞こえる。

「あのね、ハジメ。あなたは私との約束を覚えているはず」

猶予半年。殺すか、殺されるか。

「私が傷ついたなら喜びなさい。霊夢が負けたことを悔いなさい」

「それでも、あんたが俺を庇って傷ついたことは」

「敵の攻撃を防ぎ、あるいは逸らし、受ける」

語末を待たずに幽香が口を開いた。

その言葉には聞き覚えがある。まるで昨日のことのように思い出せるのは、幽香の肉の色と、散り際の桜のような儂く凜とした姿だ。

「私の体は不器用だから、あなたと千晃を守るかは確証がなかった。避けるなんて論外。だから受けた。それだけよ」

それだけ。本当にそれだけなのだろうか。首をひねるハジメの姿を暗闇の中で見通して、幽香はくすくすと笑い声を漏らす。ハジメはそれが気に食わなかったようだ。

「何がおかしいんだよ」

「だってあなたが言うこと成すこと、今まで誰もしてくれなかったから」

ハジメだって前もって幽香が何者かを知っていれば気がふれても殺してやるなどと口にはできなかつただろう。

「ああ、でも霊夢は別。あの子はよくしてくれたわ」

「よくして、くれた？」

「ずっと前に悪さをしたときは気が飛ぶほど殴ってくれたし、この間もやってもいない異変の濡れ衣を着せられて——あら？」

それにしても殴られてばかりねえ、と。幽香はまたまた密やかに笑った。

「ライバル？」

「いいえ。親友よ」

どうやら幻想郷では親友の定義がいくらか違うらしい。

ハジメが無意識に握り締めていたギプスにはびつちりと綴友たちのメッセージが書き込まれている。雪之丞と江梨花から寝ている間に書き込まれたもののあるはずの場所をなぞって、彼はほくそ笑んだ。

「そういう暴力的なのを親友とは呼ばない」

「親友だからこそ真つ先に来てくれたのよ。あなただつてユキや江梨花がどこかの馬の骨に殺されちゃうくらいなら、いつそ自分の手でつて思うでしょ?」

「思わねえよ。なんだその理屈」

噂をすれば何とやら。呆れていると、ほかでもないハジメの親友からの着信が机の上の携帯を揺すった。もそりと起き出して、変わりない調子の文面に口の端を吊り上げる。

「ユキのやつ、サボってないでさつさと学校来いだとき。こつちの事情も考えろよつて感じだよな」

「心配しないでいいわ。霊夢とのことはすぐに終わらせるから」

ハジメの手の中で息を潜めていた携帯は、机に置かれるなりがたがたと騒々しく震え始める。今度はメールではない。電話だ。

「んだよ、あのせつかち野郎」

「ラブコールでしょ。話してあげなさいな」

「すぐ戻る」

スウェットの上にジャケットを引つ掛けて出て行くハジメを見送って、幽香は毛布を引き上げた。

霊夢のことはすぐ終わらせる。彼女には彼女なりの意地があるはずで、幽香も幽香なりの意地がある。お互い譲らないから、いい友達でいられるのだ。



「はいはい。俺。あ、この音は近くの車道だよ。ここのところずっと霊夢から逃げ回つててさ」

繁華街のど真ん中。寒さに体を抱いて、ハジメは見えもしない相槌を打ちながら雪之丞の返事を待った。

「別に十分くらいなら構わないけど。場所?　じゃあほら、こないだの公園でいいだろ。お前んちからも近いし。ああ。ああ、うん。それじゃ、また後で」

幽香を残していくことを少しだけ後ろめたく思いながらも、ハジメの足取りは軽い。

少しだけ。今は少しだけ非日常から離れよう。今晚だけは針も札

もビームも無しだ。少し笑って、霊夢のことはまた明日から頭を捻ろう。

右腕のギプス。照れ隠しにと上から貼られたカエルのシールをはがして、ハジメは眩しそうにそれを見つめた。背後のコンビニの明かりで読めるその字は、今は遠く離れてしまった平和の日々に書かれたものだ。

『寂しがるなよ、相棒。いつでも待ってる。』

雪之丞』

8 『水面の鶴と花と（下）』

誰かのつま先が幽香の眠る部屋の壁を小突いていった。

予想外に大きく響いた音に幽香は身じろぎして、ミノムシのように毛布にくるまったまま眠りに落ちていたことを知る。

見た夢は定かではないが、とにかく久しぶりによく眠れたような気がする。寝る前に見た向日葵畑がよかつたのかもしれない。伸びをしつつ、幽香は鉄と電気の塊にすぎないモニターを撫でてやった。

「よしよし」

いつの間にか再起動がかけられたモニターには真っ白なメモ帳が大写しにされていた。それ以外はハジメが出て行く前と大差ない。机の上に置かれた花冠にせよ、荷物にせよ。未だに幽香の隣が空であることも。

「……………ハジメ？」

彼はまだ戻っていない。電話に行ったままだとしても、あまりに長すぎる。

心配顔で幽香は腕時計を手にとって毛布を跳ね除けた。部屋に漂っていたものは嗅ぎ慣れない、しかし覚えのある女物の香水のにおい。首筋にねつとりと舌を這わせてくるような艶っぽい香りに眉間に皺を寄せて、幽香はそれを見つけた。

『ごめんなさい。彼は潰すわ』

その一文が起き抜けに弱い彼女の頭を揺り起こした。霞が晴れるように見えてくるのは数々の異常だ。いつの間にか起動されたメモ帳。いつの間にか書き込まれていた文字。そして真っ黒に変色しつつある花冠。

部屋を飛び出した幽香はもちろん寝巻きのままだ。寝起きの髪を振り乱したまま、鬼気迫る様子で廊下を駆け抜ける美女の姿は当然まばらな利用者たちの目を惹いた。

「ひとつ勘違いして欲しくないのはね」

ビルを出ると排ガス混じりの夜気がそよいだ。この時間ともなると人通りはまばらで、暗闇に浮かび上がるようなその色彩を見つける

ことは残酷なくらい容易だった。

紅いスカートに白いパーカー。現代風の装束に身をやつしても、彼女のあり方は変わらない。それは本質でもあり、友情を差し引いても彼女が逃れられない宿命の表れであった。

「私も紫もあんたが大好きだってこと。それだけは覚えておいて」

「霊夢」

「泳いでくれてありがとう。おかげでこっちの準備は万端よ」

幽香のブーツが決別への一步目を踏み出す。

「おっ」

彼女と肩をぶつけた酔漢が難癖吹っかけようとする傍から卒倒した。血まみれの拳を拭う暇も惜しむようにふらりと彼女は車道へと踏み入る。ブレーキ音。クラクション。それすらも聞こえていない様子で。

「そうそう、あんたのその顔。確か最後はアレだったわね、あんたの住処に入っていつて度胸試しに向日葵の首をへし折った馬鹿者。全員足の指を——」

「ハジメは今、あいつと一緒にいるのかしら？」

背中に浴びせられる罵声を一瞬で殺したものは、彼女の象徴であるにこにこ笑いを失った顔だった。その能面じみた無表情。その見るものを片っ端から圧殺するような眼差し。

外見上はハジメとそう歳の変わらない幽香であるが、たかだか二十年で積み重ねられる程度の業で、その形相を形作ることは可能なのだろうか。

「あいつ？」

尋常さのバランスを完全に崩した幽香の前に、霊夢があくまでマイペースに肩を竦める。

「八雲紫」

「いいえ。でも打って付けの手を回してある」

「誰」

「本当はわかってるんですよ——ああ、サイアク。なんか悪役みたいじゃん、私。ねえ？」

あくまでからからと陽気に笑って見せる霊夢と、雨後の夜更けに佇む朝顔のような無表情の幽香はどこまでも対照的だった。

「満身創痍のあんたが大結界を抜けられたのも、私や紫の力が通用しないのも、そんなに必死になるのも、原因はきつとハジメにあるってことだけは知ってる。あいつの能力はなんとなく危険なモノなんじゃないかなってことも」

つむじかぜが霊夢のスカートを揺らした。ぼんやりとした光は雷光となり、信号機が、ネオンが、ビルの明かりが激しく明滅する。どこかで鋭い悲鳴が上がった。

「これ以上ハジメとあんたを引き合わせておくのは危険すぎる。でも初っ端から紫をぶつけるほど私は冷酷になりきれない。だから」

「あの子を巻き込んだのね」

とうとう街灯の一つが音を立てて破裂した。それは留まるところを知らずに連鎖する。

「人間きの悪いことを言わないでよ」

二人を中心に都市の1区画がまるごと闇に飲まれていった。その中で不気味に光り輝き始めるものは血生臭さすら漂わせるような幽香の眼光と、霊夢の周囲を浮遊する針と札が纏う紫電だ。

「あんただってずいぶん鶴見ハジメを好き放題していたじゃない。これはあなたの身から出た錆に過ぎないわ。それに決断したのは彼自身よ」

「もういい。さっさとハジメを迎えに行かせてもらおうわ」

幽香の目は電力を寸断したものの正体を見て取っていた。

二人を中心に張り巡らされた巨大な結界。それは一重や二重では済まない。無数の結界同士が複雑に絡み合い、相乗効果で新しい結界を作り出し、まるで迷宮のように織り上げられている。

霊夢の手首には見慣れない呪符が一枚張り付いていた。

「いくらあなたでもここを抜けるのは骨が折れるわよ。最も、大元を叩けば話は別だけど」

その間響き続けたざりざりと地面をこする音。

幽香が手にしたものはバス停だ。まるで傘でも持つように軽々と

鉄とコンクリートの塊を担いで、ようやく幽香は笑った。つられるように、霊夢も切なげに笑う。

「私たち、ここまでね」

「たち、はいらないわ」

幻想郷の友情はいささか現代とは形が異なる。ならばその終わり方でさえも常とは形を異にするのだろう。



並び立つ二人は貯水池に映る夜景を見つめていた。

こんな夜更けだというのにばつちりと服を着込んだ雪之丞と、スウェットにジャケットというちぐはぐな姿のハジメは足元の砂利道から次々と石を拾っては交互に水面に投げつけていく。

「お、三回」

ガッツポーズをするハジメの横で、雪之丞は暖かいコーヒートの缶を一気に傾けた。

「ハジメ、ものは相談なんだが」

「なんだよ改まって」

ふっと笑った彼の横顔は、同性のハジメでさえも思わず惹かれるほどに、妙に色っぽかった。

「幽香さん、俺に任せてみないか」

「おいおい、まだ言ってるのかよ、それ」

「おまえと幽香さんの関係は承知の上で頼んでいるんだ。どうだ」

「関係って」

水面は驚く程静かで、夜空の星も月もそっくりそのまま写し出してしまうている。それを見つめていると、まるで地面がそこだけ無くなったような錯覚に囚われた。

ハジメは何気なく、石を拾い上げて振りかぶった。

「俺とあいつは恋人でもなんでもない。ただちよつと腐れ縁っていうか」

「殺し殺される関係だろ。知ってるよ」

手をすっぽ抜けた石は一度として水面を跳ねず、派手に水しぶきを撒き散らして沈んだ。

ぎこちなく振り向いたハジメを捕らえて離さない雪之丞の眼光は、ざくろをかち割ったような血の色。

「にしてもお前、くだらねえ嘘つきやがって。さつき霊夢に聞いたが、本当にあいつを倒したのは幽香さんなんだって？」

「お前、誰と話したって？」

暗闇に光を放つ瞳。そして何より胸元、シャツを透かして光る何か。

「幽香さんを追ってきた幻想郷の巫女ちゃんだよ。なあ、そろそろ交代といこうぜ。どう考えても荷が重すぎんのは分かかってんだろ？」

思わず後ずさって、ハジメは石段に踵を取られた。塞がりかけの傷が疼く。尻餅ついた彼に手を差し伸べる雪之丞。その動作の端々に見える彼らしさも、親しみのある小馬鹿にした笑いも、数日前までの記憶にあるものと寸分違わない。

「なあにしてんだよ、ほれ」

それが異質に見えるのは、彼が決定的な境界線を跨いでしまったからなのだろうか。

「誰だ、お前」

「皆さんご存知のハザマユキノジョウじゃねえか。頭でも打ったか？」

助けを振り払おうとした腕を強引に掴まれて、そのあまりの力にハジメは呻いていた。まるで万力だ。

「悪い悪い、もう片方も折っちゃうところだったな。まだ体が馴染まなかつてさ」

「誰だって聞いてんだよ！」

ハジメの引きつった大声に演技めかして耳に指を詰めて、雪之丞はくつくつと押し殺した笑いを漏らしながら距離を置く。ゆつたりとした歩調に反して、まるで影の上を滑るように不自然に早い。

「そうビビるなって。ちよつと物の見方が変わってハイになっちゃっただけさ。俺は俺。そこは信じてくれよな」

「隠しようなない警戒と敵意。」

ハジメの瞳の奥底にわだかまった金色の火花を見つけて、雪之丞は

したり顔で笑った。その犬歯。剃刀のように研ぎ澄まされた牙の輝きが不穏な残像となつてハジメの臉に焼き付く。

「いいか、もう一度だ。俺の提案は超単純」

子供にでも言い聞かせるような雪之丞の態度。

「俺がお前の代わりに幽香さんを殺してやる」

「ふざけるなよ」

「マジだよ。俺はヘタレの巻き添え食つて死ぬのはゴメンなんだ。ダメか？」

なにせ長い付き合いだ。

ハジメが幽香を憎んでいようがまいが、ヘタレと呼ばれてそう簡単に居場所を譲るような意固地でないことは百も承知。その上どこをどう突けば怒りの導火線に着火できるかということも手に取るように分かる。

「……あーあ。なら千晃ちゃんくらいは俺にくれよ。その時が来たら、せめて苦しまないようにしてやるからさ」

どうしてか、今はそんな言葉を吐くことに一抹の愉悦ですら覚えていた。

予想しきつたハジメの反応。振りかぶられた拳。揺れる視界と、軋む奥歯。拳を頬に埋めたまま、雪之丞は笑った。怒りに燃えた親友の顔が、徐々に驚愕にとつて変わられるさま。

「こないだは結構堪えたんだがな」

「ハジメの驚きも当然だろう」

分厚いゴムでも打つたような手応えの後に襲つてきたものは、死体でも触つたような不気味な冷たさだった。熱を一切持たない肉の奥で存在感を放つ骨も歯も、到底人間のものとは思えないほどに刺々しい造形をしている。

「お前——ぐっ」

捕まえられた腕の骨が軋んだ。

「飛んでみるか、ハジメ」

キレた笑いが視界から消えた瞬間、ハジメの体は空高く放り上げられていた。フェンスを飛び越えつつ見える雪之丞はこちらを指差し

て高笑いしている。迫る水面。そして。

「ぶはッ！」

ハジメが浮かんでくるまでの間に悠々とフェンスを越えると、岸辺の土手に腰掛けて雪之丞は待った。冷たい水に身を切られ、小刻みに震えながら浅瀬に這い上がってきたハジメを嘲笑うように、水面に三つの赤い光が揺れている。

「な？ 俺はずっと、ずっとずっと強くなったんだ。今なら幽香さんだって振り向いてくれる。俺の愛を受け止めてくれる。あの人を救ってやれる」

一言一言が嫉妬の炎に投げ込まれる燃料であるかのように、彼の胸に灯った昏い輝きが光を増す。雪之丞の異質の正体はまさにそれだ。知らず燃え始めたハジメの左眼に宿ったものと同じ、幻想に染められた力。

「ワケ、わかん、ねえよ……………！」

水面を打って、ハジメは取り返しがつかないことを悟った。

水中にも関わらず彼の指は既に燃え始めている。霊夢と出会い、何者かに能力を授けられた。親友との逃れようのない対立を、既に彼の心は奥底で確信しているのだ。

未だ残るためらいが風前の灯火のように揺れさせてはいたが、立ち上がったハジメが決然とした表情で構えた指先にも、瞳の輪郭にも、黄金の日輪が形作られていた。

「向けたな。俺に」

売られた喧嘩を律儀に買ってくれた友人を前に、雪之丞はシャツの胸元に手を掛け、一気にボタンを引き剥がす。そうして現れたものは誰もが目を疑うような、赤く焼けた鉄の渦だった。

「向けたんだよなあ、俺に」

ぐつぐつと音を立てる彼の炉心はそれを鑄造する。嫉妬する心が、『本物の力』にどこまでも妬いて妬いて妬きまくった末に、寸分違わぬコピーを生み出そうとしているのだ。

「なら俺も握っちゃまったって、何も文句はねえよなあ」

胸から生えた赤く焼けた柄を握りこむ手が煙を立ち上らせる。不

快な臭いと焼ける肉の音がハジメの遠い後悔を呼び覚ます。

「ヤキモチが俺の本質つてのはちよつとばかり気に食わねえケドさ――『妬き尽くす程度』つて名前だけは嫌いじゃないぜ」

人間の喉が成せるはずのない咆哮と共に一気に引き抜かれたそいつは赤黒い奇妙な武器だった。一見して杖のようであり、剣のようであり、弓のようでもある。かつてどこか遠い世界で振るわれた吸血鬼の武器は、本来の持ち主の心と同じくひたすら捻くれている。

奇しくもそれは、今の雪之丞にはもってこいの獲物なのかもしれない。

「ユキ。俺たちは、もう……」

不気味な胎動と共に放たれる強大な力に首筋を粟立たせながらも、ハジメはまだまだ葛藤していた。ギプスに包まれた右腕が悲しく強ばった。

◆◆

986：TK◆tsuru.c78a

特に兄貴はいらぬ。お姉ちゃんだけで十分。マジで。

987：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
いや、それはお前が悪いわ

988：TK◆tsuru.c78a

そんなこと言われてもアレはマジでトラウマもんだからな。ウチの兄貴とオヤジの馬鹿っぷり、あんたらにも見せてやりたいわ。

989：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
つーか今更だけどTKはどうして引きこもってるわけ？

990：TK◆tsuru.c78a

昔からちよつと周りとズレてたつーか。頑張ったけど溝が埋まらなかつたからいさぎよく諦めてやった。わはは。

991：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
なんだそりや

992：むらさき

家族を大事にしてあげてね

993：TK◆tsuru.c78a

さつきからむらさきわけわかんない。

993：むらさき

その居候の子はいつまでいるの？本当にずつといてくれるの？ある日ふつといなくなったらどうするの？ お兄さんに愛想尽かされたら？お父さんまでどこか行っちゃったら？ご飯は？洗濯は？買い物は？ひとりで外の世界に立ち向かえる？

994：TK◆tsuru. c78a

なんか怖いよ

995：むらさき

そろそろ仕事に戻らなきゃ

996：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

こんな時間とか夜勤？おつさまー

997：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

むらさき U M A 説

998：TK◆tsuru. c78a

おつかれバイバイ。

999：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>997

ねーよ

1000：TK◆tsuru. c78a

ずいぶん話し込んだじゃった。おかげで楽しかったよ。みんなありがとね。

1001：1001

このスレッドは1000を超えました

もう書き込めないの

新しくスレッドを立ててください

第九話『水面の鶴と花と』おわり

9 『向日葵の産声（上）』

「お前、警察に捕まったんだって？」

ハジメがグラウンドに視線を馳せていると、背側から雪之丞が寄りかかってきた。

「人間き悪いな。補導だっつの」

「変わらねえよ。何したん」

答えずにハジメは五円玉を指で弾いた。机の上でぐるぐると回るコインは平面だ。平面にも関わらず、高速で回転している間は球にも見える。不思議だよなあと虚脱感全開でハジメが呟いていると、それを横から雪之丞の手がさらっていく。

「教えろよ。どうせ下らない理由なんだろう？」

じとりと睨むハジメに、雪之丞は口笛吹いてコインを投げ返した。

「あれだよ、アレ。駅から少し下ったところの建築現場あるじゃん」

「すっげえ長いあいだ工事してるやつな。あれ近所だし、めっちゃうるさいんだわ」

「スプレー持って忍び込んで落書きしてたらめっかった。それだけだよ」

「で、感想は？」

「最高だった」

補導された悪ガキはもう一度だけコインを弾いてポケットに仕舞った。

後ろでは雪之丞が呆れているが、あそこで起こったコトの仔細を話したくはない。奇跡じみた数十秒は自分だけの物にしておきたかったのだ。

赤い円。壁の花。

うっとりと思い出すハジメをまたまた邪魔したのは雪之丞である。鼻の穴を膨らませて雑多な旅行雑誌をハジメの机にぶちまける。珍しくカバンをもって学校へ来たと思えばその矢先にこれだ。

苦笑してハジメはその一冊を手を取った。

「とっころでき、卒業旅行どこ行くよっ？」

思えば高校二年。冬。迫りつつある受験戦争の予感。外を吹き渡る風以上に身を引き締めるものがあつたが、まだまだ高校生活の楽しみは残っている。将来のことをあれこれ悩むのは、もつとずっと先でいい。

「奈良は学校で行ったからなあ」

未来は後回し、野望も後回し。人生の大海は広く深い。自由気ままにゆるゆる漂っていけば、きつとたどり着く岸辺もある。

「カネ貯めて南の方とか。あ、江梨花も誘ってさ」

「いいねえ。じゃあ三人でド短期のバイト先でも——」



「がっ——げえっ、えほっ、ああ、クソ。ひでえ、げっ、マジで」

貯水池の水草だの虫の死骸だの泥だの。そうだったものを冬のあいだ思う存分洗ってきた水を鼻と口から吐き出して、ハジメはようやく意識を取り戻した。

「死んだかと思っただぜ。心配させんなよな」

とてもじゃないが言葉通りにその意味を受け取るのは難しい。

「任せるって言葉はお前の口から聞きたいんだからさ」

口笛でも吹き出しそうなニヤニヤ顔の雪之丞がお手玉するそれ。名も由来も知れぬ、紅蓮の炎を纏う謎めいた武器。それが何倍もの長さに伸びたと思つた瞬間に、ハジメの意識はブラックアウトしたのだつた。

ハジメの視線に気づいて、雪之丞は形の良いくぼをよりいっそう濃く刻んだ。

「なんつったけな。これの本家本元。たしか紫が教えてくれたんだよ。レ——レヴァ、レーバ？ とにかく強い吸血鬼の剣つてのは覚えてんだけどなあ」

刃も鏢もないが、柄を握つて振り回す本人がそう言うのであれば剣なのだろう。そして、いつになく饒舌な雪之丞の口からこぼれたもうひとつの名前が、ハジメの耳に引っかかっていた。

「ゆ、かり？」

「幻想郷の大妖怪だとき。あいつがこつちとあつちを壁で仕切ってる

とかなんとか」

風見幽香がぶち壊した現実と非現実の壁。その管理者はユカリという名前の妖怪。好き勝手のツケを払わせに来たのは霊夢だけではなかったということか。

「そんなおつかない妖怪が、女みたいな名前なんてな」

最後っ屁のつもりで放ったイヤミに、雪之丞が真顔で首を傾げた。

「おいおい、お前何言ってるんだよ。紫は女だってば」

「いや、人間じゃなくて妖怪なんだろう」

「だから女で、その上妖怪なんだってば。幽香さんと一緒に――
ああ」

そうしてようやくハジメは会話に潜んだ違和感の正体を探り当てた。

幻想郷は人間と妖怪と神様とが仲良くおてて繋がったり繋がらなかったりする、幻想の住人たちにとっての最後の楽園なのだと聞いている。

幽香は妖怪の、それも雌。口に出してしまえば拍子抜けするほど簡単な理屈だというのに。

「ははっ。そうか、お前知らされてないんだ」

この滑稽な勘違いの裏側にはひとえに蝸牛の妖怪の存在がある。

無慈悲で残忍で意図不明で本能的でとことん醜悪。妖怪とはそうあるべきものなのだとすることを、ハジメはあの哀れな怪物から学んだ。

『あなた、妖怪を甘く見すぎているわ』

実に不可解なのは当の妖怪が発したその一言だ。

「かくいう俺も、今じゃ晴れて吸血鬼つてやつになっちゃったらしい。ようやくこれで幽香さんと同じ土俵に立てたってワケ」

ハジメはずっと、幽香の馬鹿げた力の源が能力にあると考えていた。だが人間と妖怪ともなればそもそも馬力が違うことは蝸牛の一件で学習済みだ。いくら能力や戦闘技術を磨いたところで、その溝は埋めようがないのではないか。

「遊ばれてたんだよ、お前」

幽香が妖怪だと知らされる前でも、ハジメは何度かその可能性を考えてきた。

「違う」

だが、今ははっきり否定できる。

強いて挙げる根拠なんてものは、いつもどこか期待して、どこか不安げに弁当の感想を聞いてくる幽香の顔くらいだが。

「あいつはそういう意地悪だけはしない。長いから分かる」
「ちっ」

返答がよほど気に入らなかったと見えて、雪之丞は苛立ち紛れに燃える武器を振るった。炎の刃を纏った姿に、初めてそれが剣であると納得できる。ハジメの意識は再び闇に沈んだ。

怒りのままに振り抜いた刃。その手応えは今までのものとは大きく違った。

「ハジ、メ?」

硬いものを砕いた感触だ。

仰向けにぐったりと倒れて動かないハジメを、雪之丞は固唾を呑んで見守る。今の一撃はどうしようもなく手加減ができていなかった。

もともとはハジメをただ屈服させるためだけの戦い。

それをここまで本腰の入った殺戮にしまったのは、やはり雪之丞の身の内に宿ったものなのだろうか。しばらくして息を吹き返したハジメも、粉碎されたギプスの下の傷を抑えながら同じことを考えているようだった。

「どうしちゃったんだよ」

ハジメは浅瀬に膝をついたまま問うた。

「吸血鬼になった? 能力をゲットした? いったい、いったい何が
お前をそこまで」

「知りたいか」

月下に炎の剣を構え、水の上を歩く美しい吸血鬼。ふとすればハジメでも魅入ってしまいそうなほどの妖気を雪之丞は放っている。親友をここまで変えてしまったものとは。

「教えてやるよ。耳かっぽじって聞けばいいさ。そして慄きやがれ。」

てめえ」

長い付き合いで初めて雪之丞が怖い。その言葉の一つ一つが、まるで決別となって胸に突き刺さるようだ。次に口を開いた瞬間、ハジメは思わず耳を塞ぎたい衝動を殺すので手一杯だった。

「幽香さんとイチヤイチャしやがって」

どこかでカラスが鳴いていた。

遠くから県道を走る車のエンジン音が聞こえる。ふと足元に目を落とすとちやぶちやぶという快い水音であったり、冬風にそよぐ木の葉のさざめきであったり。

「は？」

なにを言いたいかといえば、そのくらい静かだった。

「ああだこうだ文句言ってやがったけどよ、お前ぜったい楽しんでんだろ。ぜったい役得がいろいろあつたはずだろ。なんだお前今時ガッコーに弁当届けてくれる美人なカノジョっている訳無いだろがそんなもん常識的に考えてそれを平然とやってのけるお前が——ツぴやつはあ!？」

顔を直撃した最小火力の弾丸。それに弾かれた雪之丞の頭は、とてもとても軽い響きを奏でて空を仰いだ。

「なにしやがる」

額からたらりと一筋の血を流しつつ、怒り心頭の雪之丞が睨む先。「お前がなーんもわかつちやいねえ。ってことだけは、よくわかつたよ」

燃える左手。肩から途方もない怒気を発散させるハジメは、黄金に輝く双眸で雪之丞を睨み返した。ばしやり。水面に波紋が広がる。

「聞け」

ハジメは決断的な足取りで、雪之丞へと距離を詰めていく。

「俺は半年以内にあのバカを殺さなきゃ殺される」

右腕を縛るものはもうなくなった。指先がぎこちなく曲がる。手首、肘。二ヶ月近く眠っていた体の一部を手荒く目覚めさせる。油をさされたばかりのライターのように、その指先が小刻みに火花を吐く。

「認めたくないがあいつは美人だし、作るメシについては正直依存性なんじゃねえかってくらい気に入ってる。千晃の話はしたよな。オヤジも信じられないくらい気色悪いことに人生の春ってやつを思い出したのかもしれない。ただ」

ただ、約束を果たせなかった暁には。

「あいつは一族郎党とことん苦しめて皆殺しにした上で世界を滅ぼし、シメに俺の腸で縄跳びをする」

対峙する青年二人の距離はおおよそ十メートル。

ハジメの指鉄砲も雪之丞の剣も相手を射程に収めている。

「そういう約束だ」

ひと思いに拳同士を叩きつけてみる。問題ない。片腕が十倍にも膨れ上がったような違和感はどうしようもないが、今は開放感が優っている。

「わかるか」

「だから知ってるツツーの！」

怒りこらえきれずといったところか。

「お前が嫌々送ってるのは、俺が心の底から望んだ青春なんだってことはさー！」

もはや人間のものではない形相を浮かべた雪之丞が振るった剣が悲鳴のような響きを上げて生み出したものは燃える十字架だ。それもひとつやふたつではない。

「いいや。無理やり殺し合いをさせられる俺の気持ちなんて、わかるはずがない！」

霊夢の攻撃に心折れかけていたのが嘘のように、今は恐ろしく落ち着いている。

カエルのシールが貼られたギプスの破片が没する様を視界の端で捉えつつ、ハジメは仁王立ちする。波紋が巨大な円を描く。

「バカみたいにお前を待っていたらこのザマだ！ お前はすんずん俺の知らない世界に行きやがるー！」

芝刈り機の刃のように騒々しく高速で回転する無数の十字架が四方八方から飛来する。

迎え撃つハジメの両瞳では黄金の日輪が恐れを知らぬ輝きを放っていた。

「防ぐか、避けるか、受けるか」

幽香の言葉を反芻し、右腕を一瞥する。先の攻撃に対する反応は正解だ。ギプスの最後の欠片を腕から振り払って日輪の輝きを解き放つと、あとは一瞬だった。

ハジメの足元から立ち上るぼんやりとした橙色の光。そしてすべてがシンプルに見えた。撃っていいものと撃ってはいけないもの。導きに耳を傾け、指指を向け。

「これで連射は二倍。いい勝負くらいはしてみせる」

正確に真芯を撃ち抜かれ爆散する十字架の群れを前に、あたかも二丁拳銃のように両手を交差して爆炎を構えるハジメのシルエツトが浮かぶ。鋭い犬歯をむき出しにして、雪之丞は叫んだ。

「ピンチにパワーアップってか。そういうの、一番気に食わねえよ!」
「そうか。じゃあ俺はガゼン気に入ったね!」

湖上を所狭しと飛び交う十字架と爆炎。爆発と怒号と水しぶき、そして再び爆発!

その間を駆け回るのはちっぽけな、本当にちっぽけな二人の青年だ。数倍に膨れ上がった雪之丞の剣が弾幕の間隙を縫ってハジメの喉笛を狙う。それを阻むのはハジメの激烈な砲火だ。至近距離で剣を直撃した爆撃は、目覚めたばかりの吸血鬼の筋力で押さえ込むには余りある。

臆と骨をきしませながら、雪之丞は後退する。力尽くでハジメを押さえ込もうとすれば容易極まると踏んでいたにも関わらず、彼は後退しているのである。

「どうして何の覚悟もないお前ばかりが。俺はここまで捨ててるんだぞ」

「捨てたお前に負けるかよ」

「この体のせいでもう二度と陽の光なんて拝めねえってのに。こいつあ、あまりにヒドイじゃねえか」

単純なポテンシャルの上でなら雪之丞が大きく優っている。

それでいてハジメに互角の戦いを許しているものは、たった数度の実戦経験だ。霊夢に幽香、そして蝸牛の怪物に至るまで、この瞬間までただただ彼を痛めつけてきただけの理不尽が急に追い風を起す。トリガーを羽のように軽くする。

「ダチを捨てようとしているのはお前だってそうだろう」

光の濁流のように迫る弾丸の嵐を剣で叩き落としながらも、雪之丞の体は次第に削り取られていく。

「そんなはず」

そんなはずがない。

言ってしまうえばそこまでになるはずの言葉が形にならない。

ここまで意地になって幽香との約束にしがみついている理由とは何だったろうか。どうして彼女が他の誰かの手によって命を奪われると思うと、ハジメは心臓が潰れそうなほど悔しくなるのだろうか。

「それに、お前は大事なことを知らされていない」

雪之丞はハジメの弾丸を叩き落とすことを止めて、弾幕を自ら被った。

慌てて射線をずらした時にはすべてが終わっていた。爆炎を纏った雪之丞が水上を跳ねる。剣を杖がわりに立ち上がった彼は、未だ闘志の残る目でハジメを睨む。

「どうしてあの人はそこまでしてお前に——誰かに殺し合いをして欲しいんだ？」

「それは俺がうっかり言った言葉が」

「そりやどうかかな」

戸惑うハジメを見つめる雪之丞は、それはそれは楽しそうだった。「俺は知ってる。お前が知らないことを、俺はみんな知ってる」

彼の体がぐらりと倒れ込んだ。

未だ赤々と焼ける嫉妬の炉心が水を沸騰させ、彼の沈んだ水面から立ち上るものは夥しい泡と湯気。

「ユキー」

我に返ったハジメが深みに踏み込んで、必死に水をかく。ぬめる水草をかき分けるうちに、水中に光が灯った。壮絶に水面が跳ねる。咄

嗟に身を引いたハジメの鼻先を掠めて飛んでいったものは、無数の蝙蝠だ。

「だから、俺の勝ちだ」

耳元で囁かれたようなユキの声。

ぐしよぬれのハジメは遠ざかっていくコウモリの群れを見送るところとしかできない。ポケットの中で無意識に握り締めるものは、やはり穴のない五円玉であった。



二度目の対戦は戦いと呼べるような内容ですらなかった。

何がどう起こってしまったのかを語るのはあまりに容易い。最後には幽香が立っていて、血だまりに倒れる霊夢を見つめる。それだけだ。

「あんたを止めるなら、今しかないのに」

この日初めて霊夢が表情を崩した。

下唇をちぎらんばかりに噛み締めた彼女の手首で砕けたものは巨大な結界をつないでいた札だ。

ばちん、と。

まず二人の頭上、大きく傾いだ電灯が明滅する。

それをきっかけに波が広がるように息を吹き返していく街の灯りが照らし出すものは、月面さながらにクレーターだらけとなったアスファルトと、未だあちこちで燦る大小の炎。

残骸、燃えかす、そして霊夢の血。

「自分の問題は自分で始末をつけられる」

ぐしやぐしやにねじ曲がったバス停であったものを投げ捨てて、幽香は目元に飛んだ返り血をぬぐった。げほげほと咳き込んで霊夢は俯く。幽香は思わず手を差し伸べていた。

「霊」

音はぶしゆ、だったか。ぼしゆ、だったか。

黒く大きなものが幽香の眼前をよぎった直後血煙が立ち上った。肘から先を失った幽香の左腕。はらりと包帯の切れ端が舞い落ちるよりも早く、それは霊夢の隣に姿を現していた。

「っ。あらあら。二対一なんてずいぶん節操なくなったのね」

痛みに顔をしかめるでもなく、とめどなく血を流す傷口に構うでもなく、幽香は細い顎を持ち上げて挑発的にそれを見下した。

「昔のやり方に戻しただけよ。化物が化物に容赦する理由なんてない」

幽香の左腕を引きちぎったものと同じ、真っ黒な大口。

宙に開いたポケットのような空間の内部には、誰のものとも知れぬ無数の目玉が無秩序に敷き詰められている。

その淵にぬるりと白い指がかかった。女のドレスもまた白い。あたかも軟体生物のような動きで裂け目から女が這い出てくる様にはひどく名状しがたいものがある。

「霊夢、残念だけど私たちの完敗よ。今回はね」

雪之丞とコーラを挟んで談笑していた時の柔らかな雰囲気は失せていた。

彼女は怪物としてここにいる。彼女の管理する世界のルールに泥を投げつけて去っていった風見幽香を殺すために。

「ユキのやつは？」

「なんとか戻ってきたわ。今頃クサってるはずだから、元気づけてあげて」

「はは。励ましながら私が欲しいくらいだわ」

猫でも扱うように霊夢をひよいと掴んで裂け目へ放り込むと、女――八雲紫はようやく幽香に向き直った。その手には血の気の失せた幽香の左腕が握られており、煙臭い空気の中に解けかけの包帯がゆらゆら遊んでいた。

「その余裕はどこから来るのかしら？」

紫の手元で幽香の左腕がみちりと音を立てた。腕を失って尚、幽香はむしろ微笑んで口を開く。

「可愛かった向日葵が、咲いてくれたみたいだから」

「鶴見ハジメのこと？」

「そう。彼がきつちり私を殺してくれる。とんだ無駄足だったわね」

八雲紫は塵芥を見るような目で幽香を見据えた。

「無駄じゃないわ」

それはかつて幽香をとことんまで追い詰め、幻想郷の負債だと言いつ放った時と同じものだ。睨み返す幽香の瞳にも同質の侮蔑が宿っている。

「私は絶対にあなたを許しはしないもの。霊夢を痛めつけたあなたも、あなたの大事なお友達も、つま先からゆっくり一寸刻みにして掃き溜めのカスみたいバラ撒いてあげる」

張り詰めた殺意を放ちながらも、紫はその背中を向けた。

「でもそれはいつだって出来る。私はあなたなんかより霊夢たちが心配なの。今日は尻尾を巻かせてもらおうわ」

これが単なる世間話に終始しないことが幽香にはわかりきっている。帰る前に、何かひとつ爆弾でも落としてやろうという魂胆なのだろう。

「私、これでもあなたを見直したのよ」

幽香は視線だけでその続きを促した。

「機嫌を損ねれば誰も彼も苛め殺していたころとは大違い。特にあのひきこもりのコを部屋の外に出すまでの一部始終とか。年甲斐もなクウルつときちゃった」

「のぞき見なんてあなたは相変わらずね。よければ私の爪垢、そこにあるけど?」

妖怪はいずれも満面の笑みで対峙する。しかしてその間に張り巡らされるものは傍で燻る煙よりも黒い何かだ。

「土いじりばかりしてる小娘の爪なんて、見るだけで破傷風になりそうね」

紫は幽香の腕から包帯をゆっくり解いていく。あくまで表情を崩さない幽香であったが、残された彼女の右腕は寝巻きの裾を後ろ手に強く掴んでいた。

「今頃ハジメはあなたのことを知ったと思うわ」

この場で紫をひねり潰す気になれば、おそらくそれは可能だ。問題は幽香の心中にさつと立ち込めた暗雲であった。

「——お生憎様。ハジメは散々脅かしてあるの。それくらいで今更何

が変わるといのかしら」

「あなたがそう思うのなら胸を張ってあの家に帰ればいい」

妖怪風見幽香の長すぎる生涯で、つい今しがたまで談笑していた人間の顔が恐怖に引きつる瞬間は幾度となく目にしてきた。本能が恐れるものを、そう簡単にぬぐい去ることはできない。

幽香の瞳によぎった影を読み取って、紫はようやく溜飲が下ったとばかりに声を上げて笑った。

「人里に下りてきたあなたはいつも滑稽だったわよね。花の妖怪さん」

ようやくちぎれた腕を弄ぶのをやめて、紫はそれを幽香の前に放った。湿った音を立ててアスファルトに赤い帯を描きつつ、包帯がほどけていく。

中から現れた素肌は。

「あの子くらいはあなたを受け入れてくれるといいけど」
「ッ！」

鋭い音を立てた弾丸が閉じつつある裂け目を射抜いた。

薄く頬を切り裂かれた紫は怒るでもなく、浮遊する目玉を気まぐれにぶじゅつと潰してただ笑う。

「やっぱり。あれだけ彼を怖がらせておいて、今更あなたが怖くなっちゃったんだ」

地面に放り捨てられた我が腕を見つめて、幽香はひたすら立ち尽くす。包帯の残骸がはらりと解けて夜風に舞う。現れた彼女の肌は白磁のような美しさだ。焼かれたことも貫かれたことも忘れたように、ただただ月明かりに輝くそれは、彼女がどうしようもなく人間でないことの証明だ。

「人間ごっこはもうおしまい、ね」

迫るサイレンの音から逃げるように、幽香は足早にその場を去った。

10 『向日葵の産声（下）』

鶴見千晃は実兄が大嫌いである。

正気か否か、千晃を部屋から出そうと『天岩戸作戦』なる珍妙な乱痴気祭りを部屋の前で開催されたこともそうだが、心の底からぶちのめしてやりたくなつたのは新しくお姉ちゃんが出来て、新年を迎えてからのことであつた。

唐突に二人は喧嘩した。

理由はとんでもなく下らないもので、二人が全面戦争になつたら面白いなあ、なんて考えながら千晃はお姉ちゃんの作つてくれたお雑煮をのんきにすすつたものだ。

それがどうしてこうなつたのか。

ある夜更けにお姉ちゃんが『胸騒ぎがするから』とふらりと出て行つて以来、鶴見家の食事は三食コンビニ弁当へと逆戻り。

あまつさえ兄の電話で彼がお姉ちゃんを連れてそのままどこかに泊りに行つたことを知つて——ぐああ、あにきてめえ殺してやるぜヒヤッハーツ！

——というわけなので、そんなクソつたれな兄貴が帰ってきたときは出迎えがてらに一撃食らわせてやろうと冷蔵庫の中に冷水を入れた洗面器を突っ込んでおいた。

次の日になつても帰つて来なかつたので千晃は鏡餅の昆布を入れてみる。いい感じにとろみが出て、なんだかぶつ放す瞬間が心待ちになつてくる。

次の日も帰らなかつたので醤油を入れた。次は鰹節。次はからし。こうなつたら余りものちくわも投入してしまう。

そして千晃は気づいた。

「おでんじゃん、これ」

徐々に洗面器の中はしようもないカオスへと変貌を遂げていくが、肝心のターゲットは一週間を過ぎても帰ることがなかった。

「雨降つてなんとか。つてやつかよ。はん」

もはやネタも尽きた洗面器おでんは冷蔵庫の中でゆっくり腐つて

いくのを待つだけだ。

今では千晃もよれよれのちくわ同様にだらしなくソファに体を横たえるだけ。

父のいびきから避難してやむなくそこを夜の居場所を選んで彼女だった、深夜にインターホンが鳴った瞬間の豹変ぶりには凄まじいものがあった。

「はい、お待たせしましたっ」

引きこもり生活で無駄にチャージされたやる気を一気に解き放つとソファから飛び降りる。インターホンの受話器に投げかける口調も、まるで受付嬢のようにはきはきとしていた。

「開けてくれ」

ビンゴ。

疲れにかすれて息切れもひどいが、それは間違えようのない、聴き慣れた声だ。

「はいはい。急かさないでってば」

本当に急いでるのは私だけだな。

そろりそろりと受話器を置いて、千晃は冷蔵庫を開ける。洗面器はそこにあつた。

「くらいやがれ、あたしの自信作」

悪い笑顔でそいつを手にして廊下を渡る足は軽い。

ホップ・ステップ・DESTROY。ハジメにたっぷりストレスを食らわせたあとは久しぶりに幽香と一緒に眠って、明日の美味しい朝食をゲットする。完璧な計画だ。

割と真面目に彼女の現状を心配する父が知ればさぞかし悲しむだろうが、千晃はまったく気にしない。ドアはロックの解除だけしてやり、向こうが開けるのを待つ。そして洗面器を構えて――

「千晃」

おでんを抱えたまま、千晃は呆然と兄の惨憺たるさまを見つめた。吸血鬼雪之丞との激戦で貯水池を駆け回った彼は、千晃が洗面器をひっくり返すまでもなくずぶ濡れなのである。

何故か真冬の夜半に薄手のスウェット一枚の彼は、小脇に丸めた

ジャケットを抱えていた。

「その格好どうしちゃったの!？」

「あいつは?..」

一月の夜にそんな格好なんて正気の沙汰ではない。

白い唇で震える彼はちくわぶも昆布も視界に入らないかのようだ。

彼はただ玄関先に並べられた靴を一瞥して、鋭く舌打ちした。

「あ、あいつって?..」

「だからあい——クソ、幽香だよ」

「お姉ちゃんなら、一緒じゃないの?..」

憔悴しきった兄の様子にただならぬものを感じる。

もはや千晃は洗面器をぶちまけることをやめて、今にも出ていこうとする兄を引きとめる。

「ホテルにも家にもいないなら、あいつ、やっぱり」

ねぐらの周りに広がる焼け跡を目にした瞬間からイヤな予感はしていた。真っ先に駆けつけるはずの幽香の不在といい、雪之丞の捨て台詞といい。

慌てて家に引き返したハジメの予感的中しようとしていた。

「ちよ、ちよつと待ってよ。さつきからまるでお姉ちゃんが出て行っ
たみたいなこと言っちゃってさ。驚かささないでよね、もう」

冗談めかして千晃が兄を小突く。ハジメは無言で見おろす。もう一度、恐る恐る小突く。やはりハジメの硬い表情が和らぐことはない。

「.....マジ?..」

「まだそう決まったわけじゃない。もう一度探してくる」

既にハジメは踵を返していた。反射的にサンダルをつっかけて千晃がその後を追う。ぺたぺたという足音は、すぐに止まった。

「待って、あたしも」

声にいつもの勢いはない。

ハジメが振り返り見ると、千晃は敷居をじっと見つめたまま、立ちすくんでいた。困り果てて泣きそうな顔を見せまいと彼女は俯く。
「無理じゃなくていい」

ハジメは妹の前にしやがみこんだ。顔を背けた妹の頭に手を置く
と、ぎこちない手つきで撫でてやる。

「幽香は俺が連れ戻す。その代わりオヤジが起きたら居なかった間の
こと、うまく言い訳しておいてくれ」

「あにき」

「ところでそれ、おでんか？」

そこでようやくハジメは千晃が持っている洗面器の中身に気づい
たようだった。数日漬け置かれた具材は水死体のようにぶくぶくに
膨れ上がって底にへばりついてはいた。

が、辛うじておでんではある。

「あにきに、くらわせようと思って」

千晃の言葉をその通り受け取ったハジメは、恐る恐るであるが食材
の墓場に手を伸ばした。

「ひどいな」

「だろうね」

ちくわぶを噛み締めるハジメの顔といったら、まるで耳元で黒板を
かき鳴らされているような渋面だ。それでも最後にはなんとか笑っ
て、もう一度千晃の髪型をぐしゃぐしゃにしてしまう。

「でも、お前にしちや立派なもんじゃないか」

安心して待ってろ。

もう一度、自分自身にも言い聞かせるように呟いてハジメは今度こ
そ夜の町へと駆け戻っていく。

「……………あ、ギプス取れたんだ」

千晃はただただ兄を見送ると手元に目を落とす。

意を決してこんにやくの死骸を口に運ぶ。ひどいなんてもんじゃ
ない。が、これはあくまで兵器を作ろうとしたのであって食べ物では
ない。ならそれは料理の実力ではない。

次はお姉ちゃんに作り方を教わったマジのおでんを作って実兄を
唸らせてみせよう。そうしよう。

「お姉ちゃんの気持ち、少しだけ分かったかも」

はつきりマズいと言われれば、不思議とやってやろうという気には

なる。



何事にも起こりというものは存在する。

迷ったならスタート地点に戻れともいう。その言葉に倣ったかどうかは定かではないが、裸足で走り続けた幽香が落ち着いたのは、ハジメと出会った建設現場の焼け跡だった。

「参ったわね」

一階。無事に工事が終わればロビーになったはずの場所で、彼女はぽつんと座り込んでいた。

そうして始まりに立ち返った彼女が思い出すのは、十二月から今まで、鶴見家で過ごした記憶だ。

正直なところ、ハジメに家のことをなんとかしろと頼まれたときは不安で不安で仕方がなかった。なにせ風見幽香は慕われることよりも、恐れられることの方がずっと得意なのである。

千晁を長い交渉の末に引っぱり出して毎晩の食卓に座ってくれるようにするまで二日。急に量の増えた家事に戸惑って更に四日。ご近所付き合いという言葉がこの世界にあるということを知るまでに更に一週間。

どうかハジメが帰ってくるまでにある程度の体裁を整え終わって、ようやく彼女は自分がこの現代で上手くやれていることに気づいたのであった。

それはひとえに妖怪の本性を隠し続けたからだ。

どれだけ上手くヒトの生活に馴染んでも、彼女が妖怪であることは絶対に変わらない。思いがけず手に入ってしまった幸福に戸惑っていると、今度はそれをいつものように失ってしまうことが怖くなった。

彼女の力でも守りきれないものが一つだけある。

「本当にどうしようもない怖がり」

紫の言葉は確かに胸をえぐった。

ハジメがどこまで幽香の秘密に迫っているのかは、彼女にはわからない。それでも最悪の事態は考えている。全てが——いや、妖怪であ

るということだけでもバレたのなら、もはや一緒に暮らしていくことは難しいかもしれない。

「実は人間じゃないの」

「ここまで幾度も口にしては破滅的な結果を招いた言葉を呟いてみる。」

「そう、人間じゃない。妖怪。ごめんなさい、驚いた？ ああ、あなたもそうなのね。もう来ないから安心して。あなたの気がまた向いたなら、私はいつものところで待ってるから」

そのやり取りを何度繰り返したか。

自嘲気味に一人芝居を演じてみて、幽香は静かに首を振った。

寝巻きの裾を見る。乱暴に引きちぎられた腕の断面は既に再生を始めるように激しく蠢いていた。このペースなら夜明けか、それよりもっと早くに新しい腕が生えてくるだろう。

そうしたら鶴見家に戻る。

戻って結果を受け入れて、ダメだったならその時はその時だ。

「これはお前のだろ」

「っ」

だから、そいつの方からこの場に姿を現した時に幽香は小さく悲鳴を漏らしていた。

幸いにも彼の足音がコンクリート打ちっぱなしの部屋に大きく響いたおかげで、彼女の小さな弱みはかき消されていく。

「お前が大暴れした跡から拾うのはマジで大変だったんだからな。感謝しろよ」

頭からつま先までぐしよぬれでは、足音まで湿りきっている。そうしてハジメが差し出したのは、やはり水浸しのジャケットだ。

「どう、して?」

「なんとなくここだとは思った」

話す間にジャケットを縛る紐は解かれていた。

中身は幽香の腕だ。跡形もなく傷が癒えても包帯を巻き続けた理由も、彼女が正体をひた隠しにした理由も聞かずに、ハジメはガラス細工を扱うように腕を取った。

「なあ、くつつくか？」

幽香はおずおずと受け取って、むき出しの断面にそれをあてがう。ゆっくりと肉の筋が這い出して彼女の体をつないでいく間、言葉を忘れた興味津々でその様子を観察するハジメの視線が居心地悪くて仕方なかった。

「これで分かったでしょ。私は人間じゃなくて妖怪だって」「知ってる」

再びの静寂。意を決して、幽香は問うた。

「怖くないの？」

「——ぶっ」

幽香は目を白黒させた。

床を転げまわる勢いで爆笑するハジメは。次第に激しくえづいてよろよろと立ち上がる。きよとんとしたままの幽香の顔を見るなり、また笑いの発作に襲われたようだった。

「今更かよー」

それはどこまでも、幽香が予想していたハジメの反応だ。

当たり前だろう。今まで散々殺すと言われた後に実は妖怪だとバラされたところで何の驚きがあるうか。紫によって心に打ち込まれた楔が引き抜かれていくようだった。

「千晃を攫ったのも私と同じ妖怪なのよ」

「俺を散々ぶん殴りやがった霊夢は人間だぜ。信じられないことにな」

「私の友達を悪く言わないで」

「お前こそ——ああ、あいつは別にどうでもいいか」

いつしか幽香は自分が恐ろしい妖怪であると認めさせようと躍起になっていた。対してのらりくらりと言葉を弄するハジメ。普段とはまるで立場が逆である。

「冗談言ってる場合じゃないでしょ。私のせいでユキまでいなくなつて」

「霊夢から聞いたのか？」

幽香は首肯する。

「いいって。別に今まで一度も喧嘩がなかったワケでもないし」

頭上の広大な吹き抜けをハジメは仰いだ。

地下三階地上二十階。どこにでもあるような高層ビルの設計図を持ち出した市長が完成の暁には市のシンボルにうんたらかんたらと言った時は皆が首をひねったものだ。

彼の浅すぎる目論見は一か月前に爆散し、見上げる先は漆黒から群青に変わりつつある星空が覗いていた。

「それに、千晃と俺を助けたのも妖怪じゃないか」

夜明けの空に吐き出された言葉は、幽香の胸にすつと入り込むようだった。冷気がよほど堪えたのか、そこでハジメは数回くしゃみをした。

「あんたの正体なんて俺は割とどうでもいい。あんたが俺の家に来てくれたことには、それ以上の意味があるんだと思う」

それはつまりなんだろうか。

雪之丞との戦いで必死になっていく自分と自問し続けて出した答えは、どうしても飛び出なければ気が済まないらしい。

ハジメは幽香を見据える。一度、息を整えて彼女の瞳を真っ直ぐに。

夜明けを待ちきれない小鳥の鳴き声に急かされるように、口を開いた。

「こんな恥ずかしいことは言いたくないけど、もうあんたは、かぞ——
くの——だっ、しよい！」

後半は殆どくしゃみに取って代わられていたが、幽香にはおおよそ彼が何を言わんとするのか見当がつく。

「あー畜生。家族の一員ってやつなんだと思う」

ついに言ってしまったとハジメは思う。

家族。彼女を家に迎えてからあえて避け続けていた言葉。いずれ殺し合う運命にある相手にそれを使うことがどれだけの危険を抱えているかは十分に把握している。

「へんなの」

それでも彼女がいつも通りの微笑みを返してくれて安堵するのは、

やはりそういうことなのだろう。

「なんだか今のハジメ、私よりもオトナね」

「あんたが何歳か知らないけど、とりあえず褒めてはいるんだよな」

廃墟の窓には朝日が差しはじめていた。どちらからともなく光を見据えて目を細める。

鶴見家の一員。ハジメの危惧は幽香も感じるところだ。それでも、もう少しだけ人間ごっこを続けるのも悪いことではないと思う。

「家族ってという話、少し考えさせてちょうだい」

「いいとも」

鼻をすすり上げるハジメは相変わらずサマにならない。

幽香が何者かを知った今でも、そうやって何も変わらず受け入れてくれる。

ハジメの差し出した手を、すっかり元通りになった幽香の手が捕まえた。

第十話 『向日葵の産声』 おわり

1-1 『俺とあんたの長い午後』

そいつが初めて死にかけたのは二歳の時だ。

インフルエンザに罹って三日三晩生死の狭間をさまよい歩いて、医者以後遺症が残るかもと脅された両親はヒヤヒヤしながら寝ずの看病についていたらしい。

で、結局何事も起こらずにそいつは布団から自分の足で立ち上がった。

その数ヶ月後にバックしてきたトラックに横つ面をひっぱたかれることになったのだが、血まみれで帰ってきた少年はやはりというか痛いの一言も漏らさず積み木で遊び始めたという。

数年後にまたまた車にはねられる。初めての骨折は顎だった。

目を離れたスキに『お父さん見てて』と飛び込み台からプールへ。浮かんでこない。

遠足で山へ。ふと脇道を見ると茂みが揺れて——何が起こったかは敢えて語らない。

毎回命懸けのトラブルに巻き込まれては、その度に何だかんだで生還してきた。

一生こんな感じなんだろうなと呆れつつ、ある面で両親は安心した。こいつは間違いなくジョン・マクレーン並みの不幸さとタフネスを持っていやがるぜ、と。

一方で後遺症は確かに残ったというのが本人の見解だ。

「やつちまったなあ」

鶴見ハジメはよく死にかけている。おまけに最近は途方もない不幸の渦中に突き落とされ、もがき苦しみ続けるような毎日だ。

たった今最高記録を更新した体温計も、二歳から続く不幸の連鎖、もとい後遺症の延長であるように思えて仕方がない。

「俺、学校何日休んでたっけ」

一週間にわたる逃走生活。不規則な食事と睡眠。手荒い針と電気マッサージのフルコース。親友との命をかけたガチバトル。ストレス、ストレス、ストレス。

思い当たる原因は数あれど、水浸しのままに幽香を探して一月の夜長を駆け抜けたことがトドメとなったのは間違いない。

結果として幽香は未だに鶴見家に留まり、一方でハジメは四十度越えの体温計を手いうんうんうなされていた。

「千晃、千晃―」

「なんだよ、ばかあにき」

ハジメの大声に慌ただしく階段を昇ってきた彼の妹が、不機嫌そうにエプロンを畳みながら部屋の入口に顔を出した。その頭越しにひよっこりと幽香も現れる。

「喉渴いた。コーラ持ってきて」

「病人だと思って調子に乗りやがって……………もうちょつと待ってたら」

「はあ？ 俺は今」

「ハジメ」

千晃をそつと横に除けて入ってくると、幽香はハジメの額に掌を乗せた。ひんやりとしている。彼女に隠れて千晃の姿は見えないが、ヤキモチでむくれた顔を想像するのはたやすかった。

「待っていてあげなさい。きつと驚くから」

その謎めいた微笑みに戸惑っているうちに二人の姿は階下へと消え、ハジメは仕方なしにサイドボードの上に昨日から放置されていたぬるいお茶を口に含んだ。

風邪と言われて思いつく全ての症状が入れ替わり立ち代り襲いかかってくるような地獄ではあるが、それでもまぶたを閉じて呼吸を落ち着けていると、なんとか眠ることはできるのであった。

しばらくすると台所と庭先からおかしな音が聞こえてくるが、それも耐え難い頭痛に比べれば気にするまでのことではない。



幽香は土に触れている瞬間がたまらなく好きだ。

妖怪としても規格外になりつつある今となって、その感情は一層強まった。

荒れ果てた鶴見家の庭を何とかして復活させてやろうと頭をひね

る。物置の隅に長らく放置されていたスコップ一本で雪をかきわけ、土をほじくり返し、ふと手を止めてはまた考える。

そこにいずれ芽吹くだろう花々のことを考えて幸せになれると、ただ自分が世の理の中に身を置いているということが実感できるのだ。幸せになれることがあるのはいいこと。

だから彼女はそいつの邪魔をしようとは思わなかった。庭先のフェンスに寄りかかって彼女の庭仕事を見つめる彼もまた、幸せそうだったから。

「あなたの力なら一瞬じゃないんですか」

気が済むまで幽香の横顔を観察して、そいつはフェンスから身を乗り出すようにして頭を下げた。

サンングラスに目出し帽、そのうえに長いコートを羽織ってフードも用心に被る。太陽なんて見れたもんじやないので常に俯きがちだ。現代の吸血鬼は閑静な住宅街の雰囲気から絶望的に浮きまくっている。

「久しぶりね、ユキ」

「ええ。ご無沙汰しました」

足元にスコップを突き立てて幽香は雪之丞を振り向いた。額に浮いた汗を拭う姿が眩しくて、思わず吸血鬼は目を細めたほどだ。

「汗をかくのは嫌いじゃないの」

やはり美しい。雪之丞は緩んだ顔が隠れていることを心の底から感謝した。

昔の幽香はどちらかといえれば野獣に近い、きらきらとした殺気をあちらこちらにぶちまけるような妖怪だったという。

くどいくらいにハジメに覗かれてきた白絹の肌も、彼女が途方もない努力の末に大妖怪と呼ばれる力を手にするまでは傷跡と火傷に埋め尽くされた、それはそれは目も当てられないような酷いものだった——というのが雪之丞が紫から聞き及ぶところだ。

紫は霊夢にも彼にも等しく優しいが、時折常軌を逸する彼女の言動をどこまで信じてよいのかはわからない。

彼の目に映る妖怪は、そんな後ろ暗い過去など微塵も感じさせない

ほどに優雅で完璧な美をたたえているのだが。

「俺がハジメと戦ったこと、怒ってますか？」

「いいえ」

「よかった」

その安堵に偽りがないことは明らかだ。

人をビビらせるプロである妖怪にはそれがよく分かる。雪之丞の周囲にうつすら漂っていた緊張の糸が急に解れていく様。

「言っておきますが俺、無茶苦茶強かったですよ。能力つてのに覚醒したばかりなのに」

いつもどおりの滑りを取り戻した雪之丞の口に幽香は思わず微笑んで、意地悪を口にしていった。

「あら。でもハジメはあなたを倒したって」

「あ、あれは。ちよつといい気にさせてみようかなって思っただけで。それに俺、また新しい力が使えるようになったんです。まだまだ俺は強くなります、有望株ですよー」

見守る幽香の内心は複雑だ。雪之丞の心には気づいている。それが彼をここまで取り返しのつかない存在にしまったことを悔いてもいたし、嬉しそうに成長を語る様は微笑ましくもあり。

「……幽香さんはまだ、あいつがあなたを殺せると思ってるんですか？」

雪之丞が沈黙で答えるという技術を知ったのは、うっかりと紫の歳を聞いた瞬間であった。

隠れ家に充満したいたたまれない空気から逃げ出してご機嫌取りの甘いものを買いに来たというのも、この外出のひとつの目的だった。

「俺はできますよ」

気を取り直して言い放つと、庭仕事に戻っていた幽香が手を止めた。

「俺はできる」

決心を固めるように、もう一度。

「ハジメなんかじゃ及びも付かないくらい強くなって、きっとあなた

を救ってみせます。約束する」

「吸血鬼の質は嗜む血の質に依ると聞くわ」

予期せぬ難解な言葉に戸惑う雪之丞の前で幽香は髪をかきあげた。細い首筋から肩口にかけての白い柔肌。うっすら浮いた鎖骨。

「試してみる？」

鋭い爪を伴い始めた雪之丞の指先が強ばって、ぎちぎちと骨を鳴らした。

だが、吸血鬼が牙を剥いたのはたった一瞬のことだ。すぐに彼は自分の衝動を恥じるように顔を背けて、踵を返す。

「それは、あなたをモノにしたときの楽しみに」

後ろ手を振って住宅街の坂を下っていく雪之丞の姿を幽香はスコップを担いだままに見送った。

彼の頭上では日中だというのに常に数匹の蝙蝠が付きまとう。彼の指やコートの端に掴まって、ぶらぶらと遊んでいるものもいる。

「ははっ」

あくまで陽気に彼らと戯れる現代の吸血鬼は、彼なりに彼の新しい生を満喫しているようだった。



「お前が二歳の頃なんだがな」

「俺もそれを思い出してた」

「じゃあ小学生の時に猪が」

「遠足の話ならもう聞きたくない」

激務から解放されてようやくやくの休日。

それまで死んだように眠っていた父が起きるなりコーラを取りに行かせた非情な息子は、携帯の画面に目を走らせながら父の繰り出す会話の芽を片っ端から踏み潰していた。

乱暴に鼻をすすりあげながら探すのは、最近ちらほらとウェブニュースにも載るようになってきた自分たちの町の名前だ。

『爆発事故』『不審火』『UFO』『プラズマ』『オーロラ』『テロ』

それぞれ好き勝手騒ぎ立てる見出しの唯一の共通点は、そのすべてが語尾に疑問符を伴っていること。正確に事情を把握しているもの

などごく一握りだ。

その渦中の人物であるハジメは、今更ながら自分たちの戦いが引き起こしたコトの大きさにため息が出るばかりである。

「二ついいか？」

父が置いた空のボトルは建て付けの悪い机の上で底を滑らせて横倒しになる。それには目もくれずに両手を膝の上で組むと、父はベッドに向けて椅子を寄せた。

「幽香さんをどう思う？」

「どう思う、か」

相変わらず言葉少なな父だと呆れる。曖昧な問いだったが、親子とこののは恐ろしいもので大抵のことは察しきれてしまう。

「千晃にとつてはお姉ちゃん。俺にとつては新しいケンカ友達」

家族という言葉を避けたのも、父の意図を言外に読み取っていたからだろう。

「廊下の一番奥の部屋を使ってもらってもいい相手、とオヤジは考えてる」

「やるな」

「あんたの子供だからな」

今は空き部屋となつているその部屋に以前いた人物の顔が一瞬浮かんで、ハジメは必死にその面影を振り払っていた。あれはとつくの昔に彼らに愛想を尽かすとどこかへ消えた。ハジメだって戻つてきてほしくもない。

「幽香さんにはお前から頼んでもらつていいか」

「実はもう、そういう話はしてある」

それは本当に偶然であったが、これには流石の父も目を丸くした。

「お前、最近やるなあ」

「任せとけ」

「——でき、お前本当に幽香さんと外泊してて何もなかったの？」

「あるかよ。尻は見られたがな」

朗らかで、しかしどこか薄汚い親子の会話に水をさしたのは場違いにハイテンションな携帯の着信音だった。それまで穏やかに息子の

成長ぶりに目を細めていた父は、携帯の液晶に表示された名前を見るなり顔色を変える。

「うっわ、最悪」

「どした？」

「ちよ、ちよっと行ってくる。もしもし——うおっ、すまんすまん」

携帯を耳に当てたまま慌ただしく出て行った父はドアを開けた幽香とぶつかりかけていった。しばらくそれを見送って入ってきた幽香は盆を持っていて、その上には卵粥が載っていた。

「それを作ったのは千晃」

呆気にとられていたハジメがふと部屋の入口を見ると、見慣れた後ろ姿が引っ込んでいくところだった。

「愛情を注いであげれば花も、人も応えてくれる。ね？」

幽香が差し出すままにスプーンを口に運んで、そこからは早かった。

ハジメには千晃がたった一杯のお粥を作り上げるためにどこまでの試行錯誤を重ねたのか知る由はない。聞いたところで千晃はいつものように小馬鹿にして「そんなはずがないでしょ」と返すだけだろう。

それでもハジメは、ある意味ではまっすぐな妹の気持ちが見えるようだった。

「あの子なりにあなたに歩み寄ろうとしているんじゃないのかしら」

あつという間に空になった食器を片付けながら幽香が一瞬よこした視線の意味をハジメが考えあぐねているうちに、彼女は椅子の上で佇まいを正した。

「な、なんだよ。そんなかしこまって」

「ごめんなさい」

実際に雷に打たれたからこそその感想だが、その衝撃たるやまさに落雷であった。

ハジメの前で僅かに頭を下げた幽香から放たれた言葉は、ハジメの知る限り彼女が決して吐くことはないと言ったものだった。

「あなたとユキを危険に晒したこと、あなたの友達を失わせたこと。

風邪をひくまで走らせたこと——あと、お尻に鮭が刺さっちゃったこと」

シリアスに向かいつつあったハジメの表情が一気にこんがらかった。

「ずっと人間のフリをしていたことも」

「またその話に戻るのかよ」

「あなたの家族って話、嬉しかったけれどやっぱり」

彼がどどん俯いていく幽香の肩に触れたのはほとんど反射的なもので。それでも驚いた彼女の顔と自分のギクシヤクした右手とを見比べて、自分が変わったことをしみじみと感じる。

「いいか、一度しか言わないぞ」

ぼんやりとした頭でその言葉を組み立てていくのは容易なことではない。熱がぶり返してきたのかもしれない。搾り出すように一言を積み上げていく。

「俺はあんたのことが正直言って苦手だった。何をするにも完璧で『ね、簡単でしょ?』って顔も気に食わなかったし。俺を殴る蹴るわ大体お前人を殺すって言うておいて、おい、待て、まだ途中だって!」

一気に気落ちした幽香をばし叩いて顔を上げさせる。

「見ろよ、情けないくらい必死になってるんだぜ」

事実いつになく必死だった。本当に、殺し合いをする連中の会話じゃない。気づいているのかいないのか、はたまた熱か、ハジメの顔は真っ赤である。

「俺が見境なくなるのは家族とダチのためだけだ」

ダチって言い方はちよつとダサかったよね、と茶々を入れる声が頭の隅っこを過ぎ去っていった。そいつを黙殺してハジメは次の言葉を探す。

「で、毎度毎度俺のピンチに息切らして駆けつけて、頼んでもいないのに敵をボコボコにしてくれるのはどこのどいつだ?」

言い切った後には長い沈黙が訪れた。膝に目を落としたままの幽香からゆつくりと手を退くと、ハジメは布団を引き上げる。言うだけのことと言った。頭がぐらぐらする。まるで飲めもしない強い酒を

一気にあおってしまったようだった。

天井を仰いでいると不意に幽香が手を取った。

予想以上に柔らかい感触と儂げに笑う彼女に、思わず息を忘れるほどだ。さっきの意趣返しなら、まんまとやられたことになる。

「あなたが、それでいいのなら」

はにかんだ笑いを浮かべる幽香は悠久を生きる妖怪とは思えない。外見相応の、それもきれいな女性だ。ハジメは具合悪そうにせきをすることでも照れを隠す。

「この家には俺とオヤジと千晃と幽香。決まり。オツケー」

そう、これでいい。

殺し合いをするというのは実のところハジメにとっては最終手段にすぎない。もつと別の結末を用意する方法はいくらでもある筈である。

未だ雪之丞に仄めかされた彼女の真意は知れずとも、幽香との距離が近づくにつれ、ハジメのゴールも近づいているのは間違いないように思われた。

「それじゃあこれからもよろしく。改めてお世話するわ」

「そこは世話になる、じゃないのかよ」

「されてばかりじゃない」

「ま、確かにな」

こうして二人顔を見合わせて笑うなんてことも、幽香と出会ったばかりのハジメには想像もできなかったのだ。

「成長したわよね。あなたも、私も」

それは幽香も思うところであつたらしい。

「何でも聞いていい。今回は特別」

成長にはご褒美が付き物。この取り決めとの付き合いも長くなってきた。もちろんハジメが聞きたいことは山とある。先の雪之丞の言葉にしたってそうだ。

じゃあ、と間を空けてハジメは口を開いた。

「教えてくれよ。どうして妖怪だったこと、隠してたんだ？」

「あなた達に距離を置かれるのが怖かったから」

彼女は我が耳を疑うようなハジメの様子を見て、

「あなたが思っているより、私ってずっと臆病なのよ」

とそっぽを向いた。最近の幽香はとことん意表を突いてくる。ならばハジメもまたまた同じことをしてやるつもりだ。今日はとことんまでやってやる。

「俺が知りたいのはそれだけだ」

予想通りに拍子抜けした幽香の表情が、ハジメには心地よい。

「ユキから聞いたんでしょ、いろいろ」

「ああ」

「もつと気になること、ないの?」

「言わないのなら、言えない事情があるんだろ。幽香に準備が出来たんなら、その時でいい」

それに、別に隠し事があるのは幽香に限った事ではない。

「ありがとう。優しいのね」

礼を言われて、ハジメは余計自責に囚われた。

幽香の肩ごしにそれが今もポケットに入っているはずの薄汚れたジャケットが見えて、ハジメは寝返りを打つ。

包帯。

ちぎれた幽香の腕と一緒にそれを拾い上げた理由なんてほとんど衝動的なものだ。

捨ててしまえと思ったことも一度や二度ではない。それでも手放せない。あの夜からずっと彼女の血と匂いが染み付いた包帯をこっそり持ち続けていることが何故か恐ろしく後ろめたいことのように感じられる。

「何やってんだろな」

彼の小さな後悔の声に幽香が気づいた様子はなかった。

「聞きたいこととか頼みとか、幽香にはないのか?」

「いらないわ。うふふ」

己の身に起きた些細な変化にも気づけないままに、ハジメは首を傾げるばかりだ。



「そんな急な話があるか！」
階下。

電話を片手に珍しく声を荒げるのはハジメの父だった。

ねぐらのソファから立ち上がった千晃も、緊張の面持ちで父の後ろから受話器に耳をそばだてている。

「一週間後、だ？　——いくらなんでも一方的すぎじゃ、あ、まだ俺の話は——おい——おい!？」

有無を言わさず切られた通話に苛立ち全開で受話器を投げ捨てようとして、彼は隣の千晃に気付いたようだった。

「すまん」

代わりによろよると歩いて行ってどっかとソファに腰を下ろす。

心配顔の千晃が隣に座った。

「マズいことになったぞ」

息子が学校にも行かずに居候を連れて一週間以上放浪していても『そうか』の一言で済ませてきた父である。そんな父がマズいとコメントするようなことで思い当たる節など、千晃には一つしかない。

「……はーん。ついに本土決戦ってワケ」

「千晃はたまによくわからない例えをするな。でも、まあ、そうだな」

千晃の言葉はそれでもしっくりくるようで、父はゆらり立ち上がった、しきりに頷いた。

「戦争だ」

1月編エピローグ 『俺とあんたの長い午後』 おわり

風見幽香と鶴見ハジメのブチ切れお家騒動。そして
2月

1 『最悪の敵（上）』

彼はあまりにも巨大だった。

たゆたっていた。

いつからか、どこからか。彼も忘れるほど長い時の中を、そのクジラめいた巨体で泳ぎ続けてきた。

—— ゆるりゆるり。

彼に敵はいない。

かつてとある都市の裏路地に息づいた卑しい妖怪は、井の中の蛙であるが故に己が最も強いバケモノであると確信していたという。

だが真正銘、彼に敵など空前絶後に存在しなかった。

彼はその姿通りに大海の青さも深みも知っている。世界中の空を渡り歩いての結論だ。

手を出してくるものがいなければ、それは文字通り無敵ということになる。

—— ゆらーりゆらーり。おなががへった。

眼下にきらきらと輝く夜の町並みは彼にとってまるごと天晴れなご馳走だ。嬉しそうに開かれた彼の口の中に無数の光が灯る。そして。



「つるみん、幽香さん来たよ?」

クラスメートに肩を叩かれてハジメは目を覚ました。

「朝だいぶ走ったんでしょ。お疲れ」

「お前はちゃっかり自転車で来やがってよ」

苦笑する彼女に生返事を返して伸びをするとハジメは席を立った。

首を巡らせれば見える人ばかり。その中心でひよこひよこ愛想よく動くのは、相変わらず形容しがたい色味の艶やかなショートボブであつた。

「うふふ、そうなの。それじゃあお言葉に甘えて踏んじやおうかしら」
のけのけと人だかりを押し分けるうちにそこで行われていたアヤシゲな儀式の全容が明らかになる。床に数人連なった上半身裸の屈強な男たち。そしておもむろに来客用のスリッパを脱いでストッキング履きの足を持ち上げる幽香。

「何、やってんの」

ハジメの肩から通学カバンがずり落ちた。

「そんなスリッパじゃ足が汚れるって。床になつてくれるらしいわ」

最初の一人が恍惚とした表情で役目を全うする中、幽香もくすくすと笑いながら意地悪に一步進んで二歩下がってみたりする。その度に男たちは入れ代わり立ち代わり慌ただしく彼女の足元に集うのだった。

「うふふ。うふふふふ。どうしてかしら。今、けっこう幸せ。え？」

「ここで？ 仕方ないわねえ」

疑問符を浮かべながらも幽香の動きには淀みがない。仕方ないわねと言いつつ仕方の無さが微塵もない。するりと下足入れを解いて出てきたものは、この展開を見越したような細いヒールである。

床から茶色い悲鳴が上がった。

「すげえ。あれ痛そう」

「でもあいつらめちやくちや嬉しそうだな」

「ひよっとすると意外と楽しいのかしら」

ぶぐくりと唾を呑んで見守るアホな級友たちに向けるハジメの目は冷たい。

なかなか歪んだ形でハジメの学校生活に溶け込み始めた幽香。彼女を止めるべきか足元の男たちを止めるべきかとハジメが頭を痛めていると、その袖を引いたものがいた。

「江梨花」

いつになく神妙な面持ちの彼女に戸惑っていると、その視線の先にある空席へと目がいった。どこかのお調子者がいつものジョークで机の上に据えた花瓶には何故か真っ赤なバラが生けてある。

相手を間違えれば、ただのイジメだ。

『おいおいおい、まったく誰の仕業だよ。あーっ、ふざけんなって!』
いつもどおりにマジ切れして見せてみんなの笑いを取る人気者の
姿がありありと再生されて、ハジメは頬を緩めていた。しかし江梨花
は表情の深刻さを増すばかりだ。

「もう学校休んで一週間だよ」

「心配するなって。きつとあいつは新しい進路つてのを見つけたんだ
ろ」

「ねえ、友達でしょ。何でそんな達観しちゃってるわけ?」

不安げな眼差しについて口ごもる。江梨花は何も知らない。その空
席の持ち主は吸血鬼となって魔剣を手にハジメの前に現れ、謎めいた
捨て台詞と共に姿を消した。

それから一週間。

「ユキはユキで、ハジメのことを心配してたのに」

ぷいと背中を向けて去っていく江梨花にどう声をかけていいのか
分からない。あいつは嫉妬に狂って吸血鬼になっちまって日の光な
んて浴びたらきつと溶けちまうぜと伝えて、彼女の安心が手に入るか
どうかは非常に怪しいところだった。

「ハジメ、行きましよう?」

幽香に手を引かれて、後ろ髪も引かれて。

ハジメはざわつくクラスメートに頭や尻をさんざん叩かれて冷や
かさねながらも、振り返り振り返り、雪之丞の席に腰掛けて窓の外へと視
線を馳せる江梨花が気がかりで仕方がなかった。

「いい子」

長い渡り廊下を歩くハジメがグラウンドの花文字事件を思い出し
ていると、幽香がぼつりと漏らした。

「ダチのことならなりふり構わないのは、きつと彼女も一緒なのね」

「それ、お前が言うとは違和感バリバリだな」

ハジメの冷静なツツコミに幽香は言い方がおかしいのかしら、と首
を傾げた。

「ちよつとハジメのマネをしてみたんだけど。えーと、私たちちつてダ
チじゃん?」

「やめとけつて。いや、やめてくれ」

そう堂々と自分の口癖を使われてただ滑りされては、ハジメの方が恥ずかしくなってくる。彼の心境も知らずに幽香は通りがかる生徒にはばかりなくダチダチと連呼している。

頭がおかしくなりそうになった頃、ハジメはようやく下駄箱にたどり着いた。

「ありがとう。またね、床」

「次もお願いします!」

——あいつらずつといたのかよ。

見るもおぞましい裸祭りが整然と赤い斑点だらけの背中を並べて去っていくのを見送って、無意識にそいつらをシャットアウトしていた人間の脳の偉大さにハジメは感心する。

「さて、ユキのことだけど」

そこでようやく、幽香が敢えて吸血鬼の話題を避けていたことに気づかされるのだった。

二月の頭では寒さもまだまだ強い。それでも日傘を差した幽香の隣を歩くハジメは不思議な暖かさに包まれていた。

風も寒さも防ぐ彼女の力の一部は、いざ荒事となれば難攻不落の城塞と化す。迫る攻撃を目視してひいこら迎撃するのが関の山のハジメとしては羨ましい芸当だった。

「うん、あいつが?」

「あなたが寝込んでいる時に、私たちの家に来たのよ」

「おいおい」

私たちの家という聴き心地のいい言葉はこの際無視した。

幽香が言うところによると一週間前、日中にも関わらずに雪之丞は堂々と庭先に現れて彼女と世間話をすると帰っていったというのだ。

「もつと早く言えよ。俺だってあいつと話したいことが山とあったんだぜ」

「ユキはそうでもなかったみたいだけど」

校門を抜けた幽香が一度校舎を振り返って手を振った。窓際に一列に並んだ肌色が手を振り返してくる。グラウンドにまばらに出て

いた運動部の連中も僅かに遅れて大声を飛ばしてきた。

「人気者だな」

幽香もまんざらではないようで、軽い足取りでハジメの半歩前を行く。

「そうね。私もちよつと怖いくらい」

学校前のバス停を通り越したところで幽香は振り向いた。

「この世界に来てから、すごく楽しいのよ？」

かつて幻想郷で忌み嫌われたという最強の妖怪、風見幽香。ここ数日になってより邪念が飛んだような彼女の笑顔を見せられる度に、ハジメは彼女自身の語った過去がひどくちぐはぐなものに思えて仕方がない。

誰も彼も苛め殺すおつかない妖怪なんて、彼がどこを探しても見つからないのだ。

「ハジメ、バスは出ないわ」

「あ、ああ。そうだった」

足を止めたのは彼女の笑顔にではなくて、いつもの習慣に違いがない。ハジメは自分に言い聞かせて制服の襟元をしめた。

事実、今F市では公共の交通機関が全面的に停止してしまっている。朝遅刻寸前でハジメが教室に駆け込むような事態になったのも、これが原因だった。

原因は金物だ。

レール、電線、信号機からクルマのシャフトまで。たった一晩の間に金属と呼ばれるものはあらかたかじり取られるように無くなっていた。被害は一点集中で翌日には復旧すると聞かされてはいたが、い迷惑であることに変わりはない。

奇妙なのはそれだけ大掛かりな窃盗と器物損壊の犯人が誰の目にも留まっていないということだ。

「またどこかの下らない妖怪くずれでしょうね」

幽香が断ずる。

「姿を現さないのは賢いからか、それとも臆病なだけか、両方か。どちらにしろハジメのいい教材になりそう」

「勘弁してくれ」

ため息ついてふと視線を逸らして見えてくるのは、『下らなくない妖怪』の引き起こした破壊の跡地である。区画一つを丸ごと潰すような戦いで巻き添えが出なかつたのは奇跡に近い。

うっかり幽香に手を出して鼻面をへし折られた酔っぱらいのことなどハジメは知る由もないので、彼は素直に胸をなでおろすのだった。

ビニールシートをかけられた建物が立ち並ぶ通りを抜けて歩き続ける。

ハジメの様子が目に見えておかしくなったのは、家の前にでんと停まったそれを目にした瞬間だった。

「おい、嘘だろ」

幽香が訝る暇も与えずに駆け出した彼の先には一台の軽自動車。深い青色の車体にへばりつくようにして中を探るハジメに追いついた幽香が声をかけあぐねていると、その肩を叩いたものがいた。

「しーっ」

髪を短く切り揃えた妙齢の美女。いたずらっぽく笑った顔にどこかハジメの面影がよぎって、幽香は息を呑んでいた。

「よっ、ハジメ」

背後からびしつと頭にチョップを入れられるなり、幽香が見たこともないような顔でハジメが振り向いた。痛みと苦味と怒りと呆れ。複雑に入り混じった感情を敢えて表現するのなら、そんなところだ。

舌打ちひとつ吐き捨てたハジメの瞳には、信じられないことに一瞬黄金の火花が散っていた。明確な敵意を押さえ込んだ彼の声は地の底から響くように低い。

「ずいぶん久しぶりな気がするな、杏奈」

「こーら。母さんって呼びなよ。少なくとも、この離婚話が終わるまではね」



がると唸る千晃を膝に、幽香は杏奈を観察する。

鶴見杏奈、つまりハジメの母親はどうしてもハジメの父との関係を

解消したいようだった。むしろこれまでの数ヶ月間一切音沙汰を絶つておいて、今更という感もある。

「そうだな」

こんな時でも父は平常運転だ。もちろん内心では雷雲が渦巻いているのだろうが、彼はおくびにも出さず全ての条件を呑んでいった。

最後のひとつ以外は。

「だがハジメと千晃は俺が預かる」

「おいおい石頭、それがイヤで私が出て行つたつての忘れないでよね。千晃のアレも、ハジメのソレも、シゴトシゴトつて全部私に任せつきりだったあんたが、何言つてるのさ」

「それでも仕事をしなければ元の木阿弥だろう」

「それは半年前にも聞いた。もつと脳みそ絞りなよ」

どうしてそこまでしてリビングの空気を重くしたいのか、ハジメには分からない。幽香を見てみる。彼女は彼女で今にも飛び出しているきそうな千晃をなだめているようだ。

「その」

ようやく視線が会つた時、彼は自分がすぎるような目をしていないかと心配だった。

「俺らの意見つてのは、どうでもいいワケ？」

「二人が残りたいなら残ればいいし、ついて来たいのならついて来ればいい。そうしようよ。ね、それでいいじゃん」

——それじゃあ答えは出たも同然かしら。

千晃のむくれっ面を物理的にほぐしてやりながら幽香はハジメを盗み見た。しかし意外や意外と、彼の口は重く閉ざされてしまっているのである。

「いたた」

思わず加減を忘れた幽香の指に頬を引きつられた千晃が悲鳴を漏らした。が、彼女もまたそれ以上の言葉を発しようとはしない。

「いいね。私しばらくこの家にいるから、その間に話し合つて結論を出してくればば」

「勝手を言うな。お前の寝泊りする部屋なんて」

「二階の廊下の一番奥。食費はもちろんガス水道だって払えつて言うなら払うよ」

父は幽香に目配せした。近いうちにその部屋を割り当てられることになっていた彼女は好きにしてちょうだい、とこれまた器用に目線だけで答える。

そうして父から吐き出された盛大なため息が答えとなったのである。

「やったあ！ なんなら晩ご飯は私が作ろうか。どうせまたコンビニごはんでも食べてるんでしょ？」

「悪いな。おふくろの味とやらはもういらないんだ」

「ありや」

挑戦的に見据えるハジメの視線は杏奈をすっぽ抜けた。

あたりに漂う緊張など無視したマイペースな足取りで彼女が向かった先は幽香のもとだ。千晃が歯を剥いて威嚇するが、これまた効果はない。

「そういえばキミ」

「何かしら」

面倒そうだなあ、と幽香は千晃を盾のように持ち上げてみる。そんな控えめな防御などに食わぬ顔で突き通してくるのがハジメの母ちゃんである。

「自己紹介がまだだったね。私は鶴見アンナ。キミのお名前は？」

「風見幽香」

「ふうん。古風っていうか、風雅っていうか。覚えるのが難しそうな名前だね」

「そんなこと初めて言われたわ」

すべて真ん中に不機嫌爆発の千晃を挟んでのやりとりである。

ハジメは顔をしかめて一部始終を見守りつつ、幽香があからさまに彼女を苦手としているのがひしひしと伝わってくるようだった。

「それで、キミはどここの誰かな。ああごめん、ちよつと失礼な聞き方だったかも」

「私はハジメのい——」

珍しく幽香が言い淀んだ。

それもその筈、相手はハジメの実母である。むしろいつもどおりに「従姉ですわ」と答えて墓穴を掘らなかつた幽香は自分を褒めてやりたくなる。

とはいえ友達では居候している言い訳が立たないし、父の愛人と答えては話がより一層こじれていきそうだ。いつそ元から住んでいたと言ってみようか。

——あら、結構困ったわね。

それでもハジメが静かに立ち上がったのを助け舟と受け取って幽香は安堵していた。

「こいつは」

しかし、彼の口から吐き出された言葉は幻想郷の大妖怪をしても度肝を抜かれるような大嘘なのであった。

「こいつはカノジョ。俺の、はじめての」

「は」

「へええええー！」

おいおい待てよそりやどういうことじゃいと言いかけた幽香を制したのは杏奈の大声である。千晃がぐったりとして動かない。卒倒している。

「熱っ」

唯一冷静と思われていた父でさえ、急須から膝に茶を注いでいた。

「こんな綺麗なコ、ハジメにしては頑張ったじゃんか！」

ふんふんと頷きながら杏奈は落ち着きのない犬のように幽香のまわりをぐるぐる見て回った。依然としてハジメの意図が読み取れないままに、幽香は戸惑いたっぷりの視線を送る。

「ねえ、これ夢じゃないよね。この石頭とのやり取りが嫌すぎて私が見てる現実逃避の妄想じゃないよね?！」

「私に聞かないでよ」

「いや、ハジメの強がりかもってこともあるしき。恋人だって言葉をキミの口から聞きたいな、なんてさ」

「頼む」

耳打ちしたハジメが浮かべたのは、家の前で車を目にした時と同じ表情だった。

渋々の仕方なしで幽香はハジメに合わせることに決めた。その代わり、理由は後でしつかりと説明させるつもりだ。

「え、ええ。そう。私はハジメと付き合ってる、けど。っ!?!」

隣のハジメに乱暴に腰を抱かれて、幽香は目を丸くした。

「あらあ。見せつけちゃってえ」

そう言っつて杏奈はおどけて見せるのだが、もはや彼女のほかにリビングでまともに思考活動を行っているものなど、存在しないのであった。

2 『最悪の敵（下）』

誰だって腕組みして視線を鋭くした女を見てウキウキしているとは思わないはずだ。

ベッドに座った彼女は足を組み変える。目の前では部屋の主が悪びれない様子でコーラの大きなボトルをあおっていた。

「悪かったよ」

と、ふてぶてしく言つてのけるハジメを前に、幽香は何も言わない。繰り返すが彼女が完全にイラついているのは明白だった。それがいかに稀有なことであるかなど、彼に知りようはないのだが。

かつて彼女の逆鱗に触れた者たちはそうもいかなかったのだ。

なんだよ、聞いていたのとはだいぶ違うな、と。粗相を働かれたとこのにニコニコと愛想のいい笑顔を浮かべて歩み寄る彼女を見て侮ったものも多かつただろう。

そして大抵、それが最後の過ちになる。

ニユートラルに殺意を抱いてニユートラルに踏み潰す。虫を殺すのにいちいち心を動かしていたら疲れて疲れて仕方ないのと一緒だ。数少ない例外はしばらく幽香の視線を受け続けたあと、沈黙に折れた。

「だって、あのままアンナを帰したら悔しいじゃんか」

ボトルで膝頭をぽこぽここと叩きながらハジメは部屋の中を歩き回った。

やがて椅子を一つ引き寄せて幽香と向き合うように座る。床を見つめたまま、ハジメは唇を湿らせるようにもう一度だけコーラを口に含んだ。

「あいつが出て行ったのが大体今から五ヶ月くらい前。あいつは何も言わなかったし、オヤジだって何も教えちゃくれなかった」

だがハジメは見捨てられたように感じた。という。

ロクな挑戦もせずダラダラと青春を消化試合のように過ごすハジメと、人付き合いは面倒だと岩戸に籠ったまま出てこようともしない千晃。そして超絶ハードワークを理由に家庭を放り出したままの

父。

「俺たちがダメだったのは認めるさ」

ダメもダメ。ダメダメである。

「でも俺はもう、あいつの呆れていたヘタレじゃない。だから」

「見返してやろうとして恋人が出来た、なんて言っちゃったってこと」
「だって」

「ごによごによと語末を濁したまま、具合悪そうにハジメは俯いた。
一方の幽香は彼のあまりに子供じみた反抗心に呆れるばかりだ。

「私はあなたの家族よ。それは嬉しい。本当に嬉しいわ」

だからこそ忠告はしておく。

「だからって下らないウソの片棒を担ぐなんて絶対にイヤよ。お母さんに見直して欲しければ正々堂々戦うことね」

でなければ本当にハジメはヘタレのままだ。

しかしてベッドから腰を上げた幽香の機先を制したのはハジメであった。彼の瞳には既に日輪が宿っている。だが炎を宿した指先が突きつけられているのは、あろうことか彼自身のこめかみなのである。

息を荒げると、ハジメは一層激しく瞳を燃やした。

「全部ウソだったなんてバラしてみろ。その場で頭ぶち抜いて死んでやる」

穏やかじゃない。

そこまで母親を嫌いになれるものだろうか。記憶を手繰るが母親の記憶どころか子供のころの思い出ですら今となっては曖昧だ。ネットカフェというディスプレイの収容施設めいた場所でハジメに過去を語った時でさえ、思い出すのに多大な労力を割いたのだ。

「まったく、つくづくお子様ね」

とにかく幽香はベッドに座り直す。最近では浮かべるのも難しくなってきた酷薄さを絞り出してハジメを見据える。目を細め、微笑みを形作って。

「少しは落ち着いたら？」

——ああ、なんだか違う。調子が狂っちゃう。

正解の風見幽香は『頑張つて。最後までちゃんと見ていてあげるか』だ。

このところ自分がありますます甘くなってきたように幽香は感じる。それは悪いことではない。むしろ強力な妖怪が現代での生活に順応するためには避けようのないことなのだろう。

それでも戸惑いが無いワケではないが。

「いろいろ痛い目を見せられてきた私が言うから聞いておいて欲しいけど。そこはオススメできないわね」

思わず額を覆う。これも不正解だ。

事実、頭の片隅で意地を張らせっぱなしは可哀想だからそろそろ止めてあげようかしら、と考えているのだ。

「お、俺はマジだぜ」

——やれやれ。頃合かしら。

肩をすぼめた幽香が何かを言う前に、廊下のわずかなきしみにハジメは気づいていた。長らく耳を離れても忘れようのない、悪びれの無い猫のような忍び歩き。これに何度苦汁を舐めさせられてきたことか。

が、今回ばかりはそれを利用してやる。

「ねーねーハジメ、聞きたいんだけどさっ！」

困ったことに鶴見杏奈はノックをしない。

それが原因で思春期のアレもコレもすべて白日のもとに曝け出してきたからこそ、ハジメの反応速度は幽香の予想を超えていた。はじかれるように椅子から立ち上がったハジメは、

「や」

幽香の両肩を掴むと、そのままの勢いでベッドに押し倒す。

普段のハジメからは想像もできない手の速さにただただ呆気にとられる幽香の上に野獣のように覆いかぶさったハジメ。その背後でドアが開け放たれた。

「私の貸した——わお」

流石の杏奈もこれには驚いたようだった。

しかしそれも一瞬のこと。すぐさま思い出したようにわたわたと

携帯を取り出すと、とりあえず目の前の組んず解れつに向かってシャツターを切る。電子音が気まぐすい沈黙に響いた。

「一応聞くけどそれは同意の上だよね」

「今忙しい」

「スレた高校生の恋愛、見学してっていい?」

「ダメだ。出てけ」

「はいはい。じゃ、後でね」

動画撮影モードに切り替えたらしく、部屋を出るまで彼女は後ろ歩きで携帯の液晶をニヤニヤと見つめていた。ぱたりと閉められたドアの向こうで、彼女の大声が轟く。

「うっひょーっ、マジじゃんかよー!」

赤飯赤飯と時代錯誤もいところな叫びを上げながら階段を下りていく騒々しい足音を確かめると、ハジメは気が抜けたように表情を緩めて幽香の手首を離れた。

「き、既成事実いっちょあがり、と。これでもう後戻りは出来ねえな」

「ハジメ」

幽香の声は恐ろしく平坦であった。

「ああ、今どくからさ。幽香、本当悪かつ」

幽香のげんこつは痛いなんてものじゃない。

はじめて怒りを持って叩き込まれた一撃は最低限の手心だけを加えられたものだった。

横つ面をひっぱたかれてほとんど床と水平に吹き飛んだハジメは騒々しく床を転げ回りながらカーペットを巻き込んで、壁にぶち当たってようやく止まる。

ぎしり。

出来の悪いてるてる坊主のような姿で床に転がるハジメは、布地の出口を手探りで探しながら不気味な音を聞いた。ベッドの軋む音。幽香が立ち上がった音。

「もしかして」

嫌なものを感じて焦って立ち上がるなり床に転がったままのコーラのボトルを踏みつけ、後頭部をしたたかに壁にぶつけた彼は再び横

倒しになる。

「もしかして悪かった。つて言おうとしたのかしら?」

——そういえば目先の杏奈を騙すことに必死で見落としていたが。

「ねえ。悪かったで済むことなのかしら?」

不躰に触れて、勝手極まる恋人宣言をして、ベッドに押し倒して母親の前で醜態を演じさせ、あまつさえテキトーにあしらおうとしていた相手は。

「さっきのは私でも結構危機感があったのだけれど。あなたを信頼していたのに、なんだか悲しいわね。ねえねえ」

幻想郷と呼ばれる異界で恐れられ続けた最強の大妖怪、風見幽香。相手がハジメであるということを勘定しても、数々の仕打ちに彼女の我慢も限界だ。

「危機感も何もお前の馬鹿力なら——げ」

半ばまで言いかけたハジメがやっぱり言うべきじゃなかったなと思っていると、案の定黙らされていた。胸の上のしかかった重いものの正体は言うまでもない。

「でも安心したわ。こういう時の私はまだまだ風見幽香なもの」

自らに起きた変化に戸惑っていた幽香のことなどハジメには知るよしもないが、そんなことに首を傾げる時間など彼女は与えてくれなかった。からからんと軽い音はコーラのボトルのキャップが回る音だ。

ハジメが戦々恐々としていると、さっそく顔を覆うカーペットめがけて恐ろしく甘く、冷たい液体が振りかけられてくるのである。安いカーペットの生地は水分をよく吸った。実によく吸った。

不平など漏らす暇もなく、ぐしよぬれの布地からはハジメの苦しげなぶわぶわという呼吸音だけが聞こえてくるようなる。

ようやく布地から這い出てきた右手が床をタツプしているがルール無用の大妖怪はギブアップなど受け入れないしそもそも知らない。

思い切りカーペットを顔面に押し付けると、幽香はハジメの口を塞いで鼻を探り当てる。

コーラを注ぎ込んでから五秒ほど沈黙があった。

「ぶへっ」

くぐもつて、むせた悲鳴。

炭酸に鼻と喉を焼かれて、おまけに息もできず。それからしばらく無表情でコーラを注ぎ続けて、幽香はようやくハジメを解放してやった。

「げエーっほ！　ぐへっ、なにしやがる」

「馬鹿」

水責めで心がくじけかけていたのもあるが、ハジメの威勢を完全に削いでいったものは別にあつた。ぐしよぬれのカーペットを黙々と畳んでいく幽香の伏し目。

ふと手を止めて、彼女は肩を抱いた。

「……………本当に、ああいうのは心臓に悪い」

最強の妖怪である。

返す返すであるが、風見幽香は幻想郷最強の妖怪のはずである。

彼女が押し倒されたくらいでそこまで落ち込む理由がハジメには分からないが、マズいことをしてしまったことだけは理解できた。

「な、なあ。お前だってこの前俺の尻を縫うときに、いや、悪か…………ごめん」

残りのコーラを一気に飲み干して、髪をぐしゃぐしゃとかき回して。そうしているうちに幽香も多少は落ち着いてきたようだった。ようやく素直に謝ったハジメを前に、はあっと大きく息をついて、

「次はないわよ」

と、顔を覆う。

「それにしても既成事実、とはね。私としたことが不覚だったわ」

小さい頃女の子を泣かせてしまった時のような気まずさをハジメは感じていた。沈黙が身に突き刺さる。

「それで、どうする？」

指の隙間から幽香はじとりと視線を送る。だいぶ諦めの入った、ささやくような一言も。

「やるしかないでしょ。せいぜい後悔するといい」

目の前で次第に明るくなるハジメの表情を見守りつつ、幽香はこれ

でいいものかと考える。鶴見家を何とかする、というのが彼との約束である。それなら、この妥協はむしろ遠回りになってしまっているのではないか。

「ああ——ああ！ マジ助かる、ありがとな！」

だがここに至って何をどう説明したところで杏奈の誤解が解けるとは思えない。

人間ごっここの次は恋人ごっこ。せいぜいハジメの学園生活を引つ掻き回してやろうと思えば溜飲も下がるし、楽しんでやろうという気にもなる。

幽香は汚れたカーペットを掴んで立ち上がった。

「そうと決まれば早速ね。これから勉強してくるから」

何か気になることを言っていたが、浮かれていたハジメがそのことに気づいたのは彼女が部屋を去ってしばらく経つてからのことだった。

「べん、きょう？」

千晃の部屋へと向かった足音は答えない。



どっすん。

リビングにいた誰もが顔を上げて天井を見つめていた。

「激しいねえ」

運良く騙されたままの杏奈が訳知り顔で呟いた。

とはいえそれがげんこつ一発で見事に吹き飛んだ人間の立てた音などと、誰が想像するだろうか。

くぐもった悲鳴も一緒に聞こえた気がするが、最近はそのような流行りなのだろうと片付けて、杏奈は目の前に立ちはだかる新聞紙の壁を見つめる。

空になった父の湯呑にお茶を注いでやると、下からにゅつと出てきた手がそれを掴んで引つ込んでいく。

「独り言なんだけどさ」

茶をすすする音が答えた。

「あの子、まだ私の五円玉持ってるよね。穴のないやつ」

沈黙。

「まあ、独り言なんだけど」

二階から再び悲鳴が聞こえた。今度は間違いなくハジメのものと分かる。視線を感じて杏奈が天井から目を戻すと、がさがさと慌ただしい音を立てて新聞の壁が再建されていくところであった。杏奈は苦笑する。

「あれ調べたらエラーコインってやつでさ。五円玉のクセしてウン十万するんだよ」

「だから返せってワケ？」

ソファの上で不貞腐れていた千晃が顔を上げた。

「うんそう」

鬼の首を獲ったとばかりに笑い声を上げて、彼女は杏奈を睨む。

「今更私たちを預かりにきたなんてウソつぱちじゃん。本当は金をむしりに来たんだ」

「人間き悪いね。私はこう見えて千晃ちゃんを心配してるし、あれは貸しただけだよ」

エラーコインとは製造過程で起こったミスで生まれた、通常とは違う成形をされた硬貨のこと。それが有難がられ、高値が付けられる理由は単純だ。現代日本の厳密な検査を穴のない五円玉なんて馬鹿な代物が通過する可能性は限りなくゼロに近い。

それでも恐ろしい偶然の積み重ねの結果、たった一枚の息詰まりするような間違いが生まれ、何のめぐり合わせか鶴見ハジメの手に渡ったのである。

「あの子よくケガするからさ。お守りにって渡したんだけど」

確かハジメが七歳の夏であった。

ついに妹が生まれたぜとはしゃぎすぎたハジメは病院へと急ぐ父の車の窓から体を乗り出して、病室への一番乗りを決めこもうとしていたのだった。

『おいおい、落ちちまうぞ』

父には予言の才能があった。

そのまま杏奈と同じ病院に運び込まれたハジメは数週間身動きひ

とつできないままに過ごす。

もちろんベッドから出るのは千晃の方が早かったわけで、生後間もない妹の目に明らかかな軽蔑を見たのは、いずれ彼女にダメあにき呼ばわりされる運命の暗示だったのかもしれない。

『Yippe—ki—yay, motherfucker』

暇で見ていた映画でダイ・ハードを知る。ジョン・マクレーンという名前のデカがナカトミタワーでガラスと銃弾を浴びながら、妙にキアラの立ったテロリスト達をピストルとジョークでばったばったとなぎ倒す痛快なアクションムービーだ。

マクレーンは一見ただの小汚い中年のくせしてタフで強くてかっこよかったが、とりあえずガラスで足を踏みぬいたのは痛そうだった。

七歳なら現実と非現実の境界が見えてくる年頃だったので、もちろんそれが映画であり、フィクションであることは重々承知していた。人生どれほど曲がり間違っても燃えるビルの中でガラスと格闘するなんて馬鹿な目を見るまい、ということも。

『えびかえー、まぎふあかー』

セリフの響きは気に入った。しかし意味は分からず。

ぼんやりとマクレーンの決めゼリフを呟きながら二十週目のダイ・ハードを見ているハジメの前に、杏奈は穴のない五円玉を差し出したのだった。

『ほれ。持っときなよ』

と。

「懐かしいなあ」

まだハジメが素直だった頃の思い出に杏奈が浸っているうちに二階は静かになっていった。

「あにきは絶対に渡さないと思うけどね」

「いや、確かに。ぼんと渡したのは失敗だったなって思うんだ」

それでも何が楽しいのか余裕の表情を浮かべてコーヒーを飲む杏奈。千晃は不快げに鼻を鳴らしてクッションに顎を埋めた。会話は途絶えた。

時々聞こえるのは父が新聞をめくる音。コーヒーマーカーがごぼごぼと鳴る傍から、あんなもん泥水だぜいと言ってはばからない千晃でも思わず心がそよぐような芳香が鼻をくすぐっていく。

胸いっぱいはその香りを吸い込んで千晃は目を閉じる。幸せだ。暖房が効いていて心地よい。もう少ししたら部屋から毛布を持ってきて少し眠ろうと思う。

一見すれば家族が揃った、静かでかなり完璧な午後情景。

千晃の頭はいくらかぼんやりしていた。毛布は後回しにしようせうしよう。ちよつと眠つてからに、

「あつはあああああつ、そうだ！」

いつだって鶴見家の静寂をぶち壊してきたのは杏奈であった。

千晃が唸るよりも早く怒りを顕にしたのは父だ。新聞をぐしやりと畳んで傍らに置くと、二人を交互に見て笑う杏奈を忌々しげに睨めつけた。

「お前な、いい加減にしろよ」

「いやいやすっかり忘れてたよ。ガレージにアレ、まだあるかな？」

大股にリビングを立ち去った父がしばらくして何かを手に戻ってくる。ぶつきらぼうに投げられたキーを危なげなくキャッチして、杏奈はいたずらっぽくにひひと笑った。

「ありがとおー。これで明日からバリバリ騒いでやるもんね」

ここまでもう十分すぎるほど騒ぎを引き起こしてきた女は、それでもまだまだ足りないに見える。ひよつとすると、ここまでの一部始終も準備運動に過ぎなかったのかもしれない。

3 『14日(上)』

ぼりぼり。

クラスメートに義理義理と念押しされて渡されたチョコレートが今日の昼食だった。

『勘違いしないでね、義理なんだから！ いやホントごめん。マジ義理。嘘でも本命って言っただけだ。いんだけど無理なものはその——ええと、つまり、義理だからね！』

そこまで言わなくてもいいじゃねえかよとツッコむ気力はもうなかった。

陸に打ち上げられた魚のようにぐったりと机に覆いかぶさったまま、ハジメはひたすらチョコを消費していく。

もちろん彼の疲労困憊ぶりには理由がある。

ここ数日にわたる幽香との偽装恋愛生活でハジメは身も心もズタボロだ。

何しろハジメの母ちゃんは神出鬼没で、いつどんな気の緩みがウソの発覚に繋がるかも分からない。そういうことで、幽香との関係は学校でも演じ続ける必要があった。

『はい、あーん』

ある日は弁当をすべて幽香のあーんで食べさせられ。

『恋人っていったら、やっぱりお姫様抱っこよね』

またある日はいつかの夜のごとくひよいと持ち上げられ、白昼、学校から家までの数キロの道のりを降ろしてもらえずに晒し者にされる始末。

千晃の莫大なキワモノ少女漫画の蔵書で完全に間違った恋愛のかけ、着実に鶴見ハジメのヒットポイントを削っていった。

「せめて今日だけは、平和であってくれ」

かすれた声は心の底からの叫びだった。

ホワイトチョコから頭をのぞかせたドライフルーツのイチゴをかじって、ハジメはふつと笑う。このスカスカで奥歯に挟まるイチゴの

酸味が、疲れ切った心にあてがわれる包帯のようではないか。それほどチョコが好きでないハジメも、思わずハマリそうだ。

今日はバスが普通に動いてくれたおかげで遅刻の危機はなかった。サイフは落としていないし、奇妙奇天烈な襲撃者もこのところは見れていない。例年通りにチョコレートはすべて義理だった。

ハジメ自身、ウソなんじゃないかと思うほどに万事平穏な一日。波乱に満ち溢れたこれまでを思い返せば、たかだか弁当を忘れたことくらい、そよ風のような出来事にすぎない。

チョコでいい。俺の昼食はこの際チョコレートでいい。だから、これをかじって飢えをしのぐことが今日最大の不運であつてくれと、ハジメが祈るように残りのチョコを口の中に放り込んだ刹那であつた。

「ハジメ、話があるんだけど」

そいつの登場にハジメはつい、深々とため息をついていた。やっちゃまったと渋い表情を浮かべる彼を見下ろして、江梨香は目を細める。

「話って、ユキのことか」

「正直に答えてね。ハジメ、ユキに何があつたのかホントは知ってるんでしょ。どうして隠そうとするワケ？」

「まただ。」

数日前に同じ質問で二人の間に険悪な雰囲気漂って以来、このやり取りを数え切れないほど繰り返してきた。

江梨香は雪之丞のことを聞き出そうとする。ハジメはほかでもない彼女のために、かたくなに知らぬ存ぜぬを貫く。その態度に一層イライラを募らせた江梨香の口調は日を追うごとに刺々しくなっていく。

ハジメも、そんな負のスパイラルにいい加減うんざりし始めていた頃合いだ。

「大体、どうしてそう思うんだ。俺はあいつが消える前、ずっと休んだんだぜ」

「ふうん。それで、一週間も休んで何してたワケ？」

「そんなどうでもいいことを知ってどうする」

「どうでもいいなら教えてくれるよね」

「くだいな」

目を見開いた江梨香を前に、ハジメはまたまた口をついて出た憎まれ口を後悔する。

おまけに今度は追い打ちをかけるように舌打ちまで吐いていた。苛立つてるのはハジメだって一緒だ。そろそろ我慢が出来なくなり始めている。

「そんな——風に、言わなくたって」

しかし、江梨香の悲しげな表情はほんの一瞬のことだった。

「親友なんですよ。自分で言ってたよね。結局、口だけだったってこと」

今にも飛び掛からんばかりの剣幕に、思わずハジメはイスを引いていた。

「そういうことじゃない、けど」

親友に嘘をついている後ろめたさもある。返しの言葉は歯切れが悪い。

「じゃあどういふことなのかしら？」

口開いて、また閉じて。

結局は彼女をなだめるための言い訳しか浮かばない。そんなハジメの様子を見かねて、江梨花はさっさと踵を返した。

「もういい。それじゃ」

「ま、待てよー」

これ以上彼女をがっかりさせたくなかった。だからこそハジメは反射的に彼女の手を握っていたし、乱暴に振り払われるまでよほどの力を出していたことに気付かなかった。

「……痛いってば」

嫌な感触が指先に残っていた。爪で引つかかれた手の甲を抑えた江梨花は、一瞬だけハジメに軽蔑の目を向けるとさっさと行ってしま

——おいおい、やらかしたな。

最悪の場面で最悪のコトをしでかしたと気づいたのは、江梨花が廊下に飛び出してからだった。よろよろと机から立ち上がって恐る恐る廊下へと踏み出したハジメの前には、もはや見慣れた微笑みがあった。

いつも彼女が漂わせる花の香りの中に、今日はなぜかガソリンの匂いが混じっている。

唐突に現れた幽香は、何かを後ろ手に隠し持っているようだった。

「お弁当、届けに来たのだけれど」

ぞくりと、悪寒が背筋を貫いた。

数日間さんざん苛め抜いてくれた彼女が今になって素直に弁当を届けにきたはずがない。

はじかれるように正反対に走ったハジメは窓枠に足をかける。

と、既にその襟首をがっちりつかまれていることに気付くのだった。

「ハッピーバレンタイン。ハジメ」

振り向けば目尻から腹黒さが染み出すような完全無欠の非人間的微笑と、彼女が掲げ持つ巨大な弁当箱。そいつを促されるままに手に取って、あまりの重さにハジメはそのまま取り落としかけていた。

「落とさないでね。割れちゃったら大変」

「割れる、だって？」

早く開けてと促す幽香の肩越しにイヤでもそいつのにやけ顔が見える。鶴見杏奈。ハジメの母はどうしてか、ぴっちりとした黒のライダースーツを身に着けていた。

「見てみなよ。すごいんだからさ」

ずっしりとした重みは到底弁当のそれではない。

加えて恐ろしいことに、この弁当箱は恐ろしいほど重心が安定している。普通ならおかずやらごはんやら、デザートやら。そういったものをいくらぎちぎちに詰めたところで材料自体の重さで多少の偏りがあるはずなのに。

「あ、開けようぜ。鶴見」

背後からハジメの手元をのぞき込むクラスメートたちも、傍目にこの弁当箱の異様さを感じ取っているらしい。固唾をのむ音がそこかしこから聞こえる。

蓋に置いたハジメの片手が小刻みに震えている。

「まったく、相変わらずへたれちやってるねえ」

なかなか開封に踏み切らないハジメにしびれを切らしてか、杏奈が肩をすくめた。

「いいかい。幽香ちゃんはね、今日わざわざ早起きして——」

「もう。それは言わないって約束したわよね」

意を決して恐る恐るアルミニウム製の見慣れた容器を開け放って、ハジメは目を疑った。

黒かった。

真つ黒だった。

一瞬、目の前の妖怪が暗黒でも捕まえて中に閉じ込めたのではないかと疑ったほど、弁当箱の中身はただただ黒かった。

「本命よ。心して食べてね」

今日はバレンタインデーだ。

彼女の言葉を聞いた上で目を凝らせば。可視光線を丸ごと吸収してしまいそうなほどに黒いチョコレートがそこにはあった。どよめきがクラス中に波及していく。

「ちゃんと二段目もあるの」

さすががしく笑った幽香の言葉がとどめを打ち込んでくる。

もはや弁当の全容を確かめる気力すら失ったハジメから弁当箱を取り上げて、彼女はそれを目の前に突きつけてくる。

「二色並ぶともっときれいだって杏奈が言うから」

そこはホワイトチョコの海と、そしてなぜか端っこに詰め込まれた小さな塩鮭のみ存在する世界であった。

「お、お前、やっぱりあのこと、まだ怒ってるだろ」
鮭。

霊夢との一件を経て、もはやPTSDものの出来事をフラッシュバックさせる魚の姿を見た瞬間、ハジメはすべてを理解する。

——押し倒されたこと、まだ忘れてないからね。

幽香は無言で一層魅力的に微笑むだけだ。

「無理だ。できるワケがない」

目の端がけいれんしている。つくづく体は正直である。

「そう。それならいいわよ」

ハジメはかえってその言葉に身構えた。ここまでしておいて、あっさり幽香が諦めるはずがない。案の定、間髪入れずに彼女は耳元に口を寄せてきた。

「あなたのウソ、ここでバラしちゃおうかな」

ハジメが何か言い返す前に、幽香は弁当袋の中からスプーンを一本取り出すとハジメに渡していた。断るなんて、ハジメにそんな選択肢は存在しないのは明白だ。

大嫌いな母親に、とつきについた強がりのウソ。そいつをこの場でバラされでもしたら、あまりの恥ずかしさと悔しさで鶴見家には引きこもり二号が誕生することになりかねない。

「いつ」

「いつ？」

幽香が愉しそうに首をかしげる。

チョコレート&チョコレート。ミーツ塩鮭。午後の胃もたれは確定した。ハジメは決然とスプーンを強く握りしめる。

「い——いただきます。よろこんで、食べさせて、いただき、ます」

「ういふふ」

いい子いい子をされつつ、もはやハジメは彼女の手を振り払う余裕など忘れている。この悪夢の塊を平らげないことには明日はない。

「たとえ召し上がれ」

ついに耐え切れなくなった杏奈が、爆笑しはじめた。



「ういふ」

早速右ほほに新しいニキビが顔を出していた。

あの黒と白の悪魔をどうやって攻略したのか、よく覚えていない。

彼が気付くと恐ろしい倦怠感のなか、目の前には空になった弁当

箱。そして笑い転げる杏奈と、満足そうにハジメの頭をなでる幽香。

『ああ、今日は幽香ちゃん借りるから。一人で帰ってね』

息子の恋人にバイクの乗り方を教えてやると杏奈は言っていた。

またもや不穏な出来事の予感しかしない危険発言であったが、今更ハジメに何ができようか。

二人を見送ってからクラスのいたたまれない空気から逃げるようにして屋上に来て、ようやく人心地がついたようだった。

「ぐえええぶ」

それにしてもげつぶが止まらない。

飛び降り防止用の背の高いフェンスに体を預けて、ハジメは深呼吸してみる。吹きすさぶ春一番に目を細めつつも、やはり遠ざかっていく銀色はよく映えた。

杏奈の自慢だった大型バイクのハンドルを握るのはおそらく幽香だ。つくづく適応が早い。

「にしてもあいつ、免許持ってねえだろ」

もう一度げつぶをして座り込むと携帯を取り出す。

既に何通か江梨香にメールを送っていたが、いまだに返信はなかった。とはいえ直接話をできるような雰囲気でもなかった。

とにかく、先の会話で完全に関係がこじれてしまったのは明らかだ。

「今日はずいぶん辛気臭い顔してるのね」

屋上に現れた新たな影。

彼女が身につけたものはハジメの学校の制服だった。

さも当たり前のように、既に幽香によつて倒されたと思い込んでいた相手が現れたので、ハジメは思わず自分がどうするべきかを見失ってしまう。

「どうしてお前が」

ようやく我を取り戻したハジメが心臓を跳ね上げるころには、すでに霊夢はその隣に腰を下ろして、持参した購買部の袋をがさごそとやっていた。

「別に今日はドンパチやりに来たってワケじゃなくてさ。あんたとい

ろいろ話がしたいと思って。紫に頼んでこんな動きづらい服まで用意したんだけど——ねえ」

横っ面に突き付けられたハジメの指先を見つめて、霊夢はあきれたように笑った。そつと彼の手を握って、燃える指先を自分の額に押し当てる。

ハジメの肩が震えた。

「お前の言うことなんて、信じられるかよ」

同じく、その声も震えている。

「本来私はそう何度も何度も負けていい立場じゃないの。だからしばらくは様子見と充電期間ってかんじ。それでも私と戦いたいならどうぞ?」

霊夢に離されるなり、ハジメの手はするりと下げられた。

それから霊夢もハジメも動かないまま、しばらくにらみ合いが続く。離れたところでフェンスにとまった数匹のカラスだけが、このやり取りを見守っていた。

やがてよろめくようにフェンスに体を預けたハジメ。霊夢は小さく頷いて、ビニール袋の中から紅茶の紙パックを取り出す。

「ありがとう。じゃあさっそく一つ目の質問ね。あんた、幽香をどうしたいワケ?」

とうの昔に町の方角に姿を消したバイクを探すように視線を走らせたハジメの隣で、霊夢はちゅうちゅうとストローで紅茶をすすっていた。

「正直、殺し合いなんてする気はないんだ」

ハジメが隣を見ると、眠た眼で霊夢はストローをくわえたままだった。風が吹く。彼女の足元でレジ袋がかさりと濁いた音を立てた。

「で?」

「あいつと何とか仲良くなつて、わーい争いなんてバカバカしいよねって感じでき。それで解決。だろ?」

「いいわね。バカっぽくて」

霊夢は目に見えて、軽蔑の色を隠そうとしない。

「あんたは女の子との約束も守れないような、ひどいヤツなんだ」

その言葉にはハジメもカチンとくる所があつたが、ぐつと堪える。紙パックを無造作に投げ捨ててしゃがみこむと、彼女は袋を漁り始めた。中身は菓子パンやらスナック菓子やら。例え異世界からやって来たとはいえ、女の子の興味の向く先は大体同じだ。

「霊夢は幽香のダチだったんだろ？」

——ああ、また言っちゃまったじゃねえか。

霊夢も感じるところがあつたようで、不思議そうな顔でメロンパンを手に立ち上がると小首を傾げた。やつちまった渋みを顔に浮かべたまま、ハジメは改めて口を開く。

「誰も死なないオチの方がいいに決まってる」

「まあね。そうだろうけど」

受け答えしつつ、ハジメは高校受験の面接を思い出す。何を言っても手応えがない感じ。一分一秒一句一言ごとに相手の不興と失望を積み重ねていく錯覚。これはよく似ていた。

霊夢は彼の言葉に何一つ納得していない。

「いいよ。じゃあ次。あんた、このあたりでクジラを見てない？」

「鯨？」

「そう。めちやくちや大きいやつ」

こーんな。と霊夢は両手を広げて見せるのだが、陸の上で鯨などと、ハジメにはそれがタチの悪い冗談にしか思えない。霊夢は霊夢で自分の子供っぽい仕草に気づいたらしく、僅かに顔を赤らめてそっぽを向いた。

「ま、見てるはずがないか」

その場に座り込んでおくもくとパンを食べ続ける霊夢は、もはや口など開く気もないくらいではないかと思わせるほどげんなりとした表情を見せていた。

「ユキは元気？」

「うん。一応は。肉体的には完璧に死んでるようなものなんだけけどね」

ぽいと投げた質問にさらっと常軌を逸した答えが返ってきたのは

これが最初ではない。

だが『親友は死んだけど元気にやってるよ』と言われてああそう良かったねと返せるほどにハジメは非日常に染まりきってはいない。

「あいつと戦ったんなら見たんでしょ、胸のアレ」
嫉妬の炉心。

雪之丞の能力の源であるそれから魔剣が抜き放たれた瞬間が、つい今朝見た夢のように脳裏に踊る。彼に触れた時の異様な冷たさも。

「吸血鬼なんてみんな半死体だけど、ユキは相当な変わり種よ。能力の代償として失った心臓を、吸血鬼の生命力でなんとかしている」

もし彼が人間に戻ることがあったとすれば、それが死ぬ時なのだろう。

もはや夜の世界にしか生きられず、ヒトとしての生を願うこともできない。幽香を巡る嫉妬心が、彼をそこまで取り返しのつかない場所へと突き動かしてしまった。

「なにもかも幽香と出会っていなければって、思ったことはない？」
フェンスを握るハジメの手が、わずかに強ばった。

「あるさ。実際何度も何度も後悔してきた」

嫌いになろうと努力したこともあった。

自分を殺すという彼女の存在を許し、家族として迎え入れ、未だ同じ屋根の下で暮らしている。ひどくいびつな関係であることは、ハジメでも理解はしていた。

「それでも一緒にいるのは何故？　もしかしてあいつのコトが好きになっちやった、とか？」

「そうかも、しれない」

菓子パン袋の音が止んだ。

「……悪いかよ。それで」

不意に訪れた沈黙を彼がどう受け取ったかなど、霊夢にとってはどうでもいい。

今のは唯一彼女にとって予想し得なかった返答だった。小さな小さな動揺を隠すように紅茶を探すが、それはずいぶん前に飲み干して足元に転がしている。

「あいつのことは、嫌いになりきれない」

決して恋とか愛とか、そんなむず痒い感情ではないと思いたい。それでも彼女との間に不思議な絆は感じている。面と向かって礼を言ったことも、謝ったことも、数える程しかないが。

「だからお前のダ、友達、は絶対に死なせないし俺も殺されないさ。まだ方法はいくらでもあるはずだ」

「はは」

せせら笑って、霊夢が気づけばおろしたてのスカートの裾をぐしゃぐしゃに握り締めていた。

それでも彼女の表情は姿を現した瞬間からさほどの動きを見せていない。一方で彼女の指先は偽りのない感情を物語っている。

「どうあがいても道は二つっきやないわよ」

つとめて、その声は平静だ。

「幽香を殺す、みんなを助ける。幽香を生かす、あんたは一生後悔する」

「みつつ目。幽香は死なない。みんな幸せに生き続ける」

ハジメは照れを隠すようにフェンスの外へと視線を向けた。気配で霊夢が腰をあげたことを知りつつも、最後までその顔を見ることはできなかつた。

「俺の言ったことがオカシいつてんなら好きに笑えよ」

「笑えない。救えなさすぎて、笑えないわ」

次第に彼女の足音は遠ざかっていく。

「あいつが最後に花の育て方を間違えるなんて。とんだ皮肉よね」
ぱたん。

屋上のドアが静かに閉まった音を背中で聞いて、ようやくハジメは緊張をほぐした。

霊夢の言葉は相変わらず謎めいてはいたが、それでも言っただけのこととは言えた気がする。

捨てていったのか忘れていったのか、ハジメの足元には霊夢の持ち込んだビニール袋が転がっている。新品のお茶のペットボトルを拾い上げて、ハジメはつと考えた。

——ま、いいか。
渋味のきついお茶を一気に流し込む。
甘甘地獄の後では、いい口直しだった。

4 『14日(下)』

夕日にきらめく波間に、幽香はずっと目を奪われていた。

高速のパーキングエリアからではせつかくの湾もビルの影に切り取られていくぶん小さく見えるものではあるが、それでも彼女には関係ないようだ。

「海は始めて見るのかい」

ここまでの長い道のりを頑張ってくれた愛機のタンクをねぎらうように撫でる、ハンドルにヘルメットをひっかけて杏奈は幽香に並び立った。

「そうね」

「今時珍しい」

上の空で答えた幽香の瞳には少女じみた輝きが宿っている。所感を言葉に組み立てる時間ももったいない、といった様子だ。

揺れ輝く海が、幽香の目には遠く遠く幻想郷の地にかつて根付いた向日葵畑のように映った。思わず手を伸ばしかけて、幽香は杏奈の視線に気づく。

「この先のインターで高速を降りて、30分も走れば浜までいけるよ。どうする?」

意気揚々と踵を返しかけて、幽香は瞑目した。

ここまでの道のりがおよそ2時間。そして行き帰りの分を考えれば、口惜しいことに時間切れだ。

彼女には鶴見家の台所を担うという使命がある。腹を空かせたハジメや千晃に好き放題宅配寿司やらピザやらを頼まれてはたまったものじゃない。

鶴見家の財政面も栄養面も、正しく把握しているのは幽香だけなのだ。

「ハジメにご飯を作ってあげなきゃ」

「そっか。じゃあ海は我が息子と一緒に行くといいさ」

けらけらと笑って杏奈は近くの自販機へと向かう。今まさに真っ赤な太陽を飲み込もうとする金色の海を見つめながら、幽香は疑問を

放った。

「杏奈はどうしてあの家を出ていったの？」

こぼれた小銭を拾おうとかがみ込みながら、杏奈はああ、と短く答えた。

「家族だからさ」

未だに絆があるからこそ、杏奈は家族を置いて家を後にした。

数百年か、ともすれば数千年か。考える時間は果てしなくあれど、生涯の大部分を家族といったものに一線を引いて過ごしてきた幽香がとつきには掴みきれない回答だった。

「ちよつと難しかったかな」

幽香が手渡された珈琲缶を掌の中で転がしながら考え込んでいると、杏奈は妖怪の心にぽっかりと開いた空隙につけこむように微笑んだ。

「本当はハジメの恋人でもなんでもないんだろ？」

「あら。気づいていたの」

怒るでもなく、杏奈は夕日に目を細めた。

「キミは猿芝居が嫌いそうだったからね。早めに切り上げさせてあげようと思っ、あちち！」

杏奈は缶を口に運んだそばから中身の熱さに舌を突き出してひいひいとあえいだ。

目尻に涙すら浮かべる妙齡の美女に、しかし幽香は底知れぬものを感じざるを得ない。いかに生きた年数で勝ろうとも、彼女の飄々とした態度を前に気を抜けばいつでも容易くお手玉にされてしまいそうだった。

「はい。そこで質問なんだけどさ」

手すりに持たれたままの幽香は小さく頷いて、杏奈に先を促した。

「恋人でなければ友達ってワケでもない。だったらどうしてキミはあのどーしようもない家について、どーしようもない息子の面倒見てくれているんだい？」

「家族だから」

同じ言葉を吐かれて杏奈は面食らったようだが、しばらくの沈黙の

うちにかつかといつもの特徴ある笑い声を上げた。

「ハジメが私は家族って言うてくれたのだけれど。おかしかったかしら」

それはもともと、鶴見ハジメに殺し合いを取り付けるための約束でしかなかった。しかし今は違う。

「あいつめ。そんなことを言えるようになったのか」

トラブルメーカーで、その上自分を殺すと宣言した相手をハジメは一家に迎え入れた。だったら幽香もそれだけの覚悟を払った彼を家族として認識する。それは僅かな差であつても、彼女にとっては大きな意味がある。

「家族だつたら家族の問題は捨て置けない」

それつきり。片方は夕日に輝く湾を、もう片方は街灯に薄鈍く照るバイクを見据えるだけに時間が経過する。杏奈はたまに何かを思い出すように、口の端を緩めたり締めたりしていた。

「そうだね。うん、すごく頷ける。でも困つたなあ」

しゅぼつという音とともに杏奈の口元に明かりが灯った。

耳に快いオイルライターの開閉音に次いで流れてきた紫煙を避けるように、幽香は身じろぎした。

「最初に千晃が引きこもつてさ。次はあのバカ亭主の職場がおかしくなつた。さつさと辞めちまえよつて言い聞かせてもあのバカ耳もかさない。そうこうしているとハジメもハジメで思春期こじらせてさ――ああ、ケムリ、嫌いだった？」

「気にしないで。それで？」

「んで。この私も珍しく必死になつたんだけれどねえ」

杏奈はあれやこれやと手を尽くした。

千晃には根気強く接したし、ハジメにだって多少暴力的な形だったが愛は教えたつもりだ。その結果たるや虚しいもので、何も変わらないどころか状況は悪化の一途を辿る。

そこで杏奈は気づいてしまった。

「うっわ。こいつらかえつてダメにしたの私じゃん。つてさ」

気づけばみんな杏奈に頼りきり。

結局は何も変わってはいない彼らを放り出して自分の足で歩ませる。それが家族として杏奈の下した判断だった。

「ああ、これは確かに困ったわね」

ようやく杏奈の言葉の意味を理解して、幽香は手すりに体を預ける。

「私は家族だからあの家を離れた。幽香ちゃんは家族だからあの家を離れられない」

限りなく同じ立場でモノを見ながらも、成した選択はまったくの正反対。

杏奈の選択がすべて正しかったと言えないくらいに、今の幽香は自分の行動が正しかったのか悩ましいところだ。

千晃は部屋を出て、ハジメは野望と呼んではばからない夢をあらわにした。いずれ父の問題もカタがつくだろう。それでも、一度降って沸いた不安はぬぐいがたい。

——私がしてきたことは、本当にハジメたちのためになったのかしら。

「どちらが正しいか分からないのならいっそ、勝負で決めようか」

杏奈は反動をつけて柵から体を離すと、軽い足取りでバイクへと向かい、ヘルメットを取る。

「あの石頭言いくるめて、月末まではなんとか居座ってみせるよ。それまではお互い何をしようと自由。私が家を出て行く前に、私が要らないってことをあの子達が示してくればキミの勝ち。どう、やる？」

帰り道の運転のじゃんけんしようよ、と拳を突き上げる杏奈を見て、幽香はとことんわけのわからない女だと呆れるばかりだ。だが杏奈の言う勝負、確かに興が乗るところではある。

「言っておくけれど、私、勝負に負けたことなんか一度もないの」

その言葉を証明するようにジャンケンに先手必勝のパーで応じると、幽香はさっさとヘルメットを受け取ってハンドルを握る。その腰に杏奈の手が回る。

「ふふん。楽しくなってきたねえ」

威勢良くエンジンを吹かしながら、一度だけ幽香は海を振り返った。太陽は既に水平線にかかった薄い光の帯でしかなく、黄金のきらめきは遠い。

まるで彼女のひまわり畑が手の届かない場所へと遠ざかっていくようだった。



「お姉ちゃん？」

はっとした。

勝負のことを思い出しているうち、知らず知らず手に力が入り過ぎたようだった。

幽香に抱かれて眠っていた千晃が目を覚まし、不安げに見上げてくる。

「ごめんなさい。起こしちゃったわね」

ベッドから起き上がって、幽香は改めて千晃に毛布をかけてやった。

「ちよつとお水、飲んでくるわね」

「う、ん」

消え入りそうな千晃の返事が引つかかって、幽香はドアノブに手をかけたまま振り向いた。明かりを点けることがどうにもためらわれる。

幽香には千晃が、それを望んでいないような気がしたのだ。

「どうしてアレもコレも、うまくいかないんだろうね」

窓から差し込む月明かりの中で千晃が上半身を起こす。毛布を頭から被ってふらふらと揺れる姿は、まるで子供の描くオバケのようだった。

幽香はベッドまで戻ると、幽霊もどきの頭をそつと撫でてやる。

「あなたはお父さんとお母さん、どちらが好き？」

「どつちも好きじゃない」

清々しいほどの即答である。

いささか予想外の答えに幽香の手が止まる。毛布から頭だけ出して、千晃は薄ぼんやりと光る幽香の瞳を不思議そうに見上げた。

「どうして?」

「お前たちのタメってケンカしてばっかりなもの。お父さんだけでも、お母さんだけでも、私はイヤ。みんな揃ってようやく、私はこの家が好きになれるんだと思う」

指をくわえて事態の悪化を見守ったものなどいない。

父も母も、もちろんハジメや千晃自身でさえ。皆が必死だった。だというのに、結局は何一つとして上手くいかないままに鶴見家は空中分解しようとしている。

そこに新しく加わった幽香のすべきこととは。その答えは一体どこにあるのだろうか。

「きゆうくつだよ。ホント」

答えを欲する千晃の瞳に映る妖怪の姿。

なるべくヒトらしい模範解答を探して、幽香は答えてやる。

「あなたたちを愛しているから、ケンカしてくれるのだと思うわよ」

こてんと横倒しになって、千晃は天井を睨んだ。

兄譲りの鋭い目元。その半分は眠気に飲まれて、もう半分は不安に呑まれて。彼女の吐き出す言葉は、ひどくとりとめがなくなり始めていた。

「なんていうかき。頭の奥に消化できない雲がもやもやつかえたようなカンジ、すぐくイヤなんだ。どう言えばいいんだろ」

千晃らしい珍妙な例えではあるが、幽香にはすぐに言葉が見つかった。

例えば長い冬を越してくれた花がすぐ散ってしまうとか、ある日突然世間との折り合いがつかなくなるとか、家を出た瞬間トラックに轢かれるとか。

それは、ちよつとやさつと考えたくらいでは及びも付かないようなところにいるヤツが暇つぶしに投げてくる石つぶてのようなもの。

「理不尽」

かくいう幽香もコイツとは長い付き合いだ。

「ああ、うん。そうだ。リフジンだ。リフジンっていうんだよね」

千晃は微かに声を上げる。

よほどしつくりきたと見えて、彼女は幾度もその名を繰り返していた。

「お姉ちゃんはすつごく強いから、きつとそんなもの、関係ないんだろうけど」

羨ましそうに呟いて千晃は幽香の手に鼻面を押し当てた。

彼女の纏う花の香りを胸いっぱい吸い込んで、ようやく安心したように目を瞑る。傍目には実の姉妹のようだった。

「それでもないわ。悩みばかりよ」

「お姉ちゃんが？」

すぐに幽香は取り繕うような微笑みを浮かべた。

「それじゃあおそろいかな。なんだか、嬉しいな」

大あくびをかました千晃が二度目の眠りに落ちるまで、もはや秒読みだ。最後に千晃の頭をひとなでしてやって、幽香は暗い廊下を電灯も点けずにひたひたと歩く。

「幽香か」

台所でコップを手にシンクを前にしたところで、幽香はようやくテーブルに突っ伏した青年の存在に気づいた。

「また風邪ひいちゃうわよ」

枕がわりの腕を解いて立ち上がると、ハジメはのびをした。

深く考えるということをようやく覚えた彼が、思考の堂々巡りの末に眠りに落ちたことは想像に難くない。

「明日、学校をサボる計画立ててき」

いつもよりカルキ臭い水に顔をしかめながら、幽香はまず唇を濡らした。

「それで何をするの？」

息を止めて幽香は一気にコップを傾ける。

シンクの頼りない光を放つ蛍光灯の下に彼女の白い喉がいやに艶かしく見えて、ハジメは無意識に暗がりへと視線を逸らしていた。そうすると一層意識させられるのが拳の中に隠した血濡れの包帯で、彼の自己嫌悪はより一層強まるだけだ。

「幽香は明日の予定ってある？」

そんな自分を振り払うように口を開いた彼の声は、ほとんど裏返り
そうなくらい不自然に明るかった。振り返った幽香は訝りを隠さず
にハジメの顔を見つめた。

「いいえ。お弁当を作らなくていいならのんびり寝坊しようと思うの
だけれど」

「弁当はいつも通り作って欲しいんだ。明日はあんたの分も。イヤっ
て言うならそれでもいいんだけど」

ますます幽香にはわけがわからない。

じいっと見つめる彼女の前でハジメは腕組みして、解いて、落ち着
きなく視線を彷徨わせて。

観念したように幽香に向き直ったとき、彼の頬にはうっすらと朱が
さしていた。

「……明日一日、俺に出来ないか」
「え」

それはいい加減告白しようとしていた『ウソお母さんにバレちゃっ
たわよ』が喉の奥に引っ込んでいくほどの衝撃だった。

「それはデートのお誘いってことで、いいのかしら」

瞬時に顔を真っ赤にして俯いたハジメに歩み寄って、幽香はその顔
に触れる。まるで医者が新種の感染症でも見つけたかのように、ハジ
メの頭をぐりぐりとあちらこちらの方向に捻って検分する。

それほどまでに、へたれの口が紡ぎ出した唐突な一言は幽香をびっ
くりさせたのだ。

「驚いた。あなた、本当にハジメよね」

「う、うるさいな。それで、どうするんだよ」

似合わぬことを言っているのは本人とて百も承知といったところ
か。

とはいえ恋人ごつこの延長戦として彼が計画したものなのか、はた
また長い付き合いで彼がすっかりおかしくなってしまったのか。

幽香にはそれを判断するだけの材料がない。

「コイビトの誘いを無碍にできるはずがないでしょ」

だが、とにかく面白くはなりそうだ。ふっと笑って、通り過ぎざま

に幽香はハジメの頭を撫でた。

「ふふっ。それじゃあいつもより早起きしなきゃね。やれやれ」

「ありがとう」

心底安堵した様子の子のハジメに、幽香も自然と笑みをこぼしていた。



—— ゆらーりゆらり

少々、今宵は長く泳ぎすぎてしまったのかもしれない。

酔っ払ったようにふらつく巨体でヒトの建造物をなぎ払いながら、彼は奔放に暴食を繰り返していた。降り注ぐ破片で地上にはそれなりの被害が及んでいるが、彼が知ったことではない。どうせいずれは彼の胃袋に収まるのだ。

ぼりぼり。

道端にばらまかれた色とりどりの鉄塊を拾い上げては口に運び、ちよっとした気まぐれを起こしては普段は口にしない金物をかじってみたり。

ぼりっ

やはり、長すぎたのだろう。

泳ぎすぎたのではなく、彼そのものが長らえ過ぎてしまったのだ。

一体の敵も許さず、手を出されぬままに悠久を泳ぎきり、そして今や、彼はひとつの岸边にたどり着こうとしている。

ぼりっぼりっぶちゅっ。

奇妙な歯ごたえに、彼は宙を打つ尻尾を休めた。

小骨でも噛んだらうか。それにしてもやけに鮮烈で、やけに甘酸っぱい。鉄よりも鮮度のいい、鉄の味。滴るような、赤い味がする。

—— ゆるりらゆらり

大きな舌と小さじ一杯ほどの脳みそをフル稼働させて、彼はその味に没頭する。

何を噛んだ？ 何を潰した？ 鉄の中に紛れていたのか？

今の今までそんなハマをしたことなど、一度もなかったというのに。

かつて彼が忌避したその味は、今、なぜか悪魔的に甘い。その理由

がなんであるにせよ、今日は誰も彼もが待ちわびたバレンタインデーだ。

偶然拾い上げたチョコレートの中にイチゴが二、三紛れていようと、それはさしたる問題ではない。とある青年がそうであったように、彼も今ではすっかりその味の虜だ。

ぶしゅつ、ぐちやつ、ばりつ、ぐちやつぶつぶつ、ばりばりばり、ごきゅつ――

もう、ゆるゆらと泳ぎ回る必要はない。彼は彼の岸边を見つけた。そこから先に広がるのは、ひたすらに――馳走が敷き詰められた黄金の大陸だ。新しく覚えた味を噛みしめながら、彼の濁った瞳は既に別のチョコレートを地上に探している。

彼の暴食と悪食を咎めるものは存在しえない。バレンタインは、残酷なくらい誰にだって平等なのだから。

ぼりつ。

第十二話『14日』おわり

5 『錆びた鯨のはなし（上）』

銀の車体が春の陽気に輝いている。

F市の近郊。スロットルを全開にして畑と田ばかりの風景を荒馬のように駆け抜けていくバイクの後ろには、長い悲鳴が尾のようについて回った。

「叫んでばかりじゃなくて、もっとしっぴかり掴まらないと。落ちたら大変よ」

法定速度は一体何キロだったか。

ぶつからなければよかろうなのだの勢いで時折対向車線にすら飛び出していく幽香の神経を疑いつつ、ハジメは幽香の胴に回した腕にいつそう強く力を込めた。

体を密着させることに文句を言うのは家を出て一キロ走る前にやめている。たった一日で運転をマスターした無免許妖怪のハンドルさばきはどこまでも上手だったが、同時に途方もなく攻撃的であった。

「杏奈のやつ、一体全体どんな教え方しやがったんだ」

悪夢のようなツーリングをそれからしばらく続けていると、二月の枯れ畑ばかりのなかに、突如としてその色彩が現れた。

「ふうん。あれが遊園地ってやつなのね」

ヘルメットの中で涙と冷や汗をブレンドしながらハジメは小さく頷いた。

季節変わり目のやや強い風の中、くたびれたように浮かぶアドバロンに白抜きで書かれた文字が近づくにつれて読み取れてくる。

『めるびるアイランド』

何を隠そうこの遊園地のモチーフはハーマン・メルヴィルの『白鯨』である。

いたるところにあしらわれた難破船とか難破船とか半壊した船のオブジェとの間に鯨骨が見え隠れする様は原作を無視したゴシックホラー的なテイストを醸し出している。

「中でもヘンなのが鯨のゆるキャラ、もびーでいっく。通称もびー君

で」

ゲートをくぐって園内への長い遊歩道歩く間、横からハジメのパンフレットを覗き込んでいた幽香が不意に視線を上げた。

「ねえハジメ。白鯨ってどういう話なのかしら？」

血を垂らしたような赤い瞳に光が触れて、彼女の持つ底なしの美しさを引き立てていた。その深みについてうっかりと引き込まれそうな自分を振り払って、平静を装いつつハジメも首をひねった。

「えーと。足食われたおっさんがカタキのクジラと戦う話。だったよ
うな」

「血湧き肉躍るって冒険物語って感じかしら。ドキドキするわね」

「そうそう。多分そんなんだと思う。うん」

とかなんとか適当に説明しておいて、当然おバカな高校生が白鯨の原典にあたったことなどあるはずもなく、この平日においても決して絶えない人足の大半も彼と同じく、モビー・ディックが白鯨の名前であることすら知らないはずだった。

それでもこの正体不明のコンセプトを持つ上、あたり一面を畑に囲まれたこの遊園地が未だに更地にされていないのは、ロクに娯楽もないような田舎町、F市だからこそなのだろう。

「夜に観覧車に乗ると、この場所が光の中に浮いてるみたいで綺麗な
んだぜ」

ハジメの視線を追った幽香は、ジェットコースターの赤いレール越しにそびえる巨大な観覧車を見つけて表情を輝かせた。

「大きなお花に見えないかしら」

「そーいや、前に来た時は江梨花も同じようなコト言ってた」
彼女との連絡は未だについていない。

気づけば雪之丞に始まった亀裂が江梨花にまで広がっている。どんどん分解していく友情が元通りになる日が来るのだろうかと考え
る彼は次第に重苦しい雰囲気纏って歩き始めるのだった。

「こら」

その肩を幽香が指で突いた。

「せっかく遊びにきたんだから。楽しまないで、でしょ？」

「——ああ。そうだ。悪いな」

まるで困ったお子様に接するようなその態度が。

いつもは腹立たしいだけの彼女の振る舞いが、この日はすんなりと受け入れられた。

「いやに素直じゃない」

ハジメが不思議に思うところは、幽香もまた同じであったようだ。

「幽香とあの場所で出会ったばかりはさ。こんな所に一緒に来るなんて、想像もできやしなかった」

「そうね」

後ろ手に弁当箱をいれた包みをぶらぶらと揺らしつつ、彼女は踊るような足取りでハジメの周りをついて歩いた。

「この世界での生活は、もつともつと血なまぐさいものになると思っていたわ」

ふわふわと甘い花の香りを振りまきつつ、幽香は半ば自嘲するようにな、それでも楽しげに目を細めて微笑んだ。

「ふふ。それが何の間違いか。人間の男の子とデートの真似事だなんて。あなたの傍にいと、妖怪の自分を忘れそう」

数歩前に行く幽香の背中を見つめるハジメの拳は、固く握り固められていた。

不意に彼女が振り向いたので、浮かべていた不敵な笑みを押し殺すためにヘタクソなくしゃみの演技をするハメになったが。

「お昼ご飯には少し早いかしら——あら」

「痛えっ!」

背後にいるはずの、幽香に目を見開かせたものの正体を確かめようとした。振り向きざまに猛烈なタックルを受けて、ハジメはたたらを踏んでそのまま前のめりに倒れる。

「な、お、お前!?!」

そのどこまでも愛想が良さそうで、同時にどこまでも空虚な笑み。

でっぴりとしたしろい腹とひげ、そしてビニール製の三叉槍を振りかざして威圧的に見下ろしてくるそいつは。

「……………もびー君!?!」

唐突な遊園地のマスコットキャラの登場にあたりが沸いた。

ぐいぐいと子供たちにひっぱられて、彼の笑顔が不気味に歪む。そんなのお構いなしに身振り手振りで幽香に何かを伝えようとする彼は、どことなく必死であった。

「一枚写真いかがですか、だって」

不格好な手というかヒレをばたばたさせる姿だけでよくも察せられるものである。

「そうか。じゃあ頼むかな」

ケータイのカメラ機能を起動してもびー君に手渡すと、ハジメは幽香の隣に並び立つ。

そこからが早かった。

巨体に似合わぬスピードでさささと走り寄ったもびー君がハジメを思い切り突き飛ばすと、彼のケータイを地面に叩きつける。

「あぁっ!？」

呆気にとられるハジメの背後で幽香とちゃっかりと腕を組んだもびー君。その首と胴体の隙間からにゅつと伸びた白い手が、近くにいた遊園地のスタッフに彼の私物と思しきスマートホンを手渡す。

「は、はい、チーズ」

ぱしゃん。

合成されたシャッター音と、はしゃぐ子供に踏みつけられたハジメのケータイの液晶がメゲる音が完全にシンクロする。

「な、なにしやがるー」

食つてかかるハジメを太鼓腹でぶっ飛ばすと、もびー君は幽香に深々と頭を下げ、おまけにどさくさまぎれの熱烈なハグまでかます。

「あらあら。うふふ」

マスコットの熱烈な歓迎にご満悦の幽香を名残惜しそうに後にして、もびー君は颯爽と駆け出す。

「モビー君ー」

「まっつー!」

彼はもはやクジラであるという設定すら霞むほどのスピードを發揮して、子供たちを引き連れて去っていく。その中身が誰であるにせ

よ、タダ者でないことだけは確かだ。

「俺のケータイが」

「楽しいわねえ」

この間水浸しにして、買い換えたばかりだというのに。

ハジメが、がつくりと膝をついたままに思い出すのは小学校の思い出の一枚だ。恐れを知らぬ小学生のハジメは遠足のノリに乗ったまま、同じく浮かれまくった雪之丞ともびー君にタツクルをかましたのだ。おまけに池の前で。

だが決して、決して最初から溺れさせてやろうなんて思っていたワケではない——ような、そうでもないような気が。ひよつとすればもびー君はホンモノのクジラで、泳ぐのなんてへのかっぱっぱだと実行したような記憶もある。

『クソガキヤ、はっ倒したるわ!』

その結果、もげた頭を置いてけぼりにしたまま鬼の形相でクロールしてくるオジさんに追い回されることとなったのだが。

——もしかしたらあいつの中身はそのときのオッサンなんじゃないか。これはそのときの逆襲なのではないか。

「そういうえば飲み物忘れちゃったわね」

未だケータイを破壊されたショックから立ち直れないまま、ハジメは頭をもたげた。こういう時ならいつも完璧に段取りしてくる彼女にしては珍しい失敗だった。

「ちよつと買ってくるから。ハジメはここで待っていて」

「いいってば。今日無理言ったのはオレだし。お前は座ってるよ」

「そう?」

その顔は嬉しそうでもあり、少し残念そうでもあり。

「じゃあ、甘えちゃおうかな」

彼女は休憩所のベンチにおとなしく座ってくれる。

「行ってらっしゃい」

「あ、ああ」

自販機を探しながら、ハジメは一度だけ彼女を振り返った。

近くの鉢植えの花と談笑する彼女がそれに気づいた様子はない。

「あのさ」

幽香が顔をあげる。思わず喉元まで出かけた言葉を飲み込んで、ハジメはかぶりを振った。時期尚早だ。今はまだ、その時ではない。

「なんでもない」

逃げるようにその場を後にしたハジメが姿を消すまで、幽香はずっと彼の背中を見つめていた。軽く花卉を揺らした花への受け答えも、どこか気もそぞろだ。

「彼はなんと？」

テーブルを挟んで向かい側、当たり前のように自然に腰を下ろした若い男が気障に問質した。

「彼女ね。胡散臭いヤツが近づいてるから、気をつけてねって言われたわ」

「そいつはショックだな」

グレースーツの刑事、寺田は自分の姿をあらためた。

くたくたのコートとフレームの傾いだメガネ。頼りない刑事に彼は擬態している。隙を見せて隙につけこみ、こじ開ける。言うなればそれこそが、彼の持つ能力に似た素質なのだろう。

「少し、いいかい」

擬態を成して、寺田は表情の硬さまでは隠しきれていない。一方の幽香はうすら笑いを浮かべて手を組み直した。

「彼が戻ってくるまでなら」

「オーケー」

刑事はそれまで持っていたジュースの缶を開けて、無意識にかたずを飲む。食えない女。しんと冷える十二月の夜更けに彼女を追いかけて見事に撒かれたことは記憶に新しい。

「俺と俺の相棒はあんたらを犯罪者だと思ってる」

彼が懐から取り出した写真を手に取って、幽香はわずかに眉を持ち上げた。

「目的がなんであれ。好き勝手に町をぶっ壊して、不安を煽って、ネットを騒がせて。いずれしかるべき時に法の手でしかるべき報いを受けるべきだ。そうだろう？」

「それはそれは。今スグは困るわね」

「舐めてるねえ」

プラスチックのような甘ったるいだけのコーヒーを一息に飲み干して、寺田は幽香を見据える。

「それで、今日は宣戦布告に来たってところかしら」

「勘違いして欲しくないな。俺たちはあんたに打つ手なしだ。場合に
応じて鶴見ハジメを保護することはあるだろうが、ケンカなんてとん
でもない」

だが、と寺田は指の背で写真を叩いた。幽香ですら知覚できない距
離から撮影されたそれ。彼女たちの日常を丸く切り取る赤いマーク
と、ろ号、い号という殴り書き。

「だが。あんたたちのところにも守護者がいたように、この世界にも
守護者を名乗るヤツがいる」

あたりを確認して、刑事は立ち上がった。

「気をつけろよ」

「どうしてわざわざ警告に？」

「言つたら。あんたを叩き潰すのは法の手だ。こんな陰謀じみたやり
口じゃない」

「待ちなさい」

幽香は刑事の胸に一輪の花を挿した。

「これ、どこから出したんだ」

縁が紫色の、触れただけでも散ってしまいそうな可憐な花だ。グ
レースーツの胸元にそれが眩しい。おもわず彼は口元を緩めて、今井
の前でよくみせるおちやらけた笑みを浮かべた。

「もしかしてワイロのつもり？」

「面白い話のお礼よ。おまわりさん」

彼はそれが気に入ったようだった。休憩所を去っていく足取りは
軽い。

一方幽香は、写真をもう一度見る。連れ立って歩くいつかの日の幽
香とハジメの姿。ほかの写真の中には霊夢だったり雪之丞だったり
の姿もある。

「守護者、ね」



コンクリート製の巨大なホールに足音が反響する。

二月といえど日陰は寒い。あたりに人影はなく、遠のいた遊園地の喧騒が、ここが隔絶された空間であるかのような錯覚を覚える。居心地の悪さを覚えて数本のペットボトルを抱えて踵を返したハジメは、立ちほだかる巨大な影を見つけた。

「もびー、君……？」

彼が手にするものはいつものビニール製のペにやペにやの槍ではない。壮絶にねじれて曲がった、赤茶けた槍である。その先端に赤光が宿った瞬間、目にも止まらぬ雷撃に貫かれてペットボトルが吹き飛んでいた。

一瞬で、額をぐつしよりと汗が濡らしていた。

生々しい死の幻影が見えた。もびー君がその体を揺らしながら歩いてくる。決して変わることはない笑顔がなおいつそう不気味だ。

「池に落としたこと、そこまで恨んでいたのか？」

もびーでいっく君は物言わず槍を構える。

怒れる白鯨の化身を前に、ハジメの退路はない。

覚悟を決めたその手中で黄金の炎が収束する。もびーでいっく君は陸上走者のように頭を低く、それこそ槍の柄をぴたりと地につけた姿勢をとった。

その穂先から未だほとぼしる赤い電撃がタイルを舐める。

勝負は一瞬。

西部劇のカウボーイが決闘に挑むように、ハジメの手は腰のあたりで未だ上がりきっていない。

かっこつけでも慢心でもない。もはや不用意に動くことができない状態にまで追い詰められていたことに、彼はたったいま気づいたのだ。

すり足、呼吸、まばたき。僅かな行動を起こしただけでも、白鯨の握る槍の穂先は微調整を行うようにかすかに動いていた。

もびーでいっく君のうつろな笑いをうかべる口の中に光る赤い眼

光は、まるで未来にハジメが起こす一挙手一投足を見通しているかのようだ。

その昏い眼光が、不意に見開かれた。

——来る！

「遅い」

ひやりとした感触。

「ひと月前のお前の方がずっとずっと強かったぜ」

額には既に赤い穂先が触れていた。

ハジメの指先はほんの数センチも動かぬまま、空気を揉むようにあてどなく彷徨っていた。

「しよぼすぎて殺す気も起きねえよ」

びゅるんと槍をしながらせて、もびーでいつく君は失望をあらわに太い首を振った。

穂先の衝撃波にひっぱたかれて尻餅をついたまま、ハジメは白い巨体を見上げることしかできない。

「あ？ ああ、そっか」

ようやく思い出したように、彼は分厚い着ぐるみに包まれた自分の体を気づいたようだった。

あつけにとられるハジメの前で、もびーでいつく君の頭がゆっくりと外されていく。

マスコットキャラがそれやっちゃまずいだろというハジメのツツコミも虚しく、雪のように白い美青年の顔があらわになる。

「……………ユキ」

「おう」

「その着ぐるみは」

「オレ、吸血鬼。日光はダメなの」

そうまでして彼が日中出歩くのは、単に人間の世界が懐かしいから、ということではないらしい。どこからか現れたコウモリにキチキチと耳元で囁かれ、彼は数度頷いた。

「そっか。オーライ。霊夢にも紫にも、すぐ行くと伝えてくれ」
「待てよー」

もびー君の頭を小脇に抱えて去っていく吸血鬼に追いつがるハジメは必死の形相を浮かべている。槍を担いで、小馬鹿にした笑いで雪之丞は応じる。

「今日は別件。幽香さんと一緒にいるのがちよいちよい目障りだったからちよつかいかけただけでさ。ま、やるってんなら、俺の必殺技の実験台にでも——」

「霊夢と、ユカリが、来てるって!？」

「んあ?」

もはや青ざめつつあるハジメに胸ぐらを掴まれて、雪之丞は気圧された。

「どうして!？」

「どうしてって、そりゃあ」

口ごもった雪之丞は、それでも仕方ないといったふうにはぼつぽつと話し始めた。

「いいか、いまこの町にはとんでもない妖怪がいる。朝だってテレビでやってたろ。南の方でビルが崩れたとか、車が潰れまくったとか、血の雨が降ってきたとか」

ハジメは頷く。朝方、弁当の支度をする幽香を待つあいだそんなニュースを目にしたような気がした。

「で、霊夢の結界であいつを追い込んでここまで来たってワケ。ここにはあいつのエサがごまんとあるからな」

ほかは一面の畑。人と鉄を食らう妖怪がこの場所を見逃すはずがない。

「善意で妖怪退治してやるってんだ。ありがたく思いやがれ」

「ダメだ。霊夢たちには帰ってもらってくれ。とにかく今日はダメだ」

「無茶言うなよ。それにヤツは雲の上だ。さっさと叩けばお前らにメーワクはかからねえよ」

ハジメはいっそういらだちを募らせて雪之丞へと食ってかかった。

「ちつとは頭使えよお前! 霊夢と幽香が戦った跡を見ただろ!」

大きくかしいだビルの群れと、もはや月面のようにクレーターだら

けとなった道路。たとえ霊夢が手を出さなくとも、幽香がやる気を出しては彼女も迎撃に出るほかない。なによりハジメが見たこともない大妖怪、八雲紫までもこの場にいると言うのだ。

「凶悪な妖怪なんてどうでもいいっつーの。あいつらを引き合わせるほうがずつと危険だつてば！」

その実力は未だ明らかにならずとも、幽香と同じく大妖怪の名前を冠するのなら推して知るべしといったところだろう。

「そ、そんなことねえつて。紫だつて分別くらい——いや」

雪之丞の表情がぎこちなく固まった。

『えへへ。ユキ、藁買ってきて』

『自分で行つてこいよ、出不精』

『それと五寸釘』

『聞けよ』

『あとこしやくな花妖怪の髪の毛も。それじゃ、頼んだから』

隠れ家でこたつと一体化したままの紫に渡された物騒なお使いのメモ。そして愛娘のような霊夢を傷つけられた恨みつらみを毎晩巨大わら人形に叩きつける紫の背中が脳裏をよぎったのだった。

「けっこう不安に、なつてきたかも」

「だろ」

槍を弄ぶ手を止めて雪之丞は頭の中で電卓を叩く。

この場所にある思い出は忘れたわけではない。人間をやめた今でも無駄に被害を広めることには抵抗がある。

そしてなにより、幽香がこの場にいるというのなら、先ほどのような役得に恵まれないとも限らない。

「分かった。お前のデートのお膳立てするみたいでクソムカつくけど、口車に乗せられてやるよ」

下心の計算も終わって、雪之丞は顔を上げた。

「で、どうするんだ」

どうにかして今日という日は騒ぎを起こさずに終わらせなければならぬ。

殺し合いなんていう馬鹿げた約束をなかつたことにするためにも、

このイベントを外すことはできない。

ちくちくと脳みその裏側を突き刺すような頭痛を抑えて、先ほどの一件で液晶の割れた携帯のスケジュール帳を開く。午後八時にアラームを設定して、ハジメは決然と顔を上げた。

「絶対にあいつらがカチ合わないように、俺たちでなんとかするんだよ」

6 『錆びた鯨のはなし（下）』

紫が、ソースまみれの指をしゃぶりながらテーブルに広げられた園内図へとサンドイッチから引き抜いた爪楊枝を刺していく。その度に霊夢は神妙な面持ちで頷いていた。

「罨に関してはこれでいいのではなくて？」

「そうね。ほかの不安要素は――」

そこで言葉を止めると、霊夢は巨大な影を見上げた。

「遅かったわね」

「自販機探しだよ。人前で頭脱げないだろ」

のっぺりとした手で器用に掴んだお茶のボトルを二人の前に下ろすと、雪之丞もイスを引く。明らかに体勢的に無理のある恰好で座り込んだモビーくんは窮屈そうに首を巡らせた。

「で、罨とやらはオツケーなのか？」

「ぬかりないわ。近くの山に元からあった結界に細工をして、こちら一帯は完全に囲ってある。あとはあいつがエサに食いつくのを待つだけね」

エサはこの遊園地そのものだ。

怪物から日常を守るために、そこに息づく人々を囿に使う。矛盾は百も承知の霊夢が頬杖ついた口元を余計にいびつな形にする。

「万事うまくいくわ」

霊夢の視線から、彼女の浮かべた苦々しい表情の原因が自分にあると気付いた雪之丞は着ぐるみの頭を傾げた。

「俺、何も言っていないぜ」

「どうかしらね」

見れば着ぐるみの手がぐっしよりと濡れていた。

分厚い生地を突き破った雪之丞の鋭い爪が、お茶のペットボトルを本人も預かり知らぬうちにズタズタに引き裂いていたのだ。

「あーあー」

ぐしよぬれの着ぐるみを呆れたように見下ろしながら、雪之丞はどこか安堵していた。公園での戦いでハジメに指摘された通り、我が身

に起こった変化が心までも怪物にしてしまったのではないかと恐れ
ていたからだ。

まだ、無関係の人間が巻き込まれるかもしれないと知って憤るだけ
の『らしき』は彼に残されているのだ。

「とにかく信じて。結界の中から私たちの戦いは見えないようにして
ある。誰も騒がないし、誰も傷つかない」

そんなもびー君を見つめる霊夢もいつしか穏やかな表情を浮かべ
ていて。

傍目に見ていた紫だけがニヤニヤと笑っていた。

「およ」

その笑みの意味を問いたただそうとした雪之丞は、いつの間にか着ぐ
るみの中に迷い込んだ芳しい匂いに気が付くのであった。

「食べる？」

紫が差し出したものを前に、雪之丞は生唾を飲み込んだ。

吸血鬼と化した今でも、人間をやめきれてはいないのは味覚もだ。
粒マスタードとケチャップを山とのせた熱々のホットドッグなど、我
慢すれば夢に出そうだ。

だが同時に、紫の意地悪な笑みにも気が付く。

「食えるか」

笑顔のままブチ切れたもびー君がのぞき窓をぼふぼふと叩いて見
せた。しかし紫は一層口のはしを深く吊りあげて、手にした包みを近
づけてくる。

「簡単よ。えいっ」

「おああああっ、ゆ、紫、てめえ！」

着ぐるみの首の隙間から乱暴に突っ込まれたホットドッグが雪之
丞の背中を滑り下りていく。慌てて立ちあがった拍子に足元に辿り
ついたソーセージを踏みつぶして、もびー君は悲鳴を上げてどたばた
と踊る。

妖怪は笑う。巫女も救いの手を差し伸べず、ただただ笑っている。

「あっ、もびー君だ」

それは正に泣きっ面に蜂。近くで子供の声が聞こえた瞬間、マス

タードに濡れた背中に嫌な汗が浮かんだ。

「もびー君っ！」

どこからわいて出たのか。すっかり子供たちに包囲された雪之丞を尻目に、霊夢たちは伸びをして腰を上げる。

「それじゃ。ご飯も食べたし私たちもちよつと遊びましょうか」

「そうね。それじゃ」

泣きそうになりながら霊夢たちの向かう方向へと視線を馳せて、雪之丞は恋い焦がれた妖怪の小さな後姿を見つける。

「ま、待てよ」

このままでは役得が。ラッキースケベが。

「ちゅうもーつくー！」

調子っぱずれに甲高い声を上げたもびー君を子供たちがぽかんと見上げている。その取り巻きごしに、足を止めた霊夢と紫も怪訝な表情を浮かべていた。

「と、突然ですが、もびー君は故郷の星に帰らなくてははいけません」

「何言ってるのさ」

「もびー君の故郷は深海の都アトランティスで、去年お妃さまにちよつかい出して国王のお父さんに追い出されちゃったんでしょ」

こんな適当な顔をしているクセに、なんと生々しいバツクストリーを背負っているのか。そんな設定知るかよと思わず舌打ちをしそうになりながらも、懸命に堪えて次の策を練る。

「その、お父さんが危篤でして。キトクってのは要するに死にそうってことで、死にそうってことは息子としては放っておけないわけで。そこ、鼻ほじるな。いいですか、不仲なクソ親父だろうが死に目には会っておきたいのです。世の中そういうものなのです」

途端にブーイングの嵐である。

くちびるをとがらせる子供たちをなだめながら、雪之丞は口元を緩める。ノツてきたな。

「つーわけでもびー君は中座いたしますが、後はその霊夢さんが引き継いでくれるそうです。じゃー！」

乱暴にキャラメルポップコーンの容器を霊夢に押しつけて、もびー

君はキレのいい敬礼を見せた。

「は、はあ!？」

面倒の香りを敏感にかぎ取った紫はすでに姿を消している。

颯爽と走り去る雪之丞に追いつがる暇もなく、霊夢に子供たちが殺到した。ポップコーンを奪い合って押しあいへしあいする子供たちにもみくちやにされる霊夢が悲鳴を上げた。



ハジメは列の先頭へと視線を馳せた。パーテーションで仕切られた列はよろよろと折れ曲がっていて、彼のもとからはぽつかりと口をあけた入り口のアーチの上半分が見えるのみだ。

「これ、一体なんのアトラクションなんだ？」

じわりじわりと進みながら、ハジメは幽香を見つめるが、彼女はキャラメルポップコーンを口いっぱい頬張ることに夢中だった。

「わかんない?」

幽香は頷いて、スムーズに吸い上げる。

小脇に抱えたポップコーンの容器といい、両手のカップといい。遊びに行こうと誘ったハジメ以上に彼女は遊園地を満喫しているようだった。

「ま、みんな並んでるし、さぞや人気なんだろうけどさ」

面倒くさそうに腕組みしたハジメを脇目に見て、幽香は肩をすくめて見せる。

「何人か倒して前に並びましょうか?」

「冗談だろ」

「冗談よ」

「お前が言うとき」

「ええ。分かってるけど」

切れ切れない会話。どことなく幽香の隣に立っていることが居心地悪かった。前や後ろにぎつちり並んだ男女たちの親しげな様子が、少しだけ腹立たしい。

「杏奈とは上手くやれそう?」

グズグズととりとめのないことを考えていると出し抜けにそんな

ことを言われたので、ハジメの返事までは間が開いた。

「どう思うっ？」

「あまり良くはないわね」

無意識にポケットに突っ込んだ手で五円玉を探していた。

「なんとなくだけでも、今になって杏奈が戻ってきたのは偶然じゃないような気がするの」

「わかってる」

「今のあなたに必要なのは、こうやってポーズを決めることじゃなくてお母さんと向き合うことですよ」

「わかってるったら」

どうしてそんな話をするのかと理不尽な怒りを抑え込みつつ、ハジメは納得がいく。幽香にとってこれはデートでもなんでもなく、ただの日常の延長なのだろう。

だがハジメは違う。これは勝負だった。

「ヤメにしようぜ、この話は」

よほど強く押さえつけていたのだろう。五円玉を痛めつけることをやめても爪の根元には違和感がわだかまっていた。このクセとも、ずいぶん長い付き合いだ。

「あ、ホラ。いよいよよみたいね」

マイペースに顎をもたげた幽香の視線を追って、ハジメは思わず小さく息を吞んでいた。

流水がたぶたぶと満たされたレールに滑り込んでくるアヒル型の乗り物。しかも恥ずかしいことに年季の入ったボディはショツキングピンクで塗装されている。

ひきつった目でゲートを見上げて、ハジメはひしゃげた悲鳴を上げていた。

『愛のトンネル』

男女連れの客が多い理由が、何となく理解できた。

ジェットコースターとかお化け屋敷とか、そういうドキドキなら構わない。だがこれは予想外だ。デートしようと口において、実際のところそういうことへの心構えは全くできていなかった。

「でっ」

「いかないの？」

「できるワケがない」

「私とはイヤかしら？」

「そういうことじゃねえよ。でもさ」

逃げ出そうとして、その肩越しに白いモノがぴよんぴよんと跳ねていることに気付く。

周囲の目などお構いなしに、必死に一方向を指し示す彼の頬には、汗腺などあろうはずもないのに大粒の冷や汗が伝っているように思えた。

「ハジメ、後ろに何か」

「乗ろう」

雑踏越し。こちらにのんびりと向かう紅白模様をいち早く見つけたハジメは、幽香の両肩を掴んだ。

「聞いてくれ。俺たちは乗らなきゃいけない」

もはやそれは、遊園地を楽しもうとする人間の浮かべる表情ではない。切迫した瞳の奥に金色の炎が踊る。むしろ清々しいまでに怪しいハジメを前に、流星の幽香もたじろいだ。

「でもさつきはムリだって」

「いいや俺はこいつに乗りたいたいんだ。このピンクのアヒルじゃないとダメなんだ。よく見ろよ——ピンク色の、アヒルなんだぜ!？」

言い終わってからハジメですら内心自分の言葉に首を捻っていた。

同時にがくがくとゆすられつつ、辺り一面から注がれる奇異の視線にだんだん居心地悪くなってくるのは幽香の方である。

「ど、どういう風の吹きまわしよ。やっぱり少し疲れてるみたいだし、あっちで」

「いいか。正確にはお前と乗りたいたいんだ。お前と乗れるんだったら、もう、何だっがいい!」

「は」

その場に居合わせた誰もが呆気にとられた。

「……あの、乗りますか?」

「乗る！」

必死さから鬼のような形相を浮かべたハジメにおずおずと話しかけた係員が小さく退いた。

「……そ。そう。じゃあ、ええ。はい」

いまだ状況を呑み込めない幽香の差しだした手を握って、彼が向かう先にはピンクのアヒル。

乗り込んだ二人がトンネルに姿を消したのを見送った頃、ようやく我に返った雪之丞は組み敷いたままの霊夢の存在を思い出した。

彼女が言いたいことは、刺す様に鋭い視線を受けるだけで分かる。

「あーその、一応言いわけしていい？」

◆◆

そんなことが数限りなく繰り返された。

童心に返りきった幽香はあっちへ行こうこっちへ行こうとハジメの手を引き、なぜかその先ではいつも霊夢や紫と出くわすのであった。その度にハジメは肝を冷やし、雪之丞は奔走した。

「……………あいつら、磁石でも入ってんじゃないのか」

夕陽が差している。

背後から聞こえた声に、見えないとは分かりつつもハジメは頷いた。

背の高い植え込みを挟んで二人の青年はぐったりとベンチに腰掛けている。こうしている間もハジメはクレープの屋台に並んだ幽香の周囲に警戒を張り巡らせていた。

「もうお前ら帰れよ。その方がラクだし安全だし」

既に下心などかなぐり捨てた雪之丞がうんざりと呟いた。

「もう少し。もう少しだけ付き合ってくれ。どうしても夜までいないといけないんだ」

植込みの向こう側から深いため息が聞こえる。ぐったりとうなだれるもびー君に視線を留めるものは多かったが、その異様な雰囲気になじぶこうとはしないようだ。

「霊夢から聞いたよ。お前の考え、全部」

学校の屋上で霊夢に語った青臭い決意が思い出されて、ハジメは恥

ずかしくなる。

「悪いことは言わないから、やめておけよ。そういうの」

熱い頬。ふわふわと頭が浮かされるようなハジメとは対照的に、雪之丞の声は何かを押し殺すようだった。

「たしか霊夢もそうだったよ」

彼女の白い手が握りつぶすスカートの皺が脳裏に鮮やかによみがえった。誰もかれも、ハジメを除いては幽香を殺すことにしか活路を見出していないようだ。

——ばかばかしい。救えない。何もわかつちやいない。ほかに手はない。

散々言われたが、今になってその程度で立ち止まる気はなかった。

ハジメの誘いをどんな気持ちで幽香が受け入れたかは知らずとも、ハジメ自身はいつまでも彼女と家族でありたいと最近では望むようになっていいる。

「彼女を愛しているなら、なおのこと殺さなくつちやいけなくなる。紫が言っていた」

「なら俺は、あいつを愛してないんだろうな」

ごつんと硬いもの同士をぶつける音が植込みの向こう側から響いた。

四つもクレープを抱えた幽香がゆっくりと歩いてくる。話は終わりだ。

「今日だけは頼むぜ。ユキ」

ベンチから腰を上げたのはハジメだけだった。

彼が十分離れたのを感じて、雪之丞はようやく硬く握り締めた拳を解くことができた。危ないところだ。ハジメがもう二、三言余計を口走っていたら、間違いなく手を出していた。

「世の中、そんな都合よくできちやいないんだよ」



「ユキ、いけそう?」

心配顔の霊夢に肩をたたかれて、ようやく雪之丞は夜の雲海を泳ぐ体を自覚した。

背中には巨大な蝙蝠の翼。生身で空を飛ぶ紫や霊夢と比べれば、少々大きさに過ぎる代物だった。

「もちろん」

槍を握りなおして、雲間に獲物の姿を探す。

霊夢の張った結界が侵入を感知したのは数分前だ。

「ところで紫、あんたにしちやずいぶん慎重じゃあないか？」

「気がかりがあるの」

境界を操る妖怪は、雲間に今日の獲物とは全く別の何かを探しているようだった。雪之丞には遠い光と薄絹のような雲しか見えない。

「巨大な妖怪が金物と血を求めて徘徊して、おまけに外界からやってきたあの暴れん坊も、私たちも野放しのまま。霊夢、幻想郷だったらこうもいかないでしょ？」

「この世界の守護者はいったい何をしているのか、ってことよね」

現代に生きる妖怪は少ない。

不思議とか超常というものを徹底的に排除する作りになっているこの世界で、彼らが生きていくにはなまなかでない苦勞を強いられる。もちろんそんな環境でも適応する妖怪はいるだろうし、中には蝸牛のように身の丈をわきまえない蛮行に及ぶモノもいないわけではない。

そうしたものの手から、雪之丞たちの生活を人知れず守ってきたものは間違いなく存在する。それがどうしたことか、今回は影も形も見せず静観に徹しているのだ。

それが紫たちの感じる違和感であった。

「ま、いいじゃねえか。おかげで俺の経験値稼ぎにもなるし」

そしてその腰の重さが、今回部外者であるはずの霊夢たちを動かした理由でもあった。

「あんたはお気楽でいいわね」

「霊夢は考えすぎだ」

あくまでおどける吸血鬼を見ていると、そんなことがバカバカしい杞憂なんじゃないかとも思わせられる。

だが、霊夢の薄笑いも長くは続かなかった。

「おしやべりはここまでね」

雲海の一点が大きく爆ぜた。

雲のベールを突き破って頭をもたげたものは、あまりに巨大な鯨だった。気の遠くなるような年月を生き延びてきた彼の皮膚は岩肌のようにひび割れて逆立てられ、ヒレがそよぐだけで風の流れが変わるようだった。

「これはこれはこれは。なかなかの大物じゃんかよ！」

好戦的な笑みを浮かべた雪之丞が一息に加速して、紫を追い越す。軽率すぎる接敵を霊夢がたしなめる暇も与えず、彼は胸の『嫉妬の炉心』から長大な槍を引きずり出した。

赤黒く輝く槍の穂先で瞬く赤い稲光は剣呑すぎる。そして、巨鯨にはそれを気に留める様子もない。彼の赤く血走った瞳は、遙か眼下の遊園地に向いている。

「もらったあッ！」

槍を振りかぶる雪之丞の上腕に浮かび上がる筋肉の形も、もはや人間の肉付きを無視したものだ。そこから投擲された槍は悲鳴のような音を立てて赤い光の帯と化す。模造品とはいえ、いかなる怪物も一撃必殺の槍を受けて無事でいられるはずはなかった。

鋭い犬歯をむき出しに、雪之丞は勝利を確信する。
が。

「なっ」

「へえ」

驚愕する雪之丞の背後、追いついた霊夢が目を剥いた。

赤い電光は巨鯨の体を完全に貫いた。あまりにも抵抗なく、あっさり巨体を突き抜けて、遠くの夜空へと消えていった。

血の一滴も流さず、鯨は悠々と泳ぎ続けている。まるで、槍が命中したという事実を無視するかのよう。

続く二投目も結果は変わらない。

「霊夢、こいつの能力、もしかすると」

「面白いわよね」

紫に答える霊夢は全く面白そうな顔をしていなかった。

彼女が放った呪符も針も、巨鯨の体を突き抜けて消えていく。物理的に当たってはいるが、意味の上では命中していない。それは霊夢の持つ『主に空を飛ぶ程度の能力』が誇る真価とほとんど同じものだ。「気に食わない。紫、あんたの力でどうにか——あっそ。ならないのね」

肩をすばめた紫にぞんざいに吐き捨てる。

その間も巨鯨は雲海に荒波を立てながら悠々と獲物を品定めしていた。ぎこちなく大顎を開くと、だらだらと涎が垂れる。

まるで洞窟のような口内に無数の光が灯ったのと、雪之丞が霊夢の前に体を躍らせたのとは同時だった。

「アンタだって、不死身じゃないのよ」

「理解はしているんだがな」

光の雨を防ぎ切った雪之丞は、ごっそりとそげた上腕の肉が復活していく様を見守りながら霊夢に返す。

「でも、礼は言っておく」

今の攻撃は霊夢たちを狙ったものではない。ちょうど射線に彼女たちがいただけということ。絶対に攻撃されない以上、敵というものを認識する必要はない。

遊園地を覆う結界にぶち当たった光の矢が派手にきのご雲を噴き上げていた。

「あのくらいじゃ問題ないわ。ただ、受け続けるとマズいかも」

「霊夢、私は頭を押さえられるかやってみる」

「任せた。ユキ、一緒に来て」

おう、と返事だけして雪之丞は霊夢の背中を見送っていた。

欺瞞の空を映し出す結界の中でハジメが幽香とどんなことを話しているのかと考える。

どこまでもあこがれた相手の傍に控える能天気なヤツは何も知らない。何も知らないで、ただただ幸せを幸せとも思わずに享受している。

「やっぱ、気に食わねえな」

その言葉を口にする、今まで抑え込んでいた衝動に身を任すこと

がずっとずっと簡単になった。

「楽しもうぜ、ハジメ」

くるりと体を翻した雪之丞はそのまま槍を投擲する。今度は巨鯨ではなく、遊園地に向けてだ。

「あんた」

霊夢は戦闘の手を休めて、信じられないものでも見るような目を雪之丞に向ける。

「――ハ。ああ、悪イ」

それまでの奮闘ぶりがウソのように、彼は醒め切っている。

「手元が狂ったわ」

遊園地を覆う結界に赤い稲妻が深々と突き刺さっていた。

そこから放射状に亀裂が広がっていく。星空を偽る結界の表面が激しく波打ち、耳障りな音を立てて何度もノイズが走った。

「あんた、どうして」

「言ったろ。ついうっかり、何の悪気もなく」

「退くわよ、霊夢」

雪之丞に掴み掛らんばかりだった霊夢を制したのは、いち早く状況を判断した紫だった。

そうしている間にも一同を完全に無視して無数の光弾が巨鯨の口内から放たれ、結界へと食い込んでいく。一度ほころびができてしまえば、後は早いものだ。炸裂する光弾によって、結界の崩壊は加速度的に広がっていく。

「捕獲のための結界は限界。欺瞞は解ける。敵の実力は未知数。隠れ家に戻って戦略を練り直しましょう」

霊夢が珍しく声を荒げた。

「紫、言ったでしょ。私はそう何度も」

「わかってるわ。その上でお願いしているの。あなたもユキも、わざわざこの場で死線をくぐる必要はない」

逃げ帰ることが悔しいのは霊夢だけではない。それを紫の表情から読み取って、霊夢は妖怪が切り開いた空間のポケットに体を滑り込ませる。

「地上に送って」

「もう、どうしようもないわよ」

「みんなが逃げるまでの時間稼ぎはできる。そのくらいの責任は取らせてちょうだい」

こうなったら霊夢はもはやテコでも動かない。

「ユキ、あんたもよ」

霊夢の言葉を背中を受けて、結界に食らいつく鯨の怪物を見つめる。

「行けよ。俺はこいつを引きつける」

霊夢も紫も何か言いたげだったが、ただならぬ気配を漂わせる雪之丞を非難がましく一瞥するにとどめて、姿を消した。

その間も光の雨のように降り注ぎつづける弾丸が確実に欺瞞の結界を破壊していく。

「やって見せろよ、ハジメ。そんで、全部終わったら答え合わせしようぜ。どっちが正しかったのかを、な」

もはや守り手が消えた空の上、月光を浴びる巨鯨はでっぷりとした腹をぶるんと揺らすと、早速地上に血走ったまなざしを走らせて、品定めをはじめめる。



穏やかな夜空を眺める幽香が、なぜそこまで険しい顔をしているのか。隣に立つハジメが理由を問うまでもなく答えが目の前に降ってきた。

その威力と衝撃で為すすべなくころがりつつ、ハジメは信じられないものを目にした。空に亀裂が走り、大穴があけられている。

ドミノを突き崩すように、目の前で次々と日常が裏返っていく。トドメを刺したのは、空の穴から入り込んできた無数の光弾だった。

空飛ぶ鯨の妖怪がばらまくそれは、ただの弾丸ではない。その速度が落ちるに従い光は失せていき、彼の腹の中に幾重にも折りたたまれ、詰め込まれていた寄生者たちの姿が明らかになる。

「ハチ、だ」

それはやはり大きい。胴だけで人間の子供ほどもある。

真つ先に地面に降り立つた一匹が、強靱な顎でもって手近な鉄製の電灯の一つをまるごと根元から噛み切った。

「なんだ、アレ」

誰かのつぶやき。

混乱の前の不気味な静けさに、その声はよく通った。

「ハジメ」

幽香の視線はハチなどではなく、風雅な月を浮かべる初春の空へと向いていた。そこに広がりつつある亀裂をハジメは信じられない気持ちで見つめる。

ノイズを走らせる作り物の空でうごめく無数の影と、巨大な何か。それを認識した瞬間、この日の平和はあまりに脆く崩れ去った。

まるで数万枚のガラスを粉々にしたような音を立てて空が割れる。そうして空に開かれた穴から無数の巨大蜂が侵入を始める。

それが冗談でないことが分かるや否や、鋭い悲鳴が日常に幕を引いた。

「幽——」

歴戦の妖怪は、ハジメの言葉を待たずに行動を開始していた。

彼女を中心に爆発するようにしておびただしい花びらがまき散らされる。分厚く煙のように立ち込める桃色の花弁がやがて渦巻き、園内を分厚く覆ったベールの中に、ハジメと幽香の姿だけがあらわになる。

「標的を私たちに絞るわ」

いいわよね、と紅い瞳が問うている。

「背中、あなたに預けるから」

熱いものがこみ上げて来て、喉が詰まった。

幽香はその一言を、特別な感情抜きに放ったのだろう。それでもハジメには、彼女が自分の力をほんの一片でも認めてくれたような気がしたのだ。

「ああ、任せろよ」

さっそく三体の妖怪を撃ち落とした幽香へと歩みつつ、ハジメは嫌な予感を隠しきれない。立ち込めた花の渦の中ではそれなりに修羅

場が繰り広げられているようだったが、矢面に立ったハジメたちこれ以上してやれることはなかった。

「寺田ー!」

花の嵐の中で大声を張り上げる老刑事が相棒の名を呼んだ。

いつもいつもここぞという時に居合わせてくれない寺田は、今日も絶好調だった。

出口へと殺到する人の流れに翻弄されつつ、彼の目はその少女に吸い寄せられた。

「……やあ、相変わらずヘンな時に会うな!」

流れに取り残されて、一人渦巻く花の中心を見つめていた霊夢は僅かに顔を逸らし、困ったように笑った。

「ほら。また会えた」

見る見る間に彼女が遠ざかっていく。

「君たちはいったい、何をしようとしているんだい!」

「私たちの世界と、この世界と、友達を救いに来た。はずだったんだけど」

大声を張り上げると、かろうじて霊夢の返事が聞こえた。

「それじゃあ、またね」

短すぎる再会に終わりを告げるように赤い稲妻が幾筋も降り注ぎ、ついに空が砕けた。花卉の隙間から見える空には異様なモノが泳いでいる。

巨大なクジラが勢いよく体を滑り込ませると、早速ジェットコースターのレールを粉々に噛み砕いていった。

地響きを立てて倒れ込むレールを尻目に、ハジメは狙い澄まして妖怪を叩き落としていく。強靱な顎は脅威だが、一体一体はそこまで恐ろしい相手ではない。

そんなことより、つい今しがた目の前に新しくクレーターを形作り、ありふれた日常を混乱の中に沈めるきっかけとなったモノの正体を目にしてしまった。

迎撃の手を休めてそれに触れる。力を使い捨てられた槍は未だに熱をもつてくすぶっていた。

赤く焼けた槍が冷えて崩れていくのとは対照的に、ハジメの怒りが徐々に燃え上がりはじめていた。

「ふざけるなよー！」

それを振るう男には覚えがある。親友が信じられなくなった。

彼を信頼して、すべてを任せた結果がこれだ。

焼けただれた金属の槍を乱暴に蹴倒す。乱舞する怪異たちの向こうを悠々と泳ぎ、きまぐれに暴食を繰り返す不可触の鯨へとハジメは指先を向けた。

「ハジメ、危ないわ」

幽香の言葉は彼には届かなかった。怒り任せの弾丸を装填する彼が構ったことではない。

仕方なく彼の襟首を捉えようとした幽香の手が、止まった。

怒りを燃やす彼の背中。そこにぼんやりと形作られつつあるおぼろげな光の輪郭に、一瞬心を奪われていた。彼女にとって、今はあまりにも遠い輝き。

巨大な光の輪郭が一層激しく輝くや否や、ハジメの指先からほとぼりしたものはあまりに速く、あまりに鮮烈だった。真夜中の太陽のような爆裂する閃光の筋が夜空を切り裂く。弾丸が発射される度にハジメの足元の舗装が沈みこみ、見えない巨人に殴りつけられたような衝撃が幽香を引っ叩く。

「裏切ったな、ユキ。俺を——俺を、裏切ったんだなッ！」

二人の間に大きな溝ができたことなど、とうの昔に承知していた。

それでも、ハジメの頭の中には新しい怒りがぐるぐると渦巻いている。彼の憤怒を受けて、その指先が激しく火を噴く。新しい流星がいくつも夜空に打ち上げられる。

「なんだ」

それまで無駄と知りつつ攻撃を続けていた雪之丞が、翼の先端を焦がしていったものを見定めきれずにいると、彼の体を怒りと痛みに染まった唸りが揺さぶった。

見上げた視線の先で巨鯨が体をよじっている。信じられないことに、霊夢や紫の能力でもってしても傷つけることのできなかつた怪物

が腹に大穴を開けて悶えているのだ。

そうしている間にも地上から打ち上げられる弾丸がその体を次々と貫いていく。

「つつ」

地上に見つけた、その姿。

光を背負って立つ彼は、まるで堂々と天を突くように咲き誇る、大きな大きな花のように見えて。それが、太陽のようなあの人の愛を受けることが当然だと主張するようで。

「認めねえ！」

叫んでいた。

「認めねえ。絶対に俺は認めねえ。ヘラヘラしてるだけのお前が報われるなんて！」

生々しい感情を隠そうともしない吸血鬼の手中で槍が信じられないほど邪悪な形状へと変形する。咆哮と共に放たれたそれが空中で幾何学的な軌道を描きつつ迫る先に何があるかなど、愚問だ。

ハジメの燃える瞳と、雪乃丞の伶俐な視線が交錯する。一瞬後に巻き起こった大爆発に唾を吐きかけて、吸血鬼は翼を翻した。



「目が覚めた？」

びゅうびゅうと煙臭い風が吹いていた。

どこか心配げに見下ろしてくる幽香の顔。慣れない距離感の正体は、頭の下にある幽香の両腿だった。膝枕だ。そんなものに心を揺らす余裕が無いくらい、今の彼は打ちのめされていた。

「俺」

「大丈夫。あの妖怪なら逃げたわよ」

いつも通り考えなしに能力を乱射して、いつも通りぼこぼこにやられて、幽香に救われたのだろう。

すべてを察する。要するにハジメは勝負に負けたのだ。

そんな姿を幽香に晒し続けるのが耐えられなくて、間を持たせようと口を開いていた。

「ずっとずっと前にユキと江梨香と、千晃とここに来たんだ。んで、花

火を見てさ」

確か小学校の遠足だった。

千晃が引きこもる前の、遠い過去の話だ。

見事に親たちとはぐれたのは四人だった。ぐずる千晃をなだめる江梨香。ハジメと雪之丞の間に漂ういやに張り詰めた空気。誰が悪いかと押し付け合いになる寸前、大輪の花火が空に咲き乱れたのだ。

途端に責任の所在なんてどうでもよくなった。

千晃までもが泣き止んで、ハジメのシャツをつかんだままぽかんと空を見上げていた。

空が静かになってからも醒めやらぬ熱気が胸の中に留まっていた。

『いってえ』

ぶん殴られた頭をさすりさすり、半ベそをかいたハジメ。無言の父が運転する車の後部座席に並んで座った雪之丞も目尻に涙をためながら、必死に泣くまいと堪えていた。

『でもさ、楽しかったよな』

いたずらっぽく笑って見せる雪之丞の顔が、今でもありありと浮かぶようだった。

それからだ。接点なんてものが学校くらいしかなかった彼らが友達になり、やがては親友と呼び合ってはばからなくなったのは。

「今年はあると見たかったんだけど」

そうして、幽香との距離ももともっと縮まればいいな、なんて。

こうしてすべてが失敗に終わって考え直してみると、その子供っぽい考えがあまりにバカバカしかった。

悔しさに突き動かされるように立ち上がって雄たけびをあげて、そしてようやく、自分の立つ場所が観覧車のゴンドラの屋根の上であることに気付いたのだった。

「高っ、怖っ!!」

ペタンと尻もちをつくと頂上近くのゴンドラは一層激しく揺れて、ハジメの喉から情けない悲鳴を絞り出すのに一役買った。幽香がくすくす笑って、腰を上げる。

「失礼しちゃう」

そんなちぐはぐな言葉を吐かれて、ハジメは頭上に疑問符を浮かべる他ない。

「今日はどうしても楽しかった。クレープも、愛のトンネルとやらも、悪名高い行列つてやつも体験できたし。私はこの期に及んで文句を言うほどわがままな女だと思われていたのかしら」

「霊夢たちの姿も目にはしているはずの彼女は、何も聞こうとしなかった。」

ただハジメの頭を穏やかな微笑みと共に撫でて、彼女は両の握りこぶしをまつすぐに突き出す。指の隙間からとめどなく流れ出すものは寶石のように輝く植物の種子だった。

「私をここまで楽しませてくれたあなたには、ご褒美をあげなきゃ」

小声で歌う彼女が、次にどんな言葉を口にするのか。ハジメには何となく分かっていた。校庭で花文字を書いたときにしたって、彼女はわくわくすることがあると、決まって口にするのだ。

「産子這う子に至るまで、とくと御覧じよ」

両手を広げた彼女と、遙か下で芽吹き始めた無数の種子が、瞬く間に無人の遊園地を覆い尽くしていく。既にここから離れた人たちはどんな気分でこれを見ているのだろうか、とハジメが思う間にびっしりと蔓延った緑のじゅうたんにぽつぽつと七色の光が灯る。

息をすると、花の香りが強かった。

「それで、感想は？」

美しかった。

ただただ、初めて風見幽香という女に出会ったときのように、その美しさの前に何もかもを忘れそうになっていた。

「あっ」

だからだろう。ふらふらと一步踏み出したハジメが、そのままゴンドラの上からまつさかさまに落下したのは。

「もう。危なっかしいんだから」

ふわりと、着地はとことん優しく済んだ。

空中で幽香に抱きかかえられたハジメが花の絨毯に下ろされる。幽香の顔が近い。

「すごいな」

それは本心からの言葉だ。幽香が改めて彼を膝枕することに気づかなかったくらいには、素直に見惚れていた。

「少しは元気になった？」

自然にほころんだハジメの顔を見下ろして、幽香が問うた。

「ああ。うん」

彼女をあっと言わせるつもりが、いつの間にか自分が驚かされていた。おまけに気落ちしたところを彼女なりに励ましてもらったことに思い至ると、やはり幽香には勝てる気がしない。

「また、助けてもらっちゃったな」

長い長い三カ月、ずっと彼女はハジメに手を差し伸べてくれた。

その方法は校庭の花文字だったり面談の教師をボロクソにこきおろすことだったり。破天荒極まるものだったが、ハジメが理不尽で息詰まりしそうな現実を前に膝を折りそうになるたびに、いつでも彼女が肩を貸してくれた。

「手が掛かる子は嫌いじゃないの」

幽香はふふんと得意げに笑って目を細める。

「ありがとな」

ようやく言うべきことが言えると、その奥に隠れていた気持ちの輪郭がくつきりと浮き出てくる。

二月の夜風の中にあつて、全身が燃えるように熱い。その感情に焦がれるだとか、焼けるとか、不釣り合いに物騒な言葉を当てはめる理由がよく分かる。

呻いて、ハジメは顔を覆っていた。

「あらあら。どうしちゃったの？」

その心中を知らずに覗き込んでくる幽香がたまらなくうつとおしく、そして愛おしい。

「うるせえよ」

つまるところ、ハジメは幽香にぞっこんだった。

最強の妖怪だろうが暴れん坊だろうがなんだろうが、構った事ではない。とことんダメダメな彼を見捨てずに付き合ってくれる幽香を、

妖怪ではなく一人の女の子として好きになってしまったのだ。

「ヘンなハジメ」

「黙れ黙れ。バカ」

その恋心は歳相応に、とことん青臭い。

やはり勝てないと悔しげに唸るハジメと、くすくす笑う幽香。花盛りの遊園地の上空、雲間にのぞく月の傍らに青い星が数度瞬いて、消えた。

第十三話 『錆びたくじらの話』 おわり

7 『鶴見家、最後の晩餐（上）』

「最近、こういうのが多くないか」

「こういうの？」

言葉を選んでくれた教師には悪いが、ハジメはおうむ返しする他なかった。

遊園地での一件の後に駆け付けた警察と消防の目を掻い潜っての逃走やらなんやらでほとんど眠れないまま迎えた翌日。そして昼食にありつく前に呼び出されたとあつては、僅かに頭を働かせることから億劫だ。

「ロクに学校にも来ないで大ケガだの補導だの。何をしてるって聞いているんだ」

おまけに相手が昼食を食べながらというのが癪に障る。

しかしぎつちりと事務机の並んだ昼休みの職員室の真ん中で、そんな怒りを爆発させるわけにもいかない。

「はあ。まあ、悪さはしていないと思うですけど」

なので、ハジメはあくまで気の抜けた返事を口にするだけだ。

「来月から三年だろ。希望は進学か？」

そろそろ幽香が届けに来てくれるはずの弁当の内容と教師のコンビニ弁当とを比べて内心勝ち誇っていた最中なので、ハジメが頷くまでは大分間が空いた。

「俺もあんまりこういう言い方はしたかあないがな。仮にも大学目指すなら、素行つてのも大事になってくるんだから」

「ソコーならちゃんとしてますってば。学校来てる時くらいは」

「部外者を毎日朝夕連れ込むことか？」

毎日帰りを一緒にするハジメもクラスメートたちも当たり前になつていたが、校内のちよつとした有名人である妖怪は毎日どこから無断侵入しているのであった。

「おまけに彼女、幽香さん、だったか。お前の恋人だとかなんとか、噂になつてる」

「噂も何も、事実ですから」

嘘である。

もちろん『マジでそうだったらいいな』とは思っているのだが。

幽香が学校に来るたび来るたび出勤する裸隊とファンクラブをあしらうのは面倒だったが、形だけでも彼女の恋人でいるのはそんなに悪い気分ではない。

ましてや、ただでさえ彼女持ちというのは学生生活のステータスのようなものなのだ。

「開き直るんじゃない」

「別にそんな」

「普通に校則違反ってことは置いておいてだ。人の目つてのをもう少し気にするべきだ。教師なら誰でも人格者ってワケじゃないんだからな」

じゃあお前はどっちなんだよと口をつきかけて、ハジメは眉間にしわをよせた。幽香の影響かトラブル続きの毎日のせいか、どうにも好戦的になりすぎてよろしくない。

「あの、これって一体なんの説教なんですか。俺のしてることつてそんなにヤバいことじゃ——いや、ヤバくなくはないスけど。呼ぶべきならもつと他にもたくさんいるじゃないですか」

代わりと吐いたものも結局は含みのある物言いだったので、ハジメも教師も、同時に唸りながら頭を抱えていた。

「すみません。反省はしてるんですが」

「実はこないだ、警察の人が来たんだよ」

「はっ？」

それは寝耳に水だ。ここまで半分魂が抜けたようにイスに座っていた問題児がようやくコトの深刻さに気付いたのを見て、教師は一層頭痛を強めたようだった。

「も、もしかしてまた停学とかですか。俺、今度ばかりはなんもしてないですよっ」

「だったらまだよかったんだがな」

根掘り葉掘りハジメの事を聞くと、彼らはすぐ帰っていったという。ハジメを呼ぶこともせず、不気味すぎるくらいあっさりど、むし

ろ彼に会うことを避けたいようでもあった。

「やっぱりお前、面倒なことに首を突っ込んでないか」

それについては言い返したいことがあった。

「違いますっしたら。毎度毎度、面倒の方から俺に突っ込んでくるんですよ」

「つまり自覚はあるんだな」

「ええと。まあ、確かに最近俺の周りではイロイロありますけど」

重苦しい沈黙に包まれたのは、何もこの二人の周囲だけではない。

この場に呼び出されてからずっと気になっていたことだったが、いつでもそれなりに騒がしい職員室にどことなく張りつめた空気が漂っていた理由がようやく分かった。

「センセ、でも、もうすぐ全部終わるんです。信じて下さい。そしたら勉強しますし、学校だつて毎日来ますつてば」

「偉そうに言ってるけど、それが当たり前なんだからな」

教師が顔を上げるのを待つ間、ハジメはうららかな陽気の渦巻く校庭へと視線を馳せていた。腹が低く鳴る。

「敢えて聞くが、悪いことじゃないんだな」

「もちろん。誓っていいですよ。今後一切俺は面倒起こしたりしません。なんなら一筆書きますか」

ようやく長話の落とし所が見つかったので、これ幸いとぼんぼん調子のいいことを吐きつけていた時だった。

「失礼します。ハジメ、鶴見ハジメはここにいますか!？」

職員室の扉を勢いよく開け放ち、そこに現れたのは上半身裸の男が数名。不穏などよめきが沸き始めるなか、彼らは机と机の間をぬるぬるとした動きで縫ってきて、ハジメの両脇をがっちりとホールドする。

「先生、緊急事態なんです。コイツ借りていきますよ」

約束をとりつけるなり早速派手な体当たりをかましてきた面倒の気配にハジメがぎこちなく教師に向き直る。

「あの、センセ。俺はマジで」

「もういいから。行け」

彼が庭に迷い込んだ野良犬でも追い払うかのようにしつしと手を振って見せると、裸の男たちは軽々とハジメの踵を引きずってその場を後にする。

「畜生っ、畜生っ、ようやく信じてもらえそうだったのに。何なんだよ。今度は」

長い廊下を猛スピードで引きずられつつ、ハジメは悪態と唾を撒き散らした。どれだけ暴れようと、無駄に筋トレに励んだ男たちはびくともしない。

「幽香さんと江梨花嬢がだな、ちよつとマズい感じになってるんだ」

そう答えるのは胸板に『1』とマーキングされた裸男。

俺だって学生生活が激マズなんじやいと叫びかけて、あまりトラブルと並んで語られない名前が出てきたことに思い至る。

「なんだったって、江梨花が？」

「そう。一触即発とか、そんな感じ」

『2』が頷くが、そんな説明では彼らの足が向かう先にある中庭で何が起こっているか推し量ることすらできない。できないが、凄まじくイヤな予感だけはしていた。

「任すぜ」

そうして穏やかな日差しが照らす吹きぬけに放りこまれた瞬間、見事に予感的中したのである。

「ごめんなさい。もう一度いいかしら」

「ですから」

初代の卒業生たちが植えた記念樹の根元にはベンチがあり、日だまりに腰掛けた幽香は真正面に仁王立ちする江梨花を見上げていた。

「ハジメと別れてください。そう言ったんです」

思わずハジメは立ちすくんだ。

一体全体どうして二人がこんな状況になったのか、皆目見当もつかない。それでも二人の間に何度も見えない火花が散る気配だけは感ぜられた。

「どうして？ 私がハジメと一緒にいることで、あなたに何か迷惑がかかるのかしら」

「ええ。とつてもイヤな感じがするんです」
遠巻きに世紀の対決を見守る生徒は多い。

当の江梨花もあまりこういうシチュエーションには慣れないのだろう。彼女の顔は耳まで真っ赤で、遠目にも首筋をじつとり濡らす汗が見て取れた。

この場で平然としていられるのは幽香くらいのものだ。

「それはやきもち？」

一瞬きよんととして、江梨花は猛然と首を横に振った。

「まさか。流石にハジメ相手じゃそれはないですけど。私、けっこう理想高いし」

どう声をかけようかと悩んでいた青年の心に大穴をぶち空けたことには気づかない。江梨花の目には、もはや幽香はあこがれではなく敵としてのみ映るようだった。

「あなたが来てからおかしなことばかり起こってます」

傍で聞いていれば言いがかりも甚だしいことを口にする。それでも彼女の言うことは的を得ているのでハジメは静かに驚愕しながら幽香の答えを待った。

「そうね」

「素直ですね」

「まあね」

「だつてさ。ハジメ、どう思う？」

この日の江梨花はいつになく意地が悪い。

中庭の様子を見守る目が一齐に向いたのを感じて、ハジメはまるで舞台にでも立っているような気分になる。緊張か陽気か、日差しの中に踏み入ると背筋がすぐに汗ばんできた。

「お前が俺のことをそんな風に思ってるって知って、傷ついた」

「そっじゃない」

もはやお茶の濁しようがなかった。

江梨花と幽香と、その他大勢の視線が降り注ぐ中でハジメは口を開く。ひと月前ならもう少し悩む余地もあったかもしれない。

しかし、遊園地の花畑に降り立った瞬間からハジメの腹は決まって

いた。

「江梨花は、こいつを勘違いしてると思う」

ハトが対空砲火でも喰らったような顔で、暫く江梨花は佇んでいた。

「ねえ、あんたこのままじゃ本当に卒業できなくなるわよ」

「だとしても俺にとって幽香は命の恩人で、数え切れないくらい世話になってきた。だから今更、こいつが何をしようが構わない」

彼女の背後からにゆいと首を伸ばしてハジメを見る幽香でさえひどくあいまいな顔をしているので、つまるところ彼の言葉はどちらを納得させることもできなかつたということになる。

「一年そろそろ卒業が伸びたってかまわない。こんなによい女が彼女なんだから、割と人生安泰だつて」

引つ込みがつかなくなつたとはいえ、感心するほどの開き直りっぷりである。

真一文字に唇を結んでハジメを見つめていた江梨花は、やがて気が抜けたようにオーバーに肩を落として見せた。

「あつそ。余計な御世話だつたつてことね」

歩いてくる彼女と目を合わせるができない。

季節を読み違えた春の鳥がびゆるびゆる鳴いていた。そいつの空気の読めなさに何処ぞの誰かの妹の姿を思い起こしていると、すれ違いざまに江梨花がハジメの肩をどやしつけた。

「もうアンタのこと、助けてあげないんだから。せいぜい末短くお幸せに」

遠巻きに見守っていた生徒たちの輪へと乱暴に分け入ると、背の低い彼女はあつという間に見えなくなる。

「怒らせたかな」

じんじんする肩口をさする。

ただ一つ確かなのは、彼女がハジメとラーメンを食べに行くことは、もうないだろうということだけだった。

「ハジメ。あれはちよつとばかり酷いわね」

薄ら笑う幽香。

最近は彼女の心の動きが読めるようになってきた。特に今のこれは分かりやすい。

「どうしてお前まで怒ってるワケ？」

彼女は無言でニコニコ笑ったままハジメの手元に弁当箱を押し付けた。

「ねえ、一緒にお昼しない？」

近くの生徒の一人に向かって手を振って去っていく彼女の背中からはやはり無言のうちにハジメを非難している。

とにかく今日は一人で食べ、ということらしかった。



大きな土鍋のなかでぐつぐつ煮える豆腐と野菜をつつきまわしながら、ハジメは背中合わせに流しに立って洗い物をする幽香の様子をうかがう。

「なあ」

答えはない。

「なあつたら。勝手にしゃべるからな」

結局彼女の不機嫌は家に帰ってからも続いている。

おそろおそろハジメが台所に足を踏み入れた時も、彼女は黙って菜箸を押しつけてコンロで煮える鍋を示しただけだった。

「俺、自分の能力ってヤツについて考えたんだけどさ」

それが無駄な言葉にならないかどうか不安だった。振りかえると、幽香は彼の視線を感じたのか僅かに頷いてくれた。聞く気はあるらしい。

「ずっとずっと半端な威力の弾を撃ちだすのが精いっぱいだったのに、昨日は違ったじゃんか。だから、もしかすると俺の力は『怒りを撃ち込む』とか『激情を形にする』とかなんじゃないかなって思ってる額の汗をぬぐう。鍋の熱気をうっとおしく感じるくらい、最近は温かい。

つまみ食いした湯豆腐が思いのほか熱く、思いのほかおいしかったので、ハジメは暫く間を置いてから続けた。

「実際、あのクジラのバケモノだって俺の能力でボコってやれたわけ

だし」

「うああああっ、やられたああ」

玄関から転げ入ってきた杏奈が見えた。そのままリビングで地団太を踏む彼女を前に、千晃は心底面倒くさそうに雑誌から視線を外した。

「何。うっさいな」

「千晃ちゃん冷たいよ。ねえ聞いてよ千晃ちゃん。ちゃんちあ」

「ああもうベタベタしないでってば。親なら娘の名前くらいちゃんと呼べっつーの！」

思わず幽香と顔を見合わせて、ハジメはリビングの窓にかかったカーテンを開け放つ。

「うわ」

見るも無残なスクラップと化した彼女の車を前に、ハジメは呻いていた。

「まだ明るいのに、堂々としてやがる」

遊園地での一件以来、例のクジラは一層見境なく暴食を行うようになっていた。不運にもこの日の犠牲となった杏奈だったが、よくよく考えれば堂々とひと月近く路駐を続けた報いのような気がしないでもない。

「あー、もう。いいや。サツ呼んでくる」

勝手にがくがくとゆすっていた千晃をこれまた勝手に放り出して彼女は携帯片手にリビングから姿を消した。こここのところの騒動で手一杯の警察はどこまで杏奈を相手にしてくれるだろうか。

「ずいぶん、つまらない結論ね」

虚を突くように幽香が口を開いた。

「能力とは願望を叶える手段。あなたの本質のあらわれ。それが、だれかれ構わずあなたのイライラを押し付けるような下らないモノでいいのかしら？」

幽香は失望を隠そうとしなかった。

「だって、千晃がさらわれた時も、遊園地するときも俺は頭にきてたじや

んか。幽香は見えてないだろうけど、ユキと戦った時もキレてたし」
「回答としては四十点くらいね」

まるで答えを知っているような口ぶりだ。彼女はハジメの手から菜箸をひったくって、いつの間にか煮えきっていた鍋の世話に取りかかる。

「あなたの本質は、きつともつと素敵なものよ。さて、お父さんと呼んできてくれる？」

コンロから土鍋を下ろしながら、幽香はああそうだと呟いた。

「あれは別に怒っていたわけじゃないから」

「……じゃあさつきまでの態度、なんだよ」

「呆れていたのよ」

ハジメが釈然としないのを見て取ると、幽香はまるで出来の悪い生徒に接する教師のように、一言一言噛み砕いて口にした。

「私をあなたが殺したら、後に残るのは江梨花やユキたちなのよ。今からどちらを大事にするべきかなんて、考えるまでもないでしょ」

「それこそつまらねえよ。殺し合うからこそ仲良くしようっていったのはそっちだぜ。今はあんたのこと、本当の家族だって思ってるし。それ以上だつて」

面と向かってそんな言葉を吐くのが照れくさくて、知らず足元に視線を落としていた。だから、困ったような幽香の笑みを見逃してしまった。

「やっぱり、あなたはずるいことを言うのね」

懐かしい台詞に弾かれたように顔を上げると、幽香はすでに背を向けていた。珍しく『人間のフリ』を忘れた彼女は熱々の土鍋を素手で持っていたので、気づいた千晃が腰を抜かしていた。



「はい、あーん」

「あーん」

恋人の真似ごとまでいぶ上手になったハジメが臆面もなく大口を開く。見かけ上はラブラブのカップルを演じきる二人を前に父は悔しそうにご飯をかきこみ、事情を知る杏奈はニヤニヤ笑う。

「ねえ、くそあにき。一ついいかな」

そして唯一無表情なのが千晃だった。

油断しきったところに煮えたぎる豆腐を放りこまれて悶絶する兄などお構いなしだ。

「どうしてお姉ちゃんを好きになったのかってことなんだけどさ」

ずっと前にそんな質問を千晃にした。

今度はハジメ自身が問われる側になったというだけのことだ。

「決まってるだろ」

口を開いて、閉じて、また開いて。

人のいなくなった遊園地では簡単に形にすることが出来たはずの言葉が、とっさに出てこない。

「さんにーいちはいおしまい。時間切れ、だよ」

ぱんぱんと手を打って、千晃は意地悪にほくそ笑んだ。

「なんだそりゃ」

「敵を待つてやるほどわたしはアマくないのだ。で、今度はお姉ちゃんに質問タイムなんだよね。いい?」

文句を言ったところで千晃がハジメの言葉を聞いてくれないのは明らかなので、さっさと茶碗を取り上げていい具合に冷めた湯豆腐を掻きこむ。

その横に座る幽香が目で促したので、千晃はおもむろに口を開く。

「お姉ちゃんははどうしてこいつと付き合いだしたワケ?」

「好きだから。そんなに不思議なことかしら」

ふと手を止めて盗み見た幽香はまっすぐに千晃を見つめ返しているところだった。父も母も今や二人のやり取りへと神経を集中させていた。唐突に訪れる張り詰めた時間。ようやくCMが明ける。あれほど気になった番組の続きも、今やどこかよそよそしい。

「……フシギに決まってるじゃん。てゆうーか怪しすぎ。好きだから、なんて」

「もしかして、ウソだとか疑っちゃったかしら?」

「ごめんね。だけど、本当にこんなフツツカなあにきでいいの? お姉ちゃんならもつと、ぜいたくできるよ」

むしろ二人のウソに気づきかけていたはずの千晃が居心地の悪さに襲われるほど、幽香の瞳は妹を捉えて小揺るぎもしなかった。その澄んだまなざしはハジメですら不安になるくらいだ。

「あなたが思うほどハジメはお粗末な子じゃないと思うわよ。まあ、この子は確かにバカなことばかりしてはいるけどね」

「むむ」

二人からさんざん言われて立つ腹もあった。しかし口をはさむのが下策だということは分かっていたので、バカは大人しく黙って成り行きを見守ることにする。

「言ってる」

無関心を装って口に運びかけた箸は、結局なにも出来ぬままに豆腐をお碗に持ち帰ることになった。

「どうしてハジメが好きになったのか。か」

息を吞んで、ハジメはそれを見つめる。

洗いざらしの分厚いジーンズの生地越しにも、ひんやりとした感覚が伝わってくる。掌からするりと箸が抜け落ちていくのを知りながら頭の処理が追いつかない。

隣を見る。心配しないでとでも言うような幽香の微笑みにクラクラくる。

「あにき、ハシ落ちたよ」

ハジメの膝に置かれていた幽香の手は、子供をあやすようにぽんぽんと膝を叩くとテーブルの上へと戻っていく。

「分かってるよ」

千晃がいぶかる前にギクシヤクと動き始めるも、距離を計りそこなった彼は額をしたたかにテーブルの角にぶつけ、小声で悪態をついていた。普段なら千晃や杏奈がけられけらと笑ってくれそうなものだが、今日とはとことん静かだ。

テーブルの下で箸を掴んで、耳を傾ける。

考えているのか、まだ千晃を見つめ続けているのか、幽香はそう簡単に答えを口に出そうとはしない。

テーブルの下にいるハジメには千晃の爪先が緊張に耐えるように、

くつと丸まっているのがよく見えた。

「私がハジメを選んだ理由なら、そうねえ。まずは彼が私にとって大切な約束をしてくれたってこともあるのだけれど」

けれど、の先はハジメも知らない。

8 『鶴見家、最後の晩餐（下）』

けれど、なんだ。

胸を悪くしそうなほど心臓が高鳴っているのが分かる。テーブルの下でシャツの胸元を握りしめる。

——落ち着けたらみつともない。ただの演技だろ。

そう己に言い聞かせてみても、やっぱり思春期とは度し難いものだ。

幽香の口から吐かれるものが嘘であると分かっているのに、心のどこかでは期待している。もしかしたら、ひよつとしたら、もしかしてだけど、ワンチャン、メイビー？

「私ね、花が好きなの」

足を組みかえて、幽香はテーブルの面々に赤い視線を走らせた。

「うん。それは知ってる、けど」

「千晃はどうかしら。花、ないなら野菜でもいいわ。何か植物を育てたことはある？」

「小学校で、トマトとかホウセンカとか」

今となっては人間社会に適応できないくらいに空気の読めない千晃だが、信じられないくらい上手くやっていた時期もあるのだ。真夏の太陽の下。半泣きの妹と一緒に彼女の自由研究からアブラムシを一匹一匹つまんでつぶした記憶がよみがえって、テーブルの下のハジメは知らず口元を緩めている。

「いいわね。なんだか千晃らしい」

「でも枯らしちゃったんだ、ぜんぶ」

顔色を窺うように上目遣いの千晃を見て、幽香は声を漏らして笑う。

「当然生き物ですもの。上手くいくときもあれば、そうじゃないこともある。私だって、たまには失敗もするし」

「お姉ちゃんが？」

「もちろんよ。私はだいたい完璧だけど、神様じゃないもの」

「お前、それマジで言ってるのか」

ツツコミを入れたハジメの顔面に爪先が叩き込まれた。こんな時でも幽香原理主義、ハイルお姉ちゃんの千晃は容赦をしてくれない。「ごめんね、あにきがドザコのナメクジ野郎で」

静かに悶絶したハジメを見て、杏奈は相変わらず愉快そうにけらけら笑う。

毎日の行動範囲は半径数メートル。運動らしい運動がせいぜい階段昇降のクセに、千晃はいい蹴りを持っていた。

「それで花とあにきと、どんなカンケーがあるの？」

「虫を取ってあげて、毎日水をあげて、土が痩せたら栄養をあげて、日の光を一番気持ちよく浴びられるように工夫して。それだけ頑張ったのに結局最後は枯れちゃって」

父が無言でテーブルの下に放りこんだティッシュを血まみれの鼻に詰めながら、ハジメは幽香の言葉に耳を傾ける。出ていくタイミングは完全に見失っていたが、ここで全てを聞くのが一番正しいような気もした。

「正直言っただけだけど、その時の感想はどうだった？」

千晃はすぐに答ええない。ハジメの目の前で、彼女の足がぶらぶらと揺れていた。

「……………めんどくさいって思ったかな」

てつきりお姉ちゃんに嫌われたくない一心で嘘をつくものと思っていただけに、千晃の素直さはハジメを驚かせるのに十分なものだった。

「そうね。花を、というよりも誰かを育てるって、面倒くさいことよね」

テーブルに頬杖ついた杏奈にも思うところがあるのか、涼やかな美貌を苦笑に歪めた。

花々を我が子のように愛してやまない幽香の口から発せられた言葉は、ハジメと千晃の耳を疑わせるようなものだった。

「そんな当たり前に気づくまでとんでもない時間がかかっちゃったわ」

まったくもう嫌になっちゃう。勝手に納得してうんうん頷きなが

ら朗らかな笑みを浮かべた幽香は、もう語ることは語ったとばかりにきゆうりの漬物をぼりぼりと噛んだ。

「えっ、ちよっ、お姉サマが何を言ってるのか、わたし一ミリもわかんないんですけど」

「私ね、面倒が好きみたい。花も、そして、実は人間も」

とりあえず理由もなくテーブルの下の兄の顔をふんづけてから、千晃はおずおずと手を上げる。

「えーと。あれ、ええと。わたし、何を聞こうとしてたんだっけ」

「落ち着いて」

「落ち着く」

言われるがまま、千晃は素直に深呼吸する。

額を覆っていた手を取り払って現れた彼女の顔には頼むから勘違いであってくれと言いたげな苦々しさに彩られている。

「つまりお姉ちゃんはあにきが面倒なヤツだから好きになったってこと？」

「おかしいかしら」

「そんなの絶対おかしいよー！」

ハジメは点々と床に飛んだ血を拭く。

「とことん面倒でとことん手が掛かる。おまけに私の言うことは八、九無視。絶対に思い通りにいかないハジメが私は——大好き。ふふ、困ったことにね」

「うわあ、お姉ちゃんが大変だ」

ハジメが思った通りの感想を千晃が口にした。

ティッシュを鼻に詰め直して、おそろおそろテーブル下から顔を出してみると、千晃たちがまるで別の星からやってきた生き物を見るような目を幽香に向けているのであった。

奇しくも、それは的中している。彼女は幻想郷と呼ばれる異世界に生まれた、妖怪という種族だ。

「とんだ犯罪者め」

驚きの色を顔に残したまま、父がハジメに向き直った。

「いいか絶対幽香さんを逃がすなよ。こんないい人、絶対絶対、巡り

巡って来世でも会えない」

「こんなバカ息子に来世があるか心配だけどねえ」

随分と勝手なことを言ってくれる親たちはさっておき、千晃は暫く陸に打ち上げられた魚のように口をぱくぱくとさせていた。

「あら、鼻血なんて。どうしたの？」

幽香が首を傾げた。

その原因となった千晃の足が今もテーブルの下でハジメの向こうずねを蹴っ飛ばしている。蹴り続けながら、ハジメを見つめる。

「あにきはヘタレだよ。ここぞという時に裏切られて、傷ついてほしくないよ」

「大丈夫」

その間もべちべちと千晃の足裏がハジメの足を蹴る音が響いていた。痛くは無いが、うつとおしいことこの上ない。少しは冷静に考える時間を与えて欲しかった。

「あなたのお兄ちゃんをずっと見ていた私が請け負うわ。確かに彼はへたれだけど、本当の土壇場で逃げ出したことなんて一度もない。散々弱音は吐いてくれたけどね」

「マジ？」

なんて間抜けなことを口にするのだと思う。

呆然としたままのハジメを意味を計ることが難しい微笑で一瞥してくれただけだ。もはや彼女が演技でこの場にいるのかどうか、彼は見当つかない。

「……………よかったね、あにき」

千晃は一度爪先で小突いて、それきりハジメには何もしようとはしなかった。

「いいじゃん。お姉ちゃんにこんだけ言わせただからさ。綺麗に咲かないとダメだよ」

「なんだよ、それ」

「あーあ、もう一度トマトでも育ててみようかなあ」

千晃がダイニングのイスに体を乱暴に預ける。ぎしりという背もたれの軋む音がそれまで張りつめていた緊張を一気に解きほぐして

いくようだ。

「幽香ちゃん、醤油とつて。うん。ありがとう」

そんなモノお構いなしの杏奈が真っ先に行動を起こすと、鶴見家の食卓は今度こそ、何事も無かったかのように再起動が掛かる。

濃い味付け派の杏奈がじゃぶじゃぶと湯豆腐に醤油をぶっかけつつ、ハジメの視線を追ってテレビに見入った。

「例の金物泥棒、さっさと捕まらないかねえ」

さっきの今で車を破壊されたばかりだというのに、杏奈はすでに他人事のように話す。その横顔は十代の甘酸っぱい色香を漂わせてみたと思えば、とたんにしっとりとしたオトナの魅力を垣間見せてみたり。

「ん？ どーしたよ」

「あなた、本当に人間なのかな」

「失礼な。私が人間じゃなかったら、ハジメだってそうなるんだぞ」

ハジメはそんな変幻自在な怪人が自分の母親だとは信じられない。それでも、この予測不能さであれば、確かに石のような父のハートを射止められたのだろうと納得もする。

唐突にケータイを取り出した杏奈は、ハジメに向けてシャッターを切った。次いで千晃。最後に無理やり父の肩を抱き寄せて、ツーショットを撮る。

「——うむ。こんなもんかな。ねえハジメ、母さんからもいつここへ聞きたいんだけどサ」

携帯をいじりながら、至って何気なく杏奈は口火を切った。

「例えばだけど、幽香ちゃんが怪物だったらさ、ハジメはどうする？」
「それでこいつの作る弁当の味が変わるんじゃないや、別にどうでもいいな」

ので。ハジメも特に何も考えずに答える。答えてから、違和感に行き当たった。

「いいねえ。そういう勢い、すっごく好き」

「どうしてそんなことを聞くわけ？」

「ふふん」

こういうとき、杏奈が答えるような相手でないことくらい分かっている。至つてにこやかに、それでも不気味なプレッシャーを滲ませて彼女は手を組んだ。

視線は今もテーブル上の携帯へと向いている。それでも、彼女の全神経が剣の切っ先のように突きつけられていることを感じた。

「じゃあさじゃあさ。幽香ちゃんがバケモノだったらどうする？」

「だから、そういうのはどうでもいいって」

「バケモノと怪物は違うよ、ハジメ」

母の言葉に、言い知れぬ不安を覚える。指先はいつの間にかポケットの中にあつて、温まりきった五円玉を探していた。いつだって、苦境に陥る度にこの感触を頼りに己を律した。

裏を返せば、ハジメは自らの窮地を、この何気ない会話の中に悟っている。

「怪物は生まれついでのものだ。でもバケモノは違う。これは本質だ。ちよつとした間違いで、私も、ハジメだって、バケモノになり得る」

「殺人鬼とか、そういうモノってこと？」

「近いかもね。そののもつともつと、たちの悪いものって考えてくれれば。でさ、幽香ちゃんがそういうものになった時も、キミはちゃんと彼女を守つてあげられるかい？」

「いくらなんでも人殺しなら、大人しく御縄に」

「聞きな、ハジメ」

思い切り液晶画面をフリックして、杏奈の顔は変わらずニコニコしている。声色は窓の外に広がる初春の夜のように穏やかで気だるげだ。それでもハジメは怖いと感じた。

「この際倫理とかどうでもいいよ。キミは地球全体と幽香ちゃんと、天秤にかけてちゃんと重さを量れるかって聞いているんだ」

「なんだよ、それ」

「杏奈」

見るに見かねたのだろう。幽香がずいとハジメの隣から身を乗り出した。

「ハジメが困ってるから、やめて」

珍しく、非難するような物言いだった。

「今、幽香ちゃんと話しているように見えたかな？」

スマイルを維持したままの杏奈が発射した魚雷は見事に幽香の差し向けた助け船を轟沈した。

「すぐ終わるからね。ありがとう」

杏奈は組んだ手の上に顎を載せて、喉を撫でられたネコのような笑みを浮かべる。

「陳腐な物言いをするね。キミは全世界を敵に回しても、幽香ちゃんを守り続けられるかい。引き換えに千晃ちゃんとその石頭が惨たらしく殺されるって言われても、彼女のために突っ走り続けられるかい？」

貧弱な爪がへし折れる感覚があった。それほどまでに、ポケットの中の攻防は過熱していた。そんなハジメはうつむいたまま、言葉を練る。

「あにき」

今、顔を上げて妹の顔を見ることが助けを求めるように見えやしないかと不安で仕方なかった。

「私はそういうことをハジメに望んではないわ」

今日の幽香は少し妙だ。

「黙れってば。ねえ、これ以上イヤな言葉を使わせないでくれるかい？」

今度こそ泣く子も黙る大妖怪は困り顔のまま言葉を失った。

顔を伏せた幽香を見ると、ハジメの内にふつつつと怒りがたぎってくる。そう何度も彼女が手ひどくやり込められる姿を見ていると、何故か彼の方が悔しくなっていた。

「勝手なことばかり上から目線で言いやがって」

ここ数週間、収まりを見せていた杏奈への憎しみが一気に湧き上がりつつある。指先の感覚が無くなるくらいに五円玉の表面を刻む。

「あんただって、オヤジと何一つ上手いかなかったじゃないか」

「そうだね。ハジメたちにはこうなって欲しくないんだ。で、どうか

な？」

息苦しい。どうしてこうも鶴見家っていうのは上手くないかな。喉の奥に詰まった石ころを呑み下そうと、青年は唾を飲み込む。

「約束してやるよ。俺は」

「ハジメ、そろそろ頃合いだから言うけどさ。ソレ、母さんじゃないんだぜ」

「何？」

「五円玉は母さんじゃない。私だろ」

皆が首を傾げる中、ハジメにはその意味が分かった。

顔から血がさつと退いていくようだった。まるで、何気なく握手に手を差し出した瞬間に一気に全ての指をへし折られたような気分だった。

「やっぱり、根性無しのままかい」

——母からもらったお守りを、いつから藁人形の代わりに使い始めたのだったか。

「と言っても、正面衝突するべき私が出て行ったのもあるのかな。ゴメンね」

うつむいたままのハジメを尻目に、杏奈はにわかにもるんだ窓の外へと視線を馳せた。それまでテーブルの上に置いていた携帯をポケットにねじ込んで、彼女は席を立つ。

「さてさて、タクシーも来たみたいだし。それじゃあ一か月、楽しかったよ」

「出て行くって急すぎないか」

「そうかな。元からあんたにはひと月って言ったしね。明日一番の飛行機で帰るからさ、最後のお願い。アレ、廃車にしといてくれるかな」

未だうなだれたままのハジメを一瞥し、杏奈は千晃へと向き直る。

小動物のように体を引きつらせて、千晃は小さく唸った。

「千晃ちゃん、どうする。私と一緒に行くかい」

「——ごめんね。いやだ」

ためらいがちに。それでも強く、首を横に振る。

「そのそいつ、このままじゃ過労か自殺か。そのうち死ぬよ」

杏奈は父の眉間に指を突き付ける。三白眼が不平に細められた。

「縁起でもないことを言いやがる」

「死ぬよね」

「おいー」

あつさり千晃が同意したので、流石の父も声を上げざるをえない。「そうならないように自宅警備員が付いてあげていないといけなないじゃんか」

ためらいがちに手を伸ばして、杏奈が千晃の頭をくしやりとなぜ。もつと、と思わず頭を傾ごうとした妹は、ぶんぶんと頭を振った。「さっ、寂しくなんてねーし」

「うん。そうだね」

ハジメは大人の世界を殆ど理解できない。

きっと父と母の関係はこうして見えるよりもいろいろ複雑な事情とか思惑とか経緯があつて、別れざるを得なくなってしまうのだということだけはかろうじて分かる。

正直言えば杏奈が憎い。それでも、ハジメを含めて誰ひとりこの別れを望んだらうか。

「それはあげよう。私からのお詫びってことで」

杏奈の手で五円玉を握り込む手を包まれた時が、一番辛かった。

「じゃあ。アンタ、コレも含めて退屈しない男だったよ」

「次のヤツもそうだといいな」

「安心しな。アンタ以上はきつといないよ」

ドアノブに手をかけて、杏奈は振り返った。幽香の耳元に口を寄せ、彼女にだけ聞こえるように囁く。

「勝負、まだ終わってないよ」

その意味を幽香が問い返す前に、杏奈はさっさと家を出て行ってしまった。

「さて、ちよつと泣きいれてくるかな」

最初に立ったのが千晃で、その次が父。最後までテーブルについていたハジメと幽香も、どちらからともなく席を立つと、一言も交わさないままその場を後にした。

◆◆◆
「リフジンだよねえ」

ベランダ。千晃の短い髪を夜風が揺らしている。

その見つめる先にはF市の夜景がある。住宅街の灯りがぼつぼつときらめき、その先には駅周りの休まぬ光の渦が広がっていた。

杏奈の乗ったタクシーはどうにこの町を離れ、彼女は遠くのホテルで明日の朝を待っているはずだった。

「引きとめられればよかったのにね」

「分かっているよ正解を選べないときだってあるわ」

後ろからハーブティーを盆に載せてやってきた幽香の目は、千晃の目尻に時折輝くものを見て取っていた。それについて何も言わずにお茶を注いで彼女に手渡す。

「お姉ちゃんはいつでも優しい」

薄く笑って、幽香は口にお茶を含む。茶葉が宵闇の中に強く香った。そんなことに一抹のゆかしさを覚えていると、横顔を盗み見る千晃の視線に気づくのだった。

「ねえ、もしも、もしもだよ。私がつとずつとダメで、ヘタレだったら、お姉ちゃんは私のこともつと好きになってくれる？」

「あのね、千晃……」

「分かっているよ。あにきじやなきやダメなんですよ」

微かな声で笑ってから、千晃は欄干にもたれて肩を震わせ始めた。
「いいなあ。あにき、いいなあ」

すすり泣く千晃を抱き寄せてやりながら、幽香はぼつぼつと言葉を吐きだす。到底語るつもりは無かったことも、義理の妹を自称する少女の涙に後押しされるように、とぎれとぎれに連ねる。

「正直言っただね、私、そんなに人間っていうものが好きじゃなかったの。弱くてちつぽけで、そのくせ獲物を見つけると容赦しない。何を考えているか分からないから、私が弱いころはいつも怯えてたし」

「お姉ちゃんが？」

「ええ」

幽香が眉間にしわを寄せた。

「そう何度も思い出すものじゃないわね」

不意に漂わせてしまった殺気に千晃が慄きはしないものかと不安になるが、彼女は悲痛そうに目を伏せたただけだ。

「それを覚えてくれたのが、あいつなんだね」

「あの子は多分、自分が何をしたのかも分かっているのではありません」

千晃はブラウスの袖で思い切り鼻をすすった。場違いに下品な音が響く中、幽香は堪え切れず小さく吹きだす。

「花たちの美しさを語るの簡単だと思う。でも、花であることの美しさを私の目に焼き付けてくれたのは、ハジメが最初よ」

「よくわかんないけどあいつ、すごいね。うっかり尊敬しちゃうかも」
「遠慮しないで誇りなさい。あなたのお兄ちゃんよ」

「やだよ。兄妹の確執は海より深いのだ」

その代わり、今晚だけは、ばかあにきの味方でいてやるのも悪くないと思った。こういう時に兄が大人しく不貞寝したりしないことは、よく知っている。

「あにきの傍にいてやって」

付き合えば幽香も長い。千晃の言葉を待っていたように、彼女は頷いた。



眠った草木も飛び起きるほど騒々しくなることは明らかだった。

ガレージの扉をそろそろと開けて、ハジメは銀の車体を前に携帯を取り出す。幽香が運転するところは散々間近で見てきた。

「こんなん、簡単だ。簡単——かん、たん——かん——えー、つと」

『バイク エンジン かけ方』なんて打ち込むだけで赤面しそうな恥ずかしい検索を掛けながら、ハジメは暗闇の中で頭をかく。

「大人しく教習所に通いなさい。それに免許、持ってないんですよ」
カギを抜きつ差しつ無駄な努力をしているところにさっさとやってきた幽香がさっさと車体に跨るとエンジンを始動させてしまう。

「お前だって無免許じゃねえか」

ライダースーツに身を包んだ幽香の差しだしたヘルメットを受け

取って、ハジメはぼやいた。

「杏奈を追いかけるんでしょ。行先は分かる？」

「ああ。空港で待ち伏せる。高速に乗って、海沿いを走る方、分かる？」

返事代わりに幽香はエンジンを吹かす。

残されたバイクといい、いつかの練習で通ったルートといい。何もかも杏奈の掌の上なんじゃないかという考えを馬鹿馬鹿しく思いつつ、簡単に笑い飛ばす気にはなれない。

「それと幽香、その、ありがとな」

「お礼なら行動で示してくれるかしら」

「こ、行動？」

エンジン音がまるでせかすようだ。

それでもやるべきことは見つかった。

「全部上手く行ったら、あんたに言いたいことがある。それでいいか」

「それがお礼？——まあ、いいけど」

重い音を響かせて、バイクはその巨体を夜の町へと滑り込ませていく。二人の頭上には満月と、薄絹のような群雲。その狭間でしづきがあり、ヒレと尾を持った大きな何かの影がよぎった。

第十四話『鶴見家、最後の晚餐』おわり

9 『太陽の花（上）』

大きなトラックの真横を、電光のように一台の大型バイクがすりぬけていく。

「なあー！」

そのハンドルを握るのは、幻想郷と呼ばれる異世界からやってきた妖怪の女だ。歳はとうの昔に数えることをやめて久しく、ただ一人の青年との殺し合いの約束のためにこの世界に留まっている。

「なあつたらー！」

クラクシオンを今しがた浴びせてきたトラックの運転手は、猛烈な速度で遠ざかるバイクの荷台に小判ザメよろしくへばりついた青年がたわけた非日常の持ち主であるなどと、にわかには信じる事ができるだろうか。

「聞こえてるんだろ、幽香！」

「さあ、どうかしらね」

ノーヘルの妖怪が答えた。凶暴な風圧の中でも不思議と彼女の声は通る。そして青年の声も同じく彼女の耳に届いていた。

「出来ることなら運転に集中したいのだけれど」

「ちよつと話ぐらい、いいだろ。黙ってたら本当に凍えそうなんだ」

いくら日中温くなり始める季節であっても、夜となれば話は別だ。言いたいことだけを言って家を後にした杏奈に対する怒りの熱に浮かされていたハジメも、一時間走らないうちに薄着で飛び出したことを後悔し始めていた。

「その、晩飯の時のことだけどさ」

ヘルメットの内側にまで冷気が手を伸ばしてくる。いつの間にか、霧雨まで降っていた。ハジメはすっかり指先の感覚の失せた手でバイザーの雨粒を拭った。

「それだけじゃ分らないわ」

「だから、千晃に答えてたろ。どうして俺を好きになったか、とか」

「ええ。それが？」

バイクのエンジンが唸りをあげ、別の大型トラックを抜き越す。

「どのくらいマジで言ってたのかわかって」

僅かに身を乗り出して、幽香の横顔を覗き込もうとする。

危ないわよと器用に肘で彼を押しとどめつつ、彼女は眼前の闇に目を凝らした。ヘッドライトの切り取る限りには、本当に何も無い淋しい道が続いている。

「あれは、あなたがふざけて私を押し倒したのと同じようなものですよ」

背後からぐうの音が聞こえた。ハジメがあまりに予想通りの反応をするので、幽香は我知らずほくそ笑んでいたほどだ。

「それは、そのう、悪かったって、言ったらろ」

さらに不機嫌っぽくエンジンを唸らせてやるとハジメはことさらばつが悪くなったようで、暫くはごにごによごによと形にならない言い訳が飛んでくる。

「あんな嘘を本気にするなんて、ハジメって結構惚れっぽいのかしら」

「そ、そんなことねえよ」

「そうね、ハジメっぽく言えば。マジであり得ないだろうけれど、妖怪の私が人間のあなたと恋仲になったとして、あなたはその先に何を期待しているの?」

夕飯の席で彼女が見せた、誘惑するような、なだめるような笑顔がかすれて消えていく。

ハジメの頭を押さえつけてぶん殴り続けるような言葉の雨に、心が折れそうだった。

「まあ、いいわ。ところで杏奈ともう一度会って、それから?」

目的を思い出す。

ヘタレと呼ばれて、よくわからない覚悟を試されて。

追いついて一発かましてやらなきや気が済まない。この場に至って、何をしてやればいいのかも分からないままだが。

「わかんないけど。とにかくムカつくんだよ、あいつ」

あまりに子供っぽいことを口走ったことに気づく。恥じるように幽香の背中から目を離せば山間の闇はあまりに暗く、その深さに思わず眩暈を覚えた。

「それで憂いが晴れて、あなたが私と思う存分遊んでくれるなら構わないわよ」

「家族と殺し合いか。ずいぶん俺たち、複雑になったよな」
相変わらずの幽香にため息をつく、鋼が一層加速した。

「そういうの、覚悟の上で家族にしてくれたんじゃないの？」

風見幽香は女の子だ。

妖怪だが、少なくともハジメの物差しでは女の子だ。おまけに、彼女に散々な目に合わせられておいて、ハジメは彼女のが好きになりかけている。だから何とか最悪の結末だけは避けようと、この瞬間まで裏でいろいろと思案を巡らせてきた。

「違うの？」

違うのである。

機転のきかないハジメが上手く受け答えできるはずもなく、ただただ胸の内ポケットに突っ込んできたコインを握りしめた。不器用な沈黙に幽香は眉をひそめる。

「ねえ。だんだん不安になってきたのだけけれど」

幽香の背中と、世界が暗橙色の光に包まれる。

耳障りな轟きを感じたところで、ハジメは一拍遅れでトンネルに突入したことに気づいた。山間から山間へ。一つ二つとトンネルを抜けるに従って、潮の香りが強くなる。

海が近いようだ。

「ああ、そうだ。次のインターで一旦高速降りてくれよ」

降り口の看板に気づいたハジメが、助かったとばかりに唐突な大声を上げた。

「空港ってというのは、まだまだ先なんですよ」

「そうだけど、この先はまだ工事中なんだ。もともと別だった二つの区間を繋げる計画だとかで、でっ!？」

バイクは減速どころか、さらに加速する。

猛烈な加速に振り落とされそうになったハジメが幽香にしがみついた。

「そう。つまり近道ってことね」

ぐんぐん近づいてくるトンネルの出口が、まるでぽっかりと開かれた怪物の口のようなだった。

「だ、だけどまだまだ道路が繋がってないと思うし！」

ここを抜ければ海が見えるはずだ。まっさらの開けた水平線の開放感を想像するにしたがつて、しかし、胸騒ぎがしてならない。

「あのカタツムリの時も思っていたけど」

トンネルを抜けた瞬間に漂った生臭さに、嫌な汗がどつと噴き出した。

見渡す限りの水平線をバックに、すぐ近くにそれがあつた。真っ白な岩盤のような巨体が、雲間から差し込む月光を受けて浮かびあがるようだ。二人のバイクと並走するかのようにスピードを合わせてついてくる鯨の怪物。

その、血走った瞳だけが人間のものだ。

「ずいぶん妖怪から好かれるわねえ」

せわしなく動き回る瞳に気を取られていたが、相手は一体きりではない。

巨大な鯨の口からぞろぞろとこぼれ出してくるのは、遊園地で散々相手をしてやった鉄喰らいの蜂の怪異たちだ。

「いっはー！」

驚愕にハジメが目を見開くより早く、数コンマの時間差で彼の頭があつた場所を巨大な顎が掠めていった。

「つかまりなさい。振り落とされるわよ」

間一髪で命をひろったハジメは素直に従った。

蛇行するバイクの荷台にいて、聞こえてくるのは怒りに満ち満ちた咆哮だ。耳元でシンバルでも打ち鳴らされたような衝撃の後、アスファルト塊がバイクを飛び越えていくつも飛んで行く。

「無茶しやがる！」

振り返れば、小山のような巨体が大口で背後の路面を丸ごと削り取っていくところだった。

「そこまでしてもあなたをどうにかしたいのかしらね」

ハジメの体感速度は未知の領域に達しつつある。それでも悠々と、

だが怒りを込めたヒレさばきで巨鯨は追いつがってくる。

「幽香、ここで降りようー」

「却下よ」

当然のように最後のインターチェンジを無視して、鋼の巨体がうなりをあげる。

「ゆ、幽香、前、前！」

幽香が軽く視線を走らせただけで逆った暖色の爆風。

車止めの重厚なコンクリート塊は跡形もなく消し飛び、粉じんの渦巻く中をバイクが突っ切った。

「あら」

予告なしの出来事の後で激しく咳き込むハジメには知る由もなかったことだが、煙幕の間に微かに見えた人影を認めて幽香は声を漏らした。ミラー越しに見えるのは会釈したままの美青年と、挑戦的に腕組みした仁王立ちの少女の姿だ。

◆◆

駆け抜けるバイクに次いで、烈風が吹き荒れた。

雲霞のように押し寄せた怪異の群れが過ぎ去った時、そこには何事も無かったかのように二人の人影が佇んでいた。

「鯨と蜂ねえ。へんてこな組み合わせ」

ただし、その周囲はひどいものだ。

アスファルトは赤くじくじくと焼けただれ、ところどころに紫電がひらめき、焼け崩れつつある札がはらはらと宙を舞う。

「妖怪なんざ、みんなヘンテコなもんだろ」

氷のような美貌の吸血鬼が掲げた腕の先では首根っこを抑えられた蜂の怪異がじじたと暴れていた。

「あこがれの『幽香さん』以外は」

「そう、だ、よっと」

路面に叩きつけられた大蜂は体液を撒き散らして四散する。

得体のしれない体液を平然とジャンパーで拭う雪之丞を見ていると、霊夢は最近ますます人間離れしてきた彼が少しだけ心配になった。

「かつこいいなあ。びゅーんって。バイクびゅーんって」

が、それは杞憂だったのかもしれない。

ただただすす臭いだけの臭気の中に残り香を探すようにすんすんと鼻を鳴らしながら、雪之丞は数歩ふらついてめくれ上がった舗装に足を取られる。

そこで、ようやく我に返ったようだった。

「ま、まずいまずい。今の俺、ダサかった？」

「うん。こつちの人たちがよく言うアレね。ドン引きってやつ」

がつくり肩を落とした雪之丞。霊夢は遠ざかりつつある車体を顎でしゃくった。

「今日は追わなくていいの？」

「あの妖怪を倒せば、ハジメは何もかも知らなきやいけなくなる。ちようどいい機会じゃないか」

手持無沙汰に槍を振るって、いたずらに路面に突き立てて、吸血鬼は真夜中の月を見上げる。

「こんなにも赤いんだし」

いつのまにか肩に降り立ったコウモリたちと白銀の月光を見据える彼の瞳は、霊夢とはまったく別のものを見ているようだった。

「あんた、段々知り合いの吸血鬼に似てきたわ」

「お。そいつと俺と、どつちがいい男？」

「あっち」

「おいおい即答かよ」

確かに言うことなすこと男前には違いないが、本当は触れば倒れそうな色白の美少女だったりする。大げさにへこんで見せる雪之丞が面白いので、霊夢は黙っていたが。

「あーあ、落ち込んだらなんかハラ減ってきたわ。霊夢、ラーメン食いにいこ、ラーメン」

「またあの山もりの野菜？ アンタも好きねえ」

「付き合えよ。もう一緒に来てくれるの、お前と紫くらいだし」

元人間は、殆ど夜の闇に溶け込みそうなバイクの荷台を見つめた。バラバラになった友情が、この先元に戻る事なんてあるのだろうか

か。

「後悔、してる?」

「いや」

「即答かよー」

きよとんと、雪之丞は口の端をこれ見よがしに吊り上げた霊夢に向き直る。

「ユキのマネ、してみた。似てた?」

にへへと笑って霊夢は雪之丞の脇腹を小突く。呆れながらも笑って、雪之丞は身をかがめて霊夢の目線の高さに合わせる。

「もつとこう、厭味ったらしい感じで尻あがりに、さ」

彼の台詞を遮ったのは空気が破裂する音だった。

反射的に背後へ霊夢を匿った彼の目の前を通り過ぎて行ったのは、半ば光の筋と化した何か。

高速で飛行するそれが空中で幾何学的な軌道を描く度、にわかになの姿がぼやけた残像となってその場にとどまり、黒い羽が無数に舞った。

「私たち、眼中にないみたい」

とはいえ、『それ』の顔を見てしまった霊夢の声には微かに緊張が滲んでいた。笑っていた。どこまでも虚無的に。

「とうとう守護者のお出ましってワケ」

ハジメと巨鯨を追いかけて行った光の軌跡を、霊夢は睨みつけた。
「なあ霊夢」

「ええ。やーなかんじよね」



崇高な使命があったはずだった。

ちよこまかと逃げ回るバイクを追いかけながら、とろんと溶けかけた意識の片隅で鯨は思い出そうとする。

『それはもはや、思い出せないが』

声を忘れた喉が、代わりに呻きにも似た長い咆哮を引きずり出す。彼の体内を間借りする蜂たちを惜しみなく解き放ち、荷台の人間を粉々に引き裂けと命令する。

『たわいもない』

雲間を出入りする鯨を必死に探しては豆粒めいた弾丸を撃ち込んでくる人間には、あの日あの夜、不可侵である彼の体を傷つけたときの氣迫は欠片もない。

だが殺さなくては、と思う。

彼は無敵だった。この能力を持つ限り、無敵でなくてはいけなかった。だからこそ、彼の無敵性を脅かし続けるあの人間を排除しなくてはならない。

『殺さなくては』

崇高な使命を遂行するために。

崇高な使命があつたはずなのだが。

『だが、もう』

だがもう、自分には肉さえあればそれでいい。

鉄ではなく、もつと生臭い鉄の味が欲しい。肉だ。血の滴る肉。それも、ヒトの肉が食べたい。初めに肉ありき。そして終わりにも肉肉
肉肉肉ううううううう——



「聞けよ、幽香……」

片腕で幽香の肩につかまっていたまま、ろくすっぽ狙いもつけずにハジメは背後へと弾丸を放つ。一発の弾丸が空中で幾度も軌道を折り、数匹の大蜂を貫いて爆散する。それだけでは足りない。

「この先はマトモに舗装もされてないんだぜ！」

彼の言葉を裏付けるように、バイクが後輪を乱暴に跳ねあげた。尻を突きあげられてハジメが悲鳴を上げる傍で、幽香はバツクミラー越しに視線を送った。

鯨の大口が再度開いた瞬間、見えたものはまるで地獄絵図だ。やたらめつたらと詰め込まれた血まみれの鉄くずと、その間にびつちりと詰まった蜂の群れ。隙間から真新しいしゃれこうべがひとつ転げ出して、路面と一緒に噛み砕かれていった。

「こいつ、どうかしてる」

イカれ具合で言えば蝸牛の怪異は相当なものだったが、この鯨も外

見の優雅を裏切る異質さを持ち合わせていた。

「ご明察。大分おかしくなっているみたいね」

大蜂の追撃は苛烈だ。隙あれば車体に取りつこうとする彼らを、片っ端からハジメは撃ち落とししていく。いかせん片手では連射が足りたもんじやない。撃ち洩らしを避けてバイクは一層激しく蛇行した。

「いつっ——おかしく、なってる?」

弾丸のような勢いではじけ飛んだ礫に頬を切り裂かれながら、ハジメは問うた。荒れ放題の路面で車体は激しく跳ねあがり、口を開くだけで何度も舌を噛む。

「永く生きた妖怪には珍しいことじゃないわ」

どうしてか。とんでもなくイヤなことを彼女が言った、ような気がした。

「よそ見しないで」

「わ、分かっているよ!」

闇と轟音に紛れて首を狙ってやってきた大蜂を撃ち払って、ハジメは意識を目の前の事態に集中させる。輝く指を伸ばす先から、ぎらぎらとした殺意を浮かべて鯨が迫る。

「狂っても忘れられないのが、あなたへの執着なんでしょうね」

ハジメはただただ生き延びたいから、迫る鯨の鼻面に目がけて燃える銃弾を撃ち込む。燃える軌道は確かに鯨を貫くのだが、遊園地で対決した時のような手ごたえはない。

「霊夢と同じ力!」

『主に空を飛ぶ程度の能力』の名前によらない恐ろしさは身をもって学習済みだ。

「いいえ。あの子に比べれば、ちやちな能力よ」

幽香が答え合わせをする。

「シートをめくって内側に隠れるみたいに、位相を移している。この世界と半歩分ズレた場所にいるから、こちらから干渉することができない」

彼女の言葉を裏打ちするように、鯨の周囲を漂う雲海が虹色に輝い

ている。

「なら、霊夢を倒せたあんたの出番だ。そうだろ？」

それから数秒間は、完全に穏やかな時間が流れた。鯨と蜂の大群は様子見に徹し、幽香とハジメは上空に警戒を張り巡らせつつ、まっすぐに走り続ける。

「いいえ」

その沈黙を挟んで聞こえたのは、すげない答えだった。

「あれの最後に、貴方の手で死に花を飾ってあげなさい」

「なんだよ、それ。ワケ分からねえよ！」

爆音と風切りに負けないように叫んだつもりが、後半は大分尻すぼみだった。幽香の肩越しに、恐ろしいそれが見えたからだ。

「道が！」

と、叫んだ時には黄黒の停止柵を吹き飛ばした瞬間だった。

数十メートル先、もはや道はそこで途切れている。背後から重機を噛み砕いて鯨が迫る。あたりを囲む大蜂の群。

闇の中に対岸が薄ぼんやりと見える。そこまでの距離がいか程であらうと、バイクにとつては無限にも等しい。

当たり前だが、バイクは空を飛べないようにできている。

「ええ。見えてるけど？」

そんな絶体絶命の状況で、幽香はやはり、冷静すぎるくらいに冷静だ。

ハンドルから離れた彼女の手が光る何かを放った。数十メートル先、ぶつりと途切れた路面に緑色の輝きがいくつも灯る。

「杏奈はあなたたちを放り出すのが最適解だと思ったそうよ。私も彼女のやりかたに倣ってみようと思ったの」

路面を食い荒らしながらめきめきと暗闇に成長したものの正体を、近づくにつれハジメは見取取る。早くも青々と葉を茂らせ始めた巨木と、その強靱極まる根がゆっくりと持ち上げていく路面を。

「おい——おいおいおい、やめろ！ 流石にそれはムリだ、考え直せ！」

今や急斜面となってそそり立つ道路が意味するところを知って、ハ

ジメが叫ぶ。

「やってみないと分からないわ」

「やらなくても分かることだってあるんだよ!」

即席のジャンプ台へとバイクがぐんぐん加速する。エンジンの唸りはもはやもう一匹の怪物がこの場所に降り立ったと錯覚させるほど凶暴なものへと変じていた。暴れ馬じみた鉄塊を軽々と乗り回す妖怪は、

「へたれ」

「あ!?!」

あえて、禁句を口にした。

「少しはマシになったと思っていたけれど、本当どうしようもないわね」

出来るかどうかは別として、ハジメはもう少しで幽香の首を絞めあげるところだった。

「あの時の言葉で一つだけ確かなことがあるとするなら。私はハジメを信じているってことよ。あなたの能力と、あなた自身。あなたが思うより、あなたははずっとずっと強い」

怒りが萎んでいくのを感じつつ、ハジメは幽香にしがみついた。

「さあ、戦って」

タイヤが地を食む。

猛烈な加速がもう一度かかり、完全にハジメと幽香は重力から解き放たれた。

鯨が長く低く吠えて、強靱な顎でたつた今彼らが飛び立った地面を粉々に砕いていく。

子供の頭ほどもあるコンクリート片が背中を打ち、息が詰まった。

それでも、幽香につかまっていた手を離しながら、ハジメは狙いを定めた。

なおも日常にすがろうとする意識に楔を穿つように、一発一発、指先に燃える弾丸を装填していく。トリガーを引こうとして、ふと、不安に駆られる。

撃ってみろよと何かがささやく。

今夜撃てばもう、今度という今度こそお前は引き返せなくなるぞと。

それが恐ろしくて、もう一度だけ幽香にすがるように振り向いて、それを見つけてしまった。

「なにやっつてんだよ」

赤い花びらが散っていた。と、思えばそれは自分自身の右腕から迸ったもので、痛みと、そして深々と腕に食い込んだ大蜂の顎と、まったく逆の順序でハジメは出来事を整理していく。

「ともかく、いつかの借りは返したからな」

その言葉すら、すべてを認識できないまま、末期の息じみて口から吐き出されていた。

ハジメを探して幽香の手が宙を掻いた。ぎちりと大蜂の顎が一層強く腕を噛みしめ、荷台から彼は引きはがされた。

「ねえ、どうして」

空中に放り出された彼に、大蜂の群れが迫る。

ようやく己が身を呈して大蜂から幽香をかばったということに思い至った。焼かれようが、体の一部を斬り落とされようが平然と再生し、立ち上がる彼女を、たった一本の骨を繋ぐのにひと月かかる体で守るなんて、あまりにナンセンスだと、思う。

「痛^{いた}」

実際はどんと胸を押されるような感覚だけで、痛みなんて感じるヒマは無かった。それでも、そう言っておかなければいけないような気がしたので、それは半ば義務的な声だった。

—— ああ、これ、マジで死んじやうヤツじゃん。

ゆっくりと胸から引き抜かれていく針。勝ち誇るように羽音高く飛び去る大蜂。

へたれ呼ばわりした彼女にちよつとだけ後味の悪い思いをさせてやろうと、無事対岸に降り立った幽香に視線をくれてやる。

見えたのは派手に散った火花だった。

ハジメに手をさしのばしたまま着地のことを忘れた幽香が、バランスを崩して横倒しのバイクごと路面を滑っていくところだ。

「そつちこそ、俺に何を期待してたんだよ？」

足下から、彼をすくい上げるように鯨が浮上する。

全身がバラバラになりそうな衝撃を感じた瞬間には大きな洞窟のような口に丸のみにされていた。鉄骨と死骸と蜂が無数に詰めこまれた空間の天地が何度もひっくり返り、あちこちを切り裂かれながらハジメは鯨の胃袋へと滑り落ちていく。

何度も死地に投げ込まれてきたとはいえ、本当に死を自覚すると恐ろしいもので。

最後の最後でベそをかき始めるよりも早く気を失うことができそうなことだけをありがたく感じたまま、ハジメは瞼を閉じた。

血なまぐさい怪物の胎の中にあつて、それでも深い海の底にいるような錯覚を覚えるのは、やはり、その闇の深さ故なのだろうか。

どうしてここまで来たのかも、どうしてここまであがいたのかも思いつけない。

今はただただ、自分を取り巻く理不尽のあまりに息苦しい。

黄金の輪郭が、一瞬だけ見えたような気がした。

10 『太陽の花（下）』

『いいな。お前はお兄ちゃんだから、千晃にはお前の口から説明してほしい。実は――』



あまりにも血なまぐさい鉄と肉の世界で、ハジメは一本の鉄柱に体をひっかけてぶら下がっていた。

「ぐうえええ」

痛いのは生きている証拠という。今の彼は、ものすごく生きていた。

悲鳴をあげて胸の傷を確かめようとした腕は大蜂に噛みつかれたままの血みどろで、そのまま彼の体は鉄柱から滑り落ちて肉の床に叩きつけられてバウンドする。

汗まみれの背中の下で、床が脈動している。非常に残念なことだが、寝ても覚めてもここは怪物の体内なのだった。

「……あー、あ。穴、開いちやっただじゃん」

身動きもできないくらいにアレやコレやが詰め込まれた胃袋の中、掌からこぼれ出したエラーコインのど真ん中に穴があいていた。

「お前といい、幽香のやつといい、どうして、いつもいつも頼んでもいないのに俺の身代わりになろうとするのかね」

指先も動かす気になれないまま、ハジメは近くに転がったそれを見つめ続けた。

胸の傷はじくじく痛んでいた。それでも、このコインが胸ポケットに入っていないかったらもっともっとひどいことになっていた筈だ。

それが幸運だったとは言い難い。激しく動き回る鯨の腹の中、積み上げられた残骸の間から数え切れない気配が這い出しはじめていた。

「これ、エラーコインっていつてき。あのままだったらウン万するんだぜ。コーコーサーがそれだけ持ってたら、いったい何ができると思う？」

大蜂たちには目もくれず、五円を見つめる。

思えば『ちから』に目覚めたときから、この五円玉はずっとハジメ

の手のひらにあった。いくつものピンチを共に乗り越えてきた。胸を満たすような、彼にとつてのすべての息詰まりの象徴に、今風穴が開いている。

『私をぐしゃぐしゃに叩き潰して、その後は？』

誰かの声が聞こえたような気がした。

『夢や希望を見つけるとか、のぼせたことはもう言わないわよね』

時間は巻き戻る。最初の、業火の記憶に。

『じゃあ、死ぬしかないわね』

明日への夢も希望も語れない口なら、死ぬしかない。生きようとあがけないなら、死ぬしかない。生き残る力がないのなら、大手を振って消えて行け。たまに驚くくらいシビアになる彼女の意見を言葉通り受け取るのは簡単だ。

「きつと、そんなんだから友達いなかったんだろうな」

答えてくれる妖怪はこの場にいない。代わりに傷ついた彼のそでをぐいと引っ張ったのは一匹の大蜂だった。獲物に抵抗の意思がないと見るや、それまで遠巻きにしていた残りの蜂もがさがさと迫ってくる。

鶴見ハジメの野望とはどんなモノだったのだろうか。混濁した意識では思い出せない。

「つー、ことは、だ。俺は」

本当に、今度という今度こそ死ぬべき時が来たのかもしれない。



万事平々凡々で、波も風もない人生がお好みのルートだ。

日常に身を置きたい置きたいと望む心の強さに気付いたのは、人生のハンドルを大きく切りそこなったことに気付いた後だった。

『いいな。お前はお兄ちゃんだから、千晁にはお前の口から説明してほしい。実は——』

コンクリート打ちっぱなしのフロアに、がさがさと荒っぽくビニール袋をひっくり返す音だけが響く。手のひらをすりぬけて転がり落ちたスプレー缶の音が思いのほか大きく闇に響いて、彼は分厚いジャケットの下で体を強張らせた。

真夜中の建築現場なんて、そうそう誰かが立ち入るものではない。しばらく待って、音を聞きつけたものがないことを確かめて、彼は再び動き出した。

「ふざけんな。お前が言えっつての」

父への悪態をつく。ハジメが荒々しく吐いた白い息は、母がふかしていた紫煙のように彼の周りにしばらく漂っていた。

ある日家に帰ると母がいなくなっていて、彼女におんぶ抱っこだった鶴見家はいともたやすく瓦解した。あっけないものだった。母の不在を千晃にどう説明したらいいものかもわからないままに家を飛び出して、ここに来ていた。

「人生、マジでうまくいかねえ」

学業も思わしくなく、進学は絶望的だ。

みんなの『当たり前』を遂行するにはあまりに追い詰められていた。危うきには絶対に近づかない彼が踏み切った一夜限りの冒険は、そんな鬱屈から染み出た膿のような行動だった。

使ったこともないスプレーでさんざん手元を汚しながら、できるだけ大きくてきれいな円を壁に描きぬいていく。冷たくて硬い壁がきれいにぶち抜かれて、まったく別の世界につながってくれないものかと考えた。

もちろん何時まで経ってもそんなことは起きない。

「ああ、ああ、クソ。俺は何やってんだ」

ようやくその愚行ぶりを思い起こして、壁に手をつく。塗料が手を汚すが、そんなものはどうでもいい。もう片手は熱くなった目頭を押さえることで精いっぱいだった。

シンナーのにおいが喉に張り付いていた。吐き気を覚える。そもそも、息なんてできそうもないくらいに鳴咽がせりあがってくる。

壁に描いた穴なんて、一ミリの価値もない。

「そんなことは分かってたさ」

ただ、どうすればいいかわからなくて、息苦しかったただけだ。

さっさと言い訳を考えに家に戻って、この一件は気の迷いだっただけだ。思うことにしよう。

「――？」

壁から手を離そうとして、その陽だまりのような温かさによろやく気付いた。

「今、何か」

壁をなぞる。不思議な温かさは移動していた。探るように手を動かすうち、現実感のないままに壁の赤い円はその形を大きく変えていった。ハジメはよろよろと下がって、その様相を見つめる。

彼の前、円の周囲に幾本もの赤い線が描き足されていく。

やがて出来上がるであろうモノを確信したハジメの足は、自然と壁へ向かっていった。恐れなんてない。スプレーを手取る暇も惜しんで、生乾きの塗料をべったりと手のひらに押し付けると一心不乱に壁に塗りたくり始める。

やがて壁の円をぐるりと線が覆った頃になって、ハジメは背後に大きく反響する足音と、懐中電灯の明かりに気付いた。

「長い間警官やってると、不思議なこともあるもんだ」

顔を照らされて目を細めつつ、もはや彼の存在はそこまでハジメを驚かせなかった。自分でも信じられないくらいに気持ちが悪く落ち着いている。まるで壁の向こうで、彼と同じ理不尽を抱えた誰かが見守っていてくれるような気がしていた。

「真夜中にヘッタクソな落書きする不良少年少女は腐るほど見てきたけど、こんなかわいいお花を見たのはこれが最初だよ」

「花、ああ。そう言われればそうかも」

顔も見えない警官のシルエツトが首を傾げた。

「いや、花だろう？」

「花ですね、きつと」

世界が、宇宙全体が、もうすこしだけこの形に近づけばいいと思っただ。シンプルで、底抜けに陽気で、もつともつと風通しのいい形になればいいと、心から思った。

「ありがとな」

「さつさとしろ。たつぷり説教してやるから」

警官に背中をどやされつつ、一度振り返って壁へと指を向ける。

「ぼん」

見えない弾丸が放たれ、彼の中にある見えない塊を打ち砕いていった。すつと、深い息が喉の奥へと落ちていく。次々と襲い来る理不尽を前に、たとえ『野望』を忘れかけていても、その『かたち』はハジメの脳裏に刻印されている。

「これが、俺の本質なのか」

遠い過去の記憶が呼び起こすのは、抱いた野望と強大な力。

「こんな大それたものを俺が持ちこたえて、いいのかな」

その大きさに思わず身震いしていた。

いままでの能力は氷山の一角どころではない。指先で風に揺れる小さな小さなものもしびれは、その実は遠い星の瞬きだったのだ。自らの力で光り輝く、あまりにも大きく、あまりにも熱い星の煌めきが、彼の脳裏から浮かび上がり、目の前で形になる。

「俺は、平凡に生きたいから」

この夜だけは、日常を守るために、束の間の非日常を受け入れてやろうと思う。

「いくぞ」

意識を過去から現実に戻す——すでに息苦しきは消えていた。

蜂が体にのしかかると同時に、残骸の隙間へと伸ばしたハジメの指が、ようやく五円玉へ届いた。黄金色の光を灯す彼の指先で、湿った胃壁がじゅうと音を立てて焦げる。

◆◆

「そんな！」

勝ち誇るように夜空へ昇っていく鯨を前に幽香は叫びを上げていった。

あまりにあっけなく、彼女の——は、目の前で摘み取られてしまった。その固く閉ざされた花弁が開くと思われた矢先に、あまりに無慈悲で、あまりにあっけなくその機会を奪われてしまった。

「待ちなさい」

のしかかるバイクを軽々と押し上げて、幽香は立ち上がる。スタボ

口のライダースーツから覗く素肌に刻まれた傷はとうに再生を終えている。

「降りてきなさいよ、あなた——おい、お前」

彼女自身が驚くほどの怒りにとらわれていた。

ぞわりと髪を逆立てた幽香。赤い瞳が物理的な圧を伴った殺意をほとぼしらせる。彼女などおくびにもかけずに去っていく鯨めがけて最大級の攻撃を準備する。例え次元の隙間に逃れようと、今の彼女なら余裕で手が届く。

しかし変化は、彼女が手を出すよりも早く訪れた。

憎たらしくでっぷり肥えた鯨の腹がぷうと膨らんだと思うと、ぱんと音を立てて水風船のように割れた。内臓と血と無数のガラクタがばらばらと降り注ぐ。鯨が驚きに身をひねり、彼の脇腹に開いた大穴から赤い塊が滑り落ちた。

「今になって俺は思うんだ」

まとわりついた血と肉は、内側から放たれる莫大な熱によって瞬間にチリとなって消えていく。数十メートルを落下したにも関わらず、それはふわりと、重さを感じさせない軽やかさで地面に降り立った。

「あれは、太陽だったよ」

彼の足元の舗装が、ぼこぼここと沸騰を始めていた。

ハジメの背中と呼応するようにそれが乾いた音を立てて展開していく。巨大な光の環。そこから放射状に広がり、宙に固定される光で織られた槍。彼の言葉が示す通り、遠目に見えるそれは子供が描くお日様だ。

「くだらない夢と笑えばいい。かなわない夢と嗤えばいい」

ついで、と。彼が走らせた指が宙に光の軌跡を描く。

「それが俺の本質なんだ」
じやり。

彼の足元から吹き上がった炎は星の輝きを秘めている。黄金の焰が立ち込める領域は加速度的に空間を侵食した。

「勉強して、いい学校へいこう」

幽鬼のような彼の足取りは、いつしか確固たる決意を秘めた行進へと変わっていた。煌めく炎に包まれて、彼は空を見上げる。

「もうちよつと千晃が胸を張れるお兄ちゃんになろう。いい学校へ行ったら、いい会社へ行こう。そしたらオヤジがクソみたいな職場で働かなくてもよくなる」

足元にまで波のように黄金の炎が押し寄せてくる。幽香は思わず爪先を退いていた。

彼女の眼には傷つききつた体を揺らして歩くハジメが、まるで風に揺れるあの花に見える。日輪を背負った姿が、太陽に焦がれるあの黄金の花に見える。

「……………そうしたら?」

火廻りの向日葵に問うていた。

「そうしたら母さんを迎えに行つて、もう一度俺の家族を一つにする」
それこそが、鶴見ハジメが抱いた野望だった。彼の内の小宇宙から引きずり出された力は、彼の夢を叶えるためだけに彼という一存在をどこまでも加速する。それは彼の放つ黄金の弾丸でさえも例外ではない。

大地を揺るがすような咆哮。

どてつぱらを吹き飛ばされたダメージから立ち直った巨鯨が血走った眼をハジメに向ける。痛みと怒りで理性の残りカスをも失った彼は、全身に巣食う大蜂の怪異を総動員しようとしていた。

「俺はもう、なりふり構っちゃいられなくなったんだ。だから、今のうちにとけ」

臆さず、指を向ける。

「じやなきや俺がどかす」

当然言葉は通じない。しかし彼の戦意は通じた。

大きく開かれた鯨の口の中に現れた暗い光が一斉に解き放たれる。群青の空を真っ黒に染め上げる大蜂の群れはまさに雲霞と呼ぶにふさわしい。

「ハジメ」

圧倒的な物量差に手を差し伸べかけた幽香は、青年の輝く双眸に見

据えられてその手を下げた。

「ちゃんと見てる、からね」

決然と向日葵が揺れた。

あらゆる方角から押し寄せる蜂の大群は幽香など眼中に置いていない。固唾をのんで見守る彼女に対して、ハジメの一步目はけがを感じさせないほど軽やかだ。

彼の指先から打ち出されるものは、もはや指鉄砲と呼べるようなものではない。空中で軌道を折ることもなく愚直に直進するだけの弾丸は、しかし正確無比に大蜂を射抜いていく。

空中に燦然と輝く銃弾の群れはまさに弾幕だ。

「続けるか」

すでに彼に従う焰の背丈は周囲にそびえる街灯の残骸を超えている。無数の蜂の骸が煙の尾を引いて降り注ぐ中、ハジメは挑戦的に鯨を見据えた。

返答代わりに巨鯨は体表を激しく光らせた。攻撃の予兆を読み取ったように背中 of 光輪が周囲の炎を巻き込みながら差し伸べた腕の前に現出し、巨大な燃える盾を形作る。

鯨の体表の孔から放たれて豪雨のように降り注いだものは、赤く加熱された鉄杭だ。それが咄嗟に身をひるがえした幽香の防御を破って頬を掠め、生き残りの大蜂たちも容赦なく貫いていく。

無数の展翅標本が出来上がっていく中、平然と立っているのはハジメくらいだった。

「まだ、続けるのか？」

再度問うた声は淡々としている。

もはや彼の目の前で血と臓物を垂れ流す妖怪は大敵などではなく、彼の野望へと至る道に転がる障害物でしかないからだ。

彼が盾を降ろすと、完全に溶かされた金属のしずくが地面にこぼれた。

「やっぱりあなたなのね」

雄たけびで幽香のつぶやきをかき消して、鯨が最後の攻撃に踏み切った。それは超弩級の体軀をそのまま彼にぶつけることだ。それ

は威力も超弩級。山一つぶつけられるようなものだ。生身の人間には避けようも、耐えようもない。

「幽香、少し近くに来てくれるか」

今いる高架ごと消し飛ばされるかもしれない段になって、ハジメは落ち着き払って片手を幽香に差し出した。

「え」

「そこは危ないと思う」

黄金の領域にいざなうハジメを前に、幽香はわずかに躊躇した。

「大丈夫だから」

おずおずと足を踏み入れた彼女を、黄金の炎は受け入れた。彼女が感じるのはいずれもすべてを焼き払う熱ではなく、陽だまりのあたたかさだ。

「俺の能力、ようやく分かったんだ」

二人の見上げる先には徐々に加速しつつある鯨。対するハジメはいつものように、人差し指を持ち上げる。

「今ならもう少しだけ、この世界の風通しをよくできると思う」

群青、茜、赤、黄金。きらきらと輝く朝の海と高架。繰り広げられる壮絶な一騎打ちの様相に、世界が驚くほどの美しさで皮肉を添える。

黎明に吹き渡る風が彼の黒髪を揺らす。幽香の前でハジメの日輪が形を変え、巨大な砲身を形成していく。その先端で徐々に輝きを増し始めるのは究極の閃光だ。

あらゆる物理法則と概念を無視して、彼の放つ弾丸は立ちはだかるすべてを破壊して直進する。それが彼の本質であり、野望を叶えるために必要な手段だからだ。

「あんたが好きだ」

渦巻く巨大な力の唸りにかき消されてしまったのか、青年のささやかな告白に幽香が反応を見せることはなかった。

「何か、言ったかしら」

「いや」

それでもいい。

へたれと呼ばれ続けた彼の踏み出した小さな小さな一歩が、砲身に

さらなる力を与える。反則級の一撃を可能とする力を、『風穴をぶち開ける程度の能力』と、彼は呼んだ。

「なりふり構^ブつちやいら^ラれないんだ^ス」

彼を奮い立たせる言葉はそのままトリガーとなり、弾丸となった。明朝の空を焼くのは極大の閃光。

『あ』

鮮烈な痛みに、鯨の理性が束の間揺り戻された。

目の前にはひとりの人間。人間。かつて誰かと交わした約束を思い出す。彼がいたずらに、どこかの少年とひそかに結んだ約束を。

『ああ』

勢いを失った彼の体は大きく軌道を逸らして落ちる道を選んだ。

一射目は彼の右半身を正面から丸ごとこそげ、遙か彼方で海面に巨大なきのこ雲を噴き上げる。

『こんなザマじゃあオマエとの約束、守れないじゃないか。なあ』

せめて、最後は威厳だけでも保ってやろうと思ったのかもしれない。鯨は傷ついた体に鞭打って、今まさに第二射を放たんとする黄金の大砲へと頭を向ける。間髪入れず撃ちこまれた圧倒的破壊力が、彼の最後の理性ごと頭を刈り取っていた。

「まだよ」

鯨が落ちる傍から幽香はあたりに視線を巡らせた。

その伏兵たちにはハジメも気付いている。この瞬間まで橋脚にとりついて残りの蜂たちが最後の一斉攻撃をかけようと路上よじ登ってきていた。

「やれるわよね」

「そっちこそどうなんだ」

視界の端で幽香の色鮮やかな髪が揺れた。どうやら肩をすくめたようだ。

もはやこうして背中を預け合って戦えるだけの強さを手に入れたと考えるだけで、やはりハジメの心は浮き立つ。

大砲に変形した日輪をもとの姿に戻しつつ、彼が迎撃態勢を整えるのと蜂たちが攻撃に出るのとどちらが早いかと計算する。そのチリ

チリとした焦燥すらも今では心地よい。力に引きずられつつあることは分かるが、今日は特別だ。

「来るわよ」

しかし、いつまで経ってもその瞬間は来なかった。

蜂たちの間を烈風を纏った閃光が駆け抜けたのだ。ジグザグにアスファルトと体液と甲殻をえぐりながら走った閃光は、そのまま東の空へと消えていく。思い出したように蜂たちが体をひきつらせ、粉々に切り裂かれていった。

「どこか、誰かしらね」

黒い羽が舞い降りてくる。

閃光を、幽香の眼は一步遅れで追っていた。彼女の視力をもってしても、その姿を完全に捉えることができていない。

「ハジメ？」

あたりを漂っていた黄金の焰が掻き消えていく。

遠くの浜へ墜落していく鯨の体を見守るハジメの背中でも、日輪が折りたたまれていくところだった。

「後で考えりゃいいさ。今は時間がない」

あちこち鉄片が突き刺さったバイクを起こして、幽香は頷いた。不機嫌にうなったエンジンは、まだまだ仕事をする気だけはあつたからだ。

◆◆◆
「お疲れさま」

鎖を引きずる音がする。

朝日に反射するアスファルトにエンジンを響かせて去っていくバイクを見送って、小柄な少女は制服の襟を正した。

浜辺に突き刺さった鯨の死骸は急速に分解が始まっていて、頑健な骨格と、詰め込まれていたガラクタを砂浜の上にもき散らしている。

江梨香の見上げる先で、全身を鎖に繋がれた全裸の女性は大きな頭骨に腰かけて歌っていた。割れ砕けた頭骨の上で、彼女が手のひらの上で転がすものも頭骨だ。それは、おそらく巨鯨が最近に行った暴食の犠牲者のものだろう。

「でも安心した。相変わらず速いね、これなら相手が誰だって勝てるよね」

全裸の美女の背中には一対の、黒羽を備えた翼が朝風と遊んでいる。人間ではない。

「ねえ、楽しかった?」

何を言っても、美女は空っぽの微笑みを浮かべて首をかしげるばかりだ。歌は止まず、江梨香もそれ以上彼女に対して働きかけたところで無駄だということは知っている。

「これ以上は看過できないよ、ハジメ。そして幽香——サン」

佇む江梨香も残骸に体を預けて、美女の歌声に耳を澄ませる。彼女の右腕にも、鎖の束が深々と食い込んで巻き付いていた。



自然、そこに足が向かっていた。

さわやかに差し込む朝日の下、ごちゃごちゃと人が行き交う朝の空港のロビーで、あからさまに周囲に距離を取られて座る二人を見つけるのは簡単だった。

「やあ。見送りかな。ご苦労さん」

キャリアケースを引っ張ってきた杏奈はハジメと幽香に声をかけつつ、彼らがそんなに簡単な理由でこの場にいるはずがないことも知っている。息子の顔つきは一晩で大分違っていた。

「違う」

というか、それは彼らが全身傷だらけだったこともあるのだが。ハジメに至っては手や首がミイラ男のように包帯でぐるぐる巻きだ。近くに寄ると消毒のにおいがふんとした。

「つーか大丈夫?」

「世界と、こいつとを、天秤にかけただけだ」

腕まくりしてハジメは傷を見せる。上腕に巻かれた包帯には血がうつすらと滲んでいて、そこに刻まれた傷の重さを物語っている。

「おバカのハジメが勝手に私をかばったってだけよ」

呆れ切った様子で幽香が付け加えた。

「ケンカとか事故とか?」

「ま、そんなところね」

「ふーん。やるじゃん。それで、私と一緒に行くことにしたのかい？」
それが彼の決断なら残念であり、少しだけ嬉しくもある。

「それも違う」

包帯に包まれた拳が突き出された。

「こいつを渡しに来た」

彼の隣で幽香が笑っている。渡されたモノを見つめて、杏奈は吹きだしていた。

「わお。こんなの返すためにここまで？」

「アンタに貸すだけだ」

視線の先には穴の開いてしまった五円玉。

それは客観的に見れば、もはや五円の価値しかない五円玉をひとりの青年が母親に渡したというだけのことにはすぎないのかもしれない。

「これからはちゃんと、あんたに向き合おうと思う。でも実際この場に至っても杏奈の言う通り俺はダメダメのまんまだ。だからいつか、それを持つのにふさわしくなったら返してもらいに行く。その時は」
先を続けることができなくなって、俯いたハジメは上目づかいに杏奈を見た。

「ま、穴は本当悪かったけど。俺はそんなつもりなかったんだけどさ」
「いいや」

磨きこまれていた誰かの宝物は、すっかり煤と赤茶けた汚れと無数の傷によって様相を変えている。非常にこきたない。その変化が、たった一晩で息子に決意をさせた何かに関係していることは明白だった。

「このほうが、ずっとずっと価値があるじゃないか」

それを言葉以上の愛情でもって一度両手で握りこむと、杏奈はインフォメーションボードに視線を走らせた。彼女の実家へと飛ぶ便は、もう少しでこの場を離れる。

「触っていい？」

既に、杏奈の手はハジメの頭に伸びている。

「だめだ。待て。俺にその決心ができて、うわ、やめ、おい！」

犬にそうするように息子の頭をわきに抱えてわしわしと心行くまで撫でる。しばらく杏奈はそうして、唐突にハジメを解放してやった。

「よしよし、行っていいよん」

低くうなつて大股に去っていくハジメは、やはり犬に似ている。後ろ手を組んでうふふと笑っていた幽香へと、杏奈はわずかな困惑を顔に浮かべて向き直る。

「で、結局キミの立ち位置はよくわかんないままだったな。恋人って話はウソだったのか、それともウソっていうのがウソだったのか」

やることをやったら腹が減ったらしい。二人の視線の先でハジメはロビーを出て、手近なコーヒーショップの列に並ぶとしげしげメニユーを眺めた。

「ゲームはキミの勝ちだ」

「そうなの？」

「ハジメはとつくの昔に私なんて必要としちゃいなかった。全く、なんて負け戦なんだか」

勝手に勝負を挑んでおいてだが、言い出しつぺの杏奈が負けというなら負けなのだろう。幽香はしばし考えこんだ様子だったが、踵を返しかけた杏奈を呼び止めていた。

「じゃあ、ご褒美をちようだい」

「はは。何それ」

「成長にはご褒美がつきものよ。あなたを負かしたのはハジメ。なら、彼はあなたからご褒美を受け取るべき。彼はここにいないなら、彼に賭けた私にその権利があるわ」

「やっぱりキミは面白いねえ」

あ、手持ちはないからお金系は勘弁ね、と杏奈が苦笑した。

その割に彼女は差し迫った飛行機の離陸を気にするでもなく、幽香が言葉を選ぶ間ぶらぶらと両手を振って、考えの読めない彼女の美貌を見つめていた。

「ハジメの生まれた日を、教えてちようだい」

一瞬あつけにとられた杏奈の顔が、徐々にほころんだ。まるで少女

同士の秘め事のように、彼女は幽香の耳元に口を寄せると息子の誕生日を教えてやった。

「よかった。それなら間に合いそう」

「なんだよキミ。やっぱりあの子のこと、好きだったんじゃないか」

耳元から離れながら、杏奈は幽香の手を取った。半ば強引に押し付けられたものが例の五円玉であることを見て取って、幽香は目を見開く。

「渡すタイミングは任せるよ」

「私が持っていていいのかしら」

「むしろ君が適役。それに、ああ、なんだよ」

その先を携帯の着信音に邪魔されて、杏奈はぶつくさ言いながら携帯を取り出した。液晶に表示された名前は、幽香の知らないものだ。

「はいはい鶴見スよ——ええ。そうですね。悪いんですが、もう少しこの苗字でいることにしましたから。はい、話ありがとうございますですが、もうすがねえ。ウチの息子が存外やってくれました——ははは、相変わらず他人には手厳しいですね。じゃあ、そういうことで——ええ、そういうことです。じゃ」

杏奈はいつも一方的に通話を切ってしまう。携帯目がけて中指を立てて、杏奈は吹き抜けのロビーを見渡した。もう、ハジメも幽香もどこかへと姿を消していた。

おかしなことばかりだったが、束の間の鶴見家は悪くなかった。

「キミを待つよ。いつまでも待つよ。こんなでも、母ちゃんだからね」

その時は、あの不思議な子も一緒に連れておいで。



「やっぱり追いかける?」

遠くの空港から飛び立った飛行機がバイバイを言うように一度機体を輝かせて、雲がちな空に溶け込むように消えていく。

「お前が言うとは冗談に聞こえない」

いい加減眠いのでどこかで仮眠を取ろうと主張したハジメだったが、幽香の『近くで海が見たいわ』に付き合っこの場にいる。春先、それも朝方となれば浜に人は少ない。数人のサーファーが遠くに見

えるくらいだ。

あくびをかみ殺して、ハジメは遠ざかる県道を振り向いた。あまりバイクから離れるのもどうかと思ったが、鉄片まみれの世紀末仕様車を誰かが盗んでいくはずもない。

「あれはあれでよかつたんだよ」

そして訪れる穏やかな沈黙の時間。

ハジメは幽香が砂浜に刻む足跡を数えて過ごした。

『殺し合いなんてばかばかしいじゃないか』

いろいろあつた夜だったが、用意した言葉は忘れてはいない。そろそろ、この戦いを終わらせる時が来たのだ。惚れっぽいと幽香はまた呆れるのかもしれない。怒るかもしれない。

だが今のハジメには、出会ったばかりの殺意の塊のような幽香ですら愛せるような気がした。

「なあ幽」

不意打ちでふわりと彼を包んだ花の香りに、めまいがした。

甘酸っぱさが胸の内を満たす。彼の吐きだそうとした停戦交渉はドロドロに溶けて、どこかへと流れて行ってしまふ。

「ねえ、そろそろ聞いてくれるかしら」

彼女の手が、頭の上に置かれているのを感じる。

ハジメはただただ、唐突な幽香の抱擁に立ちすくんだ。どうしてだろうか。この半年で味わったどんな攻撃よりも恐ろしいものが、彼女の形のいい唇の奥に渦巻いているような気がした。

第十五話 『黄金の花』 おわり

11 『気分のいい日はいつも雨』

曰く。

曰く、その妖怪は笑つちやうくらい弱かった。

与えられたものは突けば死ぬような体と、あまりにも貧弱な力。

名も故も知れぬ妖怪の戦いは、たった数本の向日葵を守るところから始まった。

のだ、そうだ。



自分に警察は向いていない。

数十年のキャリアで何度この結論に至っただろうかと、壮年の刑事

——今井はゆるやかに昇りつつあるエレベーターの階層表示を見上げながら無精ひげをこすった。

「また兄貴のやつがリングを送ってきてねえ。頼んでもいないのに、持て余しちまう」

「ジャムにすることを勧めしますよ」

ほとんど天井に近い場所から声が降ってきた。

「お恥ずかしいことにこの歳で料理下手でして」

返事なんて期待していない。ただただこのエレベーターがさつきと目的の階に辿りついて、隣の男とサヨナラしたかった。愛想笑いを張りつけた頭を振って再び階数を数える仕草に戻りつつ、この唐突な呼び出しを改めて不審に思う。

刑事になってからというもの、鳴かず飛ばすの冷飯喰らいでここまですべてやってきた。凶悪事件に関わったことは皆無だ。それ故ほとんど定時に帰れることをありがたく思い、慕ってくれる寺田の先行きくらいが心配事の毎日。

二月の末、口座に倍額の給料が放りこまれた時は、ついに前払いで退職金が出たのかと目を疑ったほどだ。

「申し訳ない」

大男で済まされなほどの体を折り曲げてそいつが急に謝ったの

で、見るまい見るまいとしていたその顔に、今井はつい視線を送ってしまった。

「残業代をお出しするのに時間が掛かってしまって。なにぶん、例外的な支払いには例外的な手続きが必要でして。迷惑だったでしょうか」

月面だ。

その尋常でない体を爪先から見上げていくと、締めくくるのはまさに月面のような頭だった。あばたでも、傷跡でもない。男の顔の半分にはパーツが無かった。つるりとした、まるで大理石のような肌が頭頂までを覆っている。

「貰えるもんは貰いますよ。残業なんて、一秒たりともしちやいませんがね」

「未申請の残業が十二月からちらほらと。心当たりはあるでしょう」
「いやあ、まったく知らぬ存ぜぬで」

男の異相を目の当たりにするのはこれが初めてではない。それでも、あるべきものをすっぱりと切り落としたような男の顔を見ているだけで言いようのない不安に襲われる。

「言い方を変えましょうか。今井さんはろ号とは号に関わっていますね」

錆びついた胸骨の中で老いた心臓が跳ねた。

「僕が今井さんに求めたものは誠実さでしたが、まあそれは、もういいんです。僕たちはあなたに新しい仕事を用意しました。前途有望な若者たちをくじいて、すり潰して、ゴミ箱に放り捨てる仕事です」

二人の男を乗せて、鉄の箱は未だ昇り続けていた。おかしい。長すぎる。この場所だけが、まるで尋常の法則から切り離されてしまったようではないか。

「二応申し開きさせてもらいますが、これは管轄外に首を突っ込んだペナルティではありません。今井さんの現状をかんがみて、適役だと判断したのです。僕個人の意見を述べさせていただければ、むしろあなたの人柄には好感を覚えています」

「俺にだって、仕事を選ぶ権利くらいはあるだろ」

組織の端に追いやられた今井の耳にも、目の前の男のよからぬ噂が時折流れ着いてきていた。それが、知らず知らずのうちに予防線を張らせていた。

「——と、言ったらどうなります?」

「そうですね」

月面のかげりから、ようやく人間の瞳がのぞいた。

ぞつとするガラス玉の眼は、さらに恐ろしいことに悩んでいた。良識によるものではない。拷問官が次の刃物をためつすがめつする時と全く同じだ。

「少なくとも来月から、今井さんがリンゴの処分に困ることはなくなるかと」

あまりにも予想通りの返事が飛んできて、今井は男に掴みかかる威勢をも削がれていた。

「それがお前のやり方が、万場」

「僕たちのやり方です」

警察学校時代からの知り合いである月面の巨漢——万場ばんばいしくえ幾絵の表情は、今井の側からはうかがい知れない。

代わりに、彼は唯一の出口を手で示した。示し合わせたようにエレベーターが底抜けに明るい電子音で到着を知らせる。開いたドアの先に広がるリノリウム張りの床に、真昼の日光が眩しかった。

「ありがとうございます」

断る権利はあっても、余地はない。

先に歩み出た今井を万場の声が追いかけた。二人の行く先はきつと同じ部屋だ。

「ご自慢の守護者とやらはどうしたんだ。え?」

もはや何も取り繕う必要がなくなった今井が、ぶつきらぼうに問いただす。

「いやはや。そこまでご存知とは」

わざとらしく驚いてみせる万場を心底疎ましく思いながら、今井は県庁を出てからの行動を組み立てはじめた。とにかく寺田をこの一件から退かせなければいけない。他の付き合いも、念のため整理する

必要がありそうだ。

「確かに僕たちは『い号』を監視して、事の成り行きを報告するためにやってきました。ですが正直、今回の一件は彼女の手には負えるかどうか」

「ずいぶん他人行儀なんだな?」

注意して万場の言葉を聞いていれば、どうにもおかしい。まるで他の異常存在と同列に扱っているようではないか。

「彼女はその動きから、便宜的に守護者と呼ばれているだけです。実際はあの町に迷い込んだ怪異を気まぐれに狩る性質を持つ、別の怪異でしかありません」

「危ない橋を渡っている、と」

「確かに。ですが万一彼女がしくじっても僕たちは一銭も身銭を切る必要はない。それは大事なことです」

廊下の端には重厚な扉があつて、きちんとした制服を着込んだ警官が立っているのを目にすると、まだここが異界ではなく警察の建物なのだと実感できる。敬礼に応える今井のぎこちなさを笑うでもなく、万場は続けた。

「今朝発覚したF市近郊の大規模な高速事故。あれは、ろ号こと風見幽香と呼ばれる妖怪が引き起こしたものです。そして彼女と行動を共にする鶴見ハジメ。は号ですね」

ドアを開けた先の会議室に詰め込まれていた男たちはいずれも表情に鋭いものがあつた。彼らの一瞥を受けた後に片隅のパイプ椅子に腰かけて、ようやく今井は顔をしかめる。

「最近の縄張りでの暴れっぷりに、さすがに腰の重い『い号』も動こうと思つたみたいで」

風見幽香は上手くやっているつもりかもしれないが、明らかにこの世界での身の振りがたが分かつていない。鶴見ハジメをどうする気なのか。彼女がああ青年を引きずり回していることは想像に難くない。

「大丈夫ですか。具合がすぐれないようですが」

「いや。それで、俺は一体これから何をさせられるんだ」

明らかにサイズの合わない向かいの椅子にきゆうくつに座った万場の顔。彼は薄く笑っていた。

「その前に紹介しましょう。以後彼にはあなたと組んで仕事にあたりてもらいます。どうぞ」

今井の内心でくすぶっていた嫌な予感は的中した。

ドアの開き方、足の運び方、後ろめたいことがある時のためらいがちな呼吸。すべてに聞き覚えがある。皺のないスーツと、いささか鈍ったがきつい目元。そして、トレードマークのオールバック。

「彼が寺田邦夫くんです。寺田くん、こちら今井さん」

何もかも後手に回ったと、今井はそいつの顔を確かめるでもなく頭を垂れた。

◆◆

曰く。

その妖怪は何度も死にかけたし、実際何度も理不尽に死んだ。

場合によっては死ぬよりひどい目にあって、その後やはり死んだ。

彼女は何度でも蘇った。

『まだ、くじけてないから』と。

彼女にとつて死とは心の敗北の後にしか訪れないものだったから、なのかもしれない。

数え切れない黒星を重ねるうちに、いつしか守れる向日葵は一本一本と増えていった。

のだ、そうだ。

◆◆

「安心しなよ」

静かに昨晩の湯豆腐を温め直してすする父の肩を揉みながら、千晃はお気楽に笑った。

「ねーねー、聞いてますかー」

「お前は意地悪だ」

ついに元伴侶が出て行って、不貞寝して朝起きると息子とその恋人がいなくなっていた。これで動揺するなと言うほうが無茶だ。ハジメたちの父は徹底した悲観論者であった。

一方の千晃のポジティブさは、やはり杏奈を引き継いだのかもしれない。

「あにきも、お姉ちゃんもきつと戻ってくるって。私には分かるんだ」
うそぶいて千晃は台所に立つ。

「せつかくの休みでしょ。濃いコーヒーでもいれたげるよ」

それもいいような気がして、父は気分転換に努力することにした。テレビを点けて、なるべく明るい話題を追う。近場の高速道路でひどい事故があったのだの、未知の生物の骨格が発見されたのだのと、今日にはぎやかだ。

「なあ千晃」

「うん。なあに？」

早速コーヒーの言い香りが漂ってきていた。

「母さんと別れたこと、恨んでるか？」

千晃はつかの間手を止めて、父の後姿を見つめた。白髪が増えたかな、とか。思ったより小さく見えるな、とか。関係のないことを考えつつ、彼女はすぐに否定した。

「ううん。それがお母さんと決めたことなら仕方ないんじゃない。世の中リフジンにできてるって、お姉ちゃんも言ってたし」

「理不尽か」

世界を押さえつける力の名前を口にする。ミステリアスな雰囲気纏う『お姉ちゃん』の影響か、最近は千晃もハジメも小難しいことを言うようになった。

「なら私たちがどう受け止めるか。そういう問題なんじゃないかな」

だから私は気にしないことにしたよ、と千晃はポットからお湯を注いでいく。父は背もたれに頭を預けて天井を仰いだ。

もともと世の中はうまくいかない事だらけで、それは当たり前。だからこそひたすらポジティブに立ち向かう。立ち向かわなくてはいけない。千晃の覚悟は、その歳に見合わないくらい堂々としたものだった。

「目からウロコだ」

千晃が湯気を立ち上らせるカップを載せた盆を運んでくる。

「ありがたく思うなら小遣い増やしてもいいよ？」

「それはなんか、違うだろ」

「げげんちよ」

彼女と話すうちに、父も少しだけ明るい気分になれたようだった。確かにハジメは戻ってくるだろう。それは間違いない。

「で、千晃」

ようやく、目の前に置かれたものがコーヒーであるかどうか疑う余裕が出てきた。

◆◆

いつしか広大な向日葵畑が広がった。

彼女が生まれ持った能力によらない、その天井知らずな力を誰もが恐れた。

今度は私の番とばかりに彼女の領域を侵すものは容赦なく苛め殺した。彼女を苛めたものも全員殺した。季節を知らぬ花のように、花弁のごとく死を振りまき続けた。

そうして、彼女の過去をさだかに知るものは誰もいなくなった。のだ、そうだ。

確かなことは一つだけ。

彼女はひたすらに強くなりつづけたということ。

そして行きついた最強の座で、彼女は己の身に起こりつつある、とある異変に気付いた。

最強の力なら、代償もまた。

◆◆

「生きすぎたわ」

波と、幽香の心臓の音を聞きながら、ハジメはひどい喉の渇きを感じていた。

「私はもう幾許もなく、おかしくなる」「どうして」

カラカラの口で喋ると舌が上あごに張り付くようだった。

「身に余る力を手に入れて、小さな器があふれちゃったのかも。それとも妖怪がもともとそういうものなのかしら」

彼女の表情を確かめようと僅かでも頭を上げようとすると、幽香の腕が強く押し付けてくる。反論も質問も、ハジメはろくに抵抗できないまま、まるで死刑宣告のように彼女の抱えた真実を耳に流し込まれる。

「半年」

その約束の重さを、今更実感する。

「なんとか半年もたせてみせる。そこから先はわからない。だから、「俺にはできない」

「できる。だってあなたはもう、そういう妖怪をたくさん倒してきているでしょ？」

あるところに蝸牛の妖怪がいた。彼は長らく都市の空虚で人の営みを見守ってきたが、あるとき外への憧憬を振りきれなくなった。そして、それが大量失踪事件へと繋がった。彼と遊んでいた子供たちのことも忘れた。ただ腐肉を被り、粘液を撒き散らすだけの妖怪になり下がった。

またあるところに巨鯨の妖怪がいた。彼はその力で、彼を慕うものたちを守り続けた。虚弱な蜂の妖怪にも喜んでその身の一部を差しだした。人肉への欲求は常について回ったが、気まぐれに小さな少年と交わした約束を守って、それを忌避し続けた。彼の高潔さを否定する骸は、遠くの浜にその無残を晒している。

知らず知らずのうちに、ハジメは彼らを踏みしだいてきた。

「ハジメの本当の力を見るまで、私だって半信半疑だった。でも確信したわ。あなたは運命の人。私を私のまま殺してくれる」

皮肉なことに、彼女を確信に押し込んだのは、彼女への気持ちを確認めたハジメの見せた覚醒だった。太陽の弾丸は文字通り全てを無視して突き抜ける。幽香の誇る強力無比な防御も、並はずれた生命力も例外でなく。

ただ、彼の野望へと向かって。

「野望。家族を一つにするんですよ。それが理由になるって、言ったわよね」

「でもあんただって家族だ！」

抱きしめる力が一瞬強くなって、すぐにためらいがちな息遣いが耳元をかすめた。

「ただの妖怪よ」

彼女は沈黙した。ハジメは多大な勇気を払って口を開く。

「どうして、もっと早く言わなかったんだよ」

「待っていてくれるって言ってくれて、嬉しかった」

一か月前の自分を撃ち抜いてやりたくなった。さすがに時間までは越えられないだろうか。そもそも、今の気分であの日輪を呼び出すことはできそうにない。彼の心は、絶好の曇天だ。

「演技だったけれど、はじめての恋人は悪くなかったわよ」

おずおずと幽香の背中に回しかけていた手を振り払うように、彼女は体を離れた。

ハジメには信じられないくらい、吹き渡る風が冷たく感じられる。降り注ぐのは初春のうらかな日光だというのに、どうにもしらじらしい。

「だって、でも、そういうことは、俺が、本気で」

「向こうに自販機があったから、何か温かいものでも買ってくるわね」
有無を言わせない背中が遠ざかっていく。ハジメの押し殺した叫びも聞こえない。周りには何もないので、しばらくハジメは言いようのない感情の爆発のままに砂を蹴散らすことしかできなかった。

「……………俺が、本気で好きになる前に言えよ」

肩を震わせて浜に膝をつく。靴の中に入り込んだ砂の感覚が妙に生々しい。顔を上げると、既に彼女の姿は遠かった。いつも通りの強かな足取りが、かえって儂いものに見える。

『彼女を愛しているなら、なおのこと殺さなくっちゃいけないよ』
ほらな、と。親友がすぐそばで嘲笑っているような気がした。

2月編エピローグ 『気分のいい日はいつも雨』おわり

3月の吸血鬼失踪事件

1 『燃やす者／焦がす者（上）』

こつてり絞られた上でそいつの但し書きに新しい一行が書き加えられた。

その補導歴とは、世間一般で言うところの不名誉というヤツだった。

『ごちとらちよつと落書きしただけなんだぜ。それより聞いてくれよつ、あそこの壁がさつ』

あの一件の直後、高揚を抑えきれずにそんなことを説教にきた警官に言い放ったのがどうにもよくなかったようだ。

とにかくそれから、暫くの間行く先会う人すべてに怒られる毎日が続いた。

『分かってるのか、鶴見。この時期にマズすぎるぞ』

『ええ』

『これが一体どういう意味なのか、本当に理解しているのか？』

『ええ』

何度目かの進路指導室。ぼんやりと天井を仰いだハジメは、何を言われても生返事を返すだけ。良くも悪くも平凡なことが特徴の鶴見ハジメがここでいきなり問題児になってしまったことに、教師はひたすら頭を痛めた。

『お前はどうしようもないやつだよ』

『ええ』

早くも匙を投げた教師が部屋を出ていくのも構わず、ハジメは固く冷たい壁越しに感じた不思議なぬくもりを思い出す。限界から救い出してくれた赤いひまわりに、もう一度触れたくて仕方がなかった。

ならば、もう一度試すまでだ。

『待たせたな』

そして始まりの夜。始まりの場所。

12月。雪のちらつく夜の町に黒々と聳えるビルの足元で、ハジメ

はパーカーのフードを目深にかぶる。決心するまで2週間。準備には1時間。

買ったものは気休めのカイロがいくつかと、大量のスプレー缶。

このビルのてっぺんに、宇宙からでも見えるような大きな風穴を開けてやろう。今度こそ、この息詰まった世界を変えるような何かを起こしてやろう。

『にしてもヘンな感じだ』

奇跡に憧れる気持ちを表すならば、それはまさに恋心だった。

踏み出すスニーカーの爪先。彼の姿が建築中のビルの、その中に漂う闇へと消えていく。

それから、何が起こったのか。



——ポロポロのバイクの荷台で幽香の腰にしがみついていたことだけは覚えている。そこでどんな会話を交わしたのか、何を考えたのか。いつどこでどのくらい休んだのか。バイザーの外を流れる景色が徐々に見慣れたものへと移り変わる様を眺めつつ思い出すが、まるではつきりとしていない。

「ハジメ。ねえ、ハジメったら」

「んあ？」

「大丈夫？ だいぶ、ぼんやりしているように見えるわ」

ハジメの顔の前でひらひらと幽香が手を振る。寝不足のせいか、すべてがガラス一枚隔てた場所での出来事のように遠い。彼女の肩越しに見える我が家の玄関を見て、ハジメは一晩限りの小冒険が終わったことをようやく理解した。

「割とサエてるよ。こんなんでも」

「ならいいのだけれど」

幽香がカギを抜くよりも先にバイクが音を上げた。

急に静けさを取り戻した住宅街。ぼわん、とマフラーから吐き出された最期の白煙を追って、二人は視線を上げる。ギラギラとミラーボールのような太陽が輝く空にそれはすぐ溶けていく。まるで、初夏のような熱気が春先の住宅街に漂っていた。

「どうして私のおもちやっつてすぐ壊れちゃうのかしら」

もちろん冗談のつもりだったのだろう。

地面にへたりこんで愛想笑いを返す余力もないハジメを尻目に、幽香はさっさと擦り切れたライダーズーツを脱いでいく。白いタンクトップとの境が分からなくなるほどに、彼女の肌もまた、白い。

「ちよつと畑の様子を見てくるわね。お昼ご飯はその後で作ってあげるから」

鶴見家の荒れ果てた庭を再生させようとする彼女の努力は最近ちよつとした土木工事のレベルに達してきた。あれだけいろいろあった夜の後で一睡もせずには仕事に取り掛かれるあたり、やはり彼女は人間とは一線を画しているのだろう。

「幽香」

血の滲んだ包帯の下で傷が疼く。

それでも立ち上がって彼女の名前を呼んでみれば、最近では呼吸と同じように何度も口にしてきた名前がやけに重苦しく舌に絡みついた。

「なあに？」

彼女の反応はいつもと変わらない。

振り返り、小首をかしげると、美貌に微笑みをたたえてハジメの言葉をいつまでも待つ。

「いや、何でも」

きつと彼女を引きとめなければ、彼女はせつせと庭仕事を済ませて、帰りの遅いばかり兄貴に憎まれ口を叩く千晃のご機嫌を取りながらリビングを通り過ぎる。それからシャワーを浴びてズタズタの衣服を片付けるなりなんなりして昨夜の一件を物語る物証を捨て去ると、彼女は何事も無かったように鶴見家の日常を再開するのだ。

数か月後に控える自分の運命さえ、受け入れて。

「やっぱり疲れてる。先にお布団しいてきましようか」

その変わらなさがどうしようもなく頭にきた。

「待て。何でも、ある。お前に言いたいことがある」

低い声で唸るようなハジメを前に、まるでかんしゃくを起こした子

供に仕方なしに付き合つてやるみたいに、幽香は困った笑いを浮かべて腰に手を当てる。

「文句?」

「かもしれない」

「バイク壊しちゃったこと?」

「違エよ。いいかお前は どうして」

もうすぐ狂って酸いも甘いも何もかもぶち殺してぶち壊す。そんな、あまりに理不尽な運命を背負っているというのに。

「聞いてるわよ」

どうしてそこまで、こともなげに振る舞うことができるのか——と、問いたただそうとして、ハジメはまた黙る。彼女はとうの昔に全てを知っていたし、覚悟もしていたのだ。ハジメと出会うずっと前から。

「今、お前の作ったメシを食いたい気分じゃないんだ」

動揺しているのはハジメだけだ。

あなたなら受け止められるわよね、と。幽香が信じてパスしてくれた真実を全力で拒絶しようとしている。それで現実がどうこう変わるわけでもないのに。

「そう」

「マズいとかそうじゃなくて。なんか、腹空いてないから」

玄関先に掛かっていた厚手のジャケットを乱暴にハンガーからひっぺがして着込む。すでにじつとりと首筋が汗でぬれるような春の陽気だったが、血まみれのシャツで出歩くわけにもいかない。

「どこ行くの?」

「わかんない。家に帰るの、結構遅くなるかも」

「そう——いや、ダメよ。待って」

無視してさっさと行くつもりだったが。後ろ手を捕えた幽香と、手の平から全身を駆け巡った激痛にハジメは小さく苦悶の声を漏らしていた。

「せめて私も一緒に行かせてちょうだい」

乱暴に手を振り払って、ハジメは眉間にしわを寄せた。

「どうして。ねえ、ハジメ、さつきからあなたおかしいわよ」

いきなりぶん殴られたように、驚きと困惑の入り混じった表情で見つめてくる幽香が疎ましい。彼女はただ、いつも通りに接してくれているだけだというのに。

「ムシのいどころが悪いだけだ」

怪物に食われたり体が燃えたりしている間ずっと身に着けていたスニーカーは限界だった。はがれかけの靴底をぺこぺここと鳴らして通り過ぎていく青年を、下校途中の小学生の一団が遠巻きに笑っている。

「お姉ちゃん？」

背後。千晃の声だ。

「お帰り、お姉ちゃん。どうしたの？」

実に間が悪い。

足を止めたハジメと、彼に視線を注いだまま押し黙った幽香。こんな状況を前に千晃がどう動くかなんて、分かりきったことだ。

「くそあにき。またお姉ちゃんに何かしたのかよ！」

——相変わらず空気の読めない野郎だな。

やりあってやろうと足を止めて、ハジメは小さく目を剥いた。顔を真っ赤にした千晃の、サンダルをつっかけた片足が玄関の外に踏み出している。

「今日という今日は説教してやる」

「言いたいことがあるならお前がここまで来いよ。引きこもり」
「う」

挑発に千晃は自分の足元に目を向けた。敷居に掛かった片足を持ち上げれば、もう彼女は自分を外の世界に放り出すしかない。

「ほらどうした。一歩くらいで満足か。おらおら」

我ながら最低な兄だと思う。

「っ……………はん。見てろよ」

兄だからこそ、ハジメには千晃が何をみて何を感じ、何を考えているかは手に取るようだった。どこからか騒ぎを聞きつけてやって来て、氷河期の氷の中から出てきたマンモスの化石でも見るような目を

向ける近所の事情通だとか、一部始終を面白そうに見守ることにした小学生たちだとか。

彼らの無遠慮な視線に、千晃は耐えきれぬのだろうか。

「無理すんなよ」

焦って兄らしい気づかいを示すには遅すぎた。

「ちよつとは見直してやろうと思ってたのにさ。あに、いや。お前やっぱりサイアク。お姉ちゃんと一緒にいる資格なんて、いちミリだつてないんだから」

しかし、また一步。

「やめろつて」

「千晃」

「うるさい。見てろ！」

あまりに早すぎる。筋金入りの引きこもりである千晃がようやく外へ出た、なんて祝えるほどおめでたい雰囲気ではない。

「何もかもうまくいきそうな気がしていたのに、さつそくコレかよ」

例えるなら、それは未成熟のさなぎを無理やり切り開いて、ドロドロの中身をぶちまけてしまうようなものだ。

「千晃、いいから」

「よくないつっの。ねえ、お姉ちゃんがこいつにしてもらったコトつて、そこまで我慢しなきゃいけないほど、すごいことだったの？」

「あなたが知らないこともあるのよ」

「なんだよそれ。すっごいムカつくんだけど」

暴走した千晃はもう止まらない。

彼女にはもつと別の、外の世界に触れるきっかけが欲しいのだ。勢いで飛び出しても、かえって深い傷を負って戻るハメになるだけだ。誰かこいつを止めてくれとハジメが叫びだしたくなつた矢先に、幽香が動いた。

「いい。これが最後よ」

ハジメが小さく声を漏らす。電撃でも流されたように、千晃が跳ね上がった。

苛立ちに混じつた一抹の感情は、間違いなく人外の放つ気配だつ

た。ぎこちなく千晃が振り向くのを待たずにその腕をむんずと掴んで、幽香は彼女を家へと引きずって行く。

「戻りましょう」

「きつ、昨日まで二人ともあんなに楽しそうだったじゃん。あんなに、ム力つくイチヤつき方してたじゃんか。あんなに、あんなに。ねえ、痛いってば！」

妹の言葉はいちいちハジメの背中を刺してきた。彼女は正しい。実際のところ幽香自身は何も変わっちゃいない。ハジメの方が彼女との距離感を見失ったのだ。

「お夕飯、いるかしら」

千晃を玄関に押し込んだまま、未だ門前に佇む幽香を一度だけ振り返った。

とにかく空腹と眠気が限界で、これ以上何かについて深く考えればここまでの悶着で細った脳神経がぷちんと音を立てて切れてしまう。

「いいや」

意地張りを咎めるように、彼の腹が鳴った。

心のどこかではそこで幽香が笑ってくれないかと期待していた。それならば、まだこの場にも救いがあったというのに。

「じゃあ、行ってらっしゃい。待ってるから」

玄関にだらしなく腰を下ろしたまま、精も根も尽き果てた様子で千晃が遠ざかりゆく兄の背中を見送っていた。

「ごめんなさい。別に、怒ったわけじゃないの。ああ、参ったわね」

例え一瞬でも千晃を余計に思ってしまったことを幽香は心底悔いていた。

何と続けていいものかと迷っていると、義理の妹はいつも幽香がそうするように肩をすくめて見せた。

「本当ワケわつかんないよ。あにきも、お姉ちゃんも隠し事ばかりで」

とはいえ、そうして余裕ぶって見せることが彼女にできる精一杯の反抗だったのだろう。実際は細い肩も声も震えていたし、サンダルを脱ぎ散らかして寢床へ引っ込んでいく時に、彼女は大きく鼻をすすり

あげた。

「おかえり」

リビングの戸を開いて、この時間には見慣れない顔がひよっこり現れた。ハジメの父は千晃の消えていった階段を一瞥して、手に持っていたマグカップを小さく掲げた。

「あら、珍しい」

「久しぶりに全休もらったんでね。コーヒー淹れたんだけど、飲むかい？」

「ますます珍しい」

「千晃の作ったヤツがあまりにひどくてさ」



安普請の寒々しさを少しでも和らげようという努力だろう。

板張りの上に敷かれたゴザの清々しい香りを吸い込んで、ハジメは二つ折りにした座布団に頭を預けなおした。使い古したぺたんこの座布団は枕に最高だ。実に収まりがいい。

「お茶、あつついのにしちやっただけ」

ハジメが短い眠りから起きたのを察してか、床を軋ませて彼女がやってくる。

「勘弁してくれよ。今日はこんないい天気なんだぜ」

「転がりこんでにおいて注文がうるさいわね」

腹を空かせてベンチで寝ていたハジメに声をかけて、半分眠ったような青年をここまで引きずってきてくれたのは彼女だ。

「悪かった。感謝してるよ」

とはいえ、初対面で自分を殺しにきた相手の前で堂々と居眠りするとは、ずいぶん命知らずだと思う。

「よろしい」

彼女が卓袱台に置いたお盆で湯気を立てるのは湯飲みだけではない。白米と目玉焼き。ピリリと塩気の効いた焼き鮭に味噌汁だ。

「おなか空いてるんでしょ。寝てる間も鳴ってたわよ」

と、霊夢はいつものような不機嫌顔で座布団を引っ張り出してくと、卓袱台を挟んで座り込んだ。

「こうでもしないと、うるさくて集中できないのよ。あいつとあなたをどう叩いてやるか、ずっと考えてるんだから」

照れ隠しの憎まれ口を聞き流しつつ、ハジメは一心不乱に遅い昼食をかき込む。うまい。実際に涙が出るほど嬉しい心遣いに感激していると、ちらちらと意味ありげな視線を送ってくる霊夢が目に残る。

「どうした」

「大したことじゃないわ。あいつと私、どっちが料理上手か気になっただけ」

非の打ちどころのない美少女は微かに頬を赤く染めて眉間を抑えた。

「……………あーあ。こんなバカみたいなコト聞くんじゃないわかった」

「やっぱり親友同士で張り合ったりしたくなるもんなのか？」

「元親友ね。ずっと前に関係は解消しちゃったもの」

ようやく落ち着いてきた食欲のおかげで、ハジメには箸を休めるだけの余裕が出てきた。

幻想郷を守り、そして治める博麗の巫女。そんな大層な肩書があるのならばぞかしご立派な宮殿にでも住んでいて、付き人が四六時中ふんぞり返った霊夢の肩を揉んだり脚を揉んだりしているのだろう、なんて。

「お前、料理なんかする必要あるのか？」

「行く日も来る日も神社で一人暮らしよ。お金は切りつめなきやだし」

ヒーローのように活躍しているはずの彼女だが、現実はいよいよ金を恵んでくれるほど甘くないようだ。

「神社の収入ってどうなってるんだ？」

「あんまり期待できないわね。友だちが食べ物を持ってきてくれるから、食うには困らないけど」

「友達」

青年がふと浮かべた神秘的な面持ちを見て、霊夢は続ける。

「もちろん幽香のやつも来ていたわよ」

「そんなこと聞いちやいない」

ハジメは首をひねったが、霊夢には彼が浮かべた疑問符の中身なんて丸わかりである。

「幻想郷にはなんていうか、今よりも寂しくて物騒な時期があつて、世間はずつとずつと狭かったの。その頃あいつは何かと理由をつけては神社に潜り込んできたのよ」

どこか懐かしい味のする味噌汁をすすりながら、ハジメは霊夢の話に耳を傾けた。

「で。お節介にもあいつ、世話焼いてくれちゃつてさ。頼んでもいないのに勝手に部屋をひっくり返して掃除していくわ私の服と下着を全部洗濯していくわ、ご飯だつて」

ことさら不機嫌そうに、霊夢は鼻を鳴らした。

「私、料理ヘタクソだったの。それで嫌々。本当に嫌々だけど、あいつに作り方教わつてた時期があるのよ」

空になった木製の器をハジメは見下ろした。霊夢の供してくれた食事に感じた奇妙な懐かしさの正体が分かったような気がする。

「で、それはうまいの。マズいの?」

今と変わらぬ仏頂面で、割烹着姿の霊夢がまな板の前に立つ。これまた変わらぬニコニコ顔の幽香が霊夢の手ごと包丁を握り、背後からあれやこれやと口出しする。

『猫の手よ』

『やってる』

『それでこれは包丁っていうの』

『知ってる』

『切るの手じゃなくてお野菜よ』

『ばっ、馬鹿にして』

霊夢がキレル。幽香が声を上げて笑う。それがますます霊夢の機嫌を損ねると知った上で。

「悪くないんじゃないか」

「なにそれ」

意味深な笑顔を浮かべたハジメを睨みつけつつ急須から良い香り

のするほうじ茶を注いで、霊夢は正座を崩した。ショートパンツから覗く白くて細い脚に思わず視線を奪われてしまうのは悲しき思春期の性。

「改めてあんたに聞きたいことがあるんだけど」

思わず我を忘れていた矢先に、霊夢の鋭い声色が沈黙を裂いた。内心では心臓が口から飛び出そうなくらい焦りつつ、ハジメは出来る限り落ち着きをつくろって言葉を返す。

「な、なんだよ」

「あいつ、おっぱい大きいわよね」

目の遣りどころを咎められると思っただけに、不意打ちのアツパーを喰らった気分だった。

「は、お、おっぱ……？」

「あいつ昔っから恵まれてるのよね。だって私の方がずっと体を動かしてるし、食べてるのに。ね、おかしいと思うでしょ？」

たじたじになるハジメをよそに、霊夢はおもしろくなさそうに湯飲みを掌の中で転がした。

「やっぱりあいつが妖怪だから？ ……妖怪は人間とは体の造りが違うのかしら。うーん」

「確かに立派だけどき。そこまで深く考え、あ、やべ」

霊夢のニヤけ笑いを見る限り、彼女につき甲斐のあるネタを与えてしまったのは火を見るより明らかだった。

「やっぱり見たんだ」

「み、見ちゃったただだよ。こっちだってイロイロ見られてるんだ。それでチャラだろ」

「ふうん。どういう経緯で？ もしかして見せっこしたのかしら」

「偶然。全然偶然」

ハジメが尻を見せるハメになった出来事の発端が自分にあるとも知らずに、霊夢は高笑いした。

「ま、とりあえずあいつと上手くいつてるみたいで、安心した」

当然、霊夢はそんなことを聞かされただけにこの場所にハジメを呼んだのではない。

「またケンカしたけど」

きつと彼女は何もかもお見通しだ。ハジメが一方的に幽香を跳ね除けて飛び出してきたことも。

「あいつのこと、全部教えてもらったら頭ん中グルグルして全くワケわかんなくてさ。結局キレっ放しであいつの言うことなんて聞くこともできなかつた」

ハジメの声の大きさはしりすばみだった。

かわりに膝の上の拳を握りしめて、巫女の叱責を待つ。一月前に彼女に強気に出られたのは、単に何も知らなかつたからだ。

「なんか、腹立ってきたわね」

誰も死なないのが一番ハッピーだなんて、当たり前のことだ。いつだってそれが選択できるとは限らないから悲劇が起こる。

「分かつてる。全部、俺が悪い」

先手を打って謝られると、霊夢はがしがしと頭を掻いた。

「そうじゃなくて………どうしてあんたは謝ってるのかしら」

「俺が何も知らなかつたから。きつとあの時のあんたは相当我慢してたんだらうなつて」

「そうじゃないっつーの！ あんたが悪いとか悪くないとか、そんなことは今更どうだつていいって言ってるのよ。勝手にセキニン感じてるどころ悪いけれど、あのバカたれがウジウジ言い洩つてたんだから仕方ないでしょ！」

顔を真っ赤にした霊夢は収まりつかないと見えて、勢いよく立ち上がる。

彼女の膝小僧をぶちかまされたちやぶ台がずがんと音を立ててひっくり返つた。茶碗とお盆と湯飲みが弾き飛ばされ、蓋の開いたまままだつた茶筒の中身が壮絶にぶちまけられる。

「兎にも角にもあんたはあいつが好きになつちやつた。でしょ!？」

「お、おう」

鬼も尻尾を巻いて逃げだすような剣幕で、彼女はハジメに指を突き付けた。

「ならそれでいい。あんたの好きにすればいいじゃない!」

「でも、あいつは俺に殺せって。じゃないと」

「うるさい。でも、はもう二度と言うな！」

安普請の部屋と部屋とを隔てる薄い壁がどすんと鳴った。大騒ぎを詫びるでもなく、霊夢は手近に転がっていた分厚い雑誌を拾い上げると、お返しとばかりに壁に叩きつける。アパート全体を揺るがすような一撃が響いて、それから静かになった。

「……………あいつに、あまりに救いが無いじゃない」

霊夢は耐えがたい頭痛に襲われた時にするように頭を抱えた。

今の彼女は怒っているわけでも、ましてや泣いているわけでもない。それでも、ハジメにはこの瞬間彼女の鉄仮面の内側が垣間見えたような気がした。

「一人くらい、あいつを生かそうとするヤツがいても、いいじゃないの。私は幻想郷を守る博麗の巫女だから、口が裂けたって、そんな役目を誰かに頼む事はできないけれど」

ひと月前に道は無いと言い放った霊夢の変化に戸惑いつつも、ハジメは口を開いていた。

「霊夢、お前さ。本当は戦いとか、殺し合いとか、あんまり向いてないんじゃないか」

「そうかもね」

一皮むけば霊夢は外見そのまま、蝶よ花よという年頃の少女でしかない。

ひとつの世界を丸々任されて、重すぎる使命に対する葛藤も当然有るはずで。そうしたものを彼女は窮屈な巫女服の中に押し込んで戦ってきたのだろう。

「あともう一つあるんだけど」

霊夢はそのまま片手を上げて、ハジメに先を促した。

「お前、いい奴だよな」

「そんなこと」

弾かれたようにがばっと顔を上げた霊夢はすぐさま深々とため息を吐いて、またもや眉間を抑えるのだった。

「……………とにかく片づけ、手伝ってちょうだい」

◆◆◆
玄関まで客人を見送ると、霊夢はそのままドアの前の手すりにもたれかかった。

二階建てのボロアパート。少し室内を歩けば下の住民から文句を言われるような場所で、それでも見晴らしだけは良い。

「なんだか疲れちゃった」

夕暮れの街に、彼女は何を見出しているのだろうか。

ハジメの目には強烈な夕陽に照らされて、一つの影の塊になった街のシルエツトだ。とりわけ大きい例の高層ビルの影が、亡霊のように佇んでいる。

「幻想郷の外はロクでもない世界が広がってるって、ずっと思ってたの」

樹脂製のサンダルの踵を打ち鳴らしながら、霊夢は解け掛けた髪飾りを結び直す。

「で、実際は？」

「大体は予想通り。どこ行っても子供扱いされるし、行列はうざったいし。でも、ロクでもない奴はいなかったよ。あんたも、あんたの家族も、誰ひとりだって。みんな必死に生きてる」

それは幻想郷だって同じだ。

怪物が当たり前に出歩くような、きつと死とは常に隣り合わせの世界。理不尽に死ぬかと思われた矢先に戦う力を掴み取ることが出来ただけ、ハジメはまだ幸運なのかもしれない。

「あんたがああな化け物クジラと戦ってた時、実はずっと見てたんだ。あんた、ワリにカツコよかった」

見ていた、ということはある場で口走ったあれやこれやも聞こえていたのだろうか。しかしハジメが気まぎれな視線を送っても霊夢は不思議そうに小首をかしげるだけだったので、彼はそつと安堵の息を漏らす。

「俺はただのヘタレだって」

「いいじゃない」

霊夢はすれ違いざまにポンとハジメの肩を優しく叩いて、塗装のは

げたドアノブを掴んだ。

「ヘタレだろうがなんだろうが、あの時のあんたはいい男だった。少なくとも、私がちよつとだけ考え直すくらいにはね」

決してむずがゆい思いをさせるためだけに彼女がそんなことを口走っているはずがない。彼女は博麗の巫女としてこの場にいる。そして、ハジメは幽香を諦めきれていない。ならば結論は一つだ。

「だから次に会うときは、本当の本当に敵同士。私はこの世界にも、あんたたちにも惹かれすぎた。これ以上踏み込んだら、それこそ私は私の使命を放り出してしまいかもしれない」

別の出会い方をすれば。そんなセリフを人生で吐くことが本当にあるなんて想像もできなかった。少しだけ名残惜しそうな霊夢を見ていると、『もしも』を想像せずにはいられない。

「———それと。ユキには、気をつけて」

「ユキこ？」

不意に飛び出した友人の名前にハジメが怪訝な表情を浮かべた時には、既に背後でドアが閉まっていくところだった。

「どうして？」

モヤモヤしたまま階段を下りて、ハジメは二階の霊夢の部屋を仰ぎ見た。夕暮れの中で、今しがた灯った電気が眩い。曇りガラスの向こうを歩き来する赤い影は晩飯を支度する霊夢のものだ。

彼女はもう、ハジメに語ることはない。ただ、現代での生活を続けて、激突の時を待っただけだ。

「じゃあな。霊夢」

別れを言えるのもこれが最後。次は敵。

今更ながらアパートを囲む石塀の一角に突き立った鉄槍を見つけ、ハジメは肩を落とした。見覚えのある、とても槍とは思えないほどにねじくれた吸血鬼の得物。そいつの柄をひと撫でして小路に出る。

キイキイとブランコの揺れる無人の公園の中を通りながら、ハジメは日中霊夢と共に通った道のりを頭の中で逆再生していく。

今夜はまるで人払いでもされたような静けさだ。一台の車も通ら

ない道路に、古い街灯がオレンジ色の暗い光を投げかけている。等間隔で立ち並ぶ槍のシルエツトがその下に浮かび上がる。

道が塞がれる度に迂回して歩く内に、すっかり日は沈んで月が昇っていた。

「うっわ。マジかよ」

踏切の前でハジメは立ち止った。

どうやったかは知らないが、おびただしい数の武器に包まれたそれは、まるで要塞だ。遮断機至っては二度と持ち上がらないように鉄のような武器で地面に縫いつけられている。

とはいえ住み慣れた町。そう困りはしない。擦り切れたスニーカーの踵を返し、今度は近くの地下道を目指して歩く。煤煙に薄汚れた手すりを頼りに長い階段を下りれば、冷たく湿った空気が充満するトンネルに響き渡る足音は二つ。

「今日はどういつもこいつも俺と話したいんだな」

ハジメは鉄格子のようにトンネルの出口を塞ぐ無数の槍から、背後に佇むそいつへと視線を移した。

「だってそうだろう？」

むき出しになったそいつの胸から赤い光が迸り、長く醜くねじくれた槍を、本来なら心臓があるはずの場所に穿たれた大穴から引き抜いていく。焼けた肉の、えづくような匂いがあたりに充満していく。

「今日を逃したら、お前とはもう話せないじゃあないか」

煙を上げる片手には目もくれず、狭間雪之丞は実に吸血鬼らしく、氷のような美貌をゆがませて笑った。

2 『燃やす者／焦がす者（下）』

鶴見家には三種の神器がある。一つは生まれた時から不幸なハジメが内外を破壊されるたびに運び込まれる医者診察券をひとまとめにしたファイル。二つ目が四人という大人数の料理を一気に作ってしまう年季の入った鍋であり、そして三つ目が何の変哲もない、底の分厚いガラスのコップなのであった。

「そろそろやめにしたほうがいいんじゃないか」

と、ツマミの貝紐を口に運びかけたまま固まった父こそ、とにかく丈夫さがウリの安物のガラスコップを神器にまで出世させた張本人なのである。

「大丈夫です。まだ立てるし。ちよつとクラクラするけど」

幽香が握りしめるコップには蜘蛛の巣状に亀裂が入っていた。

不器用この上ないハジメ達の父が洗い物の最中にいくら落とそうがかすり傷一つ負わなかったコップは今、酔いどれの大妖怪の手中にあつて崩壊の一步手前であつた。

「おねえちゃんのばーか」

内心では幽香の尋常でない力に圧倒されながらも、千晃はお姉ちゃんが弱っている今、ここぞとばかりに昼間の仕返しに出る。

「おたんちん」

「ごめんなさいって言ったじゃない。ねえ、ちあちゃん」

「あの馬鹿たれみたいな呼び方はやめてよ」

古代ローマのフランクスよろしく雑誌を盾にコーラのペットボトルを突き出して威嚇する千晃。幽香はコップを大きく傾けた。天井を仰いだ彼女の口元から、赤い雫が一滴喉元へ。そして白いブラウスの襟へと滑って染みを広げる。

「だらしないよ」

実際醜態だが、幽香はそれですらモノにしてしまう。本当に彼女が酔っているのか、それともこれは彼女が美貌を引き立てるために行っている演技に過ぎないのか。千晃は混乱する。

「あうう」

が、テーブルに突っ伏した幽香の力ないうめきが疑問の答えだった。

「原因はハジメのやつかい」

父に大荒れの理由を看破された幽香は静かに口元を拭って、力なく頭をもたげた。

「……………すごい。お見通しなんですね」

「むしろ他に何かあるんだって感じなんだけどね」

知ったような口を利かないで下さいと言いたいところであるが、実際凶星なので幽香は黙ってワインを注ぐ以外に選択肢はない。

「それで、今度はどうしてケンカを？」

最後の一滴を受け止めたコップの水面は小刻みに揺れていた。そこに映るのは、たゆたう液体と同じ瞳の色をした女だ。風見幽香。悠久を生きる最強の妖怪。そして今や、限りなく狂気に近い怪異の一体。

「いつも私達が仲たがいしているみたいな言い方、やめてくださりませんか」

ですますとつとめて丁寧に戻す幽香の手元で、蜘蛛の巣に新たに一筋糸が垂れた。

最近ではすっかりと外の世界にも慣れ、ここは幻想郷とは違うと自分に言い聞かせる必要もなくなっていたはずだったが。この晩酌ばかりはそうもいかないようだ。

「ちよくちよく殴り合ったりしてると思っていたんだけど、違うのかい」

「違います。必要のない暴力は振るってません」

「なんだ。やっぱり殴ってるじゃんか」

そこで痛烈な援護射撃を加えてくるのはかつての友軍、千晃である。

若干の敵意を込めて幽香が睨み返しても、彼女はわずかにソファの上で身じろぎするだけで、果敢に突撃を繰り返してくるのであった。

「本当はたんにクソあにきを痛めつけるのが趣味、だつたりとか？」

「なるほどな。そういう考え方もアリなら俺たちが口をはさむ余地は

ないかもしれん」

そこで何を連想したのか、父はわずかに口元を緩めた。思い出したようにかじりかけのツマミを口に放り込み、酒を口に含む姿がイヤに涼しげで幽香の神経を逆なでした。

「どゆこと？」

「いや、俺はさっそくハジメのやつが尻に敷かれ始めたのかと。でもお前の言うとおりに、ちよっと荒っぽい愛の形かもしれないし」

「ほへー。オトナの世界ってのはなんと奥が深い」

ひと月前、ハジメが放ったその場しのぎの恋人発言以上に、彼との関係をそんなへんてこに納得されたことが幽香の癪に障った。

「ですから私はあくまでツー！」

その結果、自分が思うほど我慢が得意ではないということを知らされた。

派手に砕け散ったコップの破片の一つ一つに映り込む千晃と父が浮かべた驚愕の表情。そして、己の額にはつきりと浮かび上がった青筋。

「おわっ」「どへえっ」

「私はハジメが心配なだけ。でもあの子が危ないところに突っ込んでいくなら手綱を締め上げなきゃいけないときもあつたんですっ！」

振り回される拳から、ガラスの破片がばらばらと舞い飛ぶ。

「危ない危ない！ てゆうかお姉ちゃんケガしてんじゃん！」

「千晃、ハジメの救急箱もってこい。すぐ」

それまでツンケンしていた千晃は一転わたわたとリビングを後にし、父はソファの背もたれで干されっぱなしだったハジメのシャツを拾い上げる。

「そんなことより私の話、聞いていますか!？」

せつかくの釈明のチャンスをないがしろにされたようで思わず声を荒げていると、呆れたようにテーブルの上に広げられていた食器を手荒くどかして、父は妖怪の手を取った。

「分かった分かった。いいから手、ゆつくり開いて」

大小のガラスの破片に塗れ、血のように赤いワインが滴り続ける拳

は、確かに大惨事に見えはした。だが幽香の肌を貫くのにガラス片は鈍すぎる。父はしばらく傷口を探そうとハジメのシャツで慎重に掌を拭っていたが、やがて彼も幽香の無事に気付いたのだった。

「たまげた。思っていたより頑丈なんだな」

女相手にそれはどうかと思われる物言いである。それでも幽香は奇妙な懐かしきにとらわれていた。ハジメと出会って間もないころ。妖怪であることを隠して、ハジメに無茶を心配されていたころ。腕に巻きついた包帯の感触を。

「……………あの子はそろそろ独り立ちできる頃だと思えます」

ぼそりと幽香は漏らした。あれほど脳みそをかき回していた酔いが嘘のように退いていくのが分かる。

「うん？」

声のトーンを下げた幽香を、父は見つめ返した。

「もう私がいなくなたって、あの子は十分やっていける。それに、私が彼の世話を焼かなくても、いずれはそうなったような気がするんです」

朝の海に太陽が二つ。迫る巨大なクジラの怪異に向けて黄金の巨砲を放つ青年の姿。おおよそしがらみとか、鬱屈とか、そういったものとは無縁の不敵な立ち姿を幽香は心に思い描く。

「だから思うんです。私は本当にハジメと出会ってよかつたんでしよるか。私が良かれと思ってやってきたことは、かえって彼を不幸にしただけなんじゃ」

いつも自身に満ち溢れていた幽香が、この時ばかりは表情を陰らせていた。深紅の肉に食い込んだ彼女の犬歯を見ると、ぶちんと音を立てて幽香の唇がはちきれてしまうのではないかと父は不安になるくらいだった。

「お姉ちゃん——ふーん。だいじょうぶそうだね」

救急箱を手にてこてこ歩いてきて、千晃は傷一つない幽香の手を一瞥。

「いつまでやってんの？」

未だ手を取ったままだった父に不審の瞳を向けると、わざとらしく

鼻を鳴らしてソファに体を預けた。不機嫌モード復活だ。

『——年の開通に向けて建設工事が行われていたF県境の高速道路にて、大規模な——はこの崩落について昨今市内で多発している一連の——何らかの事件性があるものとして捜査を進めており——』

誰一人として目もくれないテレビ、千晃が取り出した携帯ゲームしっとり暑い春の夜。すぐそばの通りを駆け抜けるガキンちよの黄色い声。遠くサイレンの音。

しばらくして、父の深いため息がそこに加わった。

「ハジメが去年の暮れに爆発事故に巻き込まれたって聞いたときに俺あ出先でさ。帰ればいいのに、その後普通に仕事して、会社帰ってまた残業して。家帰って、疲れたからとりあえず寝て」

恐ろしい男である。そして彼自身も、酷い父親だろうと苦笑してから続ける。

「あいつは昔から底抜けの不幸だった。それでも不思議と毎回生きて帰ってくれたんでね。日付変わってだいぶ外が明るくなつてから会いに行ったけど、案の定。で、とりあえず親の責任つてことで俺、警察から滅茶苦茶怒られてね。こりゃ流石にガツンと言つてやんなきゃいけないって気になつたんだけど」

なつたんだけど、だ。もろもろの問題をハジメたちに投げっぱなしだった手前父も強くは出られず、病室での説教は早々に二人の反省会ムードが漂ったという。

「時にあいつ、よく尻込みするでしょう」

それを俗にヘタレという。身を乗り出して猛烈な勢いで頷いた幽香がよほど面白かったと見えて、ソファから落ちる勢いで千晃が笑い転げていた。

「危ないわ」

「ふーんだ。お姉ちゃんが困ること、もつとやっちゃうもんね」

手間のかかる元気な妹と、よく出来た落ち着きのある姉。まるで娘が本当に一人増えたようで、そのやりとりを見守る男は話をこれ以上続けることが無粋なんじゃないかと思つたくらいだ。

「お父さん。それで、どうされました？」

その空気を破ったのは姉妹の片割れの幽香であったが。

「えーと、何の話だったかな」

「はたしてハジメと出会うべきだったのかって」

父が先ほどの話の糸口を手繰り寄せる間、幽香は手近なグラスを一つ引き寄せて、今度は澄んだ日本酒を注いでいった。それはひどく華奢なつくりであったが、落ち着いた彼女がへまをするようなことはない。

「ああそうだった。いろいろ言っただけど俺は実のところ、あいつのその、腰の重さってヤツを結構信頼しているんだ」

生まれてこの方、常に生傷の絶えない不幸な人生だったのだ。

人生という真冬の海を薄氷を踏んで渡るハジメのことを誰も笑えないし、責めることはできない。第一へたれ呼ばわりされてキレる本人が一番己を恥じているのだから。

しかしあくまで、その父は彼がへたれのままでいいと言った。

「不思議とあいつのやることなすこと、最後の最後にはイイ線いつてるんだよ。だから幽香さんと出会ったのも、そういう関係になったのも、きつと正しい」

自分の言葉を確かめるように、父はうんうんと頷く。

「少なくとも俺と千晃は幽香さんがいてくれなかったら、今こうやって面白おかしく暮らせてはいなかったはずだ。だよな？」

話をパスされた千晃は、迷惑そうに雑誌を顔に押し付けた。くぐもった声は非難がましい。

「どうしていちいち私にきくワケ」

「どのみち千晃はこういうのに口挟まなきや気が済まないだろ」

どこか緊張した面持ちの幽香がおずおずと顔を上げると、ソファの上で千晃が反動をつけて起き上がるところだった。千晃には似合わない顔で詰め寄られるうち、幽香も我知らず眉間にしわを寄せる。

「な、なにかしら」

その眉間に指を突きつけ、千晃は一言。

「あねき」

ついに私の扱いもハジメと同列になったかと幽香にため息つかせるまもなく、彼女は千晃の強烈なハグを受けていた。

「なんてね。いつも助けられっぱなしだ。愛してるよ、お姉ちゃん」

鼻先がくつつくくらしいの距離からぱつと身を離すと、千晃はいたずらっぽく笑うと両腕を交差させ、大きなバツマークを作って見せた。

「でも、あにきとのコトはしようじき手におえません」

恋人だなんて嘘だ。杏奈との一件の最中では嘘をつき続けることに憂鬱であったが、いつの間にかそれが幽香にとつても当たり前前になつてしまつていた。

「大人になれば千晃にも分かるわよ」

久しぶりにべつたり甘えられるよう、とぐりぐり頬を擦り付けてくる千晃を片手で撫でながら幽香は父へ微笑みを向ける。今となつては幽香が鶴見家のオカン兼、長男の恋人というポジションに居心地よさを感じていることも間違ではない。

「ここにいいオンナが一人いるんだけど、あにきとセットでどう？」

「うふふ。それは無理」

「わ、笑いながら……！」

簡単にへこむ千晃は面白いが、なにも幽香は遊んでいるわけではない。

この立ち位置に永住するつもりはないし、できない。でも嘘はなるべく言いたくないから手先と口先で彼女をあやして、お茶を濁すしかないのだ。

「ごめんなさい。後でたっぷり甘やかしてあげるから」

一見やさしげに見える手つきには抗いような怪力がこもっていた。引きはがされた義妹があからさまに不服そうな目を向ける先で、幽香が立ち上がる。

「え、まだ飲むの？」

白い喉を上下させてグラスを空にしていく幽香を、呆れて千晃は見上げるのだった。

「お父さんの言葉、とてもありがたく思います。ただ」

「分かってる。あいつが実際どう思ってるか気になるんだろ」

幽香はその問いには答えず、あいまいに微笑みで返した。

「ハジメを探しに行つてきますね。今夜はなるべく早く帰りますから」

「おう。戻つてくるまで起きてるよ」

一抹の不吉な予感、酒で流し込む。

ぱたりとりビングの扉が閉じて、幽香の姿が廊下の影に消える。それから廊下のきしみも、玄関が開く音も聞こえないままに、この家から煙のように、彼女の存在だけが消えた。

間。

長い間。

「うひよ」

突如として、父は己の体を掻き抱いてなよなよりんと床に崩れ落ちた。いい年でありながら幽香の親衛隊にも負けないくらい筋肉ダルマがだ。ドン引きを通り越した無表情で見つめるのは千晃だった。

「何。それ、なにやってるん」

『御父さん』って呼び方、めっちゃこそばゆくない?」

「ぜんぜん」

「これからさ、仮にこれから幽香さんがハジメとそういうことになったらさ、俺毎日そう呼ばれるのかな、なんて。今から結構楽しみっていうか」

「なんかすつごくキモいね、それ」

娘たちから一番聞きたい言葉と一番聞きたくない言葉を同時に浴びせられ、複雑な表情で固まった父。鶴見家の大黒柱があまりに頼りなくぽつきり折れる様をよそに、テレビではアナウンサーが平坦な語調でニュースの続きを読み上げていた。

『——は『断固たる姿勢で対処にあたりたい』とのコメントを——
——CMの後は本州に上陸予定の大型台風について——』



「今日を逃したらお前とはもう話せない。だってお前はここで死ぬんだから」

数滴の血が、トンネルの床を這っていた。血に濡れた口元を隠そうともしない雪之丞と、肩口に開いた傷を抑えて、日輪の巨砲を吸血鬼に向けたハジメ。

「そんな、ここ一番にキマったセリフを、まさかお前が邪魔しにくるなんてな」

トンネルの中は二つの能力によって浸食され、無数の槍と黄金の炎がせめぎ合う異界と化していた。そこに唐突かつ平然と現れた女。重厚なドレスに日傘という、この現代にはあまりに不釣り合いな出で立ち。熱風に黄金の髪を稲穂のようにたなびかせる美女は、まるで現実というものとは無縁の存在だった。

「幽香、なのか?」

ハジメは我知らず口を開いていた。

「ちがーう」

んべち、と音を立てて女の掌がハジメの額を優しく引つ叩く。いつの間にか傍らに移動した女からは、麝香じみた怪しげな香りが漂っていた。

「あーあ。やっぱりこんな失礼小僧を助けるんじゃないやな、やれやれと」

匂いも、ヘソの曲げ方も、幽香とは全く違う。それでもハジメはミステリアスな美女を幽香と錯覚するに至った共通点が見え始めた。その、余裕に満ち溢れているのにどこまでも張りつめてしまったような美しさだ。

「紫い、こっつちの話を聞きやがれよ!」

吸血鬼が殺意と共に放ったその名前を聞いて、ようやく女の正体に合点がいく。八雲紫。幻想郷の守護者である霊夢を影から支える大妖怪で、幻想郷を仕切る壁を管理する。操る力は万物の境界。

「どういふことか説明してくれるんだろうな」

限りなく万能に近い力を振るうその手がこの瞬間触れているもの

は何を隠そう自分自身の頭である。トンネルの壁に反響する二人の会話を聞き流しながら、ハジメは気が遠くなりそうだった。

「それはこっちのセリフ。ここまでの道のり、片づけにとっても手間取ったんだから」

「そのマヌケを誘い込むためのケツカイってやつだよ」

「あんな力ずくの交通封鎖を境界とは言わないわよ」

「確かに効き目はあったけど」

震えるハジメの声に、紫は視線を向けずに小さく肩をすくめた。

「あなたがわざわざ敵であるユキの話聞きに行っただけでしょ。物好きというか、なんというか」

「俺はそこまでお人よしじゃないし、ユキも敵なんかじゃない」

「お人よしってのはそういうところだろうよ。お前のバカみたいなデートを潰してやったときに身に染みだと思っただがな」

首の傷はまだまだ出血が続いていた。通り過ぎざまに軽く牙で引き裂かれただけの傷が、この瞬間も焼けた錐をねじ込まれたように痛む。あたかも、それは吸血鬼の怒りを表しているようだった。

「今までのほほんと暮らしておいて、あの人の運命を知るや否やで逃げたこいつに、俺は心底ムカツ腹が立ってるんだ。後生だからさ。俺の手でこいつをぶっ殺させてくれよな」

その怒りに、ハジメが反論する余地はない。家族だ友人だ恋人だと、彼女の運命を知っていれば、そんなお仕着せの役割を到底頼むことは出来なかっただろう。霊夢は自分を責めてもどうしようもないと言っていたが、ハジメはやはり、己の馬鹿さ加減を呪わしく感じる。「元から俺の仕事はそいつの抹殺。で、本人も異論ナシってカンジじゃん？」

ハジメの沈黙から、それが肯定を意味することを読み取ったのだろう。調子づいた雪之丞が槍と剣とを打ち鳴らす。紅い電撃と炎がまがまがしくまき散らされて、トンネルの壁を形容しがたい色味で染め上げた。

「排除って言葉をずいぶん都合よく解釈してくれるわね」

「甘すぎなんだよ、霊夢もお前も」

「あなたはもつと余裕を持つべきね」

もはや業を煮やしきつた雪之丞に何を言ってもムダだ。

「ま、それならお前ごと、でもいいや。巻き込まれても文句言うなよ」
美青年の浮かべる酷薄な笑みは、すぐさま槍と剣が散らす火花の逆光の中に消えて見えなくなつた。彼が振るう吸血鬼の武器『レー』なんぢやら』と『グングンとか』が溶け合い、生み出されたのは長大な、ねじくれた槍だ。先端からなだらかな螺旋を描くそれは、ドリルに似ている。

「下剋上のつもり？」

「そうかもな」

自信満々に雪之丞が出るからには、彼にはそれなりに勝算があるのだろう。

大男の呻きのような、不気味に錆びついた音を立てて槍が回転を始める。トンネルを耐え難い反響と紫電が舐めつくした。足元の砂利が小刻みに震えている。

「どげよ」

放たれば一本道。間違はなく余波に巻き込まれる。日輪の大盾による防御にはあんまり自信がないが、迎撃となれば話は別だ。発射前ならハジメの能力で十分叩き落とせる。進み出ようとするハジメを紫は一瞥して——後ろ手に押し留めた。

「これ、どうやら私とあの子の問題みたいなのよね」

螺旋槍の回転に伴う音は既に高周波となっていて、ハジメに紫の言葉の大半は聞き取れなかった。それでも信じて任せると語る彼女の瞳は見える。

「オーケー。お前がやるってんなら、俺も確実にやらせてもらうぜ」

それまで地面に突き立っていた無数の槍の回りに赤いもやが漂つたと思われると、それらは磁力に引かれる様に震え、そしてふわりと宙に浮いた。ぎゅると各々が無秩序に回転しつつ、隊列を整えている。紫とハジメは、気付けば十とも二十ともつかない槍の穂先から逆る殺意を受けて立っていた。その奥でひとときわ大きい槍が準備完了を知らせる様に鈍く輝く。

「しようのない子」

対する紫がすつと片手を持ち上げると、一層麝香じみた香りが強くなった。そうして次々と周囲に彼女の『口』が出現し始める。何かの間違いのように空中に開いた穴こそ、彼女の能力の正体なのだ。

雨あられと降り注ぐ槍は、次々と彼女の開いた穴に呑み込まれていく。

「ちっ」

備蓄分の槍はもう少してストックが切れる。

傍目のハジメにもそれが、いかに無意味な攻撃であるかは見て取れた。いかに強力な攻撃でも、相手が悪すぎる。

「やめにしようよ、ユキ。それよりも三人でお茶なんてどうかしら。なんならあなたの好きなあのラーメン屋でもいいし」

「……………馬鹿に、するなよ！」

今は切り札の槍が、あまりに頼りなく見えた。

「いくらでも力のあるヤツはいいよな。こちとら、セコセコ化け物退治でレベル上げてるつてのに、お前らは涼しい顔で俺を抜かしていきやがってッ！」

慟哭じみた絶叫と、ついに発射された螺旋の槍。紫はそれすら呑み込もうとしたが。

「あなた、何のために強くなろうとしたの？」

もはや誰の耳にも届かない呟きと共に、開きかけの穴を閉じた。激突と衝撃。ハジメの目の前にまで迫った、血染めの切っ先。

「悪くないわ。存外、痛いじゃない」

あえて彼女はその身に雪之丞の全力を刻んでいた。腕を破壊して、そのまま胴を貫いた槍を彼女がゆっくり引き抜くさまは何か厳かな儀式じみて見えた。ハジメも雪之丞も、固唾を呑んで見守る他にない。

「ちよつと、目を閉じていなさい」

紫が負った傷を定かにする間も与えられず、ハジメが最後に見たものは目の前で大きく空間が切り開かれていく様だった。呑まれる、と思えば既に生暖かいものに全身を捕らわれている。

「待てよおい！」

「ねえユキ、本当にあなたはそれでいいの？」

既に閉じきった裂け目めがけて反射的に振りかぶった槍は、しかし投げることに叶わず道路に落ちて、乾いた音を立てた。雪之丞はしばらくその場に立ち尽くす。

「それでいいの、だって？」

槍の柄を踏みしめて、雪之丞は紫の言葉を咀嚼する。自分勝手に気まぐれで胡散臭いが、彼女のことはそれなりに信頼している。手傷を負わされた苦し紛れに謎かけをするような女ではない。

「いいさ、いいに決まってる——あの人に認められるためなら、俺はなんだってやるぜ。何だって、差し出して見せる」

何かを得たければ、何かを差し出すしかない。今までそうやって力を得てきた。

心を捧げた女性に認めてもらうために、ひたすら雪之丞は棄てる。それこそが、日常の外側という壮大な夢を見せてくれた彼女へ報いる唯一の方法だと信じて。

「こんばんは」

そして、その機会は巡ってきたのだ。体の内側の焼け焦げるような衝動は、取り込んだハジメの血が馴染みだしたことを告げている。最高のシチュエーション。最高のコンディション。

「いい夜ね」

「ええ。実に。最高の日和ですね」

ハジメをああやって痛めつけければ、そのうち彼女が駆けつけてくることは分かっていた。

それでも抑えがたい唇の震えを感じて振り返った先に、彼女はいた。ずっと会いたいと、ずっとこうして話をしたかった。折れた槍を拾い上げて弄ぶ彼女にはここで起こったことなど一目瞭然だろう。血のように赤い瞳が雪之丞を捉えて離さない。

「その割には随分鼻息荒いように見えるけど」

彼女は少し酔っているようで、その頬が微かに紅い。数分か数十分そこらでもっと彼女を赤く染め上げてやらなければいけないことを

痛ましく思いつつも、やはり虚ろな胸の内を高鳴りを覚えるのだ
た。

第十六話『燃やす者／焦がす者』おわり

3 『コーラとドクペと水割り吸血鬼（上）』

幽香の体がわずかに前に進んだ瞬間、吸血鬼は空気を揺るがす勢いで加速した。両者の距離は相当に開いていたが、全力を解放された雪之丞の肉体にとって、それは常人の一步半と言ったところか。

「危ないですよ」

ただし、その一連の行動に殺気は微塵もなかった。

「気を付けてください。ケガしたら大変ですから」

彼のフルパワーは酔いのためにうっかりと足を取られたおちよこちよいの妖怪を抱き留めるために注がれていったのである。

「ふふ、ありがとう。優しいのね」

その価値は十分にあつたと確信する。

腕の中の彼女の華奢な体とたおやかさを確かめっていると、張り巡らせた貧弱な槍の檻でも、永遠に彼女を閉じ込めて手元に置くには十分すぎるような気がしてくる。

「どうかしたの?」

彼女が離れるとあからさまに雪之丞は名残惜しげだった。

「あつ、ああ、いや、なんでもありません。その、結構細いなって」

それは実になんでもある受け答えだったのだが、この日の幽香は軽く肩をすくめるだけで済ませてくれた。

「それで、ハジメはどこへ行ったのかしら」

だが次に飛んできた言葉は、天にも昇る心地の雪之丞を掴んで地の底に叩き付けるようなものだった。

「そんなのどうだっていいじゃないですか。ここにはあなたと俺。それで十分ですよ。これから始めるコトのためには、それで十分です」

「ねえ、ハジメはどこ?」

返事代わりに突き付けられた赤い稲妻を纏った穂先を前に、幽香はいつもの調子で微笑んだ。何が来ても構うもんか、と雪之丞は身構える。幽香の双眸がすつと細められた。

「とにかく、ここにはいないってことね。よそを当たってみるわ」

だがいつまで待っても、その笑みが妖怪のものに豹変することはな

かった。拍子抜けした雪之丞にさつきと背中を見せて、彼女はまた、ふらふらと去っていく。

「今夜は逃がしませんよ」

槍の石突を打ち鳴らす。

「俺はあなたに認めてほしいんだ。だから手合せ願います。殺す気でどうぞ。こちらはその気で、って、幽香さん!?　今イトコなんですけどー?」

ふらりんふらりん。背後にはいつ放たれてもおかしくない魔槍が控えているというのに、幽香は千鳥足で去っていくだけだ。折角大物ぶったセリフを披露する機会が手に入ったかと思いきや、それは幽香の関心と一緒に雪之丞の手から滑り落ちていくのだった。

「私ねえ。またあの子のご機嫌を損ねちゃったの」

くすりと笑った幽香の姿は、どうしようもなく魅惑的に雪之丞の網膜に焼き付いた。

「そんな時にまた大暴れしちゃったら。そしてあなたを傷付けたりしたら、今度こそハジメに嫌われちゃうかもしれないでしょう?」

そしてそれは、決して雪之丞の手に入らないものなのだ。頭の中で電球が割れたような音がした。

「ンだよ、それ……!」

——恋人つてのは見せかけのものに過ぎなかったハズだろ。ハジメとの間にどんな取り決めがあるのかは知らないが、おおかたあいつがムチャを言って、あなたに無理やりそういう関係になるように言っただら?」

だというのに。

「待てよ!」

だというのに、今の彼女が一瞬見せた表情ときたら。まるで彼女が心の底から。

「待ちやがれ!」

思い切り、彼女めがけて槍をぶん投げていた。吸血鬼の槍は彼女の肩を掠め、わずかにブラウスの袖を切り裂いた。トンネルの入り口近くで槍が起こした爆発に、彼女の髪がそよぐ。それでも、その足取り

は淀まず雪之丞から離れていく。

それが唐突に止まった。

「あ？——ああ、見つけちゃいましたか」

地面に点々と残る赤い染み。幽香の肩口からも鮮血が滴っている。しかし彼女が頓着するものは、己ではなく他人の流した数敵の血であった。

「ハジメがあまりにうるさいんで軽く噛んでやったんですよ。まあ、最後は紫に任せちゃいましたけど。今頃はミキサ―にでもかけられてるんじゃないですかね」

「そう。なら、尚のこと急がなくなっちゃ」

「だからさ」

そうして彼女が背後に感じたものは、数十本か数百本そこらの武器が同時に放たれる気配だった。一部の隙もなく、まるで壁のように押し寄せた槍衾は幽香には一本たりとも触れられない。彼女の周囲に張り巡らせた障壁と槍がせめぎあい、激しく火花を散らす。

「逃がさねえって言いましたよね、俺」

しかし、老朽化激しいトンネルに彼女と同等の防御力を期待するのは間違いだ。出口が音を立てて崩落していった。

「こうやって、あなたの足止めを試みたらどうなりま——」

すぐ傍で殺意が迸った。空気を断つような鋭い音とともに何かが生なり、トンネルの地面に新しい血飛沫を散らした。

「——すかつ」

横一文字に唇を裂いたものの正体を見極められぬまま、雪乃丞は反射的に跳び退く。

「ねえユキ。私が嫌いなものってなんででしょうね？」

おもむろに歩み寄る幽香が身に付けたものは、どこにでもあるような現代の衣服だ。しかし雪乃錠には乾いた音を立てる春物のパンプスが、重厚なブーツめいた威圧感を伴って迫るような錯覚を覚える。

「ははっ、きたきた」

風切り音。

今度は右の視界がブラックアウトした。眼を裂かれた。それでも雪之丞は笑う。ようやく彼女の殺意の切っ先で踊れるのだ。楽しくないはずがない。軽やかにステップを踏んで、魔剣を振るう——はずが、ねじくれた剣を握る腕は胴体から切り離され、すでに天井目指して垂直に跳ね飛んでいた。

「これが、あなたの本気……ッ！」

「まさか。馬鹿にしないでちょうだい」

一方意中の女性はすげない態度で髪をかき上げた。

「まだまだ。俺の本気だって出しちゃいませんよ」

必中の力を持つ槍を胸の炉心から三本片手で引き抜き、投擲。

炉心から滴る血は、彼の執念が染みついたように意志を持っている。空中で紅い螺旋軌道を描いた槍は途中二手に分かれ、別々の方向から同時に幽香を襲う。

「ひとつ。子供の火遊び程度の力を持っただけで舞い上がるような連中」

幽香は一步も動いていない。

「ふたつ。身の丈知らずに誰にも彼にも吠える駄犬」

どこからか現れた白い花びらが煙のように散った。花卉のヴェールを潜って現れた妖怪は全くの無傷で、彼女の足下には三本の槍が突き立っていた。

「そういうのは大抵相手の力量も計れず、勝手無残に死んでいくから目障りなの。でもユキにそうなって欲しくはない」

まるで目の前でそうした者たちを見てきたかのような口ぶりだった。きゅつと唇を愉快そうに吊り上げて、幽香は腕を組んだ。そうして誇示するのは豊満なバストだけではない。圧倒的な強者としての余裕だ。

「これから三分あげるわ。私は一切手を出さずに、あなたに手ほどきをしてあげる」

雪之丞の肉体が更に裂けた。全く見えない。いや、言葉通り、本当に目の前の幽香は指先ひとつ動かしていない。にも拘わらずの圧倒的な攻勢。揺るがない自信。そして、変わらぬ百合花のような微笑

み。

「敗北の手ほどきを、ね」

本当に強いものは、決まって笑顔だ。



青年は首筋に女物のハンカチをあてがいが、妙齢の女性は大きく胸元の裂けたドレスの上から男物のジャケットを羽織っている。揃って雪之丞に痛めつけられた二人は、奇妙なユニフォーム交換のような有様で町はずれの神社に佇んでいる。

「なあ、俺本当に吸血鬼になつたりしないよな」

しきりに首の傷を確かめていたハジメは、隣の女に声を投げかけていた。

「くどいわね。安心して何度も言ったでしょ。あなた吸血鬼をゾンビか何かと勘違いしてるんじゃない」

「でもなあ。やっぱりそういう映画を見た気がするんだよなあ」

お気に入りのダイ・ハードを除けば、ハジメはもう映画を見ていない。おそらく彼の記憶におぼろげにある血と内臓とドツキりだらけのチープな一作は、千晁の出産直後、母よりも重体で病室に担ぎ込まれた後の入院生活に見たものだったのだろう。

「もつとちゃんと抑えないとダメ。そう簡単に血って止まらないものよ」

ハンカチはぐっしよりと血で濡れていた。体調に変わりはないが、ここまでダラダラ血が流れていると不安になってくる。

「抑えなくても、こういうのって強く縛ったらいいんじゃないのか」

「あのね、それ本気で言ってる?」

首を抑えるハジメは、紫の呆れ笑いを引き出した理由に思い至らなかった。

傷口はまるで巨大な蚊に刺されたようで熱感と腫れが収まらない。境内に自販機の明りを見つけて、ハジメは腰を上げた。

「紅茶とかでいいかな」

「ええ。ありがとう——あ、やっぱりコーラで」

「コーラ?」

なんともイメージにそぐわぬものを選ぶものだ。

「気に入っちゃったのよ」

きよとんとするハジメに、紫はただ頷いた。軽口の叩き甲斐もないので、彼は素直に腰を上げると自販機の明かりに群がる羽虫を払いながらボタンを押して、つり銭が落ちる間紫の背中を見つめた。

「どうして助けたのかって思ってるかもしれないけれど、私はユキに無駄な殺生をさせたくなかっただけ」

紫が先回りしてハジメの疑問に答えを出す。

「なら、なおのこと礼を言わなくっちゃな」

「ハジメってヘンな子なのねえ。とはいえ、そうでもなきやあの変わり者と一緒にいられるはずもないか」

紫は肩をすくめる。一方お似合いと言われたようで、ハジメは少しだけ面映ゆかった。

「いや褒めてないし」

自然と浮かべたにやけた笑いに大妖怪は釘を刺しておく。

紫の視線の先では駅前を彩るきらびやかな電飾が、ぼんやりと霧がかかった光で夜空を染め上げている。その無防備な後ろ姿に、いつしかハジメも無防備な願いを投げかけようと口を開きかけていた。

「お前の力で幽香を助けてやれって頼みならお断りよ」

またしても先手を打たれた。

しかし断られてハイそうですかと引き下がれるようなことではない。首筋の傷を缶で冷やししながら、ハジメは音もなく片手を持ち上げる。家族のためには、なりふりなんて構っちゃいられない。

「これは頼みなんかじゃない」

紫の背後から突き付けられたものは、すべてを撃ち抜く弾丸を装填された指先だ。ハジメはマジだ。

「ずいぶん面白いことをするのね」

霊夢がそうだったように、紫もこんな安っぽい脅迫には動じない。唯一の差異を上げるとするならば、彼女の瞳の奥にはハジメの豹変ぶりを面白がるような気配があるということだ。

その視線の数が等比級数的に増加する。彼女と、彼女に指先を突き

付けたハジメの周囲で開いていく幾つもの穴。闇夜の中でうすぼんやりした光を放つ穴の中に渦巻くのは、誰のものもしれぬ血走った無数の目玉と濁り切った混沌だった。

「別にここであなたをバツスバスに切り刻んでも構わないんだけど。やる？」

「もちろん。あんただってハチノスにされても文句は言わないよな」
ここまで肝の据わったところを見せられて、ハジメも後には引けない。

彼の背中で、花が開くように光の日輪が浮かび上がる。フル装填、フル火力。

「あんたにとつちや朝飯前だろ。霊夢と違ってずいぶんくだらない意地を張るじゃないか」

得物を追い詰める肉食獣じみて、ハジメは紫のまわりに円を描くように歩む。もう指先は迷わない。身内のためならどこまでもナリとフリとを捨てられるのが彼だ。紫がうんと言わないなら、あたりを焦土にしても言うことを聞かせてやる。

「そんな心優しいあの子をいじめたのはどこのどいつだったかしらね」

ケガする前にさっさと領けよ、とハジメは思う。少しくらいビビりなさいよと紫は思う。

闇夜に響く木のさざめきはなりを潜め、得体の知れない鳥が高く鋭く鳴くと夜空へ飛びあがっていく。

それぞれに、それぞれの小さな苛立ちを覚えながらの一触即発はずいぶんと長い間続いたような気がした。

「……………なーんて」

先に根負けしたのは紫の方だった。

「残念。私はあなたのお願ひ、意地悪で叶えないんじゃないよ、叶えられないの」

ぶらぶらと諸手を振って見せて、全能のはずの妖怪はあっさりと匙を投げたのだった。

「そんな」

「第一、やれるんならとつくの昔にあいつを殺すか生かすかしてるでしよっ。」

「でもあんたの力はなんだってできるんだろ」

尚も食い下がろうとするハジメだったが、飄々とした紫の振る舞いの中に真実を読み取っていた。彼女はウソをついていない。

「どういうワケか、今のあいつには私の力も霊夢の力も通用しないの。唯一の例外があるとすれば」

しよげてしまったハジメの横に腰を下ろした紫は、慰めるようにその頭をなでる。彼女は先を続けなかったが、その瞳は彼の背中で萎んでいく光の輪を見ていた。

「ええと、ごめんなさいねえ」

「いいさ。もとから期待なんてしてなかったし」

大嘘だ。

振り払う気力もないくらい、彼女の手を負えま宣言は効いた。

正直なところ、霊夢の一件以来、姿も知らぬ大妖怪ユカリを悪夢に見るほどハジメは警戒していた。だが幽香の秘密を知ってから紫の存在は同時に最後の希望でもあったのだ。

「ほらほら暗い顔しない。これ以上ぶさいくになってもいいことないわよ」

あまりの気落ちっぷりにさすがの紫も珍しく気を使ってあれこれ励ましの言葉をかけてくるのだが、ハジメはがっくりうなだれたままだ。やがて紫はハジメに渡されたジュースを手に、しげしげとパツケージを眺め始める。

「ねえ。この缶、というかこのラベルが私達妖怪だとしましょう」

「はっ？」

その突拍子もない発言に、やはりこいつはよく分からないと素直に思う。

「赤い缶に白のラインとこのロゴが入っていたら、あなた、それはなんの飲み物だと思う？」

「コカ・コーラだろ」

例えそれが地球の反対側の自販機から吐き出されてきたものであっても、瞬時に判別がつくはずだ。この赤ラベルは言語を超越している。

「本当にそうかしら。飲んでみて」

半ば口をつけたものを薦められてぎよつとしたが、これしきで動じるところを見られたくなかったので、ハジメは平静をつくろって缶を傾ける。そんな青臭い心境などお見通しの紫はひそやかにくすくす笑っていた。

びきりと音を立ててハジメの眉間に深い皺が刻まれる。間髪入れずに勢いよく吹き出した液体からは独特のにおいがした。

「まずう」

例えるなら、杏仁豆腐をミキサーで砕いて炭酸をブチ込んだような味。

これには覚えがある。確か遠い昔に雪之丞がどこかの雑貨屋から箱で買ってきて、ひと夏の間同じにおいのげっぷを吐きかけてきたものだった。

「何の嫌がらせだ。俺、ドクペは嫌いなんだよ」

鶴見家は全員がコーラ派だ。朝食の席でドクターペツパーを取り出そうものなら一瞬で全員の不興を買うことができるだろう。父は咳払い連射機と化しハジメはテーブルを打ち鳴らし千晃は唸って威嚇する。

それほど毛嫌いするこのジュースを飲んでしまったのは、ひとえに彼が赤いラベルが説明する中身を信頼したからだ。

「事實はラベルの無い缶。時に中身が飛び出して、ヒトには到底理解できないようなことを次々と引き起こしてしまう」

それは夜に見える灯であったり、深山の川面に佇む人影であったり。そうした得体の知れないものを説明しようとして、かつてヒトは怪異というラベルを作ったのだ。

「もちろん事實はコーラかもしれない。ドクターペツパーかもしれない。でも大事なのはラベルで、中身が一応説明されていれば人は安心した。理解できればとりあえず、恐れることはできる」

正体の分からない脅威より、分かる恐怖を。奇妙な話だが、ヒトはそれで安心する。

「世界は次のラベルに科学を選んだ。あなたにとって口当たりのいい味があるように、時代にとっても受け入れやすいラベルがあるの。おわかり？」

ハジメだって幽香に初めて出会ったとき、ついに自分の神経に限界が来たのかと考えたものだ。あんな修羅場で突拍子もなく女が目の前に現れるなんて、『そんなことは幻覚だ』と割り切った方が遥かに簡単に納得できた。

「そう遠くない未来、すべてのラベルは貼りかえられるわ。今はその過渡期。幽香は——まあ、順番の問題でしょうけど、運が無かったわね」

「それって！」

思わず身を乗り出したハジメを前に、紫はすっかり諦めきった笑いを見せた。

「ええ。私達幻想はいずれすべて狂って、共喰らいの末に果てるのでしよう」

そうしてあまねく幻想が消え失せた果ての、新世界。

朝起きたら金槌で頭をぶんなぐられるようなひどい味のトーストをかじって、それで満員のしめった匂いに我慢しながらバスに揺られて学校へ。そこで全く忘れていた午後の小テストの存在を思い出して冷や汗をかきつつ、そんなミニマムな危機をまるで差し迫った世界の滅亡のように友人たちと小声に囁き合いながら昼飯を食べる。

それはつまり果てしなき日常だ。

「もうちよつと喜びなさいよ。ねえったら。波風立たずの平凡な人生。それがあなたの望みだったんでしょ？」

「……………そうだったけど」

下校。夕暮れのアーケード。いくら小路を曲がってもそこにはありふれた日常と次の路地が待っているだけで、路地裏の異世界なんてない。巫女といえば神社のバイトで当然空は飛ばないし、小山のような鯨なんてもつての他だ。燃えるビルに放り込まれたら、おとなしく

焼け死ぬのを待っていればいいから楽だ。

ジューズのラベルはすべて同じ。特別な名前なんて花にはなく、向日葵も薔薇もすみれもすべていつしよくたに花だ。

それは本当の意味で何も起こりえない世界なのだろう。確かに、かつては喉の奥から手が出るほど望んだ現実だったはずなのだが。

「でも、その世界に幽香はいないんだ。そんなのお断りだ」

今は、その平穩を心の底から拒絶する。

「あなたを助けたのは本当の本当に些細な気まぐれだったけれど。少しでも恩を感じるならひとつだけお願いがあるの」

どこか満足した様子で紫は腰をあげると、体を大きく弓なりに伸びをした。

視線の先にはヒトの営みの光。幻想を放逐する科学の灯がある。そこに向かう彼女の顔は日光を目にした吸血鬼のように忌々しげなものではなく、とても買ったもんじやない高価なおもちゃを前に顔を輝かせる子供のようなだった。

「あいつがどんな手段で結界を抜けたにせよ、私はもう二度と同じことを繰り返させない。だからこれが、幻想郷が外の世界に直接関わる最後の異変になるわ」

押し付けられた缶は、いつの間にか見事に飲み干されていた。かわいらしいげつぶを一つしてみせて、紫は慌てて口元を扇子で覆った。

「失礼——だから、消えていく私たちを憐れんでくれるハジメには覚えていて欲しいの。私達は確かにこの世界にいたってことを。かつてあなたたちの隣を、幻想がともに歩んでいたってことを」

否応もなく、この小さな会談が終わりを迎えたことをハジメは理解させられた。

「お、おい。まだ俺には言いたいことが山ほどあるんだぜ」

石段を降りていく紫の袖を捕まえようとして、ハジメの手は宙を掻く。すでにその背中はずいぶん遠い。その気になれば一瞬で姿を消すこともできる筈なのに、焼き付けるように悠々と彼女は去っていく

「諦めんなよ。まだまだ時間はあるんだ。幽香とか霊夢とかユキとか集めてき、俺たちの能力を合わせればきつと何とかなるはずだって」

はつきりと理解する。幽香と紫。二人の共通点。その、イヤな割り切りかた。その気になれば世界をむちやくちやにできるくせに、運命という単語が出てくると尻尾を巻くところが。

「あなたが一番よく分かっているんでしように」

いきり立ったハジメも、そんな悲しげな眼差しを向けられて一瞬立ちすくんだ。

「それでもあなたは私を怒ってくれるのね」

その背中が敬意の表れであることに気付けるくらい、ハジメは大人ではなかった。石段を転げる勢いで下りつつ、やはり紫には追いつけない。

「困ってるなら素直に助けろってお願いできないのかよ！ いったも殺すだ死ぬだ消えるだって達観したふうで物騒なことばかり言いやがっ——どわあっ!?!」

実際転げた。

加速はどうあがいても止まらない。

見事な人間玉となった彼の視界が何度も空と地面を交互に映す中で、福笑いのように頬を膨らませた紫が、次の周回では一層顔をひしゃげさせると腹を抱えて笑っていた。

「ありがとう。少し気が楽になったわ」

次に彼女を見つけることはなかった。

「いってえー!」

中腹、ようやくコースアウトしたハジメは雑木に突っ込んで、しばらくそのままだった。尻だけを石段へとマヌケに突き出したままの恰好で、なんだかすぐに立ち直る気力もなくて。

4 『コーラとドクペと水割り吸血鬼（下）』

大きくのけぞった幽香をかすめて二本の槍が交錯し、激しく火花を散らす。空中に躍り上がることで続く斬撃と打撃を躲して、幽香はトンネルに立ち込める赤い霧へと目を凝らした。

「そういえば霊夢から聞いたことがあったわ。幻想郷にやってきた吸血鬼のはなし」

その間も間断無く攻撃は続く。

霧の中から迸る無数の殺気に、幽香は面白がるように小首をかしげた。一手前まで頭があった場所を電光が突き抜ける。左右からの斬撃。足首を、眉間を、心臓を。ありとあらゆる急所を狙った攻撃は暴風のごとしだ。

「例のいい男ですか」

手数が尋常ではない。

一息で三方向、四方向からの攻撃をどうやってか同時に行いつつ、涼しげに会話に応じる雪之丞の実力はもはや通常の怪異を逸している。

「男？ いいえ。私が言っているのは女の子よ。四百年ばかり生きている、ね」

そして、怪異という粹すらぶち壊してしまった最強の怪物。彼女は正面と背後から迫った魔槍を半身ひねって間一髪で避けつつ肩をすくめて見せた。実際二人が言い及ぶところは同じ血族の姉と妹。

何よりの勘違いは雪之丞は霊夢のイタズラ心のままに、未だ姉の性別を勘違いしたままだということだった。

「その子はユキのように燃える剣を持っていたそうよ。しかも度胆を抜かれたことに——」

霧の中で赤光が爆裂する。数えきれない鉄の槍が豪風のように吹き散って、トンネルの内壁にざくざくと突き刺さっていく。その合間を縫って高速で移動するものは幽香と、そして何かだ。おまけに一人ではない。

最悪の視界と、ヘタを打てば一瞬でハリネズミになってもおかしく

ない極地での攻防。

地面に降り立った幽香がふわりと回る。まき散らされた白い花卉が一足遅れで彼女を包囲した者たちの穂先を狂わせる。莫大な魔力を宿した魔槍と魔剣。干渉する四本の武器が秘めた魔力が小爆発を引き起こす。

「なんでも、四人に分身したとか」

そうして立ち込める霧が吹き飛ばされた時。

非常灯が照らすトンネルに輝くのは心捕らえる赤い瞳。四方から突き出された攻撃を躲しきつて、身体を捻ったままの姿。髪間から覗くうなじは妙に艶めいている。

「にしても虚を突くためだけに、そんなに人数が要るものかしらね」

額が触れてもおかしくない距離。驚愕の表情を浮かべたままの雪之丞から視線を逸らして問うた先にはまた雪之丞がいた。その隣も、またその隣にも。

「ど、どうやって今のを避けたんスか」

総勢四名の雪之丞の声が見事にシンクロする。

煙幕。一斉射撃からの分身による包囲攻撃。この町に巣食うほとんどの怪異はこれで沈んできた。

「気合よ」

入魂のフルコースを平らげて息の一つも上げずに幽香は言い放つ。彼女が視線を注ぐ先は腕時計。夜光塗料の塗られた針はぼんやりと、しかし確かに時間を刻んでいる。残りは二分。

幽香にみとれていた雪之丞たちが気を取り直す頃には、既に彼女は包囲を脱していた。四人はそれぞれの武器とそれぞれの殺意を手に、彼女へ挑みかかる。

「なんだか、大変そうね」

殺陣の向こうに仲良く並んだ必死の形相を見ているうちに、素直な感想が幽香の口を突いて出た。

「そりゃ、あなたに失望されたくはないんで」

「どうして?」

「あなたを愛しているから、ですかね」

ひらりひらりと幽香は舞った。追いつがるように雪之丞たちが槍の穂先を差し向ける。

「だからあなたを救いたんだ。あなたがあなたを見失う前に、この手で」

それはとことん身勝手に理不尽な愛の形だ。好きになった女にそのまま置いてほしいから、殺して永遠に自分のものにする。なんて。「うれしいわ」

実際幽香もその形を好ましく思っている。雪之丞にとっての問題は、それを望む相手がどうやら自分ではないらしいということだった。

「ねえユキ。あなたは私を殺した後にどうするの？」

唐突な問いに、東の間雪之丞たちの動きが止まった。

「どう、するんでしょ」

その鈍りまくった剣筋が幽香に触れることなどありえない。

それはかつて、ハジメがぶつけられたものと同じだ。彼は『野望』と答え、なまなかに剣を振りぬいたまま固まる雪之丞は返す術を持たない。

「俺はぶっちゃけあなたとの決着の後のこと、何も考えちゃいないんです」

「そう」

「なんつーか、あんまり人生に未練ないんすよね、俺。ひたすら元手を薄め続けるっつーか、あなたがくるまでホント何も無い毎日で」

それは奇しくも、人生に失望してから彼がこっそり飲み始めたウイスキーのやり方に似ていた。

「ひよっとして本当はもつと早くに死んどく運命だったんじゃないかな、とか思ったりしなかったり」

ほんの一瞬、幽香の足取りが鈍った。その隙を突いた雪之丞の刺突が幽香の髪を数本削って落とす。

「いつそ俺と共倒れとかどうです？」

屈託なく、人懐っこく。一抹の期待すら込めて吸血鬼は笑った。幽香も声を潜めて笑う。笑って、その双眸に初めて戦意が宿った。

「絶対に負けてやらないわ」

残されたものは腕時計に目をやった幽香の残像だけ。その姿に、さまざまに嫌な予感がした。

「うぐふう」

防御を固め直そうとした矢先、あさつての方向からくぐもった悲鳴が上がった。

「な——に——?」

天井。そこにひととき濃くわだかまった霧の中からおびただしく血の雨が降る。ぽかんと口を開いたまま、四人の吸血鬼はその一点を見上げていた。次第に輪郭が薄れ、赤い霧となって消えゆく彼らの前に、どぐちゃあ、と音を立ててそれは落ちる。

五人目にして本物の雪之丞が。

「のこり一分」

地虫のように這いながら、右手首から先を吹き飛ばされた雪之丞はようやく不可視の攻撃の出所を知った。

「こ、こいつがっ!?!」

地面の血だまり。そこに映った自分の像。後ろ首からよつきりと顔を出した小さな小さな怪物の姿。

「こんなちっぽけなヤツに俺は、あいてっ! おとなしくしろよ、クソ!」

それは実に、実にかわいらしい向日葵であった。

しかしそいつを力任せに引き抜いたときの暴れっぷりといったら、とんでもないものだ。飢えた虎のように気性が荒い。振り回す葉は剃刀よりも鋭く、抑えにかかった雪之丞の指を危うく切断するところだった。

「こいつがあなたのタネってことですか?」

仕込まれたタイミングは分かり切っている。幽香を助け起こした瞬間だ。鼻の下を伸ばしている間にまんまと準備は進められていたのだ。

手元で荒れ狂う向日葵に殺意を向けたのは一瞬。雪之丞はそれを路肩に放った。

「ま、気付けなかった俺がドアホってことつすよね」

しつかりとした幽香の足取りを見て、もう彼女には酔いが残されていないことを知る。あるいは初めから演技だったのか。胸の炉心から生まれ出た柄を、雪之丞は掴んだ。

「行きます」

棄てれば捨てるだけ、身軽になれる。雪之丞が人としての生を捨てた瞬間からの持論だった。

ならば恐れも、ためらいも、ここで捨てていく。

地を蹴った瞬間に彼の姿は完全に消失し、変わってトンネルの中に無数のストロボ光じみた赤い光が灯る。それは、吸血鬼の携える魔槍が爆裂する度に放つ光だ。

使い捨ての槍を何度も爆破して、その勢いで狭いトンネル内を立体的に跳びまわる。

光の帯と化した雪之丞は無防備にさらけ出された幽香の背中に槍の穂先を向け——更に加速する。やるなら正々堂々。正面からザツクリ。だ。

「ムチャするわね」

そうでもしなければ勝てない。

そして目の前にある勝ち目に、雪之丞は賭けることにした。

「さようなら、幽香さん」

背後に神経を向けていた幽香が反応するまでの時間は、一拍子雪之丞に劣る。そのわずかな隙に、穂先は吸い込まれるように幽香の胸に突き刺さっていった。

「獲っ」

果たして。そのあまりにあっけない幕切れ。あまりに軽い手ごたえ。

貫いてやったはずの幽香の胸。そこから零れ落ちるものは、真っ赤な、真っ赤な——

「はな、びらっ」

ぞわりと総毛立った瞬間には、雪之丞は茫然と自分の胸から生えたそれに魅入っていた。薄暗がりの中、幻惑するような白はべつとりと

雪之丞の血に塗れている。

「三分」

浴びせられた声の出所は二か所。即ち、

「約束通り『私は』何もしなかった」

前と、

「虚を突くだけなら四人もいらなくて、言ったでしょ?」
後ろ。

風見幽香は最初から二人。ヒマワリは本物の攻撃を隠すための囮。自分が分身をしておきながら、相手が同じ手を使ってくる可能性を完全に失念するとは。

「それじゃ、気は済んだわね?」

腕を引き抜かれると、そのまま雪之丞は前のめりに倒れた。

もはやほとんど花卉となって崩れてしまった己の分身の横を過ぎ去って、幽香は足早にこの場を後にする。

「は、ははっ!」

しばらくして出口に差し掛かった幽香の耳に届いたものは、雪之丞の狂笑だった。大笑いのボリュウムが上がるにつれ、トンネルの気温もぐんと上昇していく。

「まだだ。まだ、終わっちゃいない!」

背後から漂ったものを見て、思わず幽香は足を止めていた。

それは金色の火の粉。見間違えようもない、鶴見ハジメの決意が見せた能力の片鱗。

「ユキ。あなた一体何をしたの」

振り向いた先では、黄金の太陽が輝く舌で雪之丞の肌を舐め始めたところだった。

「クソみたいな嫉妬だって、突き詰めればここまで真に迫れるってことですよ」

彼の炉心からめりめりと音を立てて生まれてくるのは光り輝く巨大な筒だ。オリジナルより二回りは小さいものの、それは『風穴をぶちあける程度の能力』そのものだった。

「ぶつちやけ三分は結構焦りましたよ。あいつのクソ太陽を複製する

には、本当にギリギリの時間だった」

勝利を確信する雪之丞の浮かべたドヤ顔が、音を立てて破裂した。「ぐうっ——」は。そりゃそっか。吸血鬼に太陽なんて、最悪の取り合わせだもんな」

そうやって撒き散らされた血も肉も、体の内側から溢れ出す金色の炎によって灰に変わっていく。

そんなことはお構いなしだ。一射。たった一射撃てれば、それでいい。更に体の数か所を吹き飛ばしながらも勝利を確信する。光を収束させる砲身の先で、幽香は静かに目を瞑った。

「やりなさい。あなたの気が済むように」

ようやくここで、自分はハジメを越える。ヤツの手が届かない場所に、幽香さんを連れ去ってしまうことができる。脳裏にぼんやりと浮かんだ円とトリガーに手を伸ばす。

「あなたはなんのために強くなったの？」

そして彼女の口から転がり出たのは紫と同じ問い。

「あなたを殺すためです」

その先なんて要らない。夢も希望も捨てて、ようやく狭間雪之丞は究極の身軽さを手に入れることができる。

「さようなら」

ここまで長かった。

トリガーを引いた瞬間、まるで肩の荷が一気に下りたようだった。解き放たれたものは昏く煮えたぎる鉄のような奔流。赤黒い電光を禍々しく散らしつつ、模造された太陽の力は突き進む。

空気すら妬け焦がして暴れ狂う閃光の正面に佇む幽香は僅かに片手を持ち上げ——まるで薄絹でも裂くかのように、彼女の指先で光線が四方に散った。

「あ、あれ？」

素っ頓狂な声を上げる傍から、彼の右肩から先が丸ごと吹き飛んだ。顔の半分は、既に炎に包まれている。

「バカな」

そんな結果は認められない。次々と連射する無駄玉が、彼の肉体の

崩壊を爆発的に早める。幽香は物言わず、ひたすらそれを受け止め続けた。

「なんだよ。ふざけるなよ!」

ここまで来たというのに、ここまで捨てたというのに結局力不足なんて。

命を燃やす攻撃は、一撃として幽香の防御を破れずに消えていく。神経まで焼かれ始めた耳が幻聴を拾う。

『殺し合いをさせられる俺の気持ち分かるのか?』

そいつの冷ややかな目の奥に燃えるのは日輪だ。

「お前だつて俺がどんな気持ちでいるんなものを捨ててきたか分かるのかよ!」

視界が涙に滲むにしたがつて代わりに見えてくるものは、あいつの姿だ。この太陽の力に選ばれた男の像が、霞んだ幽香の隣に浮かんでいる。

「俺はお前に負けたくないんだ!」

口にしてようやく気付くのは、自分の力の本質。その向かう先。愛する人を救うために嫉妬の力を振るうなんて、よくよく考えればもとかからおかしかったのだ。

「ああ、そっか。俺、本当は」

目に見えて勢いの落ちた光線の威力に、幽香はそろそろ雪之丞の限界が近いことを知る。

「ユキ、もうそれを捨てなさい。早く」

その言葉に従おうとして、雪之丞は自らの異変に気付いた。

鶴見ハジメの能力が完全に暴走している。暴れ狂う太陽の血が血管を焼き、思考を白熱させ、肺を焼きつぶす。砲身を切り捨てる余裕なんてない。肉ごと削り落とそうと剣を握るも、それすらすぐに焼けて灰になってしまう。

「うおお、止められねバハアツ!」

その喉笛が弾けて、悲鳴の代わりに黄金の炎が噴き出した。もはや雪之丞に人の形は殆ど残されてはいない。それでも裂けた砲身からあちこちに吐き出される光線がトンネルの構造を致命的に引き裂い

ていった。不穏な地響きとともに崩れた天井に弾き飛ばされると、ようやく雪之丞は倒れ伏す。

「……………ああ、しぬう」

地面を舐める雪之丞に背を向けて、幽香はうず高く積もった瓦礫の山に視線を走らせた。幸いにもそれをすぐ見つけると、彼女は靴と靴下を脱ぎはじめ。素足が霞んだ瞬間、トラックほどもあるコンクリート片が宙を舞った。

「ちよつと染みるかも」

しばらくして燃えカスの上に声と共に降り注いだのは、真っ白な消火剤だった。幽香は瓦礫の下から引つ張り出した、ひしゃげた消火器を下ろす。

「俺は恥ずかしゴホっ」

まだ収まらぬ黄金の炎がその口から小さく迸る。

幽香がどうこうする暇もなく雪之丞は消火器のホースを咥えこむと躊躇いなく取っ手を握った。喉に開いた傷口から血と炎と消火剤が噴き出す。

それが真正正銘ハジメの炎であれば消えはしないだろう。残酷な事実を改めて見せつけられる。

「あんまりおいしくないっすね」

穴だらけの体を情けなさそうに見下ろしながら吸血鬼が漏らした呟きが冗談なのか否か、幽香に判断はできなかった。

「——俺は、恥ずかしいやつです」

それは別に、揚げられる寸前のとんかつみたいな姿で道端に転がっていることでも、全裸の上におっぴろげたままの股を閉じる体力も残されていないことでもない。

「いいえ」

その訳を聞かずに、幽香は首を横に振った。頬を覆った消火剤にラインを描いていく涙のしずくを、彼女はじっと見つめる。

「俺はずっと、あなたの幻を追いかけていたんです。ハジメに負けたくないからあなたを」

その先を言葉にすることを邪魔したのは、ごしごしとブラウスの袖

で顔を拭う幽香であった。

「きれいになったわ」

拭いてもらったそばから新しい涙が伝った。

「あらあら」

「すつ、すみません」

雪之丞が成すがままの間、崩れ落ちた天井からは月光が静かに降り注いでいた。

「もつと、自分を誇っていいんじゃないかしら」

しよげた花にそうしてやるように、幽香は優しく語りかけた。

「無理して誰かの血を吸う必要なんてない。あなたは、あなたのままで十分」

満身創痍の吸血鬼に去っていく彼女を引き留める方法は無い。だが最後に、どうしても聞いておきたいことがあった。

「あの、もしも俺がまたあなたと戦って勝ったら、俺に惚れる可能性ってありますか？」

「私は誰の気持ちにも応えるつもりはないわ」

一転して幽香は物憂げな視線を肩越しに送り付けた。

「それと、この子を殺さないでいてくれてありがとう」

去っていく幽香の手に絡みついていた例の向日葵が威嚇してきた。

「……………そんなこと言われたら、イジになるだけですつてば」

サイレンの音が遠くから聞こえてくる。このままぼんやりしていれば、じきに誰かが来て保護してくれるだろう。最後の涙を振り切つて、雪之丞は大声を上げて笑ってみた。

「トンネル崩落の現場から失踪中の高校生が全裸で、粉まみれで発見？」

明日の新聞記事はそうとう愉快な見出しに飾られそうだ。

事情聴取だのなんだのとしばらくは面倒なことが続くだろうが、それが終わったら幽香さんのところへ行って、謝る。

そうしたら改めてハジメの恋敵として存在感をまき散らしてやるでしょう。

「おや」

目の前に舞い降りた大きな黒羽を何気なく手に取って、雪之丞はさつと陰った月を見上げた。



石段を降りきると、サイレンの音が聞こえた。この夜はいつもよりにぎやかだ。

「火事かな」

赤く染まった遠くの空を見上げながら、ハジメはズボンを探った。空港で杏奈に渡そうと思っただけのままだったタバコを取り出して、ヨレヨレの一本を不器用に口にくわえる。いっしょにねじ込んだはずのライターをしばらく探して、ハジメはそれがいかに馬鹿馬鹿しいことか気付いた。

「クソ」

吐き捨てて指先に火を熾す。落ち着き払ってタバコに火を灯して。

「げぶふう」

カッコつけて深呼吸して派手にむせた。

「だつ、ダメだ。俺、タバコ下手糞だ」

背伸びなんてするもんじゃやない。

煙のしみた目で緑色のパッケージを見つめつつ、沸いて出るのは母親のような前向きさではなく、後悔だけだ。

続いてハジメの肝を完全に潰したのは路地のアスファルトを踏む音だった。慌てて火を消そうとしても灰皿もクソもない状況で、おまけに排水溝に突っ込んで消せるほど腐った性根も持ち合わせていなかったのがさらに悪い。

昨日からの着の身着のまま。最後の砦のジャケットは紫に渡して、血まみれのシャツ一枚で夜更けにタバコをふかす高校生なんて、そうそうお目にかかれない要補導案件である。

「ここにいたのね」

火種をなんともみ消そうと火傷しながらお手玉していたハジメからタバコを奪い取ったのは、今一番話し合うべき相手で、今一番会いたくない相手だった。

「……………幽香、どうしてこんなところに」

「ちよつと散歩していたらあなたを見つけたの。偶然」

彼女の行動に迷いはなかった。燃えるタバコを自分の掌に押し込んで消すと、ハジメのポケットからはみ出していたハンカチを抜き去る。

「いやなヤツ」

眠たげな光をちらつかせる街灯の下に、彼女が少しだけ顔をしかめたのが分かる。紫の香りが染みついたハンカチでタバコを包んでいく姿を、ハジメはただ見詰めることしかできない。

「体はおかしくない？　痛いところとか、具合が悪いとか」「ない」

「というかどうしてお前の手はそんなにスス मामれなんだとか、その傷はどうしたんだとか。謝るべきなのに、大事な言葉がほかの言葉でどンドン埋もれていく。」

「また散々な目に遭ったんだぜ」

「そう。どんな？」

「お前とケンカした後霊夢の前で居眠りこいて、辻斬りに来た吸血鬼に噛まれて串刺しにされかけた後に紫とコーラ飲んで呑気して。やることなくなつたからタバコ吸おうとしたらあんたが来た」

一息に言つてやると、幽香はくすくす笑った。

「あなたってそんなに冗談が上手だったかしら」

「こここのところ冗談みたいな生活送ってたから。上達するのも仕方ないな」

おどけて見せれば、彼女との間に感じていた隔たりは、もう感じなくなつていた。幽香も同じようで、ひとつ安堵の息を漏らした。

「ごめん」

断つた半日がひと月にも二月にも感じられたのは、きつとこの一言をもつと早くに言い出せなかったからなのだろうと、ハジメは考えた。

「心配したの」

「ごめんな」

「本当、不安だったんだから」

完全に気が抜けた幽香は膝から崩れるようにへたりこんだ。

彼女を抱き留めるに手負いのハジメは遅すぎる。鉛のような体を動かす前に彼女は地面に腰を下ろしてしまふ。

「ハジメはこういうの、へたくそね」

どこの誰と比較してかは分からないが、謎の敗北感に駆られつつ幽香に肩を貸して立ち上がらせる。

「お前、酔ってるの？」

「ええ。家を出てからずっとクラクラしてて」

目反らし気味に幽香が答えた。

そうして間近に感じるのは、どこからあんな馬鹿げた光線やら怪力やらを絞り出しているのか見当もつかない。どうしようもないくらいいの、女の子の体。

「ワガママ言ってもいい？」

耳元でささやかかれて、ハジメはどきりとした。

「な、なんだよ」

思わず声が上がずる。

「あのね。おぶってくれないかしら……ふふ、ありがとう。ダメね、酔うと甘えちゃう」

背負いあげてから、ハジメの頬はゆつくりと赤らんでいった。

「脚、触っちゃまってるけど」

「気にしないわ」

その意図を汲み取ろうと必死になっていると、冷や汗まみれの首筋にひんやりとした鼻先が触れる。

「おひさまのにおい」

「タバコくさいだけなんじゃないか」

意識しないようにしよう。暗い街灯の明りを頼りに、ハジメは家を目指す。肩口を何度か嗅いでみたが、やはり着たままのシャツから漂うのはタバコと汗のにおいだけだ。

「いいえ。とつても落ち着くにおいよ」

それは、幽香にしか感じるできないモノなのかもしれない。まどろんだような声で、彼女は尚も囁く。

「あなたが私に取りつけた約束、私はちやんと果たさせているかしら」
忘れようもない。事故の直後、半ばヤケクソで頼んだムチャは信じられないことに着々と叶いつつある。

「私はあなたの家族を幸せにする」

それは、彼女と交わした交換条件だ。

「……………うん」

ネットだったか雑誌だったか。よく干した布団のいい匂いは、ダニの死臭だと読んだような記憶がある。太陽と花。花を咲かせるのが太陽ならば、カラカラに干からびた死骸を晒させるのも太陽なのだ。ハジメにとつて、この関係にはそういう不愉快な裏側がへばりついているような気がしてならなかった。

「私と出会って、あなたは幸せになれた？」

当たり前だ。

その一言はどうしても出なかった。それを認めてしまえば、ハジメは義務を果たさなければいけなくなる。

「もしそうでないなら、私もつと頑張るわ。だからあなたも」

視界の中に救いを探して、ハジメは暗闇に光を投げかけるそれを見つけた。

「あ、ジュースある。ちよつと一息入れようぜ。おごつてやるからさ」
調子はずれな大声で彼女の言葉の続きをかき消して、ベンチに押し付けるように幽香を下ろす。ポケットから小銭を引っ張り出して自販機に向かいながら、幽香の差し伸べた指が背中を掠めたのが分かった。

「コーラが好きじゃなかったの？」

プルタブ。炭酸の弾ける音。ハジメの手元から立ち上ったのは、杏仁豆腐じみた独特のおいだった。またしても彼の額に深々と皺が刻まれる。

「改宗した。今日から」

「ふうん。じゃあ私も」

ハジメの横から手を伸ばして幽香が押したのも、同じボタンだった。仲良く二人そろってベンチに腰掛け、ドクターペツパーを傾け

る。とはいえハジメのペースは蝸牛が如しで、幽香は訝るようには彼を見つめた。

「マジだって。今はこんなんだけど、これからもっともっと好きになるから」

うまいうまいと、半ば自分に言い聞かせるようにジュースをがぶ飲みするハジメの隣で幽香もプルタブを押し開ける。

「うん。おいし」

ハジメから顔をそむけた彼女は、困っているようでもあった。



トンネルにちやりちやりと鎖の擦れる音が響いている。

「で、どこまで話したっけ？」

崩落した天井から差し込む月光があたりを真っ白く切り取っている。

瓦礫に腰掛けた江梨花は軽く顎をしゃくって傍らの雪之丞に促したようだった。しかし返事はなく、ねばつく飛沫が何度か飛んだだけだ。

「……………ああ、そうだ。あんたがこの町で怪異狩りをしてるって聞いたときはね、正直私ブチ切れだったんだ。最近妙にエサが減って、この子の機嫌がむちゃくちゃ悪かったからさ」

それまで雪之丞の上に屈みこんでいた女が顔を上げた。

彼女が江梨花の差し出した手にじゃれ付く姿は小動物じみてかわいらしい。一方その体を戒める無数の鎖と血に塗れた口元は、猛獣を思い起こさせるものでもあるが。

「ユキもハジメも兄弟みたいに思ってた。だから、心配してやった二人から裏切られたのはちよつとショックだったよ。ちよつとどころじゃないかな」

未だに子供料金でバスを乗り回せるほどに小柄で童顔の江梨花は立ち上がって伸びをひとつ。今は月光の下で信じられないくらい大人っぽく見える。身長も、一回り以上伸びているように思われた。

「……半世紀で二番目のサイアクだ」

だけど許してあげる、と江梨花は微笑んだ。

「あんたが狂犬みたいにケンカしまくってくれたおかげで、あの妖怪女の実力は大体分かった。正直、私達の敵じゃない——んでこつからは私があんたを裏切る時間」

黒い翼を持つ現代最強の怪異を率いて、F市の守護者は静かに雪之丞を見据えた。その全く感情のこもらない、ガラス玉のような眼は、とある妖怪がこの世界に来て失いつつあるものだ。

「捨てて棄てて、だよ。あんたの考え結構気に入った。同じようなこと、私達もずっとやってきたから」

江梨花は立ち去り様に一度だけ雪之丞を振り返ると、まるでテストの範囲でも聞くような気軽さで口を開いた。

「てことはさ。あんたが捨てられる側になる覚悟も、ちゃんとあったんだよね？」

「えりちゃん」

黒髪の美女は自分の首に巻きついた鎖を手繰って、江梨花を呼ぶ。「んっ」

美女の差し出したひときわ大きな肉塊を手にとってまじまじと見つめてから、江梨花はため息ついた。

「いや、いらんし」

それを無造作に近くの草むらに放って、江梨花は歩き出す。名残惜しげに何度も振り返りながら、騒々しく鎖を引き摺る音を立てて美女も後に続く。

確かに明日の見出しはこの崩落事故と、そこで見つかったものについて語ることは間違いない。しかし内容がもつともありふれた、どこにでもあるような惨劇についてのものになることも間違いないのであろうが。

食い散らかされた残骸は何も語らず、語るための部位も持たず。駆けつけた消防も警察も、現場のあまりの悲惨さに言葉を失うことしかできなかつたという。

5 『あなたは私とどうなりたいの？（上）』

問診票を突っ返されてハジメは文字通り我が目を疑った。医者も疑った。健康診断に訪れたほかの生徒たちも疑った。

「視力2つてなんすか」

「知るかよ。どうやりやそうなるんだ」

昔からハジメの傷を世話してきた年かきの女医はやけっぱちに返して肩をすくめた。数人のクラスメートがハジメから問診票を奪い取る。

「鶴見くん、ズルしたん」

「ちゃんと見えたものを正直に答えただけだつての」

ズルと言われれば思い当たる節はある。能力だ。

『風穴をぶちあける程度の能力』は狙いをつけて撃ち抜くもの。千里先までを見通す眼とまではないかないものの、ある程度までは見たいと思えばそれなりの像を脳裏に結んでくれる。

「じゃあこれ？」

「右か右斜め上」

クラスメートが針で突いたような隙間を指差すなりハジメが即答する。どよめきが走った。

「うわ、こいつホントに見えてるよ！」

「ぼんやりだけどな」

ちよつとした特殊能力じみた視力であっても、持ち主が平凡と平和を尊ぶハジメでは活躍の機会もこんなものである。何をそんなに騒いでいるのかとため息ついていると、シャツの上から腹をつついてくる奴もいる。

「なんかつるみんな最近体つき変わったつて言うか、ムキムキになったよねえ」

去年の暮れまでは脂肪貯蔵庫と化していたぼちゃ腹も、今では板チョコのような腹筋がうっすらと浮いている始末だ。面白いので自分で触っていると、女医の握るバインダーの角が頭を直撃した。

「後つかえてるからさっさと帰れ。かぶとむしみたいな腹しやがっ

て」

消毒のにおいの染みついた白い部屋に別れを告げ、シャツの袖を通してながら校舎を出ると陽はもうすこしで真上に至ろうかというところ。さっさと下校を言い渡されたのは、近所で起こったとある事件が原因だった。

指先につっかけてた上履きをぶらぶら揺らしながら校門に向けて歩いていると、校庭に芽生え始めた緑が目につく。それは実際ただの雑草だが、どうしてか心が浮かれた。

「まとまって帰れつてさ。どーせなら一緒にどう？」

幽香に少し影響されたかもな、なんて我知らず口元を緩めていると、いつの間にか江梨花が傍に立っていた。

「なにや」

「い、いや」

あの決別にも等しいやり取りを最後に、久しぶりの会話だった。とっさの挨拶を言いあぐねたハジメを、彼女は頭二つ分小さいところから見上げてくる。

「今日はなんの日でしょうか」

「十四日って、何かイベントあったか？」

江梨花は肩をがっくり落とすと、

「まあ、今まで無縁だったろうから仕方ないっちゃ仕方ないけどさ。もらったものにはちゃんとお返ししないと」

と失望の色もあらわにローファアーのつま先で足元の砂利を掘り起こして待つ。それでもハジメの察しが悪いので、彼女はもう一度深々と肩を落とさなければいけなかった。

「ホワイトデー、でしょ」

「……ああー」

「ハジメ、たしか幽香さんにお菓子もらってたよね」

実際あれはプレゼントにかこつけた虐待であったが。

たぶたぶに詰まった弁当箱二段分のチョコレートがもたらした激甘地獄を思い出すだけで奥歯が痛んでくる。それでもプレゼントはプレゼントなので恐る恐る財布を取り出して中を覗き込んだハジメ

の前で江梨花は財布を取り出す。

「貧乏人には恵んであげよう。これでイイモノ買ってあげな」

衆人環境に恥ずかしげもなくマジックテープの音を鳴り響かせた後、彼女がハジメの目前に突き出したのは万札が三枚。とんでもない大金である。

「いやいやいや、こんなに貰えないし。お前そんな羽振りいいやつじゃなかったろ」

「いいから。じゃないと私の気が済まないの」

「気が済まないって？」

既に歩き始めた江梨花に必死に追いつきながら、ハジメは肩からずり落ちまくるカバンを何度も何度もかけ直した。

「その代わり私と一緒に来ること。私のお金で変なの選んだら許さないんだから」

「で、でも危ないからさっさと帰って帰って言われたじゃんか。それに幽香もうすぐ迎えに来るし」

「ヘーキヘーキ。どうせみんな普通に外出してるのに、私達だけとか不公平じゃん。ね、今日はちよつと離れたところで買い物しようよ。あの女には適当にメールでも打っておけばいいって」

暫く前から別のグループとツルむようになった彼女が今さら戻ってきた理由も、渡された大金の意味も分からないままに彼女について歩く。知らぬ間に押し付けられた彼女のカバンを背負って、校門を出る。

「風、強くなってきたね」

バスを待っている江梨花が呟いた。丁度、向かいのコンビニではのぼり旗を片づけている最中だ。風にあおられた店員が何度も何度も旗を取り落としていた姿を見ているうちに、ハジメは今朝のニュースを思い出す。

「テレビで見たんだけど、どうやら近いうちに台風くるらしいぜ。直撃だって」

「どうしよう。飛ばされちゃうかも」

自虐気味のジョークにけらけら笑っていた江梨花は、急に声のト

ンを落とした。

「……………ねえ、あのニュース、どう思う?」

「台風?」

「違うよバカ。あの酒屋の角の近くのトンネル、こないだ崩れたって。それで、死体が」

街へ出るバスがゆっくりと停まると、ハジメは江梨花に先に乗るように促した。

「あれが、あれがもしユキだったりしたら私」

報道で遺体の損壊は酷いものだったと聞いた。そしてどうやら、十代の若い男性のものであるらしいとも。にもかかわらず翌日にクラス全員が登校してきたとき、一瞬の安堵の直後に全員が見つめた先には長い間主を失っている席があった。

「江梨花」

彼女の肩を、軽く叩く。

「安心しろ。きつとユキじゃない。ただ見つかった死体の年頃が近かったってだけだろ?」

もちろんかわりに誰が死ねばいいというものではない。ひどくズレた事を言っているのも分かる。

「だいいちあいつは殺したって死ぬようなタマじゃないったら」

それでも雪之丞が死んでいないという自信だけはある。

他にもないハジメの手によって、雪之丞は一度蜂の巣にされている。それでも平然と復活してのけた。例えミンチにしたってあの吸血鬼を倒すことが出来るのかどうか、ハジメには疑問だった。

「励ましてくれるんだ?」

ぎゅうづめの車内。体温が伝わるくらいの距離で幼馴染がそう言って笑ったので、ハジメはバツが悪くて視線を逸らした。

「にしても誰がやったんだろう」

表情を曇らせた江梨花が何気なく漏らした一言。

惨殺体、そしてトンネルの崩落。いろんなことがいっしょくたに起きすぎて捜査は難航しそうだと思った。とにかく何にせよ、ハジメが紫に連れ去られてからとんでもないことが引き起こされたのは間違

いない。

何、はさして問題ではない。誰、が重要なのだ。

「案外、犯人は身近にいるかも」

「進路指導の平田とか」

「それは死んでほしいヤツでしょ？」

バスが急停止する。すし詰めの中で押し寄せる人の群れにハジメはとっさに江梨花が潰されないようにかばってやって、未だ癒えぬ腕の傷の痛み小さく苦悶を漏らした。

「もしかして幽香さんだったり」

ぶつくさあたりから聞こえる不平に混じって、耳元で吐き出された江梨花の言葉はやけに大きく聞こえた。

「はいはい。お前の幽香嫌いにもいい加減筋金が入ってきたな」

平静をつくろって答えながら、ハジメは驚くほど動揺していた。それは、朝からモヤモヤと頭に立ち込めていた疑念をそのまま固めたような言葉だったからだ。

「だけど、さすがに言っていない事とわるい事が」

「あ、ごめん。聞こえてたんだ」

悪気はなかったんだよね、と江梨花は拝むように手を合わせてみせた。

彼女の顔をまっすぐ見返すこともできずにハジメが思い出すのは、オレンジ色の街灯の下で見えた幽香の風体だ。

『私だって酔って転ぶ時くらいあるわ』

風呂上りに肩のほつれたブラウスを繕いながら彼女が漏らした一言にしても引つかかる。

「あーあ。ハジメったらつまんないオトコになっちゃったね」

そんなハジメの穏やかならぬ心中を知るはずもなく携帯をいじりはじめた江梨花の肩越し。窓の外に流れるのはF市の沿線風景だ。ごくありふれた光景の中に、ぽつぽつと佇む紺色の制服。それを目にするだけで、この寄り道を咎められているような気がしてならない。

「見つかったってどうせ何も言われないよ。ビクビクしない」

「ビクビクなんか」

唇を尖らせたハジメと、どこ吹く風の江梨花。

二人を乗せたバスは強風にあおられながらヨタヨタと市街の中央を目指して走り続ける。ハジメの思考もいつしか蛇行を始めていた。

——とつくに幽香がおかしくなりかけているとかさ、お前疑ったりしないワケ？

脳裏に走ったツツコミを否定する。

幽香は絶対に嘘をつかない。もちろん根拠はない。が、彼女が半年と言えば半年だし、明日と言えば明日。

だがそこまでまっすぐに向き合ってくれる幽香があ夜のことはあまりは黙して語らないというのが気がかりではある。思考の袋小路にあたまをガツガツぶつけていると、不意打ち気味に江梨花が顔を上げた。

「ハジメだつて幽香さん疑ってるんでしょー？」

それはある意味凶星。

「お前が言い出したんだろーが!!」

車内をつんざいたハジメの大声に、しばらくあたりが静かになった。

「次、終点F駅前に停まります」

場をとりなすようにアナウンスが流れる。わざとらしく耳を押さえて見せた江梨花が目をはちくりする横で、ハジメはぎこちない動きで小銭を用意した。

「わ。そんな怒らなくていいじゃん」

「そもそもお前、そんな幽香が嫌いなのにどうしてあんなこと言い出したんだ。ホワイトデーなんて」

「ああ、またその話——嫌いじゃないよ。大嫌い。あの人から来たら、本当にいろいろ変わっちゃったじゃん。どうせならあんなの」

口をつきかけた物騒なワードを抑え込んで、江梨花は目付き鋭くハジメを睨んだ。

「だからこれは手切れってやつ。最後まで、盛大にもてなしてやろうと思ったの。ハジメ、カバン返して。で、また持って。はい、手つ

ないで」

バスの速度が緩まるにつれ、江梨花は狭いスペースにもかかわらずごそごそとやり始めた。ごめんごめんごと周りにテキストに謝りつつ、やけに少女趣味なカーディガンを制服の上から羽織っていく。

「また、アレやるワケ？」

「お金は地面から勝手に生えてくるもんじゃないんだよ。節約しないと」

江梨花の握った小銭はハジメよりずっと少ない。子供料金だ。彼女が無い胸を張って堂々とするのは立派な犯罪行為である。

「人に三万渡したヤツのすることじゃないって」

「そうだ。手切れて話だけど、アレにはハジメの分も入ってるんだよ」

窮屈なバスの中からカラフルなブロックが敷き詰められた駅前大通りに降り立った江梨花は、何のためらいもなく絶交宣言を放って、実にすがすがしいあくびをした。



「おわあああ」

いい天気だ。風は強いが晴天だ。

あたしや引きこもりだが台風の前にクッキーと紅茶片手に一発お天道様に挨拶こいてやろうじゃあねえかい。そんな気合でとりあえず換気を試みた千晃は窓を開けた勢いのままに尻モチをついていた。

「ちゅん、ちゅん？」

どこから、どんなミラクルを経てそこへ至ったというのか。

「ち——ち、ちじよだ!？」

鶴見家の瓦屋根の上にはあられもない恰好の女がいた。たぶん自分を日干ししていた。

とりあえず窓をぴしゃりと閉めて鍵をかけ、頭の中の緊急時対応マニュアルをめくる。当然引きこもり生活で培ったうすっぺらいマニュアルのどこに痴女の対策などあろうか。

「最悪だよおお。何なの、あいつ」

幽香にもどこか見せたがりなところがあるが、千晃基準ではちゃん

と節度を守った健全な露出である。しかし今回の相手は天然モノだ。行き着くところまでいつちやっただ人である。

「おっけー仕切りなおそう。しんこきゅー」

頼みの綱のお姉ちゃんは少し前にあにきを迎えに出かけてしまったので、この場はソロプレイで乗り切るしかない。ならばまずは、よく落ち着いて構えるべきだ。ちよつと大きめの鳥か何かの見間違いということもある。

窓を開ける。

「ちゅん」

閉める。

「……………マジでさ」

ちゅんちゅん鳴く痴女が屋根の上にあります。

警察に電話するのがセオリーだろうが、へタにオオゴトにはしたくない。千晃には外の出来事なんてどうでもいいが、世間体とかでお姉ちゃんが痛い思いをするのはイヤだ。

カーテンを閉め切って頭を抱えていると、コツコツとガラスを叩く音がした。

ふざけたことにノックだけは控えめでいやがる。

「はい、鶴見です」

変態じきじきのご指名を無視したら一体何をされるかも分からないので、嫌々ながらも千晃は戸を開ける。もう今日という日を平和に終わらせる見込みはなくなった。

「つるみ？」

舌つたらずに返す女の横から首を出して、きよろきよると住宅街の様子をうかがう。幸か不幸か平日の真昼間だというのに人っ子一人見えない。

「とにかく入りなよ。あ、やつぱ待て、おいこらー！」

女の真つ黒な足裏を見て、千晃は慌ててタオルを取りに行こうとする。頭のネジがすべてぶっとんだうえにあべこべに再配置されたような痴女にそんな細かい機微が伝わるはずもなく、押し合いへし合いするうち、圧倒的に体格に優れる女がそのまま千晃を押し倒す形に

なった。

「ぐえーっ！」

見事に潰された千晃の上で、女はくすくす笑う。

「ちよっとお前、どげよー！」

間近で見ではじめて、べらぼうに綺麗な人だと千晃は思った。それでも体重はなかなかのもので、見知らぬ変態とくんずほぐれつしなから割と本気で命の危険を感じるのも事実だった。

「えりかちゃん、しらない」

起死回生の腕ひしぎ十時固めを準備していた千晃は、痴女の口から飛び出た聞き覚えのある名にぴたりと動きを止めた。彼女の狭い世間で、同じ名前の人間は一人しか知らない。

「そいつ、女の子？」

「うん」

「ガクセー？」

「たぶん」

「ちっこい？」

「ちゅん」

なんてこった。知り合いが変態の保護者とは。

女の力が緩んだ隙にその腕からうまく逃れて、千晃は痛む節々をさすった。きつと後でアザになる。

「ねえ、つるみはえりちゃんをしってるひと？」

「うん。マブダチ」

ハジメと不仲になったと聞いてはいたが。

外部に接点の少ない千晃を思っただか、江梨花は下校時や、ハジメと幽香がいないタイミングを狙ってよく顔を見せてくれていた。

「よかった」

イマイチ感情の読めない瞳の奥で、真っ黒な瞳孔が細められていく。人間の目ってそういう作りになっていたっけ、と訝りつつ千晃が口にするのは別の疑問だ。

「よかったって、どうして？」

女は小鳥のように、機敏に首を傾げて見せる。

「わたしのしりあいじゃなかったら喰つちまえて。えりちゃんが」
「何ソレ。すっごいヘンタイくさいね」

黒髪の女に服を着せてやりながら、だんだん千晃は不安になってきた。明らかに尋常の人でない女は、変哲のない壁紙を眺めながらよくわからない歌を上機嫌に鼻歌している。多分一小節か二小節か、同じところを飽きもせずにくるぐると。

「うわあ……これ、うわあ」

千晃の服を着込んだ女は結構マズいかんじにパツパツであった。

こんなことならお姉ちゃんの服を貸してあげればよかつたのかもしれないが、時すでに遅し。彼女はすっかり気に入ったようで、短い裾をはためかせて遊んでいる。

「ボク、おーちゃん」

「よろしく。私は千晃。わかる？ ち、ア、キ」

「つるみ？」

さっさと会話を切り上げればいいのにな、と。おーちゃんと名乗る女の寝言じみた会話に律儀に付き合つてやりながら千晃は自分にツツコミを入れる。

「それは苗字です。あんただって江梨花ちゃんの親戚なら、えーと」

そう言えば江梨花の苗字はなんだつたつけ。今さら過ぎる疑問に千晃が首をひねっていると、『おーちゃん』は早速興味を別のものへと注いでいる。

「おお。お目が高いじゃんかー！」

クローゼットに吊られた、格子模様のドレスじみた衣装。

それはこの家に唐突に現れた時に幽香が身に着けていたものだ。

彼女は丈の長いスカートを手を取つて、縁にあしらわれたレースに鼻先を押し付けてすんすんやっていった。

「あんたみたいなオツムからつぽでも、いいモノはいいってはずつきり分かるんだね」

「ボクとにたニオイ、するね」

おーちゃんが信じられないことを言った。

ヒト様の匂いにはちよつとうるさい千晃に確かめずにいるという

選択肢はない。恐る恐ると近づいて、彼女の長すぎる黒髪を一房持ち上げた。

「あう」

眩暈を覚えて、千晃は頭をぐらりと揺らした。

野獣の毛皮にでも顔をつっ込んだような気分だ。この女の匂いは強すぎる。夜更けにほんのり遠くから香る花のような幽香のものは似ても似つかない。

「あんた、本当に人間？」

「ボクはおーちゃん」

「ああ……そうだったわね」

少なくともカワイイソウな人であることだけは確かだ。

騙された仕返しとばかりに千晃が次々と失礼なことを言うのだが、どうやら相手には通じなかったらしい。むしろ名前を呼ばれたことがよっぽどうれしかったと見えて、彼女はにへらと整った顔を崩して立ち上がる。

「あつ!？」

そうして千晃の用意した盆を掴むと、あたかも飲み物のように上に乗つけられたクツキを喉に流し込んでしまうのだった。

「んまい」

そのすつきりした顔を見て千晃はすっかり気が遠くなった。

マブダチとはいえ容赦はせぬ。江梨花がやってきたらどうしてやるか。とにかくクツキとビロビロに伸びきったシャツの分は弁償させてやる。

「あーもう、ありがとね！　ちょうどダイエットの時期かなっておもってたんだよ！」

空になったお盆がからりと音を立てて床に落ちる。

半ベソかいた千晃がよっぽど面白かったのか、おーちゃんはへたりこんだ千晃の前にかしずいて、子猫でもかわいがるように彼女の頭を撫ではじめるのだった。



「そこまでいくとアイツ、絶対に着ないと思う」

「ギーんねん」

信じられないくらい破廉恥な服を江梨花が返しに行く。これでもかと散りばめられたスパンコールが鎖帷子のようだ。そのまま店員に捕まった彼女が笑顔でぺちやくちやと応対をはじめると、自然とコトは長くなる。

吹き抜けの傍にしつらえられたベンチに腰掛けていると、江梨花の言葉にも頷ける。三階建てのショッピングモールに詰め込まれた店と店の間を行きかう人々はいつも通りかなりの人出。表情に不安なんてない。当たり前前の日常を、当たり前前に謳歌している。

自分に関わりのないところで関わりのない人間が死んだところで、大抵の人は動じたりはしないのだ。

「あいつ、何贈ったら喜ぶのかなあ」

早くも難航するプレゼント選びに途方に暮れるままに頭上に吊られた巨大な横断幕を見上げていると、彼の胸ポケットが震え始めた。

宛先：ハジメ

差出人：ちあき

件名：ちじよ

がウチにいます

マジやば。はやめにゴーホームされたし

おねえちゃんによる癒しも強く希望

「なんだなんだ、あいつ」

いつの間にか着信したメールの返信を考えつつ、江梨花と店員の会話の様子を見つめる。誘われて江梨花が手にしたものは明らかに彼女には似合わないような着丈のワンピース。それでも彼女は瞳を輝かせて深海に差し込む光のような不思議な青色の布地を見つめていた。

「久しぶりだね」

壮年の男が愛想のいい笑いでそれを差し出した。すぐ近くのアイスの屋台から買ってきたであろう容器からひんやりとした冷気が漂

う。

「ええつと。あなたと前に会ったこと、ありました？」

面倒そうなヤツに絡まれたもんだと半ばあきらめの境地で男を見返す。ワイシャツの襟を緩める男。しかし確かに、そのごまひげはどこかで見た覚えがあった。

「あの時のリンゴの感想を聞いていなかったじゃないか」

その一言。そして彼がポケットから取り出した小さなリンゴでハジメの中で完璧に男の容姿と記憶とが繋がった。爆発事故の直後、何度も病室に足を運んでは退屈な取り調べを繰り返していった刑事だ。

「今日は相棒の方はお休みですか、ええと」

「ちよつと別行動しなくちゃいけないね。それと、俺のことは今井でいい」

「スミマセン。覚えが悪くて」

わざわざ警察の方から、こうやって出向いてくるとは穏やかじゃないことくらいハジメにも分かる。

「落ち着いてくれ。今すぐ君たちをどうこうつて話じゃない」

今井はしばらくごまひげをさすっていた。

年代物のドラマから飛び出てきたような壮年のやり手。演技じみた振る舞いが妙に腑に落ちて、ハジメは自然とアイスを口に運び始めていた。今井もそうする。

ブドウか何かだろうか。甘酸っぱい。

「ようやっと、って感じた」

「どういう意味ですか？」

「お互いサシで話せるタイミングは驚くくらい限られているだろう」

今井はレジで店員と駄弁る江梨花へと目を向ける。

「さつそく時間が無いな」

彼女は結局さつスキの服を買うことにしたらしい。釣銭のやり取りをしながら、彼女がちらちらと視線を送っていることにハジメも気付いてはいた。

「単刀直入にいく。君とあの幽香ってコは派手にやりすぎた。にも関わらずここまで騒ぎにならないのはどうしてだ？ キミの能力、彼女

の能力。そうした『ありえないもの』を目の当たりにした人たちが今までいったい何人いたと思う?」

町中をはいずりまわる蝸牛。夜空に浮かぶ無数の光球。繁華街での決闘。遊園地での迎撃戦。ハジメと幽香の戦いの最中に存在した人目を数え始めればきりが無い。

「この世界は驚くほど冷静だとは思わないか」

「だって、イマドキ誰も信じないでしょ。テロだの火事だの集団ヒスだの。そういうありそうな話題じゃないと、誰もついていきませんよ」

実際、幽香と霊夢の空中戦を撮影した動画や画像にも、そんな推測をするコメントがごまんと寄せられていた。

「俺が言いたいことはまさにそれだ。気付け、鶴見くん。オトナたちの悪意に」

今井の咳払いと共にぎしりとベンチが軋んだ。

「誰、このおっさん」

振り向きざまに江梨花の紙袋に当たって、ハジメの持っていたアイスが彼女のスカートに飛沫を飛ばす。

「あつ、悪い」

「いいよ別に。で、この人は、一体、誰?」

今井の振る舞いに当てられたにしても、ここまで江梨花に対してビクビクする理由が、ハジメにもよく分からない。

「見ての通り、ただのサエないおっさんだよ」

と、疲れた笑いを浮かべて今井はカップの結露に濡れた指をベンチでぬぐった。

「それとハジメ君。さっきのアレ、半分正解だ」

「半分?」

「こんなところに居たんですね」

意味のよく分からない答え合わせについて問いたださそうとして、ハジメは見てはいけなモノを目の当たりにしてしまった。

「探しましたよ」

ベンチの背後にぬるつと現れた大男が、今井の傍らにあったリンゴ

を手を取った。

まるで大理石のような皮のひきつりに半分覆われたその顔。慙懃な喋り方と隙なく着込まれた上品なスーツが、かえって男の容貌の異質さを引き立ててしまっていた。

「おや。学生さんですか。はじめまして」

深々と頭を下げた男の輪郭を不自然な陰りが高速で滑ったような気がしたのは錯覚だったのだろうか。

「にしてもこんな時に僕ら警察と鉢合わせとはずいぶん間が悪いのは。さっさと帰れとか、学校の先生方は言いませんでしたか？」

「ええっと。それはちよつと事情があります」

「だからって遠出すれば問題ない？ 僕たちはとんちで遊ぶほどヒマじゃない。帰ってくださいと丁寧をお願いされたのなら、きつと理由があるはずですよ」

男が軽く上体を倒しただけで天井が降ってくるような圧迫感を覚える。加えて異形に気圧されて、ハジメは完全に言いよどんだ。

「……………なんて。僕たちだって学生時代はあつたんです。折角早く帰れたんでしょう。こんな時に少し遊んでくれたって目こぼしくらいはしますよ。おっと」

彼が弄ぶりリングが滑り落ちて、江梨花の足下に転がった。

「いけないいけない。折角のリングが痛んでしまいます」

全く慌てるそぶりもなく屈みながら、万場は決してハジメには聞き取れない声の大ききで江梨花に耳打った。

「それと、あなたには随分面倒を解決してもらいましたからね」

江梨花が眉根を寄せただけで沈黙を保つても、この男は一向気にする様子もなく笑って今井に手招きする。

「行きましょう。ただでさえ僕たちのタスクは山積みなのです」

大男の後に続く今井の顔といえはひどいものだった。

朝起きたら口の中にありとあらゆる臭味が押し込まれていることに気付いたような。

「なあ、あのでっかいおっさんだけど。自分のコト、僕たちって言わなかったか？」

「知らない。よくそんな細かいことまで覚えてるね」

小さな違和感に首をひねるハジメの隣で江梨花は紙袋を覗き込み、こそばゆそうに笑う。一体誰に贈るのか。

「そーいやハジメはプレゼント決めたの」

とある店先のショーケースを指差すハジメの不安そうな様子と、いったらなかつたが、意外にもガラス越しに鈍い光沢を放つそれを確かめて、江梨花はそれなりに感心したようだった。

6 『あなたは私とどうなりたいの？（下）』

鶴見家のお嬢さんといえば花。

もはやそんな常識が近所にまかり通る中で、最近の幽香のお気に入りは家の基礎に安住の地を見出したノウゼンカズラだった。

「綺麗な橙色ですねえ」

「ええ。来月いらしてくださいれば、晴れ姿をお見せできると思いますわ」

いつもはにこやかに応対するはずの幽香がこの日に限って背中では返事をした。そんな小さな違いに首を傾げて、散歩中の老婆はまたどこかへと行ってしまふ。

「だいたい分かった。ありがとう」

するりと幽香の指からほどけていく蔓。その先は吸気口から家の床下に入り込み、びっちり根を伸ばしている。

「それにしても侵入を許すなんて、一体どうしちゃったのかしら」

鶴見家のセキキュリテイ体制はちよつとした警備会社以上に強固に整えられている。一階部分に張り巡らされた天然の感圧センサーはその最たるものだ。そんなところらの怪異なら幽香が到着するまで防戦か、撃退くらいはやってのける。

「おやっほりっ」

——仕事はちゃんとしている。それ以上は言えないけど。

幽香の命令には忠実な彼らの返事を言葉に直すと、そんな形になる。

「ちゃんとしている、ねえ」

家の周囲にほんのり漂うのは獣臭と、一階に詰め込まれた十とも二十ともつかない大量の気配。これで家に何も起こっていないと言いつ張るのなら、この新顔は守衛を任すにはおおらかすぎるのかもしれない。

いや、そもそも責任の所在は別だ。

「連絡よこさなかったあなたが悪いのよ、ハジメ」

ハジメを迎えに学校へ向かった幽香が目当たりにしたものも

ぬけの殻と化したクラスだった。誰に聞いても行き先は知らぬ存ぜぬ。立ちっぱなしの腹が空いたのでアーケード街でラーメンを食べ、帰ってきてみればこの有様だ。

「ただいま」

当然、返事に期待したわけではない。

ここで仕掛けてくるような相手だったら楽でいいな、という希望にちよつと賭けてみたくなっただけだ。

「千晃、帰ったわ」

家の奥に背を向けてやってゆつくり靴をそろえて隙を見せてやつても、相手は一向に動こうとはしない。廊下を軋ませてリビングを目指しながら、幽香は至って平常心だ。しかし、この小賢しい相手にゆつくりと腹の底が煮えはじめている。

家の中にまで例の獣くささを持ち込まれたこともそうだが、万一千晃に何かあつたらと思うと、胸がざわつく。

かつて千晃は鶴見ハジメをうまく動かしてやるための付属品くらいにしか考えていなかった。にも関わらず、だ。

——無事でいてちようだい。

リビングへと続くドアノブを握る。

この先に何が待ち構えていようと、決して動じることはない。ただいつも通りに殴つて、暴れて、壊して。その上で千晃の身に何かがあれば暴力に上乘せをかけるだけだ。

「千晃、出てこないのならこっちからいくわ——」

意を決してドアを開けた瞬間、暗闇に包まれた室内に断続的なフラッシュと破裂音が鳴り響いた。

「よっ？」

攻撃ではない。

幽香は動じないという決意をさつさと覆すことになってしまった。

「おかえりなさいー」

火薬のにおいが獣臭をかき消していく。パチリと照明のスイッチが点けられると、幽香は飾り付けられたリビングの中央でハジメのクラスメートたちに囲まれていた。

テーブルの上には飲み物やオードブルが所狭しと敷き詰められ、幽香同様に紙ひもと金紙銀紙を被っている。

「はいはい。サプライズです」

紙ふぶきの中をやる気なさげに歩いてくる小柄な影。

江梨花が幽香めがけてクラッカーをぶつ放すと、改めて拍手が沸いた。

「みんな、恩があるんだってよ」

それでも幽香が状況を呑み込めないでいると、ソファに陣取ったハジメが助け船を差し向けてくれた。

「え、と」

「いやいや寝ぼけるなって。お前だよ、風見幽香」

「わたし？」

ぼかんとする幽香がよほど面白かったのか、あちこちから笑いが巻き起こる。それを手で制して、ハジメはソファの上に投げ出されていた雑誌をくるくる丸めながら幽香に歩み寄った。

「トオルはあんたに盗まれたチャリンコ取り返してもらって言うし、あつちのミヤコは木に登ったままのネコ助けてもらったらしいし。あいつも、あの子も。んで、あそこの連中はよく分からないけど、まあ、とりあえず幽香さん絡みのイベントならって」

「背中！ 背中！」

「ハイハイーッル！」

壁際に立ち並んだ屈強な男たちが不平の声を上げた。

「ならいっそ、皆で一気にお礼させてもらおうってカンジでさ。ホントお祭り好きな連中だよなあ」

お前も乗り気だったじゃねえか、と野次が飛ぶ。

丸めた雑誌をマイクのように突き出したハジメの呆れ顔。それと、うずうずと幽香の反応を見守る皆の顔を見渡して、幽香は口を開いた。

「あ——ありがとう。みんな」

幽香にしては珍しい、はにかんだ笑み。

幻想郷ですら滅多に見せることのなかったそれは限りなく素に近

い彼女の姿だ。誰もがサプライズの成功を確信する。幽香へのプレゼント爆撃が始まる。

「ねえ、ハジメ。ねえったら。あなた、恵まれているわよ」

「え、なんで今、俺？」

すっかり人だかりの外にはじき出されたハジメが首を傾げた。

「うふふ。なんででしょう」

教えてやりたいのはやまやまだが、幽香は野暮を嫌う。

ちよつと声をかけただけで丸々一クラス集まってくれる理由なんて、大したものではない。ただただ彼らが底抜けに陽気でイイ奴らだということ。たったそれだけだ。

「なんだよ人の顔見てニヤニヤしやがって。感じ悪い」

「これはニコニコのつもりなのに」

だけど『たったそれだけ』でいてくれる友人たちと一緒に居られることが途方もなく得難い幸せであることに、彼ら自身は気付いているのだろうか。

「はん。とにかく江梨花のヤツに礼くらいしとけよな。言いだしつペはこいつなんだから」

早くも天井を突つつくほどに盛りあがったプレゼントの包みを器用に片手で持ち上げる幽香。そこへと花束を持った江梨花がやってくる。

「派手にやるってハジメに言っちゃいましたからね」

わあ、と誰かが小さく声を漏らした。

見事なもので、淡くかわいらしい桃色の花束を江梨花が持ち上げる傍から花弁が蝶に変わって飛び立つような錯覚を覚える。

「スイートピーです」

それほどきれいな花だというのに。花好きの手が一瞬宙で迷った。

「私からの気持ち、受け取ってくださいますよね？」

「……ええ。よく分かったわ」

言い放つ江梨花にはどこか高圧的だった。彼女の前で幽香はただ静かに、きゅつと花束を抱きしめる。

「お前ら、こういう時くらい楽しそうにしろって」

ハジメが微妙な空気が流れてしまった場をとりなそうとするのだが、江梨花はつんとあきつての方向を向いただけだ。

いや、だけではなかった。

「つるみん、上の階って誰かいるの？」

「そういう妹の千晃が」

そうだった。幽香を祝うとなれば真っ先に首を突っ込んできそうな引きこもり娘がここにはいない。

「なんか、暴れてませんか」

「たしかに」

江梨花を筆頭に、全員が天井からの騒音の発生源を追う。リビングの直上、千晃の部屋の扉を勢いよく開け放つ音。階段を下る様子はドラムロールじみて、廊下を駆け抜ける段に至っては人間の足音とは思えないものだった。

「江梨花ちゃああああん……………」

そして満を持してリビングに突入してきたもの。

「お、お、おーちゃん!？」

「えりちゃん!」

「え、あんたら知り合いなの?」

どよめきが走る。

ヨレヨレの千晃をぬいぐるみのように抱きかかえた謎の美女を目にした瞬間、江梨花の高飛車はもろくも崩れ去っていた。

「だ、ダメダメおーちゃん!　せめて千晃ちゃんだけでも、ふぎやつ」

「ふぐうおえーっ」

満面の笑みで江梨花にタックルをかますおーちゃん。壁に挟まれた江梨花と、二人にサンドイッチにされた千晃が同時にひしゃげた悲鳴を上げた。



どこかの誰かがギターを持ち出せば、また別の誰かが実にいい声で歌う。ノツてくると更に別の楽器を持ち込んでくるヤツが現れる。

「ごめんね。こいつすぐ飽きると思うから、もうちよつと我慢して」

「なんかもう、慣れたよ」

瞬く間にライブハウスと化したりビングで、VIPシートめいた千晃のソファに四人は仲良く腰掛けている。

お気に入りのおもちゃを見つけたおーちゃんは千晃ずつと膝の上に置いて離そうとしない。そこはそこで座り心地は悪くないらしく、心底申し訳なさそうに頭を下げる江梨花の前で千晃はジュース片手にふんぞり返った。

「おなかへった」

大分雲行きが怪しくなった外から、湿った風に混じって炭と肉の焼けるにおいが室内に舞い込んでくる。

「へったね?」

千晃が鼻先をヒクつかせていると、その頭にピザ生地の破片がバラバラと降り注いだ。膝の上からどうして彼女が睨み付けてくるのかも分からないようで、おーちゃんは困ったように首を傾げてかじりかけのピザを差し出す。

「あにき、外からお肉もらってきてよ」

それを邪険に押しつけて、千晃は兄を心底軽蔑するかのよう鼻を鳴らした。さつきから彼が苦い顔で飲んでいる杏仁豆腐味のジュースにはイライラさせられていたのだ。

「やだよ。自分で行ってこい」

「引きこもりになんて無茶言いやがる。こないだのこと悪く思うんなら行けって」

「ピザあるじゃん。俺の金で買ったピザ食べばいいじゃん」

「それ飽きた。私はバーベキューが食べたくなっただい」

ハジメのつま先に誰かが躓きかけた。

この宴が始まってからも、参加者はどんどん鶴見家に集まってきている。今では人口過密状態の屋内からまけ出た連中が外の通りで場外乱闘じみたバーベキューパーティーを敢行している有様だ。

「いい感じに肉が焼けたみたいなんで、一緒に行きませんか」

「あら、そうなの。それじゃあ私もおこぼれにあずかるうかしら」

「幽香さんに我慢なんてさせやしませんよ。とりわけデカイヤツを――」

男衆にさりげなく手を引かれて出ていく幽香の後ろ姿。

知らずハジメはソファから腰を上げていた。そんな彼を我に返すのは半笑い交じりの千晃の言葉と、妹の代わりに袖を引くおーちゃんだ。

「気になるなら行って来ればいいじゃん」

「な、なんだよ。急に知ったような口聞きやがって」

「ほらさっさと行け。肉忘れないでよ」

千晃に蹴り出されたハジメはすぐに人垣に分け入った。その動作にはやはりというか、必死さがにじみ出ている。

「あにき、そんなに心配しなくていいのにな」

江梨花が申し訳なさそうに千晃とおーちゃんを覗き込んでくる。

「私じゃない間、こいつが迷惑かけなかった？」

「むしろかかってないように見える？」

ピザまみれ千晃の頭をうまいうまいと舐めはじめたおーちゃんを中指で指して、千晃はじとりと江梨花を見返した。

「ごめん」

「おーちゃんって江梨花ちゃんの、なに？」

それはきつと、このパツパツのTシャツを着こんだ異様な美人についてこの場の誰もが抱いた疑問に違いない。陽気なサンバが流れ始め、皆が柏手を打つ間も江梨花だけが難しい顔で眉間を抑えていた。「なんだろ」

そこらに転がっていたボンゴをぺんぺんやって全く合わない合いの手を入れながら、千晃はおーちゃんを見上げる。

「なんなの？」

「わかんないね？」

結局演奏に一区切りつくまで黙り続けた江梨花は、なんだかんだで仲良しこよしやりつつある千晃たちの様子に目を細めた。

「私はさ、おーちゃんとは血の繋がりもないし、ましてや恋人でも友達でもないんだ」

そんな心外な語り口にも、おーちゃんはいつもの底が抜けきった笑い顔を傾げるだけだ。

「それでもこの子が大事。この子のためなら、何だってできるよ」

「そなんだ。あ、そこのおねーさん、お寿司とつてお寿司。まぐろー」
やはり空気の読めない振る舞いにズッコケそうになりつつ、やっぱ
り千晃は千晃かと江梨花は苦笑いした。むぐむぐと宅配ずしをほお
ばるその口から、意外な答えが飛び出るとも知らずに。

「それって、家族つてやつじゃないかな」

たった一言で、江梨花は憑き物が落ちたようだった。うんうんと頷
くさまは、家族ということばの重みを確認しているようでもある。

「ああ、そうかも。千晃ちゃん、ありがとう」

「ぎゃっ」

隣に目を向けて、江梨花は顔色を変えた。

「おなか、へったね」

黒髪を振り乱す女の虚ろな目。そして尋常ではない痛みがり方をす
る千晃と、その頭に突き立った牙。

「おーちゃん、だめだよー」

「いったたたた。ちよ、ちよつと、やめろよー！」

江梨花がばしばしとおーちゃんを叩くが、彼女は意に介さずだ。皮
膚が裂けたのか、暴れる千晃の額から血が一筋垂れる。

「いうこと聞けよ、お願いだから。じゃないとー！」

勢いよく江梨花がまくり上げた右袖。素肌に無数の傷と一緒に刻
まれたそれが蠢きだす前に、いち早く動いたものがいた。

「犬なら犬らしく、ちゃんと鎖につないでおきなさい」

その位置はリビングの正対側だというのに、彼女の声は江梨花の
耳元でささやかれたように届いた。

彼女がドアを開けざまに放ったそれがおーちゃんの頬を掠め、

「うえっ」

千晃は床に投げ出される。

「ちゅん」

驚いて大きく飛び上がったおーちゃんは、騒ぎに目を注いでいたク
ラスメートたちの頭上を飛び越え、料理とジュースが乗ったテーブル
の上に軽やかに着地——できなかつた。

「ちゆ」

体重をかけられた瞬間にテーブルは大きくかしぎ、そのままおーちゃんごと無様に潰れる道を辿ったのだ。ジュースがしぶき、料理がばらまかれ、驚きと悲鳴にバンドの演奏も止まる。

「ああ、なんてこと。手が滑っちゃったわ」

壁に垂直に突き刺さったバーベキュー用の鉄ぐしが、びいびい、いいいんと音を立てて震えている。そんな大暴投をついつい、うっかり、なんの他意もなくしてかしたのは、このパーティの主役だ。

「おねえちゃん、アタマ、どうなってる」

うずくまった千晃を助け起こして、幽香は彼女の髪の毛を掻き分けた。

「大丈夫よ。ちよつと切れてるだけ」

不気味な静寂の中、おーちゃんは床の水たまりの中で目を白黒させた。どうして自分がこんな事態に陥っているのかすら、理解できない風だった。

「びつくりしたわよね。ごめんなさい」

おーちゃんにも幽香は手を差し伸べて、わずかに目元が歪んだ。

「ああ、この臭いはあなたの」

「お騒がせしました。ごめんなさい。すぐ帰りますから」

奪い去るように、江梨花がおーちゃんを幽香から引き離れた。

「気にしていないわ。もっとゆっくりしていけばいいのに」

「そういうワケにもいきません。それでは」

「そう。それはとても残念ね」

そこに、致命的に気に食わないことがそこにあっただろう。言葉はともあれ幽香は最後まで江梨花と視線をあわせようとはしなかった。皆が固唾を呑んで見守る中、江梨花はおーちゃんの手を引いて帰っていく。

「おーちゃんー！」

ハジメが幼馴染にどう声をかけていいものか弱り切っていると、千晃が声を張った。相変わらず寝ぼけたような顔でおーちゃんが振り返る。

「そのシャツ、気に入ってんだからさ。返しに来いよな」
「ん」

びろびろのシャツを引つ張って見せて、おーちゃんは頷く。
「行くよ、おーちゃん」

そうして江梨花は、ドアを閉め様に千晃に軽く会釈した。
「さてと」

千晃の成長と、相変わらずの空気の読めなさを頼もしく思いながら
ハジメはぱんぱんと手を打った。

「飲み物も食べ物もダメになっちまったし、ちよつと買い足さないと
な！」

テーブルの脚を一瞥する。

折れたなんてもんじやない。あまりに鋭い切り口だった。あの瞬間、床下からにゆるりと這い出てきた緑色の何かがそれを一刀両断する姿をハジメの目は捕らえていた。

仕事の証とばかりに、橙色の花弁が一枚置いてある。

「俺がいくから、幽香も付き合え」

ぶつきらばうな言葉に幽香が素直に頷くと、ひどいブーイングが巻き起こった。

「うるせえ、俺の家と俺のカノジョだ。文句言うなら出ていきやがれ
！」

ヒールレスラーばりの見栄を切るハジメの元に苦笑した幽香がやってきて、手を差し出す。

「そんなに見せびらかしたいなら手でも握ってくれるのよね」

あらゆる方向から悲鳴と憎まれ口を投げかけられて、ハジメは尚もガハハと高らかに笑う。

この後に控えているイベントのことを考えれば大したことない。
ハジメにとつて、ホワイトデーの本番はこれからなのだから。

「もう。あなたのせいでウソつきっぱなしじゃない」

ハジメが玄関で靴をつっかけていると幽香が囁いた。

「気にすることないさ」

帰ってくる頃にはその憂鬱もなくなるはずだ。



「な、なんでもないってなんだよ?」

予想通りサービス品の大荷物を抱えるハメになったハジメは、いつぞや雪之丞と幽香を巡って殴り合いと殺し合いを演じた公園の遊歩道をヨタヨタと歩いていった。

「妖怪未満の人間以下。あんなの語るに値しないわ。強いて言うならクサイだけの女ね」

「クサイだけって。あの動き、どう考えてもタダモノじゃなかったろ」
おーちゃんなる人物についてコメントを求められると幽香は目に見えて不機嫌になった。あれにしましょうこれも欲しいわとにこやかに買い物済ませていた時とは大違いだ。

「とにかくあれの話は終わりにしましょう」

「なにもしないでいいのか。千晁ヤバそうだったし。それにどうしてあんなのが江梨花と一緒にいるんだ」

「ウチに近づけなければいいだけよ」

どうにも幽香の様子がおかしい。なんて立ち止まったハジメが考えていると、幽香はじろりと視線を送ってくる。

「それよりも私が聞きたいのは、この大回りの理由」

気になることはあれど、確かに現在の最優先事項は別のものだ。

「……ああ。実は、ちよつとあって」

「ちよつと、ですって?」

幽香が怪しむのも何ら不思議なことではない。

コトを起こす前にちよつと一呼吸入れるつもりが、気付けば小一時間近所をぐるぐる回り続けていた。その間にあたりに吹き渡る風は大分湿り気を帯び、遠くの空にはいくつも黒雲が流れてきていた。

「そこ、ちよつと座っていいこうぜ」

これまた見覚えのある貯水池のほとりのベンチをハジメは示した。

「今度のちよつとは短く済むといいのだけれど」

「俺と二人つきりがそんなにイヤかよ」

「ふふ。意地悪言ってごめんなさい」

荷物を下ろすのを手伝ってくれながら、

「本当は嬉しかったの」

何気なく本心をさらけ出されるとかえってハジメは困る。嵐の予感に波立つ銀色の水面を二人で眺める。

「この分じや台風、やっぱり直撃かな」

「庭の畑が心配なのよ」

どれその苗がこのくらい伸びたのよ、と我が子の成長のように幽香は語る。彼女の頑張りを毎朝こっそり確認していたハジメも内心では庭の変遷がこのところの楽しみであった。

「あの荒地地が今やご近所あこがれの園芸博覧会だからな。ホント、植物に対するお前の情熱がつくづく底が知れないっていうか」

「困ったものよねえ」

遠回しに褒められると、くすぐったそうに両肩を抱いて幽香はくすくすと笑い声を漏らした。こういう時の幽香は実に女の子らしい笑顔を見せる。

「ありがとな」

「別に好きでやっていることだから」

「本当、お前にいろいろ世話焼いてもらっているのは分かってんだけどさ。つつい礼を言いそびれちゃって」

そろそろか。

ハジメはポケットの中でそれを握りしめた。これまで相棒だった五円玉とはまったく違う。穴の開いた、というよりも穴そのもの。

「バレンタインデーも結局言わずじまいだったしさ」

「あ、あれはただの意地悪だったのよ?」

焦ったように身振りで否定して、幽香はハジメの顔を覗き込んだ。「知ってるよ。まあ量はともかくおいしかった。鮭はいただけなかったけど」

おかげで未だに食事に鮭が出る度、何もなくても恐る恐る幽香の顔色をうかがうようになってしまった。

「そんなに素直にお礼を言われちゃうと。なんか、毒気を抜かれちゃ

うわね」

そこまで口にしておいて、実際のところ幽香は毒気マックスだ。ここまでの不意打ちの連続のお返しに、もう一つハジメを困らせてやろうと思ったのかもしれない。

「それじゃ、こうして絶好のタイミングを前に、ハジメからもそろそろお返しのプレゼントがあるって考えてもいいのかしら」

「俺がそんな上手な気の遣い方できたためしなんて一度も無かったろ」

ま、そりやそうよね、と。

水面から飛び立った数羽の鴨に目をやりながらの眩きは少しだけ残念そうな響きがあった。そんな風に肩をすぼめられたことはハジメにとつて確かに癩であるが、この後最後のサプライズをかましてやることを考えると、溜飲は自然下がった。

「だからこれが最初になる。見ろよ！」

ざまあ見ろとばかりの不敵なほそ笑みを浮かべてハジメがベンチから立ち上がる。そこでポケットをぐそぐそやるうちに、だんだんと彼の表情から余裕は失せて行った。

「あ、あれ。ちよつと待って、なんかどつかで引つかかって」

「うふふ。一体何かしら」

この長い買い出しの間中、きつとハジメはいいロケーションとか、いいセリフとかを考えていたはずで。その準備もいぎ本番になるとご覧の有様。

そういうところが彼らしくて、悪いと思いつつも幽香は笑ってしま

う。

「大きいものかしら？」

「違う。むしろ結構小さいと思う」

「食べられる？」

「あんなならできそうだな。でも、一般的にはノーだ」

「もう。何よそれ」

唇をとがらせつつ、なんだかんだで幽香も自然胸を高鳴らせて待つ。

この最高の日の締めくくり。それをもたらしてくれるのがハジメであることに、不思議な安堵を覚えていた。

「それじゃあこのくらいで間に合うかしら」

水を受ける様に、幽香が両掌を差し出す。

「ああ。大丈夫」

そこにハジメも拳を重ねる。

やがてそこからこぼれ出した鈍い銀の輝きに、幽香は束の間目を奪われた。幅広の指輪に施された優美な刻印。地上の太陽に例えられるあの花。

「あんたがいてくれて、本当に助かってる。もう一度ありがとうを言わせてくれ」

子供の誕生日に本物のロケットだかスポーツカーだかを枕元においてやれば、似たような顔を拝めるだろう。しかしハジメの満足気も長くは続かなかった。

「教えて。これは、一体どういう意図の贈り物なのかしら」

彼女の問いかけの真意をはかりあぐねてその顔を見たハジメはぶん殴られるような衝撃を覚えた。眼前の水面のように揺れ動く彼女の赤い瞳。その中に淀む感情は、決して風見幽香には存在しえないと考えていたものだったからだ。

「どうもこうも、ただのプレゼントだよ」

冷や汗タラタラで言うそばから、ああこれやっちゃまったなという冷静な分析が脳裏をかすめていく。

「本当に？ 男の人は、こういうものをいずれ殺す相手に贈ったりするものなの？」

「それは」

「教えて。これを受け取ったら私は。というか私達は一体どうなってしまうの？」

信じられないことだが幽香は恐れていた。鶴見ハジメがこれから下そうとしている決断を、心底から恐怖して、遠ざけようとしていた。「か」

口の中がカラカラだ。

上あごに張り付く舌をひっぺがそうと苦心していると、通りすがりのマラソンマンが舌打ちをかまして去っていく。確かに傍目には幸せ極まり切った二人のやり取りにも見えるのかもしれないが。

「か、か——」

もう一度。

「勘違い、するなよな」

確かな敗北を覚えつつ、ハジメの口はマシンガンのように嘘を吐き連ねていく。ポケットの中に残っていた、かたわれの指輪から静かに指を引き抜く。

「そんなことくらいちゃんとわきまえてるって。これはその、本当、ただの気持ち、なんだけど……」

「そう。それじゃあ、気持ちだけ」

柔らかに笑って幽香は指輪をハジメに返した。彼が何か言い出す前に山のような荷物を軽々持ち上げて背中を向ける。

「こういうのは、大事な人にあげなさい」

そして大事な人は殺せないものだ。

「主役がこんなに席を立っていたんじゃ失礼よね。先に帰るから」

そうやってさっさと行ってしまおう彼女を見送るのはこれが二度目だ。

高架上で太陽の力を呼び覚ましたとき、確かにハジメは生まれ変わった。ヘタレの殻に風穴を開けてやった。しかしこうして思い出されるのがあの時の決意ではなく、浜辺の波音と砂の味だというのは、どうしたことやら。

「……………ええい、クソっ。結局このヘタレは何も変わっちゃいないじゃないかよ!!」

自分への怒りをぶつけるために選んだものはそれまで尻を預けていたベンチだった。

ヘナチヨコ蹴りをくらわしてもそいつは幽香同様にハジメが望むような反応はしてくれなかったし、かわりに爪先からぺきよんという情けない音が響く。

「がああ。畜生め!」

激痛を走らせる爪先を抱えて飛び跳ねながら、次にハジメが目をやったものは貯水池。そこへ指輪を二つとも振りかぶって。

「クソ」

振りかぶったままの姿勢でよろよろと後ずさって、ハジメはベンチに腰を下ろした。

「霊夢、好きなようにやるのって、意外と大変なんだな」

彼女は幽香と違って出来ない子にはとことん厳しく出るタイプだろう。

じんじんという足の痛みにかつて彼女から食らわされた電撃を思い出して力なく笑う。ベンチの背もたれに首を預けて空を仰いだハジメは、そこに見慣れた姿を見出した。

「まっすぐ帰ろうと思ったんだけど」

同時に、そこに絶対あつてはいけなはずの姿だった。

「ハジメもあの女も、見ているヤキモキしちゃったよ。頭かったいんだから」

「お前。どうして」

彼女とは小さいころから一緒だった。

へたするとすぐ不幸に巻き込まれてしまうハジメと、まっすぐゆえにすぐ暴走する雪之丞。二人の手綱を取るのには、一番マトモな彼女を置いて他にはなかった。

「おーちゃん、ここでよろして」

歳と見た目の割には落ち着きがあり、たまに老獪なまでに頭がキレる。

抱えて空から舞い降りた従者が地面にそつと彼女を下ろす。一番マトモで、一番賢くて。おおよそ非日常なんてものは一番縁遠いはずだった、友人を。

「江梨花」

「プレゼント、ちよつともったいなかったね」

返す言葉すら失って立ちすくむハジメ。

腕組みした江梨花の背後に控えるのはおーちゃんだ。吹きすさぶ風に黒髪と、そして背中からせり出した一對の翼がたなびいている。

感情の読めない目でひたすらハジメの動きを追う様には、猛禽を思い起こさせるものがあつた。

「へった」

その瞳が輝いた瞬間、江梨花が勢いよく右腕を引いた。がしやりと金属音を立てて見えない何か宙で張りつめるのと同時に、不満そうに唸りをあげておーちゃんが地面にしりもちをつく。

「あんたが食べていいのは怪異だけ。とはいえ、こんな間違えても仕方ないっちゃ仕方ないかなあ」

背中に光の環を背負った人間なんてそうそういたもんじゃない。

一呼吸に十とも百ともつかぬ標的を正確無比に撃ち抜く弾丸をすべて向けられても、江梨花はまったく動じなかった。

「えりちゃん」

おーちゃんが身を乗り出した。

「大丈夫だよ。こいつ人は撃てないだろうから」

その間も江梨花は右腕の調子を見ている。まくり上げた腕に刻まれた大小の傷に混じってうっすら浮かぶものは刺青ともアザともとれない、絡みつく蛇のような影だ。

彼女のただならぬ様子と相まって、ハジメは手を出しあぐねていた。

「今日のおんたの様子でよく分かったよ。あの妖怪、限界が近いんだよ。」

「それを教えてどうなる」

「助けてあげるよ」

思いがけず江梨花の口から飛び出した言葉。

「おーちゃんは数えて四十年前に正気を失ってる。でも今この子を見てどう思う?」

彼女の差し出した手に甘えるソレ。幽香の言葉を借りるなら妖怪未満の何者かは多少頭に問題はあれど、これまでハジメが組してきた怪異のなれの果てに比べれば驚くほど『正常』だ。

「気になるよね」

一体自分がどんな表情で江梨花を見ていたのか、ハジメには分から

ない。江梨花は未だ身構えたままのハジメに一言、

「わかるよ」

とだけ残しておーちゃんに手招きする。

「この町で忘れられたものたちが行き着く場所。私はそこで待ってるよ。いつまでもね」

再び江梨花を抱き上げたおーちゃんが夜空のように巨大な翼を広げるのと、ハジメの思考能力が再起動するのは同時だった。

「四十年前、だって？」

胸騒ぎがする。

大きな大きな黒い鳥は、アーケード街の方へと飛んで行ったようだった。

第十八話『あなたは私とどうなりたいの？』おわり

7 『鶴見千晃、(もしくはTK ◆ t s u r u . c 7 8

a) 世界(とネット)の片隅で(上)』

どしん。

リビングの窓ガラスを打ち鳴らしたのは風。台風の足音だ。

ここ数日F市全体がこんなカンジ。ごうごう雨が毎日降って、どんよりした雲がもくもく。カミナリどカーン。

「ハジメ」

美味しいサンドイッチと新聞とコーヒーがあるのにお父さんもカミナリを落とす寸前だ。

「ハジメ、ハジメ、いい加減にしろ」

「ああ、そうだな。うん」

そしてクソあにきはどんより。

返事は返ってくるけれど、頼杖ついたまんまサンドイッチかじかじしてるんじゃあ、きつと何も聞こえてないんだらうなって。

「あにき、お行儀わるい」

こんななおいしいBLTを作ってくれたのは何を隠そうおねえちゃん。

そーやって片手間に食べていいものではないのだ。なんならイタダキマスの儀式を毎朝晩数時間にわたって開催したっていつこう構わないし、一口ごとにおねえちゃんに礼を言ったらって何もおかしところはない。

『恥ずかしいから絶対にしないで』

ってハナシを前おねえちゃんにしたらすつごくビミョーな顔をされた。だからしてます。自重。

「寝ても覚めてもおねえちゃんに夢中。ってかんじ?」

クソあにきの見つめる先はリビングの窓ガラス。雨も風もめっちゃくちや激しいから、外の様子はハタクソの描いた油絵みたいにぼやけてしまっている。土の茶色、伸び放題をようやくカットしてもらった庭のケヤキの緑色。

「メシ食ったら手伝ってやろうかなあ」

と、ボケボケのあにきが見つめるのは花壇に咲きかけの花と、もう咲いてしまった花たちの七色モザイク。その中でもいつとう大きな赤だ。

それはおねえちゃんの色。

「あにきのトモダチ、いいセンスしてるよねえ」

リビングの片隅にはプレゼントの空き箱の塔が建っている。

おねえちゃんの赤いレインコートもこないだのホワイトデーに貰ったものだ。中にはプロテインとか牛肉とかワケわかんないのも結構あったけれど、少なくとも園芸部みんなのチョイスはちゃんとしている。

なあんであにきと一緒ににおねえさまの後ろ姿を見つめていると、本当に雷が落ちた。テーブルの上に。

「おいバス行っちゃうぞバカ息子!」

おとうさんパンチで最初にびっくりしたのはコーヒークップと皿だった。完全に不意打ちだ。がちゃんという音に私も飛び跳ねる。あにきはもつとびっくりする。

「えっ——おわわ!」

鳩時計は八時ちよいまえ。バス行っちゃう、ではない。バス行っちゃまった、だ。

「なななな何で教えてくれないんだよ!」

あにきがイスをひっくり返す勢いで立ち上がる。

「俺は何度も言った」

「わたしも」

ばかたれあにきはとことん騒がしく戸棚を引つ掻き回して自転車のカギを見つけると、あにきは転がり出るように玄関から大雨の外へ。おねえちゃんが手を振ったようだ。

覗き込んだコーヒークップの底から、すっごくきめた目をした私が見返してくる。

「こういう日に急ぐとき、大抵ケガするよね」

ギコギコとチェーンを鳴らして、あにきの乗った自転車が住宅街の

坂道を下っていくのが分かった。やつぱりっていうか、それがちよつとだけ聞こえなくなつた後にハデなクラッシュ音に代わる。

「今日は御手洗さんちの前とみた」

お父さんがマグカップを口に運んだ。

「じゃあ最短記録更新だ」

私も特に焦りはしない。

この家であにきの心配をマトモにしているのは一人だけ。

「あにき、最近ぼんやりしてるよね」

相変わらず風と雨が叩き付ける窓の外からは赤色が消えていた。

「いつものことじゃないか」

いつもにまして、だ。数日前のホワイトデー。畏れ多くもおねえちゃんを連れ出して帰ってきたと思つたらずつとこの調子。どうせまた、調子乗つておねえちゃんに怒られたりしたんだろうけど。

「お父さんはもう少し子供たちのことを見てあげてくださいーい」

「うぐう」

あ、言つちやつた。

「……………ごめんね」

お父さんは低くうめいて新聞に隠れるように身をちぢこめた。

「ちよつと。マジへコミしないでつたら」

こうなるとしばらくこのままなので、私はさつさとご飯に戻る。

ニュースは今日も台風のこと。引きこもりにはあんまり関係ない。

「お友達、きたんじやないか」

明らかに風の吹きつけるものとは違うきしみが屋根から走つたのは、私が最後のひとかけのパンくずを皿から拾い上げて口に放り込んだ時だった。

「ほら、持つて行ってやれ。どうせ今日もずぶ濡れだろうから」

お父さんがバスタオルを投げてくれた。

「ありがと」

見ず知らずのおねえちゃんをこの家に入れたこともそうだけど、お父さんの適応力は本当すごいと思う。玄関から絶対に入ろうとしない私の新しいともだちに驚いたのは最初の一日だけだ。

「それと、お願いなんだけど」

「分かってる。幽香さんには黙っておくから、さっさと入れてやれ」

廊下に出てさゆうかくにん。

玄関におねえちゃんの靴はまだない。二階へと階段をのぼりながらそういうことにホツとしているだけでおねえちゃんを裏切っているような気になる。

「おねえちゃん、おーちゃんキライなんだろうなあ」

そりや、人のおやつを横取りするし私の頭を全力でかじりやがったし。それでも私はあのくるくるパーを全力で嫌いになることなんてできなかった。きつと、ゼツボーテキに空気が読めないってところでもアレが合ってしまったんだと思う。なんだっけ？ ハチョーってやつ？

とにかく私とあいつとは、ホワイトデーの一件から、遊ぶようになっていた。

「ごめんね、おねえちゃん」

私の部屋に近づくにつれ、だんだんと雨の音が強くなってくる。なんだかイヤな予感っていうか確信っていうか。

「マジで?」

ドアを開けて、頭がまっしろけっけになりましたよ。

どうやってか私の部屋の窓を割らずに鍵だけ開ける方法を編み出したフトドキモノは、だけど窓の閉め方が分からなかったらしい。

そんなこんなでびっしよびしよの私のベッド。おねえちゃんが洗ってくれたシーツの上に黒い足跡をこれでもかと残して遊んでいたそいつ。今日も今日とでほとんど下着みたいなカツコで出歩きやがって。

「ちゅん?」

ちゅんじゃねーよ。

「おーちゃん、てめえもう許さんぞー!」

首をへし折ってやろうと思ったのだが、やっぱり私、おーちゃんには頭以外負けている。さっさと組み伏せられてえへえへ笑うこいつに前ほど危機感がないのは、タツプしたら攻撃を止めるというルール

をこいつの貧弱なおつむが奇跡的に呑み込んだからだ。

「ぎんぐ。」

そんなこんなで今日も惨敗を喫した私が床に伸びている。

「う」

私にまたがったまま首を傾げるおーちゃんを見てるときゆうに喉が苦しくなる。大きな飴玉を何かの拍子に呑み込んでしまった時のような、ずつとつかえの取れない感じ。

『くうん?』

寒い。雪のちらつく、明りの一つもない空き地に私は転がされているのだ。そんなことはありえない。だって私は引きこもり。

そしてもつともつとあり得えないことに、私を見下ろすのはゾウのような大きさの怪物だった。ぬめりをもった皮。そこから生えた触手。ガラクタをやためたら背中に接着しているせいで、その姿はカタツムリに見える。

「ちーちゃん?」

肩をゆすぶられて、私はようやく心配そうに覗きこんでくるおーちゃんに気付けた。

「大丈夫。具合わるいとかじゃない。けど」

怪物と自分。その間にずうずうしく入ってきて、さつと私を抱えて走る誰か。

『任せとけよ。守ってやるから、安心しろ』

顔は見えないんだけど、ドサクサにとんでもないところを引っ掴みやがった手が誰のものかは分かる。

「……………白馬の王子様はさ、おねえちゃんって決まってるハズじゃん」

だからこそ、これは夢で間違いない。あいつにそんな勇気も思い切りもあるはずがない。

「なんだろうね、コレって」

おーちゃんは。

こいつはやっぱり、どんな言葉を投げつけてもただただ小鳥のように首をかしげて笑うだけだ。こんな役立たずにはさつさと見切りを

つけて、私はケイタイをベッドの上から拾い上げる。



46：むらさき

証拠ねえ。どんな画像なら信じてくれるのかしら。

47：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

IDつきでばんつと顔うp

48：むらさき

そんなことならお安い御用よ。ちよつと待っててね。

49：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

wk tk

50：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>44

まじでむらさき女なん？

51：TK◆tsuru. c78a

すとーつぶ。ネットで顔出しとか、ヤバイって。

52：むらさき

なんで？

53：TK◆tsuru. c78a

なんでもクソもあるかよ。なんかヤバいって、ちよつと考えりや分かるじゃん。

54：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

お、クソコテちゃんオツスオツス

55：TK◆tsuru. c78a

おひさー

56：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

くそがあああああああああああああああああ

57：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>53

あのさあ・・・

58：むらさき

そうなの？じゃあやめとく。

59：むらさき

教えてくれてありがとう。あぶないあぶない。

60： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
なんなのお前バカなの？死ぬの？

61：TK◆tsuru. c78a

バカじゃねーし。俺は死ぬほど困ってんだよ話きけタコ。

62： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
マジでくたばってくんねえかなあ（切実）

63：むらさき

>>おちびちゃん

悩みがあるなら話してごらんさいな。

64： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
むらさきって聞きたがりよな。リアルで友達できんくない？

65：むらさき

逆ね。このパソコンの外だと大抵のことは知ってるし、そうじゃなくても教えてもらえるし。顔の見えない相手との会話ってめんどろ。

66： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
なんか強そうなこと言ってるけどお前マジで何モンだよwww

www

67： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>65

厨二病？

68：むらさき

いいえ賢者です。

68：TK◆tsuru. c78a

それマジで言ってるの？

70： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
剣じゃて

71： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
おなかいったたwwwwwwお腹wwwwww痛いでござるwww

wけんwwじやあww

72： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

予想の斜め上かと思わせておいてまさかの直球発言に草を禁じ得ない

73： mらsあき

だつてほんとうだもん

74：TK◆tsuru. c78a

もう賢者でもパンツでもなんでもいいんだけどさ。最近夢？てか
忘れた記憶？わかんないけどよく見るんだ。でもそれって行ったこ
ともない場所で見ただけでもない怪物が目の前にいて、自分倒れてるみ
たいな。

75：TK◆tsuru. c78a

そんな覚えもないことが目の前で再生されるかんじ。でも空気の
においとか何かさわった感じとかめっちゃやくちやリアルに覚えてん
の。

76： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

お前日本語ひど杉内？ちゃんと学校で国語ならった？

77： TK◆tsuru, c78a

だからガツコは行ってねえつったろ殴るぞ

78： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

要するにヒッキーのTKは家から出たこともないのにどこかへ
行った記憶があったりその先で出会った誰かのことを覚えてるって
こと？

79：TK◆tsuru. c78a

そんなかんじ。あとヒッキー言うなや。

80： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

デジャブ（小声）

81： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

デジャブって書くこうとしたらもう>>80で終わってた

82： 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

糸冬了

83 : TK◆tsuru. c78a

人の悩みを勝手に終わらせないでつてばー

84 : 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
じゃあ本当にあつたことなんじゃねーの？

よかたつたじゃん外出できててwwwwww

85 : 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>83

マジレスするとデジャブなんて脳のバグみたいなもんだしお前の
トラウマかなんかが夢に出ただけだ。現代の科学で解明できること
はとつくに解明されてるし、実際にそんな怪物がいるんならとつくに
見つかつてるから

86 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>85

おたく、夢ないねえ

87 : 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

夢なんてどつかにあるんなら見せてほしいわwwww

お前実際にきてきてきてなんか不思議なことあつた？ないっしょ。お
おかたこの世界は夢も秘密も大昔の連中にしゃぶりつくされたリン
ゴの芯みたいなものなんだと思うよ。マジつまんねえ時代に生まれ
てきた俺らwwww

88 : むらさき

逆はどうかしら

89 : 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

>>78

勿体つけたカキコすんなよ。そんな安価ほしいん？

90 : 以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

結局安価してるし間違つてるし。お前窓際行つて・・・ROMれ

91 : むらさき

>>89

この世界には語り尽くせない幻想がまだまだある。
それをナイナイ言つて、キレイにリンゴの芯だけくりぬいちゃつた

のが私達。私達が見えないふりをしたから、そういうものが消えて
いっちゃった。の、かも、ね。

92：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
いんじゃねーの。ファンタジー小説の設定なら普通に面白いと思
う

93：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします
あほくさwww

94：TK◆tauru.c78a

じゃ逆もアリってこと？そういうものがきつとあるって信じて信
じて信じまくったら？

95：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

むらさきⅡサンのコトダマは実にヨマヨイめいている

96：むらさき

ま、なんとなく思いついたことを言ってみただけね。

97：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

じゃあ信じていればむらさきが俺のお姉さんになってくれる可能
性が微レ存…？

98：むらさき

それは丁重にお断りいたします。

99：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

ふええむらさきお姉ちゃんの言葉難しすぎておじちゃんにはちん
ぷんかんぷんだよお

100：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

イヤってことだろ言わせんな恥ずかしい

101：以下、名無しにかわりましてZUNがお送りします

分かってんだよ夢くらい見させろやks

◆◆

顔の見えない掲示板の住人達とのやりとりは順調に脱線していっ
た。

なんだか頭が痛くなってきたて眉と眉の間を揉んでいると、びゅうと
音を立ててだしぬけに雨風が私の顔に吹き付ける。

「だから閉めてけっつーに」

おおかた飽きっぽいあいつのことだ。ケイタイに夢中の私に愛想を尽かしたに違いない。激しく揺れるカーテンの向こうには台風に踏み荒らされる私たちの町。

「おーちゃん、帰れるのかな」

近所の路地を私は探したんだけど、もうおーちゃんの姿は見つからなかった。今日こそはあいつがどうやってここまで上がってきてどうやって帰るのかハッキリさせようと思っていただけけれど。

べしよべしよのシーツも床に散った花もそのままではまた夢のことを考えていた。

「千晃」

「ひゃあ」

そんな状態の時に耳元でいきなり名前を呼ばれたものだから、とうぜん驚いた。くそあにきそつくりのそそっかしさを発揮した私。爪先がフローリングの水たまりにとられる。そのまますっころぶはずだった私を、おねえちゃんが抱き留めた。

「驚いたよ、もうー！」

いろんな意味で心臓バクバクだ。

「それはこっちのセリフよ」

水のしたたる前髪をタオルで拭きながらおねえちゃんは部屋、というか特にひどい状態のベッドを見つめた。

「あの子、また来ていたのね」

そう言つて私を下ろして、あにき専用の薬箱を片づけて、床に散らばった花を集めてベッドのシーツを剥ぐ。そんなおねえちゃんの背中はずつこく怒っているように見えた。

「……ごめん。私が入れちゃった」

おねえちゃんは手を休めてちらりと私を振り返ったみたいだけれど、こっちは気まずすぎて床を見つめることしかできない。おねえちゃんは誰にでも——くそあにきにすら——優しいけれど、おーちゃんにだけは何故かいい顔をしない。

もちろん私はそれを知っている。知ったうえでおーちゃんと仲良

くして、で、バレた。

「ごめん」

「別に千晃は悪くないわ」

頭に置かれた手。おねえちゃんの匂い。

やっぱり私のおねえちゃんは優しい。

「ただあの子とは、あまり遊んでほしくないの」

そんな風に素敵な笑顔を向けられると、私はもうなすがままだ。

「なんでさ？」

「ヤキモチ、焼いちやうから。かしら」

多分それは本心からじゃないんだろうけど嬉しい。ずるいなあ。

おねえちゃんに手を引かれて私は階段を降りる。ふよふよと揺れる桃色の花を見つめる内に、気付けば私はリビングのソファに放り込まれていた。

「さようなら、よ」

花を花瓶に活け直しながら、おねえちゃんはずぶやいた。

「え？」

「スイートピーの花言葉。お別れ」

どうかしら、と花瓶を見せられても私はただただ頷くことしかできない。そんなことより、こんなに賑やかできれいな花がそんな意味を持つだなんて、ちよつと意外だった。っていうか。

「じゃあ何。江梨花ちゃんは何でそんな花をおねえちゃんに渡したの」

『もうあなたとは赤の他人ですから』っていうことなんでしょう」

「どうして？」

「思い当たる理由はいくらでもあるわね。もともと嫌われるのは得意だし」

おねえちゃんは窓の曇りを何の気なしといったかんじで拭い去りながら口走る。そうは思えないんだけど。

「嘘つけ。どうせホントは人気者だったくせに」

「私はあなたの考えるような……」

おねえちゃんは何か言おうとして、すぐに口を閉じるとそのまま窓

辺の柱にもたれかかった。それから聞こえるのは雨がガラスをたたく音だけ。

「どちらにしろ今は違う。そうでしょ？」

私はすっかり不安になってしまった。

「たとえどんなにひどい人だったとしても、もう違う。だからこれ以上変わる必要はないんだ。どこにも行かないで。これから先、ずっとずっと、私達と一緒にいてくれるよね」

それを、おねえちゃんの言葉で確認したかった。

「う、わ」

だけど返事は予想外のハグだったりする。

「今のあなたならこの先何が起こつても大丈夫」

おねえちゃんは優しく、やっぱりする。こんなふうに背中を撫でられるだけで私が満足して黙るってことをよく知っている。

「おねえちゃんがいなくなったら、私、もう頑張るの諦めちゃうかな」

それがシャクで意地悪を言つてやると、お姉ちゃんは笑顔の中にちよつとだけうすら寒いものを浮かべて私を見つめてくる。

「それだけは絶対に許さないわよ」

それはあにきと約束したから？

それとも、私を本当に妹のように大事に思つてくれるから？

「おおこわいこわい、と」

確かめる勇気なんて私にはないから、ソファにごろりと転がってみる。

私はおねえちゃんを縛り付けたい。きつと、どんなに強くスカート裾を握つていても、いつかは風に吹かれた花びらみたいに手をすり抜けていってしまうのかな。

「これからまだまだ荒れそうねえ」

窓の外を見つめて、おねえちゃんはユウウツそうにつぶやいた。

a) 世界(とネット)の片隅で(下)』

「お前らどうしたの?」

ヘンテコなポーズであることは百も承知だ。

床にうずくまって頭を押さえた私と、冷蔵庫を背にもたれたおねえちゃん。電話の一本もなしに昼過ぎにいきなり返ってきた我らがくそあにきは、タオルで頭を拭きながら、台所の様子を物珍しそうに見渡した。

なんだよ。ヒトに散々言っておいてお前だつて空気よめないじゃんかよ。

「千晃、そんなところにいると危ないぞ」

「どこかの誰かさんが無理やり入つてこようとしなければ大丈夫だよ」

あにきの侵入を阻止しようという私のミッションはたった五秒で失敗した。成す術もなかった。

「悪かったよ。次からは気を付ける」

ドアにオデコをストライクされた私に、あにきは肩をすくめて見せた。

最近になって知ったがこいつは思いのほか力が強い。私がドアを抑えていることにも気づいてはいなかったのかもしれない。

「ずいぶん早いお帰りね」

相変わらず演技のうまいおねえちゃんは涼しい顔で髪型を整えていた。

「台風がそろそろヤバいらしくてさ。この雷で駅前の方は停電しちまって、バスも電車も止まってるし。授業にないから帰って」
そこであにきは一度口をつぐんで、すんすんと鼻を鳴らした。

こいつ、なんだか犬みたいだな。

「甘いニオイしない?」

なんて目ざとい、じゃなくて鼻ざとい? ヤツ!

「いいえ。千晃はどう?」

おねえちゃんがへーゼンと答える。ただし髪を梳く手は止まっていた。

「う、うううん。全然。においなんてゼンゼンしないケド!」

うう。私はやっぱりおねえちゃんみたいな落ち着き方は無理だよ。

「そっか」

私の隣を通って台所に侵入を果たしたあにきはほんの一瞬だけケゲンな顔をしていたけれど、それだけだった。中身も犬並で助か——
——ってないよ!

「ただだダメだって。あにき、出てってよ!」

「はあ。なんでだよ」

首を傾げたあにきの前髪からパラパラと水滴が私の顔めがけて降り注いだ。なんかムカつく。

「なんでも。昔っから言うでしよ、厨房は女子の、えーと、なんだっけ?」

「勢いで聞くなよ。国語苦手な俺が知ってるハズないだろ」

「あーもうとにかくっ! くそあにきはダメ。未来永劫永久立ち入り禁止!」

あにきをこれ以上先に進めるわけにはいかない。

「男子厨房に入らず、ね」

それまで私たちのやりとりを見守っていたおねえちゃんがくすりと笑った。

「幽香。お前もなんかさつきからヘンじゃないか」

「ヘン? どこが、どういう風に?」

むくれっぱなしの私を放り出して、あにきはふらふらとおねえちゃんの方へと向かった。もう私は眼中にナシかよ、けっ。

「ヘンって言うならあなたも。いつからこんなに疑り深いコになっちゃったのかしら」

「んだとお」

「なあに?」

白い歯を覗かせて笑うおねえちゃんの前で、くそあにきはがるると唸る。

「強がりやがって。構ってもらえて嬉しいくせに」

がっしょんがっしょん家じゅうの窓と雨戸が鳴っていたから、私のツツコミはあにきに聞こえなかったけど。私にはあにきのケツでふりふり揺れる透明な尻尾が見えた。こいつ、やっぱりは犬だ。

「さすがに男子厨房にうんたらは古いと思うけれど。多分千晃が言いたいのはソレのことじゃないかしら」

おねえちゃんは一瞬私に目配せすると、あにきのシャツの襟元を引つ張った。台風の中を自転車押して歩いたのがよっぽど効いたのかも shouldn't けれど、あにきの体は吸い寄せられるように私にとって最悪の方向へ向かった。

「うわっ、ちよっ、何っ」

「ほら、もう。こんなになってる。傘も差してこなかったんでしよう？」

つまりはおねえちゃんの方である。

あにきを捕まえて、おねえちゃんはぷちぷちと器用にびしょ濡れのシャツのボタンをはずしていく。あつという間に顔を赤くするあにきのだらしなさに妹としてはため息と苛立ちが募るばかりです。つーかなんて羨ましいんだ。

「いいよ、もう。自分で脱げるから！」

「そう。じゃあ」

おねえちゃんがぱつと手を離す。

「あ……うん。それで、いい」

おいダメ犬。

「とにかく台所は食べモノを扱うところ。ちゃんと乾いた清潔な格好で入ってきてくれるなら、私達にも歓迎のしようがあるわ。ねえ、千晃」

「う、うん」

私がおずおず頷くと、くそあにきはカンネンしたように首を振った。

「……わかったよ」

「それと、これからお昼準備するんだけど。よかつたら手伝ってくれるかしら」

「一応考えとく」

「ふふ。助かるわ」

「まだやるって言ったわけじゃねえよ」

妹の目には分かる。お手伝い確定である。

ぷいと顔を反らしてあにきがリビングに出て行くと、風船から空気が抜けるみたいに息をついたおねえちゃんが、小さく肩を下ろす。くそあにきは駄犬のくせに鼻だけは効くおかげで危ない戦いをさせられた。

「それじゃ千晃、ハジメが戻る間にお片付けしましょうか」

「あ、そうだ」

そこでようやくおねえちゃんが冷蔵庫の前から動いたのと同時に、なんとということか、あにきが台所にトンボ返りしてきやがったのであった。

「わりいわりい。ちよつと飲み物だけ取ってく」

盛大にずっこけそうになった。こいつにはやはり私と同じ血が流れているのか、この土壇場での徹底的な空気の読めなさは。

「どうぞ」

と、おねえちゃんは言ったが、今度の表情にはちよつとだけ緊張が見えた。

「そこ、どいてくれ」

「なんですすつて?」

冷蔵庫をしゃくって、あにきはきまり悪そうに笑った。ほほえんだおねえちゃんの口の端が小さくひきつる。

「さつき言ったこと覚えてるかしら」

「食べ物いじる時はきれいなカッコでってことだろ。じゃあ代わりに取ってくれよ。ドアの内側にコーラ入ってるからさ」

無理だ。

「無理よ」

一呼吸おいて、おねえちゃんが私と全く同じ答えを返す。当然だ。今冷蔵庫を開けたら、嫌でもアレが目についてしまう。こんなところで計画がバレてしまったら、あにきのクラスメートのみんなに申し訳が立たない。

「なんで」

「なんでも」

「やっぱりお前ら怪しいぞ」

ケゲン顔のあにきが冷蔵庫の扉に伸ばした手を、おねえちゃんが素早くつかんだ。

「おとなしく着替えてきなさい。そうしたら持つて行つてあげるから」

「いいよ。つーかそれより一体なに隠してんだよ。気になるだろ！」

「なんでもないつたら。ハ、ハジメ。いい加減になさい！」

わちやわちやと押し合いへし合いする二人はじゃれているのか、それとも本気でやり合っているのかイマイチよく分からない。どちらにしても私は蚊帳の外だからやっぱりムカつくけど。

「あ?」

「え?」

あにきが不意に天井を見上げたので、私もおねえちゃんもつられてしまった。首を上げる傍からあまりにくだらないうフェイントに引つかかったことに気付いたがもう遅い。

「残念だったな。今日こそは俺の勝ち——！」

鬼の首獲つたぜと言わんばかりの勝ち誇った笑いを浮かべて、無防備なドアにあにきが手を伸ばす。

「いい加減にしろって、私、言ったからね」

おねえちゃんがあにきの胸を軽く押した直後、ぼんと音を立ててあにきの体がすつとんだ。

「え、おねえ、ちゃ?」

ロープで引つ張られたみたいなた勢いであにきはリビングに続くドアに呑み込まれる。どんがらががちちゃんとイスをなぎ倒し、その上に追い打ちのようにプレゼントの空き箱タワーがぼこぼこ崩れ落ち

る。

「危ないところよ」

大惨事を前に手のひらをふつと吹いて、おねえちゃんは冷蔵庫のドアを開けた。

「は、はい。おねえさま」

ボーゼンとする私の前でおねえちゃんは焼きあがったばかりのスポンジ生地を取り出して、どこかへと持って行ってしまおう。

「か、カラテ、かな」

あにきは随分力が強くなったみたいだけど、おねえちゃんもつと強い。信じられないくらいに。



ばつすんと音がして、リビングが真っ暗になった。

「あーあ」

何度目かのカミナリで、ついにウチも停電してしまった。

「ケイタイ、充電中だったのにな」

ソファの上で寝返りを打って液晶を確認すると、バッテリーは残り半分を切っている。別にパニックになったりはしない。そこまでケイタイに頼りつきりじゃないし。

「テレビは……あ、ダメかー。停電かー」

「なんのためのケイタイだ」

節々をさすりながらあにきが吐き捨てた。おねえちゃんの作ったチャーハンを食べている間は静かだったが、ごちそう様を言うなりぶつくさとさっきの一件の文句を呟き始めた。

「あにきってオトナゲないよね」

「何を隠そう大人じゃないからな」

これじゃどっちが年上なんだか。

あにきに言われた通りにニュースサイトを開いてみるけれど、さすがにさっきの今でここの停電についての情報は無かったけれど、かわりにこの台風についての特集がずらりと並ぶ。

「うわ、すっご。クルマひっくり返ってるし」

巨人が暴れまわった跡のように荒れ果てた田舎町。極めつけのよ

うに真っ赤な軽自動車横倒しになっている。サイトの写真の説明にある地名を見る限り、F市にだいたい近いっぽい。

移動距離を伸ばせば伸ばすほど勢力を拡大するブキミな低気圧。そう締めくくられても中学一年生でストツプしているノーマソにはあんまりなじまないけれど。とにかく一大イベントに立ち会っているようでワクワクはする。

「ねえあにき。これ見てったら」

いつのまにかあにきは文句を言うこともやめて、板の間に寝転がって拳を眺めていた。楽しいのかな。

「もしかしておねえちゃんにフラれた？」

「ぶふうっ」

効果はてきめんすぎるくらいいきめんだった。あにきがムセた拍子に手から転がり出たものを見て私は納得する。それは向日葵が彫り込まれたひとそろいの指輪だ。

「いつもみたいにへたれて渡し損ねちゃったのか、それとも突っぱねられちゃったのか」

「ななな」

「とにかく思っていたみたいなりアクションがもらえなくて」

「なななななな」

「とにかくあにきのホワイトデーはまだ終わってはいない、と」

「なんなんだよっ、お前はいきなりっ!」

「じゃあ今日はちょっと、気まぐれを起こしてみようか。」

「あにきのイモウト」

このセリフが効いたのかどうか。座布団を枕にしたあにきはもぞもぞと動いて、私から顔を反らした。

「どしたの」

「千晃、お前は幽香のこと、好きか？」

「うん」

即答した。

「俺もさ。割と、結構、いやかなり」

「だってコイビトでしょ。トーゼンじゃん」

「どうだか」

停電の中でもおねえちゃんは平然と洗い物を続けているようだった。つわものだ。豪のものだ。その姿は私達から見えないので、あにきは水音の方に目を向けて、こころもち声のボリュームを抑えて口を開く。

「確かにお前の言うとおり俺はヘタレだ。あいつは見た目に寄らず気が短いから、俺が抜き足差し足しようとする度に尻をせっついてきやる。おかげで何度も危ない橋を渡るハメになった」

「だけど、とあにきは一度言葉を置いた。

「じゃなかったら俺は今もこの家でぶつくさ言いながらマズイトーストを齧って、もつとくだらない理由でお前とケンカばかりしていた気がするんだ。コトによると、ずっと前に死んでいたかも」

「死ぬって、あにきはオオゲサだね」

「よくないな」

床の上で目を瞑ったあにきが笑うと、つられて私は笑ってしまった。

「俺が何かを乗り越えようとする時、いつだってあいつは傍にいられた。あいつのおかげで俺は前に進んだ。だからこれからは、俺があいつのためになることをしてやらなきゃ」

「いちいちオーバーなヤツだなあ。私はもういちど声を出して笑った。

「おねえちゃんは完璧超人だからなあ。私達にできることって、あるかな」

「ネズミのささやきみたいな声が、今まさに寝言にとつてかわろうとするものだということに私が気付くまで時間がかかった。

「もしかして結構お疲れだった？」

「もうあにきは答えない。どちらかというと、疲れているというよりは、今のうちに寝られるだけ寝ておこう、みたいな義務感が浅い寝息からにじみ出てる、みたいな。」

「ちよつと、自分で言っておいてワケわかんないんだけどさ。」

「兄妹仲がよくって結構ね」

タオルで手を拭きながらリビングにおねえちゃんがやってきた。私と、テーブルの上の桃色の花を軽く撫でながらソファのクッションをいくつか引つ張ってくると、私達の傍に座った。

「なにを話していたの？」

「ちよつとヒミツ会議。またはおねえちゃんファンクラブの会合」

「なあにそれ」

おねえちゃんは口元を軽く押さえて笑うと、あにきの傍にころんと横になった。私もマネをする。おねえちゃんが枕代わりのクッションを滑らせてくる。あにきを間に挟んで。

「って」

飛び起きる。危ない。うっかり見過ごすところだった。

「ふざけんな。場所がおかしいじゃんかよ」

「そうかしら」

「これどう考えても私が邪魔者っぽいポジションじゃん。ダメじゃん！」

耳元で叫んでやったらあにきのみじろぎする。面白いので普段からのフマンをごちやごちやと夢の中に流し込んでやっていると、おねえちゃんがすつと指を伸ばして私の唇に触れた。

そろそろ静かにしてあげて、ってか！

「もういいよ。ふんだ」

薄暗い家の中。雨と風と雷が渦巻く外とはガラス一枚で分けられているだけなのに、どうしてか安心する。なんだかフシギな暖かさのあるあにきに、自然と私もおねえちゃんも寄り添って目を瞑る。せいぜいこいつが蒸し上がってひどい目に遭えばいいと思った。



ベッドからむくりと起き上がって私は棚に置かれた目覚ましを確かめた。

「まだこんな時間？」

昼寝をしたのが効いたかな。

むしやぶりつきたいくらいきれいな寝顔を見せるおねえちゃんを起こさないようにそつとタオルケットをのけて、わたしは二階の廊下

に出る。もぬけの殻になったあにきの部屋のドアがキイキイと揺れている。

停電していることを忘れて廊下のスイッチを何度も入り切りしていると、不意打ち気味の雷鳴に私は小さく飛び上がってしまった。た。

「お、おどろいたあ」

いい加減聞きなれたカミナリも、寝起きだといっそう恐ろしく聞こえたよ。

台風は夜になってもこの町の上から動こうとはしなかった。空が割れたんじゃないかなってくらい大きな雷が何度も何度も。

私は電源切れかけのケイタイを懐中電灯代わりに、パジャマの裾を引きずって階段を降りる。今まさにスニーカーをつっかけたこの土砂降りの中に出ていくぞという気合だったそいつの輪郭を、稲光が照らし出した。

「やっぱりか、あにき」

すつと立ち上がって、あにきは私を見つめ返す。

「どうした。こんな時間に」

「あにきもな」

その瞳が一瞬だけ炎のような色を灯したような気がした。私の知っているヘタレで弱いあにきがどこかへ行ってしまったようで、ちよつとだけ怖かった。

「ひとつだけ確かめさせて」

こいつが家を飛び出すのも、これで何回目になるかわからない。だから私も何回目になるか分からない質問を、あにきに向ける。

「確かめる？」

「おねえちゃんはどこにも行かないよね。ずっと、私達の家族でいてくれるよね」

近くに雷が落ちたみたい。

ややあつて、あにきの気配が暗い廊下の先でうなずいたのが分かった。

「……………ああ。なんとかする」

おねえちゃんといい、あにきといい。ヒトの質問にはハイかイイエで答えられるというのを忘れてしまっているみたいだ。なんとかする、なんてセリフではこいつのやろうとしていることはどうてい説明できないけれど。

「そう。わかった」

それでも私は、こいつを信じることにした。

「せいぜいケガしないで帰ってこいよ」

「安心しろよ」

そろそろと玄関を開いて出て行くあにきに、私はそれ以上言葉を掛けることができなかった。

「それ、確か夢でも言ってたね」

それとも、現実でのセリフだったのかな。

玄関を出て、雨と暗闇の中に出て行くあにきの背。小さいころからム力つくことがある度に蹴っ飛ばしつづけてきた。

その背中がこんなに大きくなっていただなんて知らなかったよ。山みたい、というか。もつともつと。まるで、星ひとつを背負っているみたいじゃないか。

「おねえちゃん、意外と男を見る目があるのかな」

私は真つ暗なりビングでソファに横になった。あにきの漕ぐ自転車の音は、こんな明り一つもない夜だっというのにコケずに遠ざかっていく。

私はケイタイを取り出す。充電は虫の息だけど、やらなきやいけないことがあった。

156:TK◆tsuru. c78a

むらさき、いるんでしょ。

もとかから人がこないようなスレッドだ。私が最後に見た書き込みから、あんまりやりとりは進んでいなかった。更新ボタンを二度も押さないうちに、謎めいた自称賢者がレスを返してくる。

157：むらさき

こんばんわ。おチビちゃん。呼んでもらえたのは嬉しいけれど、子供は寝る時間ではなくて？

158：TK◆tsuru. c78a

ウルサイ。ガキ扱いすんな。

159：むらさき

うふふ。ごめんなさいねえ。

今はもう寝静まった掲示板の常連たちみたいハンドルネームではなくて、こいつは私をおチビちゃんとかふぎけた名前で呼ぶ。それはまあ、この際いいよ。実際ちっこいしな。

それこそがこいつの書き込みにずっと感じていた違和感の正体。まるでどこか遠くから私のやってることを覗き見しているような。

「あんだ、本当ナニモンなの？」

不思議と、怖かったりはしないけど。

今はそんなコトに突っ込む余裕はない。画面の輝度を落として極力バッテリーが減らないようにして、私は文字を打ち込んでいく。

160：TK◆tsuru. c78a

前にむらさきに聞かれた。周りに誰もいなくなったらどうするかって。

161：むらさき

なつかしいわね。そんなことも、ありました。

162：TK◆tsuru. c78a

おねえちゃんとは絶対にいなくならない。お父さんも、あにきも、あにきのトモダチも、お母さんだって。誰一人。

163：TK◆tsuru, c78a

だからアンタの聞いたことは、そもそも質問として成り立たない。私達はずっと幸せに、オモシロおかしくやってくんた。

164：むらさき

そんなに上手く行くことばかりじゃないってのは身をもって知っ

ているでしように。

165:TK◆tsuru.c78a

本当にヤバい時におねえちゃんが助けてくれた。それに、認めたくないけどあにきだつて。

だから乗り越えられないピンチなんてない。もちろんこれからもいろいろあるだろうけど、絶対に何もかもうまくいくよ。

166:むらさき

誰かがいつでもあなたを助けてくれる。それがあなたの答えでいいのね

167:紫

なら、一緒に結末を見守りましょう。

「あつ……なんだよ、もう！」

いいところでケイタイがメゲた。

むらさきだか紫だかには言ってやりたいことがまだまだあるというのに。停電のばかやろー。

「いちいちいちエラそうにさ。何サマだつっの」
軽く水でも飲んで寝よう。

明日になったらケイタイ充電して、おねえちゃんのお手伝いでもして、あいつを待つ。一年に一度くらい、あいつを祝ってやるのも悪くない。

二階へ向かう私を引き留めたのは、コツコツという、聞きなれた控えめなノックだった。

「……おー、ちゃん？」

こんな時間に、何をしに。

「待ってて。今開けたげるから」

急いで洗面所からタオルを引っ付かんできて玄関に向かう。うすらぼんやりだけど、玄関のくもりガラスの向こうにあいつの姿が見えた。だけど次の稲光に照らされた瞬間、その背中から何かがぶわあつと広がって。

カミナリの音もかき消すような羽ばたきが去っていくのを聞きな

がら、私は腰を抜かしていたことに気付いた。

「な、なんの冗談だよ」

おそるおそる玄関のドアを開くと、足下でピンク色の花が風に吹かれていた。茎に乗せられた重しの石をのけて拾い上げると、それは最近いろいろと話題のスイートピーだ。

花言葉は、たしか。

「まさかね」

あのアホたれのおーちゃんがそのことを知っているカノーサーの方が低い。その姿が一瞬だけバケモノみたいに見えたのも、きつと何かの偶然に違いない。

「明日、またハゲにやるから、ちゃんと来いよな！」

風と雨の中に私は声を張った。

「……江梨花ちゃんも誘ってさ。それで、ユキちゃんとかも来るといいな。昔みたいみんなで騒ごう。ね」

だけどこの台風の去った後に待っている幸せな日常を想像すればするほど、それがこの町の空にあるものよりも黒くて分厚い雲の向こう側に行ってしまったような気がして仕方がなかった。

第十九話『鶴見千晃、(もしくはTK◆tsuru.c78a)世界(とネット)の片隅で』おわり

9 『歩み続ける限り（上）』

ぱちぱちと木が爆ぜる音がした。

石畳の上に横たえていた体を持ち上げると、あちこち酷く痛む。手かせのついた手で顔を拭うと、べつとりと血がついてきた。

『終わりました』

まるで、秋の早朝に弓の弦を鳴らしたような凜々しい声だった。

山伏めいた戦装束に朱の高下駄。ただでさえ高い身の丈を越える大太刀を携えた女の背中には黒い翼が畳まれている。人間ではない。天狗だ。

そして、彼女の奥。炎に包まれた寺院の前には真っ赤な肌をした鬼が顔を割られた姿のまま、仰向けに倒れていた。

『とにかく今回も生き抜きましたね。さあ、立って』

差し伸べられた手と言ったらひどいものだ。皮がはげ、血がぬめり、折れた骨が皮の下でうごめいて再生しつつある。かつて英雄と呼ばれた彼女でも、この戦いは歯ごたえのあるものだったのだろう。

『もういやだ』

お仕着せの巫女装束に身を包んだ少女は体を丸めた。

『いやだ、とは？』

『どうして私ばかりがこんな目に遭わなきゃならないの』

『それは、あなたには特別な力があるからでしょう』

『他の女の子たちは普通に遊んで、恋をして、自由に泣く権利も笑う権利もある……私には何一つない』

静かに嗚咽した少女を前に、護衛の天狗は腕組みした。

『きつと世の中はそんなものですよ』

そんなことを簡単に認められるほど、少女は大人ではない。しかし口を開いた彼女の口から泣き言が飛び出すよりも早く、怒りに満ちた叫びが大地を揺るがした。本堂から燃える瓦が滑り落ち、石畳がガタガタ鳴る。

『おやおや。それでも動けますか』

不自然に顔を傾けた赤鬼が、燃える柱の一本を金棒代わりに立ち上

がる。この廃寺に住まい百年にわたって疫病と死を振りまいてきた業鬼はそう簡単にはくたばってくれない。満身創痍の天狗は太刀を鞘に納めたまま体を浅く沈める奇妙な構えを取った。

『特別な力を持ったばかりに寒村の小娘が守護者に仕立て上げられる。一族の汚名をすすぐために果てない戦いに駆り出される。世界はそんな風に、いつだって理不尽に出来ています』

涎と血を顔面から迸らせながら鬼が迫る。

『ですが』

その巨体は疾走の中でバランスを崩し、前かがみに倒れて石畳を滑った。天狗が刀を抜いていた。あまりに早くて、空中に走った銀の線が太刀筋であることに気付くまで時間が要る。

『ですが歩み続ける限り、こんな残酷な世界とだって渡り合えますよ、江梨花』

ごろりと転げる鬼の首を尻目に、彼女はもう一度少女に手を差し出した。

『あなたの代わりに、その一步目はボクが踏みましょう。さあ、立つて

――』

「えりちゃん！」

壁にもたれる形で眠りに落ちていた江梨花は、おーちゃんに揺すられて目を醒ました。

「あー、寝てたか。随分懐かしい夢を見ちゃった」

背伸びをしながら立ち上がって、江梨花はおーちゃんの見つめる先へと視線を馳せた。相棒は随分といいタイミングで起こしてくれたようだ。

「ようやくだね、ハジメ」

◆◆

商店街の入り口に自転車を乗り捨てて、ひたすら歩く。

蛇のようのにたくる路地を最後に抜けたのはいつだろうと考えた。

無秩序に生えた標識の森と腐りかけの垣根やら廃車を乗り越えるうちに豪雨は嘘のように小降りになり、やがて生ぬるい風の吹き渡る空に黄ばんだ月が現れた。

「つくづくワケわかんねえよな、ここは」

F市の駅前。商店街の路地裏にひっそりと存在するこの小世界を、誰がいつ、なんのために作ったのか。

「だから、とりわけワケのわかんないものばかりがここに集まる。怪異ホイホイとでも言った方がいいかな」

その疑問に、ようやく答えが出そうだった。

「なにはともあれようこそ。忘れられたものたちの終着駅へ」
月下。

傾いだアパートの屋上にその声の主が佇んでいた。見覚えのある深青のドレスの裾が風と踊る。

「ちゅん」

次いでその背後。一對の黒い翼を携えた怪異が降り立つ。

千晃と遊んでいる時とは打って変わって得体の知れない気配を放ち続けるそいつに内心で慄きつつも、大路に出たハジメは落ち着き払ってビニール製のレインコートを脱ぎ捨て、彼女たちを見上げた。

「幽香を助ける方法を聞きに来た」

「あんまり驚かないんだね」

アパートの屋上から身を躍らせた女を、黒羽の怪異が空中で抱き留める。そうしてぺんぺん草がところどころに頭を出した舗装に降り立った彼女の背丈はハジメと大差ない。

「まあな。江梨花なんだろう？」

そうして女が浮かべた、ぞつとするくらい大人びた微笑。それでも彼女には、幼馴染の面影が残されていた。

「昔から、お前は異常なくらい普通だったな」

ほころびは昔からあった。

遊園地でしこたまどやされた時、三者面談のとき、彼女には迎えに来る親がいなかったこととか。いつも帰る時はこの路地裏に引っ込んでいくこととか。誰も彼女の苗字を知らなかったこととか。

その上で誰も疑問を口にしなかったということ自体が、彼女が普通でないことなのよりの証なのだろう。

「教えてくれ。お前は一体誰なんだ」

「ハジメのトモダチのエリカ。ついでにこのF市の守護者を、かれこれ三百年くらいやってる」

「さん、びやく?」

スケールが大きい話に思わず立ちくらみを覚えたハジメの前で、エリカは声を上げて笑った。

「最初はこの世界での隠れ蓑代わりに近づいたんだけど。やっぱり友達ってさ、居心地いいよね」

そこでエリカはハジメの視線の糸をたぐった。その向かう先が、自分ではなく背後に控える黒羽の怪異であることに気付いて、彼女は頷いた。

「じゃあ本題に入ろうか。ずっとまえに狂ったこいつを、どうして今の今まで留め置くことができたのか」

エリカは近くのベンチを示した。

古い駄菓子屋の店先にあるような、錆の浮き出た真っ赤なベンチ。コーラのロゴが白抜きで入っている。

「いや。このままでいい」

「そ。オツケー」

首を横に振ったハジメの前に、エリカは気を悪くするでもなく腰をベンチに落ち着けた。

「そもそも妖怪変化が狂って消えていく原因って、ハジメは知ってるかな」

「この世界から忘れられて、いくから?」

とある妖怪の賢者に言われたままを答えると、耳元で彼女の『よくできました』が聞こえたような気がした。

「そう。予習はバッチリみたいだね。本題はここから。そういうわけで狂った怪異はいずれ完全に消えて無くなる。こればかりは私の能力でもどうしようもない」

「おなかへったよお」

自分の指をしゃぶり始めた相棒の頭をどついて、江梨花はため息をついた。

「要するに失われていく幻想は、よそから調達すればいい。手っ取り

早いのが文字通り喰わせることってワケ。そうすれば存在を保つことはできる。あとは」

江梨花が傷だらけの右腕を振るう。じやらりと音を立てて、この瞬間まで不可視であったそれらが現れた。

「それは鎖、なのか」

月光を受けて冷たく光る鎖の先端は、海中を漂う藻のようにゆらゆらと宙に揺れている。もしくは闇から獲物を狙う毒蛇か。いつしかおーちゃんの体にも同じ鎖が巻き付き、がんじがらめにしていた。

「私が持つのは『惹き留める程度の能力』。たとえ狂気の間際だろうと、関係なく縛り付けて留めることができる」

公園で襲われかけた時におーちゃんを縛ったのも、この鎖なのだろう。手におえない狂犬のように、エリカという杭と、能力という鎖でぐるぐるに繋がれて。

「ハジメが私に協力してくれれば、あの女を助けてやってもいい」

「……俺にできることなんてあるのか？」

「もちろん！」

あいまいな表情で佇むハジメの手を、勢いよく立ち上がったエリカが捕まえた。

「そうと決まればこれから忙しくなるよ。でも大丈夫。大変なところは全部私がやるからさ。なんかテンションあがっちゃうよ」

きらきらと目を輝かせて、現代の守護者は外見相応の少女らしいしぐさで喜びをかみしめていた。目の前の青年との温度差にも気づくことなく。

「なにせ私、ずっと一人でやってきたから。おーちゃんはこの通りくるくるパーだしさ。ああ、ほんと、嬉しいな」

「そうだな」

しかしハジメは冷淡に手を払って踵を返す。

「え、ちよ、ま、待ってよハジメ。あの女を助けたくないの？」

ずっと一緒に幽香と居られる。

それは、本当に、涙が出るほどうれしい。しかしそれだけではダメなのだ。エリカには、ハジメの願いの半分しか見えていない。

「助けたいさ。だけどお前の言う方法と、俺の考える方法はだいぶ違うみたいだ」

取り残されたエリカは正真正銘の必死だ。そして、困惑している。そのモヤモヤがどこか埃くさいこの世界の中で渦巻いて——やがて、ハジメの背後で恐ろしい敵意として爆発した。

「行かせるか」

ひどく大きなものが風を切る音がした。

「いつ、てえー！」

攻撃と防御の要である例の日輪を展開しようとしたときには、既に両腕を抑え込まれていた。

「ちゅん」

みしりと音を立てるハジメの腕などお構いなしに、頭上から覗きこんできた黒髪の美女。見覚えがある。江梨花や千晃が『おーちゃん』と呼んでいた怪異だ。

「離せよ。おい、聞こえてんだろー！」

「ダメだよ、絶対に逃がしちやダメ」

おーちゃん、つまり黒羽の怪異がどちらの要望を聞くかなど、言うまでもない。

「サイアク文字通り手も足も出なくしていいよ。ただし、殺すのはナシだ」

「ちゅん」

「ぐええっ」

喉笛を掴んで持ち上げられたハジメはひどい息苦しさの中で黒羽の怪異を睨み付ける。ばたばたと暴れる足は、次第に勢いを失っていく。

不意にエリカが空を仰いだのはその時だ。

「きたね」

西の空。一つの星が異様にまばゆく輝いた。

それは星なんかじゃない。ハジメには分かる。あの輝きに、何度も救われてきた。すぐそばの地面を熱線が貫き、驚いた黒羽の怪異がハジメを地面に落とす。

咳き込むハジメには猛スピードでこちらへ降りてくる幽香の姿が見えた。

「おーちゃん」

エリカがあごをしゃくった。幽香が降り立つよりも早く、黒羽の怪異が飛び上がった。

その巨大な翼が大妖怪の視界を奪い、鎖骨に叩き込まれた蹴りが彼女をひるませ、鋭い鉤爪が無防備な横顔を斜めに掻き切る。

「ウソだろ」

全で一瞬の出来事だった。

どちらりと音を立てて血の海に倒れ込む幽香。その頭を鷲掴みにして掲げると、黒羽の怪異は吠え猛る。その美しさからは想像もできない、千羽のクラスが一斉に鳴いたような、不吉な声だった。

「さ、役者が出そろったところで、もう一度話し合おうか」

彼女の言葉に呼応して天が割れた。

数十年か、それ以上の時を隔ててこの隔離された世界の障壁が取り払われた。現れたのは雨風吹きすさぶ外界の姿——いや、もつとひどい。町中を取り囲む黒雲と豪雨、そして風がこの一点に『惹き寄せられて』いる。

天を差した指先をぐるぐると回すエリカを見れば、ハジメにもここ数日の異様な天気の原因がどこにあるか即座に理解できた。

「遊んであげて」

エリカの言葉が生ぬるい雨粒と共に背筋に流れ込んだ。

ひとときわ大きく吠えた黒羽の怪異が、無理やり立たせた幽香の顔面を打った。ぐったりとした幽香は受け身も足らないまま冗談みたいに吹き飛んでいく。まるで、人形のように。そうして、最強の大妖怪はごくごく平凡に圧倒されていったのである。



「映像、主モニターに出ます」

F市のとある路地裏に存在する巨大な結界に囲まれた世界。それが数分前に跡形もなく消し去ると、万場はすぐさま衛星を手配し、輸送車に備え付けのモニターに映像を中継させた。

「い号とろ号、そしては号が一同に会するとは。なかなかの壮観ですね」

と、寺田。トレードマークである眼鏡は画面を反射し、その奥の表情は読み難い。

「戦ってるのか」

今井の言葉に万場が頷いた。モノクロームの画面に真っ赤なマークが四つ。

『守護者』と鶴見ハジメ。風見幽香。そしてあまりに早すぎるい号が爆発的な加速を行う度にターゲットを見失った四つ目のマークは途方に暮れたようにくるくると画面内を彷徨う。

「頭数を減らしてくれるなら好都合です」

「まあ、そうだが」

い号の爪を受けたろ号が右肘から先を完全に失って、白と黒とのモザイクを映像にまき散らした。完全無欠と思われたろ号をこうまで圧倒するい号とは、やはり最強の怪異なのだろうか。

「残念ながら、あのくらいでは彼女を追い詰めることもできないでしょう。怪異というのはそういうものです」

「へ号はそうもいかなかったみたいですが」

それまで静観に徹していた寺田が口を開いた。

「狭間雪之丞——番狂わせのへ号ですか。ろ号との対決で大分消耗してましたから。アレは吸血鬼と呼ばれる強靱な生命力を武器とする怪異ですが、さすがにい号との連戦には耐えきれなかったのかと」

モニター越しに繰り広げられる酸鼻を極める残忍な戦いに、今井は無意識に眉間にしわを寄せていた。モニターに目を向けたままの万場が、彼の内心を読み取ったように再び口を開いた。

「それと今井さん、あれらはあくまで人間の形をしているだけで、僕たちとは倫理観も思考様式もまったく異なるものです。変に感情移入すると、明日が大変ですよ」

「……………今さら言われるまでもない」

と受け答えしつつ、今井の脳裏によみがえるのは病院で自動ドアと

戯れる彼女の姿だ。血も涙もない怪物には、とてもじゃないが見えなかった。

「ああそうだ。寺田さん、その花、やはり処分がよろしいかと」

寺田は決まり悪げにグレースーツの胸ポケットに揺れる小さな花を撫でていた。かつて、風見幽香に接触した彼が渡されたもの。ふた月を経て、それは未だみずみずしく咲き誇っている。

「寺田さん。聞いていますか。その花は明らかに普通じゃあない。即刻処分をお願いします」

「あつ、ハイ。分かりました」

針で刺すような鋭さを秘めた万場の声に、寺田は弾かれたように顔を上げた。車内に待機していた防護服姿の隊員が差し出した金属容器にそれを収める彼は、明らかに迷っていた。

「いや、いい。後で自分で持っていきます」

そうして容器を寺田が奪い返すと万場は物言いたげだったが、すぐにモニターへと向き直っていった。

「花の一本にずいぶんと仰々しいんだな」

正確には仰々しいのはそれだけじゃない。

車内にあれやこれやと機材を詰め込んだこの輸送車といい、今しがた去って行った防護服の男たちが下げていた短機関銃といい。怪異同士の戦いを見守るには、あまりに装備が大げさすぎる。おまけに万場はこれらの手配をあつという間にやってのけたのだ。

異様だった。

「は号が動きましたね」

突如として『守護者』の面前でいくつもの火花がはじけた。

モノクロームの画面の中で懸命に走り、瓦礫の山を転げ落ちていく青年の姿を見る。一つ間違えば簡単に命を落とす、人知を超越した力のやり取りの中にその体を投げ込んでいくことを決意させたもの。ベテランの刑事でなくとも、それを察することは難しくない。

「きみは変わったな、鶴見くん」

彼の心中を察するうちに、今井は我知らず拳を固く握りしめていた。



数世紀生きていようとエリカの肉体はごく平凡な人間のものだ。吸血鬼や他の怪異とは違う。長い付き合いでケガをする瞬間はいくらでも見てきた。

「手を抜く余裕があるワケ？」

全力で攻撃すれば文字通り彼女の胴体に風穴をぶち開けることができただろう。だが躊躇いのある弾丸は威力も速度も火遊びのようなもので、エリカが振るう鎖の束によって、それらは次々と叩き落とされていった。

「だッ！ クソ、お前はそういうの、どうでもいいらしいな！」

鎖で背中を打たれたハジメは苦痛で足元をおろそかにする。更に彼の脚首を打った鎖が、その体を地面のくぼみにたまった泥沼に叩き落とす。

「強い怪異が必要なんだ。 太く長く生きてようなやつ」

喘ぐハジメの背中を踏みつけ、エリカは勝ち誇った。

「その点こないだの鯨は理想的だったよ。ま、あんたらの大活躍で見事に喰い損ねちゃったけどね」

ハジメが黙ったままだいと、彼女は容赦なく彼を水中に沈めた。能力によるものか、それとも彼女自身の力によるものか、いくらもがいても細足は微動だにしない。

「ハジメが領かなきや、あの女はおーちゃんの胃袋行きだ」

泥の中をさまよったハジメの手が、長らく沈んでいたソレを掴み取った。こんなものを幼馴染の足首に叩き付けることには抵抗があつたが、手段を選んではいられない。

飛沫をあげて水中から現れたハジメの手には煉瓦のブロックがあつた。エリカが目を剥く。しかし鈍い感触はいつになってもやってこなかった。

「サンキュー、おーちゃん」

もはやぼろきれのようになった幽香を放りだして、黒羽の怪異は数百メートルを一瞬にして駆けていた。

「うん」

半ばほどハジメを泥だまりから引き揚げた形で、黒羽の怪異は彼を抑え込んでいた。べつとりと幽香の血に塗れた顔。表情がまったく動かない。瞬きすらしない。

「やる？」

「うーん。残念だけど、そうしよつか」

黒羽の怪異の片足が、ゆっくりとハジメの右ひざに載せられる。濡れたジーンズ越しにゆっくりと圧力が増していくのを感じる。ひざ裏が嫌な予感に汗ばんだ。

「幽香！」

助けに行くはずだった相手にすがるなんて、なんて情けないんだ。しかしその効果はすぐに現れた。

「いつ」

早いものが飛んできて、黒羽の怪異の横つ面で弾けたのだ。

地面に落ちた欠片で分かったが、それはハジメが握るレンガと同じものだ。威力こそ砲弾のようであったが。

「つたああああああ」

背後からハジメの襟首をつかんだ幽香の惨状と言ったら筆舌に尽くしがたい。対する黒羽の怪異は血の一滴も流していない。それでも、彼女はあっけなく崩れ落ちるとすんすんと嗚咽を漏らし始める。

「おーちゃん!？」

「ハジメ、潜るわよ」

落ち着いた幽香の声がハジメの耳を打つ。地面の感覚がなくなり、すぐさま浮遊感に襲われる。我に返ったエリカが鎖の網を手当たり次第に振り回す頃には、ぽつかりと地面に穿たれた穴に二人が姿を消した後だった。

「あああああん、あああああん」

理性を失った怪異は、それこそ子供の用になきじやくつた。

「あーはいはい。痛かった痛かった。次は油断しちやダメだよ」

今のは不意を突かれただけの偶然だ。おーちゃんは最速にして最強なのだから。自分に言い聞かせながら、あやす手を休めて、エリカは地面の穴を見つめた。

「まさかな」



頭を打つたらしい。音も、視界も霞がかつたように遠い。

「ここならしばらくは大丈夫」

暗闇にぽつぽつと明りが灯るにしたがって見えてきたものはごつごつとした岩肌だった。等間隔で通路を補強する梁と、そしてひんやりと湿り気を帯びる、さびたレール。忘れられたものを呼び寄せるこの空間は、どこかの廃坑をまるごと引つ張ってきたらしい。

幽香の白い背筋には幾本もの赤い切り裂き傷。彼女の手によって放たれた花の夜光に照らされて、生々しい傷が異様なくらい妖艶だ。

「お前大丈夫か」

「静かに」

腹の底を叩くような振動がこの空間を揺るがした。

「探しているわ」

暫くして、揺れが遠のいてから幽香が口を開いた。その足元がふらりと揺れて、壁にもたれる。幽香に寝かされたまま、ハジメは静かに自分の呼吸を数えた。

「またお前に迷惑かけちゃった」

「慣れっこよ」

嫌味っぽさもなく幽香は言い放って立ち上がる。はだけた胸元から視線を逸らすことをハジメが考える前に、彼女は彼の両頬に手を添えて、頭の傷の具合を検分した。

「血が出てる」

また、ヘタな冗談を口にしたのかと思った。

幽香が、残り少ない布地を更に切り離してハジメの頭に巻いている。その指は血に塗れていた。それだけでなく、髪も、顔も、体も。

「久しぶりにここまでやられたわ」

度重なる破壊でついに修復が追いつかなくなったのだろうか。しばらく空っぽの右眼窩を抑えていた幽香は、再生したばかりの瞼を何度かしばたかさせた。

「どっつー」

「ああ。ちゃんと治ってるけど」
「気持ち重い。」

不屈で最強の大妖怪、風見幽香。激動の四か月で揺るがなかった唯一のルールが、今崩れ去ろうとしている。

「あれは強い」

「でもお前の方がずっとずっと、何千倍も何万倍も強い。そうだろう？」
「どうかしらね」

まるで他人事のように幽香が肩をすくめた。

「なあ。いつもいつも気になってたんだ。何でお前は、俺のためにここまでしてくれるんだ」

「あなたとは約束があるから」

「本当にそれだけ？」

そこで幽香は顔を反らすと、こほこほ血の絡んだ咳をする。それで、この話題は終わりになった。

「あなたは優しいから。優しすぎるから私を助ける方法があるとか、そういうことを言われて誘い出されたのでしょうね」

返す言葉がなかった。

「……ハジメは私のこと、やっぱり殺せないの？」

「俺は」

しかし口ごもったハジメにも、幽香は穏やかに微笑んだだけだった。頬に伸ばした手をゆっくりと下ろし、体を離す。この段になって、ようやくハジメの鼻が彼女の血の臭いを拾った。

「俺は、あんたを心の底から大事に思ってるんだ」

「そう。ありがとう」

と、天井を仰いだ幽香の様子はあまりに儂げだった。

「できることならあなたに殺されたかったのだけれど————じゃあ、さようなら」

その言葉の意味が、うまく理解できなかった。

謎めいた幽香の微笑をただただ見つめることしかできない。

坑道の揺れが収まった直後、二人の頭上で天井が割れた。降り注ぐ岩塊と共に白い腕が現れ、カギ爪を伴った指が幽香を鷲掴みにする。

「やめろ」

瞬時に幽香を連れ去ったそいつに燃える指を向ける。瓦礫と共に顔面に降り注いだのは幽香のものであった肉片と血飛沫だ。彼がひるんだ隙を逃さず忍び寄った鎖がその腕をからめ、無理やり地上に引き摺り出す。

雨でぐしよぐしよになった上に無数の瓦礫が敷き詰められた地面に叩き下ろされて、ハジメは息を詰まらせた。

「ハジメ、もう一度。もう一度だけ聞く。私と手を組もう」

すぐ横にしゃがみこんだエリカが無感情に告げる。

念押しするように、ハジメをがんじがらめにする鎖の圧力が強まった。

「……………その前に教えろ。どうして今になってお前はそんなに焦ってるんだ」

「焦る？、私が？」

視界の端。遠くで血飛沫が舞うのが見える。この瞬間も幽香がなぶり殺しにされていることを考えると気が気でないが、今のハジメには少しでも時間を稼ぐ必要があった。

「そうさ。なんでいきなり強い怪物が必要なんだ。俺たちと手を組みたいって提案にしても、お前にどんなメリットがあるのかサツパリだぜ」

「別に深い理由があるわけじゃない。エサは多いほどいいし、あんた達を引き込むことを考えたのはただ寂しかったから」

「へえ。本当に？」

「クドいよ」

どどん、と遠い花火のような音が雨中に響く。にわかにあたりを真昼のように染めあげた閃光。立ち上る巨大な火柱と、紙屑のように吹き飛ばされる満身創痍の幽香が見える。遠く離れたハジメにも、その熱がじわりと伝わった。

「あれは———そうか」

業火を纏った黒羽の怪異が咆哮した。

忘れようはずもない。己の身を焼き、秘めた力に覚醒するきっかけ

となった炎の色を。四か月前。原因不明の爆発事故。飛び散るガラスと熱風の渦。風見幽香との出会い。ようやくすべての糸が一本に繋がりはじめていた。

「お前の能力でもあいつを縛れなくなり始めているんだな」

青いドレス。大胆にのぞいた背中がこわばったのが分かった。

「だからお前はあいつが満足する、もっと大きなエサを探してやる必要があった。そうなんじゃないか？」

「驚いたな。ハジメってそんなに頭回るヤツだったっけ」

地平を走っていく炎の渦が小爆発する度に衝撃波がエリカとハジメをぶん殴る。束の間降り注ぐべき方向を見失った雨が、また思い出したように二人の髪を濡らし始めた。

「ご明察」

エリカは大きく肩を落として、ぽつぽつ話し始めた。

「アレは本当に間が悪かった。謝ってどうこうなる問題じゃないけどね。あの日は完全に後手に回っていた。逃げ出したおーちゃんと、そして炎の中のアんと。なにぶん予期せぬことで気が動転しててさ」

「強い妖怪の幽香がいることを嗅ぎつけてあいつが現れた、ってことか」

「あの時は分からなかったけどね。あいつが妖怪だってことすら」

「ごめん。そういつてもう一度エリカは頭を下げた。

「それは俺を見捨てて丸焼きにしたことか？ それともこないだ、お前の相棒が千晃の頭を食い千切りそうになったことか？」

「ハハ。意地悪だね」

束の間よぎったあいまいな表情は間違いなく、十年来の友人である江梨花のものであった。だから、賭けてみることにした。ハジメは体を揺すった。節々が痛む。だが。

「エリカ、諦めろ」

「え？」

「この結界を見ろよ。もう、ここに寄りつく怪物なんていない。それどころか——お前の言う怪異じたい、この世界では絶滅危惧種な

んだぜ。たとえ幽香を喰おうが、それでおしまいだ。いずれお前の相棒は手に負えなくなる」

ハジメは辛抱強く語り続けた。

「本当はお前だつて分かつてるはずだ。それよりも俺とお前で力を合わせれば、きつともつとマシなことができる。請け負うよ」

そこから長い沈黙があつた。

二人の間の静けさを埋める様に雨が地面を打ち、風が吹きすさぶ。凄絶な幽香の解体ショーは続く。小刻みに地面が震える。

——早くしろよ！

気が狂いそうだった。

くつくつと、絶望的なBGMのなかに哄笑が混じり始めたのは、ハジメが一か八かで暴れはじめると寸前のことだった。

「分かつてるじゃん。ハジメも人が悪いなあ！」

エリカは笑っていた。

「安心してほしいけど、既に怪異をいくらでも調達するメドは立っている。後は、どうやってそこへ行くかっただけの問題だったんだ」

そこに絶望も諦めも無い。むしろ彼女は、ハジメが自分と同じ結論に至つたということに喜んでいようであった。

「もともとこの小さな異世界は、あの世界をマネして作ったもの。結界によつて外界から隔絶され、忘れられたものたちが集う。入るのはたやすく、出ることは難しい」

「お前、さつきから一体何を言つてるんだ」

「いろいろ話を聞いたんなら、心当たりくらいあるんじゃない？」

確かに、伝え聞く限り、この世界に酷似したモノをハジメは知っている。宙を裂いた稲光が、エリカの喜色を悪魔的におぞましく浮かび上がらせた。

「幻想郷だよ」

10 『歩み続ける限り（下）』

幻想郷を攻め落とし、そこに存在する妖怪変化をまるごと平らげる。

齡三百を超える現代の守護者はとんでもないことをさらりと言つてのけた。

「できるはずがない」

「できる。私にはそれだけの力がある」

「お前は知らないだろうけど、あそこには涼しい顔して人にドクペを盛る妖怪とか、出会いがしらに針ぶっさしてくる巫女とか、とんでもないヤツばっかりいるんだぞ!」

「それ、本当にスゴいの?」

ため息をはきはき、エリカはハジメを膝立ちに立たせた。鎖のいましめはまったく緩まない。

「ああ、花を育てるしか能のない最強妖怪もいたわね」

ちょうど、幽香が黒羽の怪異によって空から叩き落とされるところだった。黒羽の怪異が引き起こす爆発の余波によって吹き飛ばされた路地裏の世界は絨毯爆撃でも食らったような有様だ。

ハジメの家族は物陰に落ちて、遅れて黒羽の怪異がそこに降り立つ。肉片と血飛沫を見つめて、ハジメはただ舌を噛みしめてそこで何が行われているのかを想像するしかない。

「だいいちあそこは無茶苦茶に強い結界で守られてるってハナシだぜ。蟻一匹潜り込むスキマもない」

「そう。それだけが私の悩みだった。一か月前までは」

頭を撫でられる感触に、ハジメはぞっとした。気付いてしまったのだ。自分の能力がどのようなものであり、何を可能にするものであったのかを。

「ハジメの力で幻想郷を取り囲む大結界に風穴をぶち開ける。そこから先は私達がやるよ。そうすれば晴れてあんたは幽香と一緒に。そうだったのに」

エリカはハジメの表情を見つめた。

「ねえ、いい加減教えて。ハジメは一体何が不満なの？」

ハジメは口の中にたまった泥を吐き捨てる。

「あの、おーちゃんって妖怪。あれ、本当はあんなヤツじゃないんだろ。お前の能力は狂った妖怪が暴れ出さないように押さえつけるだけなんだから」

「だけって失礼な。まーそうだけど」

家族のためならヘタレも臆病も関係なく、ひたすら必死に、弾丸のように突っ走れる。それはハジメもエリカも一緒だ。彼女は必至で、なりふり構わずになつていいるからこそ、幻想郷への侵攻なんてたいそれたことを思いついたのだろう。

「なら、やっぱりお前のやり方は肌に合わない」

本当の本当に、決定的な決別。それを、ようやく口にする。

「俺が好きなのは、俺が好きになつた風見幽香だけだ！」

エリカの眉間に深い皺が刻まれた。

「あんなゾンビにしてたまるかよー！」

その背中にまばゆい輝きを持つ日輪が現れる。大砲に変形した日輪を、エリカの鼻先に突き付けた。

「さよならだ」

収束する致命の光。即座にぶっばなせば、いかなる存在をも一撃で葬り去る——しかし悲しいかな、それはヘタレの宿命か。引き金を任された指先が、ここにきて迷った。

それが命取りだった。

「——ハハ。ははは、ははははっ！ マジなの、ハジメ!？」

爆裂する閃光、そして轟音。

立ち込めた土煙と黄金の炎が吹き散らされた後に現れたものは、愕然としたまま固まるハジメと、鎖に縛られ、あさつての方向に逸らされた大砲の姿だった。

「マジで、あんた、そこまで言うってカンジ？ ゾンビか。確かに！」

苦し紛れの二射目は許されなかった。ハジメの体が宙に浮く。

「だからってそんな簡単に割り切れるのかよー！」

次にハジメの目についたものは巨大なコンクリート塊だった。身

も心も粉々に打ち砕くような衝撃が、全身の骨を打ちのめす。

「あんたはあの女と何か月だ。こちとら三世紀だぞ!？」

打ち捨てられた郵便ポストに激突する段階になって、ようやく自分が恐ろしい怪力によって振り回されていることに思い至る。意識が遠のく。

「ぐああ」

自分の叫びですら、水中で聞くように不鮮明だ。

「まっとうな守護者であることをやめた。誇りも捨てた! 人間としての時間の流れだつて失つて。そこまでするのはおーちゃんが家族だからだ!」

トドメに廃材の山に頭から叩き込まれる。

「……この半世紀でサイアクの出来事が何か分かるか。あいつが正気を失つたことだ」

　　ごうごうと降る雨の中、エリカは肩を抱いて俯いた。

「だけどそれでも、家族は家族だろ」

　　狂いきつた怪異は、未だ幽香をサンドバッグにして遊んでいる。

　　死んだように横たわっていたハジメの指先が小さく火を吐き、エリカは弾かれたように振り向いた。

「その家族がいつまでも苦しむハメになつても?」

　　体のあちこちが絶望的に痛む。骨が折れたか、ヒビが入ったか。片目が腫れ上がって、ロクに見えない。

「一番信頼した相手に自分のあり方を踏みにじられて、一番見られたくない姿をさらして。それでも生きて行かなくちやいけない。本当にそれが、お前らにとってハッピーな選択なのかよ!」

「うるさい。じゃああんたはなんだ。殺すことも生かすこともできないくせに。ウロウロと、ありもしない決断のスキマを探してばかりじゃないか!」

　　ハジメの言葉は実際自分の胸を刺すものであった。が、それ以上に深々と傷を抉られたのはエリカ発したものだつた。

「もういい。黙れよ」

　　再びハジメに巻き付いた鎖は喉笛まで締め上げる。今度こそ死を

覚悟する段になって、エリカが悲鳴を上げた。

「次に会うときは敵同士。たしか、そう言ったものね」

背中に突き立った針を引き抜きながら、エリカは声の出所を探す。更に放たれた針と札が彼女を襲い、その苦痛がハジメを鎖から解き放った。

「ま、いささか狙いがズレちゃったのはご愛嬌だけど」

そして彼女が降り立つと、香に混じってオゾンのおいがした。かつて青年を極限まで追い詰めた相手。幻想郷の守護者は紅白の衣装を強風にはためかせる。

「……やあ、懐かしい顔。ぶしつけに針を刺してくれるあんたは巫女の方、みたいね。あの時に手を下しておけばよかった」

針をすべて抜き捨てて、エリカは凶暴に歯を剥いた。

「ここに来たのは何？ 幻想郷のため？ ユキの仇討ち？」

「じゃあ、ユキはお前が」

「ハジメ」

前に出ようとするハジメを、霊夢の声が押し留めた。

「行って。こいつは私が抑える」

「でも」

「でもは禁止。あんたのしたいことって何。やりたいようにやれ。全部あんたに言ったことよね」

ややあって、ハジメは頷いた。

瓦礫に足を取られながら走っていく後ろ姿を霊夢は見送った。その表情が少女以上の何かになりつつあるように見えるのは、化粧によるものなのだろうか。ともあれ結界が雨粒を弾くのか、目尻に引かれた紅は決してにじまない。

向き直った霊夢の結界を鎖が鞭打ち、スパークがあたりを青々と染めた。霊夢はエリカを睨んだ。

「これが仇討ちなら紫が来てる。ユキはあいつのお気に入りだったから」

「へえ。じゃあ同じ守護者として見るに見かねた、とか」

「それも違う」

宙に舞った霊夢。家屋の壁面に鎖を伸ばして飛び移りながら、エリカが後を追う。攻撃は絶え間なく続き、霊夢は防戦に徹する。

「ここに来たのはただ単にあんたが気に食わないから」

「そう。で、あんたはどんなご高説を垂れてくれるワケ？」

エリカの能力は決して戦闘向きとは言えない。おまけに相手は未知数だ。だから初手から全力で攻める。防御を固めれば固めるだけ、反撃は難しくなる。

「何も。ただあんたをぶちのめす。それだけよ」

結界に走った亀裂めがけて殺到した鎖の群れは、結局届かなかった。

「いつ、たたたたた！ そんなのアリ!？」

再びエリカの悲鳴を引き出したのは、やはり針だった。霊夢が放つたものではない。いつの間にか彼女の回りを公転する光を纏った弾が、自律して攻撃を行っているのだ。

「シキガミってやつ？」

「さあ。私は違う呼び方をしてるけど」

「それは何？」

「球」

おいおいふぎけんなよ。

血で血を洗う戦いの最中で、ついツツコミを入れそうになったエリカの横っ面にその『球』が深々とめり込んだ。

「ほぐうえっ」

固さも重さもなかなかのもの。ちよつとしたデッドボール級の威力はあった。ダメージを感じさせない動きでエリカがそれを掴み取ると、一瞬にして粉碎する。

「ひとっ」

「どうぞ。お替りはいくらでもあるわよ」

高空でエリカは悟った。

足下の廃墟から次々と浮かび上がってくる光球。この巫女は行き当たりばったりで攻撃をしかけてきたのではない。いつからかこの地に支配者であるエリカでも察知できない方法で侵入して、着々と準

備を進めていたのだろう。

「名乗りが遅れたけれど私は博麗霊夢。あんたのお名前は？ 博麗？ それとも？」

「守護者であることを止めた時に姓なんて捨てたわ。もともとあり得ないようなものだったしね」

「そう、残念。ひよつとしたら遠い親戚だったかもしれないのに」

エリカの応戦も手慣れたものだ。死角からの攻撃にすら反応して、次々と光球を叩き落としていく。霊夢は直接手を下さず、見に徹するのみだ。

「やめてよ。あんたと血の繋がりがあんなにぞつとしない。それよりも樂園の素敵な巫女さん。あなたの世界、私の手に委ねてみない？」

「論外ね」

霊夢が目元を険しくする。

「むかつく連中だけど一応は友だちな。一人だってあんたなんかに喰わせてやるもんか」

「その友達がいずれおかしくなったときはあなたの手で葬るんでしょ」

「まあね」

「できっこない」

「ええ。命の保証はないし、仮に無理がうまくいっても私はその先ずっとひとりぼっちの上に廃人でしょうね。だけどやらなきゃいけない」

どこかの太陽からもらい火をしたように、霊夢の瞳も燃えている。ただ、博麗の巫女としての使命に。

「他に誰もできるヤツなんていないから」

霊夢が発した言葉を聞けば、ハジメは微妙な表情をしただろう。それは世界一ツイてない男がスクリーンの中で漏らした呟きだった。

「余裕ないねえ。あんただってチャンスだよ。押し付けられた巫女の役割なんてぶん投げてさ、私やハジメと一緒にガッコをサボったり寄り道でクレープ食べたり。相応の生活ができる」

それはかつて、エリカが心の底から願って、結局届かなかった青春だ。

「勘違いしてるわね。私は決してイヤイヤ巫女をやってるんじゃないの。今まで何度も大変な目に遭ったし、死にそうにもなったけど。一瞬だって『でも』とか『もしかして』を考えたことなんてないわ」
「ッ、あんた……！」

曇りの無い瞳に気圧されたエリカが攻撃の矛先を誤った。結界を打ち砕く鎖は激しく火花を散らしてカスリ、もつれた鎖を引き戻させる暇を与えず霊夢が肉薄する。

「仕方ないな」

しかし手が触れる寸前でエリカが漏らした呟き。

長年の経験で回避に移ったのは正解だった。しかし、完答ではない。ご、と鈍い音を立てて霊夢の結界を電柱が打った。軽自動車が、ビルの破片が、看板が。荒れ狂う嵐の中で踊り、F市中にまき散らされていく。

「惹き寄せることが能力なら、逆もまた然り！」

度重なる衝撃で結界はガタガタだ。力任せに叩き込まれたエリカの蹴りがトドメを刺す。

「ぐうっ、だけ、ど——！」

結界とエリカの右足首が粉々に砕けた。

尚も迫る無数の忘れられた都の忘れられたものたちを前に、霊夢の輪郭がわずかにぼやけた。巨大な給水タンクが彼女の体をすり抜けていく。

「それがあんたの能力ってことか」

霊夢の周囲を、糸玉のように鎖が覆っていった。

「確かに今は無敵の能力かもしれないけどね。絶対にあんたの対処を編み出す。とにかく、今はご退場願おう」

鎖は霊夢を空間自体に縛り付けている。いかに万象から浮くなんていうトンデモ能力の持ち主でもここから抜け出すのは手間だ。切り離された鎖玉は嵐に翻弄され、廃材に叩き付けられ、路地裏の世界から追い出されていく。

「お願いよ」

鎖の隙間から見える青年が、霊夢を見上げている。

「あいつが好きなら、ちゃんと幸せにしてあげてね」

そんな呟きが大嵐の中を無事に通り抜けられるはずがない。それでもハジメは僅かに頷いて、残り数百メートルに迫った二体の妖怪めがけて走り始めた。

「行かせるかよ」

エリカが放った鎖が影のように地を這う。しかし降り注いだ針がすべてを射止めた。

「どいつもこいつもジャマばかりしてくれろ！」

空中を漂う鎖玉が爆砕した。しかし、霊夢の姿はない。鋭い舌打ちを響かせると、エリカはよろよろと立ち上がった。渾身の一撃の代償は高い。

「いつ！——はあ、なんか私、追い詰められてない？」

鎖を使って飛び回りつつ、彼女は着地の度に顔をしかめた。足首は見たくもない状態だ。まったく流れが狂ってきた。もしくは、もともと狂っていたものを正常だと勘違いしていただけなのか。



「ちゅん」

幽香をぶちのめせという命令と、ハジメに身動きさせるといふ命令。

狂った妖怪は自分の拳と幽香の体で掘り進んだクレーターの底から淵に立つ青年を見上げて、反対方向に突っ走る二つの命令どちらを優先すべきかずっと考えていた。

「なあお前、おーちゃん、だったよな」

彼女が膝まで浸かる血だまりからあぶくが吹き上がっている。幽香が、そこにいるのだろうか。

「頼む、そいつは俺の大事な人なんだ。やめてくれないか」

「むり」

背後からエリカが迫っているのは分かる。霊夢は既にこの場にはいない。焦りつつ、それでもハジメはゆっくりと、相手を刺激しない

ようにクレーターの斜面を滑り降りた。

試されている、と思った。

「じゃあ、まずは話をしよう」

ついに黒羽の怪異の傍までやってくると、ハジメは地面に膝をついた。

「おはなし、きかせてくれるの?」

「ああ。喜んで」

「うん。おねがい!」

じやらじやらと鎖を鳴らしながら、彼女は子供のように目を輝かせた。その手が血だまりからすつかり離れているが、幽香は上がってこない。意識を失っているのか、それとも戦うことができないくらいにやられてしまったのか。

赤い水面に不穏な想像をそれ以上掻き立てられないようにして、ハジメはできるだけ簡単な言葉を選んでいく。

「ある妖怪のことだ。花が大好きで、それはそれはきれいなひまわり畑に住んでいるんだけど、みんなそいつを怖がって寄り付かないんだ」

「なんで?」

「そいつは女のクセにめっぽう強い。しかも、畑にやってきたヤツには誰彼かまわず喧嘩をふっかけるもんだから、その悪いウワサは遠くまで広がってしまったんだ」

「ごぼ、と水面に不平を言うように泡が上がった。

「で、こつからがフシギな話。それだけ有名なのに、こいつの過去に関して——ああ、悪かったな。むかしのことを知るヤツは誰もいない。どうしてだと思おう?」

「なんで? どうして?」

「あまりに弱かったのさ。恥ずかしくって、そいつはそのことを知ってるやつを全員畑に埋めちまっただ。そいつは安心した。すべてやり終えた気になっていた」

「こわいねえ。ゲキヤバだねえ」

そのゲキヤバはお前がさつきまで殴っていたヤツなんだぜ、と。場

違いな笑いが喉まで出かかったがなんとか呑み込んだ。遠くから鎖を引き摺る音が聞こえる。どうしてか、エリカはゆっくり歩くことを選んだらしい。

「だけど一っだけそいつは失敗したのさ。むかしを知っているヤツを一人だけ逃がしてしまっただ。しかも意外なヤツ」

「誰？ 誰？」

雨でぬれた指はパチンといい音を響かせた。

そうして親指で自分を指してみると、黒羽の怪異は目を真ん丸に見開いて、オーバーなまでに驚いてみせる。

「で、でもそいつにしたらキミもあぶないんだよね」

「もちろん。だからここからの話はほかの誰にもしちやいけない。いか？」

反応は分かり切っていたので、ハジメは淡々と語り始めた。

大妖怪風見幽香。過ぎ去ってしまった過去も、失敗も、失ったたくさんのもものも、こんなたわけた作り話で取り戻せるものではないだろうが。

「どこからやってきたのか誰も知らない。それは当然なんだ。幽香、ああ、そう。ソイツゆうかっていうんだけど、もともとは妖怪じゃなかった」

「じゃあゆうかはなんだったの？ ヒト？ オニ？」

「鬼は妖怪じゃないのか」

「わかんないけど」

「……………ともあれ、そいつは、あー、そうだな。妖精だった。花の妖精。じょうろもってヘンな三角帽被って、ウフフオホホってやつ。で、なんか頭に花咲いちやったりする。とにかく優しく、花畑にやってくる奴は誰でももてなした。それがどうして、あんなに心の底が捻じ曲がり切つたいじめっ子に変わってしまったんだろう。マジ、本当に」

いやに感情的になったハジメの語り口に、おーちゃんが首を傾げる。

「すまん。で、その原因は花だったんだ」

「おはながスキなのにな？」

「好きだから。家族のように愛していたからこそさ。もちろん人も好きだったけれど、もっと好きなのはやっぱり花だった。それを摘んで持って帰られる時の気持ちは、おーちゃんにも分かるよな」

「ちゅん」

「二本二本はまだ許した。恋人に贈る花束だと言われれば、まあ、気乗りしないが頷くしかない。だけどそのうち、調子に乗って、その花で小金を稼ぐヤツが現れはじめた」

おそらく知りえない事実はもつと残酷だった。その花束の中に風見幽香自身が巻き込まれることだってあったのかもしれない。拳を握り直して、ハジメはおーちゃんを見据えた。

「しばらくして、その妖精はいなくなった」

「消えちゃった？」

「それこそ真夏の雪みたい。だけどそれからだ。うるさいヤツがいなくなったってんで花を取りに行った連中が戻らなくなったのは」

「まって。あてるから。ようかいになったゆうかがそこにいた。でしょ？」

本当に狂っているのかと疑うほど、今の彼女は理性に満ち溢れた瞳でハジメを見つめてくる。「そうだ」とひねり出すのが精いっぱいだった。

「花は家族だ。だけど、人も好きだ。だからあいつは、まっさきに自分を殺さなきゃいけないかった。昔の、優しい自分を。そうしなきゃ、なりふり構わずになって家族を守れやしなかった」

とんだおとぎ話だな、とハジメは深く息をついた。

「ひまわり畑の一番深いところに、あいつが眠ってる」

ハジメがぱんぱん、と手を打つとしばらく口をぽかん開けっ放しにした後に黒羽の怪異はむくれた。顔が真っ赤で、多分本気で怒っている。

「こんなのかわいいそうなだけだよ。おもしろくなんてないよ」

「そうとは限らないさ。まだちよつとだけ続きがあるんだ。ここからは特に、絶対にバラしちやダメなことだ」

ここが一番困った。紫ですら説明ができなかったことだからだ。絶対に出られる筈のない場所から幽香が踏み出した原因。

「それからしばらくして、奇跡が起こった」

あいまいな言葉にも彼女が真剣に耳を傾けてくれるのがありがたかった。

「あいつは花畑の外に放り出されて、俺と出会った」

「でも、キミはゆうかのことをずっとしていたんでしょ？」

「う。いや、あいつと話したのはそれが初めてだったんだ。オーケー？ ……よし。で、俺はいじめられながらだけど、あいつと一緒に暮らし始めた。最初はイヤだった。毎日叩きのめされる。ヘトヘトになるまで追いかけてまわされる。そんな俺を見て友だちは笑ったし、一生分の恥をあちこちにまき散らした」

また感情的になってきたので、ハジメは頭を何度か叩いた。

「だけど、俺はどんどん幽香のことが好きになっていった」

「どうして？」

「きつと奇跡のせいだ」

思えばここまで、すべてが奇跡の連続の上に成り立ってきた。

「俺はあいつに、もう一度人間を好きになってほしいんだ」

そして、何よりもハジメ自身のことを好きになってほしい。それだけはつくりごとでない、心の底からの願いだ。

「すべてが終わった時、俺はこっそりあのヒマワリ畑に行って、昔のあいつを掘り起こす。そうしてもう大丈夫だって言っちゃれば、あいつは本当に自由になれるんだと思う」

「それから？」

「それからは、これからの話だ。分かるな」

彼女は長らく考え込んだ。

「ゆうかはキミにとってダイジなんだね」

「そう。とつても大事。だから頼む」

両手を地面について、ハジメは水たまりを見つめた。怪異は困ったように、その肩に手を伸ばした。シャツに血がべつとりと塗られたくられる。

「俺とこいつはこれからなんだ。ようやくここから始まるんだ。それを終わらせないでやってくれ」

そこで黒羽の怪異は、ハジメの語る最強の妖怪がどこにいるのかを理解したようだった。ゆっくりと這い進むハジメに彼女は道を譲る。血だまりに手を突っ込んで、ハジメはそれを探り当てた。

現れたのは眠り姫のように目を閉じた幽香。血の玉が滑る白い裸体。それを、掻き抱く。

「ありがとう」

「うん」

ちゅんちゅんと上機嫌に呟いた黒羽の怪異は、しかしすぐに表情を硬くした。振り向かずとも分かる。水面に、杖をついたその姿が映っている。

「ハジメ！」

時間切れか。

胸をぐるりとまわっていく鎖を見つめて、ハジメは幽香を下ろした。あと一步、いや二歩半ほど足りなかったな。



「やりなさい」

エリカの命令に、黒羽の怪異は迷うことなく従った。当然だ。彼女を縛る鎖は封印であり、操り人形の糸なのだから。無表情に幽香を解体しはじめた彼女は、それでも迷っているように見えた。

「潰せば潰すほど、壊せば壊すほど存在はあいまいになる。あとはあの妖怪が完全に狂うか、あんたが音を上げるか」

体を切り開かれて、それでも穏やかに幽香は眠っているようだった。

遠くに転がされたハジメは簀巻きのまま考えを巡らせる。ここに至るまでの数か月間が早送りのように脳裏に再生され、そしてこのクレーターへと行き着く。

「できることならあなたに殺されたかったわ」

記憶に黒々と焼きついた言葉を反芻すると、しぜんそれは口に出た。エリカが心配そうに顔を覗き込んだ。

「ハジメ、辛いでしようけどあなたが正気を失うのは許されないわ」
そうじゃない。まだ何かある。

「お前はずっと怖がつていたな。俺ができなくなることを。だから、お前、事あるごとに聞こえないフリとか脅しとかかけて、ずっと」
ぶつぶつと呟くうちにそれは形になっていった。

なんの抵抗もできずにひねりつぶされていったその理由。よく考えれば、霊夢や紫の能力ですら及ばなくなった彼女を、力づくでねじ伏せるなんて不可能なことだったのだ。

「……………そういうことか」

この脅迫は、何よりも効果的だった。

リンゴを口に詰め込まれることよりも、目つぶしされることよりも。

風見幽香が自分自身を材料にした脅迫は、いかなへタレのハジメでも有無を言わせずその決断に至らせるくらいのがあった。そうと決まれば、せねばなるまい。

「おい幽香、どうせ聞こえてるんだろー！」

「ムダよ」

冷静に返すエリカを無視してハジメは叫び続ける。

幽香が短気だなんて、間違いもいところだ。むしろとんでもなく我慢強かった。ハジメからたった一言を絞り出すためだけに、ここまですっと耐え続けたのだ。

「約束、したもんな。やるって言ったもんな。お前の運命には、俺が責任とってやる。だから、だから——！」

「おーちゃん、やれー！」

力づくで幽香の胸郭をこじ開けようと両腕を突っ込んだまま、黒羽の怪異は動きを止めていた。びくともしない。その唇に、幽香の指が触れた。

「ちゅん？」

「静かに。今、いいところでしょう？」

ハジメには見えないし聞こえない。喉が壊れるほど大きな声で、雨と風とを打ちのめす。太陽とはそういうものだ。

「だから、お前を殺しているのは俺だけだろ？」
清冽な風が吹き抜け、白いものが宙を舞った。

◆◆◆
「決まりです。プランBでいきます」

モニターがホワイトアウトした瞬間、万場は席を立っていた。今井が肩をすくめる。

「尚早だな」

「いいえ。この戦いの行く末は見えました。残るのはろ号とは号。車を回して、所定の位置に人員を配置してください。行きましょう」

「今井さん」

寺田は何度か振り返りながらも万場が続いて輸送車を後にした。一步出れば駅前のスクランブル交差点を埋め尽くす特殊車両のエンジンの唸りと、灯光器の明りが台風の中に四方八方から押し寄せてくる。

観音開きの扉が閉まると、静けさに今井だけが取り残された。

「きみは、眩しいところにいるんだなあ」

モニターを撫ぜながら今井は呟いた。

回復し始めた映像を一目見て、巨大な花がそこに咲いたのではと目を疑う。それは動いていた。鶴見ハジメへむけて、ゆっくりと。

荒い画像越しには青年の顔をつぶさにかがいがい知ることではできない。彼の背中に火が灯る。それも、花のようだ。

「確かに、あれはキミの言うとおりの日様だったのかもしれないな」

こんな薄暗い場所で繰り広げられるはかりごととは無縁の、男の戦い。自分の中で錆びつきつあつた何かを軋みを上げて動き出すのを感じながら、今井もその場を後にした。

「負けるなよ、鶴見くん。俺も負けない」

やることは決まった。懐の冷たく固い感触を確かめて、彼は小さくうなずく。

◆◆◆

エリカが狂乱した。

「なんだよ。お前、一体何なんだよ！」

戦況は一転した。覆りようもなく。

両膝から先を失った黒羽の怪異が、黒煙を吹きながら懸命に立ち上がろうとする。ここまでたった一撃。幽香の放った閃光がかすただけだ。

「ああ、ハジメ。ハジメ」

クレーターの底から吹き上がった無数の白いものは花卉ではない。羽だ。白い羽の出所は、そこでゆらりと立ち上がった大妖怪の背中に生えた三対の翼だ。澄み切った血の瞳。ウエーブのかかった髪は緑の炎さながらで、彼女の腰まで伸びきっていた。

「私、幸せすぎて死んじゃいそうよ」

これが、大妖怪風見幽香の真の姿なのだろう。

ハジメは彼女に見つめられて体温が上がるのを感じた。恐ろしくて、美しく、体の芯を直接撫でられるような未体験の感覚。心の底から彼女におびえて、惚れ直した。

「おーちゃんー」

我に返ったエリカがあたりを探すが、黒羽の怪異は姿を消していた。代わりに彼女の頭上から、その一部がぼろぼろと降り注ぐ。首と胴だけになった彼女は自分の身に何が起こっているのかも理解できないままに泣き喚いていた。

それをボールのように彼方に蹴り飛ばして、幽香は翼を揺らして歩いていく。その背中に鎖の狙いをつけ、そしてついぞエリカは攻撃を実行できなかった。

「エリカ、終わりだ」

「なん、なのよ」

首筋に突き付けられた指先はハジメのものだ。すっと腰を落とした彼女を、ハジメが受け止める。

「あんだ、そんなの、妖怪ですらない」

返事代わりに幽香は黒羽の怪異を切り刻んでいく。その様は鬼神のようだ。

「あなたの能力なんてカスみたいなものじゃない。どうして、何があなたをそこまで強くしたの？」

「あいつはハナから俺たちを騙っていたのさ」

「騙すって?」

「俺を脅していたのさ。ただ俺があいつを殺すっていう確認を取るためだけに」

エリカの表情がみるみる間に歪んでいった。

「このッ! ……役者がああああ!」

「ええ。得意よ。歌うことも、踊ることも、演じることも」

執拗すぎる追い打ちをかけながら、幽香はうそぶいた。

「だって、狂っていてもできるでしょう?」

もはや再生の気配すらなくなった黒羽の怪異は、幽香につまみあげられてだらりと揺れた。つまらなそうにする幽香の前で、むき出しの頭蓋骨に埋まった眼球がおびえたように揺れている。悲鳴を上げたのだろうか、顎はもうなかった。

両眼窩に指を突っ込んだ幽香が、それを無理やり引き裂こうとした段になって、その背中にハジメの声がかかった。

「もういい。それ以上は殺しちまう」

「殺す気でやっているもの」

現代最強の怪異を簡単にあしらって見せた手は、しかしハジメの言葉を待つ間ずっと迷っていた。

「そいつが死ぬと千晃が悲しむ」

「あの子に必要なのはこんな友達じゃない」

「なあ教えろ、どうしてそこまでこいつが絡むとイラつくんだ。もういいだろ。こいつ、きつと話せば分かる子だって」

「この、お人よし!」

もはや黒羽すら失ったおーちゃんを投げ捨てて、幽香はハジメに詰め寄る。

「分らない!?! こいつと、あいつは、私達の明日の姿よ!」

我を忘れておーちゃんに駆け寄るエリカを冷ややかに見下ろして、幽香は声を張り上げた。ここまで彼女が取り乱す姿を見たのはいつぶりだろうか。にやりと笑ったハジメを見て、幽香は一層激情を募らせた。

「あなたがへたれつづけて、妥協を繰り返せばきつとこうなる。私はイヤ。こんな姿、あなたに見せたくない」

「お前」

不意にハジメの手が肩に触れて、幽香の体がびくんとはねた。それでも無理やり手を掴んで連れ戻すと、彼は脱いだシャツを幽香に掛けていく、

「……なんにせよ、そいつはもういい。許してやれ」

「本当お人よしのへたれ。前にそういつて手心加えて首をへし折られそうになったのはだれだったかしら。思い出せそうなのよねえ。確か鶴見、なんだったかしら」

「あーはいはい俺だよ悪いか!?!」

ハジメに何を言っても無駄と判断してか、幽香はエリカを蹴って除けると、おーちゃんの頭に足をかけた。このまま踏み潰せば、すべてが終わる。それだけは止めなければならぬとハジメは思った。残酷な妖怪に彼女を戻すわけにはいかない。

「少なくとも俺は、なんだかんだで優しいあんたに惚れたんだぜ」

一か八かで口を開くと、思いのほか効果があったようだった。

「ほっ——ふ、ふんだ。そんなこと言ってごまかそうだったってそうはいかないわ。あなた、また適当に嘘をついて私をやり込めたと思っているでしょう」

「ただ、あんたがおかしくなるまで悪あがきはさせてもらうってだけさ」

右手はポケットの中を探す。左手は幽香の手を取る。

「きつと手遅れじゃない。一緒に助かる手段を探そう。それが見つからなかったら責任もってあんたを殺してやるさ。だから」

そうしてすんなりと見つかったそれが、すんなりと幽香の左手、薬指に収まると、ハジメは照れ臭そうに笑った。言うべきことを、ようやく言える。

「だから、それまでは責任もってあんたを愛したいんだ」

ひまわりの指輪を見つめる内に幽香の頬が徐々に赤くなっていた。それは確かに血の色だが、ずっと穏やかなものだ。

「そ、そんな。いきなりこんなの。あなた、やっぱりずるい」

「ああズルいとも。その何が悪いんだ」

顔を真つ赤にした幽香は、そこでようやくやく惜しげもなく裸体を晒していたことに思い至ったようだ。わたわたとシャツに袖を通し始める姿を見て、ハジメは呆れたように笑う。ややあつて、幽香もくすくすと笑い始めた。

「もしもーし。降参したいんですけどー」

千切れたドレスの布地を白旗代わりに振りながら、すっかり忘れていたエリカがげんなりとした顔で声を上げた。

第二十話『歩み続ける限り』おわり

11 『朝の町で』

降参。

エリカは確かにそう言った。

「そんなお願いを聞いてもらえらると思っっているの？」

いつきに伸びた髪をうざったそうに肩にかき上げながら幽香はエリカの胸ぐらを掴んで立たせた。折れた足の痛み顔に顔をしかめながらも、エリカは幽香の魔性をまっすぐ見つめ返した。

「とうより『抵抗しないからせめて痛まないように殺してくれ』をできるだけ情けなく言った感じかな。あんたらとこれ以上戦ってもムダに痛い思いするだけだし」

「潔いわね」

エリカの手から白旗ならぬ青旗がするりと抜けて水たまりに泳いだ。

映し出すのは雲間の茜色。F市に縛り付けられていた低気圧は、さっさとこの町に見切りをつけるかと散り散りに消える運命を選んだらしい。

「ここどこいつを殺してもどうにもならない」

肩にかかったハジメの手を、今度ばかりは幽香も振り払う。

「散々ぶん殴られてムカついてんのかもしんないけど、そりや俺も一緒だ。ただー」

「そうじゃない。逃がしたところで、この子たちに救いがあると思っっているの？」

炎の髪を翻すと、幽香は左手でおーちゃんの頭を掴んだ。

その白い指も、指輪も、誰かの血で汚させるわけにはいかないと思っった。

「エリカたちを殺せばお前は後悔する」

「誰が」

しつこいと、くどいと言いつ返しやりたかった。それでも幽香は再び迷った。

「ちゅん」

黒羽の怪異はその手に痛めつけられたことも忘れて、遊んでもらえると勘違いしたようだ。そこに情が沸いたワケではない。かわいそうなんて感情に引きずられていたら、きつと幽香はハジメと出会うこともなかった。

「やっぱりお前は変わったよ。そんなお前に重荷を背負わせたくないんだ」

どうして今日のハジメの言葉はいちいち胸を打つのだろうか。

「楽しいとか嬉しいとかよく言うようになったし。ニコニコ笑うだけじゃなくて、そんな顔もするようになったし。俺は、そんなお前がますます好きになった」

「気安く言うようになったわね」

ぺたりと幽香は自分の顔を触ってみた。細い指が目元からこわばった頬を滑り、固く結ばれた唇をなぞる。間違いない。風見幽香は弱くなった。

「こんなんじゃ、何も守れやしないじゃない」

「最強なんて名前はもうお前には要らない。お前が弱くたって全然それで構わない。今度は家族がお前を守る番だ」

「ハジメ、私」

「その気持はありがたいんだけどさ」

瓦礫にもたれて座り込んだまま、エリカは倦みきった目で朝の空に浮かぶ月を眺めた。

「その女の言うとおりのだ。私達は完全に手詰まり。エサも、エサ場も失った」

「お前も少しは頭を冷やせよ。まだやれることはあるはずだ」

「自分でぞつとすらくらい落ち着いてるよ。ただ、私はけっこう疲れちゃったってだけで」

窺うような幽香の視線を、ハジメは横顔に感じた。長く考えて、ハジメは幽香にすべてを託すことにした。

「そう……………じゃあ、決まりね」

ハジメからこれ以上言えることは何もない。ただただ黙って見守る。はじめて、彼は幽香を試そうとしていた。

「あ、う」

頭を握る手に加わる力がにわかに強まったのを感じて、おーちゃんが嫌がる。エリカは彼女の最期を見届けようと、重い頭をもたげた。

「あなたの言ってくれたことは覚えてるよ」

絶望の毎日で差し伸べられたそれは、まさに救いの手だったのだ。

「ずっと歩み続ける限り、どんな理不尽とでも渡り合える。おかげでここまでやってこることができた」

砂利を握りしめたエリカの掌が血を滲ませていた。

「でも、今回ばかりはダメっぽいね。残念だね——織鷹オルガン」

ばん、と衝撃波がハジメの頬を打った。

「……やりやがったな」

結局幽香を呪縛から解き放つてやることはできなかったのだ。

悲痛な表情で幽香の手元へと恐る恐る目を向けたハジメは、だがそこで割れて潰れているだろう黒羽の怪異の頭を見つけることはできなかった。

「違うわ。あの子、どこへ行ったの？」

頭皮ごと抜け落ちた髪の毛の束を離して、幽香は灰色の残骸が敷き詰められた廃墟を見渡す。そして、ついにそれを見つけた。数十メートル彼方に佇む黒羽の怪異を。

「あいつ何やってんだ」

彼女は奇妙な構えで、奇妙なものを手にしていた。

それでも形容しがたい凄味があった。ほとんど呆けた『おーちゃん』ではない何者かがその体を操っているようでもあった。

——ありやヤバイ。

彼女が体を浅く沈め、獲物を構える。張りつめていく空気が、たった一言をハジメが呟くことすら許さなかった。

きつと朝の風にまじる小雨を凌ごうと錆びついて曲がったビニール傘を手にしたわけではないのだろう。狂気の最中に消えゆく記憶の残り香を辿り、何千何万と繰り返した動きをなぞっているのだ。

ただの鉄くずが、この瞬間氷のような刀に見える。

「織鷹。そう。それが、あなたの名前だったのね」

赤い視線と交錯するのは冷ややかな光を宿した澄んだ瞳だ。

殺気が爆発し空気が裂けた。光すら断ち切る一閃が宙に銀の軌跡を描く。ずどん、と大地が震える。

「あなたがもしマトモなままで」

懐に飛び込んできた怪異の黒髪を、幽香は残念そうに撫でた。

「マトモな得物を渡されて、私と戦ったとしたら——きつと、私は無事では済まなかったでしょうね」

おーちゃんはまどろんだ瞳で、幽香の首筋に当たったまま折れた傘を不思議そうに見つめていた。

どうして自分がこんなガラクタを手に、こんな場所にいるのか。全く覚えていないし理解もできないままに。



束の間、誰もが動くことを忘れていた。

在りし日の面影を一瞬だけ取り戻した相棒。あの一閃は、本当の本当に、彼女からの最後の別れだったのだろう。

「さよなら、織鴈」

まるで探せば遠ざかる背中が見えるとしても言うように、エリカは明け方の空に視線を走らせた。我知らずこぼしていた涙を拭って、エリカは静かに立ち上がった。

「折角だからもうちよつとだけ、歩いてみよっか」

折れた足では遠くへはいけないが。それでも、誰かの背中を押してやることはできる。

「今度は私が頑張ってみるからさ」

傷だらけの右腕を持ち上げる。それが指先から、じやらりと冷たい音を立ててほじめていく。地面を這って迫った鎖に、いち早く反応したのは幽香だった。

「ハジメー」

足下を払われる寸前のハジメを抱きかかえた幽香が、赤い視線を走らせる。

迸った閃光がエリカの体を斜に切り裂いた。傷口から無数の鎖が零れ落ち、蛇のようのにたくりながら地面の奥深くへと潜り込んでい

く。

「行け」

エリカの頬は、血の色を失っている。

「行け、おーちゃん。あんたの好きなように歩き続けろ。私は、ここでずっとあんたを見ていてあげるから」

地中からぶちんと何か千切れるような音がして、不気味な地響きが路地裏の世界を揺るがした。

「ちゅん」

驚いた黒羽の怪異が体をのけぞらせる。彼女を縛り付けていた鎖はほどけて地面に落ちる傍から崩れて消えた。おずおずと明け方の空を仰いだ彼女の背中で翼が開く。

「逃がすとも?」

「させないわッ!」

半死の体に鞭打って立ち上がったエリカが、織鴈の背中に伸びた幽香の腕を鎖で絡めた。邪険に振り払われるだけで鎖は千切れ、エリカは引き倒されたが。それでも織鴈には十分すぎる時間稼ぎだった。既に解き放たれた狂気の怪異は飛び去った後だった。

「サイテーっしょ、私。ホント、守護者の風上にも置けない」

うつぶせに倒れたままのエリカがくつくつと笑い交じりに呟いた。

揺れはこの間も激しさを増し続け、ついに真下で地面が陥没すると、彼女はほどけかけの右腕で辛うじて穴の淵にぶら下がった。

「逃げた方がいいよ。ここはじきに消えてなくなる。忘れられたものたちの世界が、本当に忘れられる時が来たんだ」

「待つてろ、今行く!」

ハジメを阻むように地面がぼこぼこ崩れた。その下には何も無い。ただ真つ黒な虚無が口をあけているだけだ。

「幽香、頼む。力を貸してくれ」

必死の願いにも、三対の翼を持つ大妖怪はつんとそっぽを向いただけだ。

「クソ、この!」

すり鉢のように落ちくぼんでいく地形を、ハジメは苦勞しながら下

り始めた。何度も足を取られ、いきなり崩落する地面に脂汗を絞る。たった数メートルが、死ぬほどもどかしい。

その様子に呆れながら、エリカがわずかに顔を上げた。

「そういえばあいつ、泣くんだ、ユキ。ごめんって。自分が食べられてるのに」

めそめそと。『俺にもっと力があつて、もっと早くいろんなことに気づいていれば、こんな風に何もかもぶち壊しにせずに済んだのにと。』

「おーちゃんはしょっぱいの嫌いだから大分残しちゃつてさ。私もムリヤリ喰わせればいいのに、なんでかな。できなかつた」

むき出しのパイプを踏んでコケたハジメの無様を最後っ屁がわりに笑つてやつて、エリカは腕を離れた。

「結局いらなくて捨てちゃつた」

降り注ぐ瓦礫に何度も体を打たれながら、エリカは虚無に吞まれていった。

「エリ——ッ」

間一髪で腕を伸ばし損ねたハジメの眼前に広がるのは闇だけだった。

ハジメの叫びをも呑み込んだ虚無に危うく落ちる寸前で彼の襟首をふん捕まえた細い手が、その体を後方へと放る。

「あだあつー」

尻から着地して、ハジメは地面を転げた。

シクシク痛む古傷をさすりさすり虚無へと落ちくぼむ穴の中心に目を向けると、巨大な翼を広げた幽香が静かに浮いていた。

「必死のあなた、とつても可愛かつたわよ」

「なっ、なにおう」

「だから特別。その必死さに免じてあの子を助けてあげる」

イタズラっぽい微笑みが、嘘じゃないわと語っている。

「あ、ありがとう」

そうと決まれば長居する必要はない。きっと、エリカは助かる。それでも幽香に背を向けたハジメは後ろ髪を惹かれる思いだった。

「それじゃ、また後で」

「あ、ああ。家で待つてる。風呂、沸かしとくよ。その方がいいよな？」

「ええ。今日はだいたい汚れちゃったわね」

結局必死で伝えた思いも、渡した指輪も。幽香の返事をうやむやにしたままこの場を去ることが味気なかったし、口惜しい。

「ところで、ハジメは食べたいものってあるかしら」

「え」

今まさに駆けだそうとして、背後の幽香が放ったのは意外な言葉だった。

「この後ゆっくり、二人でお酒でも飲みながら話しましょう。これからのこと、私達のこと。時間はたっぷりあるのだから」

彼女の掲げた手に光るのは銀の指輪。

「あなたを信じるわ」

胸がゆっくりと熱を取り戻していく。ハジメは我知らず、頬を緩めていた。

「ああ。それじゃ、あんたの作ったハンバーグが食べたいかな。煮込みハンバーグ。前に食べたやつ」

「分かった。楽しみにしていて」

崩れ落ちる地面と建物を縫って駆けだすハジメの背後で、翼を畳んだ幽香が大穴の底めがけて真つ逆さまに落ちていく。

一晩中走り回って限界まで痛めつけられたにも関わらず、ハジメの体は嘘のように軽かった。気をつけないと、本当に体が浮いてしまいうそうだ。

「ははっ」

倒れる電柱を避ける。斜面を転がってきたゴミ箱を飛び越え、立ちふさがる塀を撃ち抜く。降り注ぐガラス片を炎の盾で受け止め、傾いたビルの壁面をよじ登って。

「なんとかかなりそうだな」

息を荒げながら呟くと、現実感を増した幸せで胸がはちきれそうだった。

「長かった」

ここまで本当に長かった。幽香を助ける方法は結局見つからなかったが、希望を見出すことはできた。

帰ったらまずはたっぷり寝よう。千晁にお菓子を買ってやろう。父の車を洗ってやろう。エリカは一発ぶん殴って許してやって、霊夢に札を言わなければ。雪之丞を探して紫を元気づけて。夜になったらこっそり杏奈に電話を掛けてみよう。

それから幽香と話そう。もう胸を張って恋人と言えるようになったんだからイロイロしてみたい。少しくらいエロエロするのも今なら許してくれるかもしれない。

崩れ落ちる地面がハジメを追う。青年はそれこそ風のように駆けた。曲がりくねった路地をぶち抜いて一直線に走り抜けると、ついに出口の光明が見えてくる。それは日常の光だ。

無数の当たり前があのように待っている。その幸せの中で、鶴見ハジメは願いを叶えるのだ。

「うわっ」

その輝きに目を奪われていると、唐突に地面の感覚が消えた。

ひんやりとした奈落に落ち込みながら不思議と気持ちは落ち着いている。幽香と舞った冬の夜空を思い出す。

「やれるか？」

あんな風に踊ることはまだできないけれど。

背後の日輪が一層激しく輝いて、黄金の爆発を起こす。暴力的なまでの加速を感じて、ハジメは穴を飛び出た自分の体が天高く舞っていることに気付いた。

「あわわわわっ、ヤバヤバヤバー！」

しかし空を飛べるようになったことを喜ぶヒマなんてない。背中に戦闘機のエンジンでもくくりつけられた気分だ。ちよつとスピードを出そうとするだけで空気が固く感じ程の速度で押し出される。路地の壁にでも触れようものなら一瞬でもみじおろしである。

手足をばたつかせ、懸命に軌道修正を行い、そしてなんとかコツがつかめる頃。ハジメは大の字に転じて商店街の天井を見つめている

ことに気付いたのだった。

「……………次は広いところで飛びたいぞ」

振り返ってみると、そこには異様な雰囲気醸し出す路地の入口は存在しない。ただ、反対側の出口が見えるだけだ。

「幽香、無事だよな？」

とにかく一度家に帰ろう。ハジメは商店街を抜け、大路へと出る。近づいてくる低いエンジン音に、何気なく顔を向けた。

瞬間、見えたものは装甲車の分厚いフロントだった。

「がっ」

それは全くの不意打ちだった。

完全に身も心も緩みきったところにとんでもない衝撃をぶち込まれた。鼻血を吹いて吹き飛びながら、自分が久しぶりに自動車事故に遭ったことを悟る。それも、ただのクルマではない。

「あっ、痛え……………あ」

受け身もとれず、勢いのままにアスファルトをごろごろ転がった。痛いなんてもんじゃない。重い。関節という関節に鉛をくくりつけられたように、体が言うことを聞かない。

「僕たちを覚えていますか、鶴見くん」

そのひきつった顔。大理石のような肌。自分を『僕たち』と呼ぶスーツの大男。忘れてくても忘れられない、その怪物のような容姿が黒塗りの車から窮屈に畳んでいた体を伸ばして現れるにしたがって、この事故がまったくの偶然ではないことをハジメは悟る。

その後にはわらわらと続く防護服姿の男たちが、無数の銃口をハジメの頭に向けている。たった一人にやりすぎだろと呆れて笑いたくなくなるほど盛大な歓迎だった。自分のうかつさに腹を立てていなければ、本当に笑っていたかもしれない。

「きみに、お願いをしに来ました」

その一言を最後に、彼の意識は闇に呑まれた。

三月編エピローグ『朝の町で』おわり

ズタボロツギハギ4月馬鹿

1 『幻葬（上）』

ボロは着てても、というのとは少し違うかもしれないが。

みすぼらしい恰好で駅から住宅街まで歩くのはそれほど気分の悪い事ではなかった。注目を集めるのはもとより好きだし、なにより今日は気分がいい。

「うふふっ」

大通りには既に相当な数の野次馬がくりだし、たった一夜にして様相を変えた町の様子に目を奪われていた。

彼らが携帯やカメラのレンズを向ける先では錆の浮いた丸ポストが郵便局の前にタケノコのように突き立ち、ビルの上でカカシ達が黒ずんだ顔を揺らして通りを睥睨している。木製の電柱がようやく復旧した送電網をズタズタに破壊し——エリカによって町中にバラ撒かれたガラクタたちは、かつての居場所を再び占拠しようと躍起になっていた。

混乱のただ中を行く幽香が身に付けたものは男物のシャツ一枚。股下十数センチもない裾を春の風に危うくひらめかせて、しばらくぶりにスキップを試してみる。異様な美人の通り道いた誰もが、自然と道を譲り、口をあめぐりと空けて彼女を見送る。

「どうしましょう。はしたないわ」

と、彼女自身浮かれっぷりに呆れるところであるが、その細い足は至って正直に大嵐に洗われたアスファルトを踏む。とたんに緑のものによると舗装を突き破って顔を出す。通り過ぎる家々の庭先では彼女の機嫌に浮かされた花々がてんで匂もバラバラに芽吹き、つぼみを弾けさせた。町中に花の香りが広がっていく。彗星の後塵のように、彼女の後に花卉の尾が続く。

こうして鶴見家のお嬢さんには露出癖があるという噂、というか事実がまことしやかにささやかれることになるのだが、それはまた別の話。

「お帰りおねえちゃんあぁあぁあ!!」

問題はその後だった。

「どうしたの。いきなり大声なんて出しちゃって?」

玄関を開けるなり幽香に飛びつこうとした千晃は顎が外れんばかりに絶叫して、結局乱暴に彼女の背中をせっついて早く家に入るように促した。

「それはダメーっ! よくないよ! 言い訳できないくらいにヘンタイだよ!」

「そうね。私はどうやら痴女だったみたいだわ」

ぜいぜいと肩で息をする千晃にあっさり認めさせて、幽香は玄関先の靴を数える。

「そういうの最近……流行ってるの?」

「なにが?」

「す、すとリーカーってヤツ。おーちゃんとか、あとおーちゃんとか……」

「私と、晩酌のときのお父さんもね。それで、ハジメはまだ帰っていないの?」

千晃が頷くと、幽香はそのまま踵を返して出て行くこうとする。

「待った待った待った。そのカツコで行かないでよね!」

ちよつとくらい落ち着きなよ、と義理の妹はまたまた幽香の背中を押して無理やり家に上げるのだった。



開け放たれた窓際でカーテンが舞い上がる。台風後のさわやかな春風に混じって、甘いにおいが漂った。結局風呂にまで入った幽香は膝を抱えてぼんやりしながら、そういえば千晃がエプロン姿だったことを思い出す。

「ありがとう。もしかして、仕上げはしてくれたのかしら?」

「うん。あとはおねえちゃんのチエック待ちってカンジ」

千晃が持ってきた赤いワンピースを身に付けると、幽香は戸棚を開けてハサミを探す。

「もうおねえちゃんが何しようと思ってる気がなかったけど。その髪、ど

うしたの?」

「伸びたわ」

「一晩で?」

「ええ。不思議なこともあるものね」

戸棚のガラス戸に映る像を頼りに髪を房に持つて、そのままじよつきんと切り落とそうとする。あまりに乱暴というか雑な始末にあんぐり口をあけていた千晃が、ガラス戸の中でいちわるに笑った。

「にしてもあにき、悲しむだろうなあ」

まさに銀緑の海に斬り込もうとしたハサミが、ピタリと止まった。

「ハジメが、悲しむ?」

「確かあいつが中学のころ、髪長い子が好きだったんだよね。なんだったっけな。すつごいかわいい子で。名前はキヨ、キヨー……?」
ま、結局コクハクなんてできないまま終わったんだけどさ」

「その子は今どこに?」

「遠くの町に引っ越したって聞いたけど——おねえちゃん、気になるの?」

幽香はしばらくそのままのポーズで考え込んでいたようだった。

ややあって、リビングのソファまで歩いていくと、無言で千晃のヘアゴムを拾い上げた。それをまるで家臣のようにかしずいた千晃が仰々しく受け取る。

「千晃、結ってちょうだい」

「かしこまりー! おさげがいい? 三つ編み? ぽにー? ついで? なんでもこい!」

提案しておいて、千晃は既に幽香の髪を三つ編みの上おさげの刑に処することを決定したらしい。呆れて笑う幽香の膝上に乗っかると、一心不乱にあみあみと手を動かしていく。

「おねえちゃん、いいことあったんでしょ」

「どうしてそう思うの?」

幽香の指にはめられた指輪を見て、千晃は思わず目を細めた。

「左手の薬指とか。腹が立つくらいあにきは大胆だ」

「そうね」

それからしばらく会話は無かった。

ふと幽香が目を上げて庭を確かめると、あれだけの嵐をしぶとく生き残った庭木と花のつぼみたちが水滴を輝かせていた。

「花は強いわねえ」

千晃は手を休めて幽香の視線を追って、頷いた。

「そういうえば町、見た？ ニュースで知ったんだけど、どっかの処理場からすごい数のゴミが吹き飛ばされて大変って」

「そうだったかしら。浮かれていてよくわからなかったのだけど」

「だろうねえ」

それから作業に戻っていった千晃の頭に、ふと手を置いてみたい衝動に幽香は駆られた。今日の彼女は少し、何かが違う気がしていた。

「わわっ、どうしたの？」

「ただ幸せを噛みしめてるだけよ。続けて」

「あにきのオオゲサなところ、うつつちゃった？」

失礼な物言いにチョップでもお見舞いしてやろうかと一度は浮かせた手を、幽香は千晃の頭に戻した。確かにそうなのかもしれない。風見幽香の一部を、彼はまんまと殺すことに成功したのだ。

「私は、ここにいていいのね」

ハジメと一緒に理不尽と戦うと決めた。最後まで戦って、それでダメならハジメがすべてを終わらせてくれる。口の中で彼の言葉を繰り返している、終わったよと千晃が鏡を差し出した。

「あ、あら」

それを覗き込んで、幽香は思わず声を上げていた。

「ちよつと少女趣味すぎるわよ」

百年たっても二百年たっても変わらなかった容姿が、ワンピースも相まって、ひとまわり若返ってしまったような気分になる。鏡に映るおさげ髪の誰かさんの頬がどんどん染まっていた。

「待った。解いちやダメー！」

衝動的に髪留めへと伸ばした幽香の手を千晃が捕まえた。

「ど、どうして」

「今日は特別な日でしょ。クソあにきがドギマギするところ見たい

じゃん。それに来て！」

千晃に手を引つ張られて廊下を渡る。

すぐ前で揺れる千晃の頭を見ながら、幽香は先ほど彼女の頭に手を置いた時からの疑問を口にした。

「そういえばあなた、背、伸びたかしら」

「え、なに？」

「ふふ。なんでもないわ」

こうして義理の妹に手を引かれるというのも新鮮な経験だった。彼女が床板を軋ませて台所に近づくにつれて、甘いにおいは強くなる。

「おどろけ、おねえちゃん！」

ドアを開けた瞬間、それが目に飛び込んできた。

飛び散ったクリームとか、開いたままの料理本とか、流しを占拠する洗い物とか。そして何より台に載せられ、完成したそれを見つけた瞬間、

「どう、私の最高傑作！」

手を広げてそれを指し示す千晃の前で、幽香は鳩が豆鉄砲くらったような顔でぼかんと立ち尽くした。それくらいの衝撃だった。

「け、けっさくなんです、よ？」

見慣れないおねえちゃんの様子に千晃も段々不安になってくる。

「いや、その、……片づけは、少し頑張んなきゃだけど、わっ!」

「千晃」

幽香に抱きしめられたまま、千晃目をぱちくりさせていた。

「な、なにコレ。もしかして大失敗とか!？」

「いいえ。あなたが一人でここまで出来た。私は感動しているのよ」

私の手はもう必要ないわね、と。幽香はシンクに突っ込まれたボウルを照れ隠しに拾い上げながらも少しだけ寂しそうに付け加えた。

「もうクソあにきのトモダチだって大体呼んだし。しばらくすれば来るかな。ただ、何人か連絡つかないのがいて」

意味ありげな千晃の視線に、幽香は少しだけ表情を曇らせた。

「エリカは来れないわ」

「……………ケンカ、しっぱなし?」

「まあ、そんなところね」

感ずるところはあったようで、千晃もそれ以上追求しようとはしなかった。

「そうだ。それとね、おねえちゃん」

千晃は軽くつま先立ちして幽香の額にキスをした。

「私がここまでできたのも、あにきと向き合う気になれたのも、全部おねえちゃんのおかげ。だからそんな悲しそうな顔しないで?」

「だからこれは」

頑張っていびつな微笑みを造りながら、幽香は改めて千晃を抱きしめた。

「うれしい、だけよ」

「ん。じゃあ、おねえちゃん。すつごく名残惜しいけど、あにきを迎えに行ってきたくれる? あいつ探すの、得意でしょ?」

「確かにね」

苦笑して幽香は玄関先でパンプスをつつかけた。髪に手を伸ばしかけて、背後から千晃の無言の圧力を感じて肩をすくめながらドアを開ける。日差しがまぶしい。今日はきつと、いい日になるだろう。

「千晃、それじゃ」

「おねえちゃん、アレ、なんだろう」

リビングのドアを開けたままの姿勢で、千晃は庭を見つめていた。彼女の表情が、見る間にこわばっていく。

「うわ、やっぱり流行ってんじゃんかよクソ!」

スリッパを脱ぎ捨ててドタバタと駆けこんでいく千晃を、幽香はほほえましく見送った。

「ケガするわよ」

怪訝に思うところはあったが、幽香はそのまま玄関先に出て日の光を浴びてみた。そそっかしい千晃が開けっ放しにしたリビングのドアから、彼女の声が漏れ出てくる。

「おねえちゃんおねえちゃん、全裸のヤツが庭にいるからセンモンテキ知識を……………待って。あんた……………おーちゃん!? ちよ、ケガして

……………待ってて、今……………！」

背筋が凍りつく感触を味わったのは、いったい何十年ぶりだろう。懐かしくも恐ろしい感覚に幽香はつい、うっかりと足をすくませた。それはとてつもなく人間的対応で——幽香は、結果、致命的に出遅れた。

「千晃ッ！」

閃光と爆風が吹き荒れ、今まさに家に飛び込もうとした幽香を吹き飛ばす。



ひどい悪夢だ、と思う。

カーテンが閉め切られ、真つ暗な教室の一つでイスに縛り付けられ、周りには武装した男たちが抜け目なく物騒なモノの銃口を巡らせている。

「ウソだろ」

「悲しいことに現実です」

ダクトテープで巻かれた足をぎちぎちと鳴らしたハジメの前。万場という長身異形の男は懐から新しくボールペンを取り出し、机の上に並べていく。その数を数えて、彼は無感情に告げた。

「そのセリフはこれで七回目ですね」

耳障りな音を響かせてハジメの目の前までイスを引き摺ってくる間、万場は眉ひとつ動かさずにいた。彼の背後には机に腰掛けた今井と寺田の刑事コンビが見える。

「あんたら、ケーサツなのか」

「難しい話を省くと、まあ、そういうことになります」

国家権力がここまで後ろ暗いことをやっているなんて。ハジメは眩暈を覚えていた。

「ときに鶴見君は映画をみますか」

男が身を乗り出すと、あまりの長身ぶりにほとんど目の前まで異形が迫ってきた。

「……………いいや。最近は」

「僕たちはとあるシリーズが好きでしてね。なに、幾分陳腐なストー

リーなのですが。中年の警官がいて、彼はやたらと運がないんですが、テロリストをなぎ倒したり、陰謀を暴いたり、毎回英雄的な活躍で楽しませてくれる」

その時はどうせこんな暗い部屋でカウチの上で窮屈に体を縮こめてるんだろうな、と滑稽な想像を浮かべてハジメは臨界点を越えそうな緊張を飼いならすことに専念した。

「ですが彼も人間です。シリーズを重ねるうちに妻は逃げ、子供は非行に走り、男はアルコール中毒を抱え、ついには廃人の二歩手前まで追い詰められてしまう」

「二歩手前だ」

ハジメが訂正すると、万場は薄く笑った。

「そうでしたね。ともあれ僕たちは何度もあの映画を見返しました。やはり彼は英雄だ。何度も何度も燃えるビルから飛び降り、飛行機を爆破し、戦闘機と生身で渡り合う。ですが、やはり何も変わらないのです。奇跡が起きて、妻のホーリーが彼のもとへ舞い戻ってくるなんてことは、絶対に」

万場は足を組み替えると机の上で手を組んだ。

「それを確かめる度に、とても安心します」

いつからか置かれていたリングが、唯一の照明に照らされてぎらぎらと輝いている。

「僕たちが目指すのは、そういう『起こりえないことは絶対に起こらない』世界線です。だから僕たちは、鶴見君にお願いをします」

リングを手に万場は立ち上がる。また、耳障りな音がハジメの耳を貫く。

「立って、帰って、その手で風見幽香を殺してください」

「……なぜ、あんたらはそこまでして」

萎えきついていた怒りが急に沸騰を始めたのが分かった。鈍い輝きの火花を散らすハジメの瞳に銃口が次々と持ち上がるが、万場はそれを手で制した。

「鶴見君は、身の丈を外れた夢にうかされたことがありますか。叶うはずがない。だけど、一度夢を見てしまえば諦めきれなくなる。も

しかしてを、生涯期待し続けることになる」

それを聞いてハジメの瞳は輝きを増すばかりだ。

家族を再び一つにする。触れられてもいけないはずなのに、そんなさやかな野望を、この大男の土足で踏みにじられたような気がしていた。

「奇跡なんて要らないんです。奇跡を見せつける彼女たちの存在も同様に邪魔です」

「お前たちの」

乾ききった口の中で舌がうまく回らない。ハジメは構わず続けた。

「お前たちのそういう夢の見れなさがあいつらを追いこんでいったんだ！」

「鶴見君、話はまだ終わっていません」

「国家の安全とか、そういうのはタイヘン結構だぜ、だけどあいつらはどうするんだ。妖怪だなんだって言っても、あいつらはぐっ」

椅子ごと床に殴り倒されたハジメを懇切丁寧に起こしてやりながら、万場は血の付いた右手を拭おうともせずに、しやがみこむと彼の瞳を覗き込んだ。ついでにハンカチを取り出すと、おびただしく流れる鼻血を拭いてやる。

「それじゃ、いつまでたっても僕たちヒトは幼年期を卒業できません。それにコトは国家の粹には収まらない」

その背後で壮年の刑事は居心地悪そうに視線を外す。

吐き気をずっとこらえていた。今井は刑事としては三流もいところだが、正義の味方としては一流だった。こんな薄暗い部屋で大人たちが一人の子供を寄つてたかつて追い詰めるなんて。

「皆が目の前の現実を確かに見つめられる世界を作りたい。だから彼女たちの存在を秘匿する。彼女たちが存在したといういかなる証拠も抹消し、あの閉じた世界で幻想の時代を終わらせるのです」

「ハ」

なんてSFを持ち出してくるのだと、ハジメは笑いをこらえきれなかった。万場はべつだん不愉快になるわけでもなく、リンゴをもてあそんで彼の笑いが収まるのを待っていた。

「おかしいですか」

「そんなことができるはずないだろ。俺たちが大暴れしたことは全部ニュースになったし、ネットだって噂でもちきりだぞー!」

「UFOとプラズマとスカイフィッシュの噂で、ですね。大抵の場合、こうした明らかに存在しないものがカバーストーリーとして用意されます。木を隠すならですよ」

「おかしいくらい冷静な万場の指先でリンゴは光を受けて回る。壁に、不気味で巨大な影を落としながら。」

「事実、僕たちの仕事は殆どの世界線で成功しています。もつとも特異な並行世界では、彼女たちがあるタイトルのフィクション作品群に登場する架空の人物だと認知させることに成功しました」

「並行世界? 僕——たち?」

「頷く万場の輪郭がぼやけ、その異形が幾重にもダブって見えた。」

「そのモヤの向こうにあるのはまったく別の風景だ。公園で、港で、どこかの倉庫で、幾重もの万場幾重たちが同じような姿で佇み、ハジメを見つめてくる。」

「多世界解釈というものを知っていますか。世界は主流である樹と、そこから実るリンゴのように無数に存在するというものです」

「ハジメの理解が徐々に追いついてきた。この万場という男の異様な言葉づかい、僕たち、という表現。その、あまりに大きすぎる規模で作用する能力の正体に。」

『『跨ぎ越す程度』の。彼女たちのルールにのっとって言えば、そう名乗っておくべきでしょうか。僕たちは無数の世界線に散らばり、同時にこの仕事を遂行します。ですが」

「万場はようやくリンゴにかぶりついた。」

「しゃくしゃく、ではない。腐りかけた肉を錆びついた車輪で轆き潰すような音。固まりかけた顔でモノを食べることは大層難儀なのだろう。」

「彼は大きな片目をぐるりと回してハジメを見据えた。」

「このリンゴは少しばかり、出来が悪いよう^{バッドアップブル}でして」

2 『幻葬（下）』

「他の世界線において、鶴見君は幼少期に確実に死亡しています。理由はインフルエンザだったり、ちよつとした交通事故だったり。ひどいものでは妹さんの誕生と共に息を引き取る、なんてことも。気を悪くしてほしくはないのですが」

それを心の底から彼が言っているかは非常に怪しいところだ。

「ですが君はこの瞬間まで途方もない死のリスクの連鎖を乗り越えてきてしまった。これで、この世界線がいかにおかしなものか理解できたでしょう」

本来なら鶴見ハジメが表舞台に立つことすらあり得なかった。

身の丈を越えた願望を抱くことも、あの妖怪と出会うことも。

「とんでもない奇跡の連続。天文学的な低確率がこの世界線を生んだのです」

「出たな。あんたの嫌いな奇跡が」

「はい。つまり僕たちは奇跡の権化のような君も嫌いな訳ですが」

血の混じった唾をハジメは吐き捨てた。

ちよつと映画のワンシーンをマネしてみたただけだが、見慣れた教室の床に落ちた彼の血は、思いの他凄惨な雰囲気醸し出してしまっていた。

「……奇跡は起こらないから奇跡なのです。誰もが幻想を本の中に閉じ込めて、現実を正しく定義できる。それこそが、人類が大人になるということなのではありませんか？」

万場は狂ってはいたものの。

「鶴見君。重ねてお願いします。幻想の時代を終わらせてください。君が適任なのです。僕たちにこれ以上カードを切らせないでください」

その異様な歪みは外見だけでなく内側にも達していたものの、彼は至って真剣に人の行く末を憂えているのだろう。

「残念だったな」

万場をまつすぐに見据えて、ハジメは挑発するように笑った。

「俺はあいつと一緒に楽しく大人になるって決めてるんだ。それができないなら、大人になんてなれなくたっていい」

「結構」

万場は素早く手札を切った。ジャケットの内側から最悪の小道具を取り出し、ハジメの顔面に突き付ける。ひんやりとした回転式拳銃の銃口が、否が応でも額に神経を集中させた。

「少し、プロファイリングとは違う反応ですね」

「言いたいなら言えよ。こうすりやへたれると思ってたんだろ？」

恐怖で息は荒れ、声は震えていたが、ハジメは目を瞑りもしなかった。瞳孔を縁取る黄金の光の輪郭を目でなぞって、万場は低い声で笑った。

「ひまわりは好きですか。僕たちはあまり好ましく思わないのですが」

「知ったことか」

「だって陰気でしょう。太陽に嫉妬するみたいにもいつも首をめいっばい反らせて」

ハジメの瞳の中には、いつも太陽がある。

「君も結局、ありもしない太陽に焦がれたヒマワリだったのですかね」

「……ごちゃごちゃ言ってるやれよ」

「よろこんで——寺田君。こちらへ」

万場はそれまで壁際で固唾を呑んで事の成り行きを見守っていた寺田に手招きした。

「さあ、どうぞ」

手渡された拳銃を、若い刑事は信じられないものでも見るような面持ちで握りしめた。その手を万場が取り、再びハジメの額に狙いをつける。

「ヒーローになりたいのでしよう。手柄は君に差し上げます」

「こ、こんな話、聞いていなかった」

「話していませんでしたからね」

容赦なくぎりぎり引き金を力を込める万場の指に、寺田では抗いようがない。前にはハジメの燃える瞳。板挟みになった寺田は子供

のように喚いた。

「待つてくれ。撃ちたくない。いや、俺に撃てるはずがない！」

「おい万場、いい加減にしろ」

「今井さんは引っ込んでいてくれますか。彼は絶望的な進退を挽回するために僕たちの所へ来てから、こうしたことには手を染める覚悟はしていたはずです」

「クソ。この——」

同じ切り札を今井も上着の中に用意していた。最悪、警察学校時代の同期を撃ち殺すつもりでいた。しかし今、微動することも許されない。今井は腰を沈めた姿のまま、短機関銃を突き付けられて固まっていた。

若い刑事に救いはもうない。進むことしか許されない。

「やれよ」

「寺田君、さあ」

「それでいいのか、寺田アツ！」

「うわああああああアツ！」

トリガーが限界まで引き絞られた瞬間、寺田の抵抗が僅かに銃口を下に逸らした。

「そう。それでいいのです」

万場のよじれた笑い顔。ずぱん、という発砲音。

「ぐ、う」

ハジメの左腿に食い込んだ銃弾が筋肉と組織を食い千切っていった。残忍にひしゃげた弾が腿の反対側を椅子の座面ごと突き破って吐き出された。

「そんな簡単に君を逃がしたりはしませんよ」

あれはただの銃弾じゃなかった。

焼かれて貫かれて叩かれて。しかし、この半年に味わったどんな痛みよりも鮮烈な痛みだった。いかなる我慢も覚悟も、この激痛の前では無駄なことを、ハジメは絶叫しながら知った。

茫然自失の寺田を投げ捨てて、万場は男たちに手招きした。ハジメの耳元に口を寄せ、囁く。

「これから君を限界まで追い詰めたいと思います」

万場の片手が、赤々と開いたハジメの傷口に重みをかけてくる。

「ただし彼らはプロですから死ぬことはないでしょう。今回はですが」

この部屋はどことん不快なおいしかしい。耐え切れず寺田が吐いていた。抵抗の一つも許されずに、今井の内ポケットから拳銃が引き抜かれていく。

「次からは僕たちも蹴ります。もちろん心得なんてありませんから、そのつもりで」

拳が肉を打つ音を背中で聞きながら、万場は部屋を後にした。



「鶴見君、生きてるか」

医務室から薬箱を持ち出した今井が教室へ戻ると、満身創痍のハジメは一人椅子に縛り付けられ、ぼんやりと黒板を見つめていた。

「げほっ………俺、どう、見えます?」

「ありのままを言っただけいいか。それとも励ましてほしいか?」

「せめて面白く言っただけいいか」

「俺じゃなくてよかったと心底思ってる」

咳き込みながらハジメが笑う。その顔は青ざめていた。左腿は止血されていたが、かなりひどい状態だ。

「ああ、クソ!」

消毒を済ませてから、今井は傷口を抑える包帯がないことに気付く。

「裸はもうごめんだ」

ハジメのシャツに今井が手をかけると、彼は僅かに体をよじって抵抗した。

「確か、ケツのポケットに包帯が入っていたと思います。あいつらに取り上げられていなきゃ」

言われるままにして今井が取り出したものは、明らかに使用済みの薄汚れた包帯だった。泥と煤にまみれ、数々の戦いを彼と一緒に潜り抜けてきたはずのそれは、微かに花のおいがした。

「それでいいんです。なんか、安心できる」

傷口を始末してやりながら、そのにおいに今井は風見幽香を思い出ししていた。

「待ってる。逃がしてやる」

自分の足をぐるぐる巻きにするテープを今井が切ってやる間、信じられないものでも見るようにハジメはその様子を眺めていた。

「何、してるんすか。怒られますよ」

「それで済めばいいんだけどな……よし。今回ばかりは鶴見君の王子様を待っている時間もなさそうだ。歩けるか？」

「っ……なんとか。頑張れそうです」

軽く地面を蹴って顔をしかめたハジメは、血の気のない顔でうなずいた。

結局最後まで屈しなかったことといい、そのしたたかさに今井は舌を巻くばかりだ。感心しっぱなしでもいられないので、用意していた分厚い茶封筒を渡してやる。

「これで遠くに逃げて、当分しのげ。その間に俺がなんとかしてやる」「こんなに」

「クソ仕事ばかりでも、この歳になればそこそこ金も貯まるのさ」「なんとかって、できるんですか。あいつら国家権力ですよ」

「そしてこっちは窓際族のおっさん一人だ。いい条件だろ？」

ハジメがまごついている間、今井はずっと背後の廊下に意識を集中させていた。しばらく巡回はこないだろうが、時間はそれほど無いはずだ。

「いいか、鶴見君。時にはヘタレも悪くないぞ」

露骨にイヤそうな顔をするハジメを笑ってやりながら、今井は彼の肩に手を置いた。眩しい太陽を見つめる様に、目を細めて。

「大人たちが描く未来が気に食わないなら、ヘタれてヘタれて、君の望む世界の姿を思いつくまで大人になることを保留すればいい。その間、未来は俺が担保しておいてやるからさ」



「遅かったじゃないか」

建てつけの悪い戸をガタピシ鳴らして万場が入ってくると、今井は窓を開け放つてタバコをくゆらせていた。

「ちよつと、横槍が入りましたね」

「計画頓挫か。おめでたいな」

「それがプランBの遂行にはとことん好都合でして。今追加の人員を向かわせたところですよ」

とことん気に食わないヤツだ、と今井は煙を吐き散らした。

「そういえば鶴見君の姿が見えませんか」

「ああ。小便行くつて言つてたからナワ解いてやったんだ。多分長くなる。一か月か、それ以上か」

「そうですか。ありがとうございます」

この裏切りで目の前の化け物の鉄面皮をどのくらい剥がしてやれるかと期待していただけに、今井は万場から放り投げられた言葉に眉根を寄せる。

「ありがとう、だって？」

「言つたじゃないですか。僕たちは今井さんの人間性を高く評価している」と

万場がねじれた顎をしゃくると、武装した男たちがわらわらと教室になだれ込んできた。諸手を上げて立ち上がった今井がずらりと並ぶ銃口の向こうに視線を馳せると、虚ろな目をした寺田が幽鬼のように佇んでいる。

「重ねて礼を言います。ありがとうございます。僕たちが彼をいくら痛めつけて脅迫しても、ここまでコトはスムーズに運ばなかったでしょうから」



「学校の装甲車なんて、気にしているヒマもないか」

町中に立ち並ぶガラクタ。

忘れられたものたちが『ここにいるぞ』と声高に叫ぶ中を足を引き摺りながら走って、ハジメはまず家を目指した。幸いこの混乱のただなかではハジメを呼び止めるものもいなかった。

『いいな。逃げたらケータイは使うな。家に連絡するな。何が起こっているか、調べるのもダメだ。こまめに移動しろ』

別れ際、今井に言われたことを忘れたわけではない。

それでも最後に一度だけ千晃や父に会っておきたかった。会って謝って、礼を言っておきたかった。

「なんだ、アレ」

猛然と住宅街の坂を駆けあがるハジメの足がピタリと止まった。

「あれ、俺んちじゃないか」

雲一つない空に白い煙が一筋立ち上っていく。茫然とするハジメの隣を、騒々しくサイレンを鳴らして消防車が追い越していった。

「っ、つるみん！」

坂の上で見慣れた姿が手を振っている。

「お前、無事だったか」

「ケガしてる。待ってて。救急車を」

「いや、いい」

どういうわけか勢揃いしたクラスメートたちが次々によかったよかったと励ましてくれる理由も分からないまま、ハジメは自宅の、潰れたリビングを見つめる。

「つるみん、どうしよう。どうしよう」

「落ち着け。何があった」

「私達の前で爆発が起きて。千晃ちゃんが、アレに」

「なんだって？ お、おい。泣くなよ」

必死にクラスメートを落ちつけながら、ハジメはガラスに走る蜘蛛の巣状の亀裂に気付いた。腿がじくじくと痛んだ。

「それで？」

「わかんない。映画で見えるようなヘンな車が来て、特殊部隊みたいのが銃撃ってた。そしたらあれが出てきて」

「アレ？」

彼女はただ顔を覆って、項垂れた。

「本当に俺たちはここに来たばかりなんだ。ただ、おまえんちが、その、ピカって」

「何も聞こえなくなったの。本当」

頭をがしがしと掻きながら、ハジメはうろろう歩き回った。いろいろ

るなことが一片に起きすぎて、何が何やら分からなくなり始めていた。

「ごめん、つるみん。私達なにもできなかった」

おびえたような彼女たちの視線に気づいて、ハジメはようやく欠片だけでも冷静さを取り戻すことができた。

「……ごめんはこっちのセリフだ」

ハジメは空に視線を馳せた。こんな緊急事態に陽気をふりそそぐ、空気の読めない太陽。輝く街並みのなかに黒々とそびえる、崩れかけのビル。

「つるみん？」

日輪を宿したハジメの瞳が、その並外れた視力をいかに発揮する。そして、ついにその姿を捉えた。今まさに廃墟の屋上へ降り立とうとする、翼の生えた赤い後ろ姿を。



連続した破裂音と閃光。悲鳴。

「千晃！」

吹き抜けをまっすぐに飛び降りてロビーへと幽香が着地すると、既に何もかもが終わっていた。

「ちゅん」

戦闘体勢をとったまま、血塗れのおーちゃんが崩れかけの黒羽を揺らした。彼女の頭を伝って顎から滴る血が、その片腕に抱えられた千晃を濡らしている。

「かえす」

それを、彼女はあっさりと幽香に差し出した。

奪い取るように彼女を取り返した幽香は、千晃のケガを調べながら薄暗い廃墟のロビーに視線を走らせる。ところどころにまき散らされた血と、人体のパーツ。

柱と壁にはびっしりと弾痕が刻まれている。

「ちーちゃんはトモダチだから」

ふらふら危なっかしく揺れながら、黒羽の怪異はカギ爪で自分の体に埋まった銃弾をほじくり返していた。その手がびたりと止まり、彼

女はげほげほと血を吐いた。とんでもない量の血潮が、幽香の足下まで押し寄せた。

「すこし、つかれたかな」

湿った足音を響かせながら、黒羽の怪異は崩れかけの体で暗がりへと去っていく。

「えりちゃんたすけてくれて、ありがとうね」

幽香には彼女を引き止めることができない。ただ見送った。彼女がどこに行くのか、どこに行けるのかも分からないままに。

エリカの企みは半ば成功していたのかもしれない。もつと多くの怪異と時間を黒羽の怪異に与えてやれば、彼女が失った理性を取り戻すこともあったのかもしれない。

「……………こちらこそ。ありがとう」

弱弱しい羽音が遠ざかっていくのを聞きながら、幽香はぐったりとした千晃を抱きしめた。かすかな鼓動を感じるうちに、我知らず彼女は膝をついていた。

「ねえ、千晃。起きなさい」

黒羽の怪異は千晃を気遣って、例の高速移動を行わないまま戦ったのだろう。結果として千晃は命を拾ったが、防ぎきれなかった銃弾の数発が、彼女の体にむごたらしい傷を残していた。

「千晃、ねえ。今日は大事な日でしょ？」

もう準備は終わっているのだ。だが、千晃とハジメが居なければ何も始まらない。

「お願いだから目を醒まして。お願い、神様」

そんなものが幻想郷の外にいるのか分からない。

それでも幽香は生まれて初めて神に祈った。理不尽な運命ばかり勝手に押し付けて、ひどい目にばかり遭わせて。それでも名を呼んだのは、心のどこかでまだ奇跡を信じていたからなのかもしれない。

千晃の瞼が震えた。

「おねえちゃん、やっぱりオオゲサだね」

身じろぎした千晃が、呻くように呟く。

「よかった」

あらん限りの力で幽香に抱きしめられた千晃は傷の痛み顔をかめたが、それでも幸せそうに笑った。

「いつっ」

「ご、ごめんなさい」

「……へへ。でも、痛い思い、したかいがあったかな」
認める。

幽香は幸せだった。たった一人で孤独に生きてきて、とんでもない奇跡によってこの現代にやってきて、そこで見つけた小さな居場所は、間違いなく彼女の家だった。

「残念だけどパーティーはあなたが治るまで延期ね」

「アレ、だめになっちゃうね」

「また作ればいいわ。今度は、一緒に」

「うん」

妹が静かに幽香の首に腕を回した。

「ゆう、か……？」

幽香が今一番会いたい、とある青年。

彼の到着がその幸せのトドメになるなんて思ってもいなかった。

「ハジメ？」

その姿を見て言葉を失った。

すりきれた唇。アザに覆われ、血の気を失った頬。尋常ではない量の血を、今この瞬間も垂れ流す足の傷。一目で彼への仕打ちが見て取れた。

「幽香、なにが」

ロビー中にぶちまけられた死体の山。血まみれの千晃。

「ああ、ハメられちゃったわね」

唇の動きだけで呟いて、幽香は吹き抜けを仰いだ。台風明けの空は残酷なくらい澄み渡っている。

鳥が飛んでいた。どこからか風にさらわれてやってきた一枚の桃色の花卉が、はらはらと舞って、幽香の掌に落ちる。

白々とした明りの下、幽香は静かに髪留めを解いていった。

炎のように、彼女の髪が広がる。三対の翼が姿を現す。

「なあ、何か言えよ、おい——ッ!？」

どごと、とハジメの胸を衝撃波が打った。

正真正銘、手加減なしの幽香の一撃。

彼の体は砲丸のような勢いですつ飛んで瓦礫の山を打ち崩す。分厚いコンクリートの柱がその上に倒れこんで、彼の姿は消えた。

「ふ、ふふふ。本当、神様って理不尽」

だが、この瞬間を与えてくれたことに感謝した。

説明すれば、いくらでもハジメは聞いてくれただろう。いくらでも信じてくれただろう。だが、そうしたところで、彼を取り巻く状況はどうにもならない。

「ハジメ。本気でやりなさい。じゃなきや、マジで死ぬわよ」

必死で幽香は自分を律する。

あの銃を持った男たちにの狙いはなんとなく分かっていた。ハジメと一緒に逃げる選択肢はない。逃げれば彼は一生穴倉に隠れ住むことになるだろう。

家族を一つにするなんて野望が叶う日は永遠に訪れない。

「どうして、おね、ちゃ……っ!」

「もう違うわ」

千晃の口を抑え込むと、幽香は素早く千晃の足を掴み、へし折る。

「ねえハジメ。隠れるのもいいけれど、この子、そんなに長くは持たないわよ?」

くぐもった悲鳴を掌で受け止めながら、幽香は唇を噛みしめる。これで、兄妹を追い詰める残忍な狂った妖怪を演じる準備は整った。

「許して」

危ないところだった。

危ないところで風見幽香は踏みとどまった。幸せに頭まで浸かりきって、彼女の方が鶴見ハジメと殺し合いを演じることが出来なくなる寸前で。

「わかった」

血と涙が絡んだ声。幽香が反射的に差し伸べた右手を、燃える弾丸が易々と貫通し、そのまま右肩をも撃ち抜いた。

もうもうと立ち込める塵の中に、日輪が輝く。

第二十一話『幻葬』おわり

3 『ハジまりをゼロに（上）』

誰もが日常を謳歌する中にありつたけのガラクタを降らせてみたらどうなるか——なんて、集団心理の実権をしたいなら今のF市こそがうってつけだろう。ついでに光線を縦横無尽に吐き出すビルも突っ込んだ時の反応を確かめたいなら、これ以上の好機はない。

「なにアレ」

「なんかのイベントじゃねえの」

「いやマジでヤバくね？ めっちゃ崩れてるし」

誰もが口を閉じることも忘れて、それを見上げていた。

「おい、下がれ、落ちるぞー！」

去年の冬のことだったか。とある爆発事故によって工事の中断された高層ビル。そのワンフロアが爆炎を吹いて、まるまるダルマ落としたように消し飛んでいった。

わつとぎわめきが上がる中でビルが大きく揺れて、地面に叩きつけられた一軒家ほどもある大きさのコンクリート塊が散弾のように破片をまき散らした。

眠っていた怪物が急に目を醒ましたようだった。

「え、ウソでしょ。やばいやばいやばい！」

騒ぎながらも冷静にカメラのレンズを向け、シャッターを切る人ばかり。

通りにひしめき合う彼らは崩壊一步手前のビルから泥の流れのようにつくりと退いていつているのだが、一人流れに逆らって歩くものがいた。

「てめ、押すなよ」

乱暴に肩を押しつけられたクルーカットの若者に肩を掴まれて、そいつが足を止めた。

「黙れ」

しゃがれた声で軽く帽子のつばを上げてみせる。

おびただしく立ち上る蒸気の奥にぶら下がった頬肉とむき出しの歯列。彼に睨はなく、ぎらりとした紅い瞳が明確な敵意を秘めている。

た。

「通せ。邪魔だ。のけ」

半分溶けかかった何かは、おぼつかない足取りでビルを目指してひとごみを突き進んでいく。

「あ……やっぱり、フラッシュ、モブ、的な？」

肩にへばりついた肉にも気づかず、茫然と言い放たれた声も聞こえない。

進み続けた彼は、やがて黒煙を噴き上げるビルを見上げ、そして屈んだ。背中の肉が服越しにも分かるくらい大きく盛り上がっていく。

「待っていて、ください。今、行きます、から」

そして姿を現したものは骨とむき出しの肉だけの、あばらみみたいな翼だった。

「やめなさい」

それが通りの幅いっぱいになり、羽ばたく寸前で横から伸びた手が彼を細路地へと力任せに引っ張り込んでいく。

スニーカーとストラックスの隙間から見える足首は肉の剥がれた骨でしかない。

よたよた頼りなく踏ん張りもつかないままに引き込まれた路地の壁に、彼の体は押し付けられた。

「はなせ。今はお前の相手なんてしちやいられないんだ」

嗅ぎ慣れた香水と、見慣れた姿。

「ダメよ。今度こそ死んじゃう」

「ここで何もできない方が、死ぬより——」

底から先は言葉にならなかった。胸に押し付けられた紫の顔。

シャツの胸元が濡れるのを感じながら雪之丞は帽子を脱ぎ捨てる。半分肉を剥がされ、回復もままならないままにここまでやってきた。

「ひどいわね」

「昨日までは頭だけだった。まだマシさ」

通りの外から聞こえるどよめきが一層大きくなり、頭上に見える高層ビルが黄金の火を吐いた。

「お前、自分が何してるか分かってるのかよ」

爆炎の中から身をひるがえして、三対の翼を持った人影が飛び出す。明らかに怪我の具合が重篤だ。追って飛び出した光の塊が空中で何度も爆発しながら彼女に光線を放つ。

「ユキ」

曇りなく澄み切った空気の中に飛んだ血飛沫。

たまらず飛び出しかけた雪之丞を紫が再び引き留めた。

「お願い。これがあの二人の最後なの」

「お前に何が分かる。いっただってそうだ。全能ぶって上から指図ばかりしやがって。結局お前は何もできちゃいない」

「そうね」

大妖怪の名をほしいままにした女怪は、威厳をかなぐり捨てて雪之丞の胸に強く顔を押し付けていた。

「私は、あの子たちに何もしてあげられなかった」

強く胸を拳で打たれる。

雪之丞の体はようやく皮が張り始めたばかりだったので、子供用の太鼓じみた間の抜けた音が響いただけだったが。

「彼らの敵になってやることですら」

途方に暮れて雪之丞はビルを見上げる。

そこで繰り広げられる、終わりへと突き進むだけのむなしいダンスに爪先を突っ込んでやることもできない。

いつしか、彼は獣のように咆哮していた。



窓ガラスをぶち破って室内に逃げ込んだ幽香は、焼け焦げたフロアリングの上を横滑りしながら瞬時に極大の光線を三連射した。

「っ……痛」

光線の網を縫って外壁を金色の光が駆け抜けていき、幽香は刺すような痛みを頭に覚える。

「いた、い。ですって?」

こそげた額の肉の代わりに戻ってきたものがある。

腕を骨ごと焼かれても、叩き潰されても、一晩中鳥の怪物に痛めつけられても得られなかったものだ。

「……………ああ。今日はあなたに贈る日なのに。本当、貰ってばかり」

血のしずくが床を打つ。

『風穴をぶち開ける程度の能力』の恐ろしさを、相手にして再認識した。燃える弾丸に貫けない防御は存在せず、直撃をもらう度に癒えない傷が増えていく。

風見幽香は信じられないことに圧され続けていた。

「強くなったわね」

にわかにあたりが明るくなった。

穴だらけの天井から差し込んだ強烈な閃光に、幽香は弾かれたようにその場を飛び退く。一拍子遅れて黄金の弾丸が雨のように降り注ぐ。攻撃は幽香が反撃の閃光を天井にお見舞いするまで続いた。

しばらく差し伸ばたままだった右腕を、幽香はだらりと垂らした。いつの間にか上腕に向こう側が見えるくらいの大穴が穿たれている。

それを宝物のように見つめながら、幽香は瓦礫の山を下りてくる気配に備えた。スタボロで傷だらけで、それでも、最後まで彼の好敵手でいようと、気を引き締め直す。

「手加減してくれてるのか？」

それだけに姿を現したハジメと、彼のことは、その弾丸より深く胸をえぐった。

『やっぱり、あんたは強いよ』

そう、いつものように呆れて笑ってくれることを心のどこかで期待していただけに。

「これは実力の何万分の一だ？ 何千？ それとも何百？」

悲しいくらいに全力だ。嫌味もなく言ってくれるハジメは、きつと幽香がもつと驚かせてくれることを警戒しながらも楽しみにしているのだろう。まだまだ踊れるよな、と。燃える瞳が語りかけてくる。

決してハジメは実力の上で幽香を圧倒しているわけではない。彼女の光線がほんの少しかすれば彼の肉は焼け焦げ、拳や蹴りを受ければ骨は肉を突き破り、二度と元にはもどらない。彼は無傷でなければ戦い続けられないというだけなのだ。

それに加えて、ハジメは幽香の戦いをすぐ傍で見続けた。

「二歩、下がるからな」

腹の底をノックするような響き。室内に立ち込める塵が真つ二つに分かれる。かつてゴミ箱に頭からダイブする機会を作ってくれたありがたい衝撃波だ。

「二歩で十分だ」

身を持って知っているからこそ、間合いの取り方は完璧だ。

直撃しなければなんてことはない。そよ風同然に威力を減衰させた衝撃波をやり過ごして、そこはハジメの独壇場となる長距離だ。

「蝸牛の怪異とあんたの戦いで、うっかり惚れかけた」

幽香の姿が霞む。ハジメは更に数歩下がると、虚空に向けて次々と炎を放っていく。

「今でもあんたは速すぎて見えないけれど。消えたままでいられるのは一瞬だけなんだろう？」

コンクリートの柱を叩いた弾丸が四方八方にはじけ飛ぶ。

跳弾をかわし、幽香の間合いの外を保ちつつ、くるくるとバレエでも踊るように回り続けるハジメ。

室内を黄金の軌跡が埋め尽くす頃、最初の一発が姿を現した幽香を背後から貫いた。

「ぐ」

一度足を止めればそれが命取りだ。

ハジメの前でようやく漏らした苦悶の声は、彼女の全身を滅多打ちにする炎の豪雨によってかき消された。



「いい眺めですね」

F市はさびれたドン臭い町だ。

ちよつと前までは凶悪事件の一つもなかった地方都市を不思議な熱狂が包んでいる。ひしめきあう人ばかりを見下ろす万場の目はさめていたが。

「今井さん、見えますか。非日常きせきとは麻薬だ」

万場に促されてへりを降りた今井は、返事代わりにがちやがちやと

後ろ手の手錠を鳴らした。

「たった一滴を町に垂らしただけで人はここまで集まる。蛾が火に集まるように」

私立病院の屋上からは、例の焼け跡がよく見えた。

ヘリポートの回りにはすでに野営地さながらに飾り付けられ、今井が見たことのないような巨大な銃を男たちが数人がかりで運んでいく。

「あれが何かご存知ですか？」

「少なくともパーテイークラッカーには見えないな」

苦し紛れの軽口にニヤリともせず、今井は焼け跡を見つめる。外壁を這いまわる戦いは終わり、今はその内部で熾烈な決戦が繰り広げられているようだ。

「対物狙撃銃というヤツです。相手が建物や車両でも一定の効果を発揮してくれます」

射手が祈るようにマガジンへと込めていく弾薬は大男の親指ほどもある。死の指に指されたものが人間であった場合を考えるだけで、今井の脳裏にはイヤな想像が描かれていった。

「おいお前、ガキンちよ一人撃つだけで金がもらえるのか。いい仕事だな」

彼が黙々とスコープを調整する手は休まらない。そのかたわらでスチール製の脚がボルトで固定されていく。

「そのガキンちよが撃たれるのを指咥えて見ているだけでお金をもらえるのも十分割のいい仕事だと思いますが」

「こいつを外せば今すぐぶん殴ってやるさ」

あの教室で行われたことが最悪の出来事であったと信じたかったが、万場の口からプランBの全容が明らかにされるにつれ、それは間違いで、たった今この瞬間がそうなのだ。今井は気付かされた。

「あなたは優しい人だ。本当に数百年前だったら聖人にでもなれたかもしれない。もしくは、英雄か」

「お前はどの時代でも悪魔になれそうだな」

「ああ、皮肉屋もお似合いだ」

大理石の肌を触って、万場はゆつくりと頭頂までを撫で上げる。つるつるとした表面に青空がまぶしい。

「あなたは優しいから、きつと我々が席を外せば鶴見君を逃がすと思っていました。鶴見君はご家族を大切にしますから、一目散に逃げることがまずない。本来ならそこで、我々が既に家を抑えているはずでしたが」

「い号が戻った、と」

「どちらにしろ妹さんは人質になり、ろ号はじつに空気を読みました。我々は最小の人的被害と一発の弾丸で世界を変えることができるのです」

「その人的被害の中にあの二人は組み込まれているのか？」

「僕たち、というか我々は妖怪変化を人の内には数えませんがね。あれは害虫と一緒にです。庭の管理を怠ればどこからか湧いてきて、不快な卵を産み付けていく」

顔を撫でる万場の指先と、彼の平坦な語気にほんの一瞬だけ力がこもった。しかしスーツの怪人はそれ以上を語らない。

「……大事なのはタイミングを見極めることです。どんな大砲であれ、どんな能力であれ、それを誤ればなんの意味もない」

完全に衰弱しきった寺田を振り返って、万場はその肩に手を置いた。うつろな瞳が見上げてくる。

「我々はただ、その瞬間を待つのみです」



ハジメの能力はタガが外れてしまったようだった。

指先から弾丸を吐き出すことをやめ、日輪が彼の殺意を代行する。放射状に広がった槍がそれぞれ自律し、ミツバチのように舞い飛びながら黄金の弾丸をぶちまける。

「すぐ、終わらせてやるからな」

文字通りの蜂の巣にされていく幽香にはこの瞬間ですら彼の能力が成長を続けているように思えた。

「すつごく痛いわ。それなのに」

幽香の頬には血が、

「もつとツッ！ もつと強く、もつと強くだ！」

ハジメの頬には涙の筋が這っている。

「逆でしょ。もう」

涙が距離感をゆがめてしまったのか。

うかつに射程圏内に立ち入ったハジメめがけて、幽香は飛んだ。腹を貫き、顔面を光線で吹き飛ばす。試みるのは数えきれないくらいの年月で、数えきれないくらい繰り返してきた動作だ。

しかし、驚異的な機動を見せる光の槍がそれを阻んだ。

縫り合さって巨大な一本の槍を形作ると、幽香の右掌の傷を貫き、むごたらしく上腕の中を食い進んで肘から穂先が飛び出す。

「ふふっ」

昆虫標本のように壁に磔にされた幽香は、それでも笑っていた。

「終わりだ」

ハジメの背後で細く長く伸びた日輪が巨砲を形作る。

巨大な窓ガラスも壁も絵本のチーズのように穴だらけにされ、吹き込む澄んだ風が二人の髪とすれ切れた衣服を揺らした。

「終わりね」

全てを出し尽くした。

これだけしなければ、ハジメに自分を殺させることはできなかった。だが。

「悔しい」

ハジメに負けることではない。自分に負けることがだ。我が子のように育てていたはずのハジメにいとまたやすく追い越され、その背中に指をかけることすら叶わずにここで終わってしまうことがだ。

叶うことなら、と思う。

「……………まだ。ほんの少しでいい。あなたと踊っていたいわ」

ハジメと踊るのは月夜の湖畔でも、花弁を散らせたベッドの上でもない。それらはあまりに欲をかきすぎていることを幽香は承知していた。

だから、ほんの少しだ。

運命に放り出され、忘れ去られてしまう前に、もう少しだけ悪あが

きがしたかった。ハジメには華奢な女ではなく、大妖怪風見幽香の首級を上げさせてやりたかった。

幽香はそつと、右腕を気遣うふりをしながら肩口に無事な掌をあてがう。

ぼん。

彼女の右腕が付け根から水風船のようにはじけ飛んだ。

「ワガママな女でごめんなさい」

意表を突かれたハジメの追撃はワンテンポ遅れる。それで十分だった。

「幽香！」

一目散に駆け抜け、吹き抜けめがけて身をひるがえした幽香は翼を広げることすら叶わずに地階の床に叩きつけられた。だが、その程度なら動きは鈍らない。

「千晃、もう少しだけ付き合ってもらおうよ」

赤いワンピースをいっそう紅く染め上げた幽香は倒れたままの千晃を担ぎ上げた。苦痛にあえぐ彼女に小声で何度も謝りながら、吹き抜けを見上げる。

「千晃を——クソッ！」

うろたえ、ハジメは急に眩暈を覚えた。危うく階下にまっさかさまに落ちるところで手すりに持たれた彼の目にぐつしよりと血でぬれた自分の脚が映る。

必死で気付かなかったが彼の足元は血の海だった。

「やべ。出すぎ……」

包帯をキツく縛るだけの原始的すぎる血止めをしつつ、傷口を焼いてしまうことも考えたが。激痛で意識を失うか、失血で死ぬか。どちらが先かという問題でしかない。

「お前、本当に妹のことも忘れちゃったのかよ」

気力を振り絞って立つと、階下を覗き見る。すでに二人の姿は消え、非常階段に向かって血の筋が続いているだけだった。



「——で、たしかあなたは最初に私を殴ったのだったわね」

消し飛んだ肩は再生の気配がない。

赤い手形を非常階段の壁に点々と残しながら、幽香は休み休み上階目指して昇っていく。

「あそこで我慢できたのは、我ながらとんでもない進歩だったと思うわ」

ぽこ、と千晃の拳が幽香の背中を打った。

「おねえちゃんのどあほ」

浅い呼吸の切れ間切れ間から、千晃はうわごとのように言い放った。

「あにきと殺し合いつて、本当にまじりけなしにそういうことかよ」

「ええ。あまり、しゃべらない方がいいわ」

「うるさいな」

残り少ない体力をぽこぽこに費やしつつ、千晃は泣いていた。

「まだ間に合うよ」

「いいえ」

「わたしもついてたげるから。あにきに謝って、全部説明しよう」

「できない相談ね」

幽香は我知らず足を止めていたことに気付いた。肺がつぶれる様に苦しい。血なまぐさい息が喉奥からせり上がってくる。限界は近い。

「やめようよ。おねえちゃんもあにきも死んじゃう」

「大丈夫よ。ハジメは死なないわ。あの子はあなたが思うよりずっと強いもの」

千晃を下ろすと、幽香は自分の掌をじつと見つめた。そこで開いていく、小さな小さな、一輪の花を静かに手折る。

「それじゃあ、おねえちゃんはどうなるんだよ」

「私は——遅かれ早かれ、こうなっていたと思うから」

そして鼻先に突き出されたその花を見た瞬間、千晃は全てを思い出した。

『くうん』

蝸牛の怪異。それに勇敢に立ち向かう兄と姉の姿を。

「この、花」

「いいわね。毎日一歩ずつでいい。ドアを開けて、あなたの立ち向かう世界の目に、あなたの姿を焼きつけてやりなさい」

そして、間もなくすべてを忘れるということまでも思い出してしまった。

「いやだ」

「大丈夫よ」

「そういうことじゃない。おねえちゃんのことを忘れちゃうなんて。そんなのイヤだ。これで終わりなんて。言ってたじゃないか。おねえちゃん、あにきの面倒なところが大好きだって。なのに——」

妖気を込められた勿忘草の香りが、否応なく千晁を昏倒させた。

穏やかな寝息を立てる千晁がこれ以上悪夢にうなされないことを祈って口づけすると、幽香はまたふらつく足で遙か上を目指して階段を昇っていく。

4 『ハジまりをゼロに（下）』

目は蜃気楼の中にいるみたいにかすんで、あちこちで折れた骨と折れかけた骨が不平の声を上げ、脚の傷はまるで腐りかけのトマトみただ。

「今行く」

非常階段の防火扉を押し開けてハジメは上階を仰いだ。

「俺たちはこんなボロボロになつてまで、何やってんだろな」

壁の手形は答えてくれない。

彼のいる階から屋上までは十階分。失血気味の体にはあまりにもキツイ距離を、ほとんど四つん這いで彼は進んだ。

「寒い」

黄金の輝きを失った太陽が、時折彼の背後で思い出したように赤い火花を吐く。光の槍は徐々に本数を減らし、今は僅か数本がはみ出た内臓のように垂れ下がっているだけだ。

「凍つて、死にそうだ」

止血の必要は既に無くなった。

「あんたと戦つてるときは、あんなに楽しくて、あんなに辛かったのに、もう寒さ以外なにも感じられない」

お互いの体が死に近づくにつれ、ハジメは嫌でもこのダンスが終わりに近づいていることを意識せざるを得ない。

「ごめんな」

気付けばドアは目の前にあった。

「また、ヘタレかけた」

ドアノブにべつとりとくつついた幽香の血の手形。それに手を重ねてしばらく瞑目すると、ハジメは一気に扉を開け放った。



空気は透明で、千里先まで見通せそうだった。

屋上は爆発の影響でほとんど床が潰れ、虫食いの葉のようにあちこちから鉄の骨組みが見える。

足下。かつて自分が描いた大きな赤い丸が端だけ残っていた。

二度目の奇跡を願ってこのビルに忍び込み、絶望し、そして織鴈に襲われ、幽香という別の奇跡によって命を拾われた。

「待たせた——いや」

鉄骨の上を重力を忘れたような動きで駆け抜けてくる幽香の姿に、ハジメは目を細めた。

「お前は違うな」

眼前まで迫った彼女が振りかぶった右腕を振りぬくにハジメは任せた。

ハジメの顔面をすりつぶし目も鼻も口もないただの肉塊に変えるかと思われたそれは、しかし、無数の花卉となって崩れていく。

「分身なんて芸当もできたんだな。知らなかった」

すすす、と駆け抜けていった下半身もハジメの背後で倒れると花卉をまき散らして消える。そして煙のように花卉が舞うようになった屋上で、彼はよいよい幽香の姿を見つけられない。

例えどれほど劣勢で、どれほど狂っていたとしても、幽香が逃走なんて考えもつかない。そしてそれは、今しがた幽香の分身が現れた鉄骨の先を見るにしたがって確信へと変わっていく。

「千晃！」

幅一メートルもない鉄骨の端に、彼の妹は胴を引っかけるようにして寝かされていた。壁も床もなく、遙か下方を指差す彼女の手先から血のしずくが滴っている。

明らかに罠だ。それでも、ハジメは前に進むことを選んだ。

「つとと……落ちたらぐしゃぐしゃだな」

もはや見えない地階から噴き上げてくる強風にあおられたハジメはうつかり足を踏み外すところで踏ん張った。掌に粘り気のある汗がじわじわと沸いてくる。

芋虫のように、もどかしすぎる早さでハジメは鉄骨を這い進む。鉄骨は端に向かうにつれ微妙に下向きの傾斜がついているおかげで、気を抜けば即滑り落ちて死ぬ。

千晃もまた同様だ。

びゆう、と額に風が吹き付ける。

「いっー！」

足の傷にむき出しのボルトの切っ先が潜り込んだ。

痛みに身じろぎした瞬間、すり減ったスニーカーが見事に足場を見失った。とつさに伸ばした手が血にぬめっていることも忘れていたので、結果は最悪だった。

「いいいいいいいい………」

地上百数十メートルに両手の指先だけでぶら下がる状態になって、ようやくハジメは町の様子を見下ろしていた。

見られている。

通りにひしめき合う人々の目。ビルの屋上に並んだカメラの列。そのすべてが、ハジメの一挙手一投足を追っていた。

「こっちは死にかけてるのに、クソ、マジで他人ゴトだな」

肘をなんとか鉄骨の縁にかけて体を引っ張り上げながら、ハジメは何度も途中で力尽きて落ちる想像をしていた。

結局その時は訪れず、ハジメが我に返ったときには既に息を荒げて千晃の体を抱いていた。

「よかった。生きてる」

こうして妹を最後に抱きしめたのはいつだったか。

「ごめん。遅くなった」

こんなに暖かいものだとすることも忘れてしまっていた。

「そうだ。救急車。きつと助かる。今呼ぶ——」

携帯を取り出し、液晶に指を走らせようとして、画面が異様に明るい閃光を反射していることに気付く。

「しまっ」

ハジメの意を汲んだように、その日輪が彼の指先に燃える大盾を形作った。不意打ちの光線がバラバラに散らばっていく中、盾を縁取る日輪に大きな亀裂が走った。

「クソ。こんな時に——」

宙に投げ出された携帯は一度外壁に弾かれて、果てしなく落ちていく。

それが誰かに当たりませんように、なんて心配する余裕はない。日輪から切り離された光の槍が背後の襲撃者へと飛んだ。

それをハエのように瞬時に撃ち落として、彼女が鉄骨の上に踏み出し始める。

「ハジメ、よく聞きなさい」

耳を貸しちやいけなさい。

幽香の攻撃をしのぎ切ったハジメは即座に大盾に命じた。大きく歪んだ日輪が甲高い悲鳴のような音を立てて大砲へと変形していく。

「世界は残酷で、運命はそれ以上に残酷よ。本当に、千晃じゃなくても足がすぐむくくらいにね」

不完全な大砲は不完全な光線しか吐けない。

ハジメの切り札は千切れた幽香の右肩を掠め、あさつての方角の空に太陽のような爆発を引き起こした。

「ここまでの理不尽なんてほんの序の口。この瞬間だって、あなたのもっと最悪に向かって落ちていく途中でしかないのかもしれない」

彼女の二射目を盾で受け止める。鉄骨が赤く焼け始めている。

「大人になるって、きつと痛くて怖いことよ」

亀裂は更に広がり、ハジメの目の前で日輪の一部が音もなく崩れ落ちた。瞬く間にそれが灰となって消えていく。

「あなたが大人になれば、もつともつと辛くて耐えられないようなことが次々と襲ってくる。あなたのあしもとに敷き詰められたガラスは、いつだってあなたが転ぶ瞬間を今か今かと待ち構えているわ」

血を絞りつくしたというのに、ハジメの目は熱を取り戻していた。

「ねえ。あなたはとんでもなく不幸なへたれ。それなら」

「それでも……!」

半壊した日輪が再度大砲へと変形する。

それはもはや光を失った土くれであったが。砲門の輝きはもつとも眩い。

「それでも俺は立ち止まるわけにはいかない。俺には」

幽香の手元に光が収束する。もはやハジメの能力で受け止めることはできない。正面切つて撃ちあう。それだけだ。

涙を振り切つて、見えないトリガーに指をかける。

「俺には、野望があるからだ！」

見えない弾倉がゆっくりと回転して、見えない弾薬が、見えない撃針を誘う。致死の閃光を前に幽香は、

「そう」

幽香は、明らかに充填の間に合わない閃光を振り捨てて、

「それなら、こんな理不尽ひとつ乗り越えていけるわね」

振り捨てて、笑った。

「ツ！」

実に、嬉しそうに、笑っていた。

いつもの微笑みとは違う。眠りにつく寸前の子供のような、安心しきった表情だった。それに後押しされたハジメの指はトリガーを絞り、無情にも極大の光線が幽香を正面から捉えた。

束の間。

何も聞こえなくなった。

何も見えなくなった。

何も感じなくなった。

焼け溶けた鉄骨が指先を焦がす感触でさえ、ハジメの心を揺らすことはできなくなった。

「やつ、た？」

屋上を包んだ黄金の炎。

その中からゆっくりと現れた幽香の姿が、その答えだった。

「ハジメ」

彼女には右側がなかった。

既に失っていた右肩。そこから下腹をこつそりとやられた幽香は、それでも壮絶に立っていた。

ゆらりと彼女が歩きはじめ。

「なんだよ」

こんな瞬間でも幽香は強く、美しかった。ハジメはそれに気圧されて、戦慄するばかりだ。持ち上げた指先が重い。水ぶくれのできた指先で火花が散る。

崩れかけの日輪にはもはや大砲を形作るだけの力が残されていない。
いい。

「止まれ。止まれ。もう、いいだろ」

指鉄砲が当たる度に鉄骨の上で幽香はふらりと揺れ、その都度またハジメへと歩み寄ってくる。指を削ぎ、足首を撃ち抜き、残された腕をも穴だらけにして。

「これ以上俺にあんたを撃たせないでくれよ!!」

ついにその指先を幽香の赤い瞳に向けて、結局撃てなくて。

「ッー」

ようやく発揮できたへたれっぷりが幽香の心臓に弾丸を叩き込ませた。

ほんの一瞬幽香は体をひきつらせた。そして、ハジメの目の前までやってくる、すんと腰を下ろす。

「ああ、さすがにタフだ」

白く、細い腕がすつと伸びて、ハジメの首に回される。

「……………やっぱりあんたには、勝てないのかな」

大好きだったこの手で、どんな最期を迎えるのか。ねじ切られて潰されるのも、そんなに悪くないかなと考えていると、幽香はゆっくりと頭を振った。

「いいえ。あなたの勝ちよ」

粘った甲斐があった。

ハジメにそこまで言わせれば、もはや悔いはない。

「本当に、本当に強くなった」

「おまえ」

口の中に花と血の味が広がった。

ハジメにはもう一滴の血も流す余裕はない。それは、幽香の舌だった。永かったようにも短かったようにも思えるキスの後、あつけにとられるハジメの目の前で幽香の瞳が静かに瞬いた。

「これが、あなたにあげられる最後の……褒美」



「おぞましい」

万場は一つ目を細めて、射手の隣にしゃがみこんだ。

「撃てますか」

「はい。今ならろ号でも問題なくやれるかと」

「万場ア！」

ついに我慢の限界に達した今井が背後の男を殴り倒して駆けだした。後ろ手に縛られているというのに、そこからはまさに獅子奮迅だった。噛みつき、蹴り、押し倒し、あちこち殴りつけられながら万場の数メートル手前まで迫った今井は、

「ぐうっ」

結局数では叶わず、その場に潰される。

「タイムリングが巡ってきましたよ、今井さん」

「万場、お前、性根まで腐り切りやがって！」

今井の叫びに、それまで座り込んでいた寺田がわずかに顔を上げた。

「いまい、さん」

その瞳から、うつろが取り払われた。彼はゆっくりと立ち上がると眼鏡を押し上げ、髪を整え、上着のボタンをかけ直す。

「万全を期してターゲットを変更します。は号を狙ってください」

「分かりました。は号を狙います」

冗談みたいに巨大な狙撃銃が、その矛先を青年へと向ける。

「こつちを見ろ、万場」

地獄の底から響くような低い声が発せられたのは、その時だった。
「寺——」

万場の声は、立て続けの発砲音にかき消された。ハジメの足を撃つたまま持ち続けていた拳銃を胸ポケットから引き抜いた寺田はまず射手の腕を撃ち抜くと、万場に銃口を向ける。

「なるほど。面白いですね」

異形の胸元が爆ぜ、鮮血が吹いた。

どうと仰向けに倒れ込んだ万場を足蹴に、寺田は弾倉に込められていた残りの弾をすべて吐き出させた。

ぴくりとも動かなくなった万場へと尚も空撃ちを続けていた寺田は顔を上げ、焼けたビルの屋上を見つめる。

「今井さん、俺、こんな形でヒーローになんてなりたくなかったです」

「寺田」

ぱん。

「大抵それは死にたがりに付けられる名前です」

倒れる寺田と入れ替わりに立ち上がった万場の手には自動拳銃が握られていた。

黒いスーツには血糊どころか穴の一つもない。

「忘れましたか、寺田さん。僕は『僕たち』です。四発の弾丸は、別の世界線の、既に役目を終えた万場幾絵が引き継ぎました」

万場が目配せすると、それまで時が止まっていたように男たちは慌ただしく動き始めた。血を流し、呻く射手と動かなくなった寺田が引き摺られて運ばれていくのを尻目に、万場は狙撃銃を撫でる。

「ふむ」

地面に釘づけされていたそれを、万場は力任せにむしり取った。

片腕一本で対物狙撃銃を構え、今まさに幽香と何事か言葉を交わすハジメの頭部に狙いをつける。

彼はまるでうっかり落としたリンゴを拾うように、なんの呵責もためらいもなく、仕事をしてのけた。



「ハジメー」

唐突なキスに安心していただけハジメはいつしか幽香の抱擁の中にいた。

どこかから放たれてきた攻撃に自ら盾になった彼女の体を貫いた衝撃は、ハジメの肋骨をもへし折るだけの威力を持っていた。

「が」

「……………大丈夫」

ハジメから幽香の体がどうなってしまったのか、はっきりと確かめることはできない。

翼が抜け落ちて風に舞って落ちていく。腕を通して感じる彼女は

体温を急激に失って、軽くなつていった。

「これからきつと、何もかもよくなるわ」

片腕でハジメの背中を撫で続けた幽香は、不意に体を離し、ハジメの胸に掌をあてがった。

「遅くなつちやつたけど。おめでとう」

彼女はもう一度、小鳥のついでのようなキスをした。

とん、とハジメの胸を押し、鉄骨の上から滑り落ちていく。花の香りが遠ざかっていく。

「あなたを愛していました」

幽香の微笑みが、階下の闇に吞まれて消えていった。

ハジメはただただ、それを見送ることしかできなかった。どうして自分が手を彼女に差し伸べて、どうして叫んでいるのかも理解できずに。

ただ、息苦しくて、寒かった。

「おめで、とう？」

ハジメの背後、輝きを失った日輪からまたひとかけ灰の塊が滑り落ちて、碎ける。



「なあ、紫。本質つて一体なんなんだ」

結局暴れまわった雪之丞は、閉じ込められた結界の中から紫を睨んだ。

「ずっと前に言ったよな。無理やり能力に背けば、本質を損なうことになるって」

「ええ。そうね」

細い路地の奥の奥。雪之丞の前に腰を下ろした紫は、満身創痍の吸血鬼以上に憔悴しているようだった。

「この町の守護者は使命に縛られ、あなたは想いに焦がれ、あの子は息詰まりする世界に風を引き込みたくて穴を空けた。これが、本質」

いずれも強大な能力だ。

しかし最強の能力には最強の代償がついて回る。雪之丞は焦がれすぎて心臓を焼いてしまい、エリカは自分の時間までも縛り付けた。

だが、ツケるばかりで払っていないヤツがいる。

「一人、ズルをしてないか」

結界を叩いた雪之丞の拳が消えて無くなる。

あまりに強力な檻に苛立ちつつ、ビルの屋上から真つ逆さまに落ちて行った人影を見て、彼はまた暴れ狂った。

「もちろんあの子の能力にもちゃんと代償はある。ただ、それに今まで気づかなかっただけで」

そうした代償は、大抵あとから重くのしかかるものだ。



ハジメは千晃を背負ったまま、無表情に家を目指した。

ここまでの道のり、誰も手を差し伸べようとはしなかった。未曾有の異常現象が続いているのだ。無理はないが。

「はい、そうです……はい。ケガは、結構重くて、俺も」

野次馬もクラスメートたちも、もういない。

千晃を玄関先に下ろして、ハジメは電話をかける。運よくつながった消防署から救急車が到着するのを待つあいだ、彼は包帯を巻きなおしたり、潰れたりリビングを調べて時間を潰した。

「ハラ減ったな」

いつの間にか差し込んでいた夕日が無感動に見つめる。

幽香を殺したというのに、何も感じない。きっといろんなことが一日で起こって、マヒしてしまったのだろう。

「なんか、ないかな」

電気も通っていないので、冷蔵庫の中身はきつとダメになってるんだろうな、とひどく現実的なことを考えながら白いドアを開けて、ハジメはそのまま悲鳴を上げていた。

「あ、ああ」

それは。それは真つ白な。

「そう、か。今日は、俺の」

18本のロウソクが立てられたケーキが、そこにあった。

ようやく何もかも悟った。幽香の振る舞いも、「おめでとう」も。

彼女は徹頭徹尾正気で、冷静に現実を見据えていた。ハジメが逃げ

切れるはずがないと知って、最後まで上手に役を演じきったのだ。

「なら、なんだ。俺は、もしかして。俺は、家族を」

彼の背後に崩れかけの日輪が浮かびはじめ。この息詰まりした世界に風穴を空け、バラバラになった家族を一つにするための能力が。

「家族を——ころし、た？」

では、『家族を一つにする』という約束が達成できなくなったとき、それは何を意味するのだろうか。

やがて日輪すべてが灰となって崩れ去ったとき、ハジメの体も同様に糸が切れた人形のようにくずおれ、床に倒れ伏していた。遠のく意識の中で、聞こえるのは救急車のサイレン。

風見幽香はほとんど完璧な役者だった。

ただ一つ、彼女に誤りがあったとすれば、それは、自分がいかに愛されているかを理解できていなかったということだけだ。

第二十二話『ハジまりをゼロに』おわり

5 『紅霧異変（上）』

「見舞いに来たのですが」

最近ぼんやりしている。

消毒と薬品のおいが充満する冷たい廊下。病室から逃げ出すように転がり出て、ソファに腰掛けているうちにしばらく意識を飛ばしたようだ。

「ああ。ありがとうございます……その？」

「鶴見君とはちよつとした知り合いです。前に仕事と、ええと、プライベートでお世話に」

ハジメの父があくびをかみ殺しながら立ち上がり、病室へと案内するも、別段壮年の男は気にした様子は無かった。

「息子も喜びます。わざわざこのために？」

意識不明のままかれこれ二週間。

「私の部下も入院してまして。二人を見舞いに」

全身の打撲、骨折、切創、刺創、極めつけは右太腿の銃創。

どこで、なぜ、そんなものを抱え込むハメになったのか。彼の息子は語らない。

医者が回復の見込みはないと言った時から、父はまた、言い訳をするように激務に身を浸すようになっていった。

「息子さんは友だちが多いようすな」

提げていた包みを持ち上げてから、壮年の男は困ったようだった。

サイドボードにも棚にも土産がぎつちりと敷き詰められていた。中には謎めいた風呂敷だったり時代めいた香炉だったり、どこの誰がこんなものを持ち込んだのか首を捻らずにはいられないような物まで混ざっている。

「すいません。お預かりします——最初は学校の子たちが日替わり

りで来ていたんですが、そのうち変わったコも来るようになって」

「変わったとは？」

「見た目は普通なんです。ただ、物腰が浮世離れしているというか。それに俺あ見ていないんですが、ナースの話だと昨日の深夜に狐と猫

までやってきたらしくして」

「はは。まさか」

「それが行儀よく並んで待合にいたらしいです。アレをくわえて」

枕元に油揚げや玉虫の死骸まで持ち込まれて、死んだように眠るハジメは少し迷惑そうに見えた。

「それで、その変わった子とやらは何か言っていましたか？」

「故郷に帰るからお別れをと」

なんのこつちや、と父は頭を搔いた。しばらく風呂に入っていない。自分でも少しにおう。

「いけない。そろそろ家に帰らなくちや」

腕時計を確認して出て行く父に軽く会釈して、壮年の男——今井はワイシャツの襟を緩めながら、石彫りのようにどつしりとイスに体を預けた。

ふと窓際を見る。午後の日差しが心地よい風に乗って病室に吹き込んできていた。

相手は聞いているはずもないのに、今井は言葉を慎重に選んだ。

「鶴見君。じつは、俺も別れを言いに来た」

この声が少しでもいいからハジメの眠りの中に届いてくれないものかと祈りながら今井は続ける。

「俺たちが思っていたように——いや、それ以上に万場という男、たちは強かったみたいだ。強がって俺は手も足も出なかったし、寺田は、あいつは勇敢に戦って、それで今も集中治療室だ」

人間離れた狡猾さ。そして、並行世界からいくらでも代わりの命を引っ張ってくるという不滅性。加えて警察組織という後ろ盾までついている。

「やめるか死ぬか。そういう提案をあの後くらった。金は貰ったから、俺は家元に帰って兄貴の農園でも手伝って隠居するつもりだ」

こんな幕引きは嫌だと、正義の味方に憧れ、最後までなれなかった男の固く握りこまれた拳が言っている。

「大人は、こんなにズルいんだな」

パジャマの胸が上下している。その動きはあまりに穏やかだった。

「……………今。ヤツらはあの廃墟で必死に瓦礫を掘り返してる。表向き、あのビルの解体工事だと言い張って」

そういえば初めて会った時もこの場所だったな、と今井は遠くに見える焼け跡に視線を馳せた。

「たぶんあの下には何かがある。あいつらにとって最も都合の悪い何か、まだそこに眠っているんだと思う」

束の間、穏やか過ぎる呼吸が止まったような気がした。閉ざされ続けた瞼が開いたような気がした。

が、それは全くの幻視だったらしい。

今井はごまひげをさすって、イスを引いた。

「すまない。とんだ無駄話だったな。おっさんは帰るよ。いろいろ整理しなくちゃいけない。そうだ、持ってきたリング、よかつたら食べてくれ」

去り際に持ってきた包みから林檎を一つ取り出すと、今井はハジメの枕元に置いてやった。

「今年のは特にいい出来だそうだ」

病室をあとにしつつ、今井は一度振り返った。ハジメはやはり、細り切った体で横たわっているだけだ。



「帰ったぞ」

千晃の部屋の前にコンビニの袋を下ろしてやりながら、父は疲れたようにドアの前に腰を下ろした。

「……………クソあにきは？」

一週間ぶりに部屋の主が姿を見せた。

からからと車いすを押してやってきた彼女の片足にはギプスが巻かれている。全身傷だらけの彼女の体からは、汗に混じって消毒のにおいがした。

また部屋に引きこもりはじめてから、だいぶやつれたようだ。

「今日もダメだった」

「そ」

袋をガサガサやって紙パックのジュースを取り出すと、千晃は乾い

た唇にストローを咥えた。じゅじゅじゅ、という下品すぎる音に父は思わず嘔き出す。

「お前は相変わらずマイペースだな」

「空気読めないのは今に始まったことじゃないからね」

「風呂沸いたから俺の前に入ってこい。さすがににおうぞ」

「は？ 私のどこが——」

びろびろに伸びきったシャツの脇の下に鼻を突っ込んでみて、千晃は軽くええずいた。

「ぐええ」

「おい千晃、マジか」

「くっさ。じゃあ、お言葉に甘えちやおうかな」

「そうしろ。幽香さんが見たら、きつと怒る」

千晃から返ってきたものは同意ではなく、ぽかんとした表情だった。

「あの人が、なんで？」

「……いや、なんでもない」

退院してからずっと千晃はこんな調子だった。

あれほど慕っていた幽香を「あの人」と呼ぶようになり、ビルでの出来事を聞いても「覚えてない」「忘れた」と返すばかり。

「へんなお父さん」

きつとあのビルでひどいことがあったのだと思う。

「そうだな。どうにもぼんやりしてて」

平然と廊下で服を脱ぎ散らしていく千晃から目を反らして、父は携帯を取り出した。数週間前のニュース。二度目の爆発事故。人型の飛行体。

『つい先ほど三度目の爆発が起きました。繰り返します、近隣住民からの光が見えたとの通報の後どうわあああああ！』

アナウンサーの無様をふっと笑って、父は画面に映る四度目の爆発を見つめる。

ネットではどちらかといえば彼のリアクションの方に注目が集まっていたが、そこを飛び回る人型も長らく議論の的となっていた。

画素数の荒い映像では、何度見てもそれは赤い点と金色の光でしかない。

だが、父には消えた二人の家族の姿がどうにもチラついた。

「おっと」

立ち上がろうとした父は立ちくらみを覚えて壁に手をつく。力の全く入らない肘がぐんにやりと曲がって、そのまま彼は床にしりもちをついていた。

「お父さん!?!」

車いすを押してくる下着姿の千晃を、彼は手で制した。

「いや大丈夫。最近よくある」

「よくあるって」

どこかにガタが来たか。

ぐるぐる回る視界に耐え切れなくなって目を瞑ったまま、父はよろよろ立ち上がると寝室へ消えていく。

「おねえちゃん」

それを見送ることしかできないまま、千晃は我知らずその名前を口にしていた。

「私、どうすればいいの?..」

庭ではすっかり咲きほこったヒマワリが、四月の風に揺れている。主人の帰りをひたすら待つように。

◇◇◇

知る必要がある話と、

必ずしもそうでない話がある。

ここからはそういうものだ。

少なくとも、この世界線の万場幾絵はいい顔をしないだろう。

◇◇◇

肺が焼けたのか、うまく息ができなかった。

あたり一面のヒマワリ畑は燃えていて、天をも焦がす勢いで業火が立ち昇る。

「こんなに、強く、なったのにね」

炎に包まれた太陽の畑を、最強の妖怪と呼ばれた風見幽香は駆けていた。

追われていた。

「あつ」

傷付けられた腕を庇いながら走っていると、不意に足を取られて彼女は転んだ。それは骨だ。かつて彼女がいたずらに殺してこの場所に埋めた何者かの頭蓋骨が、恨めしげに彼女を睨んでいた。

「……………このっ！」

彼女の人睨みでそれは焼かれて砕かれた。黒く焼けた血を吐いて、幽香は再び走り始める。幻想郷の終端。大結界を目指して。

「逃げれば逃げるだけ、苦しい思いをするわよ」

ひまわりの下に、日傘の妖怪が立っている。わき目も振らずに幽香は彼女の前を駆け抜けた。

「あなたはもう長くない」

その先々で同じように彼女は待っていた。

傾きがちの日傘の下から見える彼女の唇が、小刻みに震えている。足元にすり寄った狐と猫が憐れむような目を幽香に向けていた。

「あなたはおかしくなって、何もかも壊して、殺して、消える。その前に打つべき手を打たせてもらおうわ」

「勝手ね……………！」

幽香の放った閃光は日傘の妖怪にかすりもしなかった。

「あなたは幻想郷の抱える、最初の負債よ」

無力感に打ちひしがれる幽香の背後から無数の光弾が地面を砕いて迫る。満身創痕の幽香には避けることができない。

「嫌」

意識が一瞬途絶え、次に目が覚めた時はひまわりの林の中に倒れて

いた。

「幽香、どこ？」

赤いリボンの揺れる黒髪が、すぐ傍の道を抜けていく。

「これ以上、あんたもあんたのヒマワリもいじめたくないの。出てきなさいよ」

幻想郷の守護者は束の間頭を抱えてうずくまったようだった。

「……………ホント、どうしてこうなっちゃったのかしらね」

幽香を覆い隠すひまわりたちが静かにしろ、と囁きかけてくる。

その理由を彼女が問いただす前にあさつての方向でひまわりの茂みが一斉に揺れ始め、霊夢の輪郭が青白く輝いた。

「ダメよー」

意志を持った極彩色の光球が囷めがけて殺到し、炸裂の後、そこには奇麗に半球状に削り取られた大地だけが残されていた。

「さすがに花はお友達ってコトか。見たでしょ幽香、これ以上隠れるなら私はここらの畑全部……………ああもうッー！」

たった今自分が行った仕打ちによほど腹が立つたらしい。目を真っ赤にした霊夢が地面を蹴るなり、衝撃波がひまわりの太い茎を根元からへし折り、彼女自身は音速の弾丸となって遙か彼方に飛び去った後だった。

「ありがとう。ごめんなさい」

今まさに炎に吞まれて消えていくひまわりたちがバイバイを告げる様に揺れていた。

「ごめんなさい」

どこまでも強くなって、何もかも守れると思った矢先。

見つかったものは消滅の運命と自分の限界だけだった。どこまでもどこまでも天を目指して伸び行くひまわりにかつては憧れたものだったが。

「ごめん、なさいっ」

何度も何度も幽香は転び、泥だらけになりながら果てを目指した。やがて最後の一本のひまわりに見送られて、それからはひたすら岩と砂だけの寒々とした景色の中を走り続けた。

そして時間の感覚すらあいまいになる頃——月明かりの下、それが彼女を待っていた。

「なに、これ」

あまりの冗談に笑ってしまいそうになった。

それは文字通りの壁だった。道の果てに、奇麗な立方体に切りだされた巨大なコンクリートの壁が幽香を阻むようにでんと鎮座していた。

「これが大結界？」

さらさらとした表面を撫でていた掌を離すと、すぐさま幽香は最強のげんこつを大結界めがけて繰り出した。

「こんなものっ！」

ヒトの作ったもので風見幽香の進撃を止めることはできない。それは間違いない。

だがこの巨大な塊はうつろう大結界がいたずらに映し出した外界の断片でしかなく、それに気づいたときには幽香は結界の反作用で弾き飛ばされた後だった。

「そんな」

壁には穴の一つも開かなかった。

あざ笑うように無傷で佇む壁は、まさに幽香の限界を象徴するものだった。

「嘘」

何度拳で壁を打っても。

「嘘よ」

何度幽香が邪険に突き飛ばされても。

「こんなところで、何もできないまま、終わりたく、ない」

壁は依然として静かに佇み、無駄な努力に費やす力もなくなって這いつくばる一匹の妖怪を睥睨していた。

「いやよ」

過去を知る最後の一人を葬ってから、もう絶望などすまいと誓ったはずなのに、彼女の心に立ち込めるのは日差しの一筋も通さない暗雲だった。

遠くの空をふわふわ飛んでこちらへ向かってくるのは見慣れた紅白の巫女装束だ。もはや抵抗する気力もない幽香は頬を濡らす血を拭って地面に捨て、壁にもたれてその時を待った。

『人生、マジでうまくいかねえ』

その眩きが届いたのは、いつそ自分で全部終わらせようかと考え始めた時だった。

「え」

『ああ——ああ、クソ。俺は一体何やってんだ』

壁には大きな赤い円が描かれていた。

金属の表面を削ったように薄れた壁の向こう側に映るのは、黒髪の、外界の恰好に身を包んだ青年の姿。スプレー缶を片手に彼が覆った目には、幽香と同じく暗雲が渦巻いている。

「本当、運命って理不尽ね」

おそらく向こう側からは何も見えないのだろうか。

おずおず立ち上がった幽香は、彼が壁についた手に、自分の掌を添わせていた。

『そんなことは分かっていたさ』

『そうね。絶望、しちやうわね』

『——？』

明らかに様子が変わった青年は、自分の掌を見つめていた。

『今、何か』

壁越しにも伝わったぬくもりを確かめようと彼はもう一度手を伸ばしてくる。それがなんだかおかしくて、幽香のイタズラ心に火がついてしまった。

壁を軽く叩いてみる。しかし反応はない。

「ふうん。それじゃあ、どうしましょう」

考える傍から、彼女の頭に答えが浮かんできた。同じことをしてやればいい。

「じゃあ、これは？」

体を濡らす自分の血を拭い取って、彼女はふと考えた。そして微笑む。幸いにも、今日はどうやら頭が冴えているようだ。

彼女が円の周囲に赤い放射線を書き加えていくと、効果はすぐ現れた。

鳩が戦術爆撃でも食らったような顔でよろよろ下がっていく青年を見るに、怖がらせすぎちゃったかな、とも思ったが。

『ははっ』

彼には意図が伝わったらしい。

「うふふ」

二人とも血と塗料にまみれて一心不乱に手を動かすうちに、それが壁に描きこまれた。

赤い円と、その周りを覆い尽くす線。

ひまわりであり、お日様であり——風穴だ。

『長い間警官やってると、不思議なこともあるもんだ』

「幽香。もう気は済んだでしょう?」

壁の向こう側とこちら側。

ひまわりを描いていた二人は、同時に振り返った。

「幻想郷から逃れる方法は絶対じゃない。そんなことがあるとすれば」

言いかけて、霊夢は首を振った。

「そのへタクソ、おひさまでしよう?」

『こんなかわいいお花を見たのはこれが初めてだよ』

「確かに言われてみればおひさまかもね」

『花。ああ、そう言われればそうかも』

一緒にひまわりを描いていたと思うだけに、幽香は軽くむっとする。

「お花でしよう?」

『いや、花だろう?』

『花ですね、きつと』

二人から一斉にツツコまれて、壁の中の青年は少ししよげたようにも見えた。それがおかしくて、幽香はつい笑った。霊夢の緊張も少し和らいだようだった。

「何か、いいことでもあった?」

「それなりに。いい思い出が出来たわ」

「そう」

幽香は振り返る。向こうも振り返っていた。間に風穴を挟む。

「それじゃ、終わりにしましょう」

世界が、宇宙全体が、もう少しだけこの形に近づけばいいと思った。シンプルで、底抜けに陽気で、もつともつと風通しのいい形になればいいと、心の底から思った。

「ありがとう」

『ありがとう』

青年の指が持ち上がる。その先に、その瞳に、その背後に、巨大な力の渦を見た。

『ばん』

霊夢によって浮かべられた無数の光球が炸裂するよりも早く、途方もない距離を駆けた黄金の弾丸が幽香の心臓を貫いた。

「あ」

熱い。彼女の血を巡った太陽の輝きが彼女の力の限界を粉々に打ち砕き、かわりに新しい形をそこに刻印する。鶴見ハジメの幻想。すべてが元通りになった、家族の姿。

その夢に添い遂げたいと思った。

「それなら、私は」

ここで立ち止まることなんてできない。

「あんだ、その力、いったい」

極彩色の爆風が吹き荒れた後。無傷で荒野に佇む幽香の姿を見た。霊夢の驚きといたらなかった。

「さようなら、霊夢」

「ダメよッー」

不敵に笑った幽香は霊夢に背を向けると、壁の日輪めがけて勢いよく飛び込んだ。

そこは灰色の風が吹き荒れる虚無だった。幻想郷と外界。二つの世界からつまはじきにされた世界の断片が小惑星帯のように漂う。

まるで宇宙空間だ。

「そこね。そこに、あなたはいるのね」

彼方に輝く巨大な星を見つけた瞬間、黄金の血が旧い力を呼び覚ます。

純白の翼を広げた幽香は数万光年の距離を駆ける。

「邪魔あツー」

行く手を阻む断片を光線で切り崩し、尚も幽香は飛び続けた。たつたいちどの羽ばたきで光の速度をも軽々と超え、たった一つの感情に敗北した相対性理論に中指を立てて。

何日も。

何週間も。

それはどこまでも、どこまでも、いちずな飛翔だった。

ならば恋だったのだろう。全てが始まるよりも早く、彼女の愛は燃えていたのだ。

「助けて、くれ」

そして。

「いいわ——あなたを助けてあげる。とりあえず、この場はね」

そして降り立った、燃えるビルの中。もう一度奇跡を起こして見せろと幽香はハジメに告げるのだった。



「——う、あ」

目を醒まして、幽香は体を内側から焼くような激痛に呻いた。

「ろ号、覚醒しました」

シリンジを持った防護服姿の男が下がっていくにしたがって、廃墟に充滿する闇の中から黒いスーツの男が現れた。異様な長身。大理石の皮膚を持つ、単眼の怪人だ。

「なぜ。なぜ、私は」

「あなたの胸ポケットに、これが」

男が無表情に差し出したものを見ようとして、幽香は絶叫した。神経を火であぶられるような痛みは際限なく強くなっていく。

「お気に召しましたか」

万場はもう一度、指の先につまんだ金色の輝きを横たわった幽香の鼻先に突き出した。

しかし、それはただ単に廃墟を埋め尽くす重機の灯光で輝いて見えていただけらしい。折れてひしゃげて血に汚れ、その上中央に二つ目の穴が開いた五円玉だ。

「そんな」

すべてを貫き、幽香の心臓を再生不可能に叩き潰すはずだった弾丸は、直径たった二センチほどの金属板によって阻まれていた。

「そんな、ばかなこと」

奇跡はいつも、望んだ形で起こってくれるとは限らない。

「脊髄への50口径の直撃。それに加えてあなたの目覚ましはどんな怪物でもたちどころに死ぬような毒のカクテルだったんですがね。頑丈だ」

「——ふふ。そうか。あなたが」

万場は撤収をはじめた重機の群れを束の間見つめ、遠巻きにしていた機動部隊へと顎をしゃくった。彼らがブーツの底をタイルに鳴らして近づく間、ずっと幽香は静かな笑いをもらっていた。

「恨みますか。それもいいでしょう」

万場は異形をさすった。

「これ以上私の体に呪いを受け入れる余地があればいいのですが」

「いいえ。むしろ感謝しているわ」

「ほう」

「あなたが私の幸せを土足で踏みにじつてくれなければ、私はきっと、もっとハジメが欲しくなっていたに違いないから」

「あなたは女だ」

「ええ。どうしようもないくらいに」

二人はしばらく吹き抜けから差し込む陽の光を見上げていた。機動部隊の数人が、困ったようにその視線を追う。

「そうだ、言っておくけれどまだ少し暴れる余裕はあるわよ。あなたがこの先ハジメたちに手を出すって言うのなら」

「その必要はありません」

想像を絶する痛みに意識を焼かれながら、幽香はそれでも美しかった。激痛にのけぞり、血を振り絞る姿は妖艶ですらあった。

「プランBは完遂されました。鶴見ハジメに脅威性はもはや存在しません。彼はあの一件の直後から、かれこれ二週間、昏睡状態です」
その一言を聞くまでは。

6 『紅霧異変（下）』

二本目。

「最後にあなたとこうして話す機会が持ててよかった」

三本目。

「自ら能力を破壊した者の顛末。きつと、あなたがどれほど長く生きていようが、そう目にかかるものだとは思えませんでしたから」

四本目。五本目。

「——そして六本目、ですか。嘘のようですね。万全のあなたが機動部隊とぶつかった想像をするだけで、背筋が凍る」

万場の見下ろす先では、もはや悶えることもなくなった幽香が虚ろな目で横たわっていた。

「それももうすぐ、終わりでしょうが」

万場は空になった注射器を次々と床に投げ捨てていく。彼がやりすぎなのは誰の目にも明らかだった。

スーツの死神が最後の幻想に緩慢な死を与える間、日は陰っていた。F市の空には彼の昏い愉しみを覆い隠すように厚い雲が渦巻いている。

「あの子に」

銀の指輪をはめた指先が、しおれた花卉と塵の積もったタイルに筋を描いた。

「はい。聞いていますよ」

「あの子に嘘、ついちゃった」

「そうですね」

七本目。

「この世界線の鶴見ハジメ。彼を死に導くのはウイルスでも交通事故でもなく、あなただった」

「あの子とあの子の家族を幸せにするって約束したのに」

「結局あなたは何も残せないままだ」

最後のシリンジが床に放られて砕けた。

うわごとのように後悔を吐き出すだけになった幽香を前に万場が

抜き出したものは、寺田を撃つたものと同じ自動拳銃だ。

「殺して」

「もちろん。そのために来たのですから」

苦痛と後悔で、幽香の意識は混濁していた。

「ああ、そうだ。ひとつだけ心残りが」

もはやどこを見ているのか分からない幽香が漏らした一言。今まさにとどめを刺してやろうというところで万場は指を緩めた。今さら数秒の猶予を与えてやったところで、結果にどう関わるというのだ。

「それは？」

「最後まで——おいしいって、言ってもらえなかったな」

万場は幽香の眉間に銃口を突き付けたまま首をひねった。

「まったく。つくづくあなたたちはよく分からない」

呆れながら万場は安堵する。ようやくこの異常な世界線での仕事も収束するのだ。

しかし、トリガーを絞る段になって万場は横っ跳びに身をひるがえした。

「ふうん？」

寸前まで万場の頭があつた場所を通過していったのは人体だった。

そのまま壁に叩きつけられた彼の身を包んだ鎧のような防護服。

赤黒い槍がいくつも突き立てられ、ハリネズミと化した彼は恐怖に表情をひきつらせたまま意識を失っている。

「その、薄汚い手を、離しやがれ！」

正面から堂々と入ってきたそいつが、鉄の沸騰するような重く熱い叫びをあげた。彼の背中で巨大な二枚羽が開くなり、訓練された機動部隊が一斉に銃口を向ける。

「やれ」

万場の一声で、闖入者の全身が爆ぜた。

「おおおおおッ！」

彼が踏み出す一歩一歩ごとに血しぶきは火花に変わっていく。

赤黒く輝く胸の炉心。そこからつきつきとせり出す金属質の鱗が、

彼の全身を覆いはじめているのだ。

「なるほど。番狂わせか」

「お前、お前だけは——！」

拳ひとつで機動部隊を蹂躪しながら、鋼鉄の巨体が万場へと迫る。暗がりへと溶け込むように消えていく万場めがけて、彼は胸から引き抜いた槍をぶん投げた。

「逃がさん！」

「今さら何を期待しているのですか」

その声の大半は、突き立った槍が噴き上げた赤黒い稲妻にかき消されたが。

万場の手元で、汚れた五円玉が輝く。

「じつに愚かだな」

次いで爆発。

度重なる戦闘で痛めつけられた壁が、がらがらと崩れる。

「やったか？」

もうもうと煙る中に金属鎧の音が響く。

悪鬼めいた意匠のマスクに覆われた槍の担い手の顔面。むなしくコンクリートを貫いただけの槍を前に、四つの赤い眼点がゆっくりと細められた。

「ユキなの？」

弱々しい声に、口惜しげにしていた吸血鬼は弾かれたように踵を返した。

「はい。あなただけの雪之丞ですっ！」

「ふふ」

変わらないのね、と雪之丞にかかえ上げられた幽香は囁いた。

紙のように白い顔。濁った瞳。氷のように冷たい体。とげとげしい鎧に身を包んでは抱きしめてやることもできず、かわりに雪之丞は地面に視線を走らせた。

「毒か」

割れて砕けた容器を見て改めて万場に怒りを募らせながら、雪之丞はつぶさに考えた。

「逃げなさい。私はもう、いいから」

次いで、重装備に身を固めた男たちを見下ろす。

この状態の幽香を連れて逃げ回ることにはできない。万場はこうしている間にも次策を練り、追加の武力を送り込んでくるだろう。何度でも、際限なく。

「最後に助けに来てくれて、ありがとう」

重体に鞭打って、労うようにマスクの頬を撫でてくる幽香。

「最後になんかささせやしない」

なんのために強くなったのか。

紫の問いに、ようやく答えを出せそうだった。人としての体を捨てて吸血鬼になり、強大な力と生命力を得た理由にも。

「無礼を」

音もなくスライドしたマスクの口元が、細く鋭い牙を得た口元を露わにする。

「い、た」

「すみません」

それをそのまま幽香の首筋へ。

喉を滑り落ちてくる、毒混じりの妖血。体を内側から焼かれるような痛みには慣れっこだ。花の蜜のように甘い血に吸血鬼の本能が歓喜の声を上げる。

「ッー」

ほとんどすべての毒と血を吸い出したところで、雪之丞は我に返った。

「……許してくれなくても、いいです」

俺はこの人に一体何度謝るんだろうかと思いつながら、雪之丞は翼を広げた。

強力な妖怪の血も、毒も、彼にとってはさして大差ない。それを全身に巡らせるにしたがって鱗と鱗、翼を覆う甲殻の隙間から赤い霧が染み出してきた。

「やめなさい、ユキ。今度こそ死んでしまうわ」

薄く笑んだ彼の口元を再びマスクが覆う。

「構いません」

憤怒の形相を映し出す金属板の奥で彼がどんな顔をしているのか、もはや知りようがない。彼は既に自分の限界を幽香との決闘の中で見ている。強大な力を行使すればするほど、彼の体は加速度的に崩壊していくのだ。

「俺は待つだけです」

鋼鉄の悪鬼はねじれた槍を地面に突き刺し、彫像のように固まった。

彼自身、何を待っているのかも分からないままに。



焼け跡から噴き出した紅い霧はすぐさまF市全域を包み込んだ。

「霧で見通しが悪くて困ったわ」

今しがた眼下で発生した玉突き事故を無感動に見つめながら、霊夢はつらつらと、いつかのセリフを連ねていく。

「もしかして私って方向音痴？」

通りでバタバタと人が倒れていくのが見える。

当然紅い霧はただの煙幕なんかじゃない。ただの人間が触れればたちどころに精気を抜かれて昏倒し、数日も放っておかれれば衰弱死する。

「そんなに長くは続かないでしょうけれどね」

先に、大元の吸血鬼に限界が来るだろう。

霊夢は足下のコンビニ袋をあさって緑茶のペットボトルを取り出すと、雑誌を片手に電波塔の上に座り込んだ。

「のんき」

湧き上がる悲鳴もすぐに収まった。

「ほら、ねえ、ユキ」

霊夢もまた待つ。

雪之丞にはやりたいようにやらせてやる。そのかわり、霧が晴れたときにはすべてにケリをつけにいかなければいけない。

「今日の月はこんなに紅いわ。見えてる？」

塔のように聳えるのは全てが始まった高層ビル。

紅い霧はゆるやかに渦を巻いて、その頂点にぼんやりと輝く紅い月を形作っていった。

◆◆◆
「なんだこれ」

窓際から惨事を見つめていた千晃は目を疑った。

ちょうど今、家の前を通りがかつたご婦人が連れの小ごとぶつ倒れた瞬間だった。

「あかい、霧？」

駅前の方から押し寄せてくる霧は意志を持ったように獲物を探し、隙間という隙間から家の中にまで入り込んでくる。

「や」

ドアの下からぬるりと入ってきた霧は床を舐めるように広がっていく。

「助けて、お父さん！」

車いすの上で身を縮めて、千晃はゆっくりと這いあがってくる霧に怯えた。

「お母さん！」

いくら声を張り上げようとも、頼みの綱の父はとつくの昔に玄関先で倒れている。たった一人で、千晃は途方に暮れるしかない。

「お願い、いやだ。助けてよ、あにき、おねえちゃん！」

その名を口にしてから、千晃は恐れも忘れて固まった。

ほんとうにほんとうにどうでもいい二人。その名前をどうしてここまで心強く思えるのだろうか。

「あにき」

その頼もしい後ろ姿。無数の怪物に囲まれても、彼は『大丈夫だ』と笑う。

熱く駆ける弾丸。太陽のような瞳の輝き。

「おねえちゃん」

どんなピンチでも気高く戦う天使のような姿。

家族のために傷ついて。本当の姉のように、どんな粗相も笑って許してくれた。

「私は」

テーブルの上、勿忘草が頷くように花卉を揺らした。

記憶にある、優しい香りが漂う。彼は、彼女だったかもしれないが。その花は『千晁に辛い思いをさせるな』と命じられていた。

「私」

命に代えてでも、彼女の心の平穩を守れと。

「わたし！」

だからこれは命令違反なんかじゃない。

『おねえちゃん』を忘れて、また死んだように生きていくことの方が、彼女にとつてずっとずっと辛いことだと、判断しただけだ。

「お父さん、起きて、お願い！」

幽香は愛されていた。彼女が思う以上に。彼女の育てた花にさえ。

「お父さんつたらー！」

悪い夢から醒めたような顔で千晁は玄関めがけてすさまじい勢いで車いすを飛ばしていく。しおれて枯れていく勿忘草が、その背中へと一枚の花卉を飛ばす。想いを託すように。

「ん、俺、また社畜病が」

ガツガツと後頭部に車輪を当てられて、父は手荒く目覚めさせられた。た。

「そうかもしれないけど。そうじゃないんだよ、これ！」

二人の周りから霧が退いていく。勿忘草の花卉に秘められた妖気が霧を弾いているのだ。

「紅い、霧？」

「そのリアクションさつき私やったから！ いいから支度して、出発しんこー！」

「ま、まてまて。一体何が起きてるのやら」

「おねえちゃんが大変なの。きつと、あにきも！」

「お前、記憶が」

やつれてはいたが、千晁の調子は完全に戻っていた。

その真剣なまなざしに、父は頷く。何かただ事じゃないことが起こっているのだ。

「わかった。千晃、待ってる。クルマのカギ持ってくる」

父はそこで、一度玄関の敷居を見つめた。そこから先に行くことが、一年近く引きこもってきた娘にとって何を意味するのかを確かめるように。

「いけるな？」

千晃は頷く。力強く。

「あたぼうよ。あ、でもお父さん、外は事故だらけだよ。ウチの軽でも」

「いいから待ってろ。んで今のうちに心の準備しとけ」

リビングに駆けて行った父が戸棚からカギを取り出し、ガレージに向かう。

彼を見送ると、千晃はゆつくりと車いすから立ち上がって伸びをした。右足も左足もひどいもんだ。だが、これ以上甘えてはいられない。

「待ってて。今度は、私がおねえちゃんたちを守るから」

外。霧は空にも地面にも濃く立ち込め、夜のように暗い。遠くのビルの上に輝く紅い月を見つめていると、家の前から重厚なエンジン音が響く。

まるで、眠りについてた獣が目覚めたようだった。



父の運転は卓越したものがあつた。

完全に凍結した交通網。ワナのように横倒しになった車も、数メートルの隙間も、危なげなくすり抜けていく。

「ちよ、ちよちよちよ、お父さんぶれーきぶれーき！」

「ダメだ。言つたら、俺の荷台に乗るんなら心の準備しとけって」
獰猛な獣のように大型バイクは町を駆け抜ける。

ハジメと幽香によって廃車同然の姿で帰ってきてから数週間。激務の合間を縫って父の手でひそかに直された鋼鉄の巨獣は以前よりも上機嫌にエンジン音を響かせた。

「切り込むぞ、千晃」

「どっ」

父の言葉に理解が追い付かないまま、ぐんと引つ張られるように二人は横倒しになった。

「ひゃああああ………！」

千晃の悲鳴を尻尾のように引き摺って、バイクはほとんど直角に曲がった。

「うひよ」

ヘルメットの下から聞こえた不気味な笑い声に、千晃は父のスイッチが入ってしまったことを悟った。

「うひよひよ」

「お、おとー？」

更に数度『切り込み』ながら、父は片手をヘルメットにかけ、そして脱ぎ捨てる。バイク同様フルスロットルで突っ走る父のテンションに唾然とする千晃の背後で、ヘルメットが服屋のショーウィンドーを粉碎した。

「楽しいなあ」

愛おしげにタンクを撫でて、父は磨きこまれた相棒の感覚を確かめる。

「ずっと、こいつのことを見ないフリしてた」

速度と遊ぶ父の姿は、千晃の目には十歳も若返ったように映った。

タコメーターが一ミリ触れる度に父とバイクは一体感を増す。

「お前のことも、ハジメのことも。仕事を言い訳にして、俺は自分の心の声に立ち向かう勇気が持てなかったんだ」

いつしか父におんぶされているような安心感を千晃は感じ始めていた。

「悪かった」

そうしてミラー越しに視線をくれた父は、親子ということを抜きにしてもカツコよかった。

「べっ、べっに、いいよ」

「そうか？」

「埋め合わせ、これからしてくれるんでしょ」

「そうだな。まずは仕事辞めてみるか。な？」

自然と顔が赤らむのを感じながら、きつと杏奈が惚れたのはこんな父の姿だったんだろうな、と千晃は考える。

「ところで千晃、アレから遠ざかってるみたいだけど、いいのか？」
父が指すのは紅い月だ。

「うん。あれは私達にはどうにもできない。そんな気がする」

バイクは蛇行し、時々遠回りを強いられながら、病院を目指していた。

「そこでハジメか」

「信じてくれなくてもいいけど、あいつはすごい力をもってるんだ。あにきならおねえちゃんを助けられる。きっと」

「今更お前を疑ったりはしないさ」

川を渡る橋の上を通りかかった時、父が目を細めた。

「お父さん」

「ああ。妙だな。なんだこいつら」

テレビでしか見たことのないような車。機関銃をさらけ出した装甲車と、銃を下げた男たちが折り重なって意識を失っていた。

「分かんないけど、でも」

とてつもなくイヤな感じがした。

一刻も早くあにきをむかえにいかなくちゃ——同じものを父も感じるようで、軽く頷いた。

「うお」

いや、そうではなかった。文字通り頭が揺れたのだ。

「こんな、時に、クソ」

目が見えなくなるくらい眩暈を覚えていても体は反応する。

しかしレスポンスが最悪だった。中途半端に父の指令を聞いた体は見事にバイクの前輪だけをロックし、

「おおおおお父さん、ちよつと!?!」

「えーと、ごめんね?」

バイクは勢いよく前のめりに転げた。

父に抱きかかえられて地面を転がりながら、千晃は東の間意識を飛ばす。

◆◆◆
「千晃」

次に目が覚めた時、とりあえず全身をひどく打ちのめしたことだけは分かった。

「千晃起きろ」

「おとう、さん」

痛すぎて這いつくばることしかできなかった。

父は横転した愛車にもたれたまま、ぐんにやりと折れた左腕を傍らに投げ出していた。

「だ、大丈夫!？」

「ああこりやいってえ。クソいってえよ」

そうして憑き物が落ちたような顔でこれまたカツコよく笑うのだった。

「でも生きてるって感じがして——マジサイコーだぜ」

「あのさ」

頭から血をたらたら流して、よくもそこまで粹がれるもんだと千晃は呆れて笑った。尚も這って近寄ろうとする千晃を、父は制した。

「おいおい。せつかくこんな急にやっただ。呑気してないでさっさと行ってやれ。ハジメが待ってるんだろ」

「でも」

「こんぐらいのケガ、自分でなんとかできる。大人だからな」

「うん。お父さん、あにきを助けたら、すぐ戻るからね」

「昼寝でもして待つてるよ」

よたよたと去っていく千晃が振り返るたびに、父は追い払うように手を振った。スクランブル交差点を曲がって彼女の姿がようやく見えなくなったあたりで、父は大きく息をついた。

「やれやれ」

背中から腹を刺し貫いた鉄筋を引き抜く気力もないままに、彼は目を閉じた。

◆◆◆

「いつ、たあ。ああ、痛い」

無理をしているのは父だけではない。

千晃が這いずる後には血の筋が続いた。さっきの転倒で、縫ったばかりの傷が開いたらしい。

「やっぱり外は大変だなあ」

坂道を登れば病院はすぐそこだが、今の千晃にとってはたった数百メートルが何万キロにも感じられる。だんだん体が冷えていくのを感じながら、千晃はふと横道に目をやった。

坂の中ほど。ひっそりとした場所にバス停があり、年季の入った、実に座り心地のいいベンチが待ち構えている。

「少し、休もうかな」

半ば無意識に頭をそちらへ向けて、千晃はすぐに思い直した。

「ダメだ。行かなきゃ」

この瞬間もあにきとおねえちゃんとは戦っているのかもしれない。ここで一人、千晃がへたれることはできなかった。

だが彼女のやる気とは裏腹に、ペースは徐々に落ちていく。千晃は顔を真っ赤に、歯を食いしばって昇るのだが、病院のわずか十数メートル手前までやってきて、唐突に限界が来た。

もうちよつと頑張るくらいの力はある。

だが嘘のように、たった一ミリも進めなくなったのだ。

また、自分の無力さを思い知るだけだぜ、という声に耳を貸してしまったのだ。

「ごめん」

叩きつけた拳を涙が打った。

ここまで送り出してくれた父の期待を裏切ることになるのが、何よりつらかった。

「私、やっぱりクソみたいな引きこもりだ」

「いいえ」

血と汗と涙に汚れた体が、ひよいと抱き上げられた。

「え」

「あなたはこんなに頑張ったじゃない」

「だ、だれ？」

嗅ぎ慣れない香水の香りと、柔らかな体の感触で、それが女であることは分かる。だが、どんなに必死に顔を動かしても、その顔は逆光で見えなかった。

この曇天にも関わらず。

「私、前に聞いたわよね。お父さんもお母さんも、あにきもおねえちゃんもいなくなったとき、あなたはどうするのかって」

女の肩を伝ってやってきた猫が、千晃の頬を舐める。

病院の前ではやたらと尻尾の多い狐が澄まし顔で待っていて、女が近づくと前脚を上げて自動ドアを開けてくれた。

「あなたの答えは見届けさせてもらった」

「む、むらさき？」

「さあ？」

エレベーターに揺られる間、千晃は少し怖くなった。

この先でハジメが待っているのは間違いない。ただ、二週間も寝たきりで、飲まず食わずだった彼がどんな姿でいるのか、見るのが怖かったのだ。

「私、ここまで来たけれど」

謎めいた女は軽く首を傾げて、先を促した。

「あにきをどうすればいいんだろ。あいつ、ずっと目が覚めないのに」
今さらといえは今さらすぎる疑問に、女は声を上げて笑った。チンと音を立ててエレベーターのドアが開く。消毒のにおいが強くなる。

「あなたは引きこもりでしょ。なら、自分の殻に引きこもっている彼の気持ちもよく分かるはずよ」

「だッ！」

それは車いすに千晃を乗せてやりながら。女の漏らした一言は聞き捨てならなかった。

「だれが引きこもりじゃいコラあ!？」

拳を振り上げて背後を見ても女の姿はない。寒々とした廊下だけ。女は現れたときと同じく、唐突に姿を消してしまった。

「後で掲示板にミソクソ書いてやる」

舌打ちしながら千晃は車輪を送った。

「でもありがと。礼は言つとくから」

それからは倒れたナースやら見舞客やらを避けたり避けきれなかったりしつつ、

「あうう」

「わあああ、ごめんなさい！」

ひたすら進んだ。

むらさき（かもしれない）の言葉はまだよく分からない。引きこもりの気持ちがあつたところを何をすればいいのか。

ハジメの病室にたどり着いてもその問いに答えが出ることはなく、千晃はゆっくりと車いすを乗り入れた。

「あにき」

——ああ。やっぱり、もうすこしだけ準備して来ればよかつたな。

ベッドの上。弱つたハジメの姿。

結局何も言うべき言葉を用意できなかった。ただ、彼の手を取つて、千晃は枕元のリングを見つめる。

「そうだね。きつと、私には分からないくらい大変なことがあつたんだろうね」

窓の外では地上の月が煌々とした明りを放っている。

「外は、やっぱり大変なところだつたよ。ここに来るまでに散々な目に遭つてき。あにき、いつもこんなところを学校まで通つてるワケ？」

彼に対して軽口以外の冗談を口にするのは久しぶりだつた。ひとりですくす笑つて、千晃はハジメの胸に顔を押し付けた。懐かしいにおいがする。

「辛いのは私だけじゃなかつたんだね。みんな本当は引きこもりたくらい辛い目に遭つてるのに、歯を食いしばって頑張つてるんだ」

窓枠に登つた猫と狐が千晃を見つめていた。

「お願い。私、頑張るよ。ガッコーに行く。空気も読む。あにきに迷惑はもうかけないから。最後のわがままをきいて」

千晃はハジメのにおいを吸い込む。

これから呼ぶのはなんてことないただの呼び名だが、今は呪文だ。
「おねえちゃんを助けてあげて——おにいちゃん」

厚雲を断ち割り、原初の炎を呼び覚ますための。



「おい」

ハジメは長い間目の前のそれを見極めようと必死になっていた。
ついさつき空港のロビーに降り立って、今自分と正面衝突をかまし
た男の顔。

「おい坊ちゃん。俺あさつきから大事ごさいませんかかって聞いてんだ
よ。あ?」

この大げさな演技めかした声。忘れもしない。

何度も見えてきた。あまりに長い入院生活、退屈な夏の午後。金曜の
再放送。とんでもなく長い時間をこの男を見つめて過ごしてきた。

「ジョン、マクレーン……?」

野沢那智の声で話す、ハゲてないブルース・ウイリスはハジメの胸
ぐらを掴んだまま、実に味のある口のすぼめ方を見せてくれるのだっ
た。

第二十三話『紅霧異変』おわり

7 『ダイ・ハード 0 ⇒ 1 (上)』

「ちよつと待つて。おかしい。おかしいぞ」

「なにがだスカタン野郎。お前さん以上におかしいヤツがどこにいるってんだ」

猛烈に揺さぶられて脳みそが耳から吹き出そうだった。

「………」

状況が一ミリも理解できないままにとりあえず指差した先はジョンの眉間。ハジメの指先へときゅつと寄った目が、すぐさますわった。

「んあ、あ、ん!?!」

NYPDの取調室で仕込まれた揺さぶりは本当に小便ちびるくらい恐ろしい。

本能がこいつを刺激するんじゃないと叫んでいる。が、誰だつて目の前にこんな面白い——濃い顔がぶら下がっていたら凝視するしかないだろう。

「だから、ヒトサマのツラ見て、ヘラヘラ笑う、おたくは、どこの、どちらさま、でしょう、かねえ!」

取り調べのあまりの激しさに意識を失いかけたころ、唐突にその手が離れた。

「にしてもそんな大荷物抱えて、おたくドコ行き」

空港のロビーに放り出されたハジメ。

そのかたわらにはジョンと衝突した時のまま、キャリーケースが転がっていた。まるで戦地から持って帰ったみたいに傷だらけで、しみだらけで、非常にこきたない。

「あんたの知ったことじゃない」

何を入れたかは忘れた。

どうせ背後ではまたヘンな顔で肩すぼめに天井でも仰いでんだろ
うな、と想像を働かせつつキャリーケースを持ち上げようとして、
うっかり前かがみにコケになる。

「重っ!?!」

床に張り付いたように動かない。ここまでどうやって運んできたのか不思議なくらいだ。

「貸せえ」

それをひよいと持ち上げて、ジョンはまた肩をすくめた。

「どの便だ？」

「あ、あっち」

おおん。

「おい、泥棒！」

ハジメが直感で遠くに見えるゲートを指差すなり、ジョンは放り出していた大きなテイディアを抱え、キャリーケースも無造作に掴むと、ずんずん歩いて行ってしまふ。

「人聞きが悪いヤツだ。こっちは親切で運んでやろうってんだぞ」

「ならもうちよつと大事に運べよ！ 人の荷物だぞ！」

「ごちやぶごちやうっせえなあ。俺がキャビンアテンダントにでも見えるか」

「見えねえよアンタニューヨークのデカだろ!？」

ぴたりと足を止めて、ジョンはハジメを睨んだ。

「どうしてそれを？」

マズいことを言ってしまったことにすぐ気付いた。

何か大変なことをしでかしたところまでは覚えている。

気付いてみれば空港のロビー。あたりを歩く外人たちの妙に時代がかった服装や古い施設に違和感と懐かしさを覚えていた理由。

「い、いや。別になんとなく言っただけで」

「なあ教えてくれよ。職業柄なんだ。なんたって、ニューヨークのデカだからな」

テイディアを抱えたジョン・マクレーン。1988年、クリスマス口のサンゼルス空港。どういう訳か、鶴見ハジメは傑作と名高い初代ダイハードの世界へと迷い込んでしまったらしい。

「その……………屈んだとき、上着の中に拳銃が見えたから」

「この銃が？」

ジョンはジャケットの脇を叩いて見せる。自分にしてはとっさに

いい機転を回すものだどハジメは我ながらに感心した。

「ああ。だってそうだろう。空港でそんなものを堂々とブラ提げてるのはデカかテロリストだからだ。んでアンタは悪そうなヤツには見えない」

もちろん直接見たわけではない。

だが、この直前に飛行機内で繰り広げられたやり取りをセリフの暗唱ができるほど見つめてきたハジメには朝飯前のとんちだった。

「なるほどねえ。なるほど。頭のいい坊ちゃんだ。だけど困ったな」

だが余裕の表情も悪役バリの高笑いでジョンが目の前でジャケツトを脱ぎ捨てるまでだった。

「生憎、今日はケツのポツケの方が収まりが良かったんだ」

顔をくしゃくしゃにして笑ったジョンがゆっくりと背後から拳銃を抜き出す。ガムテープの剥がれる音を幻聴する。クライマックスの死神だ。

首筋にじわりとした熱さを感じた瞬間の横っ飛びは大正解だった。

「でえええええっ！」

物陰に隠れたハジメへと執拗に連射される9mmがガラスのパーツを粉砕する。ナイフのシャワーのように降り注ぐガラス片を、ハジメは頭を抱えてやり過ぎた。

「猿芝居はヤメだ。実は俺も、お前さんのことはよおおおおく知ってるんだ」

マガジンを交換しながらジョンはハジメのキャリアケースを踵で背後へと蹴り込んだ。

「俺の知識は冷凍ピザの出現あたりで凍結してるが」

空港のロビーはいつしか炎と熱が立ち込めるばかりとなったオフィスに変化していた。ここがどこかなど聞いてみるまでもない。ナカトミタワーだ。

「この世はラベルのない缶みたいなもの。みんなが信じりゃクロもシロになる案外いい加減なもんだってあのオンナが抜かしてたな。ましてやお前さん一人の心の中なんて、どうにでも変わる」

ごろごろと転がっていくキャリアケースが向かう先にはぶち抜か

れた大きな窓があり、空港の搭乗口だけが空中にぼんやりと浮かんでいる。

「おおいどした。ガッツキ野郎」

物陰から飛び出そうとしたハジメを威嚇射撃で黙らせて、ジョンはフロアを見渡した。

「ガキの頃からお前がハマして病院に担ぎ込まれるたんびにテレビで見て、痺れて、憧れて、神のように信じてきたヒーローが目の前に居るんだぜ。もつとゆっくり話していけよ」

そんなバカなことが。

ガラスまみれで転げながらハジメはジョンの言わんとすることを理解する。それはどうあがいても呑み込めないような、あり得ないことだが。

「さあ、もう一度言ってみろ。俺は誰だ？」

ありえないことだが。

「間違いない………あんたは、ジョン・マクレーンだ」

忘れられて消え行く怪異たち。

「そういうこつた」

ならば、逆もまた然りということか。

「だとしたら、マジで最悪だな」

ジョンは所帯があるくせにアル中で女好きで、とても完璧な人間とはいえない。

ハジメはたったの一度だつてこの男と同じになりたいと思つたことはない。

「アンタにケンカ売つた悪党は軒並み死んでる」

しかし。

「アンタを狙つた弾は魔法みたいに避けてくし、近づいて殴ろうとするとやたら強くなるし。なんだかんだで最後はちゃんと締めるし」
ハジメにとつて最高のヒーローであることに変わりはないのだ。

「あんたとは絶対に戦いたくないって、小さいころから思ってたよー」
銃声に反射的に頭を下げる。

オフィスを真一文字に横断した銃撃は、危うく薄板越しにハジメの

喉笛に風穴をぶちあけるところだった。ガラスの上に手をついて、ハジメは転げるように物陰を後にする。

「クソ、どうして俺を狙ってくるんだ！」

ハジメはガラスに切り刻まれた手の甲を見つめた。ぞっくりとこそげた肉の痛みはまやかしてではない。

「死にたくなきゃあ、死ぬ気で避けるお！」

最悪の怪異、ジョン・マクレーン。

とことん得体の知れない相手だが、その忠告にだけは素直に従った方がよさそうだ。



「授業で習わなかったか？ 恐怖には立ち向かえって？」

耳の傍を銃弾が通り過ぎて行った。

ハジメは血だるまで逃げ回るだけだ。

「ああクソッ！ それはこっちが丸腰じゃない場合だろ!？」

事務机を盾に、ハジメは何度も能力の発現を試みる——が、ダメだ。見えない糸がぷつぷつ切れてしまったように、今は何も感じない。

「……ツイてない」

「似たもの同士だな！」

「お断りだつーの！ バーカ！」

思わず叫び返すと、返事代わりに雨あられと割れて砕けた電燈とモルタルが降り注いできた。ジョンが天井を銃撃したのだ。

「これラスト・デイの戦法だろ！」

むせながらハジメは目に入り込んだガラスを払った。

「バカ野郎俺は昔っから機転がきく男なんだよ。お前さんと違ってな！」

落ちたガラスに映る像をハジメは見詰める。

短機関銃をどこからともなく取り出したジョン——転がり続けるキャリーケース——その向かう先に浮かぶ搭乗口——

そして、爆発で転げて中身をぶちまけた消火ボックス。

「俺あいい加減お前さんの中には飽き飽きしてたんだ——よおおつ

!？」

物陰から飛んできた赤い消火斧を紙一重でかわして、ジョンは振り向きざまに機関銃を乱射した。机の上に弾痕が走り、燃える書類が舞い上がる。

「くそつたれが！」

肩を掠めた銃弾の痛みにひいひい言いながら物陰を移動するハジメを認めたジョンは、抜け目なくキャリアケースと窓を背に獲物を探して左右に銃口を巡らせた。

「つたく。お前さんの中はブタ箱よりひでえや」

ジョンの素足がガラスを踏み分ける音で、ハジメはおぼろげにその位置を把握する。消火ボックスから回収した別の凶器を用意する。残りは二つ。

「例のヤバい力が使えなくて残念だよなあ？ あんな馬鹿げたものがあれば俺なんて一瞬でオダブツだ。そうすりやお前さんの」

ガラスの音が唐突に止んだ。

「勝ちだったんだけどなああ！」

床に倒れた柵の間に見覚えのある上着の後ろ姿を見つけ、ジョンは勢いよく飛び出した。ろくすっぽ狙いもつけずに放たれた機関銃弾が床を撃つ。ハジメの頭のかわりに弾け飛んだものは、上着をかけられて床に寝せられていた消火器だった。

ぼん。

数本まとめてあった消火器は勢いよく爆発し、ジョンの顔面と床にたっぷりと中身をぶちまけていった。

「目くらましのつもりか？ 不発だったな？」

足下にもうもうとわだかまるだけに留まった消火剤の煙を掻き分けて、ジョンの姿を持つ怪異はハジメを探した。

「こんな所にはさっさとオサラバ決め込んで、場末のパブで一杯ひっかけたいんだ」

「じゃあ出てけよ、さっさとー！」

「ところがどっこいよ」

炎の中にハジメの声が聞こえた瞬間、ジョンはすぐさまおおよその

位置を掴み取った。標的はだいぶ近くに潜んでいる。

「無策で外に飛び出してもすぐ消えるのがオチだ。俺あ人間の体が欲しい」

ハジメは消火ホースをぐるぐる巻きにしたドラムを抱えてその時を待った。敷き詰められたガラスの前でジョンが足を止める。

「そこで俺の体ってことかよ」

「お前さんの方からこっちに落ちてきてくれた時は神さまに感謝したぜ。外で何があつた？ズボンにシャンペンでもこぼしたか？」

ドラムを乗せたファイルキャビネットに片足をかけて蹴倒す寸前で、ハジメはふと考える。

自分について何もかも知ったようなジョンの言葉を疑う気にはなれない。ここは間違いなく自分の心の、それもかなり深い部分なのだろう。

「よく覚えてない。ただ——取り返しをつかないことをした、からだとと思う」

おそらく眠ったままの能力が、それに起因していることも。

「だからってお前に主導権をやったりはしない、から、な！」

派手なクラツシユ音にジョンの反応は速かった。

振り向きざまにぶちまけられた機関銃弾が勢いよく転がり落ちてくる鉄の塊の表面で弾けた。

「なんだあ？」

消火用のホースを巻かれたドラムがぐにやんぐにやんと蛇行しつつ、ジョンのすぐ横を通り過ぎていった。

「今のがお前さんのキテンってやつなら、ちよつと悲しくなるくらいお粗末だぞ」

ホースをだらしなく解きながら窓の外へと落ちていくドラムをせせら笑って、ジョンは無造作にトリガーを絞った。

「お遊びはここまでにしようぜ、小僧」

ハジメの爪先数センチの距離を弾痕が走った。

物陰から物陰へ。今まさに走り去ろうとしたハジメはもはや微動することも許されず、ジョンは立ちすくんだ彼に銃口を向けたままじ

りじりと近づく。

「いい事教えてやるよ。てめえの持ってきたキャリー、あいつが力ギだ」

搭乗口。そして、見えない誰かに押されるように転がり続けるキャリーケース。アレをそのままにしてはいけない、ということだけはハジメも本能的に理解している。

「あの中身がなんなのかは俺にも分からん。だがとにかく、アレをゲートにぶち込んで、小僧の手の届かないところに持って行きや俺の勝ちだ」

「で、俺がここから出て行くにはアレを取り戻せばいいんだな」

ジョンはまたまた肩をすくめて見せた。

こいつにやられる側になるとここまで腹が立つものかとハジメは内心驚く。

「できるのか？ この状態から？」

「簡単さ——ジョン、足元見てみる」

「あん？」

それは床にわだかまる消火器の煙でカモフラージュされていた。

いつしかフロアを横断するように伸びたホースはハジメの真横、木製の柱へと括り付けられている。その間もホースは窓の外へと伸び続けていく。

「いつも思ってたんだけど」

伸びしろがなくなるまで。

「あんた、敵の策にはワリと気前よく引つかかってくれるよな」

重りのドラムに引つ張られ、びん、と音を立てて張りつめたホースがジョンの足を払った。三十路男の屈強な肉体が尖ったガラスまみれの床に叩き付けられる。

「だあああああつ、このやろおおお！」

そこは流石のジョン・マクレーンだ。

体勢を立て直すことをさっさと諦め、キャリーケースめがけてわたわた走っていくハジメの背中に銃弾をぶつ放す。

「デカが民間人相手にぶつ放すんじゃねえよ！」

「やろおう。てめえのドコがパンピーだ！」

一発がハジメの脇腹を削り、壁に血飛沫を散らした。足をもつれさせながらも尚も走る。いくつもの銃弾が体を掠めるなか、ようやくキャリーケースへと追いつく。そのままタッチダウンを決め込み、諸共に横倒しになって進行を食い止めた。

「う」

くらりとした。

薄汚れたキャリーケースから、幽かに漂う香りに。何かとんでもないことをお前は見て見ぬふりしているぞ、と突き付けられたようだった。

「——鍵？　おい、聞いてないぞー！」

側面には重厚な南京錠がいくつも取り付けられている。

「残念だったな」

余裕の足取りでやってくるジョンを見つけて、ハジメは一層やかましく錠を打ち鳴らした。

「言い忘れてたがそいつはおそらく世界最強の錠だ。なら、鍵も世界最強じゃないとな」

短機関銃と拳銃を投げ落として、ジョンは後ずさるハジメへとぴんと伸ばした指を突きつけた。フロアを包む炎が、黄金色に変わる。

「おおい。見覚えがあるんじゃないのか？」

——言われなくても。

そんな一言が出ないくらいの緊張がハジメ喉を締め付けていた。

「教えてくれよ。なんだって土壇場のてめえはガンの形を選んだんだ？　穴を空けるだけなら別に槍だって爆弾だってかまわなかったはずなんだぜ？」

それは懂れていたからだ。

どんな理不尽に放り込まれても機転と拳銃の一本でハッピーエンドを取り戻すジョン・マクレーンをいつも心の中に描いていたからだ。

「できるだけ穏やかに済まそうと思ってたんだけどな。残念と面倒が増えちまった」

足下で、伸びきったホースがぎちぎちと音を立てて揺れていた。

「ジョン、俺の言うことを聞け」

「もうその手は食わねえぞ」

「痛い思いをしたくなきや、さっさとその指下ろしてひざまずけ。二度は言わない」

この状況でそこまで抜かすハジメがよほど面白かったのだろう。

ジョンはハジメに指を突き付けたまま目を覆って爆笑し始めた。ハジメも腹を抱えて笑う。ジョンの背後、ホースとドラムの重みに耐えきれなくなりつつある柱を見て。

「ハゲてなくてよかったな」

ハジメがそれこそひざまずくように床に伏せた瞬間、
ばきん。

と、木製の柱はあっけなく寿命を迎えた。

勢いよく窓の外へと引っ張られる柱。その先に誰が立ちはだかっているかなんて、愚問だ。くるくるしゆるしゆると音を立てて、柱は回転しつつ飛んでくる。

「あ？」

ジョンの後頭部めがけて。

派手に木片をまき散らして柱が砕け、ハジメの心に巢食う怪異は強かに頭を打ち据えられて大きく体勢を崩した。金属製のホースの先端に背中を打ち据えられつつハジメはキャリアケースを抱えた。

信じられないくらい重いのは変わらないが、なんとか動かせる。

「てつめええええ、このロクデナシめ、ぶっ殺してやる！」

ジョンの放つ黄金の弾丸から逃れる手段は一つしかない。

「もう二度と。というか三度も四度も登ってる気がするけど」

窓枠に足をかけ、遙か下に見えるロサンゼルス街並みに立ち眩む。

「こんな高いビルに登ってやるかよ！」

背後から迫る架空の存在の名セリフを吐きつつ、ハジメはキャリアケースと共に身を躍らせた。今回は消火ホースの命綱はない。驚くことにここから先は完全にノープランだった。

胃を突き上げられるような振動でハジメは目を醒ました。

暑く息苦しい暗闇の中を手探りで這いまわるうちに、忌々しい錠前の手ごたえを見つける。トランクもハジメも、どういいうわけかナカトミタワ一の一室から無傷で逃げ出すことが出来たらしい。

「千晃？」

彼女の声が聞こえたような気がした。

「そうだ、千晃。あいつ、ケガして」

廃墟の中で血塗れの千晃を抱える白い腕がフラッシュバックした。そこから上へと視線が滑るにつれ、ハジメの記憶にはノイズが混ざりはじめめる。赤いワンピースの胸元から上は、ほとんど擦り切れて見えない。

「誰だ」

大事なことを忘れている。

「誰だ、お前。いや、俺は、待てよ」

自分の左手を見つめる。薬指に光る指輪。

輝きに気を取られていると、ふと傍らで花の香りが立ち昇った。

がちん、と音を立てて南京錠のひとつが勢いよくはじけ飛んだ。

呆氣にとられるハジメの前で、ゆっくりとキャリーケースが開いていく。暗闇にもかかわらず、まるでそれ自体が光を放っているように。

ケースの隙間からすると伸び始めたのは記憶にあるものと同じ白い左腕だった。

「その指輪——」

揃いの指輪をはめた左手が「おいでおいで」とハジメに手招きしている。

誘われるまま、白昼夢にとらわれたようにキャリーケースへと近づいたハジメの襟首を、その腕が勢いよく捕まえた。

「うおおっ——」

未だかつてハジメが聞いたことのないような音が響いて、暗闇に風

穴が開いた。

ずっと続いていた振動は一層激しくなり、闇を切り裂く何かは、もはや爆撃にも近い。首根っこを押さえられていなければ、ハジメの頭もスイカのように弾け飛んでいただろう。

「ようやくとお目覚めか、小僧!?!」

もはやぼろくずと化したコンテナからハジメが立ち上がると、同じくオープンカー状態となったトレーラーの運転席からジョンが顔を出して叫んだ。

「お前、暫く見ないうちに頭が寂しくなったな!」

ジョンの禿げ頭がまぶしい。少し老けたようだ。

「抜かせ。四十にもなりやお前さんだってこんなもんだ!」

炎と煙。煤と血。

どこか埃くさいエッセンスの混じった強風を受けて、ジャンクションを爆走するトレーラー。そして、獰猛なエンジン音に混じって聞こえる、甲高いうなり。

「あー、マズい」

ハジメの眩きをかき消すように再び機関銃の掃射が彼を襲った。

先にキャリーケースを蹴り飛ばすと、荷台の上を吹き荒れる破壊の暴風の中を駆け抜けながら、ハジメは運転席を目指した。

「こりや4.0か。もうなんでもアリなのな!」

ジャンクションをぐるぐる上り詰めるトラックを追いかけて、垂直離着陸機がハチドリのように機敏にホバリングを繰り返して執拗な攻撃を繰り返してくる。

並の人間ならカスっただけでも致命傷になりかねない25mm機銃掃射の中、ハジメの口元には微かな笑みが張り付いていた。

「いいことでもあったか!?!」

ハンドルを切りながらジョンが声を張り上げた。

「なんだかんだ、アンタは憧れだったからな!」

だがその喜びは、まるで夏休みの最終日に宿題を放置したまま遊び呆けている時の気分に近いものがあつた。運転席に飛び乗ったハジメを、ジョンの拳が迎え撃つ。

「だからって手加減してくれると思うなよ」

頬を打ち抜かれて鉄くずだらけの荷台に放り出されたハジメの前にジョンが降り立つ。彼の肩越しに見えるハンドルが意志を持ったように逃走劇を続けていた。

「こいつあ俺にとつて千載一遇のチャンスなんだ。お前さんを倒して外に出る」

ジョンが構える。ハジメも見よう見まねのファイティングポーズをとる。

「時にお前さん、もう所帯を持ったのか？」

「しよ、所帯？」

何気ない一言に気を取られた瞬間、すぱんとい音を立ててハジメの顔を真正面から拳が打った。見事な不意打ちだった。

「ホレ、その指輪。マセやがって」

しりもちをついてハジメは揺れる頭を振った。

どくどくと噴き出す鼻血を拭う手には、確かに銀の指輪があるのだが。

「いつ——よく、覚えてない。多分大事なことなんだろうけど、ゼンゼン、思い出せない」

今度は拳を上手く受けたつもりだったが。実際上腕の骨はきししみ、激痛が背筋を走った。

「なんだ。カミさんとの不仲なら相談してみろ。実のところ、俺あその道の権威でね」

「話が一層こじれそうだ」

荷台から突き出た鉄パイプを引き抜いて、ハジメは構える。

「悪いけどそういうのじゃない。順風満帆だった。その矢先に何かがあつて」

再び眼底を貫くような頭痛に襲われたハジメは、危うく顔面を驚掴みにされるところだった。

「なにかつてなんだ？」

上腕に深々と食い込んだパイプの痛みで顔をしかめながら、ジョンがハジメの腹を打つ。更に数発もらいながらよろよろと下がりつつ、

彼は首を振った。

「さつきから、いてっ、必死に思い出そうとして、あいたた！ 話す時間くらい寄越せよな！」

「俺あカイブツだぜ。イチイチ空気呼んでられるかってんだ」

怪異。

怪物。

妖怪。

その呼び名に、どんな違いがあるというのか。

目の前のジョン・マクレーンの似姿がそうであるように、この半年で彼らはハジメにとつてずっと身近な存在になった。蝸牛。鯨。鳥。そして大妖怪八雲紫と、博麗霊夢と名乗る少女が現れ——すべてはまるで、鶴見ハジメを中心に公転する惑星のようでもあった。

だが。

「ただ、物足りないんだ。大事なものが欠けてるんだ」

あつという間に荷台に叩き伏せられたハジメは、困惑した瞳でジョンを見上げた。

「足りない？」

「やっぱ俺は何かを忘れてる。忘れちゃいけないことを、平気で忘れてる」

ジョンは胸ぐらを掴みあげ、ハジメを容赦なくぶん殴り続ける。これが世界を5度救った（もうすぐ6度になる。おそらく）男の拳だと言われれば、納得するしかない重みと痛みだ。

だが、ハジメの心配事は自分の頭蓋骨よりほかのところにあった。

「もう一度聞くぞ。俺にてめえの体を寄越しやがれ」

視界に星が散る。

この衝撃には覚えがある。真冬の公園。何度もぶっ飛ばされては子供に笑われた。

「俺は絶対にへたれない。お前さんの理不尽ってやつも、俺が木端微塵にしてやる」

理不尽。

その名前を持つ、あまりに強大な敵を前に膝を折りそうになる度

に、細いからだと腕がハジメを支えてくれた。前に進めと、叫んでくれた。

「おい。立てよ、小僧。いい加減死んじまうぞ」

殴られまくって感じるのは、顔面に焼けた鉄を流し込まれたような痛みだ。こんなピンチになる度に、どこからともなくやってきて、何も言わずに助けてくれて。

「幽香」

ふと頭の片隅をよぎった後ろ姿。

日傘を差した彼女が振り返る。白い肌。紅玉の瞳。虹色の炎のような、いい匂いのする髪。そして、血と花の味がした唇。

「そうだ、俺」

ハジメの表情に明らかな絶望の色が浮かんだ瞬間、荷台が大きく傾いだ。

「小僧！」

ジョンがハジメの頭を押さえる。

度重なる垂直離着陸機からの攻撃に耐え切れず、ついにジャンクシオンは崩壊をはじめていた。崩れ去った道路に運転席だけで引つかかったトレーラーは必死にエンジンを唸らせていたが、それがむなしい努力に終わることをハジメは知っている。

「ジョン、聞いてくれ」

するりとジョン・マクレーンの腕を抜けたハジメはもはやほぼ垂直になった荷台に投げ出された。

「体はやるよ。もう、俺の夢はかなわないみたいだからさ」

荷台が大きく崩れた。

うっかりとトレーラーの破片をエンジンに吸い込んだ戦闘機が小爆発を起こす。勢いよく操縦席が射出され、直後に地獄のハチドリはそれ自体が業火に焼かれることとなった。

「じゃあな」

ハジメは荷台をごろごろと転げ落ちていく。その先で待ち構える戦闘機は爆発間近だ。

「お前——おい、待て、それでいいのか!？」

唐突な敵の絶望に理解が及ばないままにジョンが伸ばした腕は間一髪で宙を搔いた。

「クソッ！」
dummit!

青年と共に荷台を滑っていくキャリーケースが、無数に取り付けられた錠を吹き飛ばしたのはまさにその時だった。ジョンが目を見開く。

「シヨーガールなんて呼んだつもりはないぞ」

世界で一番死に損なった男の呆れ声を背に、白い腕が、肩が、そして翼がキャリーケースから飛び出していく。

「？」

そうして裸の上半身をあらわにした女は、透き通った瞳から、透明な視線をあたりに走らせる。そして見つけた。今まさに、死の炎に焼かれようとするハジメを。

「」

花卉のような唇が紡ぐ言葉は聞こえない。

彼女はただ、決然とした意志を秘めた瞳でハジメを捉えると、飛んだ。

爆炎の前からハジメを攫うと、地上に折り重なった瓦礫の間めがけて一直線に降下し、姿を消す。

「おいおい、最強のカギつて。そういうヤツかよ」

遅れてジョンも荷台を滑り落ちていく。目指す先は一緒だ。この世界の持ち主、つまりはハジメの心の一番深い場所へと。



二人を抱き留めたものは灰だった。

ハジメは地面に横たえたまま、きらきらと宙を舞う粒子に目を奪われていた。

星のひとつもない空の下に、燃え尽きた白い灰だけの大地が無限に続いている。この世界の光源は、黄金の輪郭を浮かび上がらせる地平線だけだった。

「お前、どうして」

ハジメの傍らで三対の翼を持つ女が立ち上がる。

彼女はただ、無感情にハジメを見下ろすだけだった。

「そうか。そうだったな。今のお前さんには最強の映し姿が二人だ。まったく、ふざけた矛盾を抱え込みやがって」

重みを感じさせない姿で果てしない高さから降り立ったジョンの背中には、かつてハジメが背負ったものと同じ黄金の日輪が輝いていた。

幽香の姿をしたものが戦闘体勢をとる。

「よう。現実のコイツは元気か？」

彼女に明らかに敵意を込めて睨まれても、ジョンはいつものように唇をすぼめて見せるだけだった。

「死んだよ」

膝をついたまま、ハジメは弱弱しい拳で地面を打った。

巻き上げられた灰は傍らの女の目元にまで迷い込んでいったが、彼女は瞬きの一つもしない。それが尚更彼女がオリジナルとは違う、無機質な人形であることを強調していた。

「俺が殺した」

ジョン・マクレーンはハジメへと顎をしゃくった。

「悪い大人たちが……いや。もう悪いとか良いとかよくわかんないけど、とりあえず俺は大怪我して追われてて。こいつは俺を助けるために狂ったバケモノのフリをした。で」

「てめえはまんまと騙されて自分のオンナを撃った。そうだな。よく分かった。もういい」

「ああ。そうだ。本当、どうしようもない」

ともし火のように指先に宿った光をジョンがハジメに向ける間、青年は一度背後を振り仰いだ。真つ暗な地平に、巨大な影が見える。

それは、天から落ちて砕けた日輪だ。

「幽香」

灰を踏む幽香の素足。ハジメは蹲って、灰に額をうずめた。

「ごめんな」

幾ら謝っても無駄だということとは分かっている。目の前に居るの

はただの似姿であつて、本物の風見幽香は鶴見ハジメの手によって叩き落とされ、ぐしやぐしやに潰れたのだ。

奇しくも彼女の予言どおりに。

「もう、外にあいつはいないんだ」

今まで死ぬような目に何度もあつてきた。

今度ばかりはヤバいな、とボヤきながら、それでもなんだかんだ幽香との二人三脚で上手くやってきた。

「終わらせてくれよ、ジョン」

その幸運もここまでだ。

鶴見ハジメはこの数か月で、初めて膝を折つた。理不尽に敗北を宣言した。

「いいんだな、小僧」

ジョンのすぐ傍に空港のゲートが蜃気楼のように現れた。

彼はしばらくハジメを見つめて、そして、やれやれと言わんばかりの疲れ顔で首を振つた。

「降参なら降参で——もつと大人しくしてくれないかねえ」

「これ以上どうしろってんだよ。笑わせんな」

思わず吐き捨てたセリフに、マクレーンの刺すような返事が被せられた。

「お前さんじゃねえ」

きし、と灰を踏む音にハジメはようやく首をもたげる。

そうして目の前にあつたものは見慣れた後姿。

「どうして」

口をあんぐりとあけたハジメ、日輪を背に険しい顔つきで睨み付けるジョン。両者の間に割つて入つたのは、それまで人形のように佇んでいた幽香の似姿だった。

「嬢ちゃん。さつさとゲートに入んな。俺あパウエルほど女子供に甘くもねえ。自由になるためだったら誰でも撃つぜ」

ニューヨークのデカはおどけてみせるが、金色の炎を宿した瞳は至って真剣だ。

「やめろー！」

そして全てを貫通する力を前に彼女が選択したのは、悲しいくらい愚直な突進だった。

「ちっ」

ジョンの指先がひときわ眩く光を放ち、刹那、ハジメの顔には血飛沫が浴びせられた。幽香の胴体に大穴をぶち開けた弾丸の威力に、彼女は踊るように灰の大地に倒れ込む。

「……おい。やめろ、頼むからよ」

血と灰に汚れた幽香が、のそりと立ち上がった。ジョンが舌打ちする。すぐさま胴体に新しい穴を空けられた幽香が倒れ込み、また立ち上がっていく姿をハジメは我を忘れて見つめていた。

『まずは身の護り方よ』

それは幻聴だ。

『心、そして体の死角』

この世界の音らしい音は、幽香の体に穴が開く瞬間のものだけだ。『防ぐのか、逸らすのか、受けるのか。あなたが一手間違えれば、すぐにこうなる』

それを忠実に守り、ハジメは幽香に勝利し、殺した。はずだ。

「俺にこれ以上何をしろっていうんだよ!？」

幽香は死んでしまった。だが彼女と同じ姿を持つそれは、何度でも何度でも立ち上がって身を挺した。

「嬢ちゃんが何を言いたいかなんて、わざわざ聞いて確かめるような仲でもないんじゃないか?」

束の間、灰の中から立ち上がる幽香と目が合った。その瞳が語るところはあの日と同じだ。

——立って戦え。と。

その言葉の圧に、ハジメは思わず立ちすくんだ。

『外は、やっぱり大変なところだったよ』

動揺に追い打ちをかける様に、聞きなれた甲高い声が虚無の空間に響いた。

「千晃の声だ」

ハジメがきよろきよろとあたりを見回す間、ジョンは攻撃の手を休

めてハジメを見据えていた。

『辛いのは私だけじゃなかったんだね』

徐々に鮮明になる声の出所は背後だった。

三人の視線が注がれるのは地面に落ちて死んだはずの日輪。それが今、黄金の燐光を放っている。

『私、頑張るよ。ガッコーに行く。空気も読む。もうあにきに迷惑はかけないから、最後のわがまをきいて』

こんな単純なことも忘れていたとは。

「千晃、頑張ったな」

外には千晃も、父も、母もいる。それすべてを投げ出して、自分だけが不幸だと殻にこもっていた。

『おねえちゃんを助けてあげて——おにいちゃん』

そして最後の一言は、空から降り注いだ雷のようにハジメを貫いた「それ、ずいぶん久しぶりに聞いた気がする」

やはりこの声も幻聴なのかもしれない。それでも幽香がまだ生きていて、ピンチの只中にあるかもしれないということ。それだけ可能性があれば、ハジメをふるい立たせるには十分だった。

「にしても兄貴って大変だな」

今度はバーベキューを配達するより骨が折れそうだが、なんとたつて愛する家族の頼みなら仕方がない。灰を掴む手に力が籠る。折れていた膝が地面に別れを告げる。

ハジメの瞳に、黄金の火花が散った。

「カッコ悪いとこ見せちまった」

幽香の隣に立つと、ジョンは妙に小さく見えた。

それはハジメがようやく立ち上がったからだ。ようやくスタートラインに戻ってきた。ようやく、前に歩きはじめることができる。

「俺はもうへたれない。かかって来いよ、ジョン・マクレーン」

幽香は澄んだ瞳をハジメに向けて——笑って肩をすくめた。イヤというほど見てきた動作は、彼女が似姿だということのを忘れさせるには十分だった。

「おいおい。そりゃないだろ」

一方でジョンはハジメたちの背後でゆつくりと浮かび上がっていき日輪に目を奪われていた。燃え尽きた灰がもう一度熱を秘めるなんてことはありえない。

「じゃあ、こいつあアレなんだな」

ありえないことを起こして見せれば、それは奇跡と呼ばれるのだ。

超巨大太陽を背負った二人の背後から、黄金の炎が地面を走り、死んだ大地に火を灯していく。

超弩級の大砲へと変形していく日輪を前にジョンは静かに腕を下ろした。敗北を悟った。

「ふーっ、やれやれ。最後にひとつ教えてくれないかい」

顔を上げたジョンの見つめる先。固く結ばれた二人の手に、指輪が光っている。

「俺たちあ不幸なだけなのか、好きでトラブルに巻き込まれてるのか」
ゆつくりと押し寄せてくる黄金の炎を背に、ジョンのシルエットが肩をすくめた。

「そこらへんお前さんはどうなんだ。俺たちあやっぱり似た者同士だろ」

「そうだな。俺も答えは出てないけど、一つ確かなことがある」

いつのまにか隣の幽香は消えていた。

ハジメは掌に残された汚れた五円玉を見つめる。

「もとから俺たちはヒーローなんかじゃない。最悪のタイミングで、最悪の場所に居合わせただけ。ただ」

「ただ？」

ハジメはトリガーを引く。

日輪が死の世界に光を投げかけ、すべてを黄金の炎が呑み込んだ。

次にハジメの目の前に広がったものは黄金の海だった。

「ただ、そこからの決断はそれほど最悪ってワケでもなかったと思う」

蒼天の下、風にそよぐひまわり畑。五円玉はいつの間にか橙色の花

弁へと姿を変え、涼やかな風に舞って天へと昇る。

「じゃあ、俺たちみたいなハミダシ者をどう呼べばいいんだろうな？」

意識がどこか遠いところへと向かうのを感じながら、ハジメの耳にはジョンの声だけが聞こえていた。

◆◆
「……………おそい。ばかあにき」

差し込む光に、千晃は起き上がると目を細めた。

窓辺に立って紅い月と空を見つめていたハジメの背中には日輪が浮かんでいる。未だに半分近く割れて砕けて、頼りなく断片だけで繋がっている状態ではあるが。

「俺はどのくらい眠ってた？」

「たったの二週間だよ」

しかし日輪も、振り向いた兄の瞳も、かつての輝きを取り戻している。千晃は眩しそうに瞼を瞬かせた。

「幽香は」

「おねえちゃんは、きつと生きてあそこにいる」

ハジメによってベッドに横たえられながら、千晃は窓の外を指し示した。そこで、その手がべつとりと血で汚れていることにハジメは気付いた。

「私もお父さんも、守られてばっかじゃないんだって証明したかっただけ。ここまで死ぬ気で来たんだからね」

疲れたぜ、と呟いて千晃は目を閉じた。

「次はおねえちゃんと一緒にやなきゃ、玄関開けてやんないんだから」
言うだけ言って早速寝息を立て始めた妹の頭をしばらく撫でた後にハジメは腰を上げた。

枕元のリングゴを一つ掴んでかじりながら、山と積み上げられた見舞いの品を掻き分けていく。が、探している品は見つからない。

「ああ、そうだった。しまったな」

幽香と繰り広げた壮絶な撃ちあいの最中、携帯はビルの上から放つてしまったことを思い出す。

「ふにゃあ」

もそ、とパジャマの足下を毛の塊が擦っていった。

猫の乗ったハジメのポストンバッグを狐が鼻先でしゃくった。傍

らには履き潰しのスニーカーまで用意されている。

「なんだなんだ、お前ら」

どこの誰の思召しかは知らないが、きちんと一揃い用意された清潔な着替え。そしてスニーカーの片側には無くしたはずの携帯が突っ込まれていた。

「俺の携帯」

液晶はひどく割れていたがきちんと動く。

ハジメはしばらくダイヤル画面を開いたまま考えていた。この霧の影響を受けない町の外。頼れる相手は限られている。

「……………よお。久しぶり」

狐と猫が出て行った窓に寄りかかり、ハジメは深呼吸の後に告げた。

やがて落ち着いた女の声と同じ苗字を名乗る。携帯を持つ手に一瞬力が籠った。

「そういうこと。今結構ピンチなんだ——いや、そうじゃなくて。説明は難しいんだけど——千晃がケガしてる。あと、多分父さんも。幽香も」

窓を開放った。

紅い霧は、ハジメの日輪に恐れをなしたように近づいてはこない。「ムシがいい話だつてのは分かってるさ。あんたにイイところを見せてやるって言つといて、結局昔と一緒に頼り切りだつてことも。あんたがそういうところに嫌気がさしたつてことも」

ハジメにとつて最も頼りになる相手。そして、最も頼りたくない相手。嫌いだとかそういうんじゃない。意地の問題だ。

「俺はあんたに負けたつてことでいい」

それを今、かなぐり捨てる。

なりふりなんて構っちゃいられない。

「助けに来てくれ——いや、すぐはダメだ。今おかしな霧が出ていて、こいつに触れるとヤバいっばい」

ハジメの緊張とは対照的に、スピーカーから聞こえる声はひたすらに穏やかだった。

「ああ、俺は大丈夫。今からコレの大元を叩きに行く。だから霧が晴れたら町に突っ込んで、オヤジと千晃にできるだけのことをしてほしい」

それからしばらくハジメは沈黙した。相手の声に耳を傾け、相槌を打つ。

その表情が、徐々に和らいでいった。

「——ありがとう、母さん」

通話を切る。ハジメは少し考えたと携帯をサイドボードに置いた。今まで散々な目にばかり遭わせてきた携帯を労って、窓を開け放つてから、彼は一度振り向いてベッドの千晃を見つめた。

「お前やつぱり背のびたろ？」

静かに寝息を立てる妹は答ええない。

ハジメは笑って窓枠に足をかけると、一思いに身を躍らせた。

「本当、頼んだからね。おにいちゃん」

千晃は微睡の中で紅い月に向かって飛ぶ黄金の光を見つめた。

ついに紅い霧に吞まれてつがあるのか、それともここまでの疲れがそうさせているのか。とにかく、全身をどつぷりと包む眠気に身を委ねることは、不思議と今の彼女にとって怖いことではなかった。



「ここだな」

日輪が大きく欠けて、浮力が一気に失われる。

光の槍を空中で展開しスクランブル交差点へと靴を滑らせて着地したハジメは、前方に佇む彫像へと視線を馳せた。

——いや、彫像なんかじゃない。

本当に鋼鉄の彫像のようではあったが。

四つ目が紅い光を取り戻し、おもむろに地面に突き立てていた槍を引き抜く姿は、数百年も、数千年も同じ姿で待ち続けていたように見えた。

「なあ相棒、俺は考え直すことにしたよ」

紅い霧と共に鋼鉄の仮面の中から迸ったのは、かつての親友の声だった。

錆びついた体を軋ませて吸血鬼が地面から巨大な槍を引き抜いていく。吸血鬼の魔槍、グングニルを。

「愛するために殺すなんてバカな考えは捨てた」

雪之丞はエリカの姿を思い出す。

不思議と彼女に恨みはない。家族のために何もかも投げ出した彼女が、今は尊いとすら思えた。

「俺は、あの人を生かすためならどんなことだってしてやる」
対峙する。

吸血鬼は抜け目なく初撃を必殺にする位置取りを探してのしのと巨体で歩んだ。その身の丈を越える長大すぎる槍が紅い火花をアスファルトに散らす。

「もう、ハジメにもあの男にも、幽香さんを苦しめさせはしない」

その手の中で水あめを捻るように魔槍が凶悪に変形していった。穂先に銃口を伴い、鎖の破片がイバラのように柄に巻きつつ雪之丞の鎧と同化していく。

「お前が何のために戻ってきたかは知らんし、知りたくもない。だが」

「こまごまとした言葉のやり取りが、もはや意味をなさないことをハジメは理解している。」

「この先に進むっていうんなら、たとえ親友だって殺すぜ」

その槍が紅い軌跡を描いて振るわれる間、ハジメは上方に浮かぶ月を見上げていた。

町中から集められた血と精気。この魔法は今の雪之丞をほとんど完全無欠の吸血鬼に仕立て上げている。彼の体を塵へと変えながら。

「そうか。殺すのか」

ようやく口を開いたハジメの背中で日輪が輝く。

「そうだ。殺すんだ」

魔槍が光を食む。

「こんなに月が紅いのに」

「こんなに月が紅いから」

紅い霧、紅い月。

妖気の立ち込める町の中、両雄はそれぞれに構え、眼前の敵を睨ん

だ。

第二十四話 『ダイ・ハード0⇒1』 おわり

9 『産子這う子に至るまで（上）』

鋼鉄の悪魔は、その一挙手一投足がすでに攻撃だ。踏み出す一步が紅電を地面に走らせ、息の一つ一つが生きとし生けるもの全てから精気を抜き出す霧を伴う。

彼は紅い霧の中で無敵に等しい。

「俺はお前に負けたくない」

邪悪な槍の穂先が突き出されるたび、ハジメは傷ついた蝶のように舞った。

「認める。お前が妬ましかったんだ」

ハジメの表情からは何も読めない。

ひたすら避けるに徹するだけの彼が一体どんな反撃を企んでいるのかも、この先で何をする気なのかも、今の雪之丞にはさしたる問題ではなかった。

「俺もや」

命を削り取る槍を弾いたのはぼろぼろの日輪だ。ハジメが何気なく発した言葉。無言のうちに吸血鬼は驚いた。

「美形で人付き合いがよくて、クラスのムードメーカーで」

鋼鉄の悪魔が一步引いて、直後、重く、深く突いた。アスファルトが沈み込む。わずかに浮力を発揮したハジメが間一髪で飛び退いた。「お前を目障りに思ったことなら数えきれないよ」

地面を突いた槍を支点に棒高跳びの要領で高く飛んだ吸血鬼は、そのまま翼を広げて宙を舞った。空中で振るわれる魔槍が爆発を伴った落雷を引き起こす。

ハジメは傘のように盾を広げたまま、ただただ耐える。

「なら分かるだろ。俺はお前に負けがこんでいるんだ」

待つて待つて待ち続けて。気付けばそれまで隣を歩いていた親友の背中はずか先にあつた。

「今日という今日こそお前から勝ちをもぎ取ってやる」

土砂降りのような突きを上空から浴びせながら雪之丞は戦意を滾らせた。

圧倒的に押ししているのは彼の方で間違いない。現に、ハジメの日輪がまたひとかけ力を失って地面に落ちていくところだ。

「認めるよ。お前は今の俺に勝てはしない！」

「どうかな」

ハジメの体は隅々までボロボロだ。

穂先に引つかかったシャツの切れ端を焼き飛ばして、雪之丞はむき出しの胸板を観察した。火傷と傷跡。半年にわたる戦いの痕跡がびつちりと覆い尽くしている。

「もういいだろ！」

そこに新たな傷を一筋加えながら、雪之丞は叫んでいた。

「これ以上やったら今度こそ俺は本当にお前を殺しちまう！」

ここまでの差を見せつけられても決して膝折ったりしない彼の姿に慄いていた。

「降参なんてできない」

電撃の塊を受け止めて、ハジメの盾が粉々に砕け散った。頼りなく浮かぶ日輪の姿が薄れ、そして消える。

「ダメだ。やめろ。それ以上進むな！」

「ここでヘタれたら俺はウソになる」

ハジメにとって日輪は防御の要だ。

それを放棄するということは、自ずと次に受ける一撃が必殺になるということの意味している。それでも彼は歩んだ。雪之丞の背後にそびえる、焼け跡へと向かって。

「やめろ！」

巨大な鉄の悪魔は小刻みに震えていた。槍の穂先が定まらない。四つの眼光が落ち着きなく彷徨っていた。

「お前にこれ以上捨てさせはしない」

分厚い金属板に包まれた吸血鬼の腕にそつとふれて、ハジメはその真横を通り過ぎていった。

「ナメるなよ！」

擦り切れのスニーカー。くたびれた靴底を霧の中にひびかせてハジメは去っていく。

そのあまりに無防備な背中。そこへと槍の穂先を向けて、鋼鉄の悪魔は体を低く、それこそ地面を舐める様に沈めた。

「俺に。俺に今さら何が残った?」

ハジメは足を止めて、凝りをほぐすように肩を回した。

「俺はもうすべてを捨てきった。お前を殺すのなんてワケないんだぜ!!」

「ならやってみろ」

振り返ったハジメが迎え入れる様に腕を広げると、ついに悪鬼は咆哮した。

ねじ切られるように口元のマスクが引き剥がされる。その奥から現れたものは人間の口元ではない。

乱杭歯をギラかせた悪魔のあぎとだ。

「できやしない。いや、お前はきつと、やらないよ」

——決めた。その頭を最初に貫う。次はその怒りも恐怖もない不敵な瞳だ。

吸血鬼は地面を蹴り、光速の突進から見舞うのは神速の突きだ。

大きく体をひねる予備動作。

「お前は俺のダチだもんな」

捻り込んだ槍が、ふっと力を失った。



「ああ、また言っちゃまったじゃんか。ダチって」

やれやれと頭をかくハジメの額の寸前、ほんの数センチで止まった槍を、握る吸血鬼自身が信じられない心地で見つめていた。

「なぜだ」

「おまえならこうするって、なんとなく分かってた」

「なぜだーッ!!?」

自分の腕にいくら凄んでみても何も変わりはない。

一度渋ってしまえばそれが最後だ。まるで自分と綱引きするように何度も何度もハジメの顔面めがけて槍を振り下ろそうとする吸血鬼の試みは、結局周囲の地面にいくつもクレーターを刻むだけの結果に終わる。

「信じられるか。俺にはこれしか残されちゃいないんだぞ!!」
槍を放りだし、ハジメの目の前の地面を殴りつける。

「頼む」

その力は徐々に弱まり、繋ぐ力を失った金属の鎧が彼の体からごろごろと剥がれていった。

「頼むよ」

最後にほんのわずかの霧と塵をあたりに漂わせて、人の姿を取り戻した雪之丞は地面に崩れ落ちた。

「……………一度くらい、俺に勝たせてくれよ」

そこに何も言わず差し伸べられた手。

力なく顔を上げた雪之丞から見える親友の姿は、その微笑みは、悔しいくらいあの人に似ていた。

「慰めるな」

「そんなんじゃない」

ひらり。軽く手をひるがえして、ハジメはしゃがんだ。

「仲直りだ」

「ハ」

その掌の中にあつたものを見て、雪之丞はわが目を疑った。

「ここに来る途中で拾ってきた。すぐに見つかつてよかつたよ」

白茶けたなにかの破片だ。

「お前が何を、何度捨てたつてかまわないさ。その度に俺が拾つて集めてきてやる」

長い間水に浸かっていたのかもしれない。その表面に張られたシールはすっかりプリントを薄れさせていたが、緑色の輪郭から、ころうじてそれがカエルであることが分かる。

「お前がずっと待っていてくれたおかげで、俺は間に合つたんだ」

それを渡して立ち上がったハジメが、今度は何をしても振り返らないことは雪之丞にもよく分かつていた。

「この後空けとけよ。みんなでラーメン食いに行こう」

ビルの中へと消えていく背中。

ギプスの破片を抱きしめて、雪之丞は天を仰いだ。

「ずっと、待ってる」

彼の力を失った紅い月はほどけるように消えて行った。

紅い霧はすぐさま色を失って蒸発し、早くも霧の呪いから目覚めた一匹の鶯がのんきな鳴き声を上げながら先駆けのように飛び去っていく。

じりじりと肌を焼き始めた日光に頓着しようともせず、暫く雪之丞はそこにうずくまっていた。

「相棒」

置いて行かれたなんて、それは大きな間違いだったのだ。

「俺は。友情ってやつを勘違いしてたのかな」

元から同じ道を歩んでいた二人が、全く別の道に分かれたというだけ。それでも、寂しくなったときは隣を見ればいつでもそいつを見つけることができたはずなのだ。

きつと、友情なんてそういうものなのだろう。

「あの子が決着をつければ、もう二度と立てなくなるはずだった」
じやり。

「だから私は彼に包み隠さず本心を話したし、邪魔はしなかったし」

非日常の足音が背後から聞こえた。

「大結界をぶち壊せるような能力者を野放しにしておくことができた」

日傘の作り出す影が、雪之丞を包んだ。

ひんやりとした日陰。ぞくりとした手が首筋に当てられる。粟立ちをいさめるように、八雲紫は柔和な笑みを浮かべて、残念ね、と呟いた。

「鶴見ハジメが憎いんなら、まだ復讐のチャンスはあるわよ。どう？」

と、酒を一献誘うような気軽さで彼女はビルを示した。

「どういうことだ」

「そのまんまよ。このまま放っておけば、いずれ彼は幻想郷に仇なす存在になるかもしれない」

「ハジメはそんなことをしないはずだ」

「いちいちカモとかハズなんて聞いていたら、世界一つを丸ごと背負

うことなんてできやしないわ——聞きたいのはユキがやるのか、やらないのかってこと」

十分前だったら、間違いなくやると答えたに違いない。

だが、今の彼には迷いがあった。まだハジメのことを完全に認めることができたわけじゃない。それでも、これからアイツがやろうとしていることを見守ってからでもいいような気がしていた。

「そう」

無言のうちに答えを見て取った紫は雪之丞に日傘を渡すとビルを
目指して歩きはじめた。

「じゃあ行くわね。霊夢が待ってる」

そして何より白いドレスの後ろ姿。

ハジメを幽香が救ったように、雪之丞もまた、紫に救われてきた。
ハードルの高い藁人形のお使いを頼まれたこととか。

意味もなく深夜に連れ出され、コンビニで朝まで一緒にマンガを立
ち読みしたこととか。

真冬に紫と霊夢と三人で鍋をつついてしこたま酒を飲んだことと
か。

吸血鬼の力を役に立てろと言われて近所の子供たちも交えて探偵
ごっこをしたこととか。

非日常への誘い手の彼女が雪之丞に与えてくれたのは、結局まぎれ
もない平凡な、しかし幸せな日常だった。

「あとは私達に任せなさいな。もともと、そのために来たのだし」

違う。

淀みがちな彼女の足取りに裏腹が見え隠れする。

彼女はなにも変わってはいない。数週間前の路地裏で、彼女の本心
を見た気がした。

今日だって——いや、今までだって。動く気になればもつと早くす
べてを解決できたはずなのだ。

「にしても、ようやく幻想郷に帰れるわね」

違う。

奇妙な共同生活に幸せを見出していたのは、雪之丞だけではなかつ

たはずだ。同じく、この時間が終わってほしくないと考えている相手がいるとすれば、それは。

「待てよ、スキマおぼけ」

決意を抱いた雪之丞の胸に紅電が芽生える。そいつは掴み出す傍から無様に折れて、砕けていったが。

「あらあら。どんな心変わりかしら？」

示し合わせたように振り向いてくれた紫の目に映ったものは魔槍だ。槍というにはあまりにもか細く、くたびれて剥がれてみすぼらしすぎる、それはまさに鉄屑であった。

「よくわかんねえけど。でも、これが一番正しいって思ったんだ」
が、かつてないくらいにまっすぐ鑄造されていた。

「飼犬が手を噛んでくれるってワケね」

紫の周囲に無数の裂け目が現れる。

世の理を完全に逸脱した隙間の力が徐々に解放されるにつれ、雪之丞には間もなく彼女が真正銘の本気でもって潰しにくることが見て取れた。

「本当、仕方のない駄犬。削ってあげるわ」

その剣呑なセリフに反して、彼女はこの上なく嬉しそうなのだが。狭間と隙間の視線はぶつかり合い、激しく火花を散らす。



「あんたのことは好きじゃないけど」

もはや雲の切れ間に漂うばかりとなった紅い霧を見つめて、霊夢は腕組みした。風に舞って最上階にたどり着く花卉は桜のものだろうか。

「あんたがああ男たちに好き放題される姿は見てらんない」

息を吹き返した町から響くうなりのような音。

壁にもたせかけられていた幽香は、巫女服の後ろ姿を覇気のない瞳で見つめていた。

「あなたがここに來たってことは、ユキは」

「ええ。あいつはもう戦えないってことね。誰かに倒されたか、それとも力の使い過ぎで自滅したのか」

幽香の指先が薄桃の花弁をもてあそんでいる。

散ってしまった花の声に耳を傾けているのか、その儚さの中に自分の終わりを見て取っているのか。

「最後って思うとちよっぴり悲しいけれど——来てくれたのがやっぱり霊夢で、実は安心していいの」

幽香の体は長い時間を経て表面上元通りになってはいたが、中身はボロボロのままだ。

屋上の灰色。空のブルー。巫女服の紅白。強烈なコントラストを描く少女の肩が、小さく震えた。

「……ねえ、覚えてる？ あんたが幻想郷を飛び出した時のこと」

幽香は小さく頷いたが、背中を向けた霊夢にそれが見えるはずもない。

「あの時は結界のアレ、くっそ汚い落書きにしか見えなかったんだけど。結局すべてはハジメの仕業だったんでしょ？」

実際霊夢はあの場に何度も訪れて、壁の輪を前に首をひねったものだ。

その意味、そして幽香のハジメへの執着の理由を理解するのはそれよりもずっと後。高架で戦うハジメの姿を見た時だった。

「ご想像にお任せするわ」

幽香は薄く笑っていたが、今の彼女の口調はあたかも脚本を棒読みするようだった。その理由を霊夢は知っている。知ったうえで、あえて茶化すように口を開いた。

「ねえ、教えなさいよ。一目惚れだったの？」

「ええ」

「じゃあさ、じゃあさ。その時のこと、ハジメに話してやったの？」

「いいえ」

「ああやっぱり。あんたっていつつも大事なことは最後まで言わないもんね。今だって」

「霊夢」

数秒間の沈黙。

「——でさっ。キスってどんな感じなの？ 私、恥ずかしいってワケ

じやないけど恋とか花とかまだでき。後学のために」

霊夢は思い出したようにばたばたと身振り手振りを交えて屋上にぎやかさを取り戻そうとやっきになった。結局彼女は後ろを向いたままなので、幽香には奇妙な踊りにしか見えなかったが。

「霊夢、お願い」

二度目の沈黙。

虚ろな瞳。乱れた髪。がさがさに荒れた肌。ズタズタのボロボロの幽香は力なく投げ出した手の先でコンクリートから芽吹いた若草を見つめたまま、か細い声で懇願した。

「終わりにして」

「は——はあ？ 待ちなさいよ。こちとらアンタにようやく今までの不満をぶちまけてやれる機会だっていうのに」

「あの子の夢、私が終わらせてしまったの」

「だから？ たしかにハジメは不幸だったけど、あんたはまだ生きてる。私と戦うだけの力くらい、残されているハズよ」

房に結われた霊夢の髪がふわりと宙を漂った。

彼女の周囲の重力が意味をなさなくなる。あらゆる重みから解き放たれて、ついに霊夢のパンプスが地面を離れた。

「もういいの。私がこれ以上頑張る意味は、無くなったから」

「さっさと立ちなさいよ」

霊夢が肩を震わせた。

「ただ何もせずに殺されるなんて、あんたらしくもない」

彼女の周囲に七色の光球がいくつも浮かんでいった。

それはハジメの力に酷似している。当たったものを無理やりこの世界から切り離し、永遠にどこか別の場所に葬り去ってしまうものだ。

「あの時みたいに暇つぶしがなんとかかかるとか。ちつとは骨のあるラスポスみたいなこと言って、私にヤル気を出させなさいよッ！」

「おかしくなった妖怪たちの手から幻想郷を救うんでしょ。今のうちに、慣れておきなさい」

最後にきて優しさを取り戻していった幽香の口調に、霊夢はいよいよ

よ己の自制が効かなくなったことを知る。

「うるさい。立って、私に立ち向かえ！」

巫女の仮面をかなぐり捨てる。

振り返って叫んだ霊夢は泣いていた。ぼろぼろと。涙で顔をべっしょべしよにして泣いていたのだ。幽香はかけがえのない友だち。それを、こんなに悲しい結末を前にして思い知らされるなんて。

「このままじゃ——このままじゃ、ますます私が悪役みたいじゃないか！」

彼女の慟哭と共に極彩色の光球が一斉に動いた。

そこで幽香の目に映るものは遠い遠い、幻想の地にあつた彼女の王国だ。無数のヒマワリたちと共に夜明けを待つて過ぎた夜々。

だが、彼女の世界を照らす太陽はもうない。

その最後で見える虹に、幽香は目を細めた。

「そうはさせないさ」

幽香めがけて迫った封印の力は、しかし、一発として彼女に届くことなく撃ち抜かれ、爆散していった。

「ははっ」

それはそれは奇妙な顔だった。

涙と鼻水で顔をぐしょぐしょにした巫女が幽香の背後へと目をむけたまま、これまた顔をくつしやくしやにして笑っていたのだ。

すぐさま虹色の爆風が吹き荒れ、虹色の煙に彼女の姿はかき消されていく。

「幽香も、霊夢も。これ以上泣かせてたまるか」

そして、幽香の前に躍り出たもの。

日輪を背負った、威風堂々たる立ち姿。今、彼に向けて風が吹いている。黒髪が桜交じりの風になびく。

「遅い！」

霊夢が涙を振り払って、叫んだ。

百年来の恋人と再会したような不思議な笑顔で。

「俺みたいのは早すぎても、遅すぎてもいけないのさ」

「ふふん。ヒーロー見参ってこと？」

その割にはせいぜいと、肩で息をしながら。汗まみれの首を、彼は横に振った。

「そう呼ばれるには俺は不幸すぎるし、しぶとすぎるし。だけど、いつだって前には進まなきやいけなかった。俺の野望へ向けて、歩き続けなきやいけなかった」

霊夢が肩をすくめる。

「困ったわね。ふつうそういうのをヒーローっていうんじゃないの？」

「まさか。でも、ようやくうってつけが見つかったよ」

崩れかけの日輪が、黄金の光を放つ。

「俺はダイ・ハードだ」



「——う、そ」

幽香のかたわらにハジメがひざまずいた。

「そう思うならさわってみるか？」

「嘘よ。だってハジメ、あなた、もう二度と目が覚めないって、あいつが」

あらゆる感情が幽香の胸の内に吹き荒れていた。とぎれとぎれに言葉を紡ぎだすのが精いっぱい。彼女に、ハジメはあの日と変わらぬい笑顔を投げかけた。

「ただの、ありふれた奇跡だ」

尚も口をばくばくさせるだけの幽香の手を取って、ハジメは自分の頬に触れさせた。

「いつだったか。あんたを好きって言ったとき、物足りないと思ったんだ」

「え」

「愛してるでも遅すぎて。俺の気持ちに到底追いつけない」

そこにはヘタレなんていない。それはただの青年でもない。

「もう言葉なんて要らないんだ。とにかくあんたを一晚中もみくちやにしたい。そのくらい、あんたのことを想っているよ」

幽香が次に発した声は、ほとんどすべて、素っ頓狂に裏返っていた。

「ハ、ハジメ。あなた、こんなときに何を——ッ!？」
「へえ」

霊夢がにやにや笑っている。
指先で幽香の顎を持ち上げて、むりやり口づけを果たしたハジメはしばらくして口を離れた。

もはや言葉を発することも忘れた幽香は、徐々に頬を桜色に染めていった。

「かわいいぞ」

好きになつてよかつたと思う。もう一度、血反吐を吐きながら起きてよかつたと思う。

「ぶっ」

感慨深く幽香を見下ろすハジメの背後で、ついに我慢の限界に達した霊夢が盛大に吹きだしてしまった。

「——ふ、ふふ。あはははははっ！　なんて——なんて、恥ずかしいヤツ!!」

彼女の心のダムを決壊させた笑いの勢いたるや相当なものだったのだろう。浮力を失った霊夢はまっすぐ落ちてしりもちをつき、それまで舞い飛んでいた針や札がぱたぱたと地面を打つ。

「敵に背中向けてまですることかつつーの！　あは、や、やば、お腹いたい」

「そんなに笑うほどおかしくなかつたら？」

流石にそこまで笑われては思うところもあつたようで、ハジメが唇を尖らせる。

「だ、ダメ。ちよつと。そんな真面目な顔されたら余計。ば、バカでしよ。前から思っ——うふふっ」

桜舞い散る春の町。

もつとも奇麗な景色を独占できるビルの上に高らかに響く霊夢の笑い声。

「や、やめろよ！　そういうの、けっこう傷つくだろ!？」

——それでいいんだよ。

霊夢は涙を流してひいひい笑いながら、小さく頷いた。

あなたはこんなんでいい。こういうのが一番似合ってる。あなたのやりたいようにやって、好きな形でその女を愛すればいい。

——あなたは、それでいいんだ。

「あははっ」

10 『産子這う子に至るまで（下）』

巫女。

「あの守護者に壊されたのが四百個。都合残り三万四千個の陰陽玉」
大妖怪。

「あなたの境界。人魔を隔てる壁。あなたをあなたたらしめるもの」
巫女。

「総攻撃」

大妖怪。

「ズタズタに」

日輪。

「そうかそうか。そりゃ無茶苦茶痛そうだ」

吸血鬼。

「いい加減慣れてきたな。明日の一面記事も俺がかつさらうのか」
慈悲。

「本当にいいの？」

覚悟。

「かかってこい。やれるもんなら」

笑顔。

「素敵」

そして四人が、一步目を踏み出した。

たった一人、彼女を残して。

◆◆

日傘と槍を構えて、吸血鬼はほくそ笑んだ。

「まったく。いつも分の悪い勝負ばかりさせる」

空間の断裂。

その予兆を、雪之丞に備わった魔眼が読み取る。

これもオリジナルの吸血鬼の持つ能力の複製だ。雪之丞は小手先に過ぎないが、本物なら百手先まで見通す。

「焼いて尽くして焦がれて。まったく、自分のことなのに呆れるくらいの見苦しさだ」

見えない顎がかじり取るように、紫の生み出した無数の裂け目が通りに存在するありとあらゆるものを食む。

彼我の距離は数十メートル。吸血鬼は数秒後の予知に従って、疾風のように駆ける。

「自分の本質が気に入らないの？」

「だけど、どうあがいてもそれは自分。いい加減耳にタコだな」

『妬き尽くす程度の能力』は嫉妬に焦がれた炉から万物を劣化複製する強力な能力だ。本来なら貯蔵量は無制限にも等しいが、今は力を使いすぎている。体力を振り絞って複製した魔槍を慎重に振りかぶり、祈るような思いで雪之丞は放った。

「大事に投げれば当たってくれると思った？ 甘い」

狙いは大きく逸れ、紫の右横。

「まずは右腕をいただくわ」

予測不可能の空間断裂が雪之丞の体内に生み出された。

右腕の根元に大砲でも叩き込まれたような衝撃に、血飛沫と肉片をまき散らして路面を転げた。

「俺をナメるなよ、紫！」

が、立ち上がりが異様に早い。

地面を転がった勢いのままに姿勢を立て直すと、何事もなかったように吸血鬼は疾走を再開する。びしゃびしゃと音を立てる赤い滝が彼を追う。

「見苦しいわね、吸血鬼！」

「それが俺だ。それでいいんだ！」

もはや十分な威力を秘めた魔槍を作り上げることとは無理だ。

血飛沫と溶けた鉄の飛沫を上げながら今度は剣を抜き出す。レーヴァテインだ。リーチはともかく、威力は魔槍を上回る。

「残念でした」

肉薄した雪之丞の剣戟が紫の喉笛をかすめた。

ぱつ、と飛んだ紫の血。その一滴一滴に反射する、雪之丞の姿。両腕がない。うっすら笑った紫が、雪之丞の額を軽く弾いた。

「うおおおおおっ」

もんどりうって転げながら、雪之丞は胸の炉心から直接、続けざまに金属塊を撃ち出していく。

「うるさいわねえ」

それを手で払いのけつつ、紫は地面に落ちた雪之丞の腕から日傘をもぎ取った。

腕を再生する力も惜しんで吸血鬼は立ち上がったが、そこまでだった。

「ぐう」

そこは運悪く日差しの中。

地面に両膝をついたまま、雪之丞は力なく去っていく紫の後ろ姿を見つめる。全身から煙が立ち上り、彼の体はゆっくりとローストされていくのだった。

「だせえ」

べちゃ、と地面に頭を押し付けて自分を罵倒する。

幾度も戦場に出て、未だに勝てた戦いがないこともそうだが。自分というちっぽけな世界に風穴を空けてくれた、あの妖怪を、望まぬ殺戮に繰り出させてしまうことが、口惜しい。

『色男がだいなしよ』

かつて、初めて出会った時の、優しい笑顔を思い出す。

『霊夢だって昔はもうちよつと可愛げがあったんだけど』

過去を懐かしんで、母のように頬を緩める姿。彼女がこの戦いを楽しんでいいのか、苦しんでいるのか、そんなこと、聞くまでもない。

決して、彼女の望みはこんなことじゃないはずだ。

「まだだ」

背後から殺気と共に迫った風切り音。

「ユキ？」

とつさに身を捻った紫の鼻先をブーメランじみた刃物が通過していった。それが日傘の柄を切断する。

白い花のような傘がはらりとあなだらけの路面に落ちる。振り返った紫の視線のさきで、ゆらりと隻腕だけの再生を遂げた吸血鬼が立ち上がった。

「ゼツタイ、あんたを行かせやしない」

何も捨てなくても前に進めると、ハジメは示した。

『幽香さん』を守りたいから?」

お前はお前のままでいいと、幽香は言った。

「いいや。今は違うんだ。あんたを守りたいからだ」

妬ける時間は終わったのだ。

焦がれる想いに、もう一度でいいから握らせてくれ、と祈る。

「私を守りたい?」

今の彼の中には太陽とひまわりの血が流れている。

冷え切って、まるで石のように固まった彼の炉心から中途半端に柄だけを突き出したその剣は不思議な輝きを秘めていた。

「あんたの憂いに答えを出してやる。ヒトだけでも、妖怪だけでも、この世界がつまらないものになるっていうんなら、俺が答えだ」

剣を握る。ずずずうと引き抜かれていくにつれ刀身が橙色の輝きを帯びていく。

「これはコピーなんかじゃない。乞い焦れる俺が呼んだ、正真正銘のホンモノ。誰もが知っている幻想のツルギだ」

肉と骨を焦がす音は、次第に刃を砥石の上に引くような澄んだ音へと変わっていく。

やがて引き抜かれた幅広の両刃剣を手首の動きでぐるりと回すと、切っ先の軌道が日輪を描く。いつしか食い入るように見つめていた紫は、束の間自分が息を忘れていることにすら気づかなかった。

「あり得ない」

「いいや。現にこうして、ここにある」

「どんなに力を持ったとしても、自分の本質を書き換えるなんて——そんな、そんなこと」

「そうだな。原因があるなら、あの二人の血を飲んだせいかな。たぶん」

吸血鬼の質は、嗜む血の質によると、かつてあの人は言った。

二つの世界の血を飲んだ今、彼の中に燃えるものは『乞い焦恋に焦がれるれる程度程の能力』だ。

「あんたに見果てぬ希望を見せてやる。あんたに明日の夜明けの夢を見させてやる。現実と幻想。その狭間が、今の俺」

黄金の風に舞い散る桜吹雪。

放り捨てられたままの紫の日傘が姿の見えない踊り手に担われたようにくるくると不可思議なダンスで紫をさそう。幾千幾万もの幻想が飛び交う、弾幕の中にでも放り込まれたような景色に、束の間、大妖怪ですら幻惑された。

「いくぞ」

「ッ!？」

ぎば。

紫の視界を覆った日傘が真つ二つに裂ける。

とつさに開いた無数の断裂を、更に切り裂いて雪之丞が迫る。

「とりあえず一太刀、浴びてもらおう。悪く思うなよ」

雪之丞の黒と剣の黄金。

「そんなに格好いいところ見せられたら」

極め付けの二色が桜の中にぼんやりと霞んでいく。それは、きっと紫の瞳が『もういいわ』と満足したからなのだろう。

「わたし、ほれちゃう、わよ?」

体を斜に切り裂いたまどろみのような太刀筋に、紫はその剣の名前をようやく思い出す。すべてを包む太陽の光と、どこまでも伸び行くひまわりの力を兼ね揃えた究極の形——エクスカリバー、だ。



電撃と閃光と針と札。

厄介なのが巫女が『陰陽玉』と呼ぶ、自律して攻撃する、つるりとした白と黒との球だった。

ハジメは踊る。霊夢の苛烈な攻撃はハジメの防御を掻い潜って体を貫き、引き裂き、焼いて焦がしてあるいは砕いたが、それでも彼のステップは淀みない。

「まったく。毎度毎度のことだが、今回も大ピンチだな」

砕けた日輪がきしみを上げながら大砲に変形する。

輝きを帯びた砲身めがけてすぐさま霊夢の攻撃が集中し、必殺の一撃を宿した大砲は爆発四散の運命を遂げた。

「私をそこらの妖怪変化と一緒にしないことね」

「あんた、ずつと俺の戦いを追っかけてたもんな。ミエミエだったか」張り巡らされた鉄骨の上を機敏に飛び回るハジメと、終始上空から落雷じみた絨毯爆撃を繰り広げる霊夢。間隙をぬって無数の『陰陽球』が飛び交い、確実にハジメの手傷を増やしていく。

「人をストーカーみたいに言わないでくださいー」

「だいたいそんなカンジだったろ」

雲のように分厚く立ち込めた陰陽玉に阻まれて、ハジメの指鉄砲は霊夢まで届かない。おまけに大砲はもう使えない。

「手詰まりね。諦める？」

「いいや。まあ、こんなもんかなって考えてたところだよ」

「こんなもん?」

鉄骨を針の雨が叩く。瓦礫の間に身を潜めて、ハジメはくくく、と笑い声を漏らした。

「クライマックスなんて、ちよつとピンチな方が燃えるじゃないか。それに」

その目は霊夢ではなく、むしろ彼方の壁にもたれたまま、茫然と見つめ返してくる幽香へと向いていた。

「お姫様の前では負けられない?」

「ま、そういうことだ。それに果たしてない用もいろいろある」

「それは聞かない方がよさそうね」

飛び出したハジメの放った弾丸が空中で複雑な機動を描きながら陰陽玉の隙間を狙って霊夢へと迫る。

「ふふっ」

指先ひとつで陰陽玉を操って、霊夢は盾を形作る。

もちろん道具でしかないそれらに防御力を期待するのはお門違いだ。霊夢もよく理解している。一撃防ぐたび、彼女は迷いなく百個二百個と膨大な数を切り捨てていった。

「このペースなら明日の朝まで続けられるわ」

真上に登った太陽の光は、陰陽玉の壁に阻まれてハジメまで届かない。

「いいぜ。踊ってやるよ」

「でも残念。あんたの隣はもう決まってるみたいだから。私はお膳立てに回らせてもらおうわ」

虫のように動き回る雲の隙間。ちらりと見えた赤い瞳を、霊夢は見詰め返す。

「そこ、空いてるけど？」

◆◆
「やめて」

こんな弱弱い声だったのかと、自分で不思議に思うほどだった。

針と札の土砂降りの中を戦うハジメには当然通じることもなく、次第に傷が増えていく彼を見つめ続けることができなくなって幽香はうなだれた。

「無駄なの。分かっているでしょう？ わたしはどのみちあとひと月持つか持たないか。それなのに、あなたまで命を燃やすことはっ」

声が詰まって、幽香は思わず頬を抑えていた。

くちづけを受けてからの熱は冷めるどころか、むしろ。

「……………ねえ。私、どうしちゃったの？」

破れたワンピースの胸元をかきむしって、幽香は深く熱い息をついた。

◆◆

「認めるわ、ハジメ」

今しがた上腕を針で射抜かれ、物陰へと飛び込んでいった青年の名を霊夢は呼ぶ。

「あんたも充分変わり者ってことを？」

血に濡れた針が転がって、乾いた音を立てた。

弾丸のかわりに飛んできた減らず口に頬を緩めて、彼女は陰陽玉の布陣を変えていく。頭の上を抑えるばかりでは埒が明かない。ビルの屋上全体を覆うように、隙間なく並べ直す。

「違うわよ失礼ね。今まで私にとって最強の相手は別にいたんだけ

ど、それを今この瞬間から変える必要があるッてこと」

「霊夢の計算は完璧だ。」

四方八方から飛ぶ攻撃にハジメは徐々に逃げ場を失っていく。それでも彼の瞳に滾った戦意と炎は萎えるどころかいつそう勢いを増して燃え上がる。

それはまるで、恋のようではないか。

その滾りを、霊夢は心底恐ろしいと思った。

何より彼女にとっておつかないのは、鶴見ハジメという一個の青年が、幽香だけでなくどうやら霊夢も救う心算でこの場に立っていると。いうことだ。

「じゃあ、ほら、最強だからさ。ひとつ降参とかどうだ？」

「ごめんなさい。寺子屋の教師から恐怖には立ち向かえて口うるさく言われているの」

「ぬかせよ」

冗談めかして笑われても、霊夢はまったく正直に話しているだけだ。

「どのみちあなたたちを生かしてこの場から逃がすことはできないの。悪いわね。本気ですりつぶしに行くわよ」

雲霞のように立ち込めた陰陽玉がざあつと退いていく。

紅白の衣装をなびかせる霊夢の姿。不敵に笑った彼女の周囲に無数の光球が浮かんでいく。それは、いかなる怪異をも一瞬でこの世から消滅させる封印の力だ。

「今なら遺言くらい受け付けてやるけど」

彼女めがけて高らかに掲げられた人差し指が答えだった。霊夢は大口を開けて笑う。

「本当、素敵ね！」

絶望的な攻撃を前に、彼は構える。

その姿は起死回生のサヨナラホームランを約束するようにも、日の出を待つて首を伸ばすひまわりのようにも。

「ああ、でも、でも！　ちよつとだけ舞台が寂しいかしら。こんな素敵なショウダウンに、あんた一人なんて！」

霊夢は指を鳴らす。

彼女の声に応える様に腰を上げたものが、いた。

「本当、しようのない子なんだから」

すつと、ハジメが脇目も振らずに差し伸べた手。

白い指が彼の指先に絡む。そこに輝く銀の指輪。ひまわりの香り。

「霊夢、ごめんさい。私はあなたと戦わなきゃいけない———立って、戦って、あなたを倒したい！」

三度死んでもおかしくない満身創痕にも関わらず。

地面に根付くような確かな足取りで血塗れの幽香も天高く人差し指を差し伸べる。

「さつきまで殺せ殺せと言った割に、随分都合よく立ち直るのね」

霊夢が覚悟の真贋を確かめる様に顎をしゃくった。決然と幽香が睨み返す。

「分かっている。だけど、もう運命なんて便利な逃げ道にすぎることをやめにしなくちゃ。私は行きたい。私は生きたいの！」

固く結ばれた手。

その輪郭が、黄金の輝きを帯び始めていることに気付いたのは霊夢だけだった。

「私達を明日へ行かせて頂戴、霊夢！」

「力づくで、この雲を越えていけ！」

虹色の光弾は霊夢が降り注がせるものだけではない。

ハジメと幽香を取り囲む陰陽玉の雲。それを構成する一つ一つが霊夢と同等の戦闘力を秘めている。そのすべてが、最大出力の光球を浮かべはじめている。

「背中は預けた」

ハジメの声に、幽香は悔しそうに柳眉を寄せて肩をすくめた。

「私のセリフ、取られちゃったわね」

輝きが霊夢から解き放たれる。

周囲からも同様に虹色の光弾が二人めがけて容赦なく叩きつけら

れる。ハジメは弾丸で、幽香は光線で、絶望的な火力差に臆することなく弾幕を迎え撃つ。

◆◆◆
『産子這う子に至るまで、特とご覧じよ』

紅い霧のもたらす永い眠りから覚めた誰もが、焼け崩れかけたビルの屋上に芽吹いた巨大なモノを見上げていた。

『ここに遊ぶは鶴と風。ここに開くは太陽と花との物語』

ハジメの見舞いに向かう途中でばたと倒れていたクラスメイトたち。

『踏まれ触れたひまわりが』

幽香がひいきにしていた商店街の店主たち。

『雲を突き抜け天高く』

廃屋で上体をもたげたエリカが、傍らに控えるおーちゃんが、病室で目を醒ました千晃が、救急隊と杏奈、そして父が。

『雲薙ぎあまねく世を人を』

町を去る新幹線の中から今井までもが。雪之丞と、彼に肩を支えられて焼け跡の非常階段を昇っていた紫が。

『陽だまりで包む、その様を！』

虹の爆炎の中で開いたものは巨大な橙色の日輪だった。

たったひとりの人間の背中から広がったものであるとは誰の想像力も及ばぬままに、それが光の花弁を伴って際限なく花開いていく。

「――ふざけたことを、してくれる」

当然そのなかには橋の上で息を吹き返した機動部隊と、万場も含まれていた。

万場が漏らした声には明らかな怒りが滲んでいた。

慌ただしく彼の傍を駆け抜けていく装甲車の車列。そのエンジン音が彼の眩きをかき消す中、大気を振るわせる不思議な声はどこまでもどこまでも届いた。

誰の耳にも、誰の目にも、やがて言語や文化すら超越して。

F市を包んだ花弁は更に広がる。極東の島国から海を越え、更には星すらも包んで広がり続ける。橙色の花弁を散らせながら。

『見つけたぞ』

その声を聞いたのは、なにも人や知的生命体だけではない。すべてを超越した花卉から発せられるすべてを超越した声。そして、その砲門は全宇宙を射程圏内に捉えている。

『そこにお前はいやがったんだな』

男のものとも女のものともつかぬ声。

そしてその殺気に、全宇宙に存在する理不尽が怯えすくんだ。感情も思考能力も持たぬ概念が、宇宙の片隅のちっぽけな星から発せられたメツセージと無数の弾丸に、子供のように泣いて懇願した。

やめろ、と。

『くたばれ、理不尽！』

誰の声も聞かずに世界を蹂躪し続けたモノの声に耳を貸すものなどいない。太陽の花の持ち主たちも同じく、貸す耳などもつていなかった。

かわりにくれてやるのは素敵な風穴だ。

全世界が輝いた。

全宇宙が輝いた。

古今東西の理不尽がガラスのように碎けて降り注ぐ幻想を、すべての瞳が追った。



「幽香。あんた、さ『花を操る程度の能力』を曲解しすぎじゃない？」
あの花卉が広がってから何が起きたかは分からないが、確実に何かが変わった。

三万個の陰陽玉が火を噴き上げて落ちていく中、霊夢は夢を見るような目で空を見上げていた。

「つまり『あれは花だった』ってことか」

霊夢が振り向くと、二人の姿は既にない。

「ふふん。私としたことが、独り言の間に逃げられちゃうなんて。こりゃあアレね。頑張って足止めしないとね」

懐から抜き出した札を、霊夢はふっと吹いた。

ビルの屋上から橙と桃の花弁にまじって舞い降りていく札。その

先にはぐるりとビルを包囲した戦闘車両の列が。

「あー、しまったー」

ぽこつと頭を叩いて、しらじらしく言つてのけた霊夢。直後、爆発音を伴って虹色の煙がビルの背丈を越えるほどに吹き上がってきた。

「煙幕だったかー。これじゃ無理だなー、あの二人をせつかくこつちの陰謀ズブズブ部隊と連携して袋叩きにできるところだったのに、まんまと逃げおおせられちゃうなあー」

その間も霊夢は次々と札を放つていった。

「うわあー、うわあー……………ふう」

やがてひとり芝居にも飽きたのか、霊夢はその場にどつかと腰を下ろし、そのまま大の字に寝そべった。空に浮かんだ光の輪郭は既に薄れて、ほとんど消えかけている。

「生きなよ」

屋上の瓦礫を踏む足音に、霊夢は仰向けに寝そべったまま視線を向けた。

「なによ、あんたら。手なんか繋いじやつて気色悪い」

仲良く日傘で相合傘を決め込んでやってきた二人組を見つけて、彼女は微妙な表情を浮かべて空へと向き直った。それが徐々にこわばり、冷や汗を額に浮かべはじめた。

「待って。え、マジ?」

がばつと起き上がった霊夢。吸血鬼と大妖怪が頬を赤らめて視線を逸らす。



『———』について、『政府の見解である「単なる気象現象」では説明できない』とコメントしました。当時刻に『全く同じ内容の言葉を聞いた』との証言が複数寄せられています。既にSNS上では個人撮影の動画が大量に回り、中には———』

F市を離れる電車で揺られて、ハジメはラジオから聞こえるニュースを子守唄にしていた。

夕日の差し込む山間を走る車両はほとんど貸切だ。騒ぎに乗じて逃げるさなかに簡単に着替えは済ませているが、それでもありがたい

ことに変わりはない。

「ごめんなさい」

ハジメの肩に頭を預けて寝ていた幽香が目を醒ました。

「あの町に、帰れなくなっちゃったわね」

「気にするな。俺はこうして立って、ここにいるじゃんか。まだ、俺の夢は叶う」

懐の茶封筒を一瞥し、ハジメは改めて老刑事に小声で礼を言った。そして、気を利かせてくれた猫と狐にも。

「これからどうしましょうか」

ハジメは伸びをして、稜線に沈もうとする夕日を見つめた。彼には濃い赤の輝きとなった太陽が、「また明日」とでも言っているようにも思えた。

「どうしよう」

幽香がくすくす笑う。首に触れる息遣いと彼女の香りを心地よく思いながら、ハジメはもう一度目を瞑る。

『——F市を相次いで襲った異常現象について、ついに国際的に識者を募つての学術的調査を行う動きもはじまっており、現地では今後相当な混乱が——』

たった数時間で、とんだ騒ぎだとハジメは呆れるほかない。

ここまで大事になってしまつては、もはや万場たちがいくら手を尽くしても完璧に情報を隠蔽することなんてできないんじゃないか、とすら思った。

「そうだな」

そこで脳裏にひらめいたものは、ひとつのヒラメキだった。

「実はアイディアがある。一発逆転の、きつと賭けになるだろうけど」
「今さらあなたが何をしようよ、私は止めはしないわ」

やはり髪がうるさいのか、あれやこれやと長い髪の結い方を試しながら幽香が微笑んだ。

「ハジメ。どこへ行つても、何をしていても、私はずっと傍にいる。そうじゃないと、あなた、一人で突っ走っちゃうもの」

「おいおい、止めないんじゃないのか」

「次からは一緒に暴走してあげるってこと」

二人はお互いの顔を見合わせた後、弾けるように声を上げて笑いはじめた。

「そうだ、一つお願いを聞いてもらってもいいか」

「なあに？」

「あんたが煮込みハンバーグ作ってくれるって約束、まだ果たしてもらってないからさ」

「お願いって。そんなことでいいのかしら？」

よかった、とハジメは胸をなでおろした。

夕日に目を細めながら、幽香が不思議そうに小首をかしげる。

「幽香にありがともごめんなきいもしたのに、ずっとずっと言えなかったことが一つだけあってさ。認めなきやいけないけど、あんたの作る料理、信じられないくらいうまいよ。あれが食べられなくなったらって思うと、っておい、待てよ、今は違うだろ。泣くなって。あんたが泣くとこなんて俺初め、うわっ、ちよ、あーもう、困ったな。どうすりゃいいんだ……………」

第二十五話『産子這う子に至るまで』おわり

1-1 『大きな、大きなひまわりのはなし』

「ほげえ」

それこそ呆けたように。

「ほっげええ」

おまけに二人。

縁側に腰掛ければ初夏さながらの日差しで、千晃と父は口を半開きにして上空を往き交う雲たちを眺めていた。

「暑いね」

「そだな」

全身の傷口をもう一度広げた千晃。

腕をへし折り脇腹にトンネルを開通させた父。

今度こそ絶対安静にしがれよと医者から言いつけられた二人はようやく退院するなり杏奈に連れ去られ、そのまま彼女の実家に身を寄せていた。

「なんか落ち着かないかんじだよね」

「そだな」

見知らぬ町に父と二人。

母の実家なんて遠い遠い昔のことで、千晃はとつくに忘れていた。

「あにき、とんでもないことになっちゃったね」

「そだな」

和洋折衷気味だった今までの家とは正反対に杏奈の実家は純和風なお屋敷である。

青々としたタタミ敷きの居間にはこの家の歴史を感じさせる品のいい調度品が立ち並び、杏奈によって床の間に豪快にボルト付けされた60インチのモニターがそれらの調和を見事にぶち壊しにしていた。

「ああ、またやってるし」

煙を立ち上らせるビルから飛び降りる、背中に巨大な光の環を背負ったハジメの姿。彼に捕まってスカートのを抑える幽香。やけに鮮明な映像は、彼らの姿がビルの谷間へと消えるまでの様子を何

度も繰り返していた。

「息子が人気者で俺は鼻が高い」

プライバシーへの配慮なのか、しかし顔にモザイクを被った息子の姿はマヌケというほかない。おまけに事件直後の放送分は全くの無編集であつたので、鶴見ハジメと風見幽香の顔は広く知られることとなった。

全世界規模で。

「とーぶんあっちには帰れないだろうけど」

そこからネットはいつもの特定祭りだ。

それを見越して実家を用意した杏奈はやはり手際がいい。

『新着メッセージを一件受信しました。』

千晃が膝に置いていたスマートホンが割れた液晶にメッセージを走らせた。

「あ、またメールきてら」

置いて行ったのか忘れて行ったのか。

病室に残されていた兄のケータイは、そのまま妹が受け継ぐ形になつていた。

「い、も、う、と、の、ち、あ、き、で、す——と。えーと、何書こうかな」

あの一件から更に数週間。五月にも入ったというのに、今でも思い出したようにハジメたちを気遣うメールが届く。

「兄は元気、でいいだろ」

「おっけー」

あいつはそんなに沢山の人から心配してもらえるんだな、と素直に驚きながら千晃は返信文を仕上げていく。

「おいおい。こんなにイイ天気なのにき、ケータイいじってばっかじゃ勿体ないって」

そいつをひよいと背後から取り上げて居間の座布団の上へと放り捨てるのは妙齡の美女だ。

「むう。一通くらい返したっていいじゃんか」

千晃が唇を尖らせる。

「昨日もそんなこと言って、結局真夜中までメール書いてたもん」
「お母さんのあほー」

ぶつくさ言いながら千晃がケータイを取りに居間へと引っ込んでいく。

それを見送って、杏奈は父の隣に腰を下ろした。

「どうだい。こんなのにのんびりしたのは久しぶりじゃないか？」

「そーだな」

病院でも入れ替わり立ち代わり黒服の男たちがやってきていろいろと事情聴取をされたおかげで、ようやく体を休められたのはここに来てからだ。

「仕事、やめることにした」

松の木でさえざる萌黄色の鳥を見つめたまま、父はぽつりとこぼした。

「そっか」

「その、次の職探すからさ、よければ」

「こんな場所でもいいなら、好きなだけいければいいじゃんか。男の一人二人困ってもまだ広い家なんだ」

父が表情を曇らせると、杏奈はイタズラっぽく笑って彼の肩を抱く。

「ウソだつてば。私、こう見えて一途だろ」

買い物袋からアイスの箱を取り出すと、杏奈はアイスキャンデーを無造作に口に突っ込む。父もそれにならう。ふたりは暫く、ひよつとこのような形相でずびずばとアイスをしゃぶりつづけた。

「あん？」

ふと庭に目を向けた杏奈が、珍しく眉間にしわを寄せた。

「おっどろいたな。痴女が見える」

んなアホな、と口にしながら父も視線を追って、それを見つけた。黒い羽が庭に舞っている。

「ああ、よく知ってる痴女だ」

のそのそ戻ってきた千晃が板の間にごん、と頭を打ちつけた。

「……痴女じゃん」

その姿を目にする度に眩暈がする。

「ちゅん」

それはやはり保護者の趣味なのか、青いベビードールの上から薄手のケープを羽織っただけの大柄な美女は恥じらいの一片もなくしゃがみこんでいた。格式高い和風建築の、池のど真ん中に。

「ひさびさ。おーちゃん」

ビニール製のサンダルをつっかけて庭に出て行く千晃はいつものダルつとした雰囲気を漂わせてはいたものの、束の間唇の端に笑みが浮かんでいた。

「この子たち知り合いなの？」

「杏奈、信じられんと思うが彼女は無害だ。ちよいと目のやり場にこまるっただけで」

「うわーッ！」

ガラスを引っ掻くような千晃の悲鳴。

「ばしやばしやという水音。」

「ダメだし！」

庭池に泳いでいたりっぱな錦鯉のでっぷり肥えた白い腹にかみついたおーちゃんを、杏奈はケタケタ笑いながら指差す。

「たぶん、人には何もしない。たぶんね」

「そっか。ならいーや」

結局この場で必死なのは千晃だけなのであった。

「で——で！ なにさ、おーちゃん。私に会いにでもきたワケ!？」

「うん！」

トラウマを抱え込んだ鯉を池に放してやりながら千晃は額を覆った。地球上にいる限り、この神出鬼没の友人から逃げる手段はないのかもしれない。

「いや？」

「そういうワケじゃないけど、鯉はやめろや。あーッ！ 生臭いつ！」

「口を近づけんなー！」

唐突にキスをせがみ始めたおーちゃんに押し倒され、二人の姿が水しぶきの中へ消えると杏奈は一層けたたましく笑い始めた。

「おっかし」

父から見えるその表情は、出会った時から何も変わらない。まるで少女のようだった。

「あの二人もいれば、もっと楽しくなったんだらうけどなあ」

何気ない杏奈の呟きに、父は神妙な面持ちでプロレス会場と化しつつある池を見つめた。

「今朝のニュース、見たか？」

「息子たちがテロリスト扱いされてるかもってハナシ？」

「ああ。俺たちがハマったあの紅い霧も、その後の光も、あいつらが毒ガスを撒いた結果だとか、もしくはそれを手引きしたとか、好き放題騒いでる連中がいる」

「あんたはどう思うんだい？」

何かを守ろうとするように広がる霧、そして、空からすべての霧と雲とを吹き飛ばした橙色の光の帯。不思議と悪意は感じられなかった。

父が頷くと、二十年來の女房はそれだけで察した。

「私もそう思う」

千晃が投げ出していったケータイを拾って、杏奈は画面を見つめる。

『新着メッセージを三件受信しました。』

さつきからメールはひっきりなしだ。

「こんなにもトモダチから思われるようなヤツだ。んなことをするハズがない」

「あにきはむしろ、私達を助けてくれたんだから」

腰につかまったおーちゃんを池から引き摺ってきた千晃が、べしやりと音を立てて芝生に寝転んだ。

「あにき、空飛べるんだよ。知ってた？」

仰向けになった千晃は眩しそうに眼を細めながら太陽へと手を伸ばす。となりでおーちゃんがマネをする。

「へえ。どうやって？」

杏奈と父がやってきて、千晃の傍にしゃがみこんだ。

「なんか背中にヘンなワツコみたいなのが出てきてさ。金の炎がドバーって」

掌を太陽に透かしてみれば、それはただただ赤いだけだが。

そこに兄と同じ太陽の血が流れていることを千晃は誇らしく思う。

『新着メツセージを』——『着信中』

「おやおや。ついに電話までかかってきたか」

やめとけ、と言う父を手で制して杏奈はケータイを耳に当てて家中へと戻っていく。

「はいはい。ああ、ハジメのママ——うん——へえ、幽香さんにそんなことまでしてもらってたワケ？——ごめんごめん、え、テレビ？」

いつも通りとぼけた調子の杏奈の声を背中で聞きながら、千晃は目を閉じる。

もうすぐ家を出る。ちょっと離れた町の学校。そこで新しい可能性を探して、もう一度だけ頑張ってみるつもりだ。

「その前にちよつとだけじゅーでん、じゅーでん」

千晃はおひさまのエネルギーで動くらしい。

「……………千晃ちゃん。変なワツコって、ああいうヤツかい？」

「え？」

そこに投げかけられた母親の声に走った緊迫感に、千晃は弾かれるように体を起こしていた。

居間の中、杏奈が食い入るように見つめるテレビの画面。

「あにきゅう？」

『速報』のテロップが流れるブレブレの空撮映像。

ビルの群れの中に浮かぶ黄金の光。出所はたった一人の青年の背中だ。

そして舞い散る無数の花卉がミラービルに反射し、見るもの全てを幻惑する。ズームする映像が、束の間柔らかな笑みを浮かべた美女の姿を捉えた。

「おねえちゃん？」

重力を感じさせない動きでビルの間を飛び回る二人。

ハジメが、幽香が同時に手を差し伸べる——直後、暖黄色の爆発が巻き起こり、ビルの鏡面がたわんだ。

「杏奈、これはなんだ。何が始まった」

「私に分かるかってんだ」

「どうして」

おーちゃんに抱きしめられながら、千晃は退散するへりが中継し続ける映像の中で幾何学的な模様を描く弾丸の渦を見つめていた。

『新着メッセージを八件受信しました。』

「最初で最後の弾幕ごっこを始めましょう」

『新着メッセージを十件受信しました』

「やめろって言ったって今回は手加減しないぜ」

『新着メッセージを三十五件受信しました。』

「この理不尽な世界に、一つだけ真実を思い出させてやろう」

『新着メッセージを五十件受信しました。』

四月編エピローグ 『大きな、大きなひまわりのはなし』

『風見幽香の殺し方 日輪の物語』

1 『日輪の物語（上—1）』

『見てろよ。生きて帰れたらお前、ぶっ殺してやる！』
すべては一つの約束から始まった。

ならば、この物語の終わりもまた、一つの約束によって迎えるべきものなのだろう。

——まだ、夢を覚えているかい？



『一件の新着メールを受信しました。』

宛先：ハジメ

差出人：ハルカ

件名：きれいです

先輩はきつと覚えていないでしょうけれど、
私はよく覚えていますよ（笑）

ダメダメだった私に根気強く接してくれて、
ありがとうございます（^—^）—☆

これを見ていたらちよつと懐かしくなって（汗）
鶴見先輩。きつとまた、会えますよね？



その瞬間は、はつきりと分かった。

「きたな」

地上からの狙撃を間一髪で弾いた日輪の担い手が、大気をゆがませて一息に加速する。

ビルの森を突っ切れば、薄い雲越しにぼやけた光を送る太陽の下に舞い散る花吹雪。一拍子遅れて、彼のパートナーが姿を現した。

「ハジメー」

ふわりとスカートをひるがえして、幽香がハジメの手を取る。

「いきましようー！」

今がチャンスだ。全世界の目が、この戦いに向いている。

この戦いが一体何のためのもので、この二人が一体何をしようとしているのか、と。しゃぶりつくされたリングの芯に埋め込まれた、最後の宝石。

そいつがきらめく瞬間を、今か今かと首を長くして待っている。

「鶴見ハジメは宣言する」

この最高の舞台で、高らかに歌う。

これから切るのはノーマルスperlでも、ラストワードでも、ラストperlでも、オーバードライブでもない。

「風見幽香は宣言する」

掲げて叫ぶは世界の頭上に立ち込める雲をぶち抜く、史上最後のスperlカード――

◇◇◇

奥山の溪流を見下ろす、いい部屋を取った。

逃走資金を用意してくれた今井という刑事には悪いが少し豪遊気味だ。

「傷もようやく塞がったみたいだし」

とはいえ体の栄養も、心の栄養も必要だった。

まさか温泉がここまで効くとは思わなかったな、と包帯を巻いた腕を握って開いてを繰り返してからハジメはソファに沈む。

目を閉じると窓の外からのせせらぎと、深夜のひんやりと澄んだ空気が心地よい。

「寝てるの？」

その中にせつけんとなかの香りが混ざればすぐ分かる。

「ハジメ？」

狸寝入りを決め込んでやろうかな、と迷ううちにその香りがぐつと近づいてきた。

「……………もう。起きてるんでしょ」

「どうかな。って、うわっ!？」

瞼を開くなり目の前には幽香の顔。くすくす笑った彼女が、額にキ

スを残して体を離す。ハジメは一転、残された香りに包まれて居心地悪く頬を染めて項垂れるのが精いっぱいだ。

「あの時はあんなに大胆だったのに」

「うるさいっ」

既にあの一件から相当な時間が経とうとしている。

結局髪を短く切った幽香が浴衣の乱れを正す姿を見つめているうちに、ハジメの口から自然とため息がこぼれた。

「なあに？」

「もう半月だなんて」

「ああ、そのこと。私が忘れちゃダメよね」

あと半月もつかどうか。

それで風見幽香という存在は限界を迎える。

何もかも忘れて、狂って、そして消える。その事実を意識するたびに深刻な顔をしてしまう最近のハジメを励ましてやるのは、何を隠そう幽香本人の仕事だった。

「きつとうまくいくわ」

二人はツヤのあるテーブルの上にまき散らされた紙片を見つめた。誓約書めいた文言。そしてきらびやかな凶案が精密に描かれ、刻まれ、わずかな光の加減でステンドグラスのようにきらきらと輝く。

それはカードだった。

「ルールは理解できそう？」

「馬鹿にしゃがって」

ハジメはむすつと腕組みする。

「さっぱりだよ」

だとはと空笑いするハジメを無視して幽香はカードの山から一枚を取り上げる。そして次。その次。だんだん、彼女の眉間にしわが寄ってくる。

「なにこれ」

「俺のスペルカードデッキ。百六十枚ある」

「同じのばっかりはダメって言わなかった？」

「そ、そのコンビニのコピー機で」

「避けられないのはダメって言わなかった？」

「そうだっけ」

「わけわかんないのはダメって言わなかったかしら？」

「ええと」

「ハジメ」

幽香が勢いよく立ち上がる。

その無表情に、今まで培ってきたハジメの危機察知能力が大音量で警報を垂れ流し始める。

「ちよつ、お前、待てつて。ハイワテキフンソーカイケツつてやつだろ!？」

「確かにスペルカードでの決闘は遊びではあるけれど、本気でやるから不慮の事故で死者がよく出る」

立ち上がって逃げようとするハジメを幽香が突き飛ばすと、彼はそのままソファごと床を滑って転げた。

「わたし、このゲームが好きなの。あなたと同じくらい愛してる」

「わ、悪かったつて。真面目に勉強し直すから」

複雑な心境で床に転がったままのハジメを見下ろす幽香の冷たい視線。

「だから粗末に扱うなら、ここで不慮の事故が起きる。かも？」

そこから体勢を立て直す暇も与えず、ひらりとソファを飛び越えた幽香はハジメの上に跨るのだった。

「なんてね」

そうして花のように笑った幽香の、花卉のように重さを感じさせない体。

「じゃ、じゃあいい加減どけったら」

「いやよ」

浴衣の薄い生地越しに彼女の体温を熱いくらいに感じる。申し分ない眺めのせいもあって高鳴るハジメの胸に、彼女はそつと頭を預けた。

「どきどきしてる」

「だ、だって。っーか、ならない方がどうかしてるだろっ！」

もそ、と顔をもたげた幽香の赤い瞳が濡れている。

「違うの。わたしが。このままだと、大変なことに、なりそう」
「は」

後ろ脚に幽香が蹴り込んだソファがくるくると回って奇麗に元の位置に戻るのを見つめながら、ハジメは熱に浮かされた気分です。幽香の唇を見つめる。

「なん、だって!？」

「ここでこのまま青年から性年にシフトしてしまっていていいのでしょうか。」

「ちよ、ちよつと待てよ、まだ俺たち始まってひと月で」

「私はもつともつともつと前からよ。それなのにハジメは」

「その話は聞いたけど！ まだっ、そのっ、心の準備ががが！」

思えば仲良く半月以上寝起きを共にして何も起きなかったのが不自然なのだが。

「準備なんてさせてあげないんだから」

脳裏のイイハジメとワルイハジメの戦いは、浴衣の隙間からハジメの胸板に滑り込んできた幽香の手によって始まる前から終わっていた。

『いんじゃねーの?』

先手必勝のICBM発射によって圧勝したワルイハジメが鼻をほじる。そこでそのまま獣になり切れないのがヘタレのいいところでもあり、悲しいところでもあり。

「私達、家族で、恋人で。これからもう一度家族になるのね」

「マジか。これ、マジかッ！」

熱をもった幽香の息が首筋にかかる。畳をかいて逃げようとするハジメの手を素早く抑え、幽香はその上にのしかかった。

「ごめんなさいっ、私っ、これ以上我慢なんてできない、みたい——
——」

「おわああああ!？」

ぼごお、と音を立てて重いものがいつの間にか部屋の天井に開いていた空間の断裂から畳の上に転げ落ちてきた。紅と白、金。そして紫

と黒と。

「……………おかまいなく」

複雑に絡み合った妖怪玉巫女風味から、三者一様のセリフが迸った。

「うふふ」

これまでに見たこともないような満面の笑みで、幽香が指を鳴らした。



『一件の新着メールを受信しました。』

宛先：ハジメ

差出人：みやこ

件名：つるみんへ

こんな時にケータイいじくるとは思えないけど、一応。

何があったのかとか、どうして、とか。

今はそういうことはどうでもいいんだ。

キミたち、とつても楽しそうなもの。

ここからだと思えないけれど、きつとズタボロなんだろうね。血ま

みれなんだろうね。

保健委員一同で待ってるからさ、終わったら学校へおいで。

それでみんなに話を聞かせてね。

さいしよつからさいごまで、だよ？

つるみんたちにひそかに嫉妬するMより。



「とにかくあの反則ビーム三十枚積みデツキは禁止。いいわね。美しくない」

キンキンに冷えたビールの缶をほっぺにあてがったまま、紫はハジメのドリームデツキを無造作に手で払って片づけてしまった。

「氷くらい作っておいてよね」

部屋に備え付けの冷蔵庫のドアを閉じて、じとりとした視線を送っ

てくる霊夢も、紫と同じように清酒の瓶をぱんぱんに腫れた頬にあてがっている。部屋の隅に転がっている、幽香によって折りたたまれた雪之丞が静かに震えることで同意した。

「お前らな」

いいところで、と強がりながらも内心助かったと胸をなでおろすハジメ。

「ばかへたれ」

「だ、だってあの前で続きをしろって言うのかよ」

「そうよ。ハジメならできると思ったのに」

彼の背に寄りかかったまま拳を拭いていた幽香がつまらなそうに後ろ頭をぶつけてくる。一気に不機嫌になった彼女にはこれ以上触れないことにして、ハジメは目の前の問題を片づけることにした。

「ところで体の具合はどう？」

一番肉体の立ち直りが早かった紫がまずそうにビールを流し込みながら問うた。

「だいぶ。足はまだ、歩くとひきつる感じがするけど」

「そう」

紫はそれきりちびちびとビールを飲むばかりで、会話は途絶えた。

僅かに憂いを帯びた瞳。彼女の隣に座った霊夢の鋭い視線。そして、壁にもたれて槍をもてあそぶ雪之丞。

どことなく重々しい雰囲気の中で、それでも一つだけ確認しなければいけないことがある。

「俺と幽香は幻想郷を解体する」

それが、この半月で出した結論だ。

F市のビルにおける決戦は、意図せず大衆の注目を集めた。

その熱狂は未だ醒めていない。ひよつとしたら、俺たちの生きていく時代に、なにかとんでもないことが起こるんじゃないか、と。

「本当にいいんだな」

その注目を利用して、現実を整形し直す。

まだ、夢も、希望も、この世界には残されているということを書いて出させるのだ。そうしてやってくるものは幻想郷を必要としない時

代。

幻想と現実とが寄り添って生きる時代だ。

そして、その先。おそらく幻想の存在たちは――

「私達が生き残る道がそれしかないと言うのなら」

紫が身を乗り出してきた。

「ただしこれだけは覚えておいて。計画を実行すれば次はない」

それを聞いたたびに、ハジメは背中に冷水を流し込まれたような気分になる。

「弾幕ごっこっていうイベントはまだ外の世界でラベルの張られていない缶なの。私達はこの世界のオトナと呼ばれる人たちがそこに都合のいい説明を張り付ける前に、それが魔法であり、幻想であるってことを万人に刻み込む必要がある」

「失敗すれば？」

「またウソくさい現象名をつけられて、かつての私達のようにいずれは風化して消えていくだけよ」

その責任の重さに、ハジメは押しつぶされそうになる。

「弾幕にとつて一番大事なことは、そこに意味と思念があること」

それに勝るものはない、と紫はよく口にする。

「それ以外はぶつちやけどどうでもいいわ。刃物をぶん投げてでもいいし、直接殴りに行ってもいい。いわば暴力自由形ね」

「水泳みたいに言うんじゃねえよ。当たりどころ悪かったら普通に死ぬんだぞ」

ハジメの切り返しにも紫はくすくすと面白そうに笑うだけだ。

よくよく考えてみればこの室内、生身の人間で弾幕ごっここの初心者ハジメ一人だけなのである。その事実気付くと、とたんに不安になってくる。

「あなたの思い、もう見つかっているでしょう？　なら、あとはそれを叩きつけてやるだけ」

そこであくびを一つして、紫は背伸びした。

「さて。明日はしっかりやりなさい。私もゆっくり眠って備えるから」

「幽香さんを頼む」

雪之丞の手を引いて、紫が空間の裂け目へと姿を消す。一大イベントを前に最後に「ばいばい」と手を振って見せる余裕があるあたり、やはり彼女が潜ってきた修羅場は一つや二つではきかないようだ。

「しつかりやんなさい」

立ち上がったままぼんやりと彼女たちを見送っていたハジメの前に霊夢の手が差し出される。

「客席の掃除は任せて」

それが握手を求めているということに気付くまで、少し時間がかった。

「霊夢、今までありがとう」

「これが最後にならないことを祈ってるわ」



布団の上に転がって、ハジメは切り札を見つめた。

彼の象徴とも言える太陽の透かし彫りが電燈の光によって浮き上がり、ハジメの顔にも同じマークを描く。

「スペルカードなんてオオゲサな名前がついてるけど、要するにただの紙切れだろ」

そして、正確には契約書だ。

私はこういう人間です。あなたにこういう攻撃をします。前もって攻撃についてこういう約束をします。くらいやがりあそばせ——
——という宣言をするためのものでしかない。

「そうよ。よく気付いたわね」

真横にごろりと転がってきた幽香がハジメの指に自分の指を絡ませる。

「そもそも切り札の条件って、なにかしら」

「自分以外の誰にも使えないこと、とか。意外性とか」

「もっとシンプルでいい」

指の感触をこそばゆく思いながら、ハジメはううんと唸った。

「威力」

「遠くなった。もっとシンプルにできない?」

「名前？」

「惜しい」

「……知るかよ。切り札は切り札だろ」

ふふ、と笑った幽香がハジメを抱き寄せた。

「そうよ、ハジメ。それが答えなの。切り札の条件はたった一つ。それが切り札である、という事実そのものよ」

久しぶりに幽香からのいいこいいこ攻撃をもらいながら、ハジメは酒でぼやけた頭をより一層酷使しなければいけなかった。

「そんなのただのとんちだ」

足下から布団を引き寄せると、一緒に花の香りも舞い込んできた。

「これから戦う相手に正攻法なんて通じないわ。なにせ——」

「今までこいつを倒したやつなんて一人もいないから」

幽香が腕に頭を押し付けて、頷いた。

だからこそとんちでもズルでもカマして、まずはこいつを二人が踊る舞台に引きずり下ろしてやらなければいけない。

そのために、幻想郷で最もありふれた決闘の様式を持ち込むことにした。

運よく相手が勝負に乗ってきた瞬間、ハジメはこのカードが唯一無二の奥の手であることを宣言し、約束を取り付ける。

——お前をあとと言わせてやるぞ、と。

長きにわたる、そいつとの戦いを終わらせるために。

「だからこそ一度っきりのチャンス。そしてたった一枚よ。ハジメ。ステージが上がれば二度目はない」

全世界規模で事実のラベルを張り替えるなら、それこそ全世界からの注目を浴びなければいけない。まずはその時が来るまで花卉と光を散らせて派手に踊る必要がある。

そこから何が起きるのか、一体どんな横槍が入るのか、予想だにできない。

「でも心配しないで。私も、霊夢も、ユキに、あの妖怪もついているのだから」

「こんな時でも幽香は頼もしい。」

「あんたも気負うなよ。俺がいる」

「……………ふふ。ありがとう」

せめてものお返しに彼女も心安らかでいられるようにしてやって明りを消す。

「おうちの庭にね、ひまわりを植えたの」

暗闇で幽香の声を聞く。

「きつと今頃きれいに咲いてくれてるわ」

「じゃあ、何もかも終わったら見に行こう。一緒に」

「ええ。一緒よ」

幽香はまだ何か言いたげに時折身じろぎしていたが、やがて漏れ出した静かな寢息に、ハジメは彼女が眠りについたことを知る。

——世界をひっくり返す、逆転の切り札。

それからスペルカードの文言を考えて唸っているうちに、あっけなく最後の夜は空け、朝の霞が立ち込める溪流を見下ろす幽香の背中が目に入ってきた。

「行きましょう、ハジメ。私達の舞台へ」

朝日を背負った幽香の手をハジメが掴む。

「ああ。俺たちの夢を取り戻そう」



『一件の新作メールを受信しました。』

宛先：ハジメ

差出人：樋口 透

件名：筋肉

幽香さんにお伝えください。

万一鶴見くんに負けるようなことがあれば、我々が効果的な体力づくりをお教えしますと。

一緒に筋肉の頂を目指しましょう。

あのピンヒール。すばらしいものでした。

2 『日輪の物語（上―2）』

『一通の新作メールを受信しました』

差出人：ユキ

宛先：ハジメ

タイトル：（無題）

やほー、はじめ

あいつのけいたい盗んでこっそりめーるをかいてるんだけどもゆかりのやつがてきとうにつかい方教えるから、

これがほんとうにあんたのところに届いてんのかとかしらないけど。まあ、それはそれでいいんだけど。

わたしがあんたに言ったこと、忘れてないよね。

それがこうして、わたしたちがあんたたちの空の下で戦うりゆうなんだから。

あんたはあんたで、最後までわがままを通して見せなさい。

じゃあ。また。

これが終わったら、またあんたの学校にでもまぎれこんでみるかな。

そのときは案内よろしく。



外に出なければいけないような気がした。

それはよく晴れていたからとか、風が暖かかったとか、あるいはなんとなくとか。仕事も学校もショッピングも放り出して、それぞれの理由で人々はそろそろと通りを歩き始めた。

そんな調子で、昼過ぎを越える頃には町の中心部はすっからかんになっていた。

「なあ、俺達何を待つてるんだ？」

「さあ？」

そんなやり取りを何度繰り返しただろうか。

まるで誰かに縛り付けられてしまったかのように、誰もが固唾を呑んで摩天楼を見上げていた。F市。駅前ばかりがハリボテのように発展していった、典型的な、しみつたれた地方都市。

今日まではそのはずだった。何も無い、何も起こらない日常がそこにあつて、いつまでもいつまでも続くはずだった。

ただ、黒く焼けた一つのビルだけがそれを否定していた。そうじゃない、と。大事なものを見落としているぞ、と。

その声が聞こえるかのように、都市部をぐるりと取り巻く『観衆』の間には、正体不明の静かな熱狂があつた。

「あ？」
誰もが驚きの声を上げていた。ひしゃげたシルエットを呈するビル。

その頂に輝く真昼の太陽が、二つに分裂した。ざわめきは一瞬にして悲鳴に変わる。

『花符——!!』

暴風のような衝撃波が、立ち尽くす人々をぶん殴っていったのだ。やがてよろよろと立ち上がった彼らの視線の先。宙にまき散らされ、巨大な凶柄を描く無数の光弾。それは、まぎれもなく弾幕なのであつた。

◆◆◆
「早くないか」

雪之丞がカツプを置いた。

その指先には既に金属の甲殻が生じ始めている。
「私達の動きは筒抜けだった、ってことかしら」

紫と霊夢の力によって、無意識のうちに町の外縁に集められた『見届人』たちの一部がわらわらと崩れた。怒り狂う獣の群れのように遠い地鳴りを響かせてやってくるのは無数の装甲車だ。

「かもね」

それまで無人のカフェテラスでお茶を飲んでいた三人は、イスから立ち上がって、迫りくる鋼鉄の車列に対峙する。

このタイミングで彼らが現れるというのなら、彼らを率いる存在は、おそらくこうなることを予期してずっと前から準備を進めていたのだろう。

「それで、私達の仕事が何か変わるのかしら？」

その底知れなさが呼んだ不安を振り払って、紫はおどけた様子で二人をかえりみた。

「別に。ただ、大変なのはもつと多くの観客を集めなきゃいけないハジメ達よね」

「俺たちはそれまで、大立ち回りを邪魔するやつらを片っ端からぶん殴る。それだけだ」

突風が吹き、雪之丞の姿が消えた。

あたりを見渡すと、さっそく手始めの一閃で装甲車を両断した悪鬼が、仮面の隙間から赤黒い地獄の業火を吐き出すところだった。

「なにより、あの人の一世一代の戦いのお膳立てなんだ。邪魔はさせないさ」

金属を引きちぎるような咆哮で、雪之丞は挑発した。

「さあッ、かかってこいよ！俺がお前たちの言う虚構なら、俺を消して見せろッ!!!」

それを皮切りに、銃弾の雨が容赦なく雪之丞に注がれる。点ではなく面で叩き付けられる衝撃にさすがの吸血鬼の鎧も見る見る間に歪み、内部には確実にダメージが入っていく——ように、思えた。

「ハハッ」

勢いのまったく衰えない悪鬼が勢いよく炎を吐き出して、槍を振るう。その度に十人とも二十人ともつかぬ機動部隊が吹き飛んでいく。花と炎と血飛沫を散らして、地獄の底から響くような声で、語る。

「安心しな。殺すなっていわれてるからさ」

仁王像のように肉体を捻り上げた雪之丞の手の中で赤い槍がぼんやりと光を放ち始める。

「それ以外は何でもオツケーなんだと」

「ちよ、あんた」

背後に控えていた霊夢までもが巻き添えの予感に口を挟みかけた

瞬間、地鳴りのようなエンジン音が轟く。

「きやがったな」

味方の装甲車を蹴散らして、花屋仕様と化した装甲車が飛び出した。「いたっ」霊夢を軽く小突いてそいつの直撃コースからどかしてやると、悪鬼はノーガードで両手を広げて迎え入れる。

「ああ、そうだ。殺すなってハナシ。例外があつた——あんた以外は、だ」

直後、分厚いフロントの装甲が鋼鉄の悪魔を押しつぶした。

装甲車の勢いは止まらず茫然とする一団をあとに、車体の下からおびただしい火花と砕けた装甲の破片をまき散らしながら近くのシヨーウインドーに突き刺さる。

「ユキ!!」

「彼なら大丈夫よ」

尚も350馬力を全開にして手近なビル内部へと突き進んでいく装甲車を尻目に、紫はすっかり二人を包囲した機動部隊の黒山を見渡した。

「あいつら、なんて?」

この瞬間も彼らの間でやり取りされている通信の内容が、紫には分かるのだろう。ふんふんと頷いていた紫が、不穏な笑みの浮かんだ口元を隠すように扇子を広げる。

「化け物、ですって」



分厚いコンクリートの壁をぶち壊して装甲車はショツピングモールの中を暴走した。

車体の下に巻き込まれた下半身をすりおろしにされるのもお構いなしに、鋼鉄の吸血鬼は前部装甲に爪を突き立てて這い上がろうとする。

その意図をいち早く察したように、装甲車は進行方向を変えた。床に赤い血でラインを描きながらジュエリーショップの陳列を粉碎する。

エンジンがうなりを上げて店と店を仕切る壁に突撃する。鉄筋の

壁を一つまた一つと突き破るにつれて雪之丞の体は徐々に車体の下に吞まれていった。

ギヤリリリリリイツ——

肉と装甲をまき散らす凶悪なシユレッダーと化した鉄の塊はたっぷり時間をかけてぐるぐるとフロアを回り続け、赤い輪の凶柄を床に描いていく。

「それで——あんたの——攻撃は——終わり、か？」

冷たいナイフのように研ぎ澄まされた声は、おそらく爆走を続ける装甲車の鉄板を貫いて、内部にも響いたに違いない。

「そう——例外が——あんたなら——潰してもいいって

紫が」

まさに悪魔の呻きと化した声をかき消すように、装甲車は方向転換。床を引つpegが勢いでタイヤを空転させると、モールの二階へと通じる大階段を駆け上る。ガコガコと激しく階段の段差を打ちつけながら登っていく装甲車と床の間にはわずか数センチの隙間しかない。

「だから、許す。今だけ好きなようにすればいい。そのほうが後で、あんたを心置きなくミンチにしてやれる」

雪之丞の肉体はより激しく損耗していく。

にも関わらず、車体の下から発せられる声も、その気配の強大さも増していくとは、一体どのような理屈が働いているのだろうか。

階段を昇り切った装甲車が極め付けに吹き抜けへとダイブする。

16トンの塊はその役目の最後に数メートルばかり空を飛ぶと、吸血鬼を下敷きにしたまま一階のフロアに垂直に突き刺さり、その勢いのままに地下の食品売り場まで貫通して更に雪之丞の肉体を押しつぶした。

中ほどまで埋まった装甲車はそのままエンジンを停止した。照明が明滅し、もうもうと舞う塵をぼんやりと浮かび上がらせる。

紫の施した人払いの暗示が無ければ、間違いなくこの特攻で誰かが巻き添えを喰らっていただろう。

暫く、完璧な静寂がそこに漂っていた。
はりつめた静寂だった。

そのまま時が止まってしまってもおかしくない程の静寂は、空気を
極限まで吹き込んだ風船にも似ている。

「さて」

その一言で、風船はパチンと音を立てて弾けてしまう。時間は動き
だし、現代に生きる吸血鬼と幻想を滅ぼす男との決着へとむけて
ジェットコースターじみた勢いで降下を始める。

「おあつらえ向きの場所じゃないか」

鉄の柱と化した装甲車が傾いだ。

果物を満載したワゴンが丸ごと押しつぶされる。

「ここなら邪魔は入らない。あんたを取り巻きどもからひっぺがす手
間が省けたつてもん、だッ!!」

床から引き抜かれた装甲車が宙を舞った。地階の床と天井にピン
ボールのようにぶつかって激しくバウンドした装甲車は、やがて薄暗
い空間に火花を散らしながら横滑りし、最後に鉄筋の柱を一つ押しつ
ぶして止まる。

「あの時の恨み、しっかり晴らせてもらおう」

クレーターから立ち上がった雪之丞の頬を、金属質の甲殻が滑るよ
うに覆っていく。千切れた肉をも金属で補っていく。狭間雪之丞は
ほんの数秒で鉄の悪魔の貌を取り戻す。日中というハンデの下に
あって、驚愕に値する再生能力だ。

「あの時あなたを逃がしたことは僕たちの手落ちでした。ここで、僕
たちの手で、汚名を返上させていたかどうかと思ひまして」

甲冑に覆われた指先が向けられる先では、横転した装甲車から影法
師のように巨大な男が立ち上がるところだった。

「ときに、『僕たち』を殺すと?」

「ああそうだ」

多世界に跨って存在する能力を持つ異形、万場幾恵が肉のひきつっ
た顎を小さく撫でる。

「あんたの能力、ハジメたちにさんざ説明された今でもぶつちやけ何

がなんだかよく分からねえけど。とにかくただの人間なんだ。なら殺せるだろ」

「はたしてあなたに僕たちを殺しきることができるとはどうか」

「あんたがメゲるまで何万回でもやる。なにせ、あんたには借りが山ほどあるからな」

万場は長身を、これまた長大な対物狙撃銃に預けて雪之丞の出方を窺っている。

鋼鉄の仮面の中で雪之丞は僅かに眉根を寄せる。この男はこんなデカブツをいつ、どうやって取り出したのか。もともと持っていたのだったか。いや——記憶を辿ろうとすると、フィルターがかかったように数秒前の万場の姿がおぼろげになってくる。

「つくづく君は、しぶといですね。もう出番は終わったというのに」この奇妙な感覚は万場の能力に起因するものなのだろうか。

「勝手に終わらせんな。俺はいつでもクライマックスなんだよ」

記憶の齟齬が作り出した眩暈を振り払うように雪之丞が首を振っている、万場が銃のオバケに弾倉を喰わせてやりながら口を開いた。

「哀れな人だ。同情しますよ」

万場はまたどこかから取り出した軽機関銃を片手に、対物ライフルを残された腕一本で構えた。

「自分自身を切り捨て続けて、結局何も得られなかった。それでも尚あがくの辞めない。幻想なんてくだらない物を信じて、見苦しくあがくだけの」

万場の声が地下に響く間、雪之丞は辛うじて装甲車の下敷きを逃れたリングゴを一つひろい上げる。

「その姿がどこかの誰かに、見なくてもいい夢を見せる」

万場の異形に浮かぶのは、患者の体内に手遅れの腫瘍を発見した医者のような表情だった。

「現実には叶わぬ夢を上書きして生きようとする君たちが、いくつもの世界線を腐らせる。だから僕たちは幼年期を卒業できないんですよ」
「なあオッサン。あんま子供をバカにすんなよ」

リンゴを遠くに放り、雪之丞は構える。

今日は紅い槍が、体の一部のようによく馴染む。ハジメと殺し合った時よりも、救済と称して幽香を殺そうとした時よりも。殺されかけた時よりも。薄暗い照明が照らす埃と塵まみれの空気でさえ、どこまでも澄み渡ったような錯覚を覚える。

「難しいことをごちやごちや並べやがって。お前の言うオトナつてのが自分の夢を見て見ぬふりして生きることなら、俺はクソガキのままでいっこう構わねえんだよ」

奇妙な感覚に囚われながら、彼は槍の穂先を目の前の敵へとまっすぐ向けた。



「むむむ」

肩に飛び乗ってきた黒猫に何事か囁かれた紫が眉間にしわを寄せた。

「どうしたの？」

「霊夢、私も少し離れなきゃ。ここ、お願いね」

眉をひそめた霊夢が何か言う前に、紫は気の抜けた表情でビル街の方角をしゃくった。霊夢の結界で人払いがされた大舞台。幽香とハジメの戦いの余波で割れた高層ビルのガラスが、スパンコールのように陽光を乱反射して地面に降り注いでいく。

「誰かが結界の隙間からあそこに入っちゃったみたい。危ないから見てくる」

「……ちよつと、つまりこの場私一人に任せるってこと？」

「ええそうよ」

言うだけ言って紫はさっさと空間のスリットに潜り込んでしまう。

「あーそう。結局いつも通りってことね。はいはい」

前髪をかき上げて霊夢は気だるげに首を振った。

もちろんこの瞬間も容赦なしの実弾射撃が続けられ、霊夢の周囲に張り巡らされた結界に干渉して青い火花を上げて弾け続ける。

「ま、ぶつちやけその方がやりやすいわ。アリガト」

大暴れしても巻き添え出ないし——と呟く霊夢の、春風に揺れる黒

髪。その毛先が虹色の輝きを帯び始める。



軽率だった。

お祭り好きのハジメのクラスメートたちは、珍しく後悔していた。

「わひい」

「死ぬう」

あそこでハジメたちが戦っているのなら、他でもない私達が見届けなきゃあ——と息巻いて突っ込んでみたはいいものの。

「あいつら、俺達、見えて、無いのかよっ」

弾幕ごっこは殺し合いを避けるためのゲームであることに間違いない。

だがそれはあくまである程度自分の身を守る術を持っていることが前提となる。放たれる弾丸は衣服をこそげ、ブロック塀程度なら粉碎する威力を持っている。

『日輪——』

ハジメの声が大気を振るわせた直後、空気の質が変わった。

それまで無作為にバラ撒かれていた弾丸が軌道を変える。内が外へ、外が内へ。交錯する光弾の渦。巻き込めばシュレッダーじみて相手を粉碎する暴力の渦を、幽香が難なく掻い潜る。

「ま、またくるぞ!!」

輪から外れた弾丸は自然消滅するか、何かにぶつかるとまで止まることはない。

ほとんどは背の高いビルに阻まれて地上に着弾することはなかったが、そのかわりとばかりに破壊された外壁やらガラスがこれでもかと降り注ぐ。

「おいミヤコ、頭さげろ!!」

「わぶっ」

その様子をケータイで撮影していた女生徒が、無理やり頭を押さえつけられて伏せた直後、ばらばらとガラスの雨が彼らを打った。

「もう十分撮ったし撤退撤退! ケータイ仕舞って走れっ!!」

「だってえ、これせつかくの生放送だし」

「おいこっち向けんなって俺の顔が映るだろ！」

集団の後ろを数歩分遅れて走る女子生徒——ハジメをつるみんと呼ぶ彼女の手にはこんな時でもしっかりとケータイのカメラが空で繰り広げられる閃光の応酬に向けられ、手ブレ激しい動画をどこかのサイトに配信していた。

「とりあえず見に行こうとか、野次馬にもほどがあるだろ！」

「やっぱり大人しく向こうで待ってりゃよかったんだ！」

と、数人が彼女を責めるが、自分のことはすっかり棚上げである。

「いいじゃんいいじゃん、もしかしてこれ、世紀の瞬間かもよ。ピース！」

「お。ピース！」

「潰されるぞ!!」

こんな時でもやっぱりどこかのほほんとしたやり取りを繰り広げる一団。

「だああ、止まれやっぱり止まれ！」

とはいえ一クラスの人数で細い路地を走ってはそう簡単に止まることもできず。

先頭に行く生徒が悲鳴じみた声を上げながら転げると、後続の集団も次々と押し合いへし合いになりながら玉突き事故めいて潰れていく。

「さっきから走れって行ったり止まれっていたり、もう——」

不平の声をかき消すのは腹の底に響くような空気のうちなり。

折り重なって倒れた彼らの手前数メートルを帯状の閃光が駆け抜けていく。コンクリートのビルが熱せられたナイフを押し付けられたバターのように切り裂かれていく。

「熱っ」

離れていても熱風が押し寄せてきた。

上空では白い翼をひるがえした幽香が、まるでミラーボールのようにあたり一面へと殺人光線をまき散らしている。

「……きれい」

極彩色の閃光を縫って飛ぶオレンジの流星は、ハジメだろうか。

依然として死地にいるにも関わらず、全員が倒れ込んだままの姿でぼかんと口を開いて空を見上げていた。興奮で上気した彼らの頬を、咲き乱れる花火の光が虹色に染める。

「本当、あの二人は楽しそうだよねえ」

「もう少し下にいる俺たちのことを考えてくれればいいんだけどな」

美しくも激しい応酬を見ていて沸いてくるのは、次は何が起こるんだろう。彼らは何を見せてくれるんだろう。そんな期待ばかり。

「夢でも見てるのかねえ」

「なあ、なんかヘンな音しない？」

くぐもった疑問の声は無視された。

「夢ねえ。確かに、次に瞬きしたら家の布団の中だったりしてな」

「それはイヤだなあ」

「なんで？」

ミヤコが擦りむいた膝小僧に食い込んだ砂利を叩き落としながら立ち上がる。こんな時でもしつかりカメラは片手で構えたまま。空中。激しく交錯する二筋の光を、彼女はレンズと瞳を輝かせて追い続ける。

「その方が楽しいじゃん？」

ミヤコの放ったシンプルで強烈な回答に、何人ががくすくす笑いを漏らす。

「まあそりゃヤバい状況だけどき。わたし、わりと楽しんでるよ、今。だってこんなの見たことないじゃん。黒板と校庭と、宿題と試験勉強と部活と——もちろん私達の人生がそんななんばつかでもいいけどさ。でも」

本日何度目かに引き起こされた空中大爆発を背負って演説をぶちかましていたミヤコは、不意に赤らんだ顔を背け、足元のコンクリート片を蹴って転がした。

「……ごめん。コーフンしすぎかも」

「いや、なんとなく。言いたいことは分かる」

全員、次に語るべき言葉を見失ってしまったようだった。

その間もミヤコの握るカメラは目の前で繰り広げられる『弾幕ごっこ』の様相を余すことなく記録し、ネットに、全世界に生中継で配信し続ける。

「せっかくだし祈ってみるか？」

「祈る？」

何気なく言葉を放つてから、その男子生徒はうんうんと、自分の言葉に頷く。

「世の中、少しくらいワケの分からないものがあつた方がいい。だからさ」

「これが夢じゃありませんようにって？」

「そう」

「いいね、それ」

「とりあえず手でも合わせておくか」

「拜んでどうするんだよ」

「いいからとりあえずやつとけよ。イワシの頭もなんとやら」

祈つたところでどんな効き目があるのか。

それでも一同、思い思いの形で願ってみると何か不思議な満足感が沸いてくるようで、笑って視線を交わし合う。と、

「おい、だからさつきから——わああ上、上!!!」

ずっと無視されてきた音の正体はたつぷり勿体つけてからその姿を現した。

光線によって斜めにスライスされたビルの上半分が、丸ごと滑り落ちてくる瞬間だった。

世界を滅ぼしかねない妖怪と、何もかもぶち抜く力を持った人間の戦いにここまで持ちこたえたこと自体が驚くべき快挙だ。

「うおーっ、すげーい!!」

子供の頭ほどもある破片が流星群のような勢いで叩き付けてくる。

「お前ら走れ走れ!!」

「だからミヤコさん、カメラなんてどうでもいいから——わっ」

「ぎゃっ」

「ぐえっ」

持ち主の手をすっぽ抜けた後もカメラは仕事を続けた。

およそ三十人分のなさけない悲鳴と恐怖の表情をたつぷりと全世界に配信した後、轟音とともに画面は激しく揺れ、暗転した。



『一通の新作メールを受信しました。』

宛先：ハジメ

差出人：ユキ

題名：さつきのメール

は、霊夢のイタズラだからな。

さておきお前とはいろいろやったな

ぶつちやけ前ほど素直にお前の顔を見れなくなったのはある

多分恋敵とかなんだとか、そういうのと上手くやれるほど、俺は大
人じゃないみたいだわ

でもま、それで間違いだとは思わないんだ。

俺達は仲良くしてきた分だけ、ギスギスする時間も必要だと思うん
だ。

身勝手だろ。でも遅い。これから俺はお前の真下で、お前のために
戦うところだ。

だから物言いは受け付けない。今はな。

全部終わったら殴り合う時間なんていくらでもある。

今回は大分ヤバいけど、これまでみたいにお前が奇跡を見せて、そ
んで落着。みんな幸せ大団円だ。そうだろ？

だからお前が文句をたれに降りてきてくれるのを、ずっと待ってる
からな。

3 『日輪の物語（中―1）』

『なんてね。スリルあった？』

——カメラのレンズが再び光を捉える。もうもうと立ち込める埃のカーテン。数人が咳き込む音。差し込む光が埃の中、画面を覗き込むシルエットを映し出す。

『あ、あなたは？』

——先ほどまでカメラを回していたと思われる女子生徒の声。恐怖と驚きに震え、咳と涙が絡んでいる。

『通りすがりのヒロインよ。もしくは紫。八雲紫。あるいはむらさき』

——何者かの顔が大写しになる。しかしピントが合っていないことに加え、レンズに入ったビビのために全貌が把握しづらい。この時点で破碎音が聞こえ始める。カメラのレンズは人物の顔から通りへと向けられる。大小のコンクリート片が転がる通りはクレーターに覆われ、そこに若い男女が折り重なって倒れている。

『な、なんすか、それ』

『どれ？』

『そ、その、バリバリ言ってる口みたいな』

——映像は再び人物の顔と、頭上に現れた『口みたいなもの』へ向けられる。空間に切り開かれた裂け目が巨大な破片を破碎しつつ呑み込み、そして消えるまでの一部始終が収められる。

『それよりあなたたち、もっとう、何かほかに言うことはないの？』

——路地へ。いつの間にか立ち上がり、あいまいな表情を浮かべていた男女がお互いに顔を見合わせる。

『ふつう潰されるところを助けてもらったなら何て言うのかしら？』

『あ、ありがとう、ごさいますっ。』

『そう』

——カメラを持つ人物は、まばらに上がる感謝の音が収まるのを待つて、一団の中の少女へと歩み寄る。映像が激しくブレる。カメラを手渡したらしい。

『ど、どうも』

——映像は少女の顔を一瞬映すと、ようやく路地に佇む『紫』の全貌を捉えはじめる。金髪灼眼の美女。彼女の弄ぶ日傘の陰の下で、その瞳が自ら光を放っているようにも見える。紫の背後に映る空では続けざまの爆発が起こった。それよりも紫はカメラに興味を惹かれていたらしく、屈んでレンズを覗き込む。

『これ、撮ってるの?』

『ひゃ、ひゃ』

——撮影者の声は上ずっている。

『生中継ってやつ?』

『はい。ニコ生と、あとYouTubeと……』

『それ、たかさんの人が見てる?』

『多分。うん。はい。そうです』

『ふうん』

——ここから再び、沈黙の時間が始まる。紫がしげしげとカメラに手を振ったりレンズを突いたりする間、誰も口を開くことはなかった。

『あ、あの。ここ危ないですし、私達そろそろ』

『そうですね。でも、その前にひとつお願いされてくれないかしら』

——小さな肯定の声。もう少し映してくれ、と身振りで紫が示したようだ。向けられたレンズの先で紫はスカートの端をつまみ、礼をして見せる。

『ハイ。みんな、ご機嫌うるわしゆ。待って』

『な、なんですか』

『これ壊れてない? 本当に映ってる? じゃないと困るんだからね』

——そう——そう、分かった』

——何度か頷くと、紫は演技じみた態度で咳払いして見せる。『気を取り直して。今日は『私たち』、ちよつとした提案を皆さんにしようと思いますの』

『提案? あ、ごめんなさい』

——思わず発せられた疑問の声。わざとらしく肩を竦めて微

笑む紫の姿が映される。

『そう。きつと皆さんも同じように首をひねったことと思います。私の提案は超単純。あなた方にあなた方の明日を選んでほしい、ということ。はいそこ、他人ヅラしない』

——レンズに指が突き付けられる。紫の視線は、撮影者ではないなにかに向けられている。

『あなたも、あなたも、そのあなたも。本当に一人一人に呼びかけていますの』

◇◇◇

もちろんあなたにも。

◇◇◇

——目を瞑り、紫は数秒間沈黙する。撮影者が不安げな声を上げると、彼女は片手を挙げて応えて見せる。

『みなさん、という言い回しを少しヘンに思うかも知れないわね、私達は皆さんとは似て非なる存在なの。おとぎ話の幽霊とか妖怪とか、恐竜のようなものだと思ってくれば、それでいいわ』

『あ、あの。それで、なんで今頃になってそんなのが出てきたんすか』
——動画の再生数はこの瞬間も伸び続けている。同時配信、転載されている分も含めると、途方もない数の人間がこの映像を目にしていることになる。

『実際私達は恐竜なの。大きな力はあつたけれど外の世界の変化に順応できず、狭い箱庭に引きこもって消えていくしかなかった』

——声に混じって、時折遠雷めいた響きがマイクに拾われる。
『でもそれは節理。あなたたちが私達を忘れていくなら、それはそれで仕方ないことだ。達観と、諦め。それがここ百年間の私』

『あなた一体何歳なんです——』
『やめとけ、嫌な感じがするから！』

——紫の笑顔が消える。恐ろしい形相が映り込んだようだったが、慌てた撮影者が手元を狂わせたため、暫くカメラは空を映すだ

けとなる。時刻は正午。真上に昇った太陽に、うつすらと雲がかかり始めている。

『それを十年ぼっち生きてただけの子供たちに否定されて、その見苦しさととことん魅せられた。それでね、少し気が変わっちゃったの』
『気が変わった？』

『お姉さんも、ちよつとは見苦しいことしてみようかなって。年甲斐もなく反抗期っていうか、なんていうか』

——ばたばたと扇子を煽ぎつつ、紫は歩く。レンズが彼女を追う。

『そう。反抗期。これは私達を忘れて行こうとするこの世界への、最初で最後の反抗』

——紫が空へと視線を向けてしばらく沈黙する。遠雷のような轟きに反応してカメラが彼女の視線を追う。空中で光の花が無数に花卉を散らせる。その隙間を縫う輝きが一瞬追い詰められたように見えるが、次の瞬間により激しい光を発してすべての花卉を消失させる。

『へたくそ。あのくらいちゃんと避けきってみなさいよ。ねえ？』

『え？ あ、うーんと、そうですね？』

『まあとにかく、遠回りしちゃったけれど、これは私達が仕掛ける最後の幻想。そして提案です』

——ぱちんと音を立てて扇子を閉じ、紫は再びカメラのレンズを覗き込む。

『これから起きることを見つめて、選んでほしい。この先の世界はどうあるべきなのか。他でもないあなたたちの手で』

——二十秒ほどの沈黙。その末の、ミステリアスな笑み。

『夜に咲く花があってもいい。土砂降りの雨の日に踊る女がいてもいい。明日の夜明けを夢見てもいい。叶わぬ夢が報われてもいい』

——上空ではもうもうと雲が空を覆っている。雲間が赤く輝いている。

『もし、少しでもそんな風に思ってくれた人。この指とーまれー』

——レンズに紫の指が伸びる。数名分の驚愕の悲鳴をカメラ

のマイクが記録する。何かに呑み込まれるように画面が暗転。直後バッテリーが切れ、動画の配信が終了される。

◆◆

差出人：むらさきお姉さん

宛先：ハジメ（おチビちゃんへ）

件名：さようなら はじめまして

聞いて聞いて！お姉さんテレビデビューしちゃった。

あ、それと。また会える日を楽しみにしているわ。

今度は新しい世界で。そのために、今はひとまずさようなら。

二度目のはじめましてが言えた時、あなたはまた、私の友だちになっってくれるのかしら。

◆◆

受けた蹴りの勢いのままに床を滑って行った陳列棚が万場の巨体を押しつぶした。

「ふッー！」

立ち上がる隙は与えない。今の一撃で十分に万場の肉体は破壊されたはずだが、ありとあらゆる怪異に立ち向かってきた経験が、雪之丞に追撃の必要性を訴えかけていた。

フロアの天井ギリギリまで飛び上がった鋼の吸血鬼が振りかぶる赤い槍。その周囲にも次々とミニサイズの槍が形成され、投擲の間、赤い流星群となって陳列棚ごと万場を串刺しにする。

「……………チ。どうせまた立つんだろ。かかって来いよ！」

串刺し、は少し表現として間違っていたかもしれない。

これまでの数えきれない死と再生の果てにもはやなんだかよく分からない域に達した雪之丞の放つ猛撃は金属の棚と、その下の万場をフロアの床ごとすっかり『とろかして』しまっていた。

「とっておきは、使わないのですか」

しかし、だ。

「なんのことだ？」

「あなたが出し惜しみしているようなので。この勝負はイマイチ盛り上がりに欠けますね」

「ホイホイ使ってやれるほど安いモンじゃねーんだよ、オツサン」

ドロドロの溶鉱炉の上にゆらりと立ち上がった万場の体には傷の一つもない。

「なら、あなたは負けます」

未だ煮えたぎる鉄の地獄の温度は千度を超える。

その熱は上に立つ万場の肉体を容赦なく焼き焦がし、血液を沸騰させて即死させる。巨体故に数歩進むくらいの余裕があるのだろうか、それでもただの人間なのだ。

「吠えんなよ。あんた相手につかう必要なんざねえ。それだけだ」

実際吠えているのは完全に雪之丞の方だった。

万場の肉体が力尽きて溶鉱炉の上に倒れる度、その死体から脱皮するように次の万場が立ち上がる。

何度でも何度でも。万場幾恵は世界線をまたいで『残機』を引つ張ってくることで、幾重にも存在する——それこそが、彼の能力の正体であるという意味を雪之丞はようやく理解した。

加えて。

ガアンツ

いつの間にか万場の握る大型拳銃——いや、榴弾を発射する対戦車ピストルだ——から不意を突いて発射された弾頭が雪之丞の体を覆う装甲版を凹ませる。

続いて炸裂。

「ネタの尽きねえ手品だな、つてえ!？」

煙と爆炎を尻尾のように引き摺って、雪之丞は距離を取る。一射目の炸裂で広がった煙幕を突き破って次々と同型の榴弾が撃ち込まれてくる。

「言ったでしょう。僕たちを殺しきることが出来ますかと」

数十体という残機を使い潰して死の海を渡り切ったように、世界を跨いで取り出した対戦車ピストルを次々と使い捨てながら万場は薄笑いを浮かべる。とうとう逃げ場を失った雪之丞が数発の被弾を許

し、弾き飛ばされた巨体が床に火花を散らして滑っていく。

「や、つべえかも、な。もしかすると」

体勢を立て直しながら、じわりじわりと体力を失っていることに雪之丞は気付いていた。

一撃必殺の聖剣の存在をどこで知ったかは分からないが、概念にも干渉する紫の能力を打ち消すアレならば、この世界線の万場を残機たちから切り離して倒すことができるのかもしれない。

「さあ、切り札です」

「そうなんだけどな」

それをあえて抜け抜け、と万場が言うのにも理由はある。

あれは抜いたら数秒間しかもたない。今のようになんか潰されれば後がない。抜けば勝つか負けるかの大バクチ。しかし、抜かなければ潰される。無限に降り積もる万場幾恵の死体に、ゆっくりゆっくりと圧死させられる。

「ああ、クソ」

「僕たちとしてはどちらでも構いませんよ」

見透かしたように万場が告げる。ネクタイを締め直して余裕を見せつけるといふオマケ付きで、だ。

「こうしている間にも機動部隊は仕事をしてってくれていますから」

頭上に開いた大穴からは連続した銃声が聞こえてくる。たまに爆発音が響く。この瞬間も外では霊夢が、紫が、ハジメと幽香が戦って、傷ついている。

「計画変更だ」

無意識に剣の柄を握っていた。胸の炉心が生み出しつつある聖剣、エクスカリバーを。

「あんたを倒す。今、すぐに」

「そうこなくちや」

万場が取り出したものは悪い冗談みたいな銃だった。ゴルフボールなら入るんじゃないかと思うくらい太い銃身の下に、レンコンそっくりの巨大な回転式弾倉が取り付けられている。

「中身は先ほどの爆弾と一緒にです」

それを左右あわせて二丁。果てしてそのすべてを避けて、受けきることができているのか——だが、もはや止まるという選択肢はない。彼らが外で待っている。

「いくぞ、デカブツ」

明らかに分の悪い賭けだ。

やけっぱちじみた最後の特攻に踏み出しかけた瞬間、それは唐突にやってきた。

「相変わらず我慢のヘタなヤツだね、ユキは」

女の声と、影。そして、ちやりちやりという鎖の音。天井の大穴から舞い降りたそれらが、雪之丞の前に降り立ったのだ。

「お前」

「水臭いじゃん。トモダチだろ、私達」

空中で火花が散る。素早く機関銃に持ち替えた万場の早撃ちを、着古したパーカーを目深に被った女はたった一本の鎖でもって打ち払ったのだ。

「再会を喜ぶ時間くらいよこせよな」

更に物陰から這い寄った鎖が、万場の片腕を絡め取る。彼が大きく体勢を崩した拍子に、その手から機関銃が転がり落ちて行った。

「な」

「な？」

その妙技に驚く余裕はなかった。

最後に見た時よりもだいぶ身長が伸びているようだったが、こいつが誰かなんて言うまでもない。

「ななな」

ふつつつとこみ上げてくるものは、怒りだ。

許した。赦したつもりだった。紫にも何度もそう言った。むしろ自分をなだめすかすように。だが、実際にこうして顔を合わせてみると。

「な、何がトモダチだ、うるっせえよバーカ！ 人でなし！ 吸血鬼殺し!!」

雪之丞は罵詈雑言を叩きつけながら、頭の片隅ではどうしてここま

で自分が怒り狂っているのか理解できない。

「むむう。そこまで言うか」

「どうして今さらしゃしゃやってきやがった。てめえ、クソ、こんな時じゃなきや、ああクソお!!」

間の抜けきったやり取り。しばらく見守っていた万場が、鎖で絡め取られたままの片腕をわずかに下げる。

「それは。それは——うわあつ!」

次の瞬間、彼女は自らの鎖を掴んだ万場によって高々と投げ飛ばされていった。

「そういうのはよそでやってくれませんか」

「エリカ!!」

その名を呼んで、ようやくこの怒りの出所が分かった。

恨んでなどいない。ただ単に、一人の親友として彼女のことが心配だったのだ。

「おい、エリカ。無事か!!」

「大丈夫だって」

瓦礫の山へと突っ込んでいったエリカがふらりと体を起こす。

「でも、まだ名前で呼んでくれるんだね。ちよっぴり嬉しい」

万場はこの瞬間も抜け目なく彼女に狙いを定め続けていたが、彼女の乱入によって舞い上がった粉塵がおさまるにつれ、機関銃の照準から僅かに目を離すと眉をひそめた。

「止まった時間を無理やり動かした代償がそれ、と」

「……はは。そういうことみたいだわ」

天井の大穴から降り注ぐ光の中。立ち上がったエリカの姿を見て、雪之丞は思わず息を呑む。

「あつ、同情とかやめてよ。これ結構気に入ってるんだから。きれいだろ」

包帯ぐるぐる巻きの痛々しさよりも、彼女の頭の白さに目がいっただ。

「つまり、あなたは」

銀色に染まった髪をかき上げて、エリカはそれでも不敵に笑って見

せた。

「そうさ。私に残された時間は残り少ない。だけど」

彼女の体を覆う包帯がほどけ、その本性が露わになっていく。

現れたものは鎖の渦だ。もはや繋ぐものを失って千切れたその先端が、ふわふわと宙に舞っている。その様は、もはや鎖というよりは自由の象徴である翼に近いものがあつた。

「最後にこいつらを見捨てるなんて、ダサイマネだけはしたくないんだ」

白髪になつても、年老いても、変わらないものがある。

「そうか」

万場を挟んで、雪之丞とエリカが構える。

もういい。この際エサ扱いされたことも許す。なんだか目の奥から熱い物がこみ上げてきて、それどころではないのだ。こんな情けない顔を隠してくれる仮面が有つて本当に良かったと思ひながら雪之丞は鬨の声を上げる。

◆◆

「ッ！」

今のは危なかった。

ここまでの被弾で青あざだらけになつた腕で額の冷や汗を拭うと、いつきに疲労が押し寄せてきた。弾幕『ごっこ』だなんて、名前でナメていた。実際は極限の集中力を発揮し続ける、コンマ数ミリ単位の曲芸飛行。神経の先が焼ける錯覚。

「はアツ、はあつ——ふう、ヤバいやバい」

おまけに地上から狙撃までされる始末。

「気を抜いたらほんとうに死ぬな、これ」

とはいえ文句は言えない。地表では博麗の巫女が全力で攻撃しているのだ。

蟻を散らすように人間がぶつ飛んでいく光景なんて、そうそう見れるものではない。数十、数百、あるいは数千か——完全武装の軍隊を相手に互角以上に渡り合う彼女は早すぎて、激しすぎて、もはや虹色の爆風が地を駆けているようにしか見えない。

「おおっ」

と、殺意。

直撃する寸前で頭を下げ、光線を避ける。

「私との弾幕ごっこの最中なんだけれど。他の女の子に、それも霊夢によそ見するなんて随分いい度胸してるのね」

鼻の奥でアドレナリンのにおいがツンと香る。

背後で光線が千々に分散する。意志を持ったように追尾する光条が上着の端をズタズタに引き裂くのもお構いなしでハジメは急加速。

「い、いや、違う、タンマ、タンマツ、テクニカルタイムアウト!!」
極限まで引きつけてから切り返す。

相変わらず加減のできない加速だ。Gが全身にのしかかる。ようやく光線を振り切ると、脳みそが鼻の穴から飛び出しそうになりながら、血走った目でハジメは青空に幽香の姿を探す。

「(ハッ、ハッ)」

耳元の囁き声。反射的に振り向いた瞬間、顔面に雷が落ちた——落ちると思った。

「あてっ」

横っ面めがけて振り下ろされる幽香の拳が見えた瞬間うっかりぶん殴られると思ったが。

「私をあんまり妬かせないで。おばかさん」

頬を膨らませた幽香の平手からひびいたものは『ぺち』というなんとも間の抜けた、なんとも親愛に満ちた音だった。

「ごめん」

「あ、認めるんだ」

「そそそういうごめんじゃなくて。こんな大事な時によそ見してたのは確かだし、それに霊夢が女の子としてイイカンジとかそういうところ目がいってたわけじゃなくて」

くすくす笑う幽香の声に、ハジメはしどろもどろの弁解をやめた。

「なんだよ」

「だってこれ」

ぐいと頬を押されてハジメは呻いた。自分ではよく見えないが、何

度目かの被弾でりっぱな切り傷をこさえたらしい。

「痛い？」

「痛くない」

「泣いちやう？」

「泣いちやわねえよ」

「舐めてあげよっか」

「いら——ねえよ。お？」

へりのローター音を捉えて、ハジメが振り返る。遠くに見える白い機体にとうとう戦闘へりまで駆けつけたか、と身構えたのは一瞬だけ。すぐにそれがどこかのテレビ局のものだと分かる。カメラのレンズが向けられているのが分かる。

「集まってきたわね。ここからが本番よ」

この瞬間、世界中が彼らの戦いを共有している。もう『弾幕ごっこ』という今世紀最大のイベントは起きてしまったのだ。

「それともやめる？」

「まさか」

即答する。これは世界に見せてやれる最後の幻想だ。チープなトリックでも、テロでも、ましてや集団ヒステリーでもない。それを分かせてやらなければいけない。

「続けるしかないだろ」

「そうね。ごめんなさい」

頷いた幽香が後ろ飛びに加速する。

「さ。あなたの番よ。いらっしやい」

ゲーム再開だ。

自動的に目の前にスナップされたスペルカードのストックからハジメは次の手を選び取る。常に視界の端には日輪の透かし彫りのされた一枚、つまり切り札の存在を捉えながら。

「さっさと降りてこいよ。これはお前のためのゲームでもあるんだぜ」

鈍く輝く雲間を睨んで、ハジメは呟いた。

4 『日輪の物語（中―2）』

圧していたのは最初の数分だけだった。

雪之丞とエリカによる共同戦線は、万場幾恵が虚空から巨大な機銃をとりだすなり、地獄の鬼ごっこ化してしまっていた。

「ごめん。ごめんね、私、役立たず、かも」

無限に供給される弾丸が壁を削る音を聞きながら、棚にもたれかかったエリカはすっかり上がった息を整えようと必死だった。

「なんのこことだ」

同じく物陰に滑り込んできた雪之丞。

戦闘機に搭載される機銃の掃射をモロに受け続けて、彼の鎧は殆ど崩壊していた。肉やら筋やらで辛うじてぶら下がっている状態の金属甲殻が自己再生によってゆっくりと元の場所に収まっていくのを、エリカは朦朧とした頭で見つめていた。

「カツコつけておいてこのザマってこと。あんたを殺しかけたときだったら、今頃あのおっさん、宇宙まで放り投げてやってるんだけど」万場の怪力もあって、エリカは全く歯が立たずにいた。動きを止めようと鎖による拘束を試みても、逆に振り回されて消耗する始末。

おまけに彼女の顔色が悪い。外見に出た変化は白髪だけで収まっているが、中身は既にボロボロなのだろう。

「本当、自分がイヤになるよ」

エリカはただただ、思い通りに動かない体を自嘲する。

「お前に力仕事なんて、もとから期待しちやいねえよ」

「でも」

「正直言つて、俺はお前が来てくれただけでも涙が出るくらい嬉しいのさ」

「だからこそ、あんた達の役に立ちたいって思ってたんだけど、さ」

瓦礫から頭を出していた雪之丞の兜を正確に機銃弾が捉え、ぐらりと揺れた彼は慌てて瓦礫の隙間に体を引っ込める。

「なあエリカ、結局自分は自分でしかないんだぜ」

ゆつくりと近づいてくる万場を未だ抜け目なく警戒しながら、雪之丞は卑屈になりかけたエリカに手を差し伸べる。

「俺はハジメのやつほど要領よくなかったけれどな。それでもこれだけは、この数か月で俺が学んで手に入れた俺だけの答えなんだ」

クソみたいに弱くてダサくて、何をすることも裏目に出て。そんな自分が嫌になって何度遠くにぶん投げて捨てても棄てても、結局は影法師のように自分についてくる。

「俺は自分のダメさを、悔しいけど認めるさ。もう一度言うぜ。お前に力仕事なんか期待しちゃいない。だけど、お前にしかできないことだって、きつとあるはずなんだ」

「驚いた」

鋼の手を取って立ち上がりながら、エリカは天井からの後光を受けて輝く吸血鬼の巨体を見上げた。

「あんたから学ぶことがあるなんて」

「感謝してもいいんだぜ、おばあちゃん」

「ちよつ、なにそれ！」

「ハハ」

思わず膨れたエリカを後に、なんの前触れもなく雪之丞は物陰から飛び出して行った。分間数千発の発射レートを誇る機銃の雨を受け止め、弾き飛ばし、赤い霧を吐いて吸血鬼は飛び回る。

「タフですね」

「それが取り柄なんぞな」

槍をテコの要領で使ってフロアの床を大きく引つpegがした雪之丞が、コンクリートの塊を盾に突撃を試みる。が、その目論見はすぐに潰された。すぽんすぽんという、緊迫しきつたこの場において、あまりに間の抜けた発射音によって。

「ちいいい」

岩塊ごと雪之丞は爆発に包まれた。

「僕たちにはこれがあることをお忘れなく」

馬鹿げた怪力で機銃を片手に構えたまま、万場が発射したものはり

ボルバー式の榴弾砲だ。転がり出てきた雪之丞を、今度は機銃の掃射が追いかける。

「でもさオジサン。あんたも私のこと忘れてない？」

爆砕した破片の一つが機銃の銃身に直撃した。発射の一瞬前で砲口が逸らされ、弾丸の嵐が雪之丞を掠めて壁と天井を舐め上げる。

「ちよこまかと」

「ふん」

万場は笑い声の方向めがけて機銃を掃射するが、その場には蜂の巣にされた陳列ケースが転がっているだけだった。

取り回しの悪い機銃と榴弾砲では、地形に鎖を引つ搔けて立体的に移動するエリカを追うことは難しい。その間もエリカが放り投げてくる岩石が万場を容赦なく打ち据える。

「やるな、エリカ！」

「私にできる仕事をしただけ」

素早く機銃を放り捨てて軽機関銃に持ち替える。

と、今度は重厚な鎧に身を包み、胸からせり出した聖剣の柄に手をかけた雪之丞がプレッシャーをかけてくる。

「おっと。俺はいつでも抜けるんだぜ、オッサン」

「ち」

万場が初めて舌打ちする。

「勝てるかもね」

執拗な攻撃が確実にヤツの逃げ場を削っている——機関銃の弾を打ち払いながら、ゆつくりとエリカは距離を詰める。鋼鉄の吸血鬼がよりしつかりと、剣を握りしめる。

「ああ。後は一手」

一手あれば。この万場幾恵という怪物をほんの一瞬でも足止めするきつかけさえあれば、一気にこの勝負を詰めることができる。

だがそれは万場も承知することだ。きつと、まだ見せてない奥の手が一つや二つ、その不気味な長身の中に秘められているに違いない。

「来ないのですか」

その、ひきつった笑顔が挑発する。

「こちらから行きましようか？」

ぶらぶらと榴弾砲を揺らしながら向かってくる万場。やはり何か、策がある。

「ああ、そりゃあ——いいな」

だが、絶好の機会であることもまた、確かだ。やがて足を止めた万場との距離は大きく詰まり、およそ三十メートルと言ったところ。食品コーナーを彩る陳列は先の戦いで蹴散らされ、両者の間にはタイル張りの床が広がるのみだ。

「こりゃいい。お互いにとって」

「必殺の距離、ということですよ」

剣のリーチと雪之丞の速さなら、直線駆けして五秒。万場ほどの腕なら、左右十二発の榴弾をすべて叩き込む時間がある。

「ああ、そこですか」

万場は唐突に一発の榴弾を、視線は雪之丞に向けたままに真横めがけて発射した。

暗がりから慌てて転がり出てきたエリカの背中を爆風が舐める。破片と炎に打ち据えられて、彼女は地面に這いつくばった。

「これで邪魔は入りません。古き良き決闘の再現、といきましようか」

「エリカ」

「だい、じょうぶ」

その声は明らかに大丈夫ではない。ハジメと幽香との激戦で痛めた足首をまた痛め直したらしい。ふらりと立ち上がった彼女に口くな機動力が残されていないことは確かだった。

「さあ、さあ、さあ。このバカげた茶番を、終わりにしましょう」

「おもしれえ」

雪之丞は眼でエリカに合図して、いつでも彼女の援護を受けられるようにしておく。一方の万場は銃口で上着の袖を払う。金属音が、聞こえたような気がした。

「あと一手、なんだよなあ」

半歩分でもいい。

この男の意表を突く何か、欲しい。

「あいつなら」

じりじりとにじり寄りながら、こういう時ハジメならどうするかと雪之丞は考えていた。あの大胆不敵で、世界を敵に回してでも一人の女を愛そうとしたにつつき恋敵。

『この後、空けとけよ』

ラーメン食いに行こうぜ、なんて。

知らぬうちに、とんでもない大勝負の前に軽く言つてのけるような大物になりやがって。

「約束、だもんな」

たまには——あんな軽やかな気持ちで俺も戦ってみるか。深く考えることはヤメだ。エリカと、自分の力を信じる。

吸血鬼だというのに、気付けば天井から差し込む忌む光を見上げていた。彼の親友の力の象徴。とてつもなく穏やかな気分だった。「いくぞ」

その光の帯の中に、知らんおっさんが飛び込んでくるまでは。

「万場あああつ!!」

「はっ?」

「おっ」

「今」

流星にこればかりは予想外だったのだろうか。全員が「あ」の形に口を開いたまま、彼を見上げた。何かを構えている。槍だ。

「——いつ」

ろくな反応もできないままに真上からどんと胸を突かれて、万場の巨体がふらりと揺れた。

「なん、だど?」

「寺田が、よろしくだとさー」

万場の胸を突き破って生えるもの、それは激戦の最中で折れてどこかへ転がっていった雪之丞の槍の一本だった。落下の勢いそのままに突き通された槍は辛うじて致命傷に至らない。重い一撃が、『残機』との交代を許さないままに、その巨体を床に縫い付けた。

「ユキ、今しかないっ! やれ!」

異形に憤怒の色を浮かべた万場に振り払われて、今井は床とほとんど水平に飛んで行った。

「は、ああと、ええと」

「いいから!!」

予期せぬ闖入者の登場からいちはやく我に返ったのはエリカだ。彼女の伸ばした鎖の束が万場の左腕に絡みつき、彼女の渾身の力で即座に引き絞られる。万場の左腕がぐちゃぐちゃの肉袋に変わる音。機関銃が床に転がる。

エリカの怒号が、雪之丞の背中を押した。

「お——うー!」

薄暗い光を放っていた照明が点滅し、ついには消える。

変わって光の帯が地下の空間を青白く染め上げた。燐光を放って激しく発光するのは雪之丞の胸から引き抜かれた聖剣、エクスカリバー。幻想と現実、二つの隙間を断つ、狭間の剣だ。

「終わらせてやるッ!!」

残された右腕で榴弾砲を構える万場を見据え、雪之丞は突撃を開始する。



『一件の新着メールを受信しました。』

宛先：ハジメ

差出人：エリカ

件名：結局こうして友情は滅びませんでしたとさ。

加勢させてもらうわ。

ということであの時の手切れ金、返してくれる？



火を噴いた装甲車がぐわんぐわんと回転しながら転がっていく。

「ほらほら。よつく狙いなさいよ」

余裕を見せつけてはいるが、霊夢は無傷ではなかった。

絶え間なく押し寄せる軍団を押さえつける間、浴びせられた攻撃は数知れず。銃で撃たれたくらいでは霊夢の周囲に張り巡らされた結界を打ち破ることはできないが、衝撃波が彼女を叩きのめし、熱が肌を焼いた。

「痛っ——」

火傷と擦り傷だらけの肌を擦って、霊夢は呼吸を落ち着ける。

「ちよつと、私はまだまだ元気なんだけど」

遠くのビルの上、霊夢を捨て置いて上空のハジメたちを狙撃しはじめた一団に狙いを定め、彼女は軽く指を打ち鳴らす。銃声が止んだと思うと、一瞬後に雲間で届くような虹色の爆風が吹き上がった。

「それと紫、おそい」

「待たせたわね」

「本当」

だらりと肩を垂らして仁王立ちする霊夢の背後に、いつの間にか紫が寄り添っていた。

「でも、ありがとう」

おそらく紫の能力によるものなのだろう。次の瞬間には、霊夢はなんとか背筋を正して立つことができるくらいには回復していた。出血も、疲れも、徐々にではあるがマシになってきている。

「ここからは一緒に戦うわ」

「トーゼン。休んだ分しつかり働いてもらおうわよ」

「もちろん……さてさて」

二人は背中合わせに、周囲を見渡した。

幽香とハジメの戦場を取り巻くように展開した機動部隊と装甲車の山。ビルとビルの間、路地という路地から灰色の波が押し寄せてくるようだった。浴びせかけられるのは憎悪と鉄の弾。

それは上空で繰り広げられる弾幕ごっことは程遠い、ただただ殺すためのだけの布陣だ。

「これはさすがに骨が折れそうね」

「それを一人に押し付けたのはどこの誰だったかしら。そもそもあんなに長い間、何をしていたの？」

「そ、それはですね」

生放送なるものにすっかり浮かれていたなどと、口が裂けても言えない。

結局紫は無言のままに、誤魔化すような笑い顔を浮かべて穴だらけの舗装を踏みしめた。背後の霊夢が浴びせかけてくる恨み言よりも、押しかける軍勢と戦う方がいくぶん楽だと考えたようだった。

「ねえ、不思議だと思わない？」

「何が？」

一歩一歩とお互いの持ち場へ足を運びながらの会話。不思議と、二人の声が銃声と爆音にかき消されることはなかった。

「最初に戦った私達が、最後にこうして一緒に肩を並べてるってこと」「最後？」

紫が訝る。

「あなた今、最後って言ったの？」

「いえ」

遙か上空で巨大な光の花々が咲き乱れる。その輝きに目を細めて、霊夢は地を蹴る。

まるで光のような速度で遠ざかっていくだろう霊夢の後ろ姿を見たくても、紫はどうとう振り返ることが出来なかった。

「忘れて」



一射目が滑らかな甲殻の表面を滑り、雪之丞の背後で炸裂した。

その勢いに後押しされるように吸血鬼は加速し、必殺の聖剣を必中のタイミングで繰り出す準備を始める。

二射目は大きく逸れて天井。エリカが巻き込まれまいと這って逃げる。

三射目は足下。

四射目も同じく足下に着弾した。二発の榴弾が爆発の衝撃で床板を跳ね上げる。クレーターに足を取られて、バランスを崩した雪之丞

が失速する。

「そこまでのようですね」

そして勝利を確信して発射した五射目は吸い込まれるように雪之丞の胴体を直撃した。が、何も起きない。弾頭が仕事を放棄した。

「不発だと」

「運がないな、おっさん」

だが雪之丞はまだ数歩分、万場へと距離を残している。

すかさず弾倉を回転させ最後の一発を必中の距離に迫った雪之丞へと放つ——ことは、できなかつた。

「あんたが弾を数え間違うなんてね」

仰向けにねころがったエリカが呟く。彼女を引き裂き、全身に破片を埋め込んでいった牽制の一撃に、それは既に使われていた。

「ふ」

だが万場は笑う。

違和感に、エリカも痛む体を起こす。

「ユキ——」

あと一步で切っ先が万場を捉えるところだった。その距離であるうことか、万場は上着を脱ぐと、迫る雪之丞めがけて放ったのであった。

「何、だ」

がちやがちやと絡みついてくる裏地の感触。耳障りな電子音。びつちりと裏地に縫い付けられた対人地雷の山が、エリカからは良く見える。

「やはりあなたは、何も得られませんでしたね」

それらすべてが、同時に起爆した。

一点に集約された衝撃が鎧の上から雪之丞を貫く。重装備の雪之丞が、後ろ飛びに吹き飛ばされていく。ばらばらと鎧の破片が降り注ぐさまが、エリカにはスローモーションで見えた。

胸から槍を引き抜きながら勝利を確信する万場が、憎たらしい。やがてすべての鎧を脱ぎ捨てた雪之丞の姿が、爆炎の中から現れる。

だが、彼の顔は敗北の苦みに歪んだものではなかつた。視線の先に

は、彼の右腕。その腕はしっかりと握っていた。

彼が長い苦悶の末に自らの中に見出した、究極の剣を。

「ありがとう」

まるで、この剣が自らの意志で雪之丞についてきてくれたようだった。

「じゃあな」

分かれを告げて雪之丞は放つ。

それはくるくると高速で回転して万場へと飛んだ。空中に日輪の軌跡を描いて飛んだ剣が、まず榴弾砲の銃身を、次にそれを握る万場の右腕を唐竹割りじみて真つ二つに引き裂いていく。

万場の顔が、驚愕にひきつっていった。

そして。

「かつ」

そして、霧散の一手手前で、剣は万場の頭から胸まで、一直線に切り込んだ。受け身も取れないままに床に叩きつけられた雪之丞は、糸が切れるような『ぶつり』という音を聞く。

「あ」

あまりにもあつけない最後の言葉を残して、万場幾恵の巨体がゆっくりと床に崩れ落ちていく。

「……やった？」

エリカは予断無く戦闘体勢を取ったままだったが、雪之丞は起き上がる努力を放棄して床に伸びていた。十分すぎるほどの手ごたえを感じていた。

「ああ。やったさ」

万場はうつぶせに倒れたまま、立ち上がってこない。ぴくりとも動かない。胸を貫かれ、片腕をねじ切られ、もう片腕を粉碎され、ダメ押しに脳天を真つ二つに割られ。万場幾恵という怪物は、とうとう死んだのだ。

「……お前も、結局はバケモノだったな」

真つ二つに割れた万場の頭を掴んで、雪之丞はしばらく考えていた。とても人間には見えない、肉と皮のひきつった半分を下に、かろ

うじて人間の面影を残す方を上にしてやる。

憎たらしくもないワケがない。それでも、この男にだって安らかに眠る権利くらいはあるはずだった。

「ユキ、なんか忘れてない?」

感傷に浸っている時間はほとんどなかった。

「なんかって、何?」

「いやさつきまでそのことばかり考えていたんだけど。あれ。あれ。もうボケたかな」

白髪頭をかくエリカを見下ろしつつ、雪之丞も何かを忘れている気がしてならない。なんだったか。たしかとんでもなく大事なことを見落としているような気がする。

「……あれ?」

「ね?」

「おーい、おおーい」

「あ」

あたりが静まるにつれ聞こえてきた弱々しい声の出所に思い至つて、エリカと雪之丞は揃って動きを止めた。ふたりが同時に視線を送った先には鋼鉄製の柵が折り重なって倒れている。

「助けてくれえ」

声はその下からだ。

「た、大変!」

「任せろ!」

よたよた走っていった雪之丞が柵をどかすと、ただでさえしわくちゃの老刑事が一層ヨレヨレのしわくちゃでそこに横たわっていた。

「おおおおお、オジさん、大丈夫!」

額から血を流す今井を見て、エリカが慌てた。

「ああ、ありがとう。ありがとう。いやあ、ひどい目にあつた」

「誰コイツ?」

「んーと、わかんない、かも」

「お嬢ちゃんには前アイサツしたじゃないか」

「そうだっけ?」

「ほら、ハジメくんと一緒に居た時に」

「あーそういえば」

「思い出したか？」

「ごめん。やっぱ覚えてないわ」

「だろうね」

がつくりと肩を落とす今井に、雪之丞は手を差し出す。それを取って、今井は呻いた。すかさず背後に回ったエリカが、その体を支えてやる。

「いつ、てえ」

「ンだよ。おっさん腰やったん？」

けたけた笑う雪之丞をくたびれた笑顔で見上げて、今井はポケットを探る。取り出したタバコのパッケージは彼にお似合いの枯葉色。力なくコートのポケットをあちこちさぐってみて、「やれやれ」と今井はつぶやく。

「ほら」

と、彼の目の前に燃える剣が差し出された。

「ライター代わりにしては派手すぎるな」

「文句言うなよ」

「悪い悪い」

今井は落ち着き切った態度で安煙草をスパスパふかし始める。雪之丞は今井の隣で瓦礫に腰掛けたエリカに視線を送る。彼女は肩を竦めて見せる。

「結局思い出せないんかい」

「だって」

「おっちゃんは」

万場の作った血だまりに吸殻を放り込んで、今井は煙を吐いた。差し込む薄明りに彼の煙が広がって消えていく。

「そうだな。おっちゃんは鶴見君の友だちで」

「友だち？」

「そう。あと、元部下の敵討ちでここまできた。いやはや、これで殺人罪か。とにかく参った参った、と」

コートの胸ポケットに差されたスマイルを撫でる彼の顔は、その言葉の深刻さとは裏腹に晴れ晴れとしていた。勢いをつけて、よっこいせと立ち上がった彼にエリカが肩を貸してやる。

「歩けそう?」

「ま、なんとか」

「ユキ、そっち持つて」

「おう」

無数の銃火器の残骸と瓦礫まみれのフロアをゆつくりと横断しながら、雪之丞は天井の大穴を見つめる。差し込む光はだんだんと赤みを帯び始めている。そのくせ空は曇天だ。

「外では何が起こってるのかしらね」

「現実と幻想の境界があいまいになる」

「え?」

エリカが漏らした疑問の声に、再生の追いつかない足を引き摺って歩きながら雪之丞は口走っていた。

「なんだつて?」

「あり得ないものを日常にぽんとぶち込む。例えば幽香さんたちの『弾幕ごっこ』とか。それをみんなに見せつけてやって、この世界の常識をグラグラ揺さぶってやると、一体全体何が現実で、何がそうじゃないのか誰も分からなくなってくるのさ。その隙に乗じて、みんなの頭の片隅に幻想の存在感を植え付けてやる」

もういい加減無意味と思つてか、雪之丞は体にへばりついていた残りの甲殻を引っぺがしていく。それらはフロアにぶちあたってくぐもった反響を生み出した。

「それが第一段階だ」

ほかんと見つめてくる二人を見返すと、雪之丞は呆れ顔で更に歩みを進める。

「いくらなんでもノープランで暴れたりするワケないだろ」

「それからは?」

「それからは、これからの話。少なくとも邪魔は入るだろうな。あのクソ野郎がナメクジに見えるくらいのとんでもない奴」

エリカは無意識に万場の死体を振り返っていた。この先に待ち構えているものが何であるにせよ、彼ら以上の何かというからには常識の及ばない怪物であることは明白だった。

「どんなりアリストだって、一つだけ信じる幻想があるのさ。いや、反幻想と言った方がいいか。俺達の揺さぶりにそいつがノツてきたところを、ハジメの能力で一気に叩く」

「反幻想？　なあ、一体全体おっさんには何のことだか分からないぞ、そりゃ」

「それは」

背後で、砂利を踏む音がした。

「なんだ」

弾かれたように振り返った雪之丞はそれを見た。

「ああ、求めていた答えが。『僕たち』が『私』になって、ようやく分かりました」

死んだはずの男がゆらりと立ち上がり、人差し指をまっすぐに伸ばす姿を。その背中にぼんやりとした光が宿る。太陽よりもずっと薄く輝くそれは、光の環だ。

「嘘」

エリカもその姿に心当たりがある。全てを貫く力。

立ちただかる理不尽を力づくでねじふせて未来を勝ち取るために存在したはずの力。べろりと垂れた頭を無理やりくっつけて立ち上がった万場の指先に宿るのは、ハジメの能力にどこまでも酷似したものだ。

「なぜお前が、それを」

「『私』の得た答えですよ。『僕たち』のものではない。隠されていた『私』だけの、能力」

雪之丞たちの混乱を嘲笑って、万場は背後の光輪を輝かせる。

彼の手中には鈍色の輝きを放つ五円玉があった。中央に二つの穴があけられたエラーコイン。杏奈からハジメに渡され、ハジメから幽香へ。そして今は万場のもとに。

「伏せろ——！」

今井とエリカを庇って前に出た雪之丞の叫びを、重苦しい破裂音が
かき消した。
「決して『キミたちには辿り着けない』」

5 『日輪の物語（下—1）』

それまでずっと響き続けていた、音楽のような高音が止んでいた。「ハジメ？」

弾幕ごつこに接近しての直接攻撃を厳密に禁じるルールはない。

だがそれでもハジメの様子は異様だった。唐突に突き飛ばされた幽香はわけがわからず目を白黒させるばかり。

「ねえ、ハジメ。どうしたの？」

「これでたぶん三度目か」

胸を抑えたまま、ハジメは困ったように笑った。

その背後に浮かぶ日輪がガラス細工のように透けて、砕けて散っていく。今や雲間から差し込む光で真っ赤に染まった地上にそれが降り注ぐ様を、幽香は茫然と見つめた。

「本当に学ばないヤツだよな、俺」

彼が抑えたシャツの胸元が、赤い。

「でもあんたが無事で本当によかった」

その口の端から血が一筋こぼれて喉を滑ると、胸の染みに混じる。



「これでいい」

切り裂かれた腕も、よじれた腕も、胸の傷も、割れた頭もそのままに。

「これでいい。私の愛した日常は、これで続く」

光輪を背負った万場は満足げにぱちぱちと柏手を打った。片腕はソーセージの袋のように引き絞られ、もう片腕はミンチを無理やり腕の形に固めたような有様にも関わらず、それらの動作になんら支障はないようだった。

「おい、何を撃った」

万場はエリカたちの前に盾となって身をひるがえした雪之丞ではなく、真上めがけて指先の閃光を解き放ったのだ。

「撃つべきものを」

ハジメのものに似て、しかし絶対に同種ではない能力。

「何を撃ったッ!!」

「分かっているのでしょうか?」

予感に、冷や汗が雪之丞の首筋をおびただしく濡らす。

「今しがたネットも放送局も押さえたと報告がありました。もう、あなたたちに勝ち目はない」

エリカも、今井までもがその答えに思い至っていた。万場の押し殺した笑いがとうとう高笑いに変わって地下にこだまする中、三人は大穴から、外の吹き抜けを見上げる。

「切り札もほら、この通り」

血のように赤い空から何かが降ってくる。

◆◆◆

光線。

弾幕。

春。

未確認飛行物体。

未曾有のショウの放つインパクトに熱狂していた世界は、アナウンサーの「あっ」の一言を合図に沈黙してしまったようだった。

「あにき」

今やカラーバーと耳障りなビーブ音を垂れ流すだけとなったテレビから、よろよろと千晁が後ずさった。となりでおーちゃんが彼女の顔を覗き込んでいる。

「杏奈、ネットは?」

テレビ局は全滅だ。

早々に見切りをつけた父がいらだたしげにリモコンを板の間に投げつける。

「ダメだ。繋がらないよ」

ケータイを握る杏奈がうなだれる。

咲き乱れる光線の花と、太陽の輝き。虹色のヴェールが空を覆い、無数の弾幕が舞い散る世界。その映像を見つめる者たちの興奮が最高潮に達した時、不意に地上から光の筋が差したのだった。

『あっ』

直後、誰もが見た。

空を飛びまわっていたヒトガタの片方が、浮力を無くしてするりと落ちていく姿を。その直後にテレビもネットもつながらなくなった。彼女の兄が存在したという事実を塗りつぶそうとするかのように。

「おにいちゃん」

肩を震わせる千晃を、無言でおーちゃんが抱きしめる。

「悪い奴らに、なにかされたんだ」

彼女に希望を与えてくれた炎の輪が砕けて無くなるところも、真つ逆さまに落ちていく兄の左胸にぽっかり空いた大穴も、すべて見えてしまった。

「杏奈」

「わかつてる。クルマ、回すから準備して」

父が座布団を蹴とばして立ち上がり、杏奈が頷く。

慌ただしく居間を後にする二人をよそに、千晃はがたがたと震えていた。頭の中をシャベルで掻きだされたように、考えが定まらない。自分が撃たれた方がマシだつてくらいに吐き気がする。

「ちーちゃん」

「あにき、あにき」

何があつても、必ず最後は助けに来てくれた自分の兄。それが目の前で誰かの思惑で踏みにじられ、粉々に打ち砕かれた。

「ちーちゃん、おちついて」

信じていた自分の強さが、粉々になりそうだった。

「離せよ、おーちゃん」

「いやだ」

「離せたら!!」

とにかく、今すぐ暴れ狂って、叫びたかった。それを力づくで抑えてくるおーちゃん存在がどこまでも煩わしい。

「離せ、はな——!?!」

おーちゃんのため息が聞こえた瞬間、天井と床の位置が逆転した。息が詰まるような衝撃の後に気が付くと、千晃の上に馬乗りになったおーちゃんが、いや。

「いいから。とにかく落ち着いてください」

逆光でよく見えない、千晃の友だちに良く似た何者かが、氷水のよ
うに冷たい声をぶっかけてきた。



「ウツソお、これからでしょ!?!」

全世界の気持ちをもミヤコが代弁した。

紫と名乗る別世界の使者につかまって、気付けば最前線からは遠く
離れた雑居ビルの屋上。

「そつちは?」

「ダメだ。俺達だけじゃなくて、多分、これ全域でかかってる」

今度こそ大人しくテレビ観戦していた彼女たちのケータイが一斉
に通信エラーを起こしていた。

「え、終わり?」

「そんなわけ」

思い思いの場所でケータイを画面を睨んでいた彼らは誰からとも
なくミヤコの元へと集まっていく。

「ない、けど」

ミヤコの握りしめる液晶の中では配信が中止される寸前、空から
真つ逆さまに落ちていく人影の映像が映し出されている。

「これマズいんじゃないか」

「つるみん……その、け、怪我してるんじゃないの?」

誰もが思っていることを喉までせり上げて、口にできないでいた。
その可能性を一言でも形にしてみましたら、本当に全てが終わってし
まうような気がした。皆がケータイを手にしたまま俯く。

曇り空から響く空気のうちなりだけが、しばらく音らしい音だった。

「みんな、何諦めちゃってるのさ」

重苦しい沈黙を破ったのは、やはりミヤコだった。

「信じなきや。信じるんですよ!?!」

彼一つだけ分かることがある。これで終わりではない。これで終
わりにして、うやむやになっていくなんて、絶対に御免だ。

「つるみんはきつと戻ってくるよ。ぜったい」

ぱん、と彼女が手を合わせる音が響いた。

「そうだな」

「ああ」

一人、一人と手を合わせ、祈る。

彼らのヒーロー。そして、かけがえのないクラスメートの帰還を。

◆◆

「幽香」

「霊夢」

満身創痍の霊夢がスクランブル交差点に駆け付けると、そこには幽香と、そしてハジメがあった。

「なんてこと」

思わず息を呑む。

彼らが着地した交差点の中央は彼の流した血で真っ赤だった。

「この子、私を庇ったの。それで」

「撃たれたのね」

悲痛な表情で幽香が呻いた。

落下の衝撃で手足がぐにやぐにやで、おまけに胸には子供の頭なら入ってしまうくらい大きな穴が開いていて。それなのに、死に顔だけは安らかなのだ。

「紫、紫はどこ」

泣きそうな顔で幽香があたりを見渡した。すぐさま空中に開いた空間のスリットから金髪の女妖怪が現れ、ハジメの体を一瞥して、俯く。

「ハジメを連れ戻して。お願い」

「残念だけど………できない、わ」

「どうして。あなたの力ならムリなことなんて何も無いわ。だって、体だって、こうして」

「ないのよ」

「え?」

動かなくなったハジメの傍らにひざまずいて、紫は胸の傷を探る。撃たれたにしろ、刺し貫かれたにしろ、あまりにも奇麗にその部分が

くりぬかれている。

「確かに、死と生の境界をいじれば、彼は生き返る。でも」
「なら今すぐ——」

紫の胸ぐらを掴もうとする幽香を霊夢が制する。

「彼の心臓がここにあつて、この瞬間まで彼を生かしていた。その事実が、消えてしまっているの。何かに塗りかえられたみたいに」



今度は五分とかからずに終わった。

正直、勝負とすら言えるものではなかった。

「終わりですか」

何度穿つても、何度削つても、何度砕いても、何度切り裂いても。

「終わりですか？」

万場はひるむ様子もなく立ち上がってきた。

『残機』がもうないことは確かだ。万場の肉体はこれ以上ないくらいに破壊されている。肉の塊と化した肉体が、死したという事実を無視したように立ち上がってくるのだ。

「今にして思えば『風穴を空ける』ことが、は号の能力でした」

血反吐を吐いて、雪之丞は床を這った。右膝から下が再生しない。撃ち抜かれた頭が、痛む。エリカと今井は離れたところに倒れて、ぴくりとも動かない。死んでいるのか生きているのか。

「この『塗りつぶしてなかったことにする』能力は、いわば彼への執着が生んだ対極の力なのでしょう」

「対極」

唯一破壊を逃れた、万場の怪物じみた頭部。

クレーターだらけの月面のような無感情さの中に、狂気と執念にまみれた巨大すぎる眼球が埋まっている。

「月、か」

万場が背負う昏い光の正体にも再生しない己の肉体にも合点がいった。

足がそこに存在したという事実も、万場が既に死んでいるという事実も、狂気の象徴としての月が持つ魔力で塗りつぶして、なかったこ

とにしてしまっているのだ。

「そう遠くないうちに私の死は訪れるでしょう。あなたはそれまでじっとしていればいい。あなたがこちらに手を出さなければ、こちらから仕掛けたりはしませんから」

成し遂げた。

その事実には万場は酔いしれている。この瞬間も彼が手の内で弄ぶ五円玉。それが、雪之丞にはただただ我慢ならなかった。

「なのにあなたは」

「ああ、やるぜ」

胸の炉心から燃える剣を引き摺り出し、右足に突き刺す。勢いつけて飛び上がった雪之丞は、即席の義足の感覚を確かめて、頷く。

「これで俺のケガはチャラだ。立てるし、走れる」

「もうすべては終わったのですよ。何があなたをそこまで駆りたてるのですか」

「勝負はまだ終わっちゃいない。お前、あのくらいでハジメが死ぬなんて思うなよ」

そうだろ、相棒。

周囲にありつたけの武器を展開しながら雪之丞は紅い空を見つめる。

「あいつはきつと戻ってくる。なんたって、この俺との約束が残ってるんだからな」



「ああ、来ちゃったわね」

紫が苦々しげに吐き捨てた。

それはすっかり交差点を包囲してしまった機動隊に対してではない。彼らのはるか頭上、ついに雲間からぬうつと顔を出したものを見たからだ。

「あいつら見えてないの」

血管のように脈動する赤い筋が空に浮かび上がる。その集中する場所に、黒いつぼみが鎮座していた。あまりに巨大であまりに異様なその姿が目の前にぶら下がっているというのに、機動隊の列に乱れは

一切見えない。

「見えるはずがないわ」

「なぜ」

「毎日空の色を疑ったりする人間がいる？ 彼らの目には少し赤い空が見えているだけよ」

その認識こそが有史以来人類が飼いつづけてきた怪物なのだ。

「それが反幻想」

「そう。【日常】ってヤツよ」

何かを信じる力というものをバカにすることはできない。

かつて鶴見ハジメが心の内に描き続けたヒーローがやがて彼の中で意志をもった怪異に変化していったように。

「もちろん空の色は毎日変わっている。授業は毎日進むし、花なんていう名前の花はない。完全に同じ日なんて一日たりともない。 فقط」

心のどこかでは非日常を望みながらも、人は常に日常に安寧を覚えている。

そうした全人類の『明日も同じ日が来ますように』が作り出したものは、もはや神にも等しい。地球上をまっ平らに均していくロードローラーのようなものだ。

「う」

眩暈を感じて、霊夢は膝をついていた。

つぼみが開き切って分かる。花卉に見えるものは放射状に生えそろった掌だった。

それがおいでおいでをするようにそよぐたびに体から力が抜けていくのを感じる。大事な記憶が、どんどん薄れていく。

『お前も忘れろ』

と、アレが優しい声で語りかけてくる。

「紫——幽香、あんたたち」

膝をついた二体の大妖怪に駆け寄った霊夢は虫食いが広がる記憶に慄いていた。幻想郷。博麗の巫女。みんなと過ごした時間。幻想に染まった記憶が、別の記憶に塗り替えられていく。何の変哲もな

い、どこにでもいる少女の日常へと置換されていく。

そこに心地よさを覚えているのが、恐ろしい。

「霊夢、逃げなさい」

「できないわよー！」

冷静に言い放つ紫を霊夢がどなりつける。

「私たちが暴れば、時間ぐらいは稼げる」

空で漆黒の花が咆哮する。頭の中身を押さえつけるような重力波が一層強さを増す。

紫に何か言い返してやろうとして霊夢は言葉を失う。この空と同じ色で発光する彼女の瞳。忘却によって幻想を排斥しようとする【日常】の力は、今すぐあらゆる妖怪を狂わせてしまうほどに強い。

「遠くに逃げて。私達のことを忘れてくれても構わない。あなただけでも幸せになつて」

十数メートルの距離にまで詰まった銃口の群れを、霊夢は見渡す。

「――ふ」

不思議と、笑いが込み上げてきた。

「ふふん。本当にこれが最後になるかもね」

「だめ。やめなさい。霊夢、お願いだから」

今すぐにも暴れ出したい衝動と抗うので必死の紫は喘ぐことしかできなかつた。圧倒的な数の差で蹂躪されることが分かっているはずなのに、一度歩き出した霊夢の足取りに迷いはない。

「私は守護者。なら、あんただって守って見せるわ」

最後に幽香たちを一瞥して、霊夢は駆け出した。とたんに銃撃が始まり、彼女の周囲を取り囲む障壁が耳障りな軋みを上げながら輝き始める。

「ねえ。みんながあなたを待ってるわ」

薄れる意識の中でハジメに口づけして、幽香は彼の手をとった。

「お願い。起きて」



良く知っているはずのあんぽんたんが急に別の生き物になってしまったようだった。

おーちゃんごときに負けまいと睨み返す傍から、心が負けかけている。我が子を食い殺さんばかりの勢いで覆いかぶさった痴女の背中を、固唾を吞んで父と母が見守っている。

「彼は絶対にあきらめませんでした」

「ちよつ、なんだよ、お前。なんなんだよ」

「今そんなことはどうだっていいのですよ、千晃」

伸び放題の前髪の間隙からおーちゃんの瞳が千晃を射抜く。黒々とした瞳孔に怯えきった千晃の姿が映り込んでいる。

「ひっ」

「僕が怖いですか、千晃」

その奥に広がる暗闇に丸呑みされてしまうような得体の知れない恐怖に、思わず悲鳴を漏らしていた。彼女が人間でないことは薄々感づいてはいたが、その異質さをいざ向けられると、ただただ足がすくむ。

「きつと、あなたのお兄さんも同じ気持ちで僕と話していたんじゃないかと思うんです」

「あにきが、あんたと?」

「はい。彼も歳相応の男の子でしたよ。強がり、怖がり。でも、決して逃げることでだけはしませんでした」

ちよつとへたれつぽかったですけどね、と。おーちゃんの姿をした女は思い出したようにくすりと笑った。

「彼は相手がどれほど恐ろしくても、どれだけ絶望的な戦いの中でも、絶対にあなたと、愛する人を守ろうと一歩も引きませんでした」

おーちゃんは目を瞑る。

必死になつて幽香を救おうとする姿。足蹴にして、散々痛めつけてくれたエリカを助けるために奈落に踏み入る勇氣。彼女はどんな忘れてしまうというのに、それだけは数分前のことのように思い出せる。

「あなたはそれを見捨てるのですか」

「違う」

彼女の一言一言が忘れていた何かを心の中に注ぎ込んでくれるよ

うだった。

「あなたの兄がここまでだと、見限ってしまうのですか」

「違う!!」

おーちゃんの瞳孔の中で千晃が吼えた。

今この瞬間だつて彼女が怖い。だが、兄への信頼を疑われて黙って
いられるほど無様な妹ではない。

「私のお兄ちゃんは最強なんだ。絶対負けない。絶対に生きてる!!」
「そう」

「殺したつて死なないんだぜ。それでも死ぬつていうなら、殺してで
も連れ帰つてやる!!」

「そうですか」

千晃の上からどいてやつて、おーちゃんは彼女が起き上がる手助け
をしてやる。

「それでいいのです。やはり、彼によく似ている」

「おー、ちゃん」

千晃に向けられた真剣なまなざしが、ふにやつと崩れた。

「なあんてねー」

いつも通り、おーちゃんはふやけきつた笑いを浮かべてがくがくと
千晃の肩を揺すつた。

「や、やめろー」

耐えかねた千晃が彼女を突き飛ばすと、おーちゃんはそのまま畳の
上で笑い転げはじめるのだった。

「ほんとなんなんだよ、あんた」

「おーちゃんですー」

どこに出しても恥ずかしい痴女はムダに大きな胸を張つて答える。
千晃は呆れ笑いを浮かべるしかない。たとえその笑顔に偽りはな
いと知つていても。

「マジでワケわかんないんだから」

「えへへ」

乱れた衣服を正して、千晃は兄のケータイをポケットに押し込む。
準備完了だ。

「ええと——じゃあ、じゃあ、いこつか。あにきに恩返しだ」
「車」

「あいよがってん」

千晃が振り返ると、おーちゃんは庭に出て空を見上げていた。真っ赤に染まった不気味すぎる空。雲間にびつちりと走る、血管のような筋。

「いそぐよ」

「はーい」

ちり紙でも拾い上げるような気軽さで、おーちゃんは千晃をひよいと抱きかかえる。

「ちよっ、なんだよ、離せよーっ！」

じたばたと暴れる千晃を意にも介さずにおーちゃんは庭の端までマイペースに足を運んだ。彼女はその背中へハジメの父と母が声をかけあぐねていることに、軽く体をかがめてから気付いたようだった。

「それじゃ、いってまいりますので」

「何言って」

唐突に顔面めがけて吹き付けた突風が、続く言葉を父から奪った。無意識に杏奈を庇いつつ、背中で妻の「マジかよ」の呟きを聞く。その理由は、吹き荒れた砂埃を払い落とし、目を開けるなり明らかになった。

「ちーちゃん、いそぐんでしょ？」

三人から凝視され、彼女はひひひと面白そうに笑う。

彼女の背負った巨大すぎる黒翼が小さく羽ばたくだけでつむじ風が庭を駆け抜けた。

「いいですか？」

「ど、どうぞ」

「どうも」

こういう時は何か気の利いたことを言わなきゃな、と父は頭を捻ってみた。

「……………俺に似てフツツカ者ですが」

そういうことじゃなくてだな。

内心で自分にツツコんでいた。千晃なりにその言葉に思うところがあつたようできやあぎやあと喚く。それが、いきなり悲鳴に変わった。

「マジか」

突風の直後に目を開くと、二人が居た場所には黒い羽が散っているだけだった。大きな羽音と千晃の悲鳴が遠のいていく。

「長生きするもんだな」

この数か月、おかしなことが起こりすぎて感覚がマヒしてしまつたのだろうか。不思議な落ち着きを覚えながら父が見つめる先は、空ではなく杏奈の横顔だ。

「あんま見つめるなつて。小ジワ増えたんだから」

その視線に気づいて、杏奈が唇を尖らせた。父の目に映る彼女は、やはり出会った時から変わらない、それこそ妖怪じみた美しさを保ち続けているのだが。

「そうは思えないが」

「私が増えたつて言つたら増えたんだよ。きつといろいろ安心して緩んだせいだ。クソ」

「苦勞したらシワが増えるし、苦勞しなくなつたらやつぱりシワが増えるのか。女つて大変だな」

「おうそうだよ。もっと大事にしてもいいんだぞ」

ヤケクソ気味に言い放つ伴侶に呆れて笑いながら、父は縁側に腰を下ろし、車のキーを座敷の奥へと放つていた。

「いいのん？」

「もう俺たちの出る幕じゃない」

立派に成長した息子と娘が帰るこの場所を守るだけだ。

「あいつら帰ってきたら、なんて言つてやるか考えるとしよう」
隣に腰を下ろした杏奈が頭を預けてくる。

「そうだ」

「ん。決まつた？」

「おかえり。おかえりでいい」

「うわ普通すぎる」

「それでいいんだよ。家族なんてそんなもんだ」

でも、たまにはやつぱり、ちよつとは父らしいことを。

思いつきで父がケータイを取り出してメールを起動すると、杏奈がにやにや笑いを浮かべて画面を覗き込む。

「届くかな」

「届くさ」

ネットが繋がらないことは理解している。それでも送信ボタンを押してみると、何の問題もなくなけなしの親心が送りだされていった。



『一件の新着メッセージを受信しました。』

宛先：ハジメ

差出人：オヤジ

件名：(no title)

このメールはお前宛てだが。

とんでもない数のメールが来てるからな。

このメールは真っ先に埋もれていくだろう。

これがお前の目につかないなら、まあ、それが一番いいと思う。

だからすつごく恥ずかしいことを書こう。

俺の間違えばかりの人生の話。

人生にケチがついたのは大学の三回生の時だった。

バイクでコケた俺は対向車線のトラックにお手玉されて、クラゲみたいな状態で病院に担ぎ込まれた。

そこで俺の下の世話をしてくれた看護婦さんがいたんだが、これがとんでもない美人で、おまけにいい家のお嬢様ときた。

気付けば俺は俺の尻を拭いている女にプロポーズしていた。

運命のイタズラなのか、そこからトントントン拍子で話が進んだ。

家庭を持って、小さいけど家を建てて。幸せだった。多分そこがジェットコースターで言うなら坂を登っている時だった。

だがそつからがまたひどい。

入った会社はエスプレッソに墨汁をぶちまけたよりも黒いブラツクで、

俺はあつという間にズタズタのボロボロになった。

そんで、でも、いろいろあつて、お前と千晃がやってきて。

お前たちは本当、宝物だった。この地球上のどんな宝石よりも眩しく、光っていた。

だからこそ俺は眩しすぎて目を逸らした。

のかもしれない。

ことここに至つても俺が最悪にダサい事だけは確かだ。

そんな父親失格の俺から、お前に一つだけエラそうなことを言わせてくれ。

なあ、ハジメ。

お前なら良く知ってるだろうが、人生っていうのは分からんもんだ。

まっくらな嵐の夜を明り一つ持たずに全力疾走し続けるようなものだ。

先が分からないとどうしてもナーバスになる。俺が歩んでいる道は本当に正しいのか、とか。この夜は本当に明けるのだろうか、とか。現に俺がそうだったから。

だから覚えておいてくれ。

お前たちの帰りを待ってる家族が、確かにここにいるってことを。だから、どれだけ遠くに行つてもいい。どれだけ間違つた道を突き進んでもいい。行き詰つたらここに戻ってきてやり直せばいいじゃないか。

生きてまた会おう。

ハジメ。生まれてきてくれて、そして、俺と母さんと出会ってくれてありがとう。

6 『日輪の物語（下—2）』

ひまわりが揺れていた。

雲一つない青空の下、山間に横たわる太陽の畑。夏場だというのに涼やかなそよ風が吹くたびに、花卉と葉の揺れる音が囁き声のように耳をくすぐる。

「おいおい嘘だろ。また来ちまったのか」

それに混じってアブラゼミの鳴き声よりも更に暑苦しい野沢那智の声が耳に流れ込んできた。

「は？」

木陰のベンチから一気に飛び起きてハジメはあたりを見渡す。揺れるひまわりの中に異常を探して——それをすぐに見つけた。タンクトップ一枚では到底隠しきれない屈強だけど小汚い肉体。

「ここ俺の私有地だぞ。いくらお前さんでも」

「あ、あ、あ、あんた」

その上プラスチック製のゾウさんのじょうろと軍手に麦わら帽子という人をばかにするにも程がある出で立ちの男がひまわりの間から現れる。ハジメの心に住み着く怪異。ジョン・マクレーンだ。

「死んだんじゃなかったのか」

「元から生きちゃいねえよ」

「何してんの」

「誰かさんのせいで休暇を満喫中だ。ヒマ持て余して園芸ごっこだよ」

じょうろを足元に放って、ジョンはハジメの隣にどっかと腰を下ろした。ハジメがずりずりと端の方に逃げると、ジョンが幅寄せして来る。

「そんなに嫌ってやるなよ。俺あこんなでも小僧の一部なんだぞ」

「嫌っちゃいねえって。ただ、汗くせえんだよ」

そう。本心で拒絶していればこんな場所もジョンも心の中に残る余地は無かったはずだ。

「どうだ。良いところだろ」

「まあな」

幽香の居た太陽の畑はこんな場所なんだろうかと、ハジメは考える。一方でジョンは気を良くしたようで、口笛を吹いて見せるとベンチの下を探った。

「いるか？」

いつの間にか足下に用意されていたバケツを引つ張り出す。氷水のブチ込まれたバケツの中にはバーボンのボトルとサイダーの瓶が突っ込まれていた。まるで、ハジメがここに来ることを見越していたようだった。

「生きてると言えば、だ。お前さんなかなか大変なことになったな」
「分かるの？」

胸元を探りながらサイダーを口に含むハジメの隣で、麦わら帽子で禿げ頭を煽ぎながらジョンは山間の、その更に向こうを見つめていた。

「さあどうする。今度こそギブっちゃまうか。それでも、誰もお前さんを責めやしない」

「まさか。ああでも、困ったな。俺死んじまったみたいだし」

ベンチから腰を上げてさらっと言つてのけるハジメの後ろ姿をジョンは頼もしそうに見つめる。バケツにボトルを突っ込んで、彼はハジメの肩を叩いた。

「そのことだが——手助けしてやってもいい。お前さんにこの出口を教えてやるよ。いや、正確には出方なんだが」

「出方？」

「ただし条件がある」

条件。そう聞いて、ハジメはあからさまにイヤな顔をした。

対するジョンはニヤニヤ顔を張り付けたままうろろとハジメの周囲を回った。勿体付け方がいちいち癪に障る。

「小僧、てめえの体を寄越せ」

「は——はあ!？」

手助けをしてくれるといった矢先にこれだ。やはりこの男、怪異だけあつて簡単に気を許すことはできないのか。

「や、今倒れてる古い方でいいのさ。どのみちお前さんは死んだ。ここから外の世界に出て行くには、おろしたての真っサラなシャツみたいな体で生まれ直す必要がある」

「そんなんじやワケわかんねえよ。つーか過去最高にワケわかんねえよッ！　ちゃんと説明しろよ!!」

「説明？」

味のあるほくそ笑みを見せて、彼はひまわり畑の地面を指し示した。

「説明。説明。ああいいとも、だがシヨンベンちびるなよ」

花も、地面も、ガラスのように透けて見えてくるのは星だった。漆黒の宇宙に輝く青い青い星。それを遥か遠くに眺めるこの場所は、間違いなく太陽の視点だった。

「な。いいところだろ？」

◆◆
ハジメは息を呑むことしかできなかった。

ようやくおーちゃんの超スピードにも慣れてきたころ、千晃は見慣れた町の風景の中、ビルの屋上から自分たちに手を振る一団を見つけた。

「お、おーちゃん、あそこで下ろして、あそこ」

「ん」

巨大な翼を持つ鳥の怪異が近づくとつれ、彼らはわらわらと屋上の端に寄ってスペースをあけてくれた。一団の中から、背の低い女子生徒が歩み出る。

「やつぱり。ハジメの妹ちゃんだよね。私は」

「うん。パーティーでお寿司取ってくれた。まぐろのお姉ちゃんですよ」

「いや、料理の名前で覚えんなし」

いくらなんでも不名誉すぎる名前と呼ばれて、がつくりうなだれるミヤコの後ろでクラスメートたちが腹を抱えて笑う。

「こいつ見ても……驚かない、んですね」

おーちゃんが肩——翼をすくめる。

「はは」

ここまで来て今さら何に驚けばいいのかな、とケータイの傷を撫でながらミヤコが呆れた笑いを漏らす。またもクラスメートたちが陽気にじやれあうのを見て、千晃は不思議でならない。

「私達、心配なんてしないことにしたの」
「え」

千晃の疑問を見透かしたようにミヤコがウインクして見せる。

「よく考えたらつるみんだし。心配するだけムダムダムダ」

あいつよく遅刻するしさ、と彼女は屋上のフェンスにもたれてケータイのカメラ機能を起動した。

「さ、今日はどんな言い訳を聞かせてくれるのかな」

ハジメが戻ってくる。それを信じて疑わない友人たち。おーちゃんの翼の影に隠れて、千晃は目頭を揉んだ。

「なにか、はじまるね」

鷹の目を持つおーちゃんには数キロ先で、交差点で最後の抵抗に出る一団の姿が見えていた。一体の妖怪がよろよろと立ち上がる様も。

「おねえさん、もうちよつと、だけ——頑張っちゃおう、かしら」

ハジメの死体の上に屈んだまま、幽香は動かない。銃撃の音で、霊夢が戦い続けていることが辛うじて分かる。

「私も、あなたも。こんな時に寝てちや、ダメよね」

よろめきつつ紫が軽く指を打ち鳴らす。

完全にネットが停止したはずの全世界で、一斉にメールフォームが起動した。メールのあて先は名も知らぬどこかの端末へと当てられている。

「これ。あにき——うん、わかった」

祈れ、願えということなのだろう。

千晃は自分のケータイを取り出し、三十センチも離れていない兄のケータイに向けてメッセージを打ち込んでいく。素直な気持ち、感謝の気持ちを形にしようとするうちも兄のケータイは途方もない数のメッセージを受信し続けていた。

「うえっ」

千晃が肩を震わせた。

「ち、ちあき、ちゃん？」

「だ、だいじよぶ……だいじよぶだから、あんま見んな、まぐろ」
兄を信じて待つてくれていている人たちが、こんなにいる。

そう思うだけで画面が見えなくなるくらい止めどなく涙と鼻水を垂れ流す千晃を、ハジメのクラスメートたちが心配そうに見つめてくる。

「ああ、もう。ああもう。妹に恥かかせんなよう」

結局、メッセージは大分短くなってしまった。



『一件の新作メッセージを受信しました。』

差出人：ちあき

宛先：ハジメ

件名：起きろ

くそあにき、寝てる場合か

『一件の新作メッセージを受信しました。』

差出人：s o m e b o d y 6 3 8 . n a n o k a . c o . u k

宛先：ハジメ

件名：n o t i t l e

病院で空を見ながらこれを書いています。

あなたがどこの誰なのか皆目見当も尽きませんが、とにかく今起こっていることと深い関係があるということだけは分かります。なんとなくですが。

あなたが窮地に立たされているということも。

これは、ここで終わりなのですか？

『どんな雲にも銀の裏地がついている』という美しい格言を、あなたはここで否定してしまうのですか？

立ってください。続けてください。夢の続きを見せてください。

『一件の新作メッセージを受信しました。』

差出人：r z 0 y r k o r 0 0 2 . m k y o o h . c n

宛先：ハジメ

件名：青空

まったく、ひどい天気だな。

一つ言わせてもらおうとすれば、俺はこれからしんどい会議があつて、その後二年ぶりに家族に会いに行けるってことだ。帰り道に最高の青空をプレゼントしてくれ。それを願うことくらいなら、許されるはずだ。

『一件の新作メッセージを受信しました。』

差出人：m y s t e r i o u s n e s s , 2 3 . c o . i n

宛先：ハジメ

件名：フレンド

デスカ!? ナンデスカコレ!?

いったい全体何が起こつてあーモー無理! モー耐えらんないいい!!

こんなスバラしいショー、もう犯罪ですよアナタ。ボクとフレンドなりまショー! ボクの F a c e b o o k アカウントはコチラ!!! カモ!!

『一件の新作メッセージを受信しました。』

『一件の新作メッセージを』

差出人：杏奈

宛先：ハジメ

件名：勝負は

幽香ちゃんのかちだったかな、やっぱり。

こんな母親失格の私は、やっぱり母親失格らしく、ハジメの心配なんてしないでここで見守ってるよ。

『一件の新作メッセージを受信しました。』

『一件の新作メッセージを受信しました。』

『一件の新作メッセージを』



もはやほとんど視界が闇に染まっていたが、それは確かに見えた。空を覆い尽くす輝くメールの流れが。

言語も国籍も超越した、現代における新しい信仰の形が向かう先は たった一か所だ。千晃の握りしめる、ハジメのケータイ。

「……………みえる、霊夢」

紫の目にはそれが見えた。世界が光で満ちていく様が。咲きほこるヒマワリが一斉に首を伸ばす姿が。

「彼が帰ってくる」

空を見上げて、幽香は微笑んだ。

「ハジメ、私はここよ」



『一通の新作メッセージを受信しました。』

『通信制限が——メッセージを』

『一通のメッセージを』

『メッセージを』

『メッセージを』

『メッセージを』

……



世界が帰還を望んでいた。ならば、応えてやらない義理はない。

「おーっと。待て待て小僧」

ガラスの上に踏み出そうとしたハジメを、ジョンが引きとめた。

「いいぜ。体なんていくつでもやるよ。だからさっさと」

「そうじゃない。見ろよ、あいつらの顔」

太陽の玉座からは全てが見通せる。ツルミハジメ。その名を、すべての人間が口にする。空高く差し伸べられた指が、期待の眼差しが、日の出を待っている。

「まるで神様だな、お前さん」

ハジメには、彼らがひまわりにみえた。そして今や、ハジメは彼らの太陽なのだった。生まれ直す——その意味が、よく分かった。

「信仰が奇跡を生む。信じる心が、世界の常識に風穴を空ける」

「ああ」

「こんな風に強く望まれて生まれてくるものが何になるか、分かっているんだろうな？」

「ああ」

「ハジメ、出て行けばお前は勝つ。全ての幻想と現実が混ざり、お嬢ちゃんたちはヒトと同じ時間を生きることになる。この意味、わかるな？」

「ああ」

どれほど過酷な運命にも、立ち向かうと決めた。

「それでも、やらなきゃいけないんだ」

「そうか。なら、いけ」

手を離して、ジョンはハジメの背中を押した。

「小僧。いい取引だったぜ」

ハジメの足下がぼりんと割れて、気付けば彼は宇宙を飛んでいた。地球に向かつて真っすぐ突き進みながらジョンを探すと、今や塞がりつつある穴の中で彼が手を振っていた。

「待ってろー！」

凄まじい力のみなぎりを感じる。

だんだんと大きく見えてくる黒い花めがけて、ハジメは拳を振りかぶる。この新しい体でなら、もはやそれだけで十分だ。



闇の花弁が唐突に爆発した。

「あれは」

巨大な【日常】が悲鳴を上げる。掌の形をした花弁のひとひらがうなりを上げながら地上に落下する。血のような液体を噴き出す【日常】の背後。赤い雲が吹き飛ばされ、眩い日光が差し込む！

「全く。本当にいいタイミングを心得てるわね」

血塗れの霊夢が手を振る。

空の穴から光と共に舞い降りたのものは橙色の輝きを纏った光の鳥だ。理不尽の雲を打ち払い、地上を幻想の光で照らす太陽の化身だ。

「ハジメー！」

「いまいく」

執拗に霊夢を攻撃していた砲火がすべて光の塊に向けられる。が、太陽に向けて銃を撃つなんてあまりにナンセンスな抵抗だ。

「ハジメ、あなた」

幽香が驚嘆の声を上げる。

もはや防御の必要すらない。悠々と弾丸を受け止めきったハジメが軽く日輪を輝かせるだけであたりを爆風と閃光が駆け抜け、万場のひきつれてきた機動部隊を戦闘不能に追い込んだ。

「待たせた」

霊夢の隣に降り立ったハジメが、ふらふらの彼女を支える。

「慣れてる。あんた、いつもギリギリだもんね」

「ケガがひどいな」

「いいからさっさと行かないと。あんたの恋人が妬くわよ」

ハジメを突き飛ばして、霊夢はその場にへたり込んだ。

「ああ……………でも。本当助かった、わ」

崩れ落ちる霊夢を抱きかかえたのは紫だった。

「来てくれると思っていたわ」

ハジメが闇の花にダメージを与えたことよってか、彼女の顔色は大分良くなっていた。頭を押さえつけるような重圧が、ハジメの日輪

が放つ輝きの傍にいと急激に和らいでいく。

「霊夢を任せた」

「ええ」

幽香へと歩み寄りながら、ハジメは彼女が抱きしめる古い自分の体を見つめる。ぼんやりと光を放って粒子に還元されつつあるそれをそっと幽香から離し、近くのベンチに横たえる。約束は守るぞ、と心の中で呟く。

「行くう」

いつかのように、ハジメの伸ばした手を幽香が掴む。

「行きましょう」

スペルカードを展開する。そして世界は見た。幻想の太陽が昇る様を。



——この物語はたった一つの約束から始まった。

「だから、最後まで約束を」

たった一枚残された切り札がふわりと浮き出てハジメの手に収まった。

彼がこの世界に呼び込んだ陽光が、施された日輪の透かし彫りを輝かせる。ハジメの背後で日輪がゆっくりと回転を始める。

『一通の新着メールを受信しました。』

それはお返しだ。この瞬間まで日の出を待ち続けたヒマワリたちに太陽からの贈り物。そして、この地上で最後に繰り広げられる弾幕ごっこを開始する宣言だ。

「おい、なんて書いてあるんだ……?」

全世界。同時に受信したメッセージを開けば。全ての液晶が輝いていた。そこに表示された文字が、その意味が、熱を持って金色の光を放つ。

【LAST SPELL】

それはラストスペル。最終攻撃の名を語った日輪が数百メートル

の砲身を持つ大砲に変形する。だがハジメはそれを物足りなそうに見上げる。

「まだまだ。俺達の全力はこんなもんじゃないだろ」

液晶の文字が燃える。別の文字を形作る。

これまでにない危険を察知した【日常】が吼える。花卉の内側が光り、飛び出したものは無数の異様に細長い手だ。空中で幾何学的な軌道を描きながら、すべてがハジメ達に殺到する。

「ムダだツ!!」

しかし、一つとして届くことはない。

両者の間に張り巡らされた見えない壁にぶち当たった手が捻じ曲がり、ひしゃげ、潰れて爆散する。

「——なあ、おっさん。生きてるか?」

「さすがに……死ぬかと思ったな」

ついに能力の限界を迎え、倒れて物言わぬ塊となった万場を踏み越えて、雪之丞は瓦礫の海を渡る。

「エリカ?」

「ん。大丈夫」

倒れたまま放置されていた二人を抱えて、雪之丞はショッピングモールを後にした。万場が死んだことで能力も効果を失ったのか、雪之丞の傷は再生を始めている。

「とんでもないことになったな」

赤い空を貫く黄金の塔が際限なく伸び続ける姿を見つめて、万場が力の抜けた笑いを見せた。

「本当、デタラメね」

「ふん」

いかにも気に食わねえ、と鼻を鳴らしてから、雪之丞はこれほどの力の差を見せつけられてもまだ対抗する気である自分に呆れてもいた。

「ま。今くらいはお前のために祈ってやってもいいぜ」

吸血鬼として本来は忌むべき日輪へと向かって、雪之丞は人差し指を伸ばす。今井とエリカが、後に続く。

【LAST WORD】

数々の想いを受けて、燃える文字が形作るラストワード。だがこれでも足りない。

「まだまだあッ!!」

不敵に笑ったハジメの声が更なる力を要求する。

ラストワードの区切りでは支えきれない力を大砲に呼び込む。冗談みたいな速度で大砲が変形し、果てしなく伸び続ける間も【日常】の攻撃は続いている。

「もうお前には傷付けさせない——誰ひとりとして」

空中で【日常】の攻撃を受け止めたものが姿を現す。

「あ、あれって!」

千晃の言葉に、ミヤコが頷く。

ゆっくりと空に描かれていく光の花弁に、誰もがひと月前の事件を思い出していた。幻想の花弁は消えたのではなく、ただずっとそこにあった。幽香や紫たち幻想の存在が忘れ去られてもこの世界を見守り続けたように、ずっと。

「お兄ちゃん」

【OVER DRIVE】

オーバードライブ。

しかし大砲に注ぎ込まれる力は収まるどころか更に勢いを増していく。もはや大砲を支えることやめたハジメが砲身の上に仁王立ちを決め込む。傍らの幽香の腰に腕を回し、引き寄せる。

「もう。こんな時まで」

「こんな時だからこそ、さ」

自らを鼓舞するように巨砲を踏みしめる。輝きが、いや増す。

「最後なんだ。ドカンと派手に行こうぜ」

弾幕ごっこの歴史から考えると、これが最終ラインだ。これ以上は

存在しえなかつた。ここからは妖怪の賢者ですら知りえない未知の領域だ。

「構うよかよ。やるならとことんだ」

天高く伸び続ける砲身が、橙の光を放つ空の花に接続される。

【日常】の黒い花は未だ攻撃を続けていたが明らかに速度も威力も落ち始めていた。万人の無意識の願いによつて全てを真つ黒に塗りつぶすはずの花は、万人の新たな願いによつて支えを失いつつあった。「さあ、見せてみるよ。新しい俺には何ができる？」

今や液晶は掌に焼けつくほどの熱を持って輝いている。それでも尚、誰も手放すことが出来ない。

其の末に書き換えられた黄金の文字列は、日常を追い求め、ついには日常を打破することになった青年が最後に得た答え。全世界を白熱させる、勝利の決め台詞。

!!OVER CLOUD!!

オーヴァークラウド、だ。

それは真実を曇らせる暗雲を吹き飛ばし、幻想の陽光を取り戻す約束。

液晶を焼くその言葉を、脳裏を焼くその意味を、明日を輝かせるその幻想の名を、全世界が叫んだ。

「やっちゃまっていいんだな？」

ハジメがニヤリと笑つて、挑発するように振り返る。彼に向けられた無数の人差し指がその答えだった。

空中の花弁に接続された大砲が輝く。全宇宙を包み込む花弁が、黄金の雨を降らせる。地球上を埋め尽くす向日葵たちが歓喜の声を上げる。

「ぶっ潰しちまえー！」

「やれよ鶴見、根性見せろ!!」

「つるみん!!」

「筋肉ー!!!」

クラスメートたちが腕を振り回して応援する。おーちゃんに抱きかかえられた千晃が、輝く空を見上げて涙を流していた。

「おにいちゃん!」

その期待に応える様にハジメがすつと人差し指を伸ばす。

彼が幽香に出会ってから、理不尽という壁にぶち当たる度にそいつらを打ち崩してきた、彼の力の形。

『俺たちにとびっきりの幻想を、見せてくれ!』

かつて【日常】という怪物を生み出した世界は、しかし「とまった」のだ。ハジメが伸ばした指。新しい世界のあり方を示した彼の、その願いに「とまった」のだ。

「あなたに出会えて、本当によかった」

幽香を強く、抱く。

今や眩いばかりに光り輝くハジメの指先が探り当てたものは最後のトリガーだ。光の花弁がそうであったように、世界を変える力は見えなかっただけでずっとそこにあったのだ。

「終わらせよう。いや——」

今や虹色に輝く砲身を死に物狂いで攻撃する【日常】が、今やちっぽけなものに見えた。

「愛してる」

「ああ。俺も」

世界が選択した。

「始めよう。新しい明日を」



全世界の願いによってトリガーが引き絞られた。

瞬間、極限の光を秘めた砲口から発射されたものはやはり黄金の弾丸だった。【日常】の必死の抵抗が何度も弾頭を叩いたが、その軌道を一ミリでも逸らすことは叶わない。

【日常】が掌の形をした花弁を一斉に弾丸めがけて伸ばす。万人の願いで編まれた幻想の弾丸を受け止めようとする試みは一秒ももたなかった。

激しく回転する弾丸に打ち砕かれて花弁が潰れて崩れていく。そ

の先にある花芯に突き刺さる頃、弾丸の速度はもはや光の域に達していた。

ぱきん。と、ガラスの割れるような音が響いた。

ど真ん中を撃ち抜かれた直後、大きく傾いたまま【日常】は完全に停止した。

あれほどおどましく蠢いていた無数の掌がピタリと止まったと思うと、指先からバラバラに崩壊していく。

それを尻目に突き進み続けた弾丸が赤い空を粉碎した。

吹き散らすように赤い雲と空が一色の青空に染め直される。虚空に突き刺さった弾丸を中心に、光り輝く蜘蛛の巣状の亀裂が広がっていく。

「博麗大結界が」

霊夢を抱えて、紫が静かに微笑んだ。長らくの彼女の仕事が、終わろうとしていた。

「そうね。現実と幻想を分ける必要は、もうないのだから」

今や完全に崩れ去りつつある【日常】と光の花のまき散らす花卉が織り交ざって青い空へと吸い込まれていく。幻想と現実の境が完全に溶け合った風景の中であって、第二の変化が起きようとしていた。

「人？」

千晃たちの視線の先、割れた空から無数の人型が降り注いできていた。

解体された幻想郷にいた少女たちがこちら側の世界に吐き出されてきているのだ。

その中の一人がゆっくりと崩れていく砲身の上に降り立つと、きよろきよろとあたりを見渡した。

「あれ。あたい、どうしてこんなところに——？」

幻想郷はもうない。

現実と幻想を仕切るための壁——博麗大結界——が存在意義を失った結果消滅し、幻想郷は消滅する。

今こうしていきなり外の世界に放り出され、ただただ困惑する彼女たちがそれを理解し、受け止めるまでにどれだけの時間がかかるの

か、ハジメには想像も及ばない。

「ねえ、あたいの家、帰りたいんだけど」

不安げにハジメを見上げる少女は、よりにもよってそいつが幻想郷を吹っ飛ばした元凶であることなど思いもよらないはずだった。

「それは」

困り果てて、ハジメは頭をかく。

◆◆

「俺達、何してたんだっけ？」

「さー？」

「なんで町、こんな壊れてるん？」

「さー？」

「授業まだあつたよな？」

「さー？」

「サボるか？」

「うん。そうしよ」

ハジメのクラスメートたちが歩き去っていく。

通りという通りに出た人々は不思議そうに顔を見合わせていたが、やがて首をひねりながら彼らの日常へと戻っていった。

「ああ、鶴見くん。奇遇だな」

「今井さん」

何者かにどんと肩をぶつけて我に返ると、慌てた様子の老刑事と目が合った。

「すまんすまん。今病院からいいニュースがあつて浮かれてた。じゃあ、急ぐんで！」

そう言う間に彼はケータイ片手にさつきと歩き始めていた。この瞬間までハジメのために世界を守り続けていた、大人らしい大人。きつとその記憶ももうないのだろうが、彼の背中に、ハジメは一度頭を下げる。

「はい。それじゃあ——ありがとうございました」

雑踏の中、ハジメは幻想郷の住人達と一緒に彼らを見送る。

いい加減彼女たちからの質問攻めも落ち着いてきた頃に、紫がぬ

うっと空間の裂け目から顔を出した。

「後始末は終わったわ」

つくづく便利な能力だと思ふ。

忘却の境界を操作された彼らは、ここ数ヶ月間の出来事を完全に忘れて日常の中へと帰っていく。残された映像を見ても、破壊された街並みを見ても、それが鶴見ハジメの成し遂げたことに結びつくことは絶対にならない。ハジメたちはもはや有名人ではない。どこにでもいる、ただの高校生だ。

それでもあの出来事を見つめ続けた彼らの中には、確かに幻想の居所が根付いているはずだった。

「紫、俺のやったことは本当に正しかったのかな」

故に幻想は確かに続く。しかし。

「自信ないの？」

「正直、な」

事を起こしてから思う。確かに彼女たちは狂って死ぬという運命を逃れる代わりに力を失い、居場所を失い、人との同化を余儀なくされる。それによってこの先どれだけの不幸が生み出されるのか。

「それはこれから彼女たちが決めることね」

紫の言葉に、頷く。それを見守る時間ならハジメには十分すぎるくらいに残されている。

「紫はこれからどうするっ？」

「しばらくはあちこち飛び回るわ。みんなに何が起きたかちやんと一から説明して、こっちの世界での居場所を用意して。大忙しね」

「悪いな。面倒かける」

何を謝ってるのよ、と紫は綿雲のような髪を巻きながら笑う。

「せいぜい楽しんでくるわよ。ユキも引きずり回して。あ、そうだ。忘れる前にコレ」

紫に放られたものを受け取って確認すると、それはずっと昔に無くしたはずの五円玉だった。もはや五円であるかどうか分からないくらいにボロボロだったが、見間違えるはずがない。

「長かったなあ」

そこに刻まれている無数の傷を眺めていると、ようやく終わったのだという実感が湧いてきた。

「本当に、本当に。ここまでたった半年だったなんて、信じられないくらいに」

人の流れに目を凝らしたハジメは、振りかぶると思いい切り五円玉を放り投げた。それが一度だけ陽光を反射して、流れの中に消える。

「いいの?」

「もう俺には必要ない」

母からもらったお守りに、ずっと理不尽への怒りをぶつけてきた。だが、それはもう終わりだ。

「俺は、俺の作った新しい世界を見つめて生きていきたいんだ」

彼の視線の先には何事か興奮した様子で幻想の住人達と話す千晃とおーちゃん、その傍らで穏やかに佇む幽香がいる。しばらくして、打って変わって深刻な表情で紫が口を開いた。

「ハジメ」

「なんだ」

彼女が言わんとすることは分かっていた。

「……幽香にあなたのこと、話すべきよ」

「今はまだその時じゃない」

「その時っていつ? 何もかも過ぎ去って、あの子が安らかに死んでいく時?」

路肩のフェンスにもたれたまま、ハジメは細く長く息を吐いた。

「……………ごめんなさい」

「いや」

分かっている。これはいつか直面しなければいけない問題だ。だが、幽香や家族にどう切りだせばいいのか全く分からなかった。

「じゃあ、行くわ。本当にありがとう」

ためらいがちに紫が去っていく気配を背中で感じながら、ハジメは真上に昇った太陽を見つめる。

「よかったのさ、これで」

そう。これでよかったのだ。

全ての幻想は現代に吸収され、ゆつくりと力を失い、狂うこともなく衰退していく。幻想の住人と現代の住人が、同じ時間のスケールの中で生きることが出来る時代が来たのだ。

「ただ」

たった一つの例外を残して。

『こういう時くらい笑えたら、カワイコちゃん』
「っ」

忘れてくても忘れられない汗臭さが後ろを通り過ぎて行った。弾かれるように振り返ったハジメは、タンクトップの後ろ姿が手を振りながら雑踏に消えていくのを見つめ続けた。

「————ジョン。俺は。いや、さようなら」

彼の憧れは飛び立った。とつくに死んだハジメの肉体がどれだけ保つのかはわからない。それでも彼はとうとう自由を掴み取ったのだ。

「じゃあな」

明日のことは分からない。明日のことは明日考える。

クヨクヨしていてもはじまんないな、と反動をつけて体を動かすと、幽香たちがハジメを待っていた。

「お話はもういいのか？」

「ええ。もともとそんなに知り合いもいなかったし」

「みたいだな」

確かに今までの幽香の言葉に嘘は無かったらしい。おっそろしい花妖怪と親しげに話すハジメたちにも好奇心の視線が注がれてくる。

「帰りましょう。私達の家」

「ああ」

歩み寄ってハジメは幽香を抱きしめた。

「あ。ズルい」

千晃が不平の声を上げるが、今回ばかりは止めようとしなない。

深く息を吸って彼女のおいを確かめる。明らかに周囲がザワツキはじめて、彼は幽香の胸の中でほくそ笑んだ。

「あつ、ちよつと、恥ずかし」

「いいから。今だけでもじっとしていてくれ」

流石に幻想郷の知り合いたちの前でイチャつかれると気になるところがあるのか、慌ててハジメの背中をぽこぽこ叩いてくる。

「子供みたいよっ」

「いいじゃんか。それも、そう悪いもんじゃない」

それもいい。結局万場のいう通り幻想を卒業できなかった人類の幼年期は安らかに、そしてまだまだ続くのだ。

『日輪の物語』 おわり n e x t . E p i l o g u e 『季節は廻って』へ

エピソード

『季節は廻って』

「か、かんぱーい!!」

運ばれたブツを前に、ヤケクソ気味に霊夢が音頭を取った。

打ち鳴らされるグラスの音のかわりに、一斉に割りばしの悲鳴が店内に響く。カウンターに並んだ五人の顔は険しく、さながらヒマラヤ登山にでも赴くような鬼気迫るものがある。

「誰がラーメンにしろつつったんだ」

「ユキよ。久しぶりに食べたたって」

主賓がためいきをつく。

文字通り世界中を飛び回ってきた『紫さん（とユキ）お帰り&お疲れ様会』の会場となったスケキヨ。彼らの前には大盛りのラーメンが具もアブラもヤサイもマシマシで鎮座ましましてる。

「霊夢、まずは麺をスープから上げなさい。じゃないともたないわよ」

「上げるってどう………す、すいませーん、取り皿くださいー」

「馬鹿ね。ヤサイが乗ってるでしょ。それをひっくり返すのよ——こんな風に」

「えっえっ、どうしてそんな器用なことできるワケ?」

「できるできないじゃないの。やるのよ」

あうあうと喘ぎながらハタクソな天地返しに挑む霊夢の隣で幽香がペロペロと一杯目を平らげていく。力が失われるにつれ最近は大分食が細くなつたと言うが、ハジメにしてみれば十杯のスケキヨが九杯になったところでさしたる違いはないように思える。

「最強の座はまだまだ揺るがないんだろうな」

マイペースに食べ進みながら、ハジメは店内を見渡す。

閉店間近でほとんど貸切状態の店内をぼんやりと照らす暖色の裸電球。脂ぎったカウンターの奥でひよこひよこ動く店主の頭越しに見える窓の外で、小雨がちらついていた。

「随分余裕ね」

隣で店主の目を盗んでラーメンをスキマにぶち込みながら、紫が呟いた。

「まあ、な」

片手間に早くもヤサイをやつつけたハジメが、麺をちるちるとすりながら返す。紫が問い質したいことなら分かっている。

「まだ言えてない」

「そう」

「だああつ、何よそれ、やつぱりあんた体の構造おかしいわよつ、一度レントゲンとつてもらいなさいよ、レントゲンっ！」

悩み多き年頃の乙女の悲鳴が、二人の間に漂った沈黙を切り裂いた。

「……苦しく、ないんスカ」

「んーん」

霊夢と雪之丞の視線の先で幽香がハムスターのようにほっぺをふくらませたまま首を横に振った。三杯目の丼がカウンターに叩き付けられる音が高らかに鳴り響く。

「あつきれた。あいつ、まだまだ妖怪続けるつもりなのね」

「いんや」

ほくそ笑んで、ハジメが席を立った。彼の手で光るケータイが、着信を知らせている。彼の視線の先には銀の指輪の光る幽香の左手がある。

「あいつこないだ包丁で指切つて、未だに治ってないんだぜ。フツ―に怪我して、フツ―に死ぬ。もう、ただの人間と変わらない」

妹から電話来ちまった、と。建付けの悪い引き戸をガラガラ鳴らしていくハジメの後ろ姿を見送ったものは紫だけだった。



「おう。久しぶりに声聞いたな」

夕方の空から降り注ぐ雨粒が、スケキヨの掲げた看板の電飾に反射している。しばらく通話口からの声に嬉しそうに耳を傾けていたハジメが、わずかに眉根を寄せた。

「それ、カミナリか。こっちは小降りなんだけどな」

向こう側でひととき大きな雷鳴の後に小さく千晃の悲鳴が聞こえて、ハジメは思わず口の端を吊り上げていた。

「勉強、順調か。あんまり叔母さんたちに迷惑かけんなよ」

そんな些細な切欠から距離を実感する。

『あたしき、ちよつと家出るよ。あ、これ連絡先。最近オバさんと電話しててき、娘が一人でも二人でも構わないって。ちよつと志望校近いし、私バイトしながら。うん、そう。ガツコ行きたくなった。出発は、よければ明後日には』

彼女がある日の夕飯時にボロつと言い出した後のことは今でも昨日のここのように思い出せる。味噌汁を鼻から噴き出して悶絶する父と、無言のまま体温計を探しに行った母。啞然とするハジメの前で、ゆつくりと幽香だけが穏やかに微笑む。

『そう。あなたが決めたのなら、そうするべきね』

もつともつといい女になって、お姉ちゃんを寝取りに帰ってくるから。それまでにもつといい男になっておけよと兄に言い残して千晃はあつさり自宅警備員を辞職した。

そして今、兄と同じく受験戦争の真ただ中にいる。

「にしても最近K市は治安悪いみたいじゃないか。殺人だの事故だの。これじゃあまるで」

いつかみたいにバケモノが暴れまわってるみたいだ。

そう言いかけてハジメは口をつぐむ。紫の尽力で大半の幻想の住人達は現代に居場所を見つけたという。だがそれでも、一部は彼女の手を振り払って放浪を続けているという。

「――ま、そつちには最強のボディガードがいるからな。あんま心配はしてないんだけどサ」

そんな『野良幻想』たちが最後っ屁に何かやらかすのではないかと、という懸念も解決していない。それでも不穏な想像は、言葉の上だけでも否定しておきたかった。

「あ、過保護？ 難しい言葉使っなっつーの」

それからしばらくうんうんと頷いていたハジメが、不意に顔を曇らせた。

「エリカは……エリカは、そうだな。急に歳食ったみたいになっちゃまって。みんなで日替わりで会いに行ってるんだけど、最近は寝てる方が多くてさ」

本当は今日も彼女に同席してもらうつもりだったのだが。結局外出許可は得られず仕舞いだった。

「でもあいつ起きてる時も寝てる時も、本当に幸せそうなんだ。そうだ、今度おーちゃんもつれて会いに行行ってやれよな。きつと喜ぶ。ひよつとしたら飛び起きちゃうかも。あ、帰る時はちゃんと事前に言えよ。つーか俺が迎えに行行ってやろうか。あ？」

雨の勢いは増していく。季節はもう11月。その上身を切るような寒風の真ただ中に突っ立ったハジメはいつも通りの薄手のジャケットを羽織っただけの格好だ。

それでも彼は身震い一つ起こしていない。

「つからさ、過保護じゃねえつーの。おら、いいからさっさと要件言えよ。こんな時間に電話なんて、ついにオニイチャンが恋しくなつたって認めるのか？」

照れ隠しの小馬鹿笑いも、そう長くは続かなかった。

「……………どうしてそう思うんだ」

無意識にこわばっていた頬を揉みほぐしながら、ハジメは必死に兄らしい陽気さを絞り出そうとする。

「なワケないだろ。こっちには幽香もいるしな。全く。過保護はどっちだってーの。お前の心配事が片付いたところで、もう切るぞ。勉強中だったんだよ。じゃあ、帰る時は連絡な。忘れるなよ。うん。じゃあな。うん。元気で」

殆ど一方通行でしゃべくり倒して電話を切ってから、ハジメは暫く液晶の通話時間に目を落としたままだった。

「あ」

とうとう画面表示がオフになった後もケータイを握りしめ続けていると、不意に液晶に淡い光が灯った。と思えばそれは雪の結晶で、空を見上げたハジメめがけて初雪が降り注いでくる。

『あにき、なんだか無理してると思ってたさ』

不意に千晃の言葉がリフレインして、ハジメは下唇を噛みしめる。「なんで分かったんだ？」

暫くそうしていると夜空をたゆたう雪の粒が星の明りに見えてきて。

「やっぱ、血の繋がりがってバカにできないな」

まるで宇宙空間に放り出されたような錯覚を覚え始めると、殊更に自分が地球上で唯一の存在になってしまったことが自覚させられる。



『いいんだな？』

ジョンは再三にわたってハジメに確認した。

ここが本当のポイント・オブ・ノー・リターンなのだ。

『強く望まれて生まれてくるものが何になるか、分かっているんだろ
うな？』

「ああ」

彼の幻影に、半年越しの返事をする。

「分かっていたつもりだったんだがな」

スケキヨの明るさの中に戻る気になれず、ハジメはそのままアークード街の奥へと引き返していった。夕闇にひっそりたたずむ踏切と学校の前を過ぎて、たどり着いた公園でベンチに腰を下ろす。

「これで、よかったんだよな」

ジョン・マクレーンはもういない。辛辣な疑問を投げかけることすらしてくれない。彼が銀幕の中でそうであったように、ハジメは誰の手も借りず答えを探さなくてはいけない。

「俺は」

もはや寒さも空腹もさしたる問題ではなくなっていた。

今ならこれまで相手してきた怪異が束になってかかってくることもハミガキの片手間に玉乗りしながらやつつけることが出来るくらいのがたかだか172cmに渦巻いている。

それが、万人の望みとして誕生した最強の幻想——ツルミハジメだった。

もはや歳をとることもなく、傷つくこともなく、飢えることすらなく。一体自分の終わりがどこにあるのかさえ分からない。そもそも終わりなんてものがあるのかさえも。

「ようやく、あの頃のお前の気持ちがかかった気がするよ」

そこから人を好きになった幽香は、きつと人らしい長さの時間を生きて、人として死んでいく。それはなんと素晴らしい事だろう。しかしハジメはその時間のスケールにペースを合わせることができない。
「……………そろそろ戻らなきゃ、な」

答えの出ない堂々巡りに嫌気がさして腰を上げる。

「お前」

そして、言葉を失った。

「ハジメ」

彼が一番愛して、そして今一番会いたくない相手が、白い息を切らせてそこに立っていた。



「少し、暑くなっちゃって」

そう呟く幽香が無理をしていることは明白だった。ジャケットをそつと肩にかけてやって、とうとうシャツ一枚になったハジメは居心地悪く幽香の手を握る。

「二度目ね」

「あ?」

「冬。こうして二人で迎えるの」

「ああ」

間の抜けた返事に我が事ながら苛立ちが沸いてきた。

「ごめん」

「どうして謝るの?」

「なんか俺、最近ダサいかなって」

「なにそれ」

そうしてひり出した言葉もやっぱりダサかったりするわけで。もうこの場にいることすら耐えられないハジメの隣で、幽香は実に楽し

そうに笑う。

「知ってるわよ」

そこから不意打ちに幽香が漏らした言葉が脳みそに到達するまで、かなりの時間を要した。

「え」

「あなたの悩みを見逃すような女に見えて？」

なんのことやら、とはぐらかすことはできなかった。

すべてお見通し——今までのことを考えれば、それは当然だった。長い長い沈黙の時間。ハジメは幽香の顔をどうしても見つめることができなかった。

「……………本当、どうしようもないヘタレのまんまだったな」

怖かったのだ。

そんなことは絶対には絶対にはないと思いつつ、落胆する幽香の顔を想像するだけで勇気が萎えていったのだ。

「いいじゃないの」

そんなハジメを、幽香は抱き寄せる。

「あなたがどんなにへたれでも、どんなにダサくても、どんな存在であつたとしても、私にとつてはどうでもいいことなのよ」

花のような幽香の、あまりに飾らない言葉に目頭が熱くなるのを感じた。

「あなたがかつてそうしたように、今度は私があなたを追いかける。どんな奇跡だって、起こしてみせる」

「な、ぜ。どうして、そこまで」

その答えは知っている。

知っていて、潤んだ赤い瞳に問わなければいけないかつた。

「あなたを幸せにするっていう約束は、まだ終わっていないからよ」
今まで抱え続けた孤独の長さがそうさせるのか、ほとんど遠吠えのように嗚咽するハジメの頭に、幽香が顔をうずめる。

「兄妹そろってなきむしね。へたれ。泣き虫へたれ。ばーか」

「うるせえよ。お前だって人の頭にハナたらすんじゃないやねえ」

とことん優しく降りしきる初雪の中、とことん優しい幽香にあやさ

れ、やっぱりこいつには敵わないと子供のよう泣きじやくりながらハジメは思う。

「寄り添うわ。いつまでも。大好きなあなたに」

お前を殺すという約束と、あなたを幸せにする約束から始まった物語は。

結局のところ二人の約束は宙ぶらりんで、未だかなわず途中のまんまで、それが結局叶うことになったのかどうかも語られないわけで。

——それでもやはり最後はめでたし、めでたし。と、二人の幸せを願って花を添えることにしたい。

『風見幽香の殺し方』 おしまい